青森県埋蔵文化財調査報告書　第563集

金沢街道沢(1)遺跡
新　沢（1）遺　跡
新　沢（2）遺　跡

－一般国道１０１号鰺ヶ沢道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

２０１６年3月

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書　第563集

金沢街道沢(1)遺跡
新　沢（1）遺　跡
新　沢（2）遺　跡

－一般国道１０１号鰺ヶ沢道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

２０１６年３月

青森県教育委員会

金沢街道沢（1）遺跡 調査区遠景　南上空から 後方は七里長浜

金沢街道沢（1）遺跡 調査区遠景 西上空から 中央に鳴沢川が流れる

金沢街道沢（1）遺跡 調査区全景 上空から 写真上が北

金沢街道沢（1）遺跡 第1号溝跡（SD01 平安時代）土層断面 南から

金沢街道沢（1）遺跡 第8号竪穴住居跡（SI08 奈良時代）遺物出土状況 西から

金沢街道沢（1）遺跡出土 奈良時代の土器

金沢街道沢（１）遺跡 第 15 号竪穴住居跡（SI15 平安時代）カマド完掘状況 南西から

金沢街道沢（１）遺跡出土 平安時代の土器

新沢（1）・（2）遺跡 調査区遠景 北東上空から 奥に日本海

新沢（1）・（2）遺跡 調査区遠景 南西上空から

新沢（１）遺跡 第２号竪穴住居跡（SI02 平安時代）完掘状況 西から

新沢（１）遺跡出土擦文土器

新沢（２）遺跡 第４号竪穴住居跡（SI04 縄文時代後期）炉跡遺物出土状況 西から

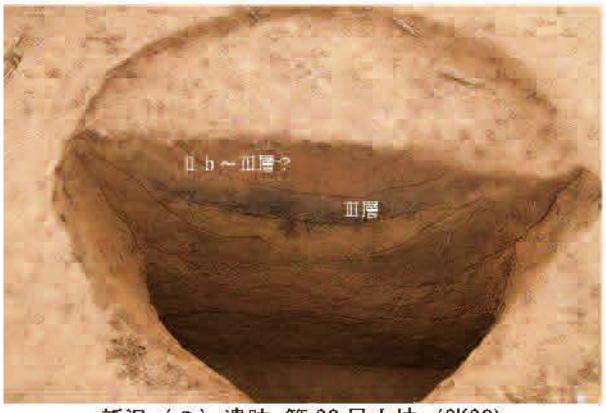
新沢（２）遺跡 第４号竪穴住居跡 炉跡出土土器

新沢（２）遺跡 第35号土坑（SK35縄文時代後期）遺物出土状況 西から

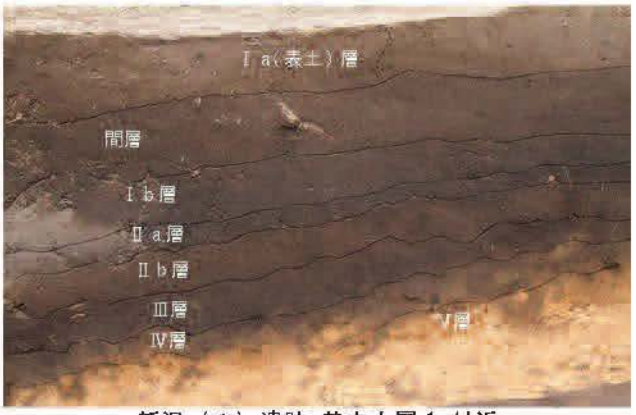
新沢（２）遺跡 第35号土坑出土土器

新沢（２）遺跡 第８号焼土遺構（SN08）上面　赤穴式土器出土状況 南から

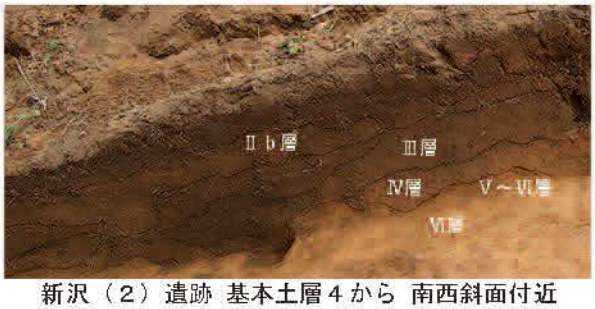
新沢（２）遺跡 第８号焼土遺構出土赤穴式土器及び関連資料



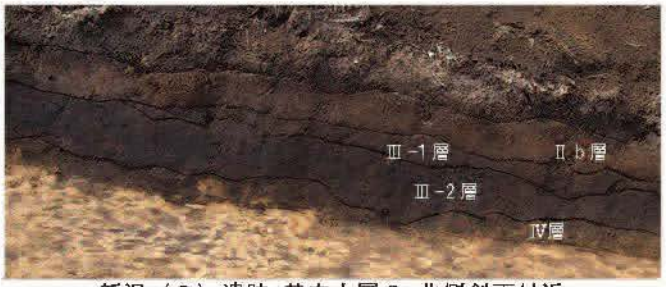
新沢（２）遺跡 第39号土坑（SK39）



新沢（１）遺跡 基本土層１ 付近

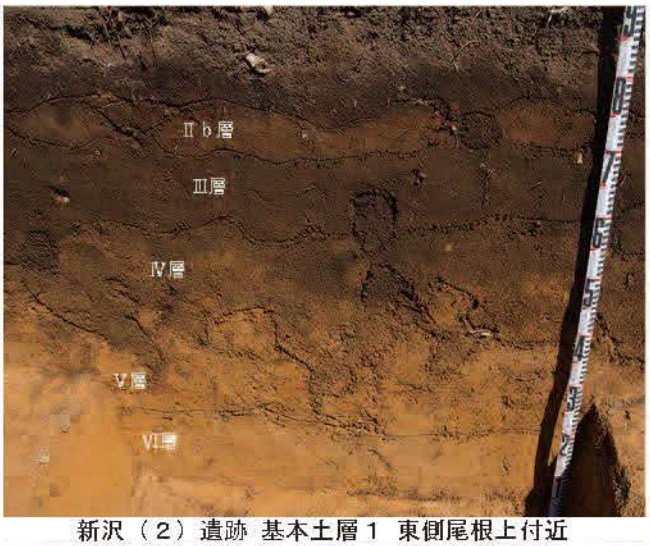


新沢（２）遺跡 基本土層４から 南西斜面付近

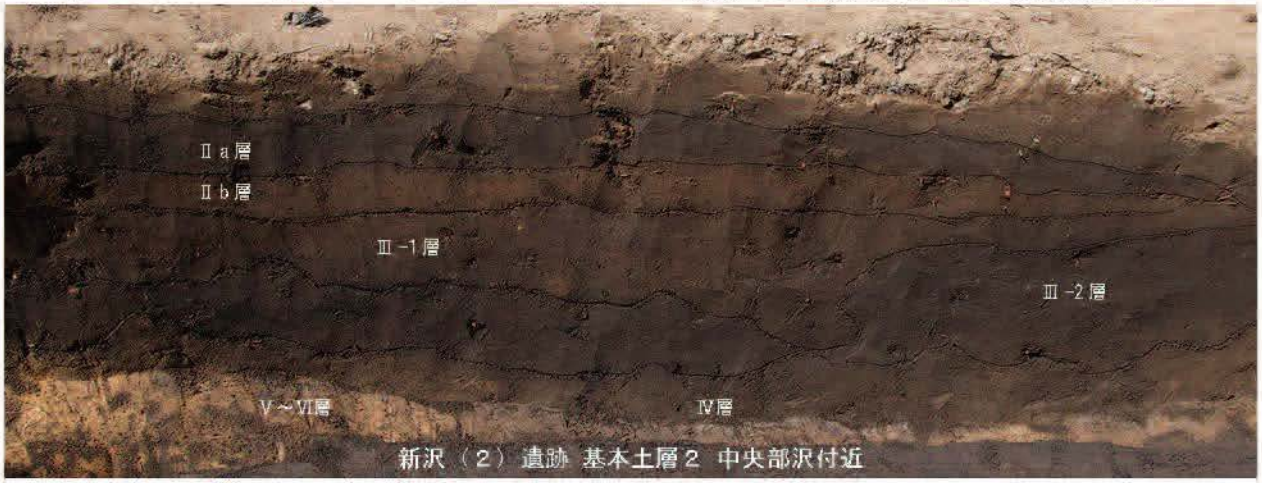


新沢（２）遺跡 基本土層３ 北側斜面付近

新沢（２）遺跡 基本土層５ 西側尾根上付近



新沢（２）遺跡 基本土層１ 東側尾根上付近



新沢（２）遺跡 基本土層２ 中央部沢付近

新沢（１）・（２）遺跡各地点における土層堆積状況

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成２６年度に一般国道１０１号鰺ヶ沢道路建設事業予定地内に所在する鳴戸（３）遺跡、金沢街道沢（１）遺跡、新沢（１）遺跡、新沢（２）遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、縄文時代～平安時代にかけての遺構・遺物が見つかりましたが、鳴戸（３）遺跡の平安時代中頃の製鉄炉跡や、金沢街道沢（１）遺跡の奈良時代の集落跡、新沢（１）遺跡の擦文土器、新沢（２）遺跡の縄文時代後期前葉の集落跡などは特記される成果といえます。

本報告書は、これらの調査のうち、金沢街道沢（１）遺跡、新沢（１）遺跡、新沢（２）遺跡の調査成果をまとめたものです。この成果が今後、埋蔵文化財の保護と研究等に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている国土交通省青森河川国道工事事務所に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたりご指導、ご協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

平成28年３月

青森県埋蔵文化財調査センター

所　長　三　上　盛　一

例　　言

1　本書は、国土交通省青森河川国道事務所による国道101号鰺ヶ沢道路建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成26年度に発掘調査を実施した鰺ヶ沢町金沢街道沢（1）遺跡、新沢（1）遺跡、新沢（2）遺跡の発掘調査報告書である。各遺跡の発掘調査面積は以下の通りである。
金沢街道沢（1）遺跡：6,600㎡、新沢（1）遺跡：3,500㎡、新沢（2）遺跡：8,300㎡。

2　各遺跡の所在地（青森県遺跡番号）は以下の通りである。
金沢街道沢（1）遺跡：青森県西津軽郡鰺ヶ沢町大字南浮田町字金沢街道沢地内（321102）。
新沢（1）遺跡：青森県西津軽郡鰺ヶ沢町大字北浮田町字新沢地内（321040）。
新沢（2）遺跡：青森県西津軽郡鰺ヶ沢町大字北浮田町字新沢地内（321041）。

3　各遺跡の発掘調査報告書は、本書が初めてとなる。

4　発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した国土交通省青森河川国道事務所が負担した。

5　発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。
発掘調査期間　　平成26年5月7日～11月20日
整理・報告書作成期間　　平成27年4月1日～平成28年3月25日

6　本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、青森県埋蔵文化財調査センター茅野嘉雄文化財保護主幹、齋藤正文化財保護主査が担当し、文末に執筆者名を記した。依頼原稿については、文頭に執筆者名を記した。なお、出土石器類の石質鑑定は山口義伸氏に依頼した。

7　発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。
航空写真撮影　　シン技術コンサル
放射性炭素年代測定　　株式会社加速器分析研究所、株式会社パレオ・ラボ
炭化材の樹種・炭化種実の同定、土壌分析、黒曜石の原産地分析　株式会社パレオ・ラボ
剥片石器の実測　　株式会社ラング
遺物の写真撮影　　シルバーフォト、フォトショップいなみ

8　発掘調査成果の一部は、現地見学会、発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書の内容がこれらに優先する。

9　発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。

10　発掘調査及び整理・報告書作成に際して、下記の方々と機関からご協力・ご指導を得た（敬称略、順不同）。
宇部則保　齋藤淳　木村淳一　中田書矢　高橋学　小林克　仙庭伸久　藤井誠二　秋山洋司
柏木大延　野月寿彦　小針大志　藤井浩　藤原弘明　神原雄一郎　佐藤剛　中村哲也　根岸洋

11　本書に掲載した地形図（遺跡位置図等）は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「鰺ヶ沢」、「森田」、「十面沢」、「種里」及び平成23年3月東北地方整備局青森河川国道事務所作成の2,000分

の１地形図「鳴戸 (3) 遺跡平面図」、「新沢 (1) 遺跡平面図」、「新沢 (2) 遺跡平面図」及び青森県作成の 5,000 分の１地形図「鰺ヶ沢農村総合整備モデル事業平面図」を複写して使用した。

12　測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅹ系による。

13　挿図中の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。

14　全体図等の縮尺は、各挿図毎にスケール等を示した。

15　遺構については、検出順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺構に使用した略号は、以下のとおりである。

ＳＩ－竪穴住居跡　ＳＫ－土坑　ＳＶ－溝状土坑　ＳＤ－溝跡　ＳＲ－土器埋設遺構

ＳＢ－掘立柱建物跡　ＳＰ－柱穴跡　ＳＸ－性格不明遺構

16　遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海抜標高を付した。

17　遺構実測図の縮尺は、原則として竪穴住居跡のカマド・炉跡等は１／30、竪穴住居跡・土坑・溝状土坑等は１／60、溝跡･柱穴状ピット群等は１／100 に統一し、挿図毎にスケール等を示した。

18　遺構実測図に使用した網掛け等の指示は、各々挿図中に示した。

19　遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。

20　基本土層・遺構内堆積土層の色調表記等には、『新版標準土色帖　2013 年度版』（小山正忠・竹原秀雄）を使用した。

21　遺物については､取り上げ順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺物に使用した略号は、以下のとおりである。

Ｐ－土器 (KP- はカマド出土土器）　Ｓ－石器　Ｃ－炭化材

22　遺物実測図には、挿図毎に１から通しの図番号を付した。同一固体と考えられる土器等には、図番号に小文字アルファベットを組み合わせて表記した。

23　遺物実測図の縮尺は、原則として縄文土器･弥生土器･土師器等は１／３、礫石器は１／３、土･石製品・剥片石器・鉄製品等は１／２に統一し、各挿図毎にスケール等を示した。

24　遺物実測図に使用した網掛け等の指示は、挿図毎に示した。

25　遺物観察表・計測表に使用した略号等については、各表毎に指示内容を示した。土製品、石器等の計測値は、長さ×幅×厚さ（㎝)･重さ（ｇ）の順に表記したが、（　）内の数値は現存値である。

26　遺物写真には、遺物実測図と共通の図番号を付した。

27　遺物写真の縮尺は、統一していない。

目　次

巻頭図版
序
例言
目次

第１章　調査概要
第１節　調査に至る経過・・・・・・・・・・1p
第２節　調査の方法・・・・・・・・・・・・1p
第３節　調査の経過・・・・・・・・・・・・3p

第２章　遺跡の概要
第１節　遺跡周辺の地形と地質・・・・・ 10p
第２節　遺跡周辺の歴史的環境・・・・・ 16p
第３節　出土遺物の分類・・・・・・・・・ 19p

第３章　検出遺構と出土遺物
第１節　金沢街道沢（1）遺跡
１、竪穴住居跡（SI）及び出土遺物・・ 23p
２、土坑・・・・・・・・・・・・・・・ 69p
３、溝跡・・・・・・・・・・・・・・・ 74p
４、掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・ 82p
５、溝状土坑・・・・・・・・・・・・・ 83p
６、その他の遺構及び出土遺物・・・・ 83p
７、遺構外出土遺物・・・・・・・・・・ 85p
第２節　新沢（1）遺跡
１、竪穴住居跡（SI）及び出土遺物・・ 89p
２、土坑跡・・・・・・・・・・・・・・105p
３、土器埋設遺構・・・・・・・・・・・109p
４、溝状土坑・・・・・・・・・・・・・110p
５、掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・110p
６、溝跡・・・・・・・・・・・・・・・113p
７、遺構外出土遺物・・・・・・・・・・113p
第３節　新沢（2）遺跡
１、竪穴住居跡（SI）及び出土遺物・・124p
２、屋外炉・・・・・・・・・・・・・・135p
３、焼土遺構・・・・・・・・・・・・・136p
４、土坑跡・・・・・・・・・・・・・・139p
５、土器埋設遺構（SR）・・・・・・・・155p
６、溝状土坑・・・・・・・・・・・・・157p
７、遺構外出土遺物・・・・・・・・・・157p
遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・169p

第４章　自然科学分析
第１節　年代測定結果・・・・・・・・・・179p
第２節　炭化材樹種同定結果・・・・・・191p
第３節　炭化種実同定結果・・・・・・・200p
第４節　採取土壌分析結果・・・・・・・210p
第５節　火山灰分析結果・・・・・・・・219p
第６節　黒曜石分析結果・・・・・・・・223p

第５章　総括
第１節　金沢街道沢（1）遺跡について ・226p
第２節　新沢（1）・(2）遺跡について・・228p
第３節　自然科学分析結果などについて・232p

金沢街道沢(1)遺跡遺構写真図版 ・・・・・233p
金沢街道沢(1)遺跡遺物写真図版 ・・・・・261p
新沢(1)遺跡遺構写真図版 ・・・・・・・・271p
新沢(1)遺跡遺物写真図版 ・・・・・・・・289p
新沢(2)遺跡遺構写真図版 ・・・・・・・・294p
新沢(2)遺跡遺物写真図版 ・・・・・・・・323p

報告書抄録・・・・・・・・・・・・・・・・330p

奥付

第１章　調査概要

第１節　調査に至る経過

国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所(以下「青森河川国道事務所」)から、一般国道101号鰺ヶ沢道路建設事業に関する取り扱いについて照会があり、青森県教育庁文化財保護課(「以下(文化財保護課)」)では平成22年度～23年度に事業予定地の現地踏査を実施の上、平成23年度及び25年度に事業予定地内の試掘調査を行った(青森県教委2012･2014)。

試掘調査結果を受けて関係機関が協議を行い、本発掘調査が必要とされた範囲については、青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施することとなった。平成24年度に鳴戸(３)遺跡の発掘調査を行い(青森県教育委員会2015)、平成25年度に、青森河川国道事務所、文化財保護課、青森県埋蔵文化財調査センターが協議を行い、平成26年度に鳴戸(３)遺跡、金沢街道沢(１)遺跡、新沢(１)遺跡、新沢(２)遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第２節　調査の方法

（１）発掘作業の方法

平成25年度に青森県教育庁文化財保護課が実施した試掘調査により、金沢街道沢（１）遺跡では平安時代の遺構（竪穴住居跡・溝跡等）が、新沢（１）遺跡では平安時代の竪穴住居跡や遺物等が、新沢（２）遺跡では土坑や遺物等が確認されていたため、縄文時代・古代の遺構調査に重点をおいて、各集落の時期・構造等の把握に努めた。

遺構測量点は、用地幅杭等の設置に用いた４級基準点を使用した。基準点の座標値は青森河川国道事務所から提供を受けた。基準点からの測量に支障が生じた場合は、用地幅杭や調査区内に任意点を設置し使用した。また、水準原点は、鳴戸(３)遺跡では調査区脇の３級基準点21－21(35.245ｍ)を、金沢街道沢（１）遺跡では３級基準点21－19（34.013ｍ）を、新沢（１）遺跡では３級基準点21－９(30.507ｍ)、新沢（２）遺跡では３級基準点21－７(34.690ｍ)ををれぞれ用い、調査区内の任意点に適宜水準移動を行った。

グリッドは調査区を網羅するように設定した。１グリッドは４×４ｍとし、鳴戸（３）遺跡と金沢街道沢（１）遺跡は平成25年度に調査を実施した際の鳴戸（３）遺跡の原点（平面直角座標系Ｘ系のＸ＝86900、Ｙ＝-50300）を用いた。新沢（１）遺跡と新沢（２）遺跡では、平面直角座標系Ｘ系のＸ＝87300、Ｙ＝-48000を原点とした。金沢街道沢（１）遺跡では南から北方向に向かってローマ数字（Ⅰ～Ⅴ）、とアルファベット（Ａ～Ｙ）を組み合わせ、西から東方向に算用数字を付し、南西隅の組み合わせで呼称した。新沢（１)･(２）遺跡では南から北方向に向かって算用数字を付し、西から東方向にローマ数字（Ⅰ～Ⅴ）、とアルファベット（Ａ～Ｙ）を組み合わせ、南西隅の組み合わせで呼称した。

なお、測量基準点、水準点は平成22年度以前に設置されており、使用した値は平成23年の東日本大震災による影響を受ける前のデータとなっている。本報告では混乱を避けるため、測量時のデータで提示している。国土地理院のPatchJGD Ver.1.0.1[1]を用いて変動後の原点座標値を求めると、金

沢街道沢（１）遺跡ではＸ＝86899.5345、Ｙ＝-50299.5716となり、新沢（１）･（２）遺跡ではＸ＝87299.5331、Ｙ＝-47999.5725となる。また国土地理院のPatchJGD Ver.1.0.1（標高版）(2)を用いて水準原点の変動後の標高値を求めると、21-19が34.120ｍ、21－21が35.351ｍ、21－9が30.615ｍ、21－7が34.797ｍとなる。

(1) 補正パラメータファイル：touhokutaiheiyouoki2011.par

(2) 補正パラメータファイル：touhokutaiheiyouoki2011_h.par

〔基本土層〕

遺跡の基本土層については、遺跡ごとに表土から順にローマ数字を付けて呼称した。試掘調査時の土層番号とは異なる部分がある。

〔表土等の調査〕

平成25年度の試掘調査時の所見や土層の堆積状況等を確認しながら必要に応じて重機を併用しながら表土除去を行った。出土した遺物は、適宜地区単位で層位毎に取り上げた。

〔遺構の調査〕

検出遺構には、原則として確認順に種類別の番号を付けて精査した。堆積土層観察用のセクションベルトは、遺構の形態、大きさ等に応じて、基本的には４分割又は２分割で設定したが、遺構の重複や付属施設の有無等により必要に応じて追加した。遺構内の堆積土層には、算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。遺構の平面図は、主に株式会社Cubic製「遺構実測支援システム」を用いてトータルステーションによる測量で作成した。遺構の堆積土層断面図や竪穴住居跡に伴う炉・カマド等の平面図、出土遺物の形状実測図等においては、簡易遣り方測量等も併用し、縮尺1/20・1/10の実測図を作成した。遺構内の出土遺物については、遺構単位・遺構内地区単位で層位毎に又は堆積土一括で取り上げたが、床面（底面）や炉・カマドの出土遺物については、トータルステーションや簡易遣り方測量により、必要に応じて縮尺1/20・1/10のドットマップ図・形状実測図等を作成した。

〔遺物包含層の調査〕

上層から層位毎に人力で掘削した。原則としてグリッド単位で層位毎に取り上げ、必要に応じて詳細な出土位置を記録した。

〔写真撮影〕

写真撮影には、原則として35㎜モノクローム、35㎜カラーリバーサルの各フィルム及び1790万画素のデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の検出状況・精査状況・完掘後の全景等について記録した。また、必要に応じてラジコンヘリによる遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影を業者に委託し行った。

（２）整理・報告書作成作業の方法

〔図面類の整理〕

遺構の平面図は主にトータルステーションによる測量で作成したので、整理作業ではこれを原則として縮尺20分の１で図化し、簡易遣り方測量等で作成した堆積土層断面図や炉・カマド等の付属施設の実測図等との図面調整を行った。また、遺構台帳・遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見

等を整理した。

〔写真類の整理〕

35 ㎜モノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35 ㎜カラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状態、遺構毎の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは 35 ㎜カラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付けた。

〔遺物の洗浄・注記と接合・復元〕

遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土区・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器・金属器等、直接注記できないものは、収納したポリ袋に注記した。

注記における各遺跡の略号は次の通りである。金沢街道沢（１）遺跡：14 ｶﾅｻﾞﾜ (1)。新沢（１）遺跡：14 ｱﾗｻﾜ (1)。新沢（２）遺跡：14 ｱﾗｻﾜ (2)。

〔報告書掲載遺物の選別〕

主に遺構に伴って使用・遺棄・廃棄された資料、遺構の構築・廃絶時期等を示す資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料、所属時代（時期）・型式・器種等の分かる資料等を選別した。

〔遺物の観察・図化・写真撮影〕

選別した遺物は必要に応じて実測図または拓本を採り、遺物台帳・観察表・計測表等を作成した。遺物の写真については、一部を業者に委託して行った。

〔理化学的分析・鑑定〕

遺跡の年代・木材や種実利用、堆積土壌の成因、石器原材料の石質や原産地、鉄製品の成分などを明らかにするための鑑定・同定などを業者等に委託し行った。

〔遺構・遺物のトレース・版下作成〕

遺構・遺物の実測図やその他の挿図のトレースは株式会社 Cubic 製「遺構実測支援システム」及び株式会社 Cubic 製「トレースくん」を用いた。実測図版・写真図版等の版下作成は、アドビシステムズ製「Illustrator」、「Photoshop」をそれぞれ使用した。また、割付作業はアドビシステムズ製「InDesign」を使用した。

第３節　調査の経過

（１）発掘作業の経過

平成 26 年度の当該事業に係る遺跡の発掘調査は、金沢街道沢（１）遺跡 6,600 ㎡、新沢（１）遺跡 5,500 ㎡、新沢（２）遺跡 8,000 ㎡を対象として（図２・３）、５月７日から 10 月 30 日までの発掘作業期間で実施することになった。平成 25 年度に青森県教育庁文化財保護課が行った試掘調査の結果を踏まえて発掘作業を進めることにした。

発掘調査体制は、以下のとおりである。

調査員　　藤沼邦彦　前弘前大学教授（考古学）
　　関根達人　国立大学法人弘前大学人文学部教授（考古学）
　　山口義伸　日本第四紀学会会員（地質学）
調査主体　　青森県埋蔵文化財調査センター

所　長　　三上盛一
次　長（総務ＧＭ）　高橋雅人
調査第二ＧＭ　　川口　潤
文化財保護主幹　　茅野嘉雄（新沢（１）・（２）遺跡発掘調査担当者）
文化財保護主幹　佐々木雅裕（金沢街道沢（１）遺跡発掘調査担当者）
文化財保護主査　齋藤　正（金沢街道沢（１）遺跡発掘調査担当者）
文化財保護主査　佐藤純子（新沢（１）・（２）遺跡発掘調査担当者）

各遺跡における発掘作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

〔金沢街道沢（１）遺跡〕

４月上旬　青森河川国道事務所（調査委託者）、青森県教育庁文化財保護課と他の３遺跡（鳴戸（３）遺跡、新沢（１）遺跡、新沢（２）遺跡）を含めた調査前の打合せを行い、発掘作業の進め方等について再度確認した。

７月上旬　調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置等、事前の準備作業を行った。

７月 14 日　発掘器材等を現地へ搬入し、環境整備後、調査区域の東端部から発掘作業を開始した。

７月中旬～　重機を使用して調査区東側から表土を掘削し、遺構検出を行い、古代の竪穴住居跡、土坑、大溝跡等を確認した。排土について事業者側で搬出した。

８月下旬　調査区域北西側の取付道路部分、東側及び西側の斜面から平場にかけて調査を終了した。

９月下旬～　表土の掘削を終了し、遺構確認・精査を進めた。

10 月９日　事業者、文化財保護課立会のもとで、発掘現場の終了確認を行った。また、安全対策のため発掘現場の埋め戻し箇所等についての打合せをした。

10 月中旬　ラジコンヘリを用い、調査区を空中から撮影した。

10 月 30 日　すべての発掘作業を終了し、発掘器材・出土品等を搬出した後、現地から撤収した。

金沢街道沢（1）遺跡作業風景

平成 26 年度の金沢街道沢（１）遺跡発掘調査では、縄文～古代の遺構が 91 基、遺物が 40 箱（段ボール箱）箱出土した。

10 月上旬　所轄の警察署に文化財保護課を通じて遺物発見届を提出した。

〔新沢（１）遺跡〕

４月下旬　調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等、事前の準備作業を行った。

５月上旬　発掘器材等を現地へ搬入し、環境整備後、調査区域の東側から発掘作業を開始した。

５月中旬～　トレンチ調査により遺跡内の基本土層を確認したうえで、調査区域東側約 1,500 ㎡の遺構検出を行い、古代の竪穴住居跡・縄文～弥生時代の土坑等を多数確認した。

６月上旬～　検出した古代の遺構の調査を進めながら、調査区域西側約 1,500 ㎡の遺構検出を行った

が、調査区域東側に比べて遺構の密度は希薄であった。古代の遺構は白頭山一苫小牧火山灰降下以前のものが多いことが判明し、擦文土器も出土した。

6月下旬　高所作業車を使用して調査区域の全体写真を撮影した。

7月4日　すべての発掘作業を終了し、発掘器材・出土品等を搬出した後、現地から撤収した。

新沢（1）遺跡作業風景

平成26年度の新沢（１）遺跡発掘調査では、縄文時代の土坑が16基、弥生時代の土器埋設遺構が１基、平安時代の竪穴住居跡が７軒、土坑が３基、掘立柱建物跡が２棟、遺物が27箱（段ボール箱）出土した。

7月中旬　所轄の警察署に文化財保護課を通じて遺物発見届を提出した。

〔新沢（２）遺跡〕

5月下旬　新沢（１）遺跡の調査と平行して、調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等、事前の準備作業を行った。

6月上旬　重機を併用し、トレンチ調査を行った結果、調査区の広い範囲に縄文時代後期の遺物が出土することが判明した。

7月上旬　新沢（１）遺跡の調査がほぼ終了したので発掘器材等を現地へ搬入し、環境整備後、調査区域の東端部から本格的に発掘作業を開始した。

7月上旬～　調査区東端部で重機を使用し表土を除去し、遺構確認を開始した。遺構・遺物ともに発見量は少なかったが、弥生時代の遺構・遺物などがⅡ層中で発見されたため、Ⅱ層以下は基本的に人力で土層を掘削し遺構精査を行った。

7月下旬　調査区中央部の遺構検出を行い、古代の竪穴住居跡・土坑等を確認した。調査区内は全面に第Ⅱｂ層が存在することが判明し、Ⅱ層より下位については人力で土層を掘削し遺構確認及び精査を行うこととなった。

8月下旬～　調査区東端部約1,800㎡の精査を終了した。

9月中旬～　調査区中央部の精査を継続しつつ調査区西側の遺構確認を開始。当該区域では縄文時代後期の遺物が遺構内外から出土することを確認するとともに、Ⅱ～Ⅲ層が褐色を呈し、遺構と地山の判別が難しいことも判明した。

10月下旬　ラジコンヘリを用い、調査区を空中から撮影した。

11月7日　大方の作業を終了し、機材の一部を残し撤収した。一部の遺構精査については残務整理として行った。

新沢（２）遺跡作業風景

11月20日　すべての調査を終了し、現地から撤収した。

平成26年度の新沢（2）遺跡発掘調査では、縄文～古代の遺構75基と、遺物が84箱（段ボール箱）出土した。

11月下旬　所轄の警察署に文化財保護課を通じて遺物発見届を提出した。

（2）整理・報告書作成作業の経過

整理・報告書作成作業は平成27年4月1日から平成28年3月25日までの期間で行った。3つの遺跡を1冊にまとめて刊行することとしたため、それに応じた整理作業の工程を計画した。

整理主体　青森県埋蔵文化財調査センター

文化財保護主幹　茅野嘉雄（報告書作成担当者）

文化財保護主査　齋藤　正（報告書作成担当者）

平成27年度の整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

4月上旬～　発掘作業で作成した図面類の整理作業と遺物の分別作業を行った。

4月中旬～　金沢街道沢（1）遺跡から土器の接合・復元作業を開始（6月上旬まで）。

6月中旬～　新沢（1）遺跡の土器接合・復元作業を開始（8月中旬まで）。石器・石製品類の報告書掲載遺物を選別し、剥片石器の一部について実測図の作成を委託した。また、土壌サンプル・炭化材サンプル等を整理し、土壌サンプルについては水洗選別を行い炭化種実や微細な遺物の抽出を行った（8月末まで）。

8月下旬～　新沢（2）遺跡の土器接合・復元作業を開始（10月中旬まで）。

9月下旬～　土壌の水洗選別や炭化材の整理が終了したため、放射性炭素年代測定・樹種同定・種実同定・土壌分析などの理化学分析を順次業者に委託した。

10月下旬　土器類の接合・復元作業が終了したので、報告書掲載遺物の選別作業を行うとともに、遺物の検討・分類・整理作業を進め、遺物観察表等の作成を開始した。

11月上旬～　選別した報告書掲載遺物の実測・拓本等の図化作業を進めた。併せて遺物台帳等を作成した。また、遺構実測図や遺構配置図・調査区域図等のトレースを行った。

11月下旬～　図化作業が終了した遺物から、順次トレースを開始した。また、シルバーフォト及びフォトショップいなみに委託して報告書掲載遺物の写真撮影を行い、写真図版を作成した。

12月下旬～　調査成果を総合的に検討して、報告書の原稿作成を開始した。

1月下旬　原稿・版下等が揃ったので、報告書の割付・編集を行い、印刷業者を入札・選定して入稿した。

3月25日　3回の校正を経て、報告書を刊行した。

最後に、記録類・出土品を整理して収納した。

新沢（2）遺跡
新沢（1）遺跡
金沢街道沢（1）遺跡
北浮田町
北浮田
南浮田町
鰺ヶ沢湾
七ッ石町
舞戸町
中村町
中村川
鰺ヶ沢町
湯舟町
小屋敷町
高津森山
0
1km
1/25000

図１　遺跡位置図

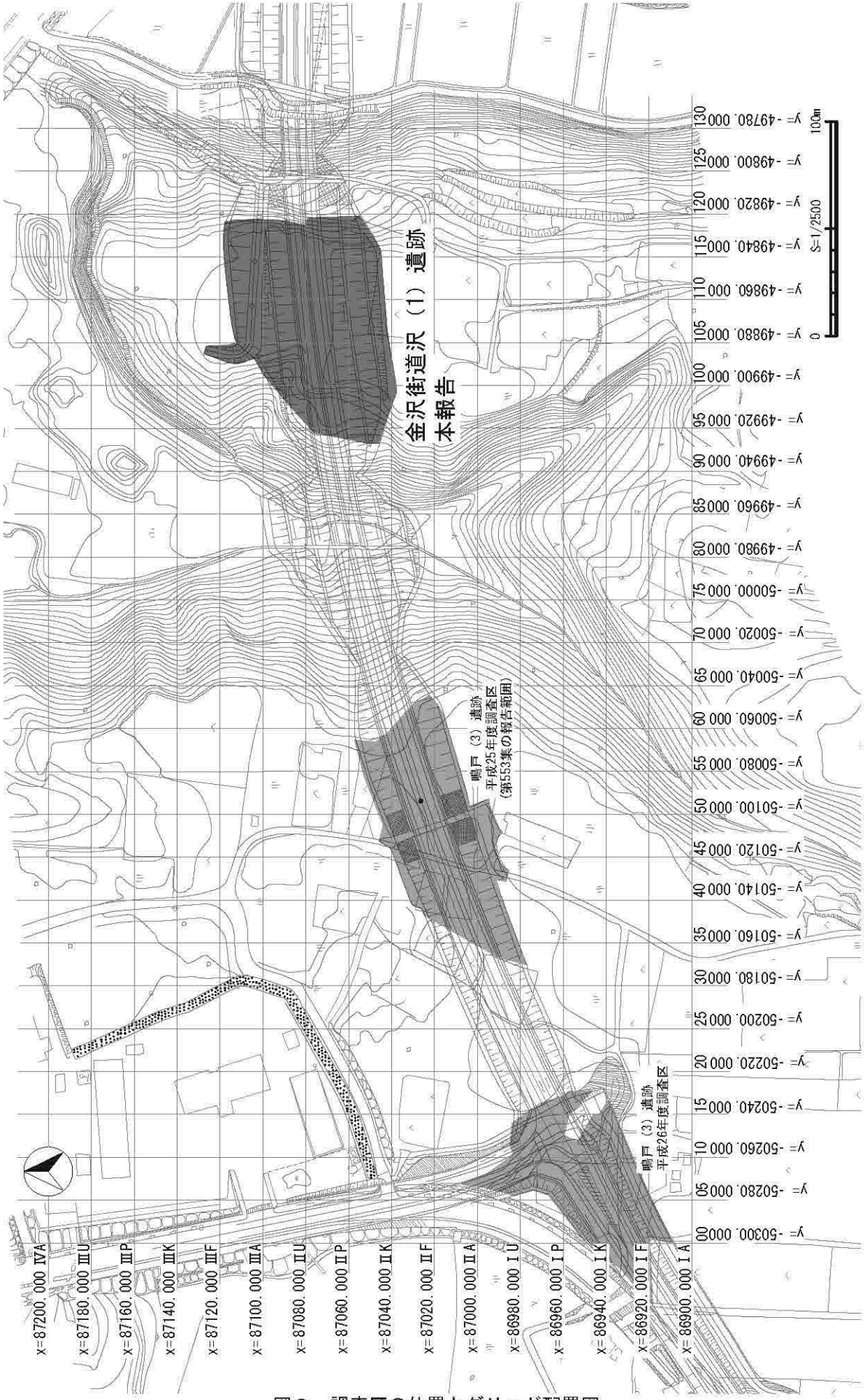


図２　調査区の位置とグリッド配置図

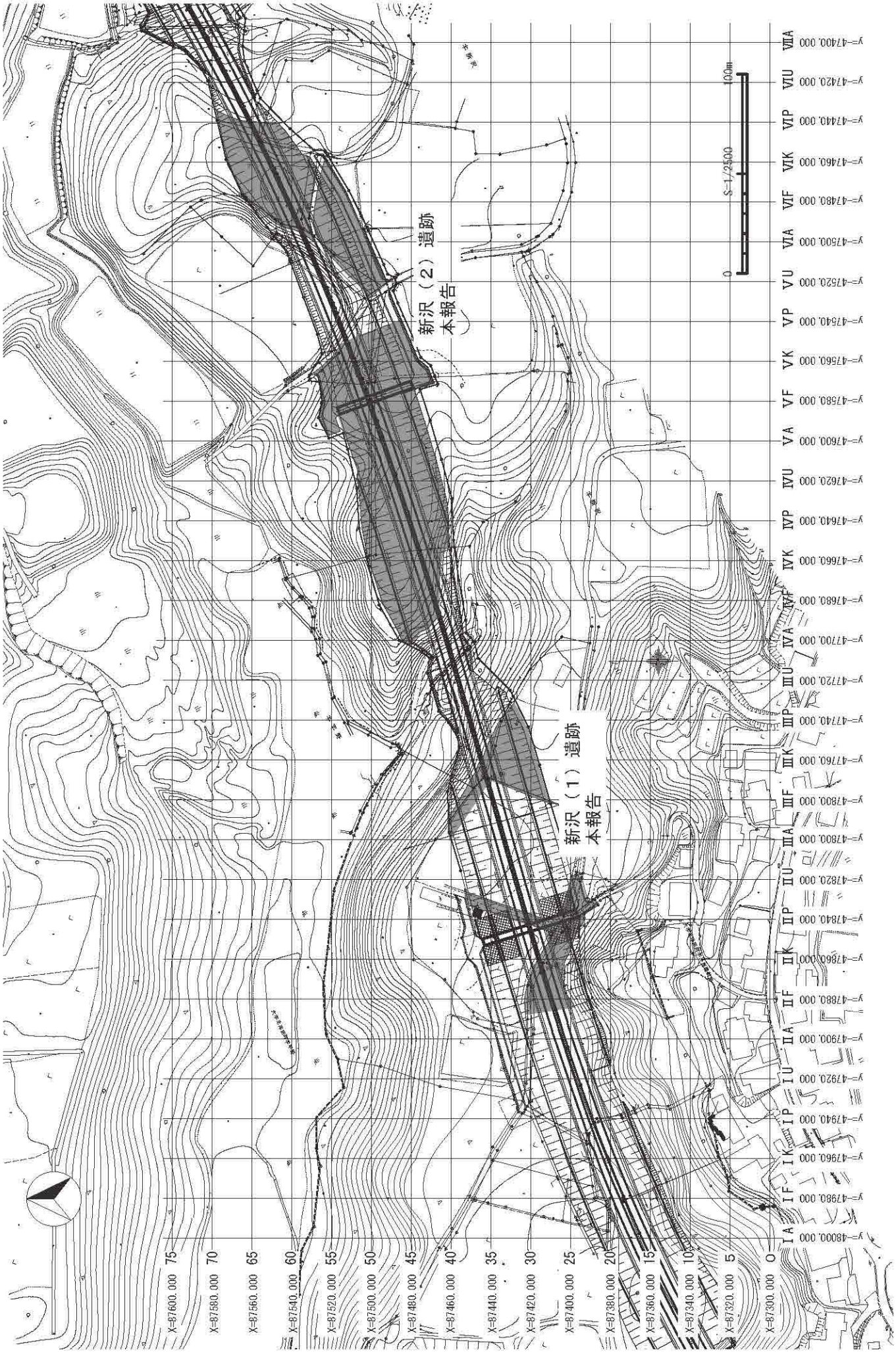


図３　調査区の位置とグリッド配置図（新沢（１）遺跡・新沢（２）遺跡）

第２章　遺跡の概要

第１節　遺跡周辺の地形と地質

調査員　山口義伸

鰺ヶ沢町は南西側に白神山地が、南側に岩木火山が位置し、北端は日本海に面している。鰺ヶ沢町から西方の深浦町にかけては津軽西海岸と呼ばれる岩石海岸が展開し、海岸段丘が発達している。一方、北方の十三湖にかけての海岸線は緩やかに湾曲する七里長浜が展開し、海岸線に並行して屏風山が発達している。金沢街道沢（１）遺跡外が位置する鳴沢川は岩木山の放射谷であり、岩木火山体の西端部を流れる中村川は白神山地内の四兵衛森(642m)に源を発し、鰺ヶ沢町中心街に達している。

日本海沿岸に分布する鰺ヶ沢台地は高位段丘(標高70～90m)、中位段丘(50～60m)、そして低位段丘(20～30m)の３段に区分される。北の七里長浜に並行する屏風山は中位段丘に相当する山田野段丘が砂丘砂で被覆された地域であって、約４kmの幅で南北に約30kmと続いている。段丘面の高度は南部で30～40mであるが、北方ほど高度を下げ、20～30mとなる(青森県史2001)。南端部に分布する段丘面は天皇山(標高56.7m)を連ねた丘陵状の縦列砂丘が発達したり、今須（３）遺跡(鰺ヶ沢町教育委員会1999)で確認したように段丘面に古砂丘砂が厚く堆積したりと、やや起伏に富んでいる。

鰺ヶ沢町周辺の地質を概観すると、北金ヶ沢から東側の鳴沢川にかけての海岸部には新第三紀鮮新世の泥岩主体の舞戸層や鳴沢層などが分布している。海岸部に露出する露頭観察から、舞戸層や鳴沢層などは東西方向の圧縮応力を受けた南北性の褶曲構造に支配されており、特に中村川東方の各地層は鰺ヶ沢背斜の東翼に堆積している(青森県史2001)。鳴沢川河口域に分布する基盤岩は舞戸層であって、緑灰～青灰色の塊状のシルト岩～泥岩を主とし、凝灰質砂岩や軽石質凝灰岩などを挟んでいる。鳴戸（３）遺跡(青森県教育委員会2015)と金沢街道沢（１）遺跡を隔てる開析谷の谷壁にはシルト岩が裸出し、挟在する凝灰質砂岩直下のシルト岩には風化によるクラックの発達が目立つ。このため、ブロック状に割れたシルト岩の崩落が著しく、段丘構成層を含む上位層がオーバーハングの状況となっている。なお、中村川の東側には岩木火山体が位置し、北側の山麓部には軽石等を含む火山噴出物や山体崩壊に関わる岩屑なだれ、火山泥流による堆積物が認められる。

一方、鳴沢川下流域の北側には山田野層に相当する砂、シルト、礫からなる未固結の堆積物が10m以上の厚さで堆積している。青森県史(2001)では、約12.4万年前に降下堆積した洞爺火山灰Toyaの存在から山田野層の堆積時期を最終間氷期と考えている。保木原での道路改良工事現場では、厚さ15m以上に及ぶ未固結の堆積物を確認し、おおむね３層に区分できた。下部層(厚さ５m以上)は下位からクロスラミナの発達した淘汰不良な砂層、塊状の中粒砂、中粒砂―細礫互層と細粒砂層、そして最上部の細粒砂―砂鉄質砂互層からなっている。中部層（２m)は塊状のシルト層からなり、上部層（６m)は下底に黒色泥―細粒砂互層を有し、上位には下底部と不連続なクロスラミナを有する砂鉄質砂―細礫互層、中粒砂―砂鉄質砂互層、レンズ状の泥炭層を含む細粒砂―シルト互層、ラミナを有する中粒砂からなっている。なお、上部層からは地下水の湧出が目立つ。これら一連の堆積物から推測すると、中部層が高海水準期の堆積、上部層はレンズ状の泥炭層の挟在や細礫等の混入による上方粗粒化を考慮すると海退時の堆積と考えられる。山田野層を覆う形で、クロスラミナを有するレンズ状の砂層を挟在する塊状砂層(古

期砂丘砂)が２m以上の厚さで堆積し、砂層は下底にToyaの薄層を挟むローム層に覆われている。なお、地表直下には十和田―八戸軽石To-HPが堆積している。

各遺跡調査区内の基本層序については基本的にはほぼ同一であることから、金沢街道沢(１)遺跡での観察をもとに述べる。また、ローム層以下に関しては南北両岸の段丘で異なることから、金沢街道沢(１)遺跡で観察した基盤岩上の段丘砂礫層の堆積状況をもとに述べる(図４)。なお、新沢(１)・(２)遺跡ではⅠ～Ⅳ層に細粒砂の混入が目立ち、全体的に色調が明るい。特に斜面での堆積土中には砂の含有量が目立ち、斜面崩壊により段丘構成層の裸出が原因となっている。

第Ⅰ層　黒褐色土(10YR2/3)　耕作土である。粘性・湿性が弱く締まりに欠け、ブロック状に割れやすい。新沢(１)・(２)遺跡では下部に細粒砂の混入が目立ち、酸化により赤みを帯びた暗褐色砂質土(10YR3/4)をⅠｂ層として細分している。Ⅰｂ層は柔らかくて、乾くと黒灰色に変色する。

第Ⅱ層　黒色土(10YR2/1)　粘性・湿性が多少みられる。全体的にソフトで、乾くと崩れやすい。厚さは10cm程度で、ローム粒や軽石粒が多少混入している。斜面下方においては、本層下部(Ⅱｂ層)あるいはⅢ層との境界面に白頭山－苫小牧火山灰(B-Tm)がレンズ状に堆積することがある。新沢(１)・(２)

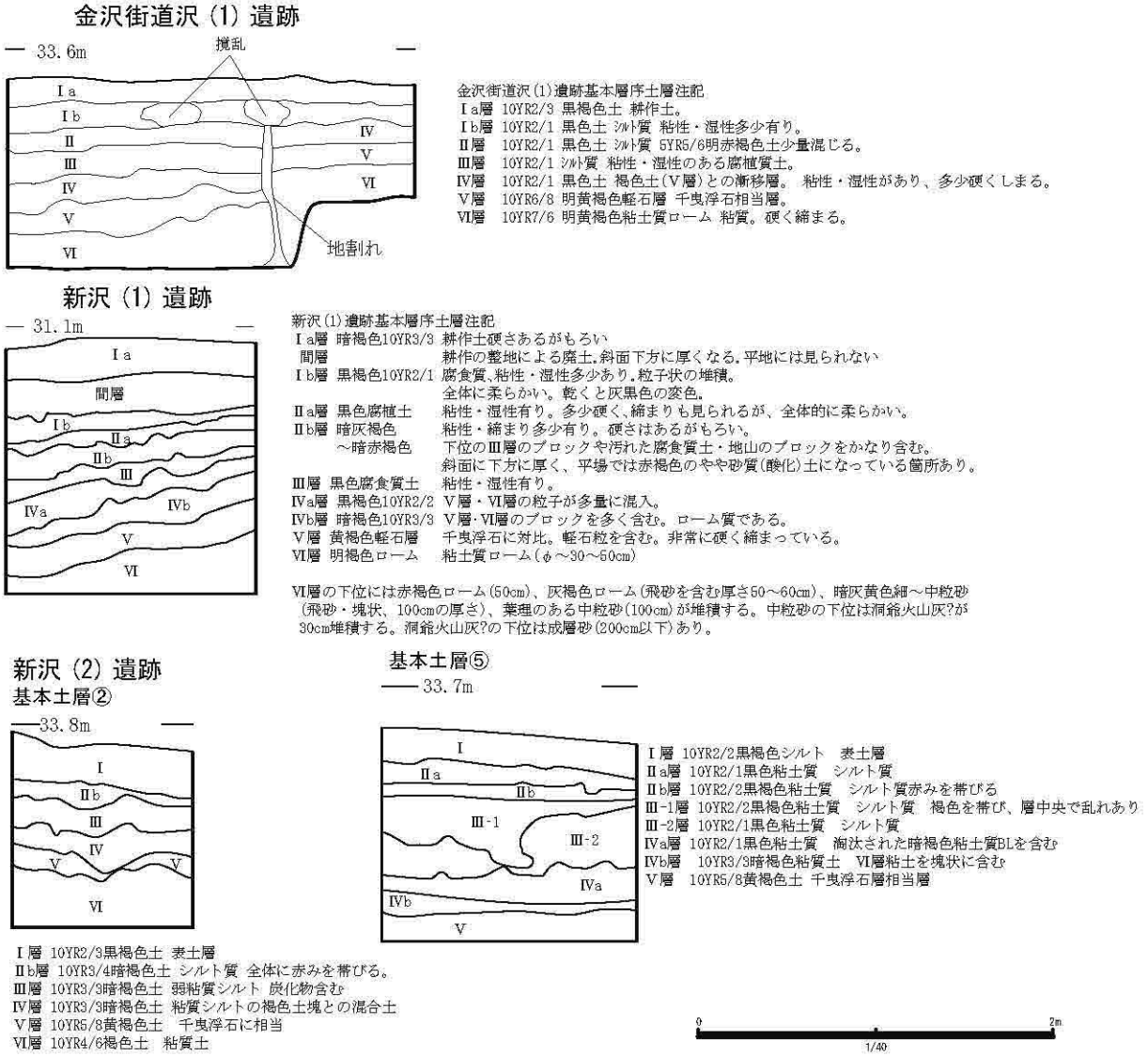


図４　各遺跡基本層序

遺跡では層相の変化から本層下部をⅡｂ層として細分している。斜面では砂やローム、腐植土などがブロック状に多量に混入し、下方ほど砂の供給が多く厚く堆積している。平坦面では細粒砂の混入が目立ち、酸化により赤みを帯びた暗赤褐色土を呈している。

第Ⅲ層　黒褐色腐植質土(10YR2/1)　粘性・湿性のある腐植質で、締りがみられる。本層中には主に縄文時代前～中期の遺物が包含されている。

第Ⅳ層　黒褐色土(10YR2/1)　漸移層である。粘性・湿性があり、多少かたさがあり締まっている。下位層のローム粒や軽石粒の混入により上下２層に細分される。上位のⅣａ層ではローム粒や軽石粒の混入が目立つが、下位のⅣb層ではブロック状の混入が目立つ。

第Ⅴ層　明黄褐色軽石層(10YR6/8)　千曳浮石(東北地方第四紀研究グループ1969)、十和田－八戸軽石To-HP(青森県2001、柴・前島2009)に対比される。厚さは約10cmで、最大20cmに達する。緻密堅固な軽石層であるが、本層上部のＶａ層は軽石粒(径2～3mm大)を包含するローム層であり、下部のＶb層はラピリ質軽石層である。なお、本層直下には暗色帯を伴うことがある。

第Ⅵ層　明黄褐色粘土質ローム(10YR3/3)　厚さ約10cmの、かたく締まった粘土質ロームである。暗色帯直下にあって、クラックが発達する。本層にはインボリューションがみられる。

第Ⅶ層　黄褐色粘土質ローム(10YR5/8)　かたく締まった塊状のローム層で、全体的に格子状の割れが目立つ。厚さは100～150cmである。灰褐色ロームと酸化の染みのある赤褐色ロームが交互に2～3回繰り返して堆積するのが特徴的である。なお、本層下底部には中位段丘の指標火山灰であるToyaが層状に堆積することがある(雁澤ほか1994)。

第Ⅷ層　シルト層　段丘砂礫層を構成するシルト層(厚さ60～80cm)である。上半部が風化によりやや柔らかな黄褐色シルト質細粒砂で、下半部がかたく締まった灰色シルト層である。

第Ⅸ層　砂層　段丘砂礫層を構成する砂層(厚さ約150cm)である。層相から3層に細分される。上部は酸化によりブロック状の割れが目立つ赤褐色中粒砂、中部は青灰色を呈する塊状中粒砂、下部はラミナを有する細粒砂となっている。

第Ｘ層　砂礫層　段丘砂礫層基底に堆積し、基盤のシルト岩を覆う。

次に、図５には鰺ヶ沢町森林基本図(1／10000、昭和50年９月作成)をもとに作成した遺跡周辺の地形分類を示した。図６には金沢街道沢(１)遺跡の調査区位置図と周辺の地形図を、図７には新沢(１)・(２)遺跡の調査区位置図と周辺の地形図(いずれも平成23年３月東北地方整備局青森河川国道事務所作成)を示した。併せて両地域の空中写真も示した。

金沢街道沢(１)遺跡は鰺ヶ沢町大字南浮田町字金沢街道沢に所在している。平成25年度に調査された鳴戸(３)遺跡とともに鳴沢川の南岸に分布する山田野段丘上に立地し、両遺跡の間には20m超の急勾配の谷壁をもつ開析谷が流れている。この開析谷と金沢街道沢(１)遺跡の東端を流れる開析谷には地すべり、あるいは斜面崩壊と考えられる等高線の円弧状配置が認められる。一方、新沢(１)・(２)遺跡は西津軽郡鰺ヶ沢町大字北浮田町字新沢に所在し、鳴沢川北岸の段丘上に立地している。この山田野段丘は砂層やシルト層、砂礫層などの未固結堆積物で構成され、軟弱な地盤となっている。遺跡周辺を流れる枝谷沿いにも等高線の密集した配置や円弧状の配置が認められ、降水や融雪による側刻作用の進行、さらには地すべりあるいは斜面崩壊などの多発による谷壁の後退が推測される。

金沢街道沢(１)遺跡の調査区は標高32～34m、東西幅50～60mのやや起伏のある段丘面上に立地して

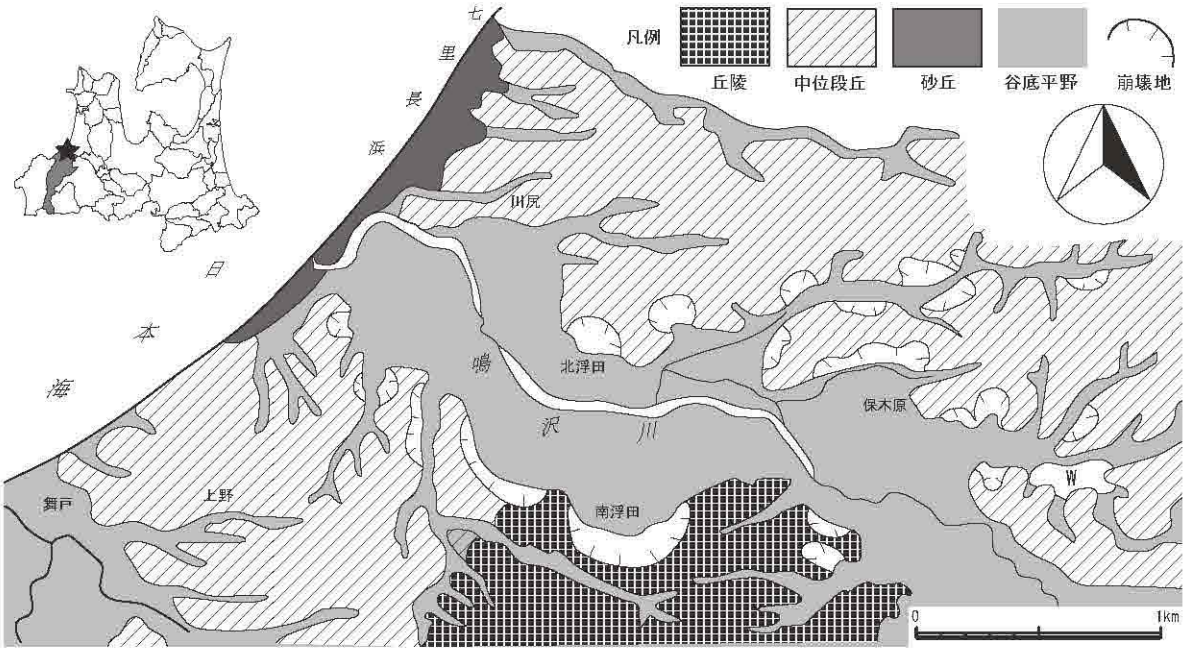


図５　遺跡周辺の地形分類図

いるほか、西側の斜面途中にある29～30mの平坦地も調査範囲となっている。段丘面は東西両側を深さ20m超の谷が流れていることから北側に舌状に張り出す形で分布している。段丘周縁には地すべりあるいは斜面崩壊の痕跡が数多く認められ、特に調査区の東西両端では斜面途中に小規模な平坦面が伴っている。段丘面上の調査区は中央部に浅くて緩やかな谷状凹地が南北に認められ、東側は33～34mの尾根状の高まりとして谷状凹地にほぼ並行して延び、西側には２条の谷地形があって、33～34mの緩やかな小丘が点在している（図２・３）。

調査区からは、表土直下にほぼ南北方向に延びる亀裂痕が３か所で検出された。中央部に位置する谷状凹地の東壁にあたるSI02号・SI03号住居跡とSI08号住居跡とを結ぶ80m以上の長さを有する亀裂痕、谷状凹地の西壁にあたるSI11号住居跡と北側のSP41号土坑とを結ぶ40m強の長さを有する亀裂痕、そして尾根状の高まりのやや東寄りのSI01号住居跡を通る60m以上の長さを有する亀裂痕である。確認された亀裂痕はⅠ層で覆われている。なお、SI02・03・08号の各住居跡からは亀裂に伴う溝状の落ち込みが確認されている。亀裂痕から判断すると、中央部の谷状凹地は60～80cmの落ち込みで、幅が北側で約10m、南側で15m余である。北側に設定された中央ベルトでは凹地東側に落差が約20cmの亀裂痕が認められ、西側ではⅡ層以下が撓んだ状況で検出された。

発掘調査終了後、工事現場の南北両側の切通しにおいて谷状凹地にほぼ対応する箇所で基盤のシルト岩中に段丘砂礫層の落ち込みを確認し、この間の段丘構成層に複数の亀裂痕も認められた。この谷状凹地はテフラ層を含めた段丘構成層の荷重もあって、地下水位の低下によって風化したシルト岩が収縮したために生じたと考えられる。

ところで、調査区域内からはコの字状に配置されたSD01号溝跡が検出され、このうち東側の南北方向に延びる溝跡部分が平坦面から約１mも高度を下げた斜面途中から検出された。この東斜面からはSD01号溝跡と重複する形でSD08号溝跡も検出されている。SD08号溝跡は調査区の南東端において斜面を這

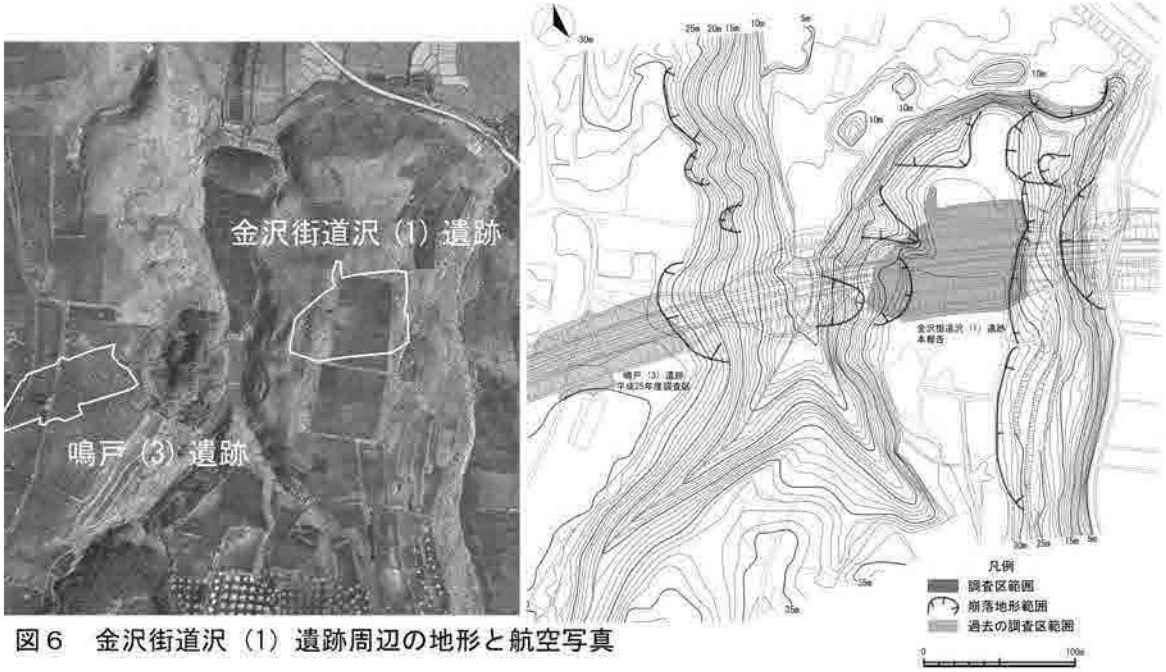


図６　金沢街道沢（1）遺跡周辺の地形と航空写真

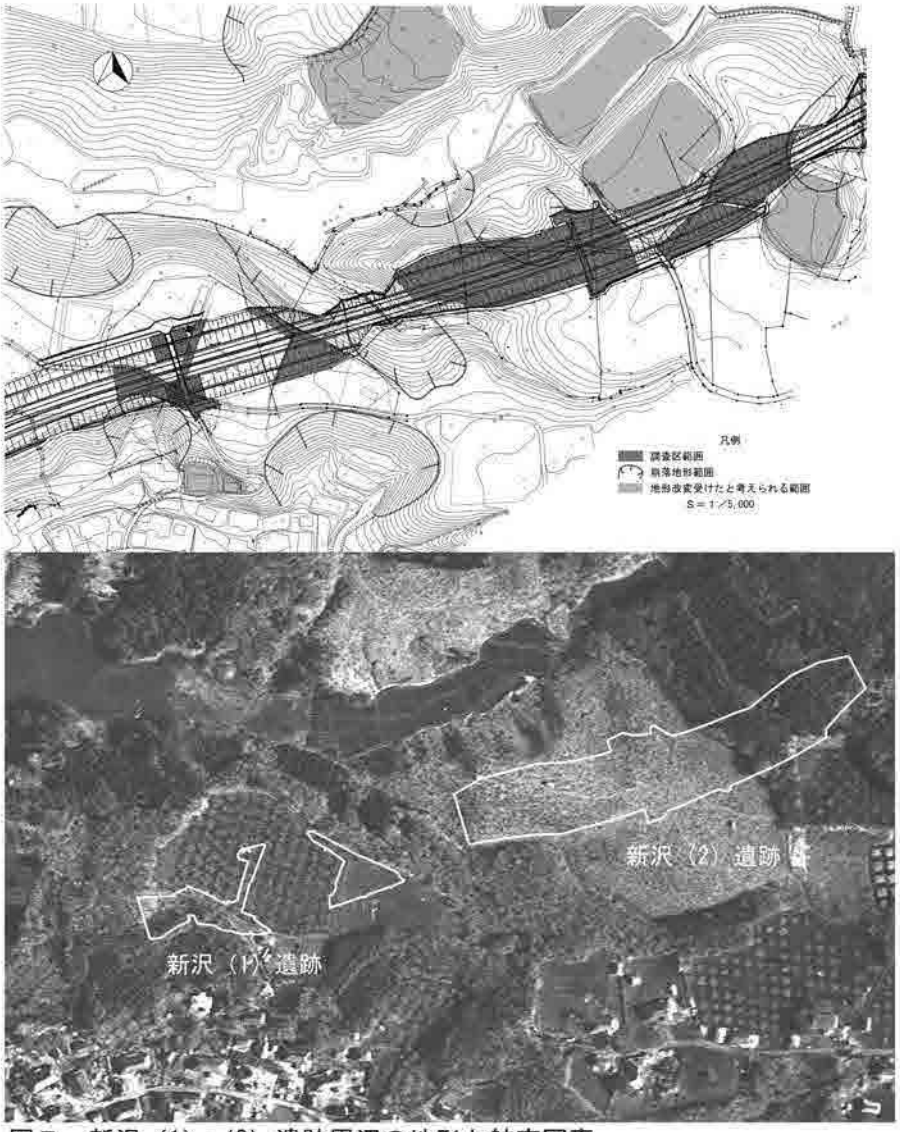


図７　新沢（1）・（2）遺跡周辺の地形と航空写真

い上がって平坦面へ向かい、またSD01号溝跡の東西方向から南方への屈折点よりも北側に約５m延びる細い亀裂状の溝跡としても検出されている。このSD08号溝跡は、おそらく東側斜面で発生した地すべりに伴う亀裂と考えられる。斜面途中にある平坦面はその際に形成されたと考えられる。発掘調査終了後、工事現場の北側の切通しにおいて確認した地すべりの模式断面を図８に示したが、地すべりは２～３個の小規模なものが地形的に接し、南北の長さが80m以上、落差が約５mと推定される。地すべりは降雨・融雪による地下水位の上昇や地震活動により斜面形状が著しく変化して発生することから、調査区においては、基盤の風化したシルト岩が滑動したと考えられる。斜面途中にある平坦面は地すべりによってその移動体がブロック状に剪断された結果移動体の主要部が斜面途中に取り残されて形成されたと考えられる。ちなみに斜面途中の平坦面は現状では標高22～32mの緩傾斜面となっているが、段丘上の畑地に至る農道を整備するために北側を排土し南側を盛り土したためと考えられる。

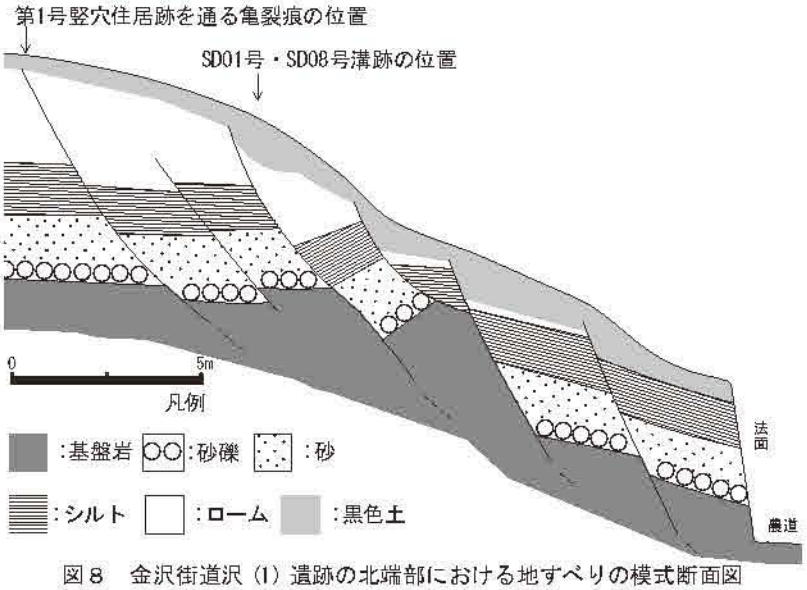


図８　金沢街道沢（1）遺跡の北端部における地すべりの模式断面図

一方、西側斜面にも段丘面から３～４mの落差のある平坦面が幅約10m、長さ約50mと幅狭く、円弧状に分布している。滑落崖の直下には凹状地が存在するが、滑落した土塊で埋没し、平坦面にほぼ連続している。平坦面の表面は削平により段丘砂礫層中の赤褐色砂層（第Ⅸ層上部）が露出し、滑落した地すべり移動体の主要部で構成されている。図9から、凹状地の平坦面側の斜面に崩落土が認められ、その崩落土上に軽石層（Ⅴ層）及びその上位層が載るという堆積状況が読み取れる。これは地すべり停止後、崩落土層を被覆するように、滑落崖に張り付いていた地すべり移動体のブロックが再滑動してきたと考えられる。凹状地内に堆積しているⅡ層に関しては、白頭山―苫小牧火山灰（B-Tm）を含むⅡｂ層直上に滑落崖からの崩落土がレンズ状に堆積している。なお、この平坦面をもたらした地すべりの頂部には、段丘面南西端にある谷地形が分布し、北側の溝状の崩壊地形の頂部にも谷地形が分布している。北側の崩

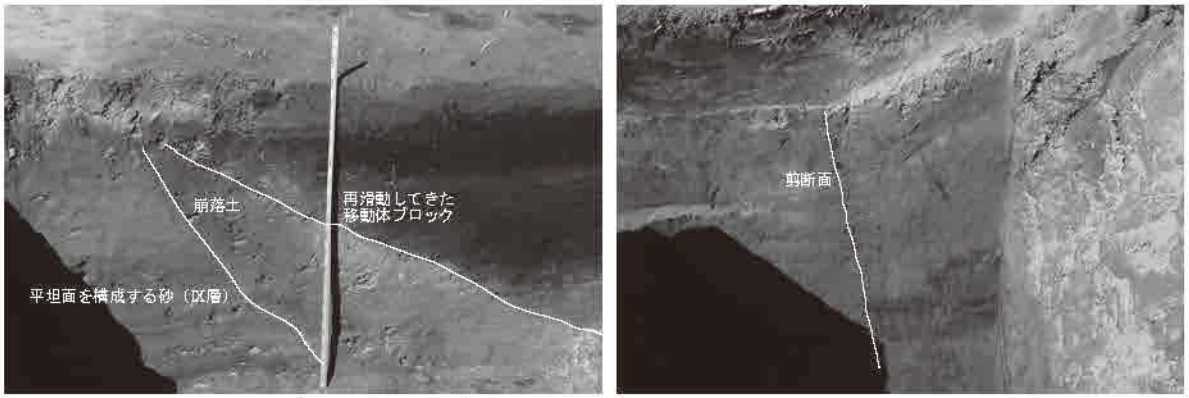


図９　金沢街道沢（1）遺跡の西側平坦部における地すべりの土層断面

壊地形では、基盤のシルト岩が露出している。

図７に示したように、対岸の新沢（１）・（２）遺跡周辺には鳴沢川に注ぐ枝谷が数多くみられ、段丘面上には枝谷に注ぐ小規模な谷地形もあって、全体的に開析によりやや起伏に富んでいる。枝谷流域にはやや幅の広い谷底が分布し、平坦な段丘面や谷底に対して急勾配の谷壁が等高線の配置から読み取れる。これは未固結堆積物からなる段丘構成層が風化・浸食だけでなく降雨や融雪による地下水の流出、斜面崩壊などにより谷壁が後退・更新するためと考えられる。また、流域には円弧状の崩壊地形が点在するが、谷底内に移動した崩落土を整地して水田に転用しているほかに、崩壊地でも崩落土を排土したり末端部を盛り土したりして整地し、畑地や水田として利用している箇所もある。

引用・参考文献

東北地方第四紀研究グループ(1969)　東北地方における第四紀海水準変化, 日本の第四系, 地学団体研究会15.

雁澤好博・柳井清治・八幡正弘・溝田智俊(1994)　西南北海道-東北地方北部に広がる後期更新世の広域風成塵堆積物, 地質学雑誌100.

箕浦幸治・小菅正裕・柴　正敏・根本直樹・山口義伸(1998)　青森県の地質, 青森県.

鈴木隆介2000　建設技術者のための地形図読図入門 第3巻 段丘・丘陵・山地, 古今書院.

青森県史編さん自然部会(2001)　青森県史 自然編 地学, 青森県.

柴　正敏・前島秀人(2009)　千曳軽石層の帰属について, 青森地学54.

青森県教育委員会(1998)　外馬屋前田（１）遺跡, 青森県埋蔵文化財調査報告書242号

鰺ヶ沢町教育委員会(1999)　今須（３）遺跡　鰺ヶ沢町文化財シリーズ第14集

菊田　寛(2011)　豪雨を誘因としたスレーキングの早い泥岩の岩盤地すべり, 全国地質調査業協会連合会「技術フォーラム2011」京都.

杉橋浩一・加藤　彰(2014)　新第三紀層(泥岩・凝灰岩)の地すべり調査について, 全国地質調査業協会連合会「技術フォーラム2014」秋田.

青森県教育委員会(2015)　鳴戸（３）遺跡, 青森県埋蔵文化財調査報告書551号

第２節　遺跡周辺の歴史的環境

鰺ヶ沢町は青森県の西側に位置し、日本海に面した港町である。鰺ヶ沢湊は近世において津軽藩の港として重要な位置を占め、弘前と鰺ヶ沢港は西浜街道でつながっていた。西浜街道は秋田藩領から深浦・鰺ヶ沢を経由し弘前へ至る街道であり、中世頃には既に機能していたと考えられる[1)]。また、菅江真澄や松浦武四郎なども鰺ヶ沢町内を通り、その記録を残している。

本書において報告する３つの遺跡はいずれも鳴沢川に面した丘陵上に立地し、西浜街道が付近を通っていたと考えられる。金沢街道沢 (1) 遺跡が鰺ヶ沢町大字南浮田町字金沢街道沢に、新沢（１）・（２）遺跡が大字北浮田町字新沢に所在し、大字名の北浮田町と南浮田町は鳴沢川を挟んで南北に存在する。

「浮田」の地名は1731年（享保16年）に刊行された『津軽一統志』の文禄元年（1592年）の前田利家らによる津軽巡検の際の記述に「四百五十八石一斗　浮田村」とみられる[2)]。また、天文年間（1532年～1555年）の『津軽郡中名字』には、「浮太刀」と記述があり、南浮田町付近に比定させる考えがある[3)]。遺跡名とも関連する小字名については、明確な由来は不明であるが、次のような考え方も可能かもしれない。

金沢街道沢 (1) 遺跡：「金沢」金の沢で、製鉄に関連する地名の可能性がある。「街道」は遺跡の南側を通っていた西浜街道のことを示す可能性がある。

新沢（１）・（２）遺跡:「新沢」の小字名がいつ頃から使用されていたかは不明である。旧鳴沢村（1889～1955年）では北浮田村の字名について、保木原・北浮田・川尻がみられる[4]。いつの時代かに新たに沢を開拓し水田など造成した際につけられたのだろうか。なお、津軽郡中名字にみられる「浮太刀」の由来については、地域に伝わる以下のような伝説がある。

金敷村（現在の小屋敷近くの桂山付近に相当？）に有名な刀鍛冶がいた。刀鍛冶には美しい娘が２人いたが跡継ぎがないのが悩みであった。ある日、一人の若い男が刀鍛冶の弟子入りを懇願したが、尋常ならざる雰囲気を察したため、７日間で刀を十腰鍛えることができたならば入門を許すことにした。若者も七日の間作業場を覗かないように申し入れ、作業場へ入っていった。それから３日間ほど立ったが槌の音などが聞こえないことを不審がった刀鍛冶は約束を破りそっと作業場を覗いてみると、竜が口から火を吐きながら刀を作っている様子が見えた。このままいけば弟子入りを許すことになり、将来娘の婿として迎えなければならないが、竜を後継者にすることは不可能だと思い、できた十腰の刀のうち一腰をこっそり盗み鳴沢川に捨てた。７日間たった朝、若者は刀鍛冶の元に刀を持ってきて、弟子にしてくれるよう頼んだ。刀鍛冶は刀を手に取るとその出来映えに感心したが、約束に一腰足りないので弟子にはできないと伝えた。若者はそんなことはないと何度も数え直したがどう数えても九腰しかない。悔しがった若者は十腰無い、十腰無い（十腰内）と泣きながら去って行ったという（十腰内村の由来といわれている）。

鳴沢川に捨てられた刀は、川を日に三度上下に流れたため川の魚は二つに切れ、また片眼、片鱗の魚が増えたといわれている。またカッパは刀のため死に絶え、以来鳴沢川で水死する者はなくなったという。数年後刀鍛冶は望む弟子をとることができ、婿に迎えた。婿が竜の話を聞き、その打ちたる刀をみたところ、自分の兄の鬼人大夫だと知ったため、その刀を祭ったという（巌鬼山神社に奉納されている刀はその残りだといわれている）。後年水害があった際捨てられた太刀が川岸に浮かび上がったため、その付近を「浮太刀」というようになったという[5]。

上記伝説にも登場する鳴沢川は岩木山北側の大鳴沢（標高約1,000m付近）を源流とし、長平町・建石町・小屋敷町を流れ湯船町付近で湯舟川と合流し日本海へと流れる。鰺ヶ沢町内には、141箇所の遺跡が登録されており（2015年12月現在）、鳴沢川流域（湯舟川含む）にはそのうち２／３程度の88箇所の遺跡が登録されている。この付近では本書が該当する一般国道101号鰺ヶ沢道路建設事業の他、過去には国営岩木山麓開拓建設事業（1958～60年）、鰺ヶ沢バイパス建設（1978年）、津軽中部地区広域営農団地農道整備事業（1983～2000年）、県営中山間地域総合整備事業等（1996～1998年）に伴う埋蔵文化財の発掘調査が行われ、町内において考古学的成果が濃い地域でもある。

これまでは平安時代の製鉄遺跡が濃く分布することから「古代の製鉄コンビナート」などと呼ばれるなど、青森県のみならず北東北・北海道の歴史を考える上で重要な情報を提供してきた。製鉄に関連する地名や伝説が鳴沢川流域や岩木山北麓に多いのも無関係ではないと思われる[6]。また、古代だけではなく岩木山北麓では縄文～弥生時代の遺跡も数多く発見され、中世～近世の遺跡・史跡も豊富である。本書で扱う遺跡からも縄文時代早期～平安時代後半に至る長期間にわたる人々の痕跡が発見されている。個々の発掘調査成果については表１の関連報告書等を御参照いただきたい。　（茅野）

1)『津軽郡中名字』には岩木山北麓から西浜地方にかけて独狐・高杉・鬼沢・遠寺内・浮太刀・鰺ヶ

沢・赤石・立里・西船関・風合・追良瀬・驫木浜・飛浪途・吹浦・金子河などの地名が見られ、西浜街道の原形を忍ばせる部分がある。

2) 鰺ヶ沢町史編纂委員会編 1984 『鰺ヶ沢町史第1巻』より

3) 西津軽郡史編集委員会 1975 『西津軽郡史』名著出版

4) 前掲3参照

5) 前掲3の記述を筆者が要約した。

6) 湯舟・小屋敷(金屋敷)・浮田・杢沢(猛房)・とぎ水などが可能性がある。前掲3等より。

表1の参考文献

青森県教育委員会 1990『杢沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第130集

青森県教育委員会 1995『湯舟(1)・(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第175集

青森県教育委員会 1998『平野遺跡・今須(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第231集

青森県教育委員会 1998『外馬屋前田(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第242集

青森県教育委員会 2015『鳴戸(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第551集

鰺ヶ沢町教育委員会 1979『鳴戸遺跡』

鰺ヶ沢町教育委員会 1999『今須(3)遺跡』鰺ヶ沢町文化財シリーズ第14集

鰺ヶ沢町教育委員会 2002『鰺ヶ沢町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書10　平野(2)遺跡』

岩木山刊行会 1968『岩木山 岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』

鰺ヶ沢町・深浦町城館遺跡調査会 2007 『津軽西海岸の城館遺跡』平成19年度青森県考古学会鰺ヶ沢大会記念資料

青森県考古学会 2007『津軽・西海岸の考古学』衛生19年度青森県考古学会手記大会資料集

遺跡番号	遺　跡　名	時　代	文　献　等
321002	芭蕉塚遺跡	縄文(中・後)、平安、中世	
321003	浮橋貝塚	縄文(前)、平安	岩木山1968
321004	浮橋遺跡	縄文(前・中・後)、平安、中世	
321005	七尾遺跡	縄文(前・後)、平安	
321014	杢沢遺跡	縄文(早・前・中・後・晩)、平安、近世	県教委1990
321015	上野高地	縄文(前・中・後)、平安、近世	鰺ヶ沢町教委調査
321016	館遺跡	縄文(後)、平安、中世	
321025	外馬屋遺跡	縄文(前・中・後)、平安、中世	岩木山1968
321026	若山遺跡	縄文(後)	岩木山1968
321032	米町遺跡	縄文(後)、平安、中世	
321033	三ツ沢遺跡	縄文(後)、平安、中世	
321035	今須(1)遺跡	縄文(早・前・後・晩)、弥生、平安	
321036	今須(2)遺跡	縄文(前・後)、平安	
321037	今須(3)遺跡	縄文(中・後)、奈良、平安、中世	鰺ヶ沢町教委1999
321038	今須(4)遺跡	縄文(前・後)、平安、中世	県教委1998
321039	平野(1)遺跡	縄文(後・晩)、弥生	県教委1998
321040	新沢(1)遺跡	縄文(前・中・後・晩)、奈良、平安	**本報告**
321041	新沢(2)遺跡	縄文(晩)、弥生、平安	**本報告**
321042	外馬屋前田(1)遺跡	縄文(前・中・後)、弥生、平安、近世	県教委1998
321043	外馬屋前田(2)遺跡	縄文(中・後)、平安	
321044	北浮田遺跡	縄文(中)	
321047	湯舟(1)遺跡	縄文(前・中・後)、弥生	県教委1995
321053	湯舟(3)遺跡	縄文(後)	
321054	下清水崎(1)遺跡	縄文(前・後)、弥生	
321055	下清水崎(2)遺跡	縄文(前・後)	
321084	中村館	中世	鰺ヶ沢町・深浦町教委2007等で紹介
321086	戸波城跡	平安、中世	鰺ヶ沢町・深浦町教委2007等で紹介
321087	鉢巻館	中世	鰺ヶ沢町・深浦町教委2007等で紹介
321093	鳴戸(1)遺跡	縄文(早・前・後)、平安	
321102	金沢街道沢(1)遺跡	平安	**本報告**
321103	金沢街道沢(2)遺跡	縄文、平安	
321104	金沢街道沢(3)遺跡	平安	
321106	東禿(1)遺跡	縄文	
321107	東禿(2)遺跡	縄文(前・中・後・晩)、平安	鰺ヶ沢町教委調査 青森県考古学会2007等で紹介
321108	東禿(3)遺跡	縄文(後・晩)	
321109	東禿館跡	中世	鰺ヶ沢町・深浦町教委2007等で紹介
321110	鳴戸(2)遺跡	平安	
321111	鳴戸(3)遺跡	平安	鰺ヶ沢町教委1979 県教委2015
321112	平野(2)遺跡	縄文	鰺ヶ沢町教委2002
321115	小夜遺跡	縄文(後)、平安	
321119	金沢街道沢(4)遺跡	平安	

表1　周辺の遺跡一覧表

第３節　出土遺物の分類

３つの遺跡からは縄文時代早期～平安時代の遺物が出土し、本書で報告する遺物の分類は以下のように行った。詳細は各遺跡の各項目に明示する

１、　土器

第Ⅰ群土器　縄文時代早期の土器
- ａ類：早期初頭～前葉の無紋土器
- ｂ類：早期前葉の押型文土器
- ｃ類：早期前葉の貝殻復縁圧痕文土器

第Ⅱ群土器　縄文時代前期の土器
- ａ類：円筒下層ａ～ｂ式土器
- ｂ類：円筒下層ｃ～ｄ式土器

第Ⅲ群土器　縄文時代中期の土器
- ａ類：円筒上層式土器
- ｂ類：榎林式土器
- ｃ類：大木 10 式平行期の土器

第Ⅳ群土器　縄文時代後期の土器
- ａ類：十腰内Ⅰ式土器

第Ⅴ群土器　縄文時代晩期の土器
- ａ類：大洞Ｂ式土器
- ｂ類：大洞ＢＣ～Ｃ１式土器

第Ⅵ群土器　弥生時代の土器
- ａ類：砂沢式土器
- ｂ類：遠賀川系土器
- ｃ類：ａ類に後続する土器
- ｄ類：中期後半～後期初頭の土器
- ｅ類：後期の土器

第Ⅶ群土器　続縄文土器
- ａ類：後北Ｃ２Ｄ式土器

第Ⅸ群土器　奈良時代の土器
- ａ類：坏形土器
- ｂ類：甕形土器
- ｃ類：壺形土器
- ｄ類：その他

第Ⅹ群土器　平安時代の土器
- ａ類：坏
- ｂ類：甕
- ｃ類：鍋
- ｄ類：製塩土器
- ｅ類：土製支脚

第ＸⅠ群土器　須恵器
- ａ類：坏
- ｂ類：壺
- ｃ類：甕

２、　石器

Ａ群：石鏃
Ｂ群：石槍
Ｃ群：石匙
Ｄ群：石錐
Ｅ群：石篦
Ｆ群：削器
Ｇ群：掻器
Ｈ群：二次加工剥片
Ｉ群：微細剥離のある剥片
Ｊ群：石核
Ｋ群：剥片
Ｌ群：磨製石斧
Ｍ群：凹み石
Ｎ群：敲き石
Ｏ群：擦り石
Ｐ群：石錘
Ｑ群：石皿
Ｒ群：台石
Ｓ群：砥石

３、　土製品

土偶
鐸形土製品
円盤状土製品
羽口
土製紡錘車
土錘
土玉
ミニチュア土器

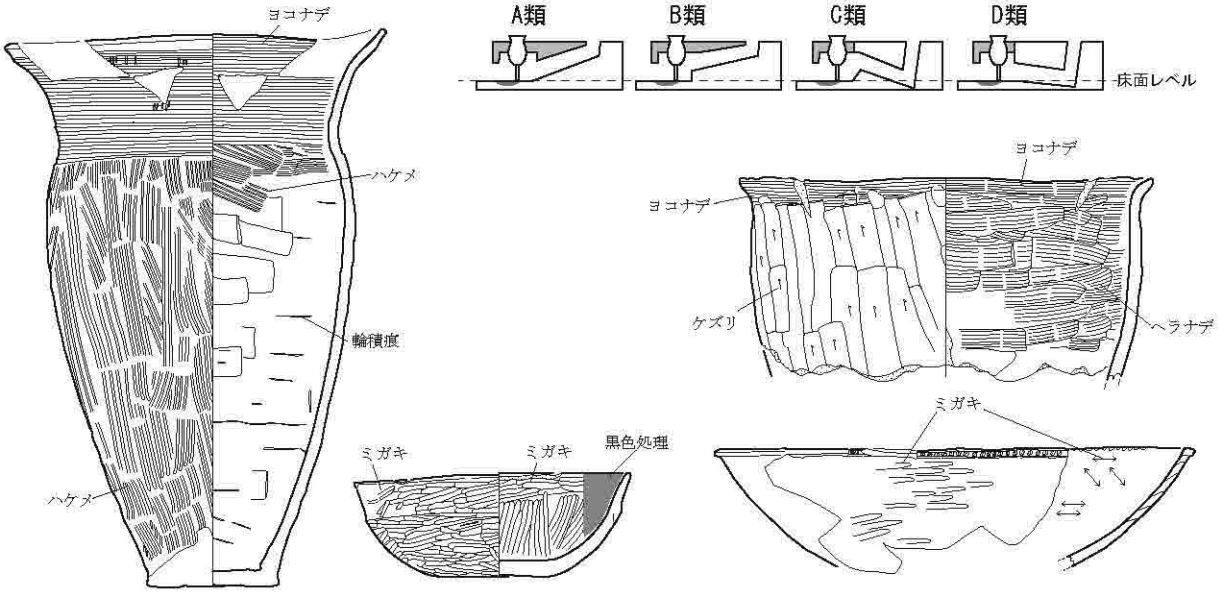
４、　石製品

三角形石製品
有孔石製品
搬入礫

５、　鉄製品

鉄鏃
鉄刀
刀装具
刀子
筒状鉄製品
馬具
金槌
その他（鉄滓）

土器実測図における表現の凡例とカマド煙道分類図



第３章挿図目次

図10　金沢街道沢(1)遺跡遺構配置図　21･22
図11　第１号竪穴住居跡(1)　24
図12　第１号竪穴住居跡(2)及び出土遺物　25
図13　第２・３a・３b・３c号竪穴住居跡　26
図14　第２号竪穴住居跡及び出土遺物(1)　27
図15　第２号竪穴住居跡出土遺物(2)　28
図16　第２・３a号竪穴住居跡出土遺物　29
図17　第３b号竪穴住居跡及び出土遺物　30
図18　第４号竪穴住居跡(1)　32
図19　第４号竪穴住居跡(2)　33
図20　第４号竪穴住居跡出土遺物　34
図21　第５号竪穴住居跡及び出土遺物　35
図22　第６号竪穴住居跡及び出土遺物　36
図23　第７号竪穴住居跡及び出土遺物　37
図24　第８号竪穴住居跡(1)　39
図25　第８号竪穴住居跡(2)　40
図26　第８号竪穴住居跡(3)及び出土遺物(1)　41
図27　第８号竪穴住居跡出土遺物(2)　42
図28　第８号竪穴住居跡出土遺物(3)　43
図29　第９号竪穴住居跡　45
図30　第９号竪穴住居跡出土遺物　46
図31　第10号竪穴住居跡　47
図32　第10号竪穴住居跡出土遺物　48
図33　第11号竪穴住居跡及び出土遺物　49
図34　第12号竪穴住居跡(1)　50
図35　第12号竪穴住居跡(2)　51
図36　第12号竪穴住居跡出土遺物　52
図37　第13号竪穴住居跡(1)　53
図38　第13竪穴住居跡(2)及び出土遺物　54
図39　第14・19・20号竪穴住居跡　55
図40　第14号竪穴住居跡及び出土遺物(1)　56
図41　第14号竪穴住居跡出土遺物(2)　57
図42　第19号竪穴住居跡出土遺物　58
図43　第20号竪穴住居跡及び出土遺物　59
図44　第15号竪穴住居跡(1)　60
図45　第15号竪穴住居跡(2)　61
図46　第15号竪穴住居跡(3)及び出土遺物(1)　62
図47　第15号竪穴住居跡出土遺物(2)　63
図48　第16号竪穴住居跡　64
図49　第16号竪穴住居跡出土遺物　65
図50　第17号竪穴住居跡及び出土遺物　67
図51　第18号竪穴住居跡　68
図52　第18号竪穴住居跡出土遺物　69
図53　第１・２・３・４・５・６・８号土坑及び出土遺物　71
図54　第９･10･12号土坑及び出土遺物　72
図55　第13･14･15･16・17･18号土坑及び出土遺物　73
図56　第１号溝跡(1)　75
図57　第１号溝跡(2)　76
図58　第１号溝跡出土遺物　77
図59　第２・３・４号溝跡　78
図60　第５･10号溝跡　79
図61　第１・２・３号掘立柱建物跡　80
図62　第４・５号掘立柱建物跡及びピット出土遺物　81
図63　第１・２・３・４号溝状土坑　82
図64　遺構外出土遺物(1)　84
図65　遺構外出土遺物(2)　85
図66　遺構外出土遺物(3)　86
図67　遺構外出土遺物(4)　87
図68　新沢(1)遺跡遺構配置図　88
図69　新沢(1)遺跡の基本土層　89
図70　第１号竪穴住居跡及び出土遺物　90
図71　第２号竪穴住居跡(1)　92
図72　第２号竪穴住居跡(2)　93
図73　第２号竪穴住居跡出土遺物(1)　94
図74　第２号竪穴住居跡出土遺物(2)　95
図75　第３号竪穴住居跡及び出土遺物　97
図76　第４号竪穴住居跡　98
図77　第４号竪穴住居跡出土遺物(1)　99
図78　第４号竪穴住居跡出土遺物(2)　100
図79　第５号竪穴住居跡　101
図80　第５号竪穴住居跡出土遺物　102
図81　第６号竪穴住居跡及び出土遺物　103
図82　第７号竪穴住居跡(SD08)　103
図83　第１・２・３・５・６・７・８号土坑及び出土遺物　106
図84　第９･10･12･13･14号土坑　107
図85　第16･17･18･19･20･22･25号土坑及び出土遺物　108
図86　第１号土器埋設遺構　109
図87　第１・２・３号溝状土坑　110
図88　第１・２号掘立柱建物跡及び出土遺物　111
図89　第２・３・９号溝跡　112
図90　遺構外出土遺物(1)　114
図91　遺構外出土遺物(2)　115
図92　遺構外出土遺物(3)　116
図93　遺構外出土遺物(4)　117
図94　遺構外出土遺物(5)　118
図95　遺構外出土遺物(6)　119
図96　新沢(2)遺跡遺構配置図　121･122
図97　新沢(2)遺跡の基本土層　123
図98　第１号竪穴住居跡(1)　125
図99　第１号竪穴住居跡(2)　126
図100　第１号竪穴住居跡出土遺物(1)　127
図101　第１号竪穴住居跡出土遺物(2)　128
図102　第２号竪穴住居跡及び出土遺物　129
図103　第３号竪穴住居跡及び出土遺物　130
図104　第４号竪穴住居跡　131
図105　第４号竪穴住居跡出土遺物　132
図106　第５号竪穴住居跡及び出土遺物　133
図107　第６号竪穴住居跡及び出土遺物　134
図108　第１号屋外炉(SN14)及び出土遺物　135
図109　第２号屋外炉(SN19)及び出土遺物　135
図110　第３号屋外炉(SN20)及び出土遺物　136
図111　第１～７・９号焼土遺構　137
図112　第８号焼土遺構出土遺物　138
図113　第10～13･15･16･18号焼土遺構及び出土遺物　140
図114　第２～４号土坑及び出土遺物　142
図115　第７・８号土坑及び出土遺物　143
図116　第９･10･12～14号土坑及び出土遺物　144
図117　第15･16･18号土坑及び出土遺物　145
図118　第19～22号土坑及び出土遺物　146
図119　第21号土坑出土遺物　147
図120　第23･24･26号土坑及び出土遺物　148
図121　第25･27･28号土坑及び出土遺物　149
図122　第29～31号土坑及び出土遺物　150
図123　第32～35号土坑及び出土遺物　151
図124　第35号土坑出土遺物(2)　152
図125　第36～40号土坑及び出土遺物　153
図126　第41～44号土坑　154
図127　土器埋設遺構及び出土遺物　155
図128　第１・２・３・４・５・６号溝状土坑　156
図129　遺構外出土遺物(1)　159
図130　遺構外出土遺物(2)　160
図131　遺構外出土遺物(3)　161
図132　遺構外出土遺物(4)　162
図133　遺構外出土遺物(5)　163
図134　遺構外出土遺物(6)　164
図135　遺構外出土遺物(7)　165
図136　遺構外出土遺物(8)　166
図137　遺構外出土遺物(9)　167
図138　遺構外出土遺物(10)　168

図10　金沢街道沢（１）遺跡遺構配置図

第３章　検出遺構と出土遺物

第１節　金沢街道沢（１）遺跡

金沢街道沢（1）遺跡では検出された遺構は古代の竪穴住居跡20棟、土坑16基、溝跡６条、掘立柱建物跡５棟、溝状土坑４基、ピット40基を検出し遺物は40箱出土した。

調査区は標高32～34ｍやや起伏のある段丘上に設定されている。調査区の東側と西側には谷が存在する。調査以前には畑地として利用されていたため、削平されている部分があり、調査区南西部～南部にかけては長芋作付けに伴い遺構が破壊されている。土層については第２章で述べているが、調査区内の表土直下で南北方向に亀裂痕が見られ、遺構にもその痕跡が見られる。

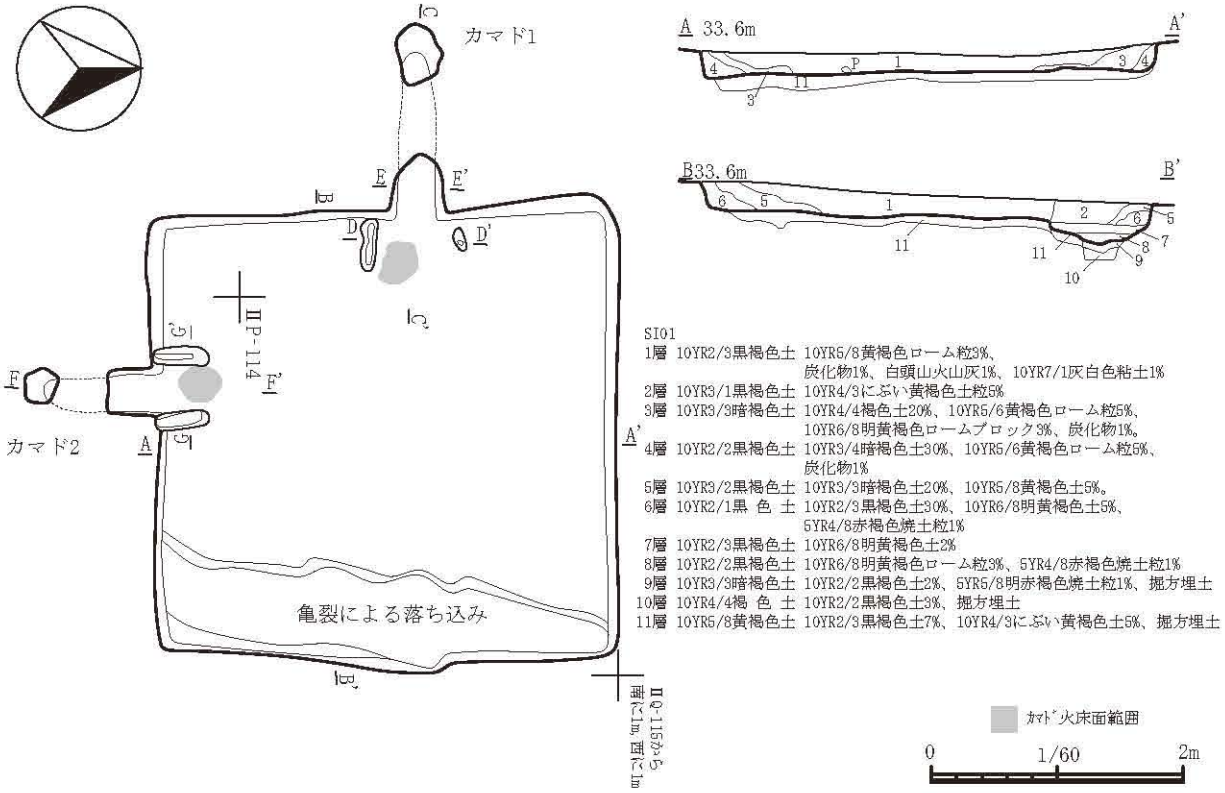
１、竪穴住居跡（SI）及び出土遺物

第１号竪穴住居跡（SI01）（図11～12）

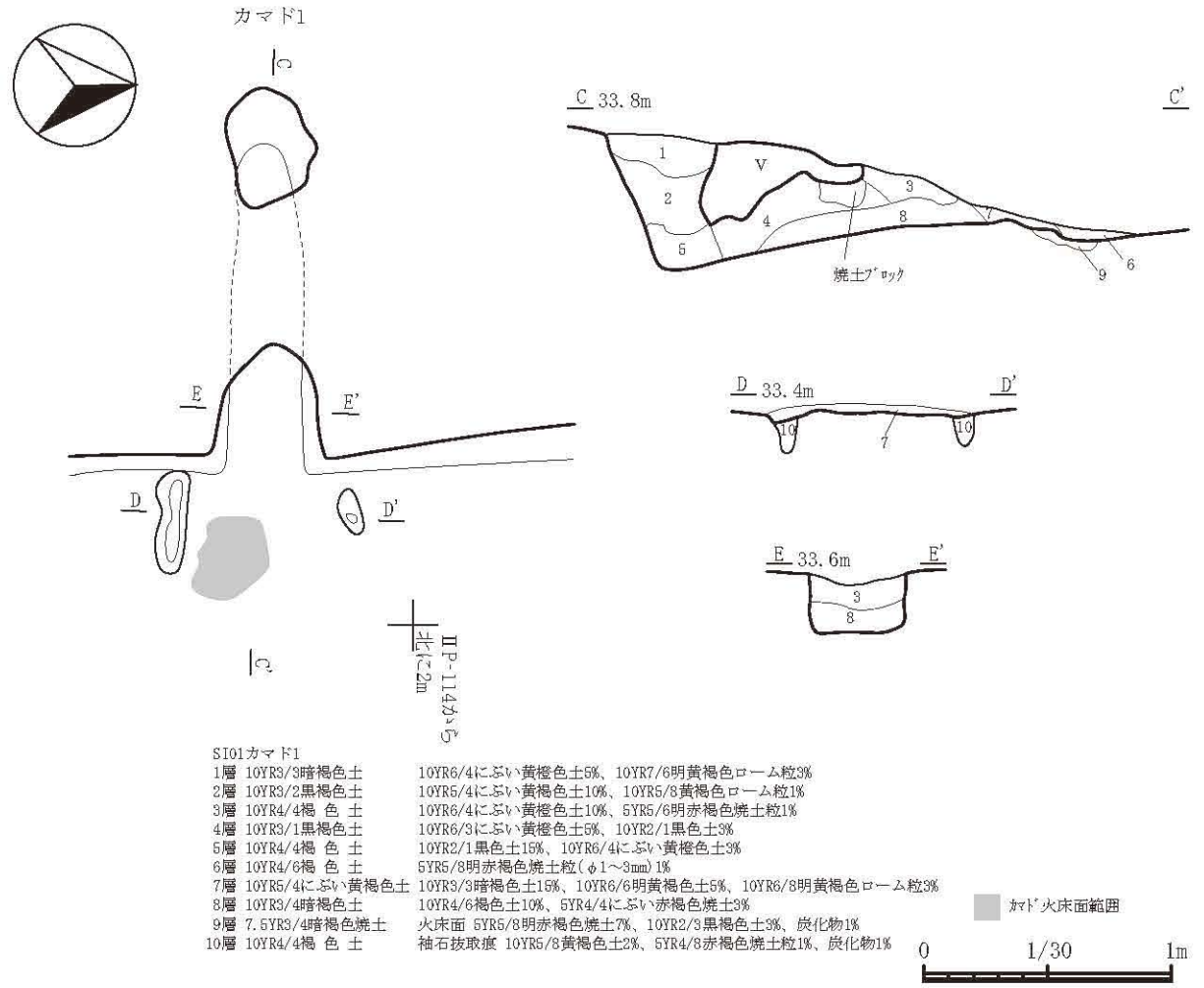
位置・確認　Ⅱ０・ⅡP-113･114グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　なし。**規模・平面形**　規模は長軸・短軸3.7ｍの方形を呈する。カマドは２基検出した。それぞれN－89°－Wと N－179°－Wに主軸を持つ。**堆積土**　11層に分層できた。黒褐色土が主体である。１層には白頭山－苫小牧火山灰が確認できた。住居跡東側には亀裂による落ち込みが生じている。**壁面・床面**　壁面はほぼ垂直に立ち上がる。確認面までの深さは最大53㎝を測る。床面は掘方埋土によってほぼ平坦に整えられている。**壁周溝**　なし。**カマド**　西壁と南壁に検出した。西壁に検出したカマド１は壁辺の右寄りに構築している。煙道の構造は地下式煙道Ｃ類である。堆積土はカマド部分で10層に分層できた。９層が火床面である。袖は残っておらず、火床面の両脇から袖の掘方と思われる浅い溝状のピットを検出した。南壁に検出したカマド２は壁辺の右寄りに構築している。煙道の構造は地下式煙道Ｃ類である。堆積土はカマド部分で11層に分層できた。10層が火床面である。火床面の両脇から袖の掘方と思われる浅い溝状のピットを検出した。**柱穴・土坑**　なし。**出土遺物**　堆積土から内面黒色の土師器坏が出土している（図12－１）。**小結**　白頭山－苫小牧火山灰降下以前の平安時代に構築された竪穴住居跡と思われる。

第２号竪穴住居跡（SI02）（図13～16）

位置・確認　Ⅱ0･ⅡP －111･112グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　第３a・３b号竪穴住居跡と重複して本遺構が新しい。**規模・平面形**　規模は長軸5.5・短軸5.2ｍの長方形を呈する。カマドは１基検出した。N－76°－Eに主軸を持つ。**堆積土**　11層に分層できた。黒褐色土が主体である。**壁面・床面**　壁面はほぼ垂直に立ち上がる。確認面までの深さは最大44㎝を測る。床面は平坦である。**壁周溝**　東壁から南壁に検出した。**カマド**　北東壁に検出した。壁辺の中央から左寄りに構築している。煙道の構造は半地下式煙道Ｂ類である。堆積土はカマド部分で３層に分層できた。３層が火床面である。袖は灰白色粘土で構築されている。**柱穴・土坑**　壁際、壁周溝から14基の柱穴を検出した。**出土遺物**　カマド、堆積土から土師器、土製支脚、紡錘車、砥石が出土している。図14－１・２は非ロクロ整形の坏で輪積痕が明瞭に残る。図15－１～３は土師器甕で外面ケズリ、内面ヘラナデが施される。図15－４～６は土製支脚でカマド周辺からの出土である。図15－９は鋳のようなものが付着している。**小結**　本遺構は出土遺物や柱穴の配置から平安時代（10世紀後半から11



SI01
1層 10YR2/3黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒3%、炭化物1%、白頭山火山灰1%、10YR7/1灰白色粘土1%
2層 10YR3/1黒褐色土 10YR4/3にぶい黄褐色土粒5%
3層 10YR3/3暗褐色土 10YR4/4褐色土20%、10YR5/6黄褐色ローム粒5%、10YR6/8明黄褐色ロームブロック3%、炭化物1%。
4層 10YR2/2黒褐色土 10YR3/4暗褐色土30%、10YR5/6黄褐色ローム粒5%、炭化物1%
5層 10YR3/2黒褐色土 10YR3/3暗褐色土20%、10YR5/8黄褐色土5%。
6層 10YR2/1黒 色 土 10YR2/3黒褐色土30%、10YR6/8明黄褐色土5%、5YR4/8赤褐色焼土粒1%
7層 10YR2/3黒褐色土 10YR6/8明黄褐色土2%
8層 10YR2/2黒褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒3%、5YR4/8赤褐色焼土粒1%
9層 10YR3/3暗褐色土 10YR2/2黒褐色土2%、5YR5/8明赤褐色焼土粒1%、掘方埋土
10層 10YR4/4褐 色 土 10YR2/2黒褐色土3%、掘方埋土
11層 10YR5/8黄褐色土 10YR2/3黒褐色土7%、10YR4/3にぶい黄褐色土5%、掘方埋土



SI01カマド1
1層 10YR3/3暗褐色土 10YR6/4にぶい黄橙色土5%、10YR7/6明黄褐色ローム粒3%
2層 10YR3/2黒褐色土 10YR5/4にぶい黄褐色土10%、10YR5/8黄褐色ローム粒1%
3層 10YR4/4褐 色 土 10YR6/4にぶい黄橙色土10%、5YR5/6明赤褐色焼土粒1%
4層 10YR3/1黒褐色土 10YR6/3にぶい黄橙色土5%、10YR2/1黒色土3%
5層 10YR4/4褐 色 土 10YR2/1黒色土15%、10YR6/4にぶい黄橙色土3%
6層 10YR4/6褐 色 土 5YR5/8明赤褐色焼土粒(φ1～3mm)1%
7層 10YR5/4にぶい黄褐色土 10YR3/3暗褐色土15%、10YR6/6明黄褐色土5%、10YR6/8明黄褐色ローム粒3%
8層 10YR3/4暗褐色土 10YR4/6褐色土10%、5YR4/4にぶい赤褐色焼土3%
9層 7.5YR3/4暗褐色焼土 火床面 5YR5/8明赤褐色焼土7%、10YR2/3黒褐色土3%、炭化物1%
10層 10YR4/4褐 色 土 抽石抜取痕 10YR5/8黄褐色土2%、5YR4/8赤褐色焼土粒1%、炭化物1%

図 11　第 1 号竪穴住居跡（1）

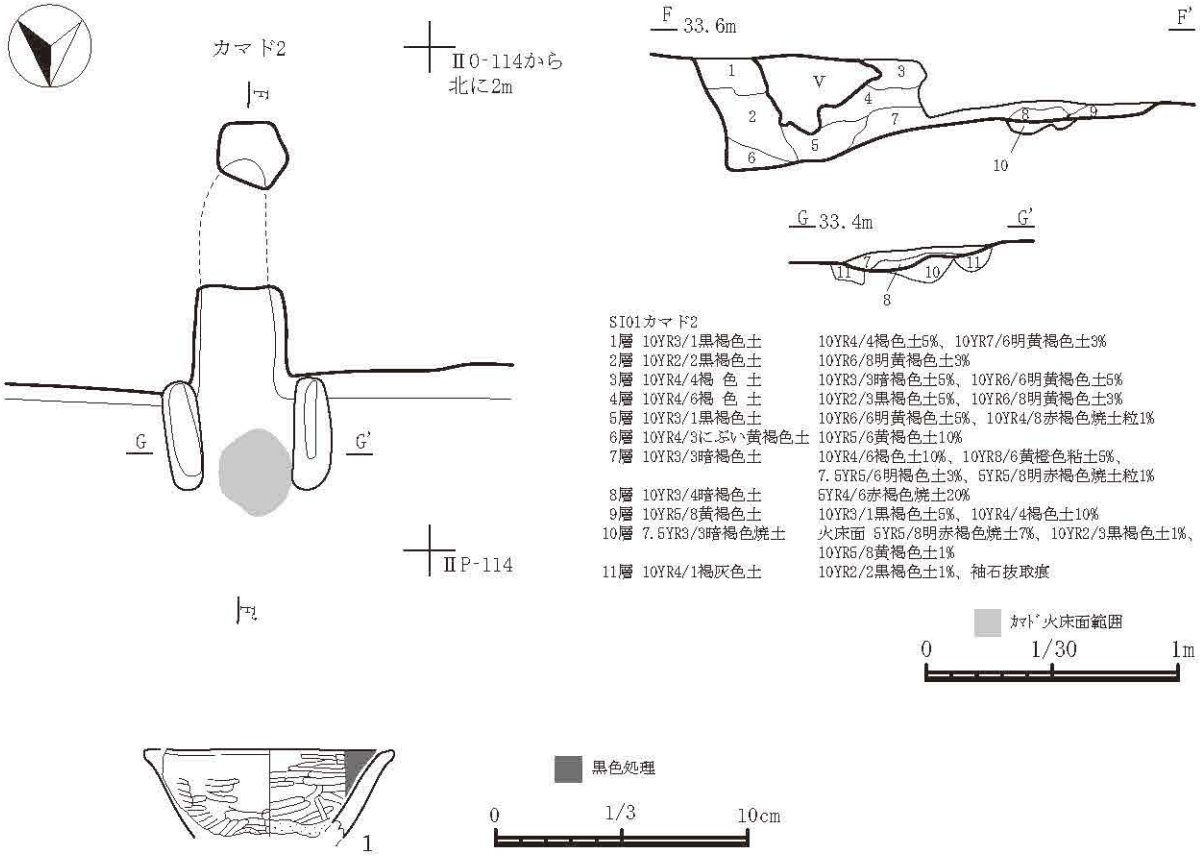


図 12　第１号竪穴住居跡（2）及び出土遺物

世紀代）に構築された竪穴住居跡と思われる。

第３a 号竪穴住居跡（SI03a）（図 13・16）

位置・確認　ⅡN～ⅡP －110～112 グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　第２号竪穴住居跡と重複して本遺構が古い。**規模・平面形**　規模は長軸 7.8 m・短軸 7.1 mの正方形を呈する。カマドは第２号竪穴住居跡に壊されているものと思われ検出できなかった。**堆積土**　14 層に分層できた。黒褐色土が主体である。住居跡西側には亀裂による落ち込みが生じている。**壁面・床面**　壁面はほぼ垂直に立ち上がる。確認面までの深さは最大 58 cmを測る。床面は平坦である。**壁周溝**　南西壁を除く壁で検出した。**カマド**　なし。**柱穴・土坑**　柱穴は 13 基検出した。住居四壁と壁周溝から検出した柱穴で構成される配置と思われる。**出土遺物**　堆積土から土師器が出土している。図 16－３は非ロクロ整形の坏である。図 16－４～７は土師器甕で外面ケズリ、内面ヘラナデが施されている。出土した炭化種実の同定を行いクワ属、マタタビ属、ニワトコとの結果を得た（第４章第３節参照）。**小結**　本遺構は出土遺物から平安時代（10 世紀後半以降）に構築された竪穴住居跡と思われる。

第３b 号竪穴住居跡（SI03）（図 13・17）

位置・確認　Ⅱ０～ⅡP －110 グリッドに位置する。第３a 号竪穴住居跡調査中に確認した。**重複関係**　第２号竪穴住居跡、第３c 号竪穴住居跡第と重複して第２号竪穴住居跡より古く、第３c 号竪

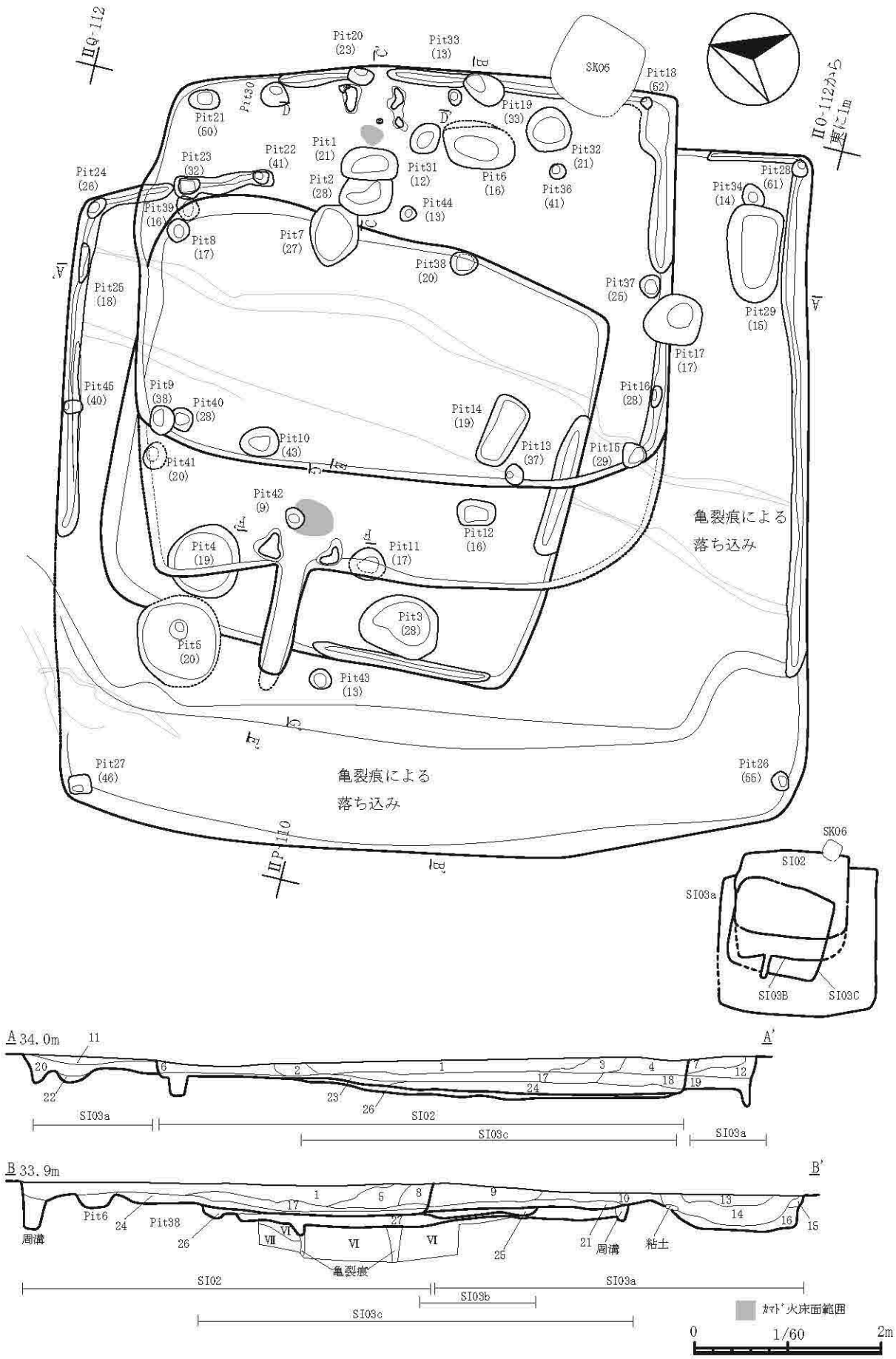


図13　第2・3a・3b・3c号第1号竪穴住居跡

SI02
1層 10YR3/1黒褐色土　10YR4/6褐色ローム粒(φ1～7mm)5%、5YR4/6赤褐色焼土粒(φ1～5mm)1%、5YR6/6橙色土(φ20mm)1%
2層 10YR4/3にぶい黄褐色土 10YR4/6褐色ローム粒(φ1～5mm)5%
3層 10YR3/3暗褐色土　10YR4/3にぶい黄褐色土3%、10YR6/8明黄褐色ローム粒(φ3～15mm)7%
4層 10YR2/3黒褐色土　10YR7/6明黄褐色ローム粒(φ1～7mm)3%
5層 10YR3/3暗褐色土　10YR4/4褐色土20%、10YR5/8黄褐色土10%、10YR6/8明黄褐色ローム粒(φ1～25mm)3%
6層 10YR3/4暗褐色土　10YR4/4褐色土20%、10YR6/6明黄褐色ローム粒(φ1～10mm)1%
8層 10YR6/6明黄褐色土　10YR3/3暗褐色土30%、10YR7/4にぶい黄橙粘土(φ11mm)3%、10YR7/6明黄褐色ローム粒(φ1～2mm)1%
17層 10YR2/3黒褐色土　10YR3/3暗褐色土20%、10YR5/8黄褐色土7%、10YR4/8赤色焼土1%
18層 10YR5/8黄褐色土　10YR3/2黒褐色土7%
23層 10YR3/2黒褐色土　10YR3/4暗褐色土7%
24層 10YR3/4暗褐色土　10YR5/8黄褐色土20%、炭化物(φ3mm)1%
SI03a
7層 10YR2/3黒褐色土　10YR2/2黒褐色土20%、10YR5/8黄褐色土3%
9層 10YR4/2灰黄褐色土　10YR6/8明黄褐色ローム粒(φ1～8mm)3%、5YR6/6橙色焼土粒(φ3～6mm)1%
10層 10YR3/4暗褐色土　10YR5/6黄褐色土5%、5YR4/6赤褐色焼土粒(φ5mm)1%、炭化物(φ3～5mm)1%
11層 10YR3/3暗褐色土　10YR5/8黄褐色土5%、10YR7/4にぶい黄橙粘土2%、5YR5/6明赤褐色焼土(φ1～5mm)1%
12層 10YR2/2黒褐色土　10YR2/3黒褐色土20%、10YR5/8黄褐色土1%
13層 10YR2/3黒褐色土　10YR6/8明黄褐色ローム粒(φ1～3mm)2%
14層 10YR3/3暗褐色土　10YR6/8明黄褐色土7%
15層 10YR3/2黒褐色土　10YR6/8明黄褐色ローム粒(φ1～3mm)3%
16層 10YR3/4暗褐色土　10YR6/8明黄褐色土10%
19層 10YR5/6黄褐色土　10YR3/2黒褐色土3%
20層 10YR3/1黒褐色土　10YR5/8黄褐色土20%
21層 10YR3/2黒褐色土　10YR5/8黄褐色土5%、炭化物(φ1～10mm)3%
22層 10YR3/3暗褐色土　10YR5/8黄褐色土5%、5YR4/8赤褐色焼土粒(φ1～3mm)1%、炭化物(φ1～3mm)
23層 10YR3/4暗褐色土　10YR3/2黒褐色土5%
SI03b
25層 10YR5/8黄褐色土　10YR2/3黒褐色土3%
SI03c
26層 10YR3/3暗褐色土　10YR2/3黒褐色土3%
27層 10YR5/8黄褐色土　10YR3/4暗褐色土3%

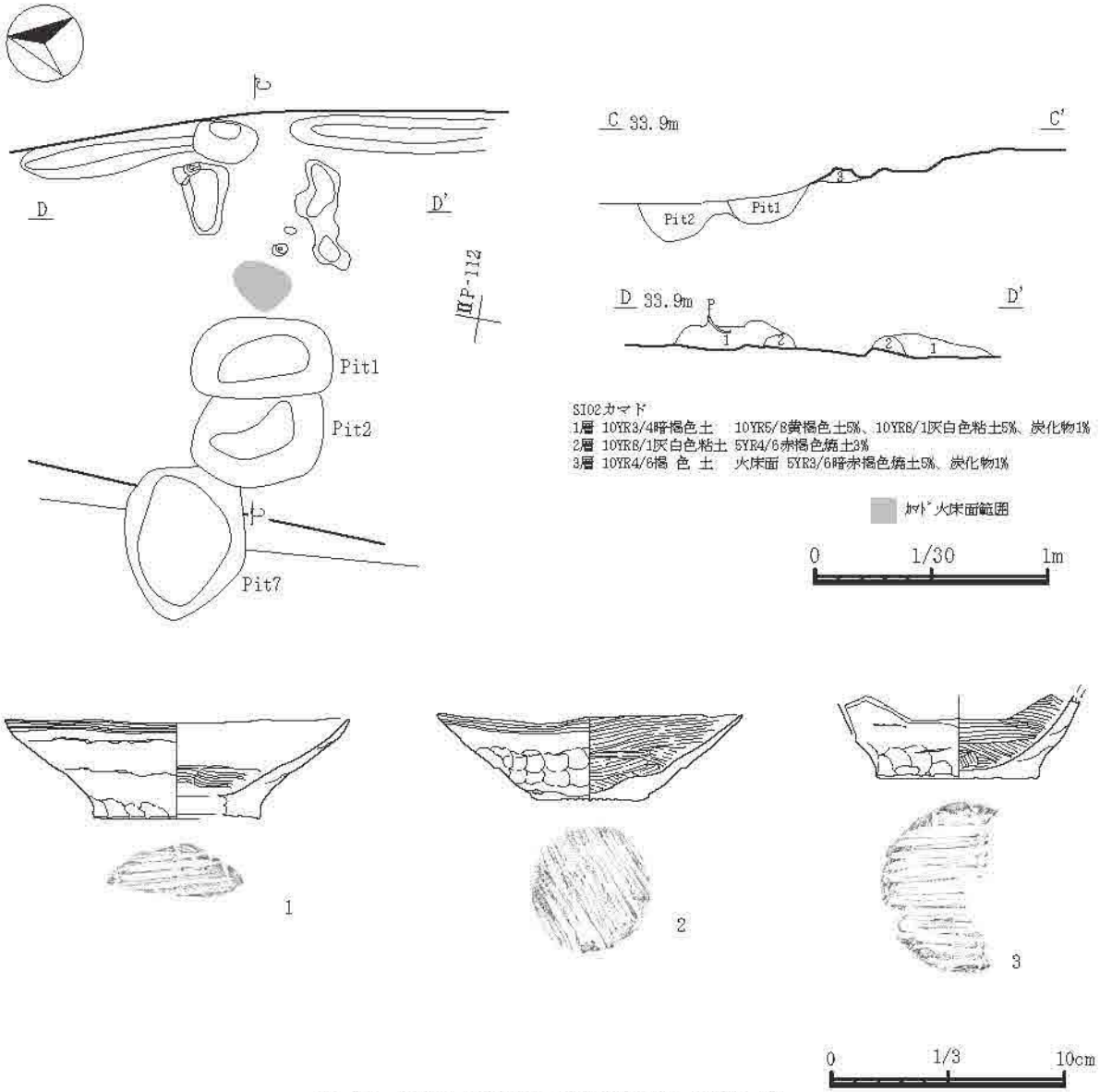


図14　第２号竪穴住居跡及び出土遺物（1）

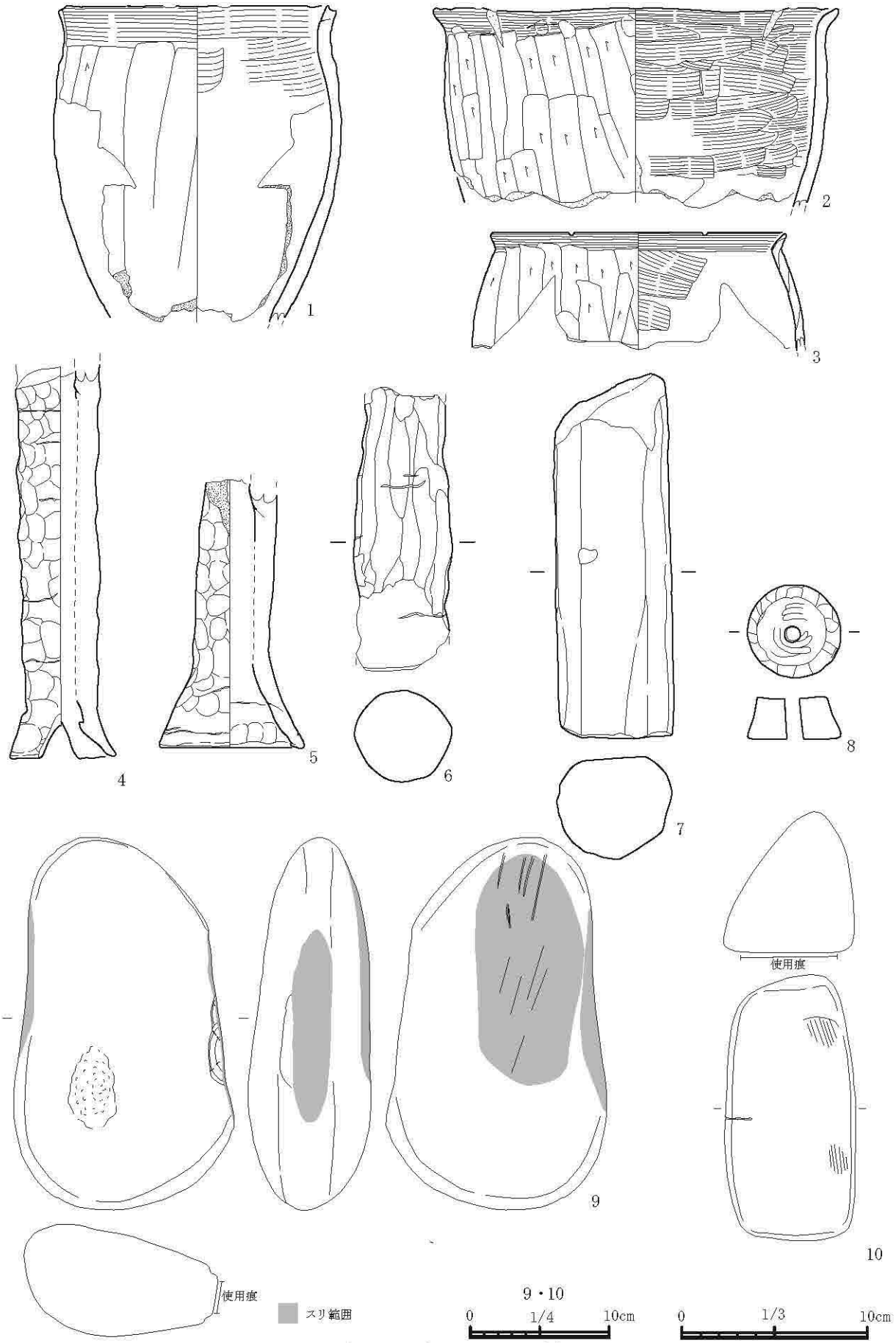


図 15　第 2 号竪穴住居跡出土遺物（2）

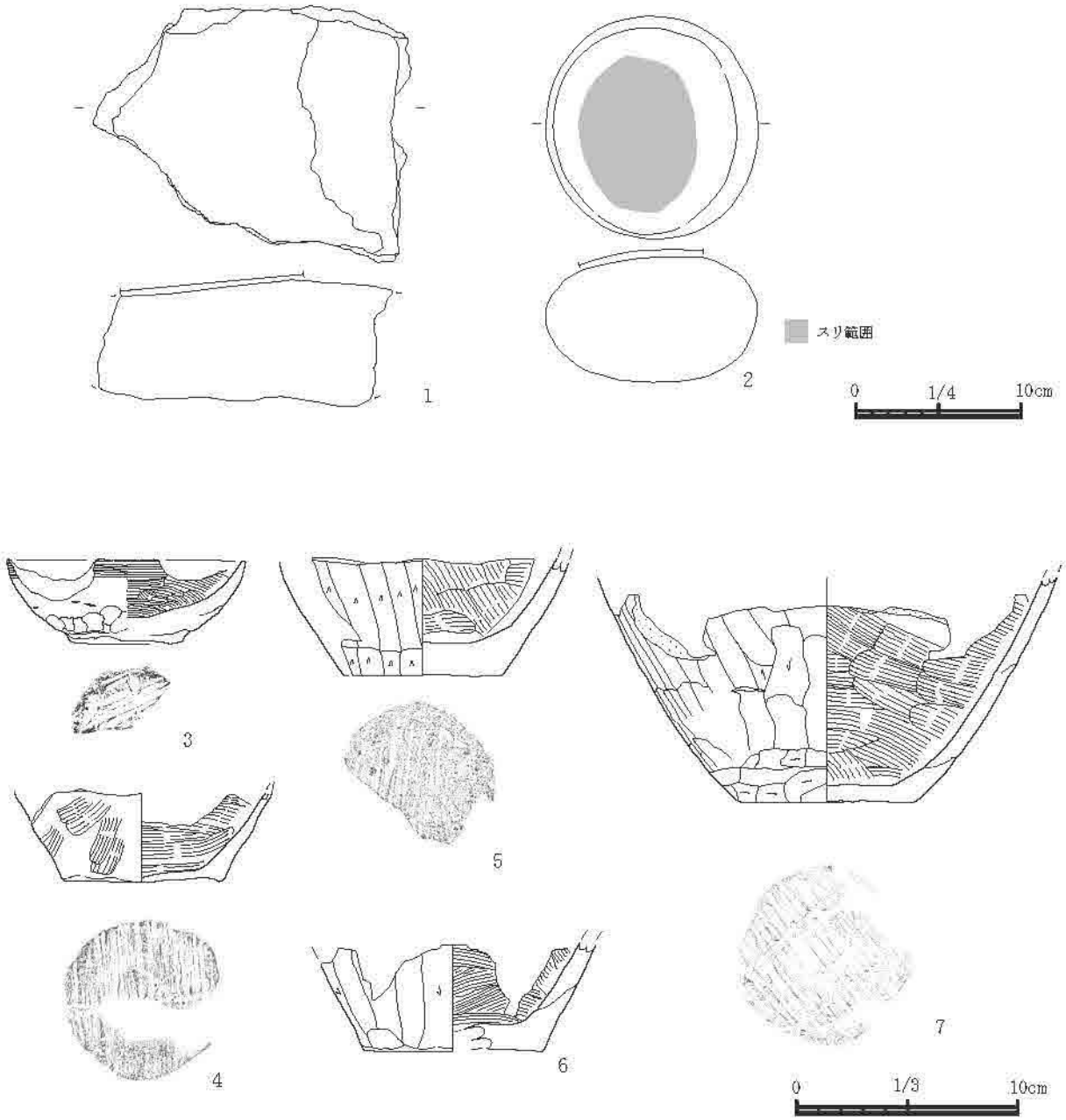
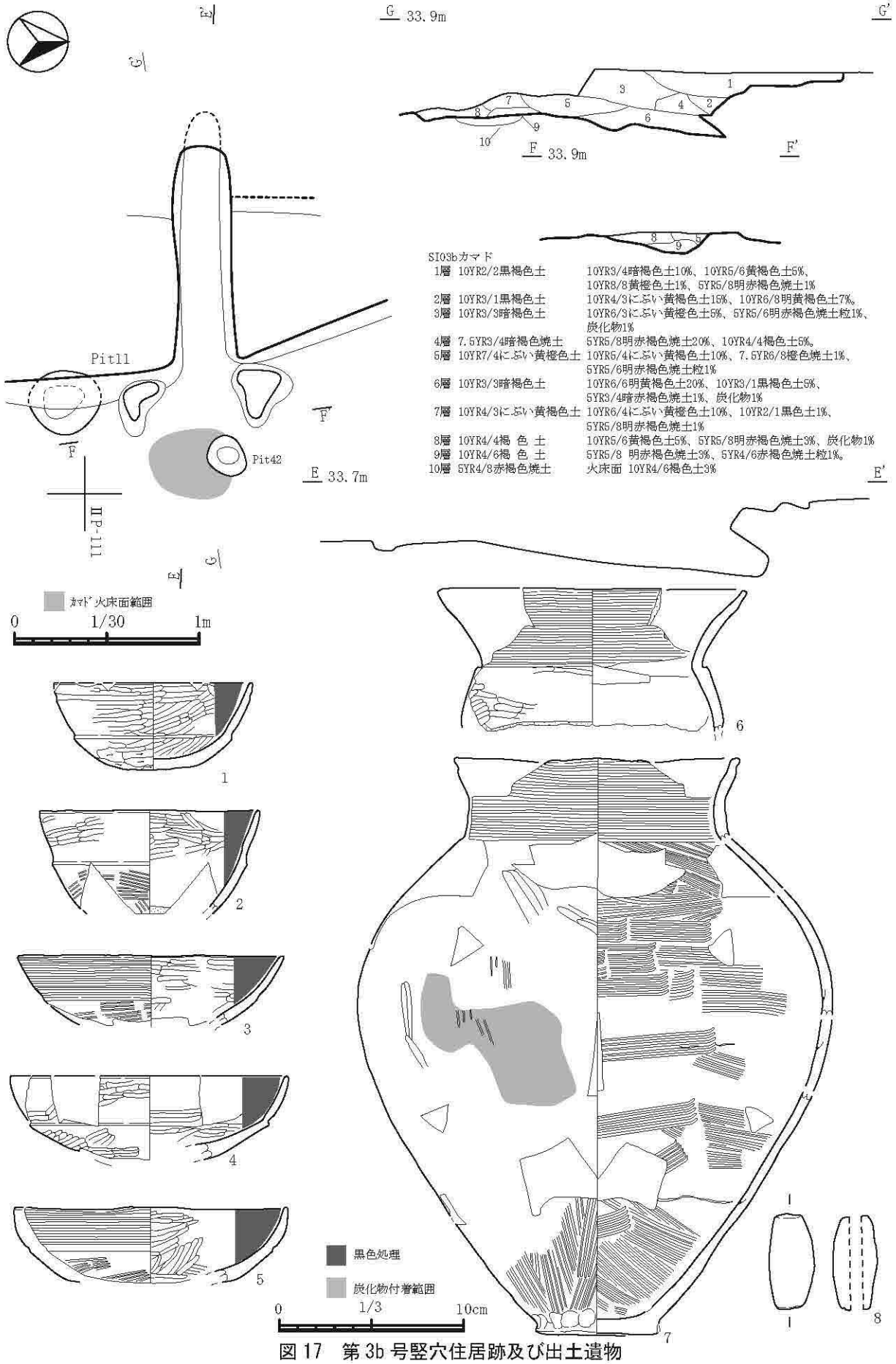


図 16　第 2・3a 号竪穴住居跡出土遺物

穴住居跡より新しい。**規模・平面形**　北西壁周辺のみの検出のため規模・平面形は不明である。カマドは１基検出した。N－89°－Wに主軸を持つ。**堆積土**　１層に分層できた。黒褐色土が主体である。壁面・床面　壁面は緩やかに立ち上がる。床面は平坦である。**壁周溝**　なし。**カマド**　北西壁に検出した。壁辺の中央からやや右寄りに位置している。煙道部の構造は地下式煙道Ｄ類である。堆積土はカマド部分で 10 層に分層できた。10 層が火床面である。**柱穴・土坑**　なし。**出土遺物**　堆積土から土師器、土錘が出土している。図 17- １～５は内面黒色の土師器坏で１～４は体部に段、５は沈線を有する。７は球胴甕で外面に刷毛目調整の後、ミガキは施される。内面は刷毛目調整である。第４号竪穴住居跡出土の土器と接合した。**小結**　本遺構は出土遺物等から奈良時代に構築された竪穴住居跡である。



SI03bカマド

1層	10YR2/2黒褐色土	10YR3/4暗褐色土10%、10YR5/6黄褐色土5%、10YR8/8黄橙色土1%、5YR5/8明赤褐色焼土1%
2層	10YR3/1黒褐色土	10YR4/3にぶい黄褐色土15%、10YR6/8明黄褐色土7%。
3層	10YR3/3暗褐色土	10YR6/3にぶい黄橙色土5%、5YR5/6明赤褐色焼土粒1%、炭化物1%
4層	7.5YR3/4暗褐色焼土	5YR5/8明赤褐色焼土20%、10YR4/4褐色土5%。
5層	10YR7/4にぶい黄橙色土	10YR5/4にぶい黄褐色土10%、7.5YR6/8橙色焼土1%、5YR5/6明赤褐色焼土粒1%
6層	10YR3/3暗褐色土	10YR6/6明黄褐色土20%、10YR3/1黒褐色土5%、5YR3/4暗赤褐色焼土1%、炭化物1%
7層	10YR4/3にぶい黄褐色土	10YR6/4にぶい黄橙色土10%、10YR2/1黒色土1%、5YR5/8明赤褐色焼土1%
8層	10YR4/4褐 色 土	10YR5/6黄褐色土5%、5YR5/8明赤褐色焼土3%、炭化物1%
9層	10YR4/6褐 色 土	5YR5/8 明赤褐色焼土3%、5YR4/6赤褐色焼土粒1%。
10層	5YR4/8赤褐色焼土	火床面 10YR4/6褐色土3%

図 17　第 3b 号竪穴住居跡及び出土遺物

第３c 号竪穴住居跡（SI03c）（図 13）

位置・確認　Ⅱ０～ⅡＰ -110 グリッドに位置する。第３a 号竪穴住居跡調査中に確認した。**重複関係**　第２・３ａ・３b 号竪穴住居跡と重複して本遺構が古い。**規模・平面形**　規模は長軸 4.8ｍ・短軸 4.4ｍの正方形を呈する。**カマド**　なし。**堆積土**　１層に分層できた。黒褐色土が主体である。**壁面・床面**　壁面は緩やかに立ち上がる。確認面までの深さは最大 20 ㎝を測る。床面は平坦である。**壁周溝**　なし。**カマド**　なし。**出土遺物**　なし。**小結**　本遺構は重複関係から奈良時代に構築された竪穴住居跡と思われる。

第４号竪穴住居跡（SI04）（図 18 ～ 20）

位置・確認　ⅡＬ・～ⅡＭ -111 ～ 113 グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　調査段階では１軒の住居として捉えていたが、整理段階で柱穴配置から平安時代・奈良時代の２時期の存在に気づき、平安時代の住居跡を４a 号、奈良時代の住居跡を第４b 号とした。堆積土については第１・２層（住居跡堆積土）、６・７・８・９・10・11・12 層（カマド堆積土）を４a 号の堆積土とした。第３・４・５・13 層を第４b 号の堆積土とした。

第４a 号竪穴住居跡（SI04a）

規模・平面形　調査区域外に延びていくため、規模・平面形共に不明である。カマドは１基検出した。Ｎ－ 84°－Ｅに主軸を持つ。**堆積土**　第１・２層が住居跡の堆積土と思われる。黒褐色土を主体とする。壁面・床面　確認面までの深さは最大 35 ㎝を測る。床は概ね平坦に造られている。**壁周溝**　なし。**カマド**　北東壁に構築されている。煙道の構造は半地下式煙道Ｂ類である。堆積土は６～12 層の６層である。11 層が火床面の被熱痕である。袖は礫を芯材にして構築されている。**柱穴・土坑**　６基のピットが帰属するものと思われる。**出土遺物**　堆積土から土師器甕・須恵器甕、砥石、鉄製品が出土している。須恵器甕の内面には薄く黒色範囲が確認でき、転用硯として使用された可能性がある。**小結**　本遺構は柱穴の配置から平安時代（10 世紀後半から 11 世紀代）に構築された竪穴住居跡と思われる。

第４b 号竪穴住居跡（SI04b）

規模・平面形　調査区域外に延びていくため、規模・平面形共に不明である。カマドは１基検出した。Ｎ－ 84°－Ｗに主軸を持つ。**堆積土**　第３～５層が住居跡の堆積土と思われる。黒褐色土を主体とする。**壁面・床面**　確認面までの深さは最大 35 ㎝を測る。床は概ね平坦に造られている。**壁周溝**　北壁・東壁・西壁の一部に構築されている。**カマド**　北西壁に構築されている。煙道の構造は地下式煙道Ｄ類である。堆積土は 12 層である。９層が火床面である。袖は礫を芯材にして構築されている。柱穴・土坑　柱穴６基が帰属するものと思われる。**出土遺物**　なし。**小結**　本遺構はカマドの主軸方向から奈良時代に構築された竪穴住居跡と思われる。

第５号竪穴住居跡（SI05）（図 21）

位置・確認　ⅡN-115 グリッドに位置している。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　なし。**規模・平面形**

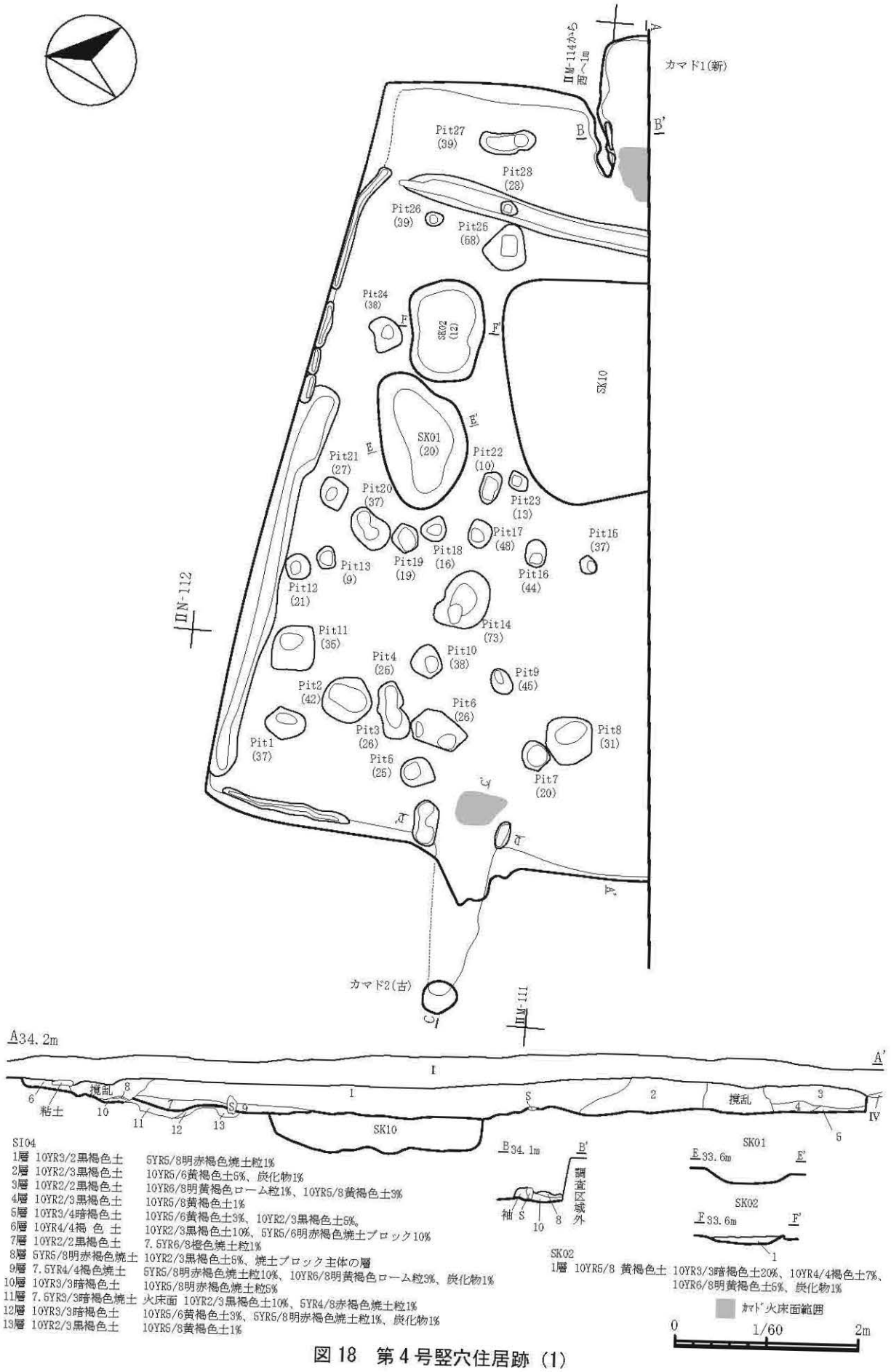


図 18　第 4 号竪穴住居跡（1）

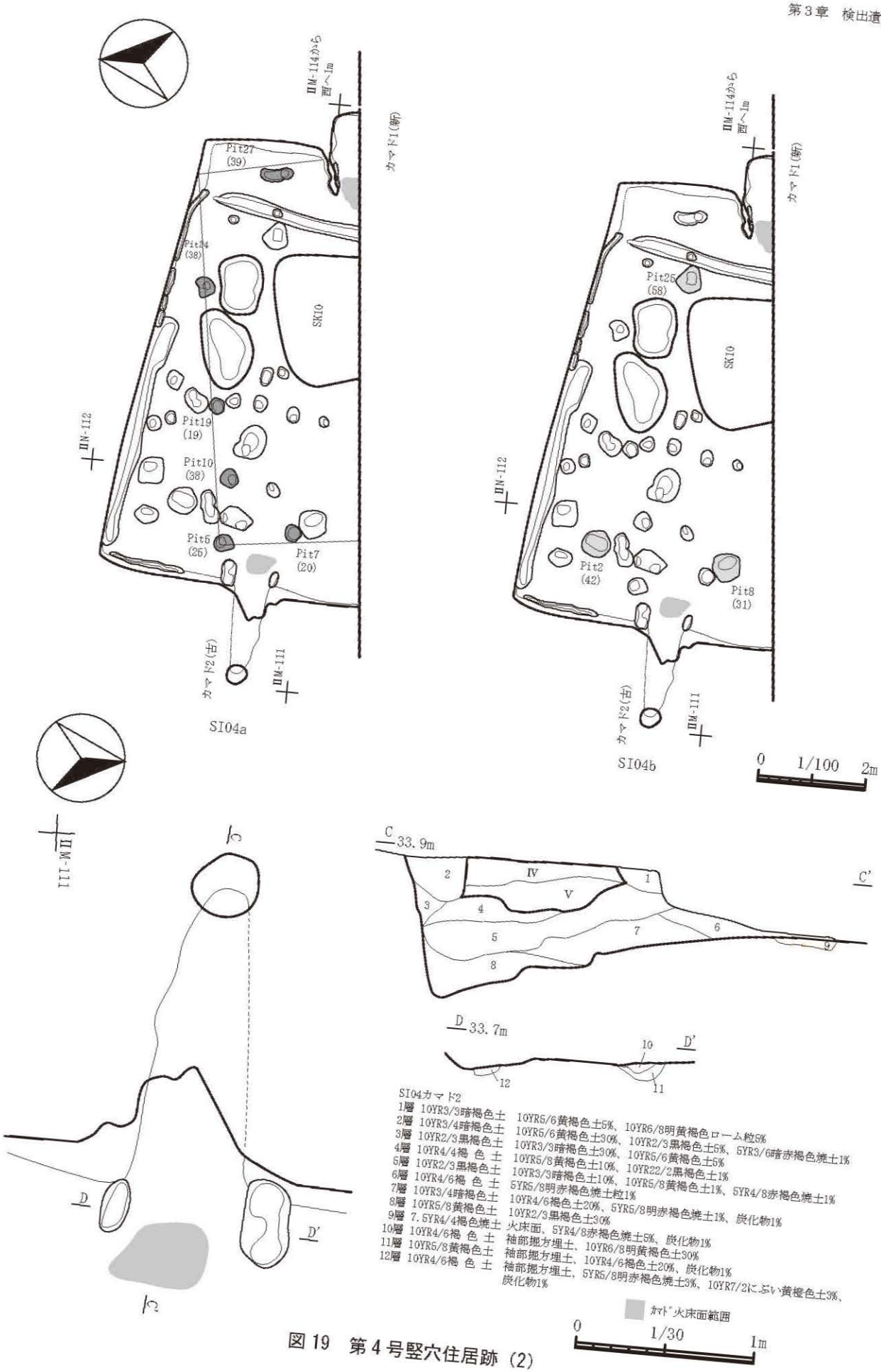


図 19　第４号竪穴住居跡（2）

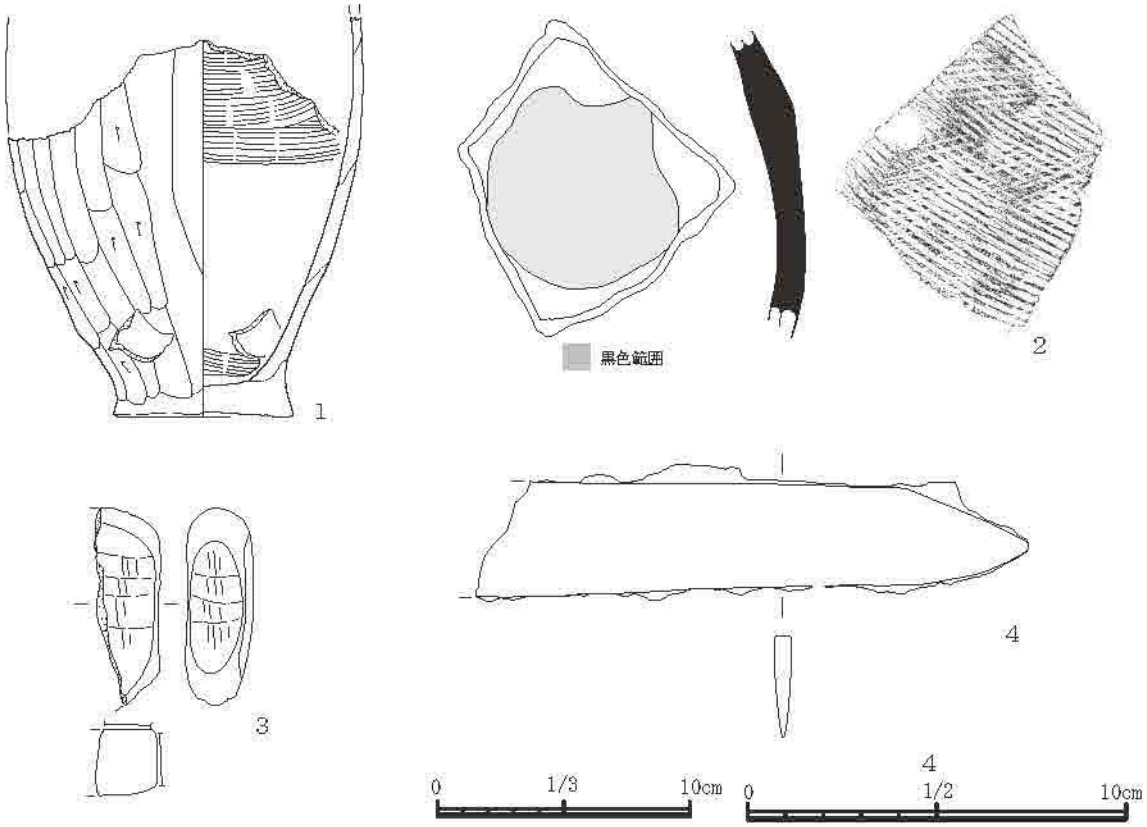


図 20　第 4 号竪穴住居跡出土遺物

長軸 2.7 m×短軸 2.3 mの隅丸方形を呈する。カマドは 1 基検出した。N－ 78°－Wに主軸を持つ。**堆積土**　3 層に分層できた。堆積土は褐色土を主体とする。**壁面・床面**　壁は緩やかに立ち上がる。確認面までの深さは最大 26 cmを測る。床面は掘方埋土によってほぼ平坦に整えられている。**壁周溝**　なし。**カマド**　北西壁のほぼ中央に構築されており、煙道部の構造は地下式煙道C類である。堆積土は 6 層に分層できた。6 層が火床面である。**柱穴・土坑**　柱穴は 1 基検出した。土坑は 1 基検出した。深さは 44 cmである。**出土遺物**　カマド堆積土及び住居跡堆積土から土師器、須恵器が出土している。図 21－ 1 は内面内黒の土師器坏である。図 21－ 2 は土師器甕の口縁部で口縁部寄りに横走沈線が施される。3・4 は土師器甕の胴部で外面は刷毛目調整、5 はミガキが施される。図 21－ 6・7 は須恵器坏である。**小結**　出土土器から奈良時代に構築された竪穴住居跡である。

第 6 号竪穴住居跡 (SI06)（図 22）

位置・確認　Ⅱ L-106・107 グリッドに位置している。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　なし。**規模・平面形**　耕作により規模・平面形とも不明である。**堆積土**　6 層に分層できた。堆積土は黒褐色土を主体とする。2 層に白頭山－苫小牧火山灰が確認できた。**壁面・床面**　壁は削平され残存していない。確認面までの深さは最大 20 cmを測る。床面は概ね平坦に造られている。**壁周溝**　なし。**カマド**　なし。柱穴・土坑　土坑を 1 基検出した。深さは 44 cmである。**出土遺物**　堆積土及び土坑内堆積土から土師器が出土している。図 22－ 1 は土坑内から出土した土師器甕である。**小結**　本遺構は白頭山－苫小牧火山灰降下以前の平安時代に構築された竪穴住居跡と思われる。

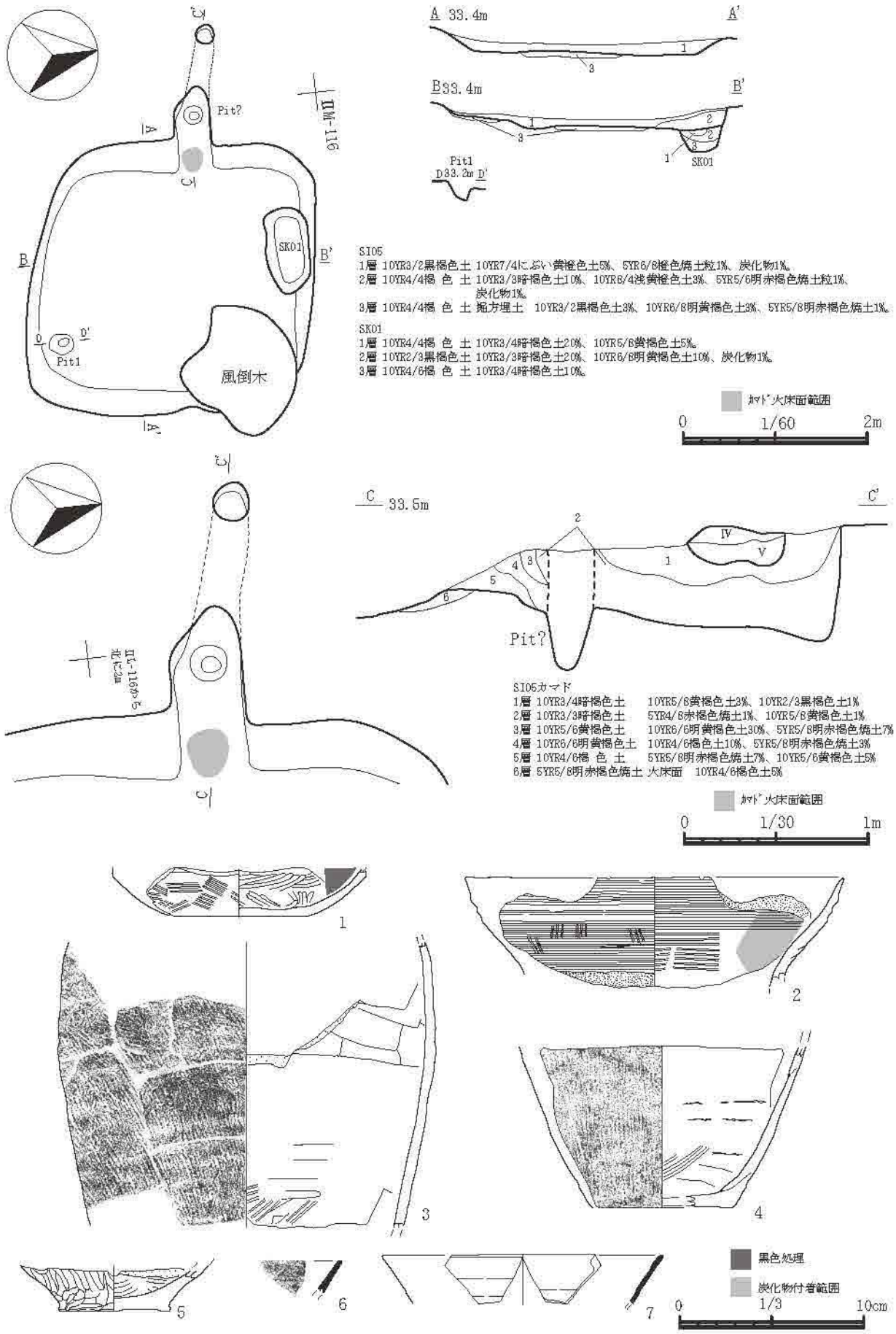
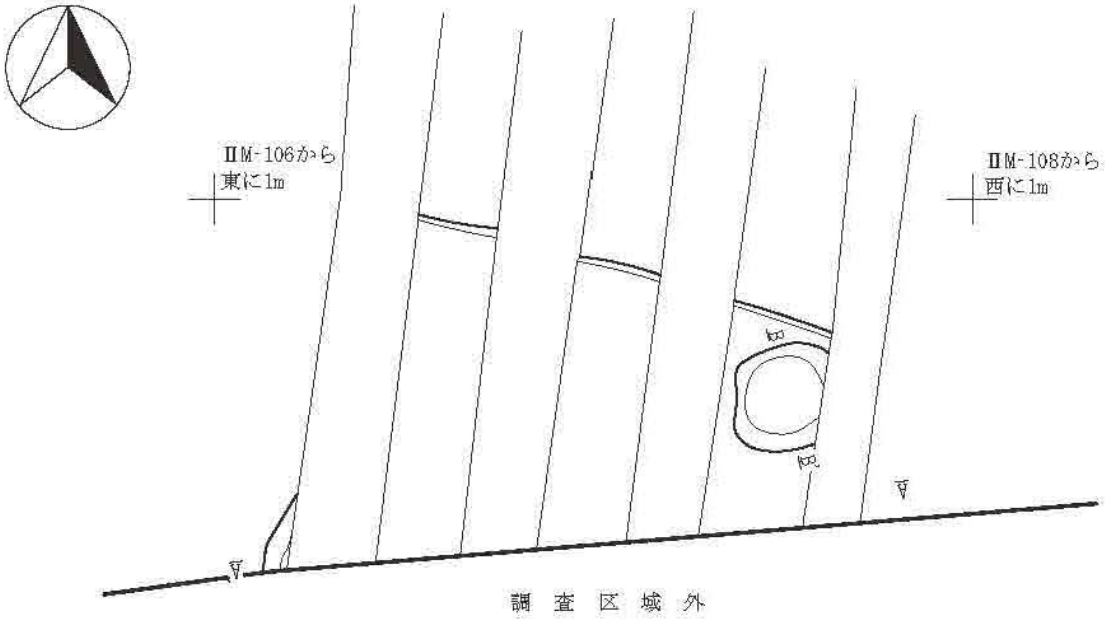
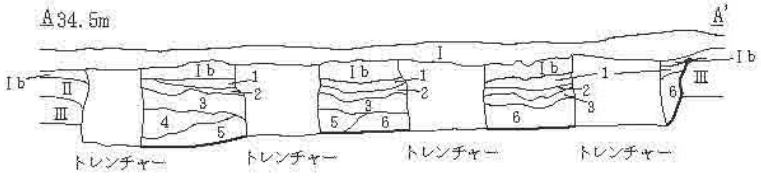
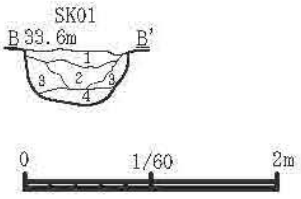


図 21　第 5 号竪穴住居跡及び出土遺物







SI06
1層 10YR2/3黒褐色土 10YR3/3暗褐色土10%、10YR6/6明黄褐色ローム粒1%
2層 10YR2/2黒褐色土 10YR3/3暗褐色土20%、白頭山火山灰5%
3層 10YR3/1黒褐色土 10YR2/1黒色土10%、10YR5/6黄褐色ローム粒1%
4層 10YR2/2黒褐色土 10YR5/6黄褐色土5%、炭化物1%
5層 10YR4/4褐 色 土 10YR2/2黒褐色土20%、10YR7/6明黄褐色土10%
6層 10YR2/1黒 色 土 10YR3/4暗褐色土15%、10YR6/6明黄褐色土5%、10YR5/8黄褐色土3%

SI06SK01
1層 10YR3/4暗褐色土 10YR2/2黒褐色土5%、10YR4/6褐色土10%、5YR4/8赤褐色焼土3%、炭化物1%
2層 10YR4/4褐 色 土 10YR6/8明黄褐色土5%、5YR3/6暗赤褐色焼土粒3%、10YR5/2灰黄褐色粘土3%、炭化物1%
3層 10YR2/3黒褐色土 10YR5/4にぶい黄褐色粘土5%、10YR6/8明黄褐色土5%、5YR5/8明黄褐色焼土粒3%、5YR6/6橙色焼土ブロック1%
4層 10YR3/3暗褐色土 10YR5/6黄褐色土15%、10YR4/2灰黄褐色粘土5%、10YR7/6黄橙色土3%、5YR5/8明赤褐色焼土粒3%、5YR6/8橙色焼土ブロック1%

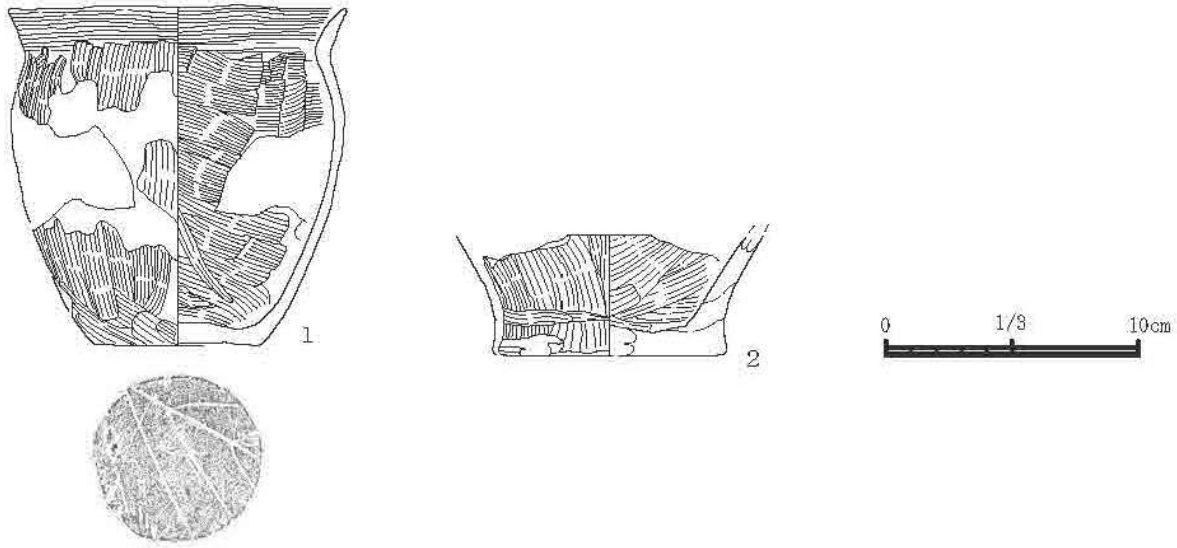


図 22　第６号竪穴住居跡及び出土遺物

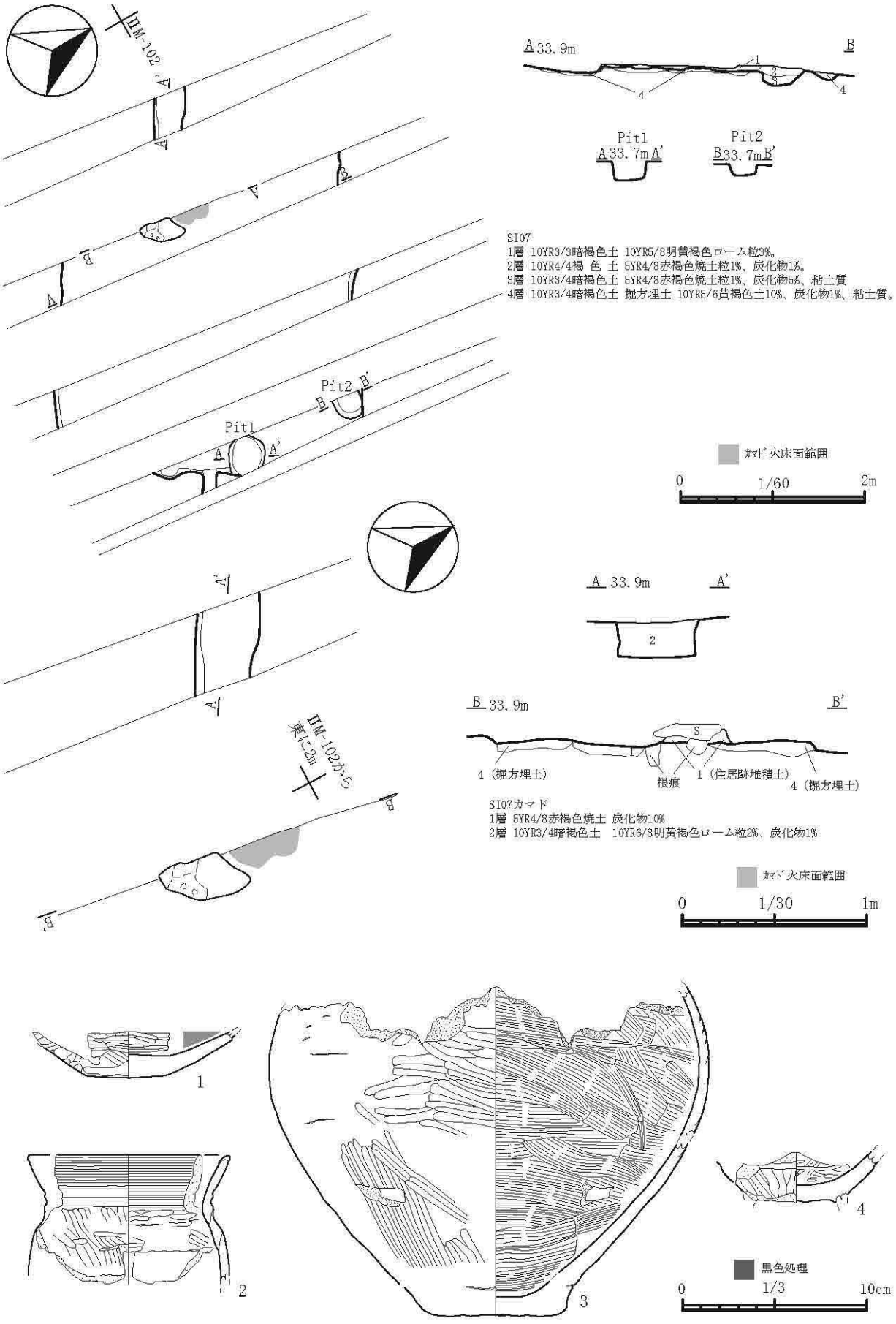


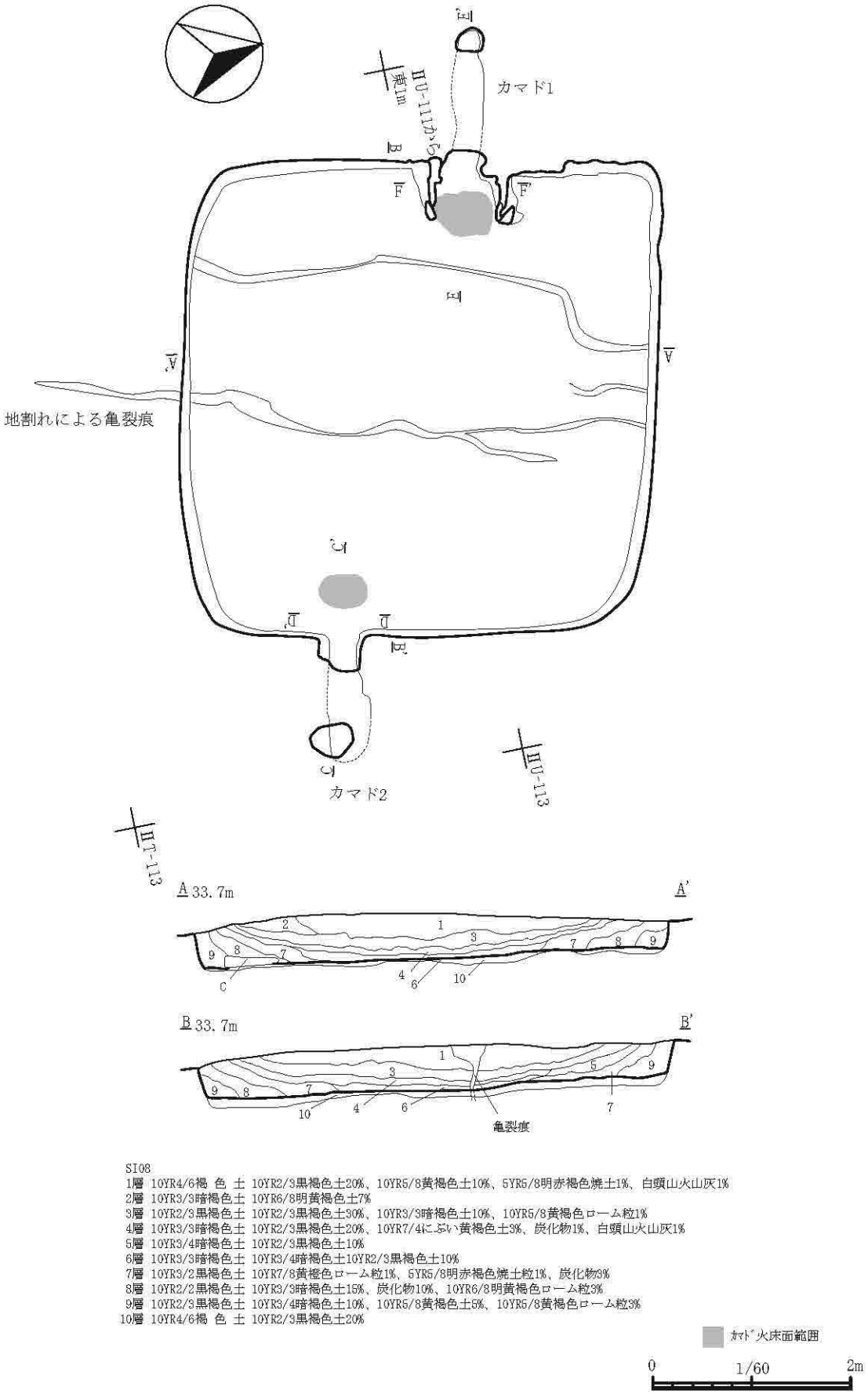
図 23　第７号竪穴住居跡及び出土遺物

第７号竪穴住居跡（SI07）（図23）

位置・確認　ⅡL・ⅡM-102・103グリッドに位置している。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　なし。**規模・平面形**　長芋作付けにより破壊されているため規模・平面形とも不明である。カマドは１基検出した。N－65°－Wに主軸を持つ。**堆積土**　４層に分層できた。堆積土は暗褐色土を主体とする。**壁面・床面**　壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面までの深さは最大10㎝を測る。床面はやや凹凸がある。**壁周溝**　なし。**カマド**　北西壁に火床面と煙道部を検出したが、破壊されているため煙道部の構造は不明であるが地下式と思われる。１層が火床面である。南東壁にも煙道部のようなものが見られることから、カマドが存在した可能性がある。**柱穴・土坑**　柱穴２基を検出した。深さは10～20㎝である。**出土遺物**　堆積土及び床面から土師器が出土している。図23－１は内面黒色の坏。図23－２は甕で頸部付近に沈線が施される。図23－３は球胴甕である。図23－４は高坏である。内外面ミガキである。**小結**　本遺構は出土遺物から奈良時代の竪穴住居跡である。

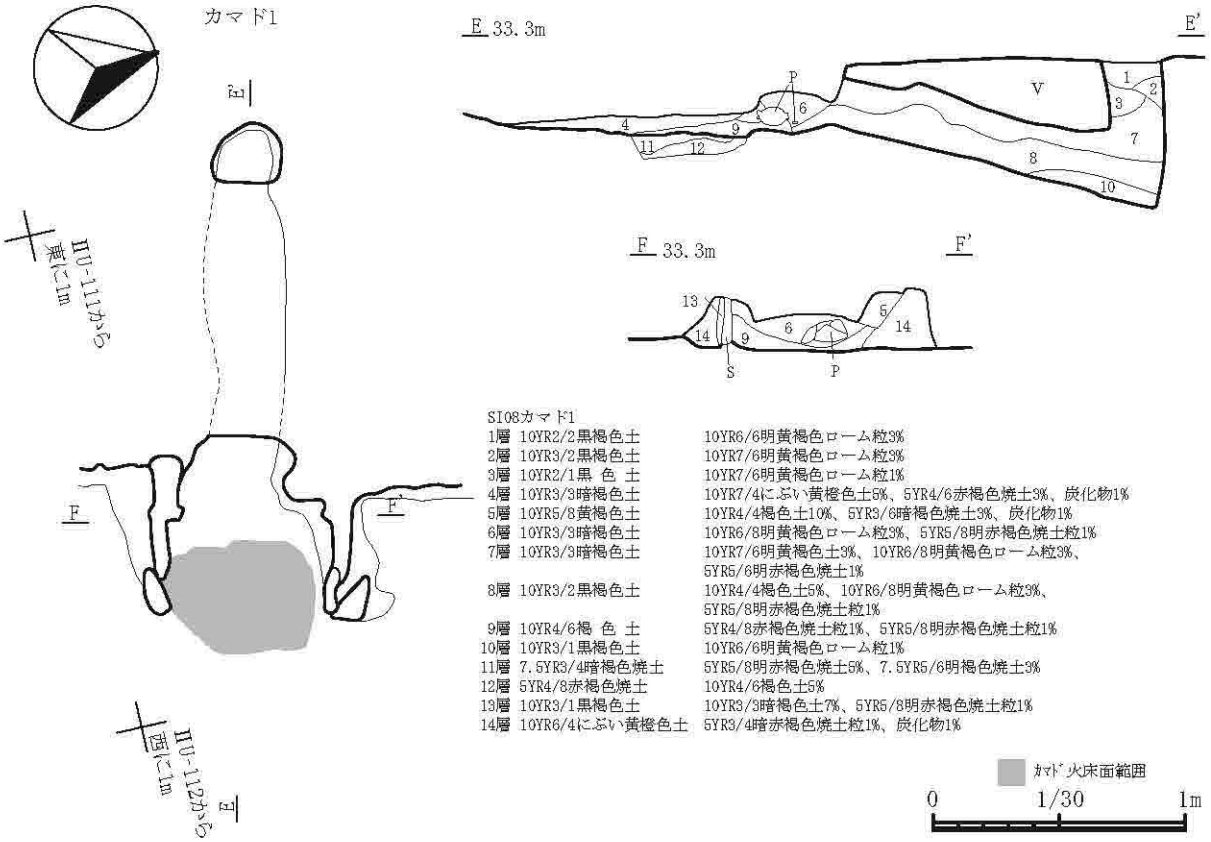
第８号竪穴住居跡（SI08）（図24～28）

位置・確認　ⅡT・ⅡU-111・112グリッドに位置している。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　なし。**規模・平面形**　規模は長軸・短軸4.6ｍの隅丸方形を呈する。カマドは２基検出した。それぞれN－76°－WとN－103°－Wに主軸を持つ。**堆積土**　10層に分層できた。黒褐色土が主体である。１・３層に白頭山－苫小牧火山灰が見られた。８層より下位から炭化材が多数出土したため焼失家屋と考えられ、住居上屋構造材と推定される。堆積土から床面にかけて亀裂痕が見られた。壁面・床面　壁面はほぼ垂直に立ち上がる。確認面までの深さは最大65㎝を測る。床面は掘方埋土によってほぼ平坦に整えられている。**壁周溝**　なし。**カマド**　北西壁と南東壁に検出した。北西壁に検出したカマド１は壁辺の中央からやや右寄りに位置している。煙道部の構造は地下式煙道Ｃ類である。堆積土は14層に分層できた。11・12層が火床面である。袖部は扁平な礫を芯材として、にぶい黄褐色土で構築されている。南東壁に検出したカマド２は壁辺の中央から右寄りに位置している。煙道部の構造は地下式煙道Ｃ類である。堆積土は９層に分層できた。８・９層が火床面である。**柱穴・土坑**　なし。**出土遺物**　堆積土下層及び床面から土師器が出土している。図26－１～５は内面黒色の坏である。１～３は段が体部の中央より下方に施される。４・５は体部中央に段、沈線が施される。図27－１～５、図28－１～２はカマド及び床面から出土した土師器甕である。図27－１～３は全体に刷毛目調整の後、口縁部寄りと頸部寄りに沈線を巡らすものである。４は頸部寄りに多数の沈線を巡らせている。５は口縁部から頸部ぶかけて横走沈線を隙間なく巡らせている。図28－３は床面から出土した球胴甕である。刷毛目調整の後、ミガキを施している。図28－５～８は確認面及び堆積土上層から出土した平安時代の土師器である。図28－５は非ロクロ坏である。輪積痕が残り、外面の調整はヨコナデと指押さえである。内面はヨコナデ、ヘラナデである。図28－８は把手付土器の把手部である。堆積土下層から出土したＣ－６について放射性炭素年代測定（ウイグルマッチング法）を行った結果７世紀末～８世紀後半の値を示した（第４章第１節－３参照）。炭化材の樹種同定を行った結果、Ｃ－２・14はクリ、Ｃ－５・14はスギ、それ以外はトネリコ属シオジ節と同定された（第４章第２節参照）。また、出土した炭化種実の同定を行いサワシバ、ブドウ属、ヤナギタデ、マタタビ属、ニワトコとの結果を得た（第４章第３節参照）。**小結**　本遺構は出土遺物から奈良時代の竪穴住居跡である。



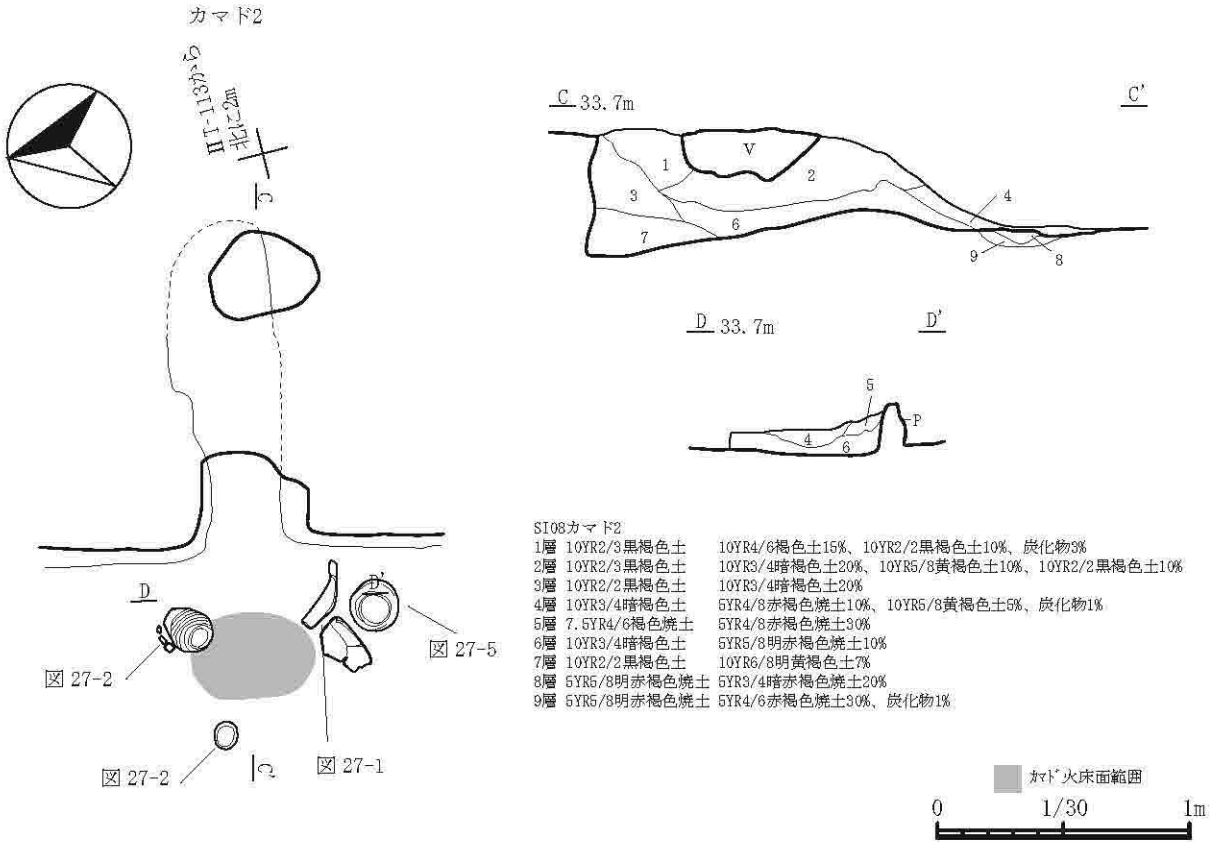
SI08
1層 10YR4/6褐 色 土 10YR2/3黒褐色土20%、10YR5/8黄褐色土10%、5YR5/8明赤褐色焼土1%、白頭山火山灰1%
2層 10YR3/3暗褐色土 10YR6/8明黄褐色土7%
3層 10YR2/3黒褐色土 10YR2/3黒褐色土30%、10YR3/3暗褐色土10%、10YR5/8黄褐色ローム粒1%
4層 10YR3/3暗褐色土 10YR2/3黒褐色土20%、10YR7/4にぶい黄褐色土3%、炭化物1%、白頭山火山灰1%
5層 10YR3/4暗褐色土 10YR2/3黒褐色土10%
6層 10YR3/3暗褐色土 10YR3/4暗褐色土10YR2/3黒褐色土10%
7層 10YR3/2黒褐色土 10YR7/8黄橙色ローム粒1%、5YR5/8明赤褐色焼土粒1%、炭化物3%
8層 10YR2/2黒褐色土 10YR3/3暗褐色土15%、炭化物10%、10YR6/8明黄褐色ローム粒3%
9層 10YR2/3黒褐色土 10YR3/4暗褐色土10%、10YR5/8黄褐色土5%、10YR5/8黄褐色ローム粒3%
10層 10YR4/6褐 色 土 10YR2/3黒褐色土20%

図 24　第８号竪穴住居跡（1）



SI08カマド1

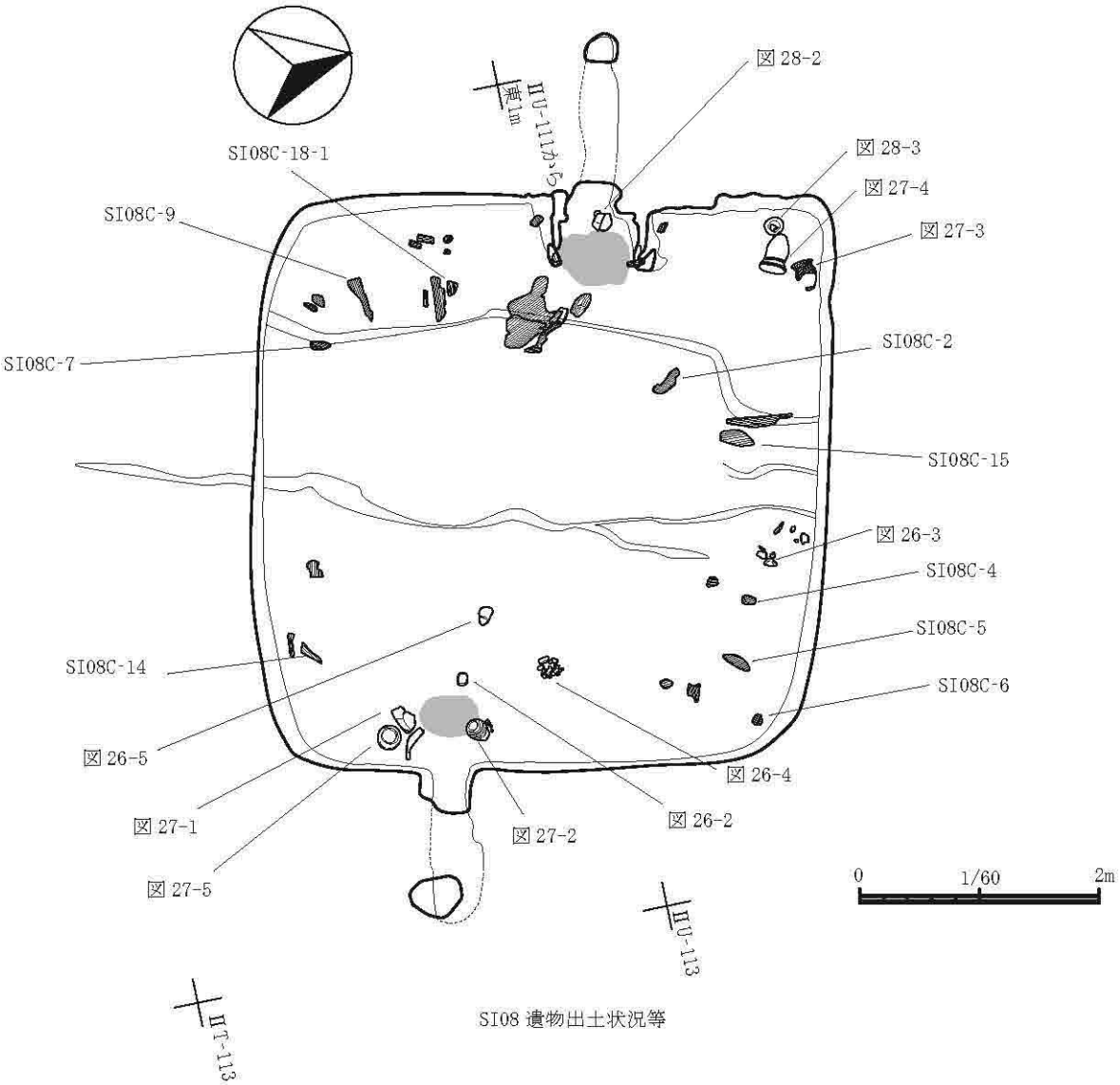
1層	10YR2/2黒褐色土	10YR6/6明黄褐色ローム粒3%
2層	10YR3/2黒褐色土	10YR7/6明黄褐色ローム粒3%
3層	10YR2/1黒 色 土	10YR7/6明黄褐色ローム粒1%
4層	10YR3/3暗褐色土	10YR7/4にぶい黄橙色土5%、5YR4/6赤褐色焼土3%、炭化物1%
5層	10YR5/8黄褐色土	10YR4/4褐色土10%、5YR3/6暗褐色焼土3%、炭化物1%
6層	10YR3/3暗褐色土	10YR6/8明黄褐色ローム粒3%、5YR5/8明赤褐色焼土粒1%
7層	10YR3/3暗褐色土	10YR7/6明黄褐色土3%、10YR6/8明黄褐色ローム粒3%、5YR5/6明赤褐色焼土1%
8層	10YR3/2黒褐色土	10YR4/4褐色土5%、10YR6/8明黄褐色ローム粒3%、5YR5/8明赤褐色焼土粒1%
9層	10YR4/6褐 色 土	5YR4/8赤褐色焼土粒1%、5YR5/8明赤褐色焼土粒1%
10層	10YR3/1黒褐色土	10YR6/6明黄褐色ローム粒1%
11層	7.5YR3/4暗褐色焼土	5YR5/8明赤褐色焼土5%、7.5YR5/6明褐色焼土3%
12層	5YR4/8赤褐色焼土	10YR4/6褐色土5%
13層	10YR3/1黒褐色土	10YR3/3暗褐色土7%、5YR5/8明赤褐色焼土粒1%
14層	10YR6/4にぶい黄橙色土	5YR3/4暗赤褐色焼土粒1%、炭化物1%



SI08カマド2

1層	10YR2/3黒褐色土	10YR4/6褐色土15%、10YR2/2黒褐色土10%、炭化物3%
2層	10YR2/3黒褐色土	10YR3/4暗褐色土20%、10YR5/8黄褐色土10%、10YR2/2黒褐色土10%
3層	10YR2/2黒褐色土	10YR3/4暗褐色土20%
4層	10YR3/4暗褐色土	5YR4/8赤褐色焼土10%、10YR5/8黄褐色土5%、炭化物1%
5層	7.5YR4/6褐色焼土	5YR4/8赤褐色焼土30%
6層	10YR3/4暗褐色土	5YR5/8明赤褐色焼土10%
7層	10YR2/2黒褐色土	10YR6/8明黄褐色土7%
8層	5YR5/8明赤褐色焼土	5YR3/4暗赤褐色焼土20%
9層	5YR5/8明赤褐色焼土	5YR4/6赤褐色焼土30%、炭化物1%

図 25　第８号竪穴住居跡（2）



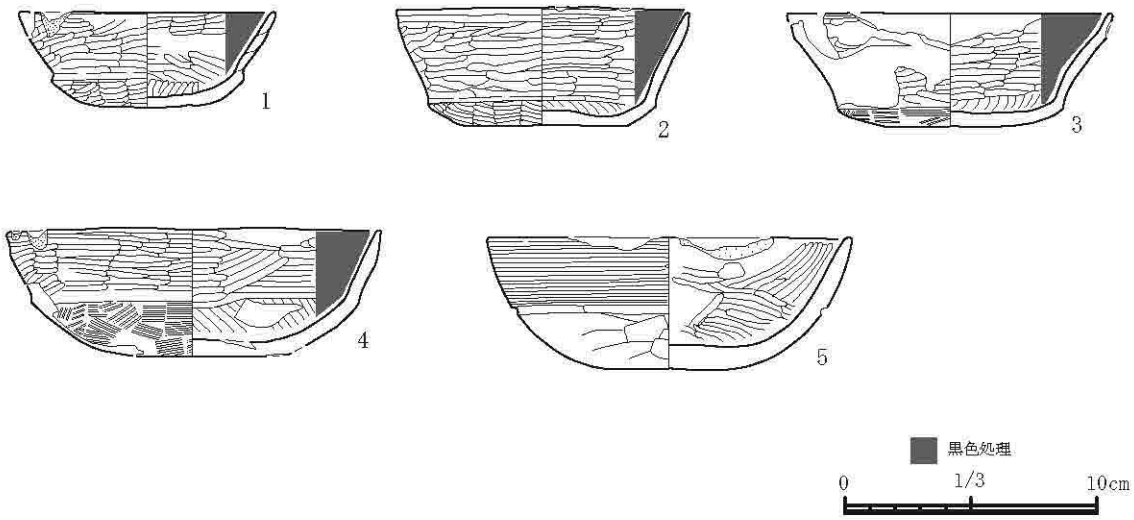


図 26　第８号竪穴住居跡（3）及び出土遺物（1）

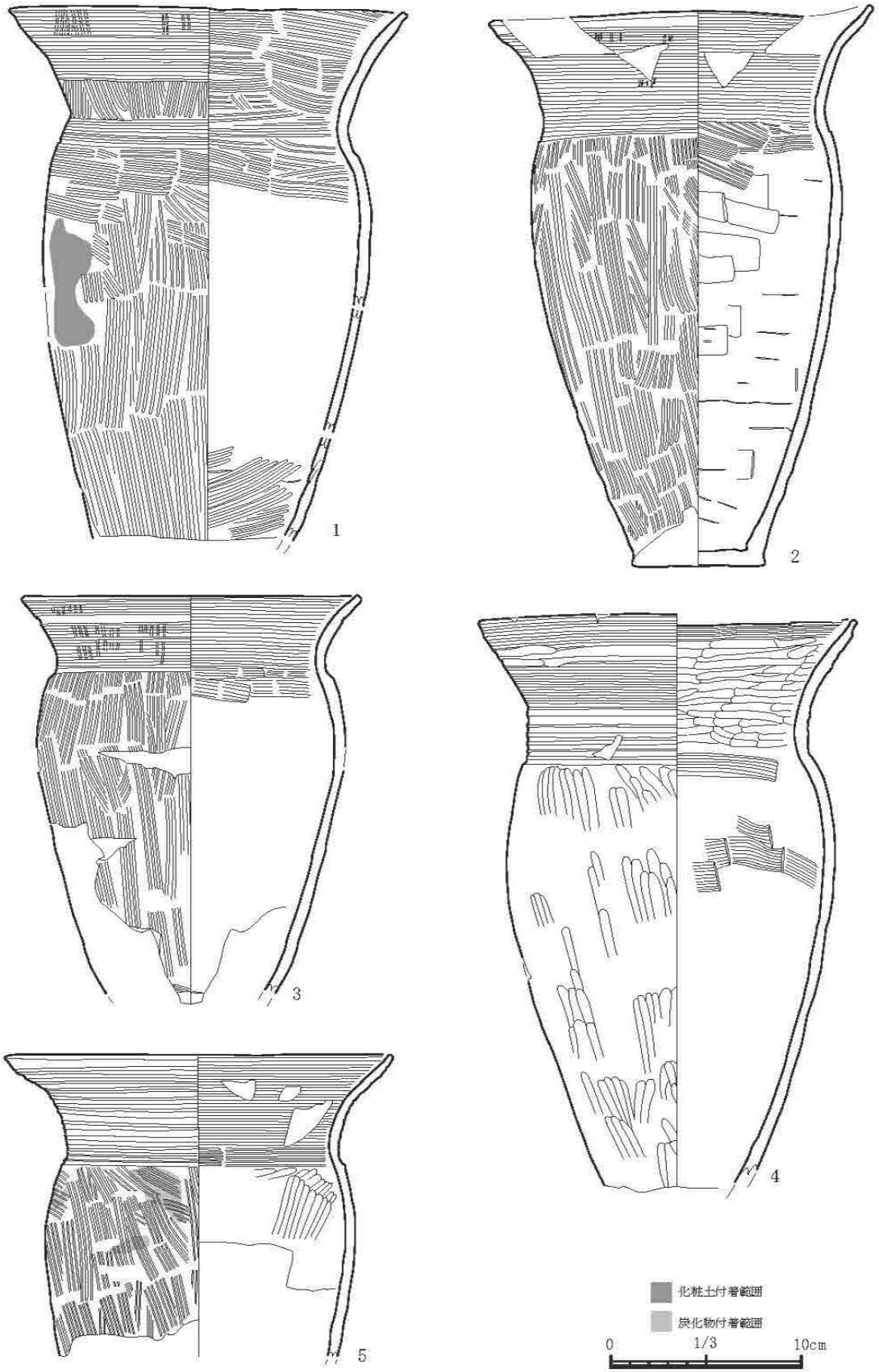


図27　第８号竪穴住居跡出土遺物（2）

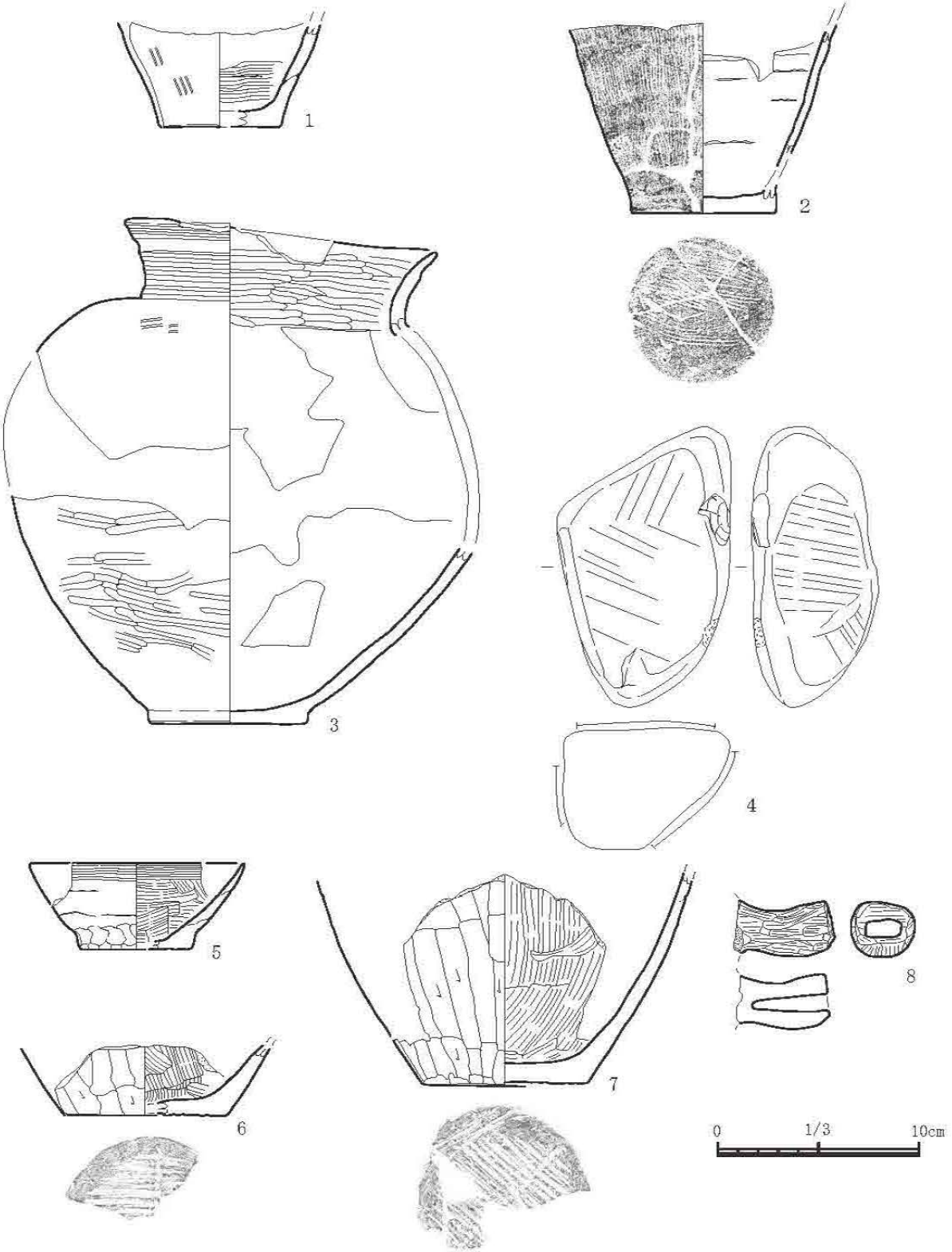


図 28　第８号竪穴住居跡出土遺物（3）

第９号竪穴住居跡（SI09）（図29･30）

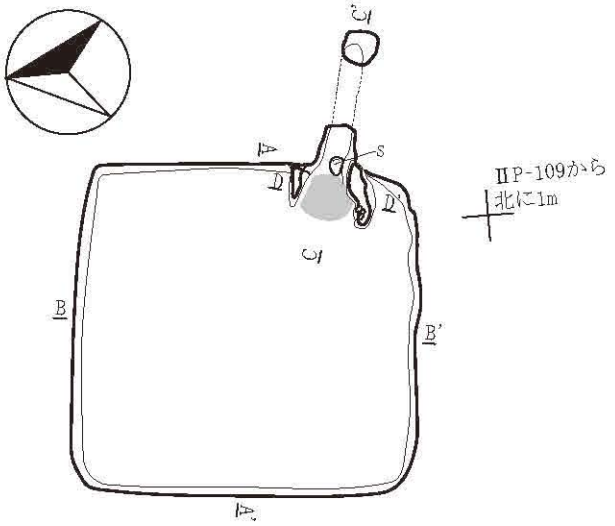
位置･確認　ⅡP･ⅡQ-108･109グリッドに位置している。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　なし。**規模･平面形**　規模は長軸2.6ｍ、短軸2.5ｍの隅丸方形を呈する。カマドは１基検出した。Ｎ－105°－Ｅに主軸を持つ。**堆積土**　５層に分層できた。黒褐色土が主体である。**壁面・床面**　壁面は緩やかに立ち上がる。確認面までの深さは最大17㎝を測る。床面は掘方埋土によってほぼ平坦に整えられている。**壁周溝**　なし。**カマド**　南東壁に１基検出した。壁辺の右寄りに位置している。煙道部の構造は地下式煙道Ｄ類である。袖部は礫を芯材にして褐色土を貼り付けて構築している。堆積土は17層に分層できた。14・15層が火床面である。**柱穴・土坑**　なし。**出土遺物**　床面及び堆積土から土師器が出土している。図30－１・２は内面黒色の坏である。図30－３は非常に小型の内面黒色の坏である。図30－４～６は甕である。４は刷毛目調整の後、口縁部寄りと頸部寄りにヨコナデと沈線が施され、胴部はミガキが施される。内面は口縁部がヨコナデとミガキ調整、胴部は刷毛目調整とミガキが施される。７は球胴甕、９は紡錘車である。**小結**　本遺構は出土遺物から奈良時代の竪穴住居跡である。

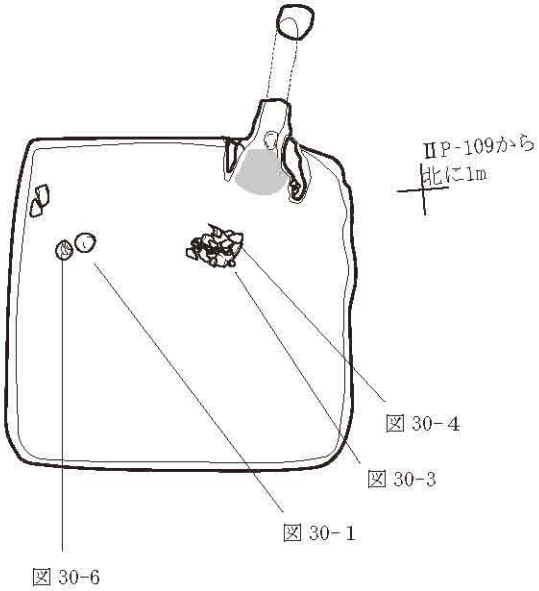
第10号竪穴住居跡（SI10）（図31･32）

位置･確認　ⅡQ･ⅡR-108･109グリッドに位置している。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　なし。**規模･平面形**　長軸3.6ｍ、短軸3.5ｍの正方形を呈する。カマドは１基検出した。Ｎ－80°－Ｅに主軸を持つ。**堆積土**　19層に分層できた。黒褐色土が主体である。**壁面・床面**　壁面はほぼ垂直に立ち上がる。確認面までの深さは最大38㎝を測る。床面は掘方埋土によってほぼ平坦に整えられている。**壁周溝**　一部を除き全周する。**カマド**　北東壁に検出した。壁辺の左寄りに位置している。煙道部の構造は半地下式煙道Ａ類である。袖部は礫と暗褐色土で構築されている。堆積土は13層に分層できた。柱穴・土坑　柱穴は15基検出した。壁際にほぼ等間隔に並ぶ。**出土遺物**　堆積土から土師器、土製支脚、羽口、刀子、石器が出土している。図32－１・２は非ロクロ坏である。外面は輪積痕、指押さえが明瞭に残る。３は甕である。外面はケズリ、内面はヘラナデである。５は羽口である。カマドの堆積土から採取した土壌サンプルを水洗選別し、炭化種実同定を行ったところ、アワとイネとの結果が得られた（第４章第３節参照）。**小結**　本遺構は出土遺物や柱穴の配置から平安時代（10世紀後半から11世紀代）に構築された竪穴住居跡と思われる。

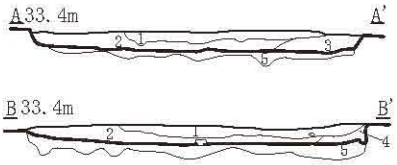
第11号竪穴住居跡（SI11）（図33）

位置・確認　ⅡR-107グリッドに位置している。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　第８号土坑、第２号溝跡と重複しており、本遺構が古い。**規模・平面形**　規模は長軸・短軸3.2ｍの隅丸方形を呈する。カマドは１基検出した。Ｎ－73°－Ｗに主軸を持つ。**堆積土**　７層に分層できた。黒褐色土が主体である。**壁面・床面**　壁面はほぼ垂直に立ち上がる。確認面までの深さは最大44㎝を測る。床面は掘方埋土によってほぼ平坦に整えられている。**壁周溝**　なし。**カマド**　北西壁のほぼ中央に位置している。煙道部の構造は地下式煙道Ｄ類である。袖部は褐色土の砂質土で構築している。堆積土は10層に分層できた。３層が火床面である。**柱穴・土坑**　なし。**出土遺物**　床面から土師器が出土している。図33－１・２は内面黒色の坏である。堆積土からは鉄製品が出土している。**小結**　本遺構は出土遺物から奈良時代の竪穴住居跡である。





SI09 遺物出土状況等



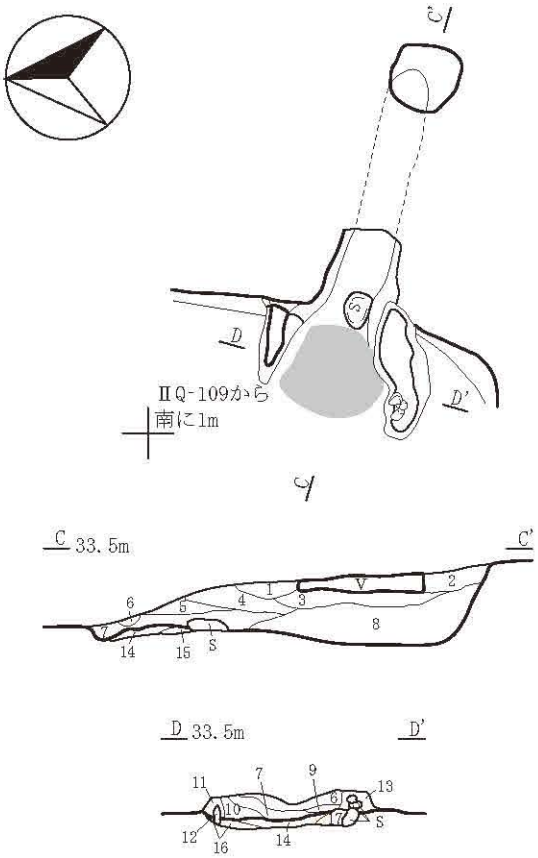
SI09
1層 10YR2/2黒褐色土 炭化物10%
2層 10YR2/3黒褐色土 10YR4/6褐色土10%、炭化物5%
3層 10YR2/2黒褐色土 10YR4/6褐色土5%
4層 10YR3/3暗褐色土 砂質
5層 10YR5/6黄褐色土 掘方埋土　炭化物10%、粘土質

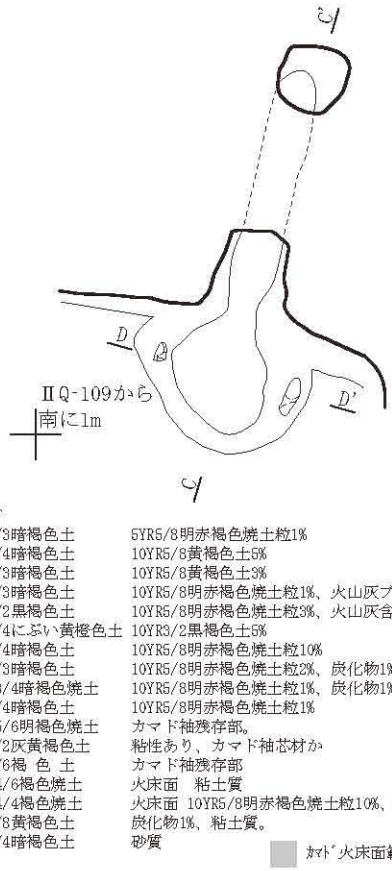
カマド完掘状況

カマド掘方完掘状況

カマド火床面範囲

0　1/60　2m





SI09カマド

1層	10YR3/3暗褐色土	5YR5/8明赤褐色焼土粒1%
2層	10YR3/4暗褐色土	10YR5/8黄褐色土5%
3層	10YR3/3暗褐色土	10YR5/8黄褐色土3%
4層	10YR3/3暗褐色土	10YR5/8明赤褐色焼土粒1%、火山灰ブロック含む
5層	10YR3/2黒褐色土	10YR5/8明赤褐色焼土粒3%、火山灰含む
6層	10YR6/4にぶい黄橙色土	10YR3/2黒褐色土5%
7層	10YR3/4暗褐色土	10YR5/8明赤褐色焼土粒10%
8層	10YR3/3暗褐色土	10YR5/8明赤褐色焼土粒2%、炭化物1%
9層	7.5YR3/4暗褐色焼土	10YR5/8明赤褐色焼土粒1%、炭化物1%
10層	10YR3/4暗褐色土	10YR5/8明赤褐色焼土粒1%
11層	7.5YR5/6明褐色焼土	カマド袖残存部。
12層	10YR5/2灰黄褐色土	粘性あり、カマド袖芯材か
13層	10YR4/6褐 色 土	カマド袖残存部
14層	7.5YR4/6褐色焼土	火床面　粘土質
15層	7.5YR4/4褐色焼土	火床面 10YR5/8明赤褐色焼土粒10%、粘土質
16層	10YR5/8黄褐色土	炭化物1%、粘土質。
17層	10YR3/4暗褐色土	砂質

カマド火床面範囲

0　1/30　1m

図 29　第 9 号竪穴住居跡

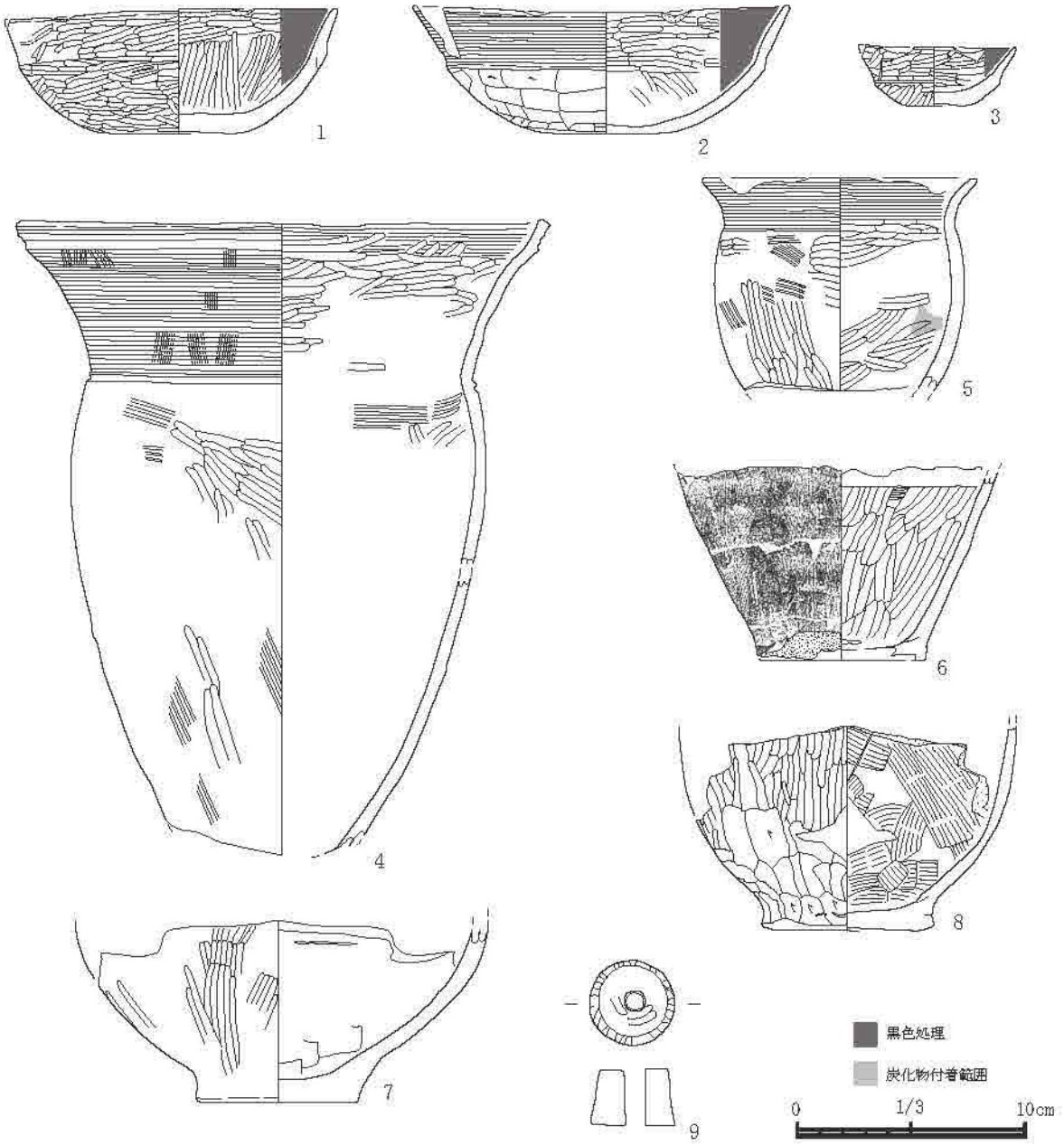
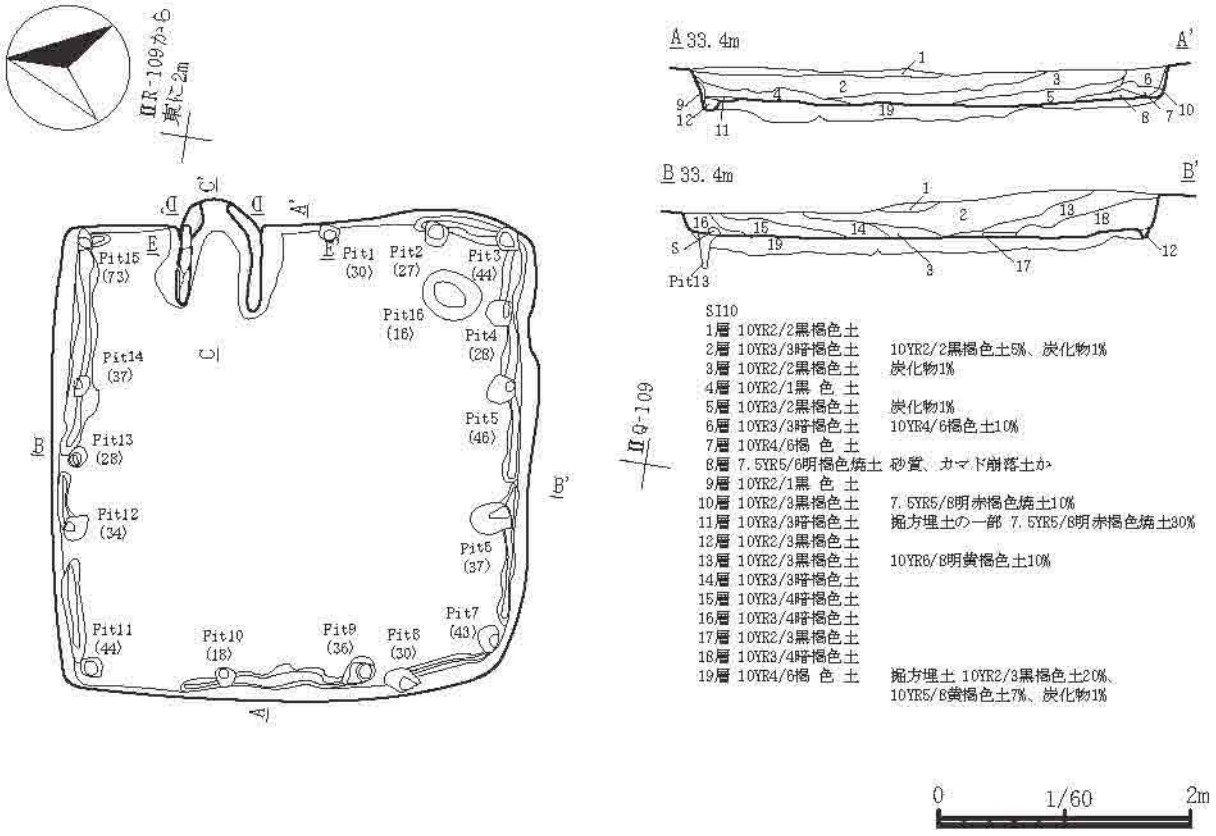


図 30　第９号竪穴住居跡出土遺物

第 12 号竪穴住居跡 (SI12)（図 34 ～ 36）

位置・確認　ⅡN～ⅡP-104 ～ 106 グリッドに位置している。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　なし。**規模・平面形**　規模は長軸 6.1 m、短軸 5.8 mの方形を呈する。カマドは１基検出した。N － 71° － Eに主軸を持つ。**堆積土**　７層に分層できた。褐色土が主体である。**壁面・床面**　壁面はほぼ垂直に立ち上がる。確認面までの深さは最大 28 cmを測る。床面は掘方埋土によってほぼ平坦に整えられている。**壁周溝**　東側を除き全周する。**カマド**　北東壁の中央よりやや北寄りに位置している。煙道部の構造は半地下式煙道Ａ類である。袖部は礫と暗褐色土で構築されている。堆積土は 10 層に分層できた。７層が火床面である。**柱穴・土坑**　柱穴は 11 基検出した。壁際にほぼ等間隔に確認できた。土坑は３基検出した。**出土遺物**　土師器、土製支脚、紡錘車、土錘、砥石が出土している。図 36－１・



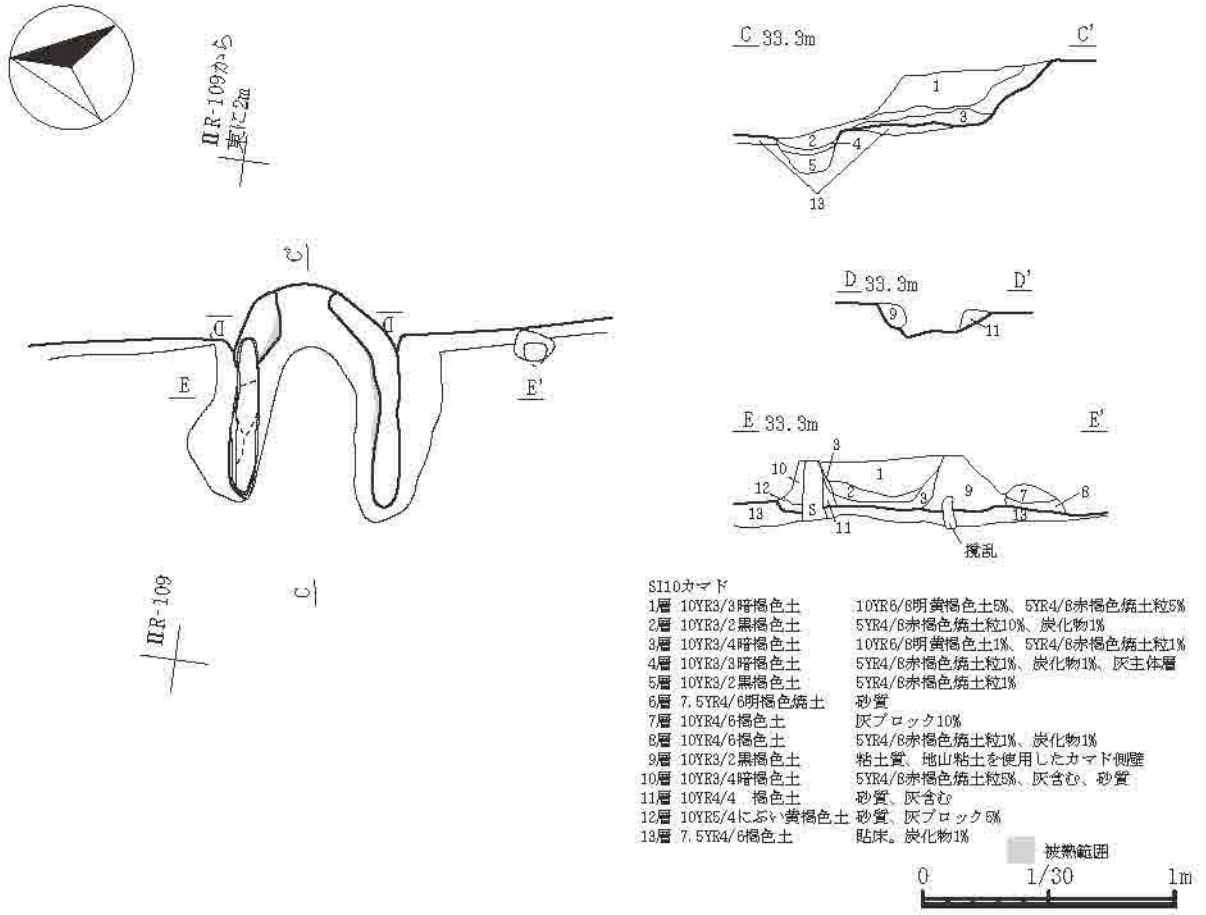


図 31　第 10 号竪穴住居跡

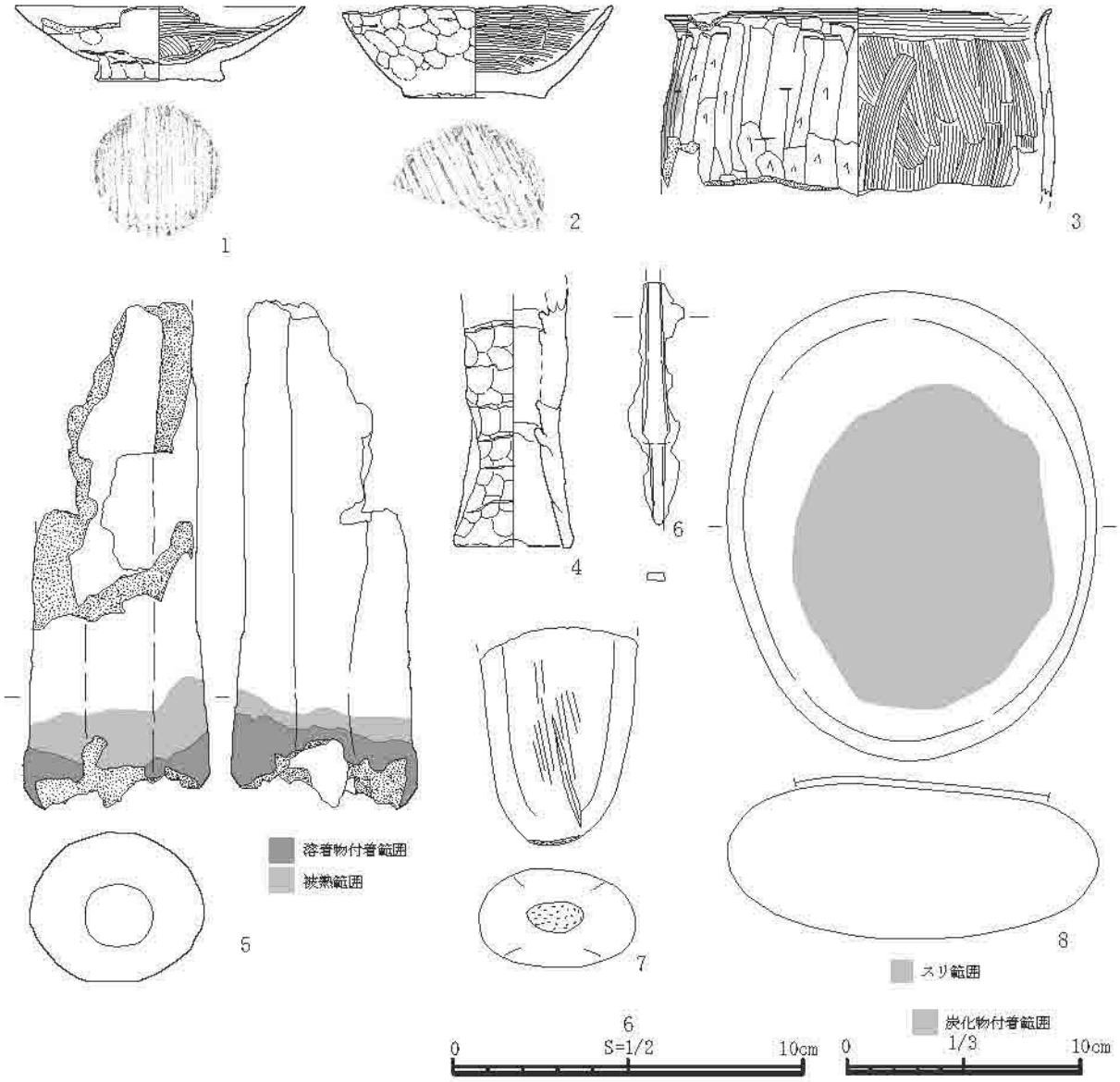


図32　第10号竪穴住居跡出土遺物

2は非ロクロ坏である。外面ヨコナデ、内面ヘラナデである。図36-3～6は土師器甕で外面はケズリ、内面はヘラナデである。7～9は土製支脚である。

小結　本遺構は出土遺物等から平安時代（10世紀後半）の竪穴住居跡であると思われる。

第13号竪穴住居跡（SI13）（図37･38）

位置・確認　ⅡP・ⅡQ-103・104グリッドに位置している。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　南東側が撹乱により破壊されている。**規模・平面形**　規模は長軸・短軸6.0mの方形を呈する。カマドは1基検出した。N－85°－Eに主軸を持つ。**堆積土**　13層に分層できた。暗褐色土が主体である。**壁面・床面**　壁面はほぼ垂直に立ち上がる。確認面までの深さは最大43cmを測る。床面は掘方埋土によってほぼ平坦に整えられている。**壁周溝**　なし。**カマド**　北東壁の中央部よりやや左寄りに検出した。煙道部の構造は半地下式煙道A類である。袖部は暗褐色土で構築している。堆積土は11層に分

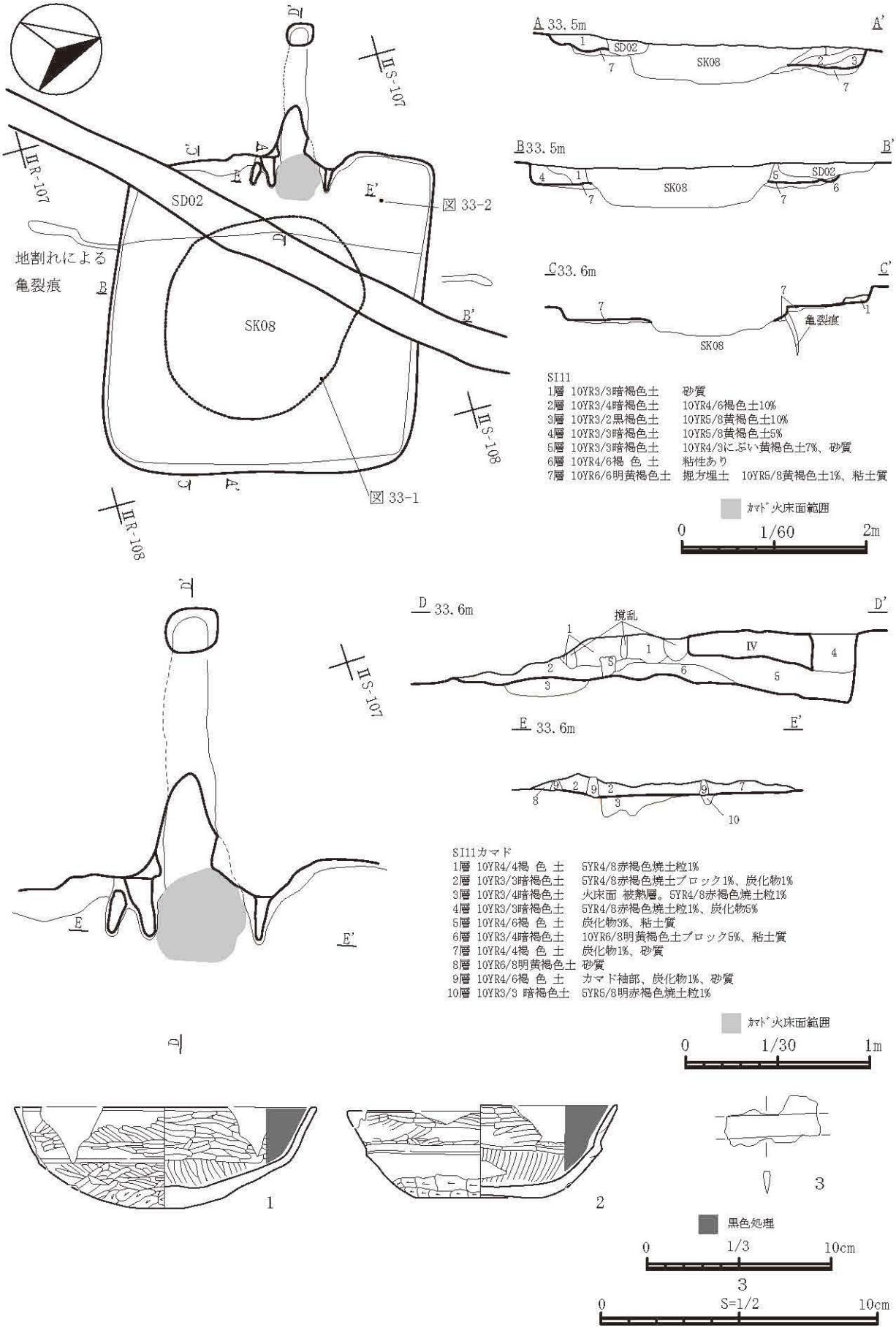


図 33　第 11 号竪穴住居跡及び出土遺物

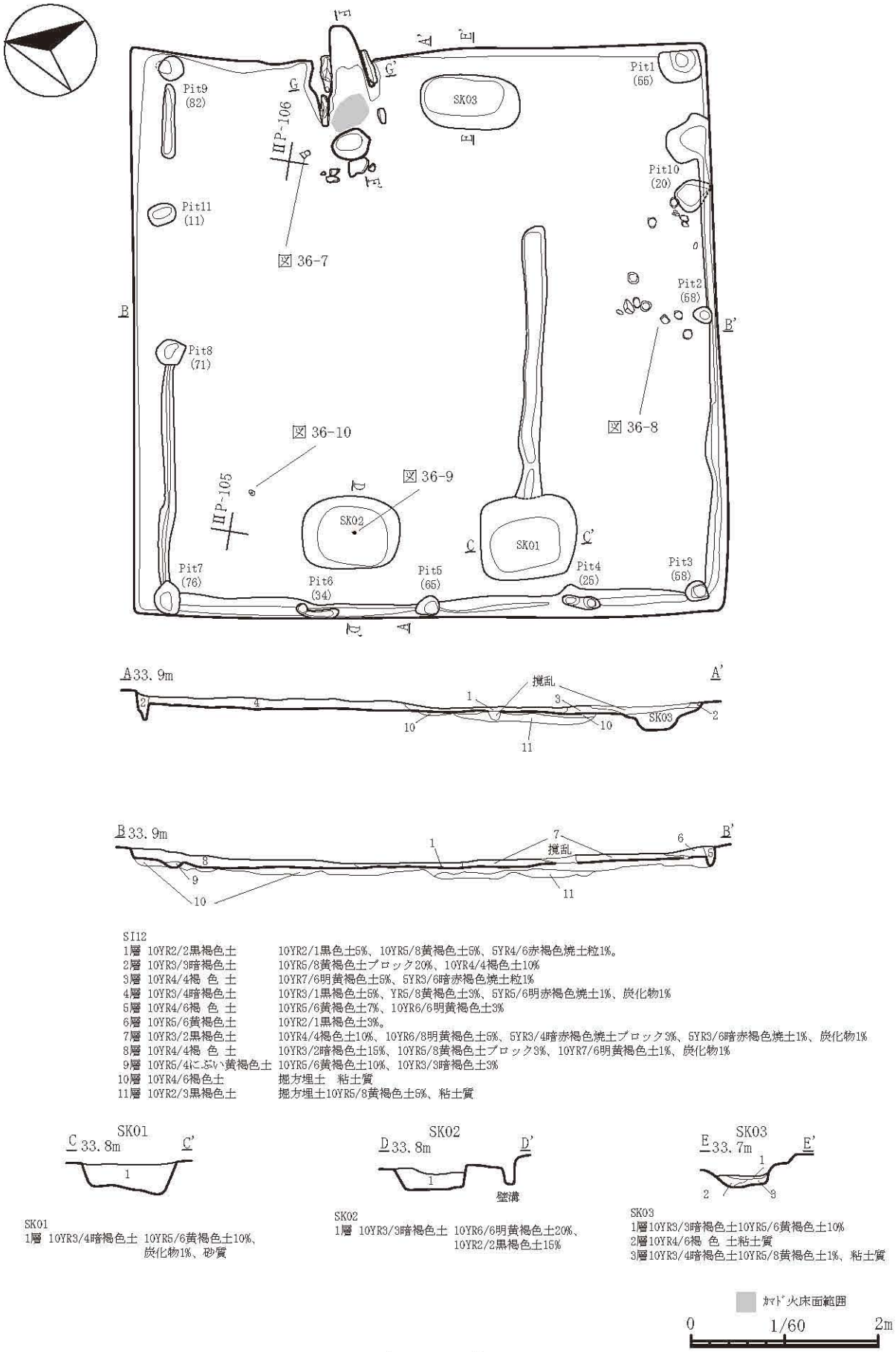


図 34 第 12 号竪穴住居跡（1）

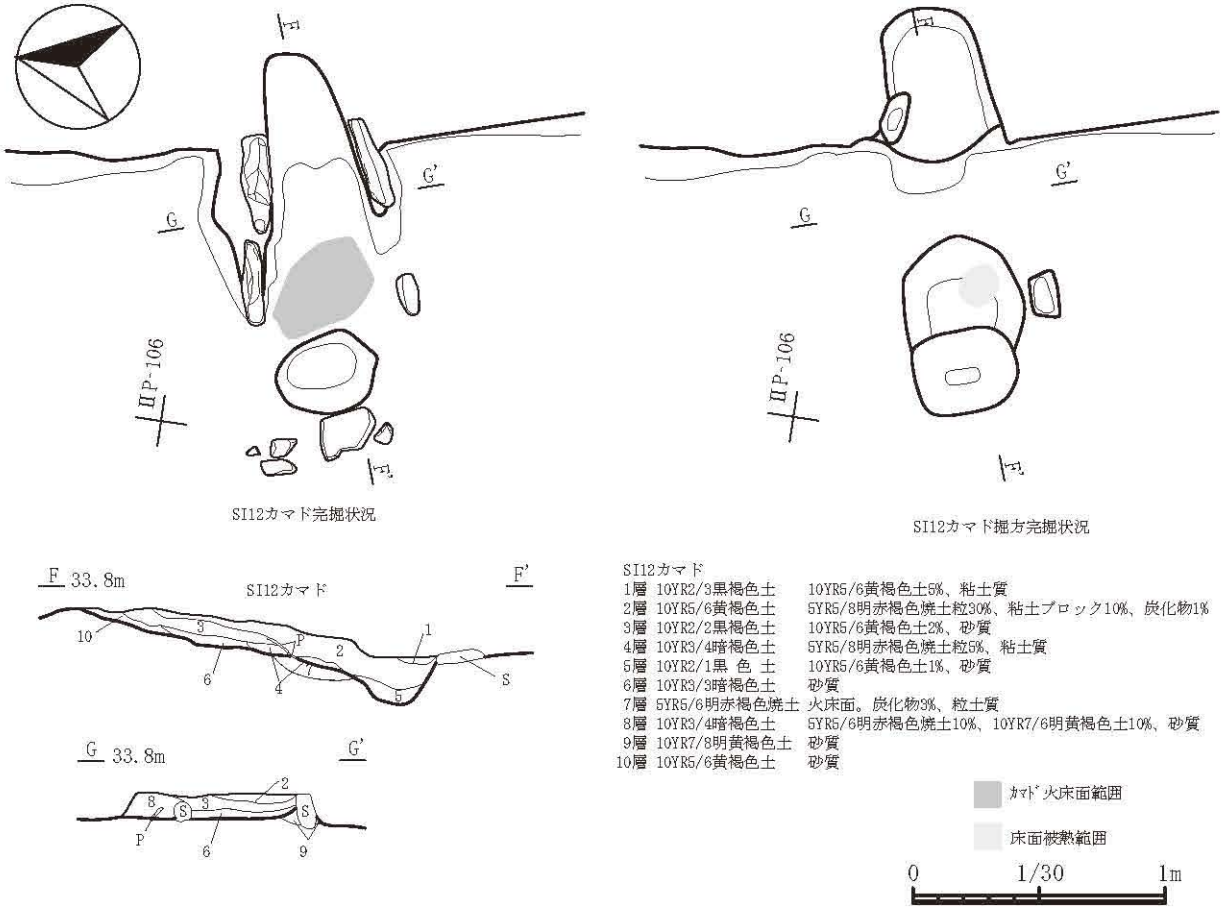


図 35　第 12 号竪穴住居跡（2）

層できた。６層が火床面である。柱穴･土坑　柱穴は 25 基検出した。壁際にほぼ等間隔に確認できた。土坑は１基検出した。**出土遺物**　カマド及び堆積土から土師器、支脚、土錘が出土している。図 38-１の土師器甕は第 12 号竪穴住居跡の堆積土から出土した土器と接合した。**小結**　本遺構は柱穴の配置から平安時代（10 世紀後半から 11 世紀代）に構築された竪穴住居跡と思われる。

第 14 号竪穴住居跡（SI14）（図 39 ～ 41）

位置・確認　Ⅲ A･Ⅲ B-114・115 グリッドに位置している。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　第 19・20 号竪穴住居跡、第 12 号土坑、第４号溝跡と重複し、第４号溝跡より本遺構が古く、それ以外は本遺構が新しい。**規模・平面形**　規模は長軸 5.0 m、短軸 4.8 mの方形を呈する。カマドは１基検出した。N -120°　- Eに主軸を持つ。**堆積土**　13 層に分層できた。黒褐色土が主体である。**壁面・床面**　壁面はほぼ垂直に立ち上がる。確認面までの深さは最大 35 cmを測る。床面は平坦である。壁周溝　北壁側で検出した。**カマド**　北東壁の中央部よりやや左寄りに検出した。煙道部の構造は地下式煙道Ａ類である。袖は第４号溝跡に壊されているため不明である。堆積土は５層に分層できた。４・５層が火床面である。**柱穴・土坑**　柱穴８基検出した。土坑は２基検出した。**出土遺物**　堆積土から土師器や土製支脚、砥石、磨り石が出土している。図 40- １・２、図 41- １～４は土師器甕である。外面ケズリ、内面ヘラナデである。３・４の底部は砂底である。

小結　本遺構は柱穴の配置から平安時代（10 世紀後半以降）に構築された竪穴住居跡と思われる。

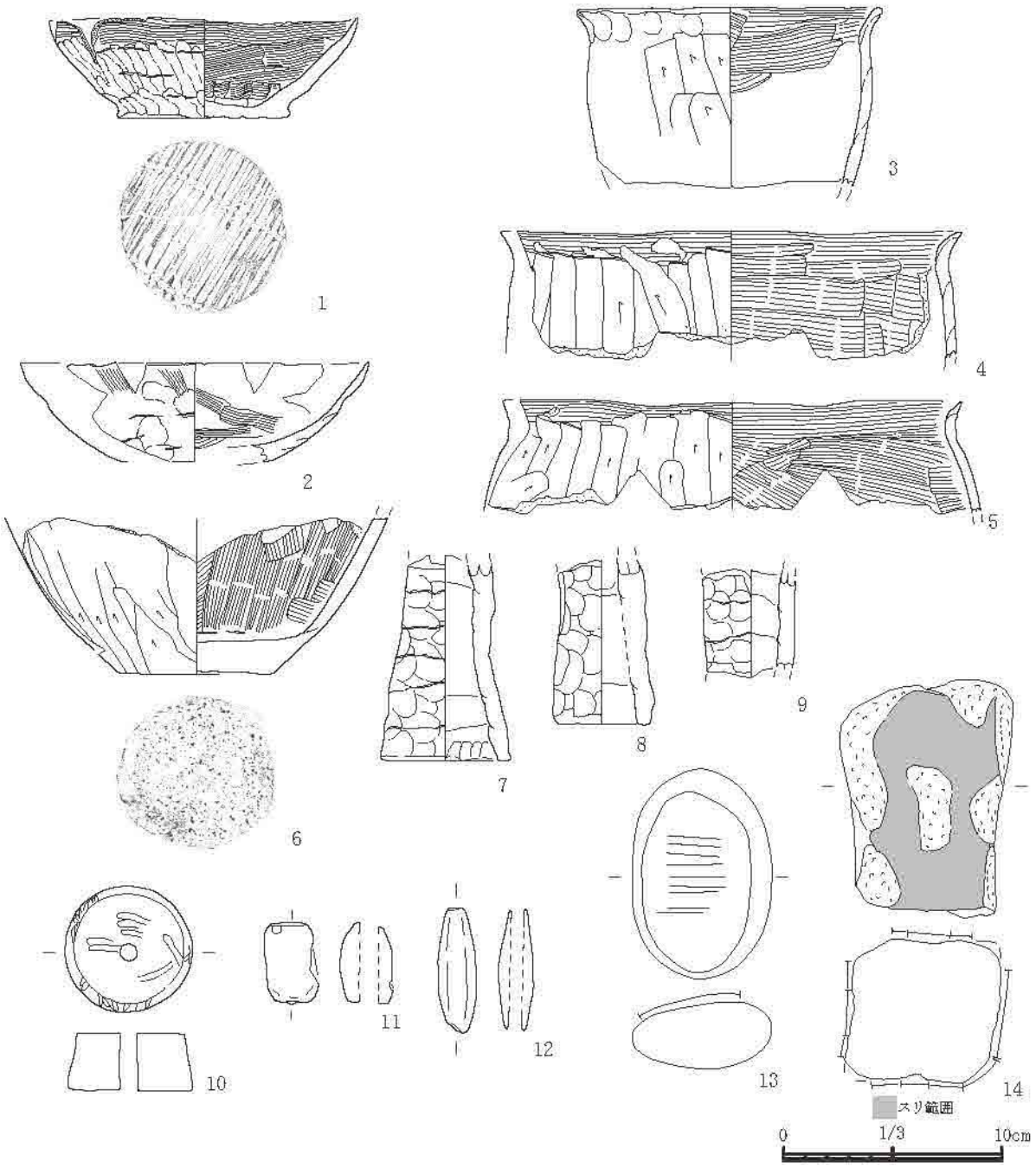


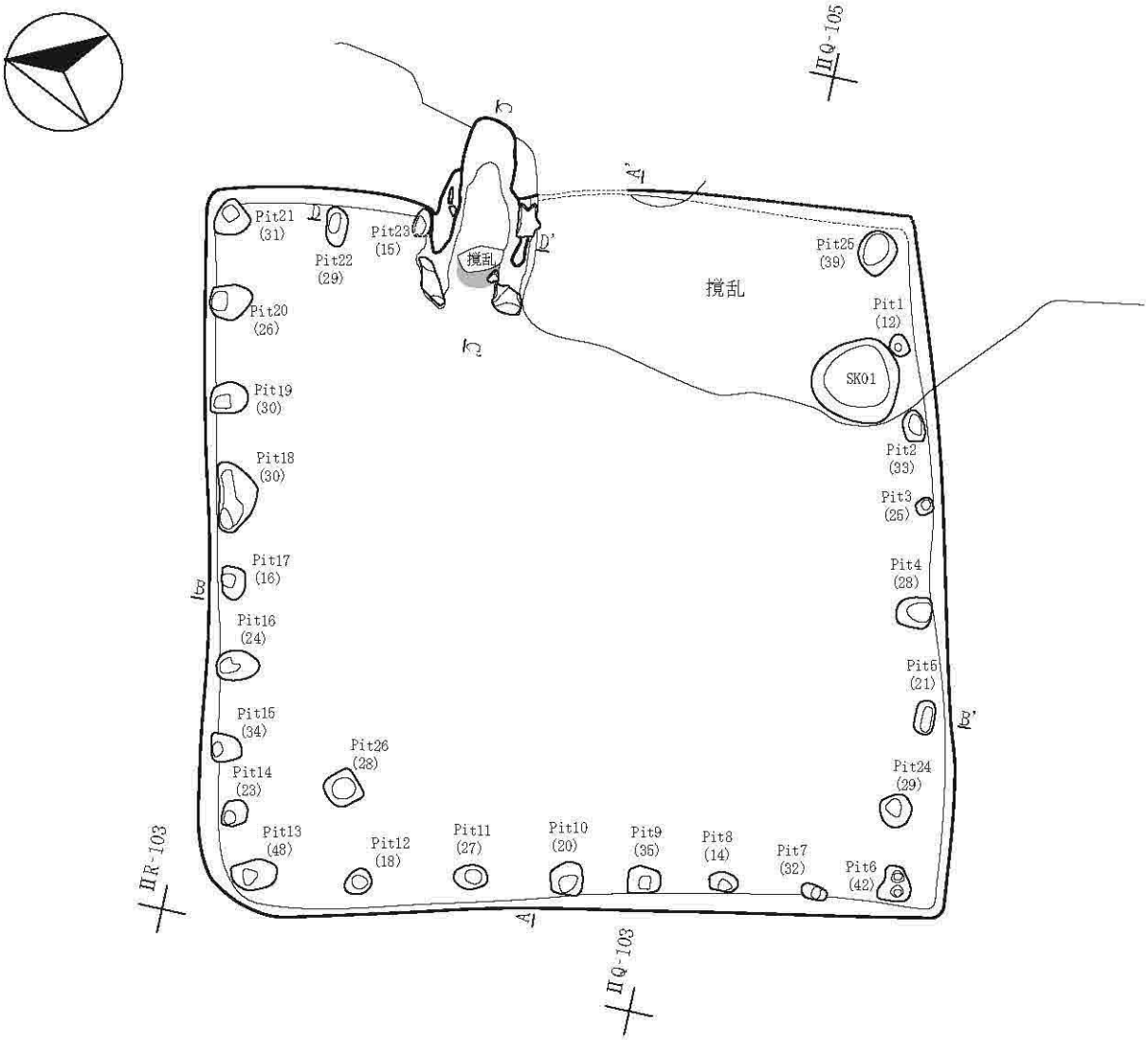
図36　第12号竪穴住居跡出土遺物

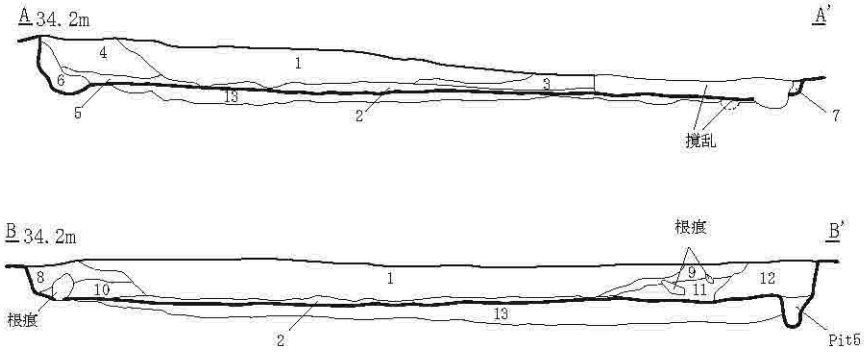
第15号竪穴住居跡（SI15）（図44～47）

位置・確認　ⅡW～ⅡY-106～108グリッドに位置している。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　拡張が行われた竪穴住居跡である。拡張後の住居をSI15ａ、拡張後の住居をSI15bとした。

第15ａ号竪穴住居跡（SI15ａ）

規模・平面形　規模は長軸7.3ｍ、短軸7.1ｍの方形を呈する。カマドは1基検出した。N-69°-Eに主軸を持つ。第4号掘立柱建物跡が附属するものと思われる。**堆積土**　1～16層が住居の堆積土である。暗褐色土を主体とする。**壁面・床面**　壁面はほぼ垂直に立ち上がる。確認面までの深さ



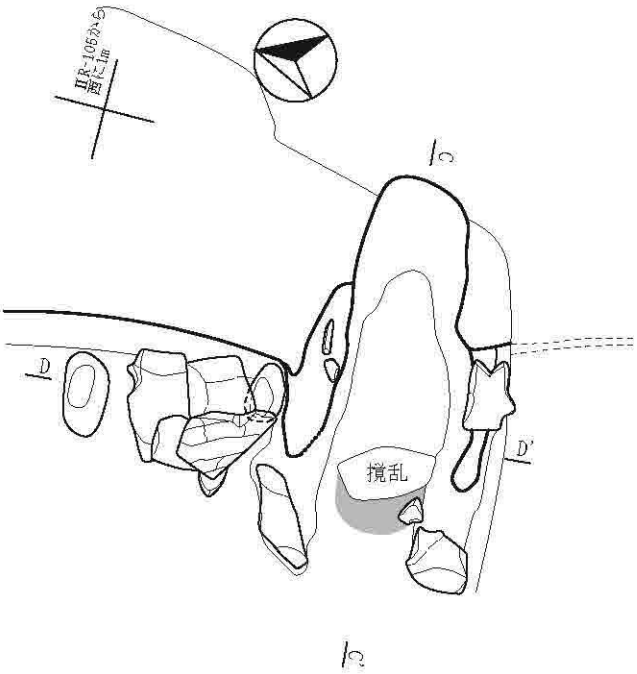


SI13
1層 10YR2/2黒褐色土 10YR2/3黒褐色土20%、10YR2/1黒色土10%、10YR3/4暗褐色土5%
2層 10YR3/4暗褐色土 10YR4/6褐色土15%、炭化物1%
3層 10YR2/3黒褐色土 5YR6/8橙色焼土粒1%
4層 10YR3/3暗褐色土 10YR4/4褐色土10%、10YR6/8明黄褐色土1%
5層 10YR4/6褐 色 土 10YR3/4暗褐色土10%、10YR6/8明黄褐色土1%
6層 10YR3/4暗褐色土 10YR4/4褐色土15%、10YR5/8黄褐色土3%
7層 10YR4/6褐 色 土 10YR5/8黄褐色土10%
8層 10YR3/2黒褐色土 10YR4/4褐色土10%、10YR8/4浅黄橙色土1%、炭化物1%
9層 10YR3/3暗褐色土 10YR2/2黒褐色土15%、10YR7/6明黄褐色ローム粒1%
10層 10YR4/4褐 色 土 10YR5/6黄褐色土10%、10YR3/4暗褐色土1%。
11層 10YR4/6褐 色 土 10YR3/1黒褐色土5%、10YR6/6明黄褐色土1%。
12層 10YR4/4褐 色 土 10YR6/6明黄褐色土20%、10YR3/4暗褐色土5%
13層 10YR3/4暗褐色土 掘方埋土　10YR5/8黄褐色土30%、10YR2/3黒褐色土5%

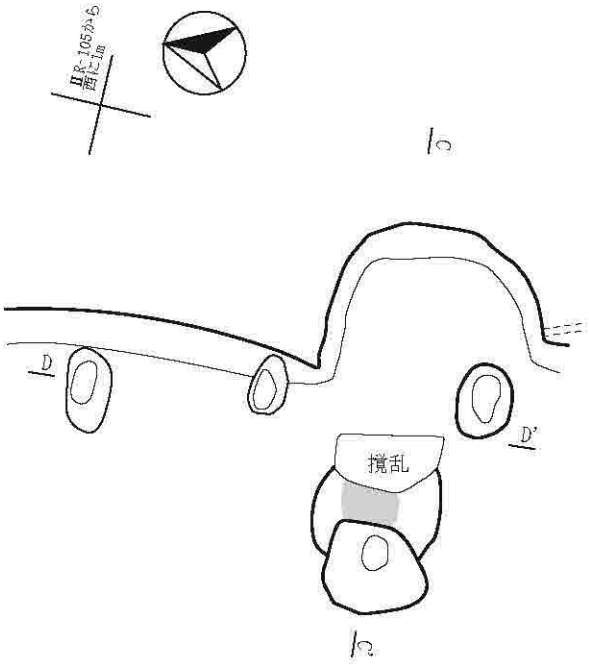
カマド火床面範囲

0　S=1/60　2m

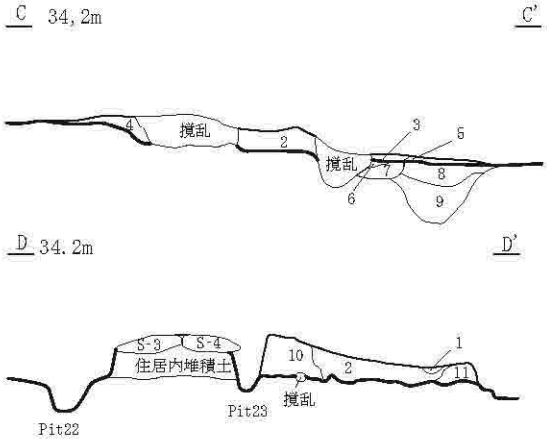
図 37　第 13 号竪穴住居跡（1）



SI13カマド完掘状況



SI13カマド掘方完掘状況



SI13カマド

1層	10YR2/2黒褐色土	10YR6/8明黄褐色土1%、砂質
2層	10YR3/3暗褐色土	炭化物1%、砂質
3層	10YR2/3黒褐色土	10YR6/8明黄褐色土1%、砂質
4層	10YR2/3黒褐色土	10YR6/8明黄褐色土1%、粘土質
5層	10YR3/3暗褐色土	5YR4/8赤褐色焼土粒1%、砂質
6層	5YR3/6暗赤褐色焼土	火床面被熱部分。10YR3/1黒褐色土5%、砂質
7層	10YR4/6褐色土	5YR5/4にぶい赤褐色焼土5%、砂質
8層	10YR4/4褐色土	10YR5/8黄褐色土1%、炭化物1%、砂質
9層	10YR2/2黒褐色土	10YR4/4褐色土10%、10YR6/6明黄褐色土3%、5YR5/8明赤褐色焼土1%、砂質
10層	10YR3/4暗褐色土	10YR3/2黒褐色土20%、10YR7/4黄褐色粘土ブロック3%、砂質
11層	10YR3/3暗褐色土	10YR2/3黒褐色土15%、砂質
堆積土	10YR3/4暗褐色土	炭化物1%、砂質

カマド火床面範囲

被熱範囲

0 1/30 1m

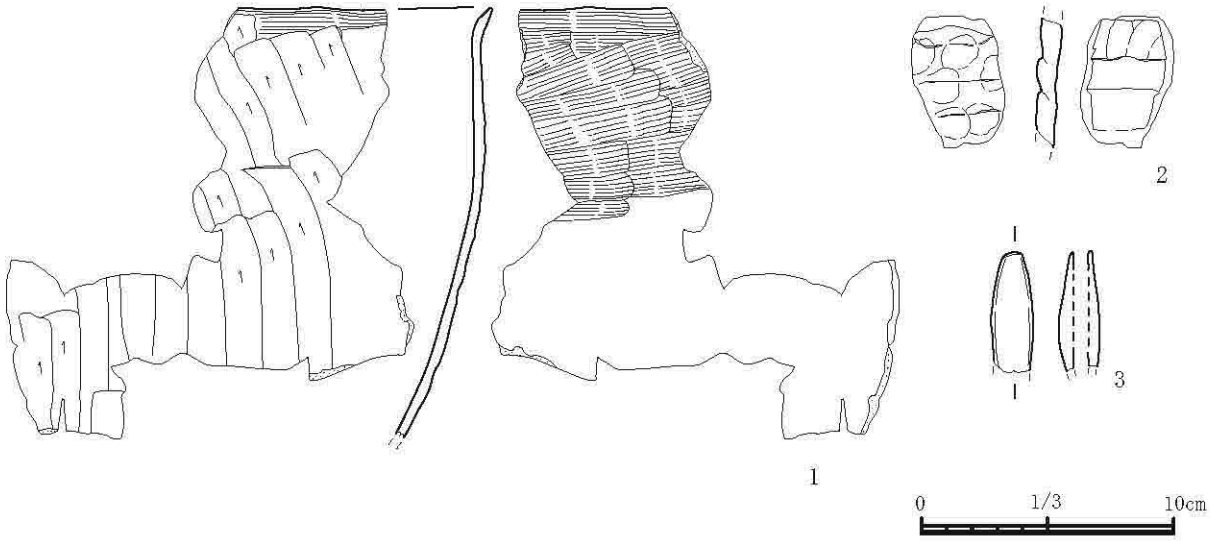
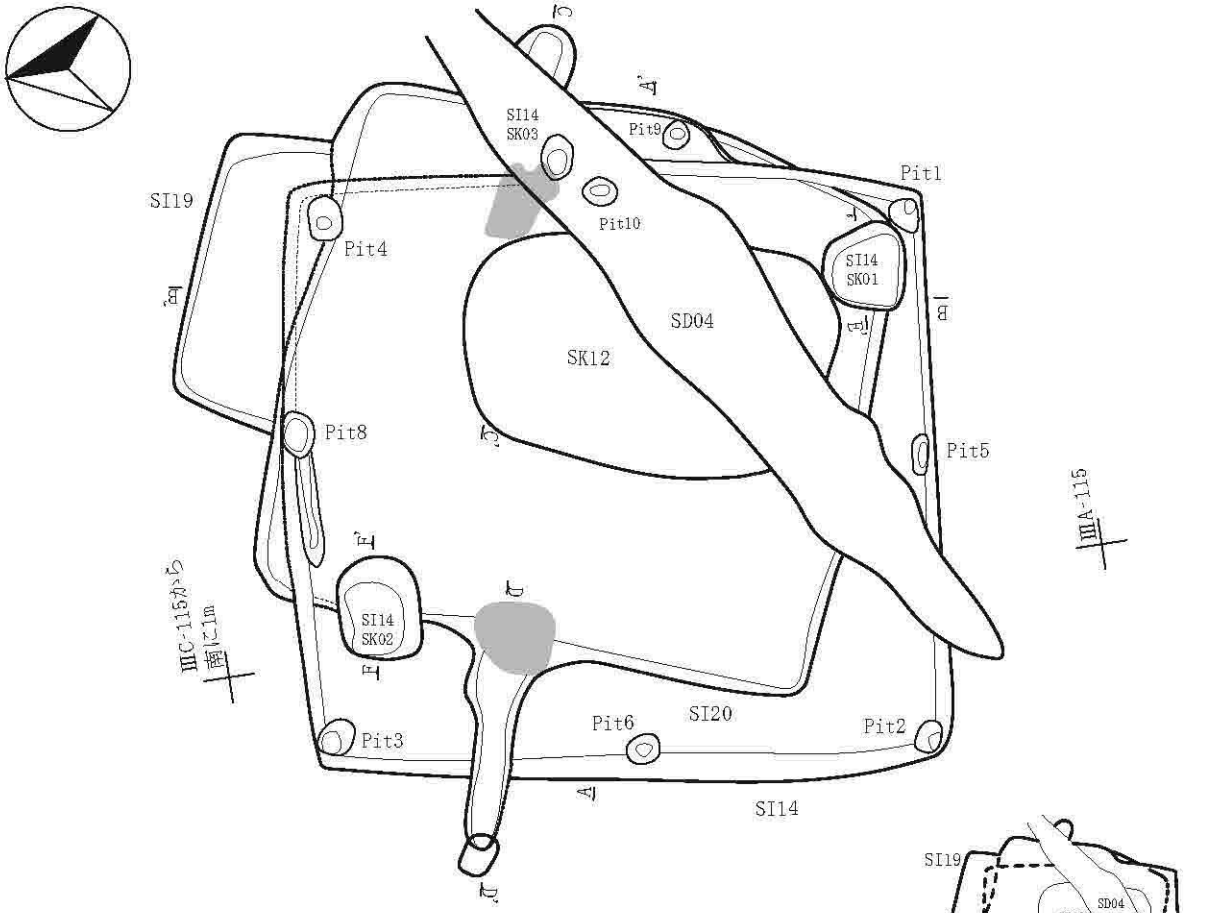
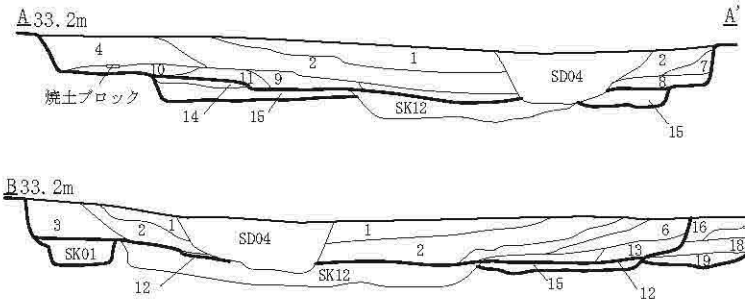
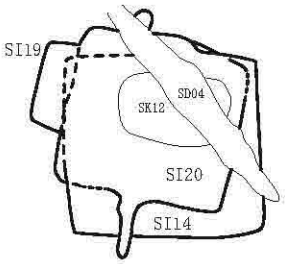


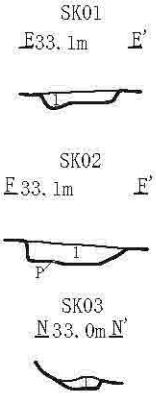
図38 第13号竪穴住居跡（2）及び出土遺物







SI14
1層 10YR2/2黒褐色土　10YR6/8明黄褐色ローム粒1%、5YR5/8明赤褐色焼土粒1%。
2層 10YR3/1黒褐色土　10YR6/8明黄褐色ローム粒3%、5YR5/8明赤褐色焼土粒1%、炭化物1%
3層 10YR3/4暗褐色土　10YR6/8明黄褐色土ブロック7%、5YR4/8赤褐色焼土粒1%、炭化物1%
4層 10YR4/4褐 色 土　10YR5/8黄褐色土30%
5層 10YR2/3黒褐色土　10YR4/6褐色土10%、5YR4/8赤褐色焼土粒1%
6層 10YR3/3暗褐色土　10YR4/6褐色土3%、10YR6/8明黄褐色ローム粒1%
7層 10YR2/3黒褐色土　10YR6/8明黄褐土1%、炭化物%
8層 10YR3/1黒褐色土　10YR6/8明黄褐色土10%、10YR6/4にぶい黄褐色土5%、炭化物1%
9層 10YR3/2黒褐色土　10YR6/8明黄褐色土5%。
10層 10YR2/2黒褐色土　10YR5/8黄褐色土ブロック30%、5YR4/8赤褐色焼土粒1%
11層 10YR2/2黒褐色土　10YR6/8明黄褐色土5%
12層 10YR4/2灰黄褐色土 10YR6/8明黄褐色土ブロック10%、5YR3/4暗赤褐色焼土粒1%
13層 10YR3/4暗褐色土　10YR6/8明黄褐色土20%、炭化物1%
SI14内SK01
1層 10YR3/2黒褐色土　10YR3/4暗褐色土5%、10YR5/6黄褐色土3%、10YR6/4にぶい黄褐色粘土1%。
SI14内SK02
1層 10YR3/1黒褐色土　10YR6/6明黄褐色土15%、10YR3/3暗褐色土5%
SI14内SK03
1層 10YR4/4褐 色 土　10YR5/6黄褐色土20%、5YR5/8明赤褐色焼土7%、炭化物1%
SI19
16層 10YR3/3暗褐色土　10YR6/8明黄褐色土5%、5YR3/4暗赤褐色焼土粒1%
17層 10YR4/6褐 色 土　10YR5/8黄褐色土30%。
18層 10YR2/3黒褐色土　10YR5/8黄褐色土20%、10YR4/3にぶい黄褐色土2%、炭化物1%
19層 10YR5/6黄褐色土　10YR2/2黒褐色土10%、10YR6/4にぶい黄褐色土5%
SI20
14層 10YR3/4暗褐色土　10YR5/8黄褐色土20%
15層 10YR5/8黄褐色土　10YR2/2黒褐色土7%、10YR6/4にぶい黄褐色土3%



カマド火床面範囲

0　1/60　2m

図 39　第 14・19・20 号竪穴住居跡

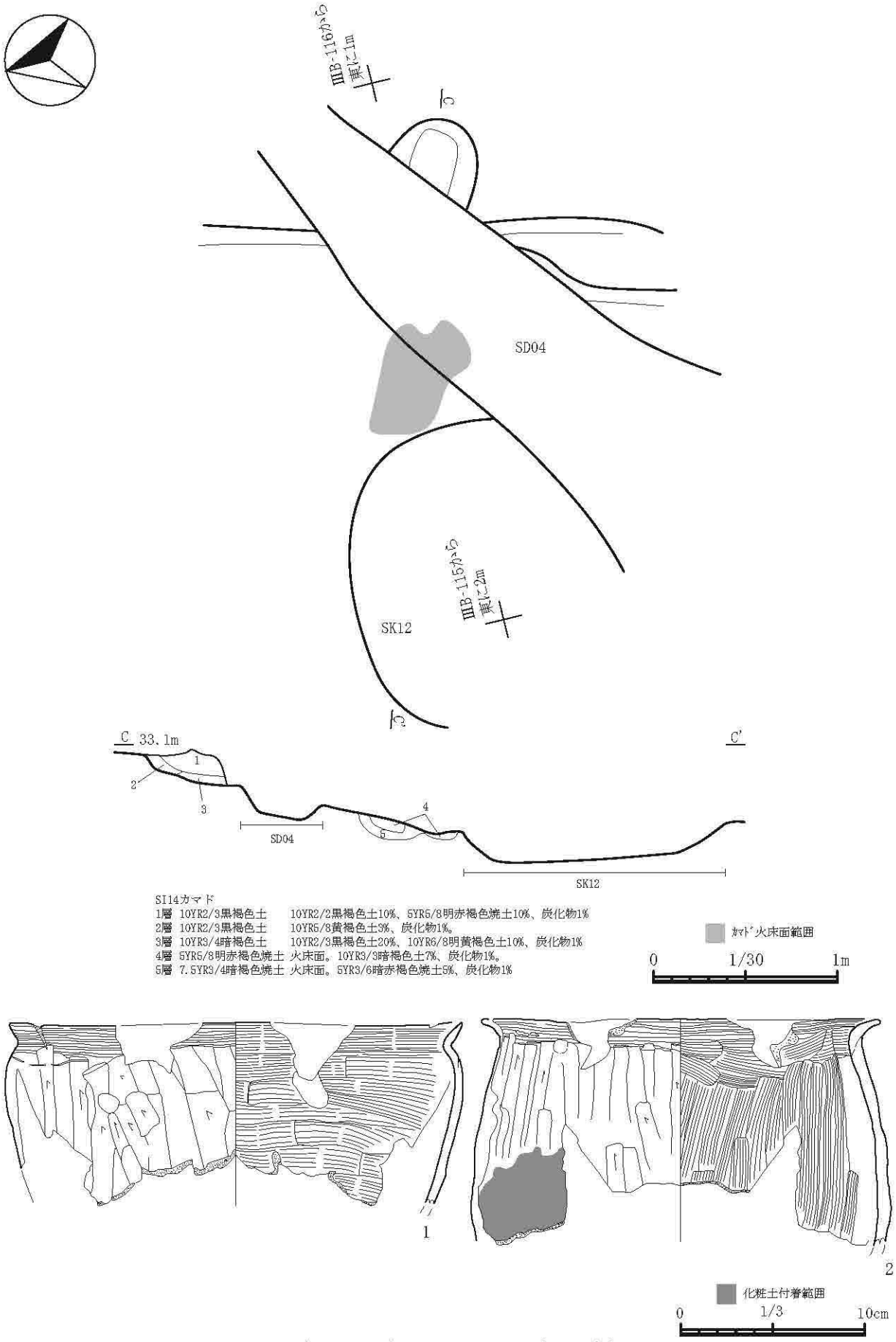


図 40　第 14 号竪穴住居跡（2）及び出土遺物（1）

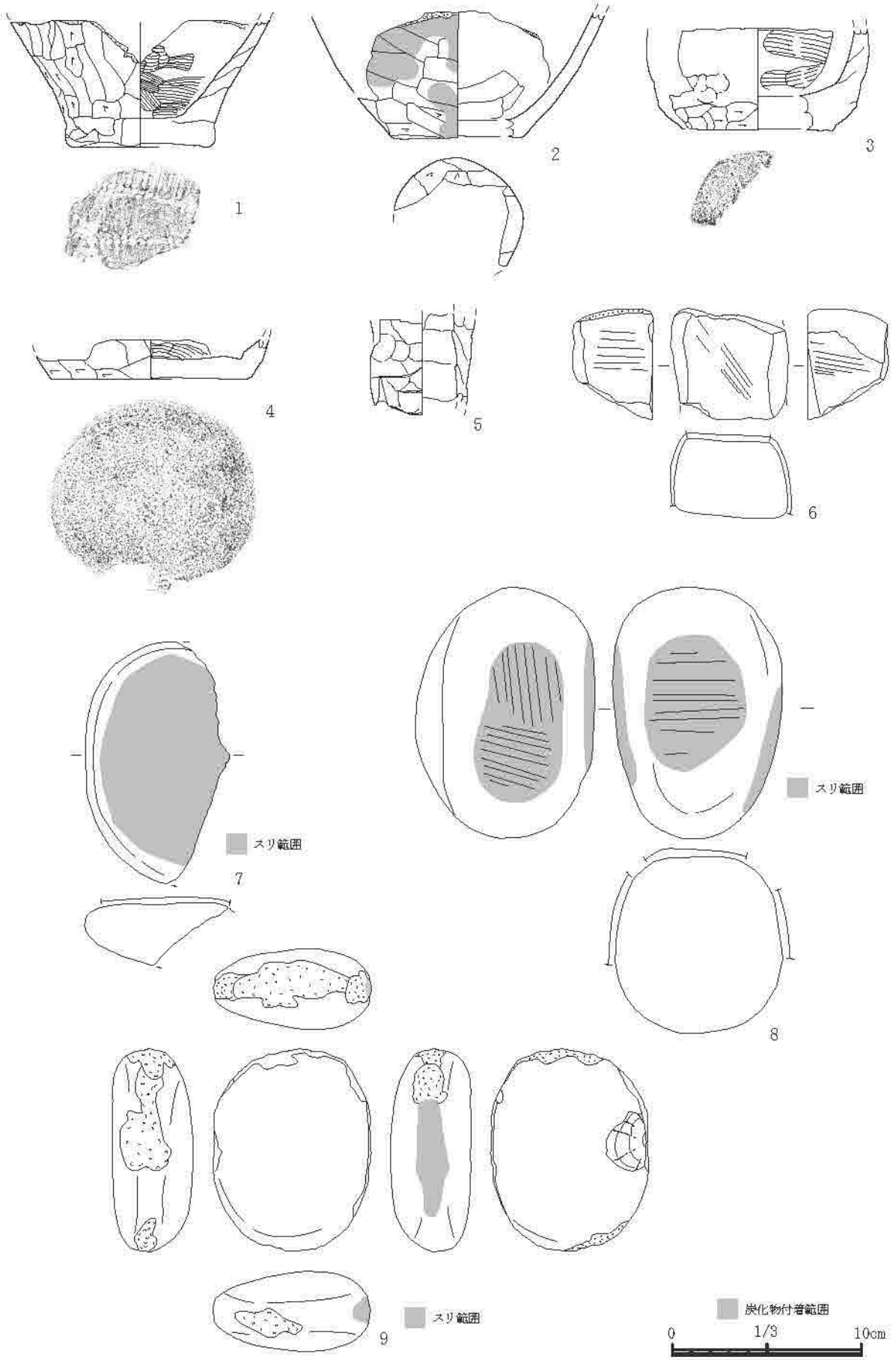


図 41　第 14 号竪穴住居跡出土遺物（2）

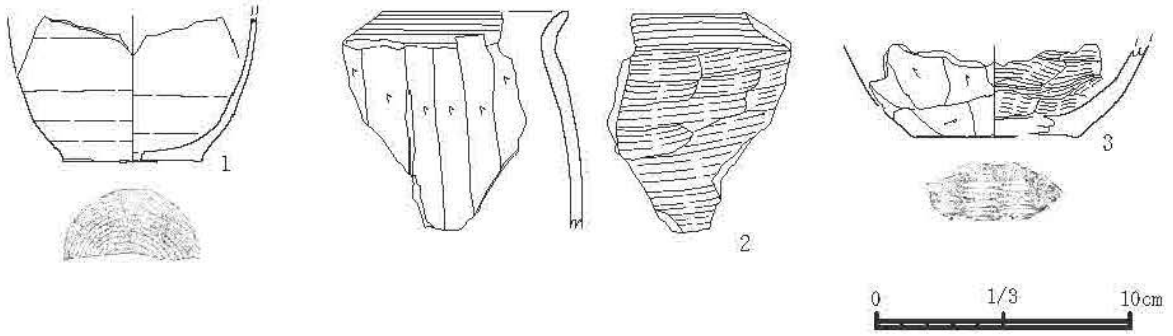


図 42　第 19 号竪穴住居跡出土遺物

は最大 40 cmを測る。床面は平坦である。**壁周溝**　北西壁、南西隅に検出した。**カマド**　北東壁の中央部よりやや左寄りに検出した。煙道部の構造は半地下式煙道A類である。袖は礫を芯材にして構築されている。堆積土は 19 層に分層できた。15 層が火床面である。**柱穴・土坑**　柱穴 26 基検出した。**出土遺物**　堆積土から土師器、土製支脚、羽口が出土している。図 46- 1はロクロ坏である。本遺跡からは唯一の出土である。図 46- 2は非ロクロ坏である。図 46- 3～図 47- 1 ～ 6は土師器甕である。図 46- 3～図 47- 1 ・ 2 ・ 4 ・ 5は大甕である。図 47- 7は小甕である。図 47- 9は火床面に成立していた土製支脚。10 は羽口である。被熱痕や溶着物の付着は確認できない。**小結**　本遺構は出土遺物や柱穴の配置から平安時代（10 世紀後半以降）に構築された竪穴住居跡と思われる。

第 15b 号竪穴住居跡 (SI15b)

規模・平面形　規模は長軸 6.0 m、短軸 4.8 mの方形を呈する。堆積土　17 ～ 24 層が住居の堆積土である。暗褐色土を主体とする。**壁面・床面**　壁面は 15 a 号に壊されており不明である。床面は凹凸が見られる。**壁周溝**　北東壁側を除き存在する。**カマド**　15 a 号と同一であったと思われる。柱穴・土坑　柱穴 8 基検出した。**出土遺物**　なし。**小結**　本遺構は 15 a 号以前の竪穴住居跡である。

第 16 号竪穴住居跡 (SI16)（図 48･49）

位置･確認　ⅡP～ⅡQ-111･112 グリッドに位置している。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　なし。**規模･平面形**　規模は長軸 3.5 m・短軸 3.4 mの隅丸方形を呈する。カマドは 1 基検出した。N -66°　-W に主軸を持つ。**堆積土**　6 層に分層できた。黒褐色土が主体である。3 層より下位から炭化材が出土したため焼失家屋と考えられる。住居上屋構造材と推定される。**壁面・床面**　壁面はほぼ垂直に立ち上がる。確認面までの深さは最大 20 cmを測る。床面は掘方埋土によってほぼ平坦に整えられている。**壁周溝**　なし。**カマド**　北西壁の中央に位置している。煙道部の構造は半地下式煙道 D 類である。堆積土は 10 層に分層できた。10 層が火床面である。**柱穴・土坑**　なし。**出土遺物**　堆積土下層及び床面から土師器、石器が出土している。図 49- 1 ・ 2は口縁部に横走沈線が施されるものである。 1は外面に炭化物が多量に付着している。 4 ・ 5は内外面に刷毛目調整が施される。 8は高坏である。体部中央に沈線が施されている。堆積土から出土した炭化材の樹種同定を行った結果、C - 1はニシキギ属、C - 2・ 4はクリ、C - 3 ・ 5 ～ 12 はモクレン属と同定された（第 4 章第 2 節参照）。**小結**　本遺構は出土遺物から奈良時代の竪穴住居跡である。

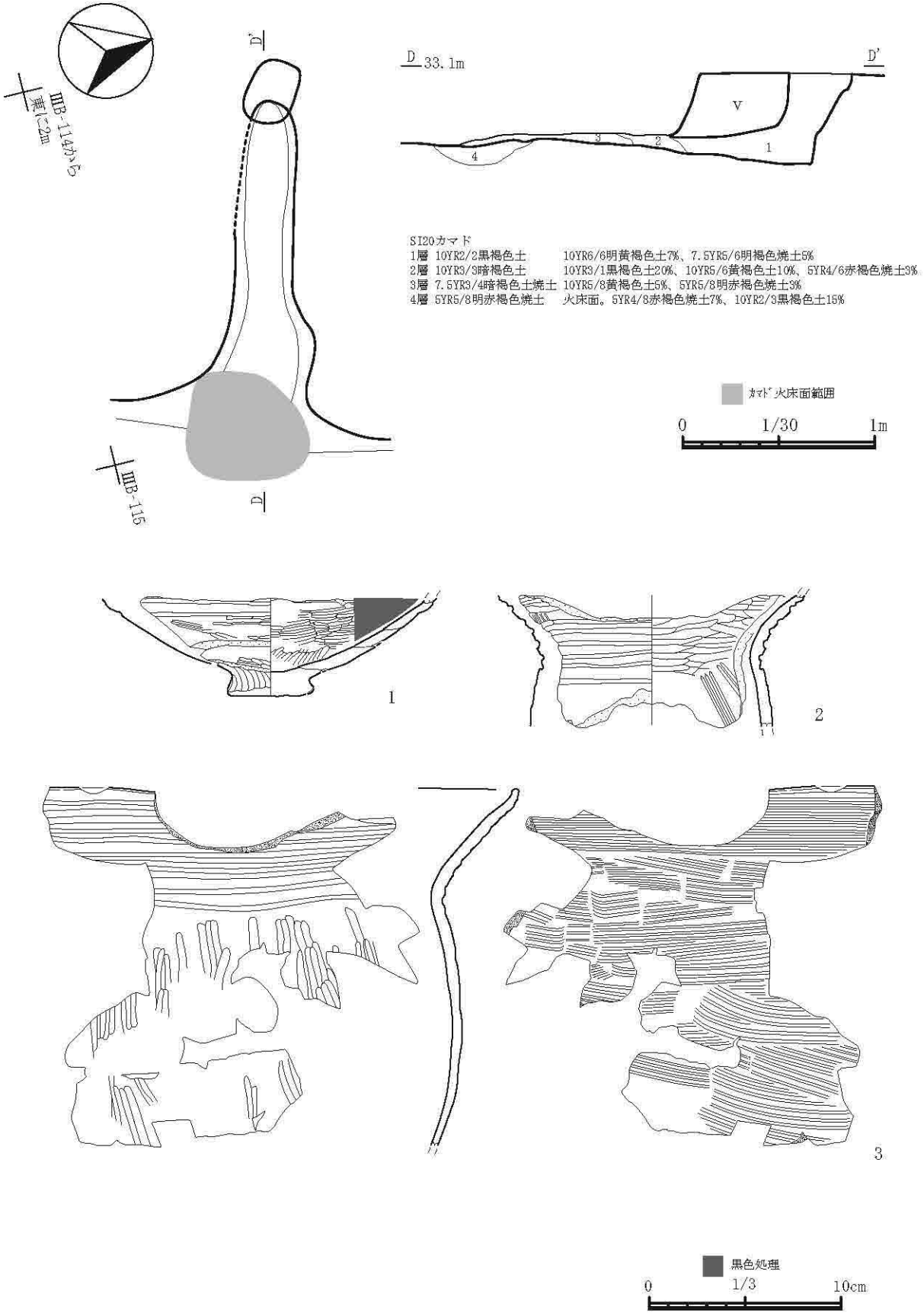


図 43　第 20 号竪穴住居跡及び出土遺物

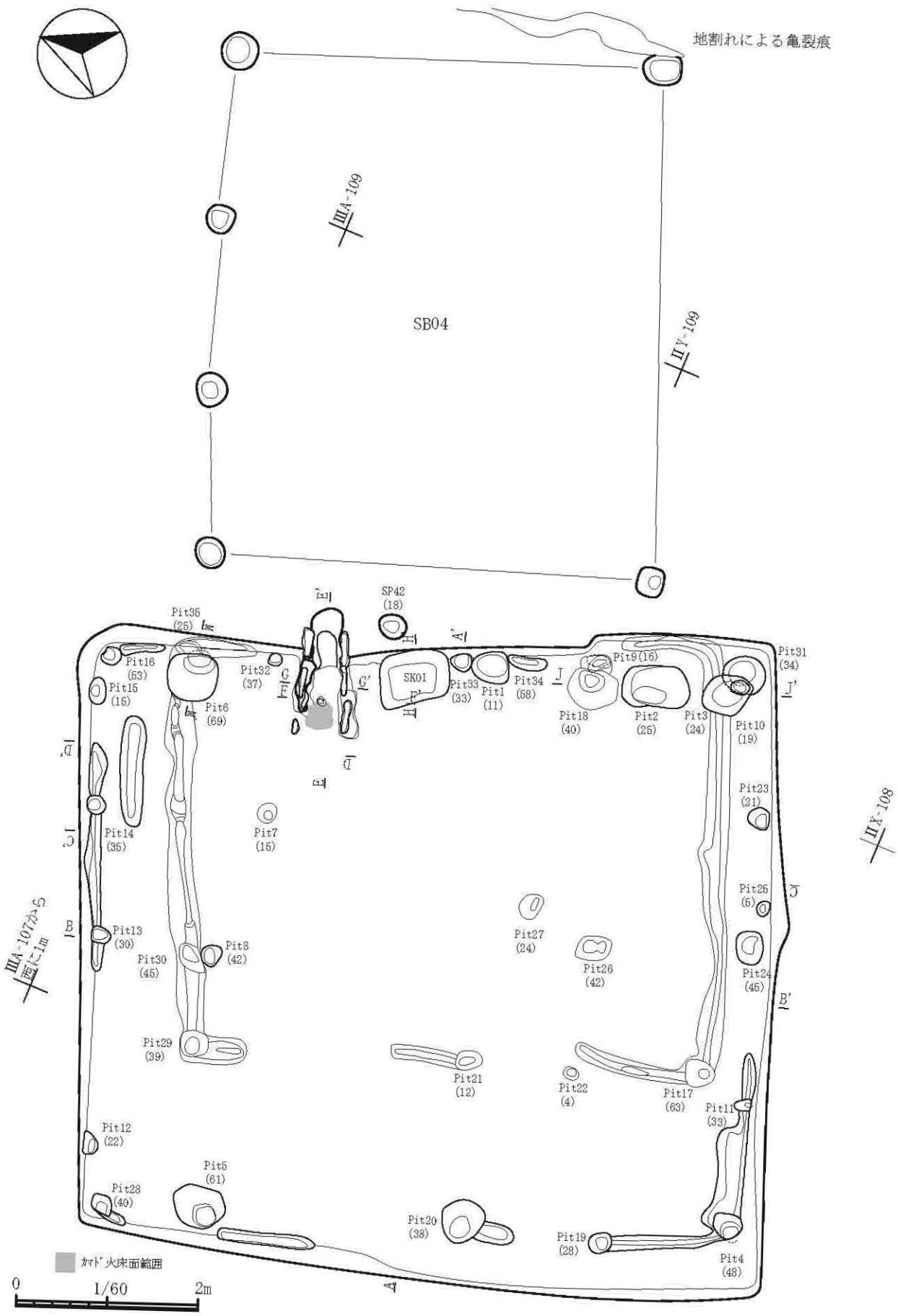
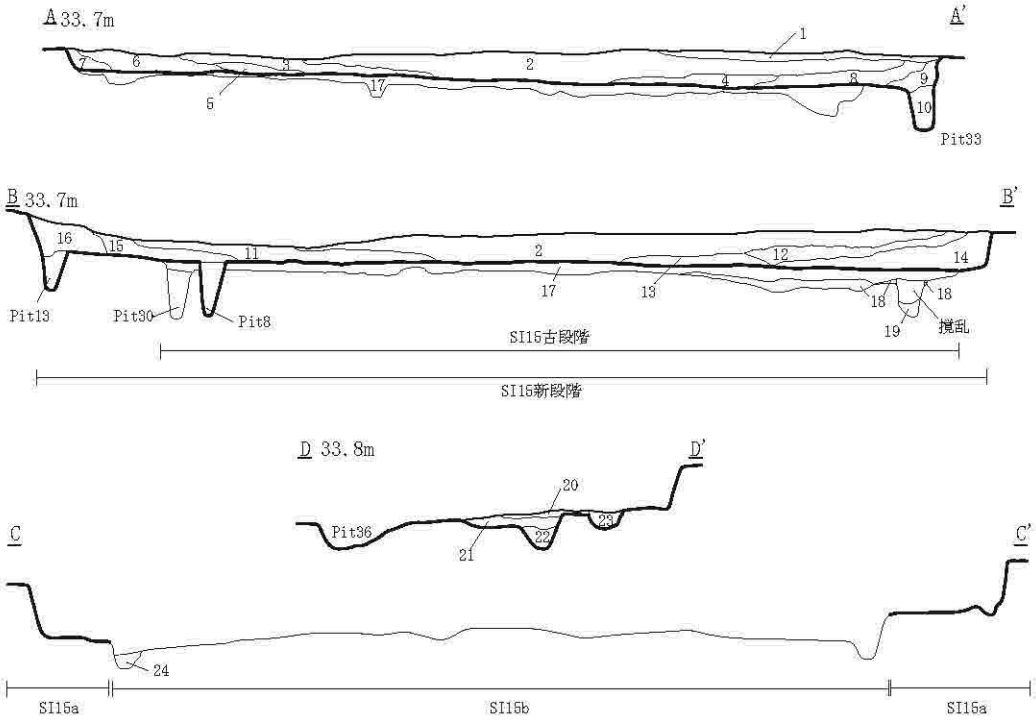
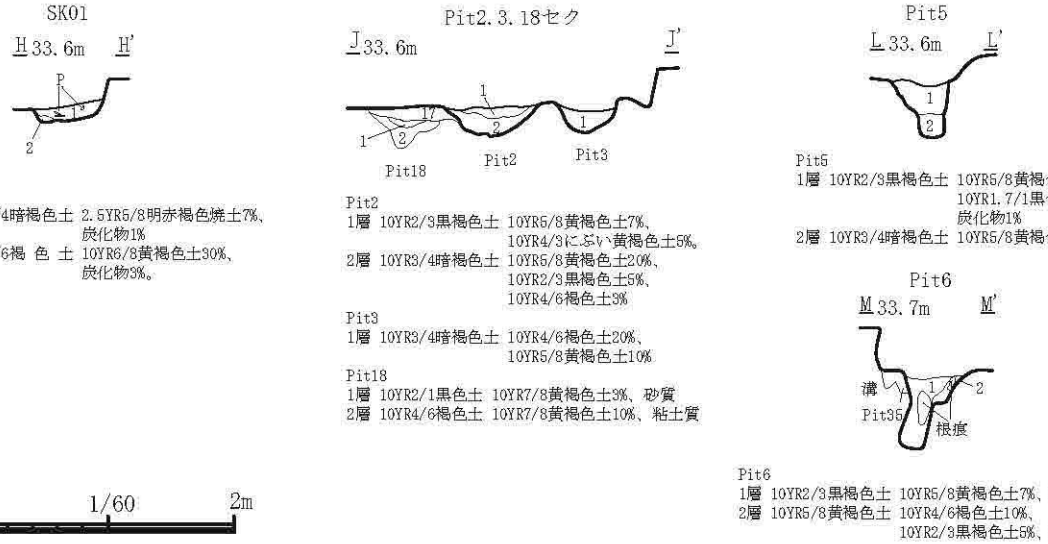


図 44　第 15 号竪穴住居跡（1）



SI15

1層	10YR3/1黒褐色土	10YR2/1黒褐色土10%、10YR6/8明黄褐色土3%、5YR5/8橙色焼土1%
2層	10YR2/3黒褐色土	10YR7/8黄橙色土3%、10YR8/4浅黄橙色ローム粒1%
3層	10YR4/4褐 色 土	10YR3/3暗褐色土5%、10YR5/8黄褐色土3%、炭化物1%
4層	10YR3/3暗褐色土	10YR6/8明黄褐色土5%、5YR7/6橙色焼土粒1%
5層	10YR5/8黄褐色土	10YR4/6褐色土5%
6層	10YR4/4褐 色 土	10YR5/8黄褐色土7%、10YR3/4暗褐色土3%、10YR6/6明黄褐色土1%、5YR5/6明赤褐色焼土1%
7層	10YR5/6黄褐色土	10YR4/4褐色土7%、10YR6/4にぶい黄橙色土3%。
8層	10YR3/4暗褐色土	10YR5/8黄褐色土3%、5YR5/8明赤褐色焼土粒1%、10YR8/6黄橙色土1%、5YR4/8赤褐色焼土粒1%
9層	10YR4/4褐 色 土	10YR6/8明黄褐色土15%、5YR4/8赤褐色焼土粒1%
10層	10YR3/3暗褐色土	10YR5/6黄褐色土5%、5YR4/6赤褐色焼土粒1%(Pit33)
11層	10YR5/4にぶい黄褐色土	10YR6/6明黄褐色土5%、10YR2/3黒褐色土3%
12層	10YR4/3にぶい黄褐色土	10YR7/6明黄褐色土5%、10YR2/2黒褐色土5%
13層	10YR3/4暗褐色土	10YR4/6褐色土3%
14層	10YR4/4褐 色 土	10YR5/6黄褐色土10%、10YR6/4にぶい黄橙色土3%
15層	10YR3/3暗褐色土	10YR7/6黄橙色土5%
16層	10YR6/8明黄褐色土	10YR3/4暗褐色土10%、10YR8/3浅黄橙色土1%
17層	10YR6/8明黄褐色土	掘方埋土　10YR3/4暗褐色土3%、粘土質
18層	10YR4/6褐 色 土	掘方埋土　10YR5/8黄褐色土1%、7.5YR橙色焼土粒1%
19層	10YR4/6褐 色 土	周溝　粘土質
20層	10YR4/6褐 色 土	掘方埋土　10YR2/2黒褐色土7%、10YR6/8明黄褐色土5%、10YR6/4にぶい黄橙色土3%
21層	10YR5/6黄褐色土	掘方埋土　10YR4/4褐色土10%、10YR3/3暗褐色土5%
22層	10YR3/3暗褐色土	周溝　10YR5/6黄褐色土5%、10YR3/2黒褐色土1%
23層	10YR6/8明黄褐色土	周溝　10YR5/6黄褐色土5%、10YR3/2黒褐色土1%
24層	10YR2/3黒褐色土	周溝　10YR3/3暗褐色土5%、10YR5/6黄褐色土7%



SK01
1層 10YR3/4暗褐色土 2.5YR5/8明赤褐色焼土7%、炭化物1%
2層 10YR4/6褐 色 土 10YR6/8黄褐色土30%、炭化物3%。

Pit2
1層 10YR2/3黒褐色土 10YR5/8黄褐色土7%、10YR4/3にぶい黄褐色土5%。
2層 10YR3/4暗褐色土 10YR5/8黄褐色土20%、10YR2/3黒褐色土5%、10YR4/6褐色土3%

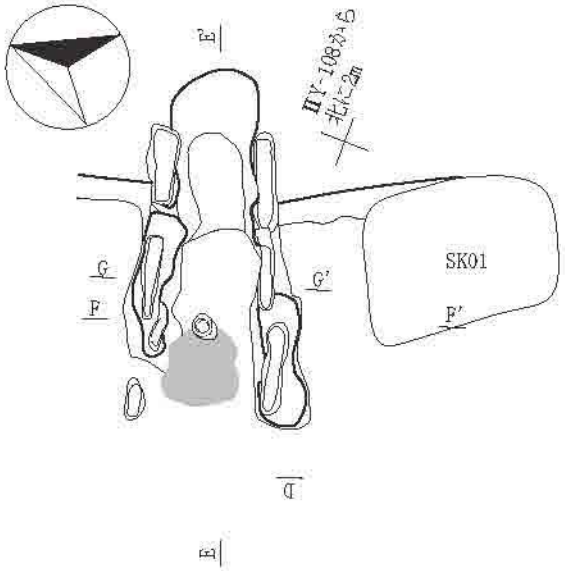
Pit3
1層 10YR3/4暗褐色土 10YR4/6褐色土20%、10YR5/8黄褐色土10%

Pit18
1層 10YR2/1黒色土 10YR7/8黄褐色土3%、砂質
2層 10YR4/6褐色土 10YR7/8黄褐色土10%、粘土質

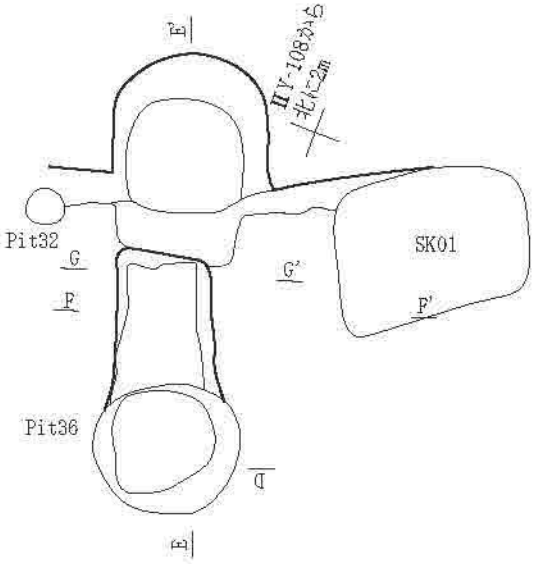
Pit5
1層 10YR2/3黒褐色土 10YR5/8黄褐色土20%、10YR1.7/1黒色土5%、炭化物1%
2層 10YR3/4暗褐色土 10YR5/8黄褐色土10%

Pit6
1層 10YR2/3黒褐色土 10YR5/8黄褐色土7%、炭化物1%。
2層 10YR5/8黄褐色土 10YR4/6褐色土10%、10YR2/3黒褐色土5%、炭化物1%。

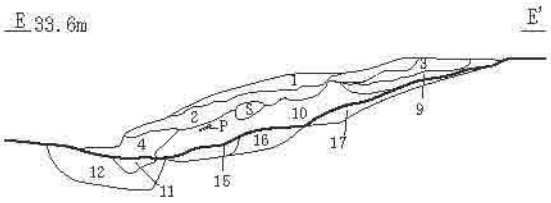
図 45　第 15 号竪穴住居跡（2）

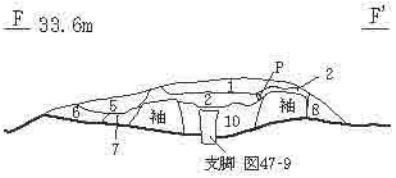


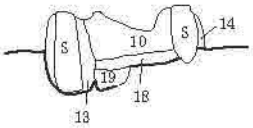
SI15カマド完掘状況



SI15カマド掘方完掘状況



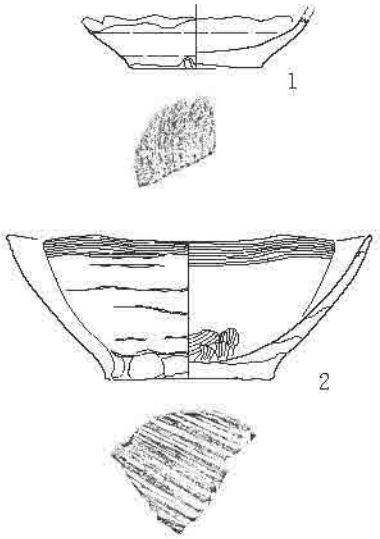




SI15カマド
1層 10YR3/4暗褐色土 5YR5/8明赤褐色焼土1%、炭化物1%
2層 10YR3/4暗褐色土 5YR5/8明赤褐色焼土3%、10YR6/8明黄褐色土1%
3層 10YR4/6褐 色 土 5YR5/8明赤褐色土20%
4層 10YR3/3暗褐色土 7.5YR6/8橙色土1%
5層 10YR3/3暗褐色土 5YR5/8明赤褐色焼土3%、炭化物1%
6層 10YR3/3暗褐色土 10YR2/3黒褐色土20%、5YR5/8明赤褐色焼土1%、10YR6/8明黄褐色土3%。
7層 10YR3/4暗褐色土 7.5YR4/3褐色土20%、10YR6/8明黄褐色土1%
8層 10YR4/4褐 色 土 5YR6/8橙色焼土3%
9層 10YR3/3暗褐色土 5YR5/8明赤褐色焼土粒10%、砂質
10層 10YR2/3黒褐色土 5YR5/8明赤褐色焼土粒1%、10YR6/8明黄褐色土1%
11層 10YR2/2黒褐色土 10YR6/8明黄褐色土1%、粘土質
12層 10YR2/2黒褐色土 10YR6/8明黄褐色土1%、粘土質
13層 10YR3/3暗褐色土 5YR5/8明赤褐色焼土粒1%、礫40%
14層 10YR2/3黒褐色土 炭化物1%、砂質
15層 10YR4/6褐 色 土 5YR5/8明赤褐色焼土粒30%、粘土質
16層 10YR4/6褐 色 土 炭化物1%、粘土質
17層 10YR4/6褐 色 土 粘土質
18層 10YR3/3暗褐色土 10YR6/8明黄褐色土1%、粘土質
19層 10YR2/3黒褐色土 10YR6/8明黄褐色土3%、粘土質

カマド火床面範囲

0 1/30 1m



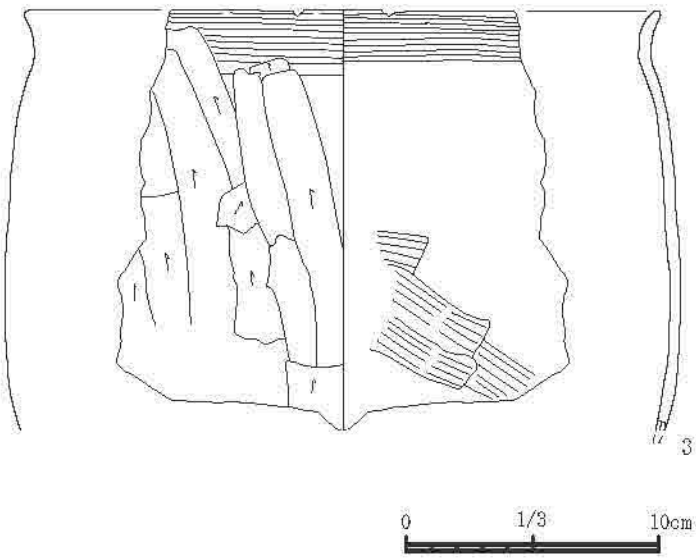


図46 第15号竪穴住居跡（3）及び出土遺物（1）

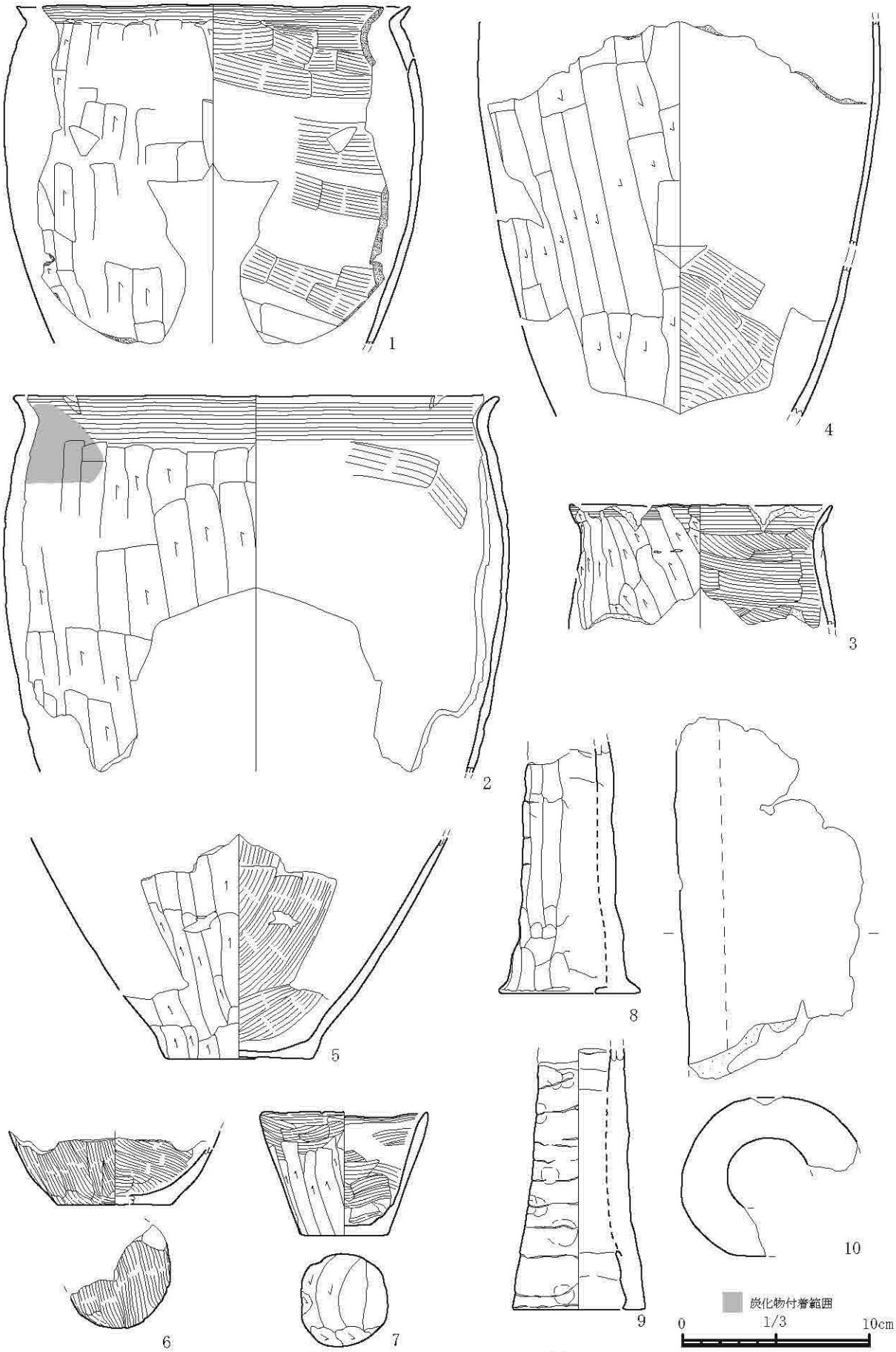


図 47　第 15 号竪穴住居跡出土遺物（2）

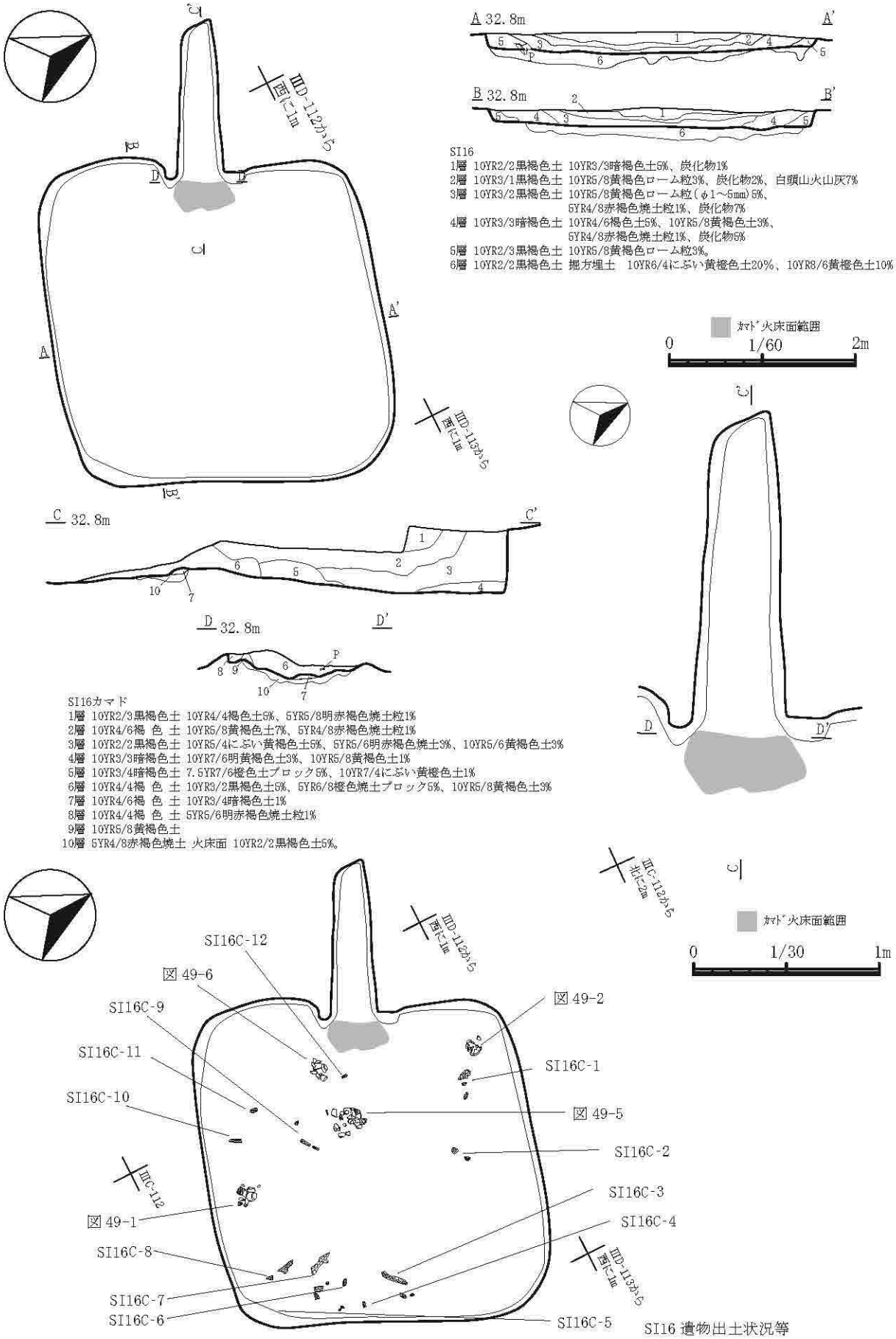


図 48　第 16 号竪穴住居跡

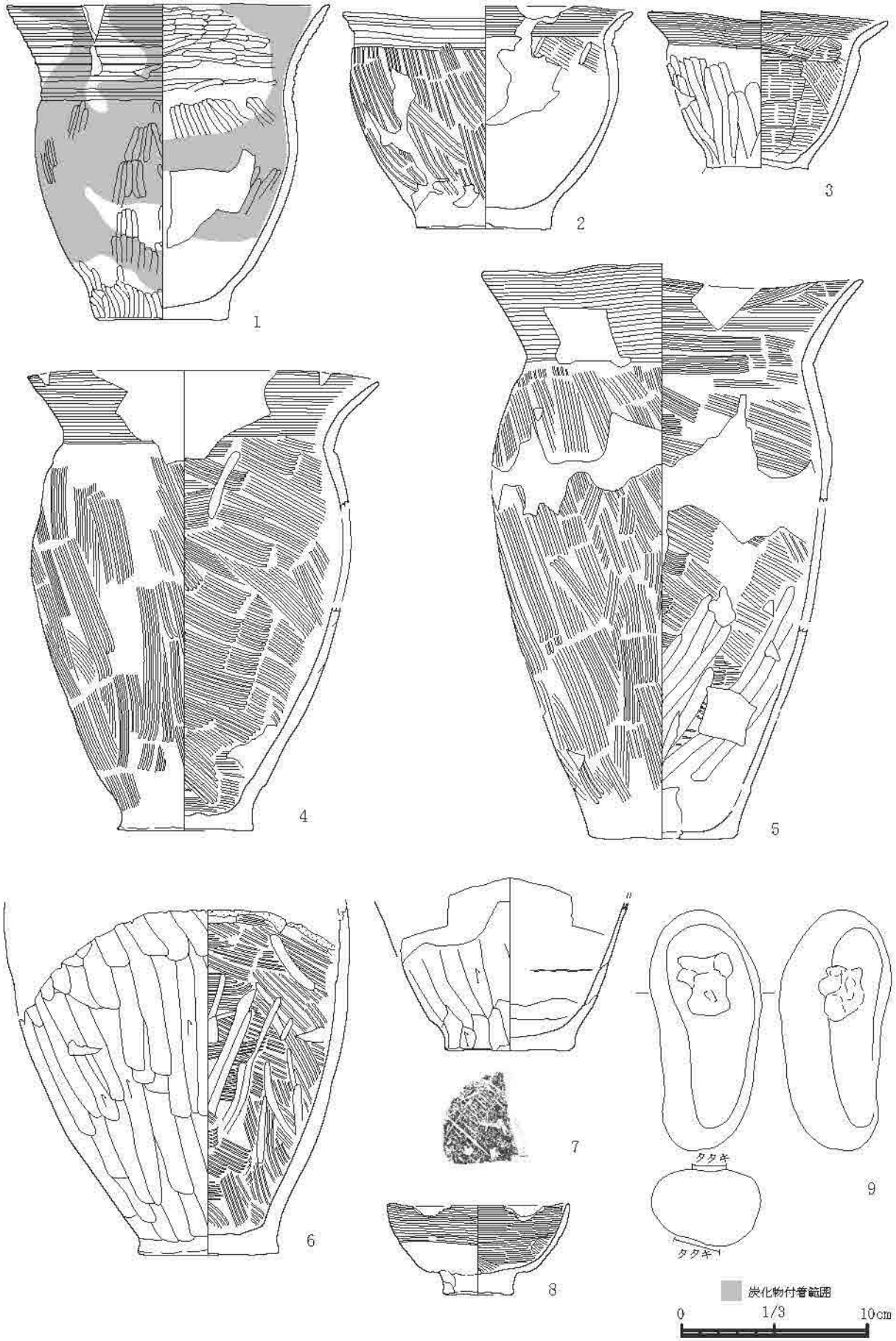


図 49　第 16 号竪穴住居跡出土遺物

第17号竪穴住居跡(SI17)(図50)

位置・確認　ⅢE-111・112グリッドに位置している。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　なし。**規模・平面形**　調査区域外に延びているため規模・平面形は不明である。**堆積土**　7層に分層できた。黒褐色土が主体である。**壁面・床面**　壁面は東側が緩やかに垂直に立ち上がる。確認面までの深さは最大16㎝を測る。床面は掘方埋土によってほぼ平坦に整えられている。**壁周溝**　東壁の一部を除いて全周する。**カマド**　なし。**柱穴・土坑**　柱穴は7基検出した。Pit 6・7が主柱穴で他の5基が補助柱穴と考えられる。土坑は1基検出した。出土遺物　堆積土から土師器甕と須恵器甕が出土した。**小結**　本遺構は出土遺物から平安時代（10世紀後半以降）の竪穴住居跡である。

第18号竪穴住居跡(SI18)(図51･52)

位置･確認　ⅡP～ⅡQ-103･104グリッドに位置している。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　なし。**規模･平面形**　調査区外に延びていくため規模・平面形共に不明である。**堆積土**　7層に分層できた。黒褐色土が主体である。**壁面・床面**　壁面はほぼ垂直に立ち上がる。確認面までの深さは最大50㎝を測る。床面は平坦である。**壁周溝**　東壁以外に巡る。**カマド**　北東壁に1基検出した。煙道部の構造は半地下式A類である。袖部は礫と暗褐色土で構築されている。堆積土は6層に分層できた。6層が火床面である。**柱穴・土坑**　柱穴は11基検出した。土坑は1基検出した。また、埋甕を1基検出した。**出土遺物**　床面及び堆積土から土師器、砥石が出土している。図52-1・2は大甕である。**小結**　本遺構は出土遺物から平安時代（10世紀後半以降）の竪穴住居跡である

第19号竪穴住居跡(SI19)(図39･42)

位置・確認　ⅢA・ⅢB-114・115グリッドに位置している。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　第14・20号竪穴住居跡と重複し、第14号竪穴住居跡より古く、第20号竪穴住居跡より新しい。**規模・平面形**　第14号住居跡に壊されているため規模・平面形は不明である。**堆積土**　4層に分層できた。黒褐色土が主体である。**壁面・床面**　壁面はほぼ垂直に立ち上がる。確認面までの深さは最大26㎝を測る。床面は平坦である。**壁周溝**　なし。**カマド**　なし。**柱穴・土坑**　なし。**出土遺物**　堆積土から土師器が出土している。図42-1はロクロ整形の甕である。本遺跡唯一の出土である。**小結**　本遺跡は出土遺物から平安時代の竪穴住居跡である。

第20号竪穴住居跡(SI20)(図39・43)

位置・確認　ⅢA・ⅢB-114･115グリッドに位置している。第14号竪穴住居跡精査中に確認した。**重複関係**　第14・19号竪穴住居跡、第12号土坑、第4号溝跡と重複し、本遺構が古い。**規模・平面形**　規模は長軸4.5ｍ、短軸3.9ｍの方形を呈する。カマドは1基検出した。N-73°-Wに主軸を持つ。**堆積土**　2層に分層できた。黒褐色土が主体である。**壁面・床面**　壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦である。**壁周溝**　なし。**カマド**　北西壁のほぼ中央に検出した。煙道部の構造は半地下式煙道D類である。堆積土は4層に分層できた。4層が火床面である。**柱穴・土坑**　なし。**出土遺物**　堆積土から土師器が出土している。図43-1は内面黒色坏、2・3は土師器甕で口縁部に横走沈線が施されている。**小結**　本遺構は出土遺物から奈良時代の竪穴住居跡である。

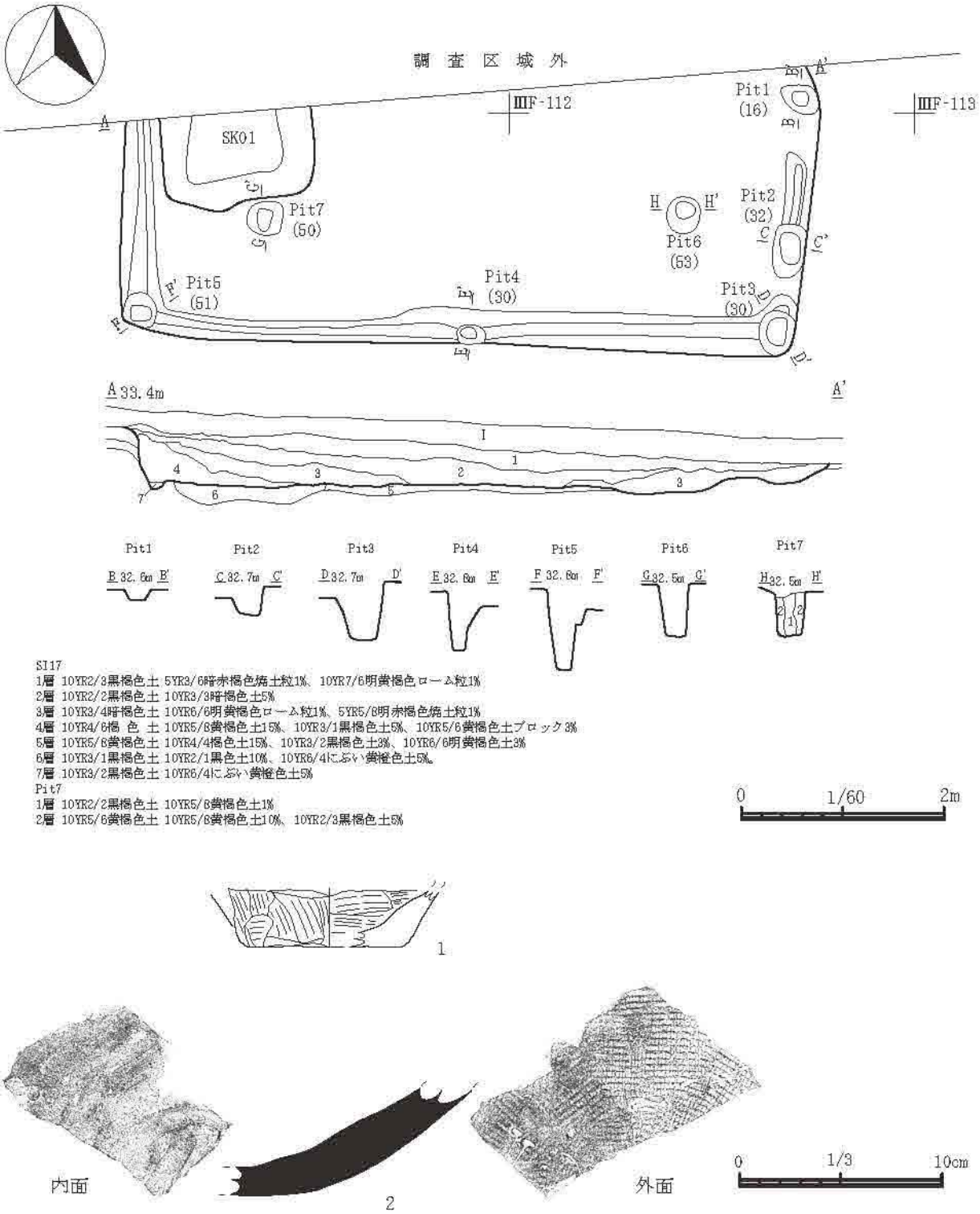


図 50　第 17 号竪穴住居跡及び出土遺物

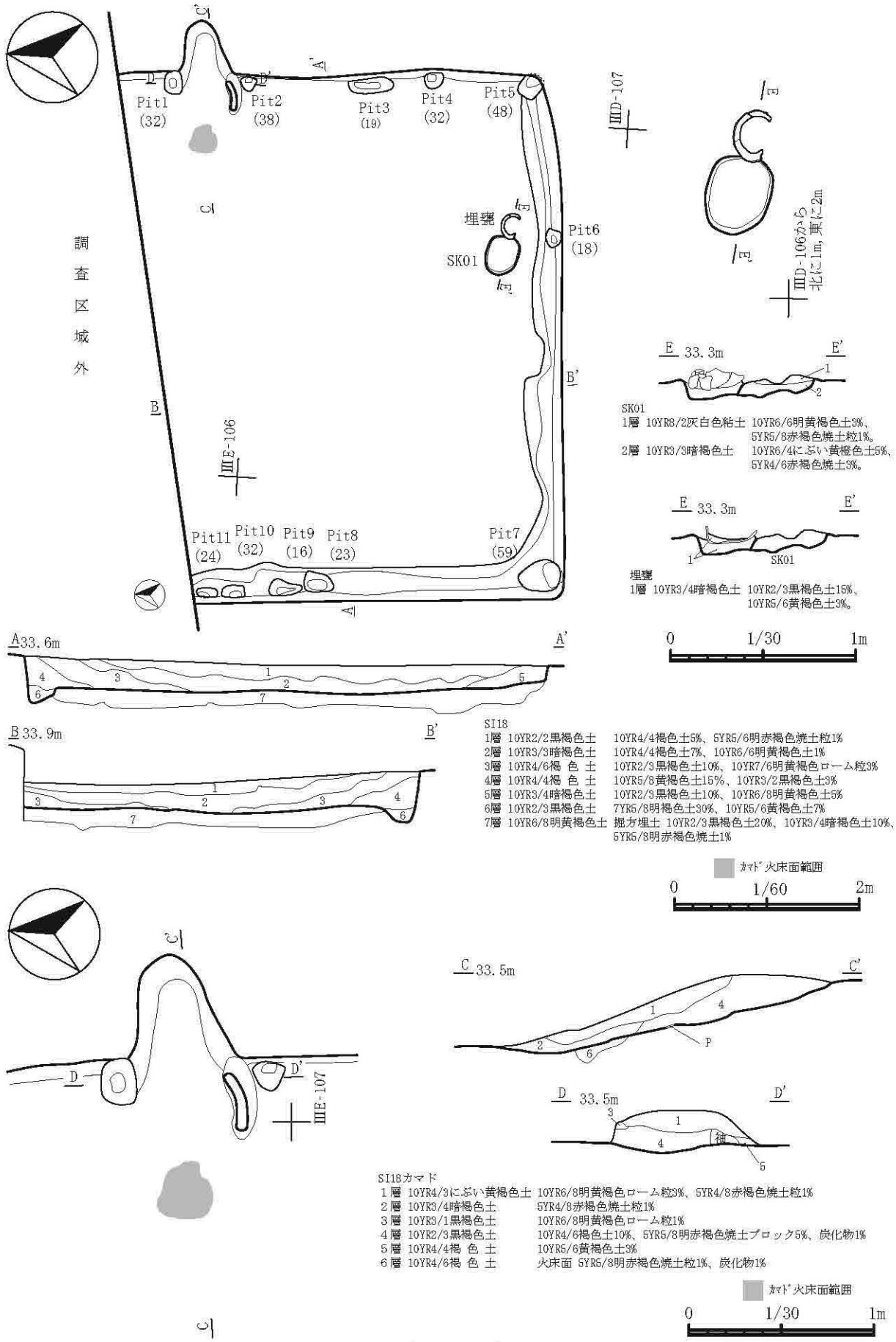


図 51　第 18 号竪穴住居跡

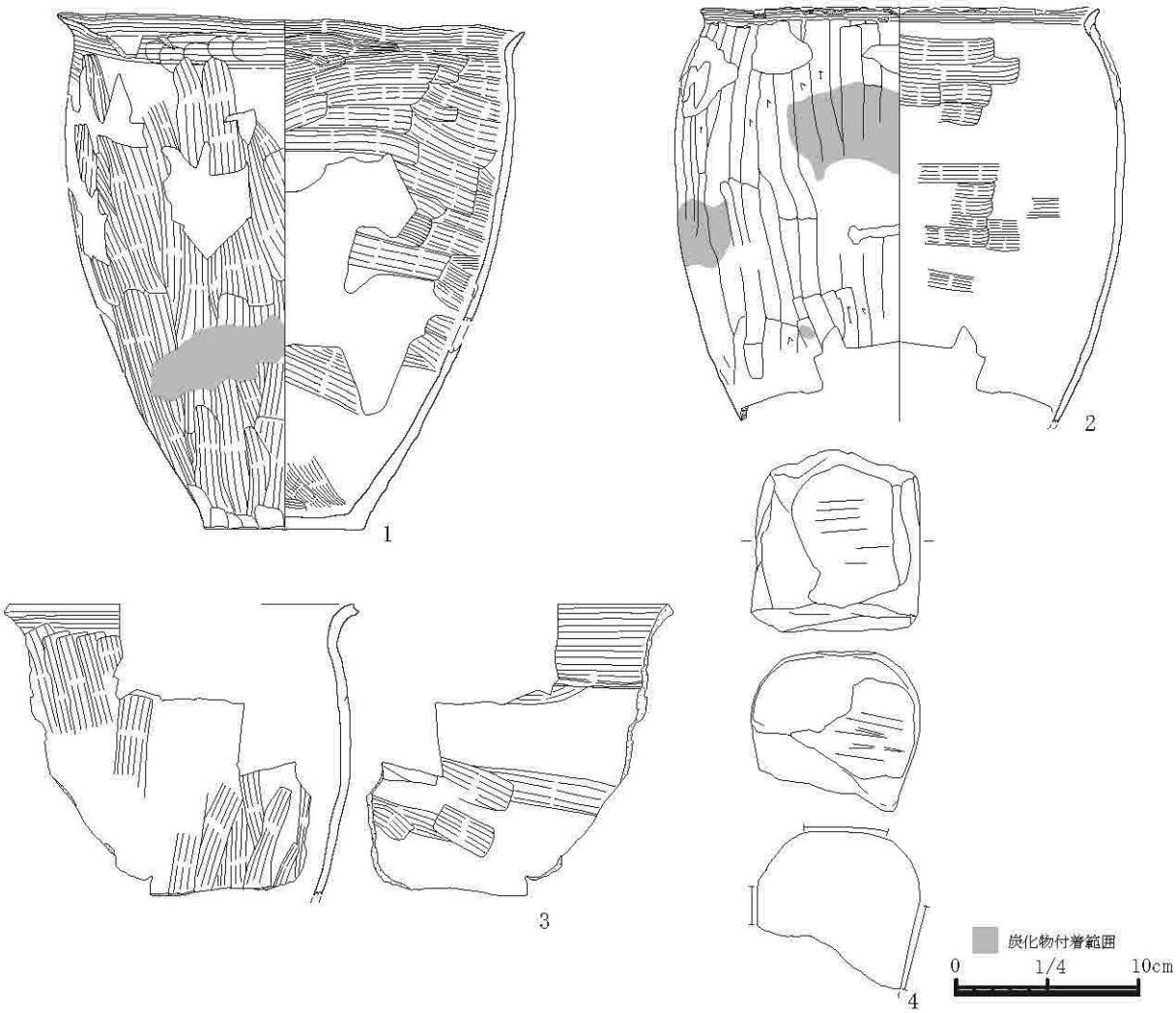


図 52　第 18 号竪穴住居跡出土遺物

２、土坑（図 53 ～ 55）

土坑は 16 基検出した。遺物が出土している土坑が少なく、時期については不明なものが多い。遺物が出土しているものや他遺構との重複関係から第 13 号土坑が縄文時代、第１・２・８・12 号土坑が平安時代の可能性がある。以下に代表的な土坑について記述するが、それ以外は規模は表２を参照いただきたい。

第１号土坑（SK01）（図 53）

位置・確認　Ⅱ M-109 グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　第１号掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。**規模・平面形**　長軸 2.68 m、短軸 2.63 mの方形である。深さ 23 cmである。**堆積土**　２層に分層できた。黒褐色土が主体である。**壁・底面**　壁は外傾しながら立ち上がる。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦である。**出土遺物**　堆積土から刀装具（図 53- １）、筒状の鉄製品（図 53- ２）が出土している。出土した炭化材の樹種同定を行った結果、Ｃ－１はキハダと同定された（第４章第２節参照）。**小結**　出土遺物から平安時代と思われる。

第２号土坑（SK02）（図 53）

位置・確認　ⅡN-113 グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　なし。**規模・平面形**　長軸 2.72 m、短軸 1.97 mの楕円形である。深さ 47 cmである。**堆積土**　３層に分層できた。黒褐色土が主体である。**壁・底面**　壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凹凸が見られる。**出土遺物**　堆積土から土師器甕（図 53- ３）、が出土している。**小結**　出土遺物から平安時代と思われる。

第８号土坑（SK08）（図 53）

位置・確認　ⅡR-107 グリッドに位置する。第 11 号竪穴住居跡調査中に確認した。**重複関係**　第 11 号竪穴住居跡と第２号溝跡と重複し、第 11 号竪穴住居跡より新しく、第２号溝跡より古い。**規模・平面形**　長軸 2.23 m、短軸 2.03 mの円形である。深さ 40 cmである。**堆積土**　４層に分層できた。黒褐色土が主体である。３層に白頭山－苫小牧火山灰が確認できた。**壁・底面**　壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。**出土遺物**　なし。**小結**　白頭山－苫小牧火山灰降下以前の構築と思われる。

第 12 号土坑（SK12）（図 54）

位置・確認　ⅢA-115 グリッドに位置する。第 14 号竪穴住居跡調査中に確認した。**重複関係**　第 14・20 号竪穴住居跡と第４号溝跡と重複し、第 14 号竪穴住居跡、第４号溝跡より古く、第 20 号竪穴住居跡より古い。**規模・平面形**　長軸 2.93 m、短軸 1.84 mの楕円形である。深さ 30 cmである。**堆積土**　２層に分層できた。黒褐色土が主体である。**壁・底面**　壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。**出土遺物**　土師器が出土している。図 54- １は非ロクロ坏である。図 54- ２は内面黒色の坏である。**小結**　出土遺物から平安時代と思われる。

第 13 号土坑（SK13）（図 54）

位置・確認　ⅡY-115 グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　なし。**規模・平面形**　長軸 2.47 m、短軸 2.32 mの円形である。深さ 151 cmである。**堆積土**　10 層に分層できた。黒色土が主体である。**壁・底面**　壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦である。**出土遺物**　縄文土器と石器が出土している。図 55- １は縄文時代早期前葉の土器である。図 55- ２は磨り石である。**小結**　出土遺物から縄文時代と思われる。

表２　金沢街道沢（１）遺跡土坑一覧表

遺構名		グリッド	確認	平面規模（m）	深さ（m）	付属施設	時代・時期
SK	1	ⅡM-109	Ⅳ	2.68×2.63	0.23		平安
SK	2	ⅡN-112・113	Ⅳ	2.72×1.92	0.47	底面北側にPit	平安
SK	3	ⅡS-116	Ⅳ	1.57×1.09	0.18		不明
SK	4	ⅢD-103	Ⅳ	1.07×0.44	0.17		不明
SK	5	ⅡW-117	Ⅳ	1.86×1.78	1.7		不明
SK	6	ⅡO-112	Ⅳ	1.09×1.02	0.21		不明
SK	8	ⅡR-107	Ⅳ	2.23×2.03	0.4		平安？
SK	9	ⅡN-115・116	Ⅳ	2.12×1.71	0.13		不明
SK	10	ⅡL・ⅡM-112	Ⅳ	2.66×(1.92)	0.42		不明
SK	12	ⅢA-115	Ⅳ	2.93×1.84	0.3		平安
SK	13	ⅡY-115	Ⅳ	2.47×2.32	1.51		縄文
SK	14	ⅢD-107	Ⅳ	0.81×0.54	0.13		不明
SK	15	ⅢA-118	Ⅳ	1.24×1.21	0.3		不明
SK	16	ⅡR-110	Ⅳ	1.33×1.15	0.18		不明
SK	17	ⅢA-118	Ⅳ	2.79×(2.57)	0.4		不明
SK	18	ⅢD-116	Ⅳ	1.23×1.18	0.2		不明

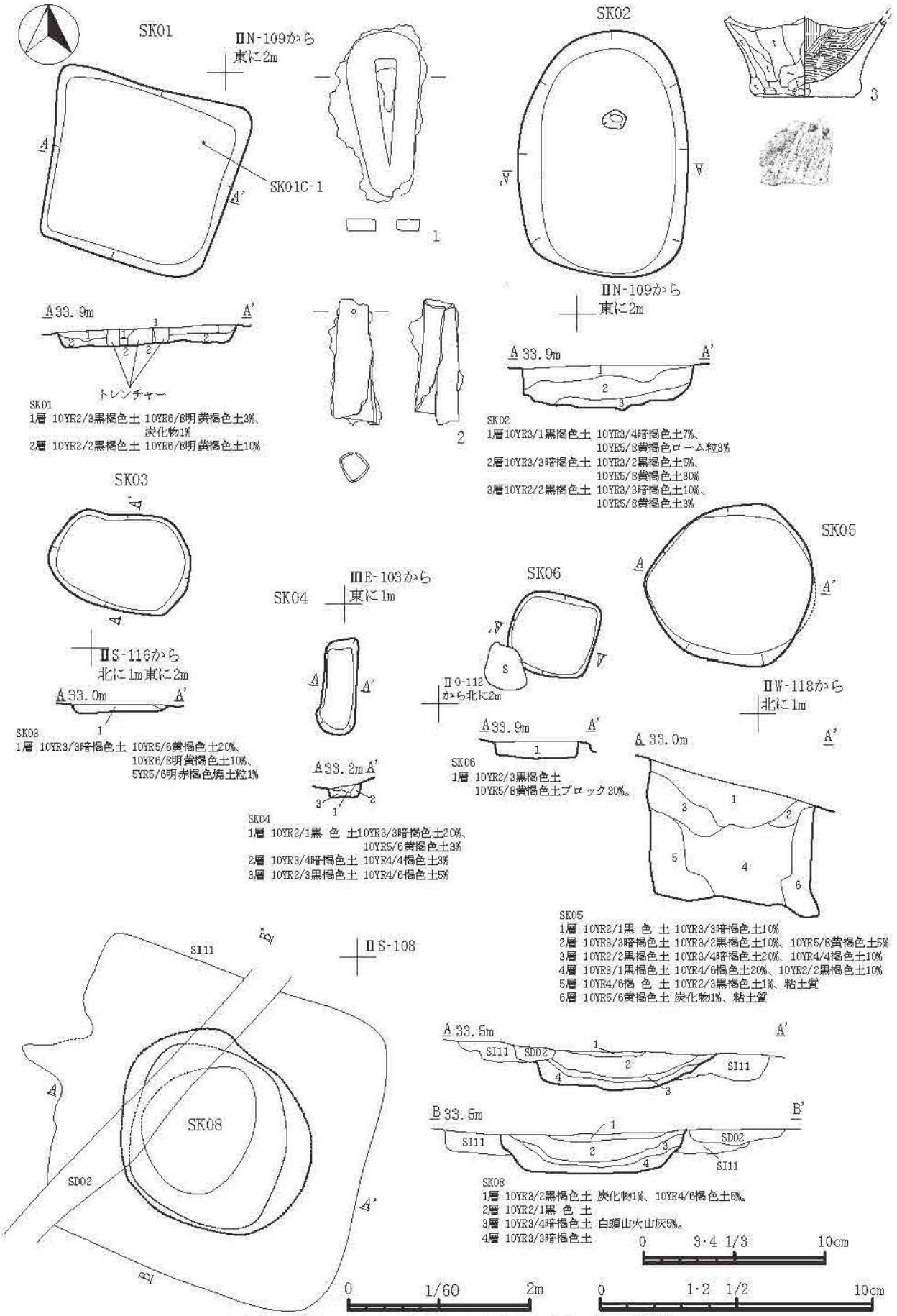
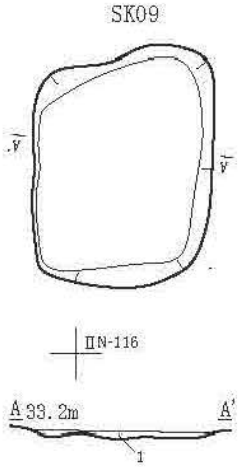
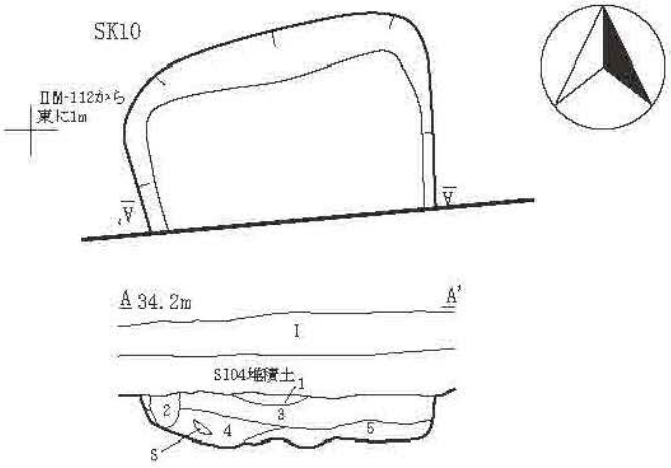


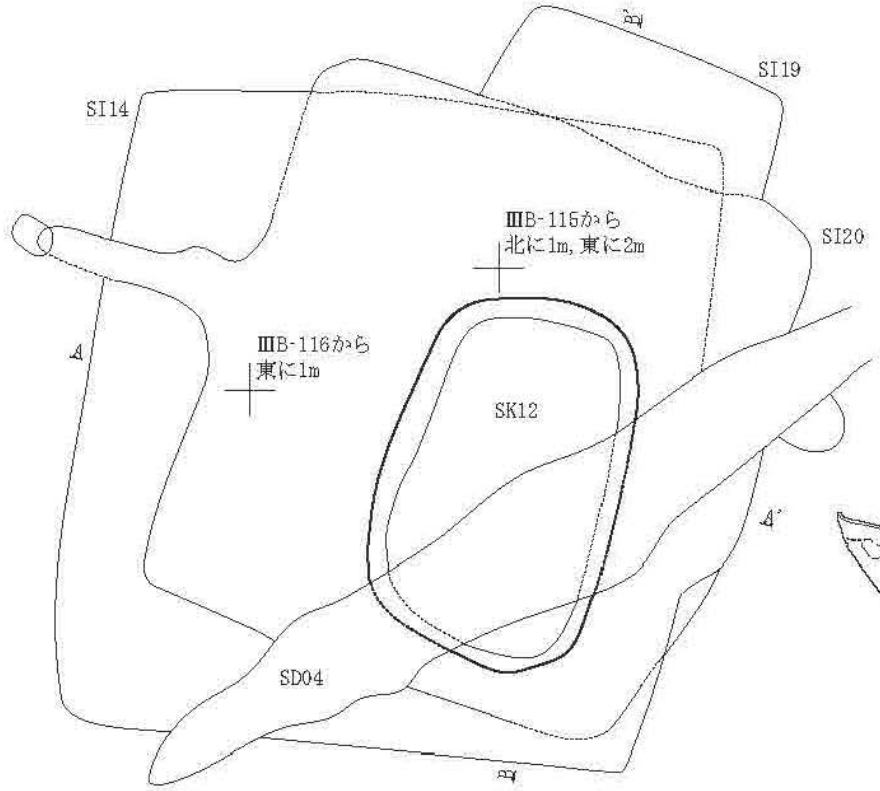
図53　第1・2・3・4・5・6・8号土坑及び出土遺物

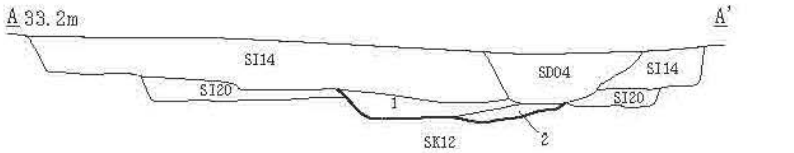


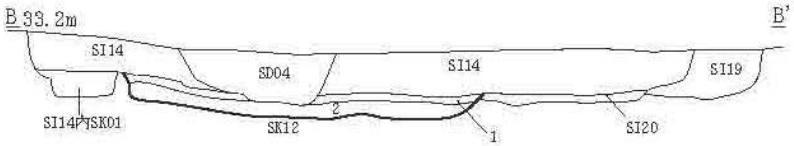


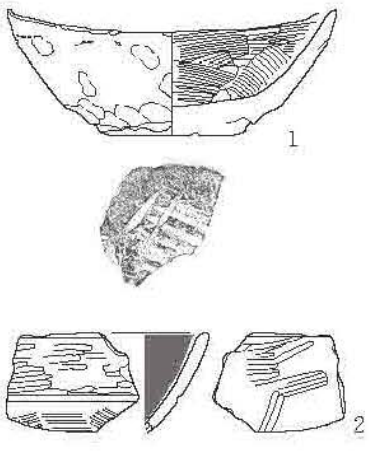
SK09
1層 10YR2/3黒褐色土 10YR5/8黄褐色土3%、炭化物1%

SK10
1層 10YR2/2黒褐色土　7.5YR3/4暗褐色焼土10%、5YR5/8明赤褐色焼土7%、10YR6/8明黄褐色土5%、炭化物1%
2層 10YR3/4暗褐色土　10YR2/2黒褐色土10%、10YR6/8明黄褐色焼土粒5%、5YR4/8赤褐色焼土粒5%。住居Pitか
3層 10YR2/3黒褐色土　10YR6/8明黄褐色ローム粒7%、5YR4/8赤褐色焼土粒3%、炭化物3%。
4層 10YR6/8明黄褐色土 10YR2/3黒褐色土20%、5YR4/8赤褐色焼土粒1%、炭化物1%。
5層 10YR2/1黒 色 土　10YR6/8明黄褐色土7%、5YR4/8赤褐色焼土粒5%、炭化物1%。









黒色処理

0　1·2　1/3　10cm

0　1/60　2m

SK12
1層 10YR2/1黒色土　10YR5/8明黄褐色ローム粒5%、5YR4/8赤褐色焼土粒1%
2層 10YR3/3暗褐色土 10YR6/8明黄褐色土10%、5YR3/4暗赤褐色焼土粒1%

図54　第9・10・12号土坑及び出土遺物

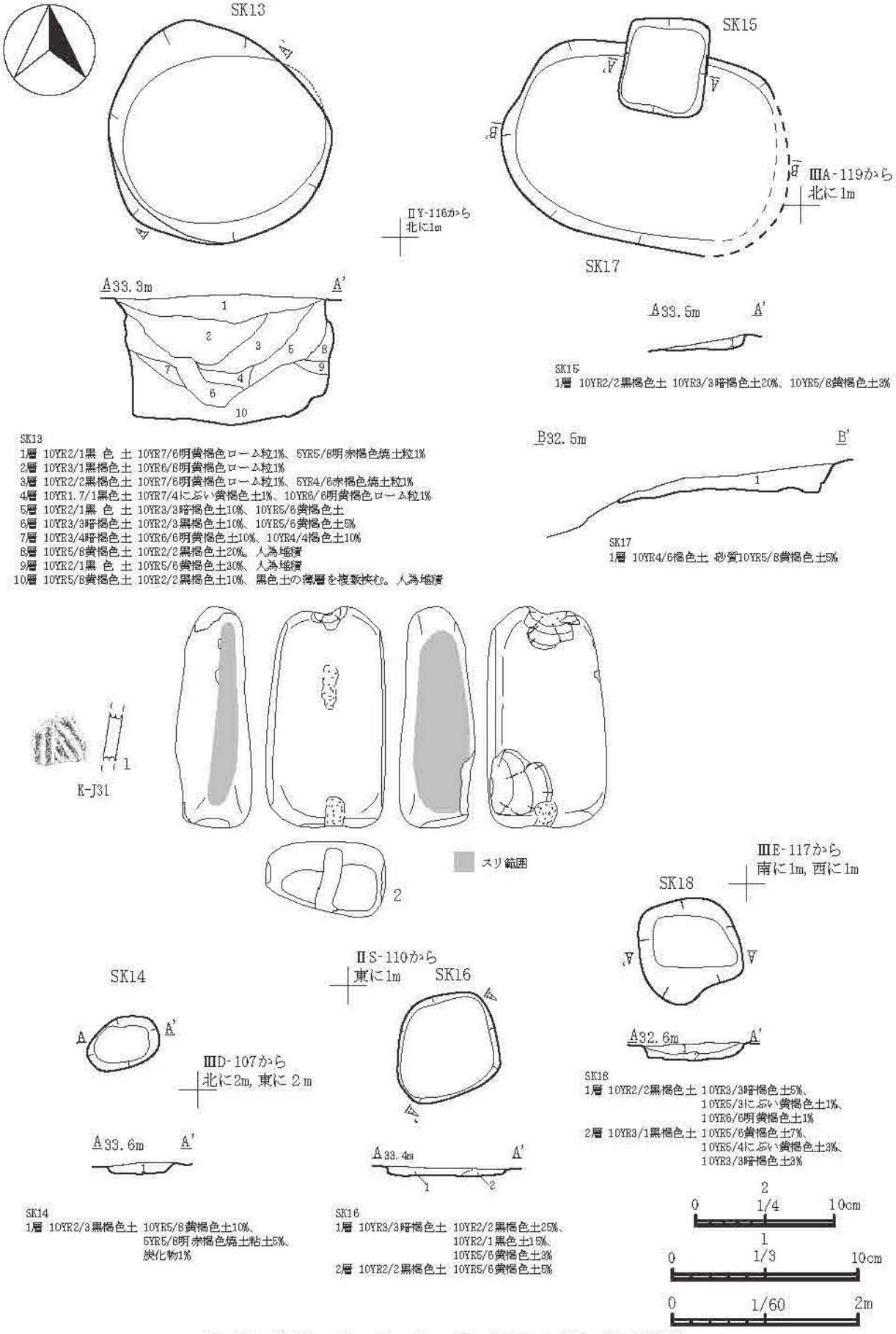


図55　第13・14・15・16・17・18号土坑及び出土遺物

３、溝跡

第１号溝跡（SD01）（図 56 ～ 58）

位置・確認　ⅡＫ～ⅡV-98 ～ 118 グリッドに位置する。Ⅲ～Ⅳ層で確認した。　**重複関係**　第２号溝跡と重複しており、本遺構が古い。**規模・平面形**　丘陵平坦面をコの字状に巡る。調査区内における総延長は 132 ｍである。幅 1.1 ～ 2.3 ｍ、深さ 1.5 ～ 2.7 ｍである。**堆積土**　堆積状況はいずれの断面図においても共通しており、上部に黒色土及び黒褐色土が堆積している。中部から下部にかけては暗褐色土を主体としている。**壁・底面**　壁は外傾しながら立ち上がる。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦である。７箇所に段差が検出された。亀裂による落ち込みによるものである。**出土遺物**　堆積土から土師器、須恵器、土錘、砥石が出土している。図 58- １・２は非ロクロ坏である。外面は口縁部にヨコナデ、内面はヘラナデである。３～６は甕である。６は大型の甕である。
図 58- ７は須恵器壺の肩部片である。ヘラ書きが見られ「夷」を表しているとも考えられるが詳細は不明である。図 58-10・11 は砥石である。**小結**　出土遺物から平安時代（10 世紀後半～１１世紀代）のものと考えられる。

第２号溝跡（SD02）（図 59）

位置・確認　ⅡＱ～ⅡV-106 ～ 111 グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　第１・３号溝跡と重複しており、第１号溝跡より新しく、第３号溝跡との新旧関係は不明である。**規模・平面形**　長さ 31.5 ｍ、は幅 0.3 ～ 0.8 ｍ、深さ 15 ㎝～１ｍである。**堆積土**　黒褐色土が主体である。**壁・底面**　壁は外傾しながら立ち上がる。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦である。**出土遺物**　なし。**小結**　重複関係から古代以降のものと考えられる。

第３号溝跡（SD03）（図 59）

位置・確認　ⅡU-109 グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　第２号溝跡と重複しているが新旧関係は不明である。**規模・平面形**　長さ 2.3 ｍ、幅 0.4 ｍ、深さ 18 ㎝である。**堆積土**　記録していないので不明。**壁・底面**　記録していないので不明。**出土遺物**　なし。**小結**　時期不明である。

第４号溝跡（SD04）（図 59）

位置・確認　ⅢA・ⅢB-114 ～ 117 グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　第 14・20 号竪穴住居跡、第 12 号土坑と重複しており、本遺構が新しい。**規模・平面形**　長さ 12.6 ｍ、幅 0.3 ～ 1.1 ｍ、深さ 64 ㎝である。**堆積土**　３層に分層できた。黒褐色土を主体とする。**壁・底面**　壁は外傾しながら立ち上がる。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦である。**出土遺物**　なし。**小結**　重複関係から古代以降のものと考えられる。

第５号溝跡（SD05）（図 60）

位置・確認　ⅡV ～ⅢB-109・110 グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　なし。**規模・平面形**　長さ 22.2 ｍ、幅 0.3 ～ 0.6 ｍ、深さ 35 ㎝である。**堆積土**　４層に分層できた。黒褐色土を主体とする。**壁・底面**　壁は外傾しながら立ち上がる。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦

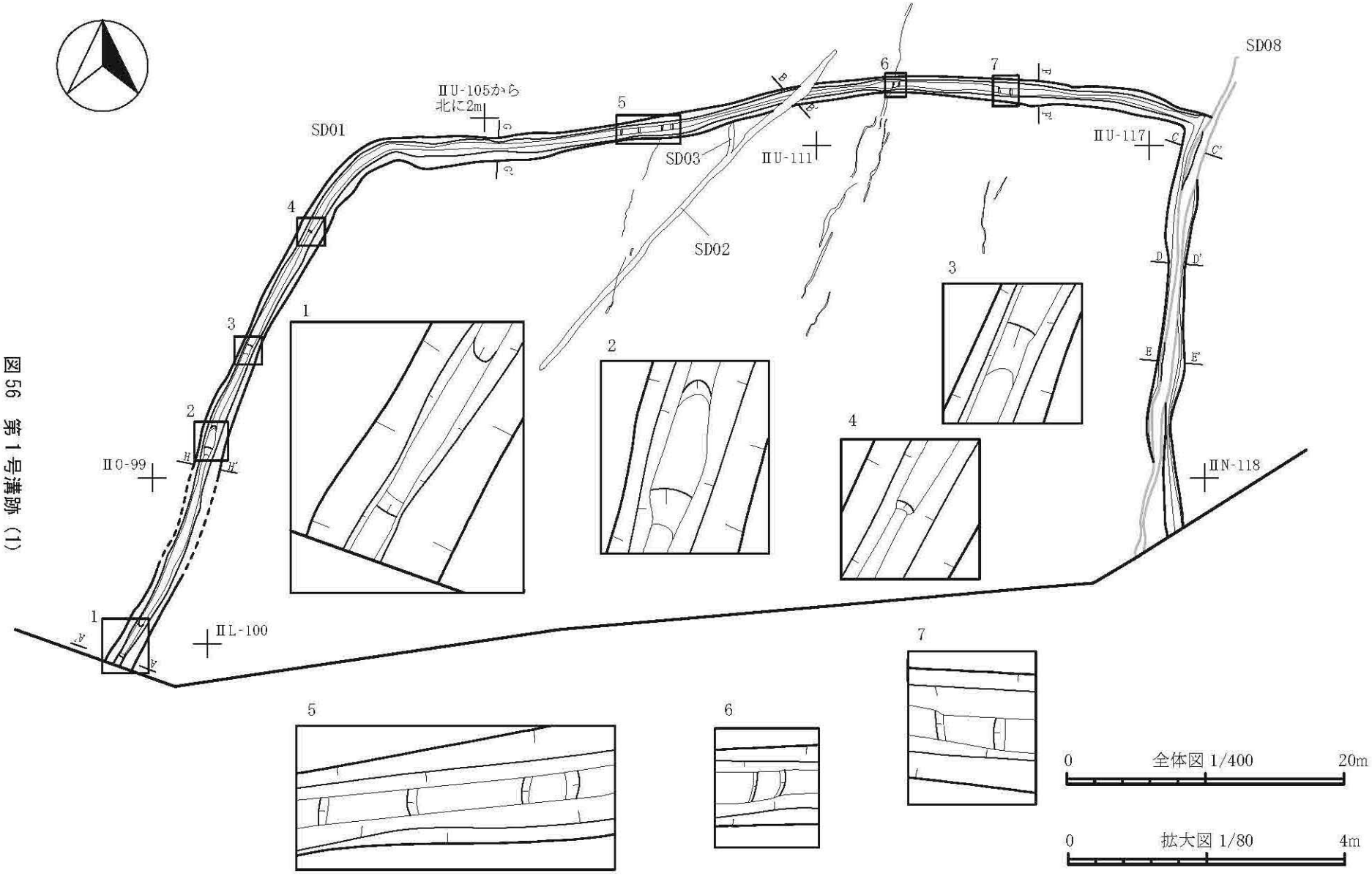
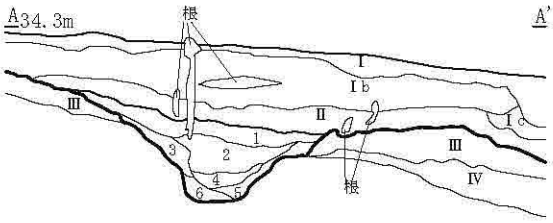
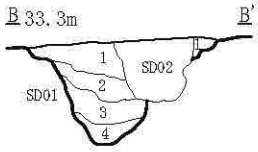

SD08
ⅡU-105から
北に2m
SD01
SD03
ⅡU-111
ⅡU-117
SD02
ⅡO-99
ⅡL-100
ⅡN-118
全体図 1/400
0
20m
拡大図 1/80
0
4m

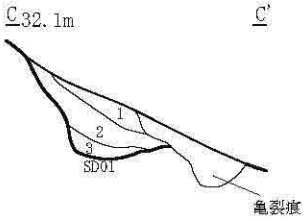
図56　第1号溝跡（1）



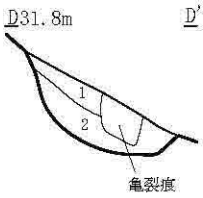
SD01(A-A')
1層 10YR2/1黒 色 土　10YR2/2黒褐色土40%
2層 10YR3/1黒褐色土　10YR2/2黒褐色土10%
3層 10YR3/2黒褐色土　10YR3/3暗褐色土20%、10YR4/6褐色土1%、10YR2/2黒褐色土1%
4層 10YR3/3暗褐色土　10YR2/2黒褐色土20%。
5層 10YR4/3にぶい黄褐色土 10YR3/3暗褐色土10%、10YR3/1黒褐色土1%
6層 10YR4/4褐 色 土　10YR3/3暗褐色土30%



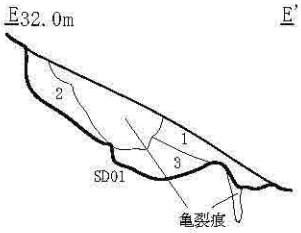
SD01(B-B')
1層 10YR3/1黒褐色土 10YR3/3暗褐色土7%、5YR4/8赤褐色焼土粒1%
2層 10YR2/2黒褐色土 10YR3/4暗褐色土5%、10YR5/6黄褐色土3%、5YR3/6暗赤褐色焼土粒1%
3層 10YR4/4褐 色 土 10YR3/1黒褐色土5%、10YR5/8黄褐色土3%、炭化物1%
4層 10YR2/3黒褐色土 10YR6/6明黄褐色土5%、10YR5/8黄褐色土ブロック3%



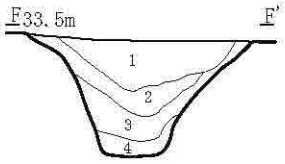
SD01(C-C')
1層 10YR3/3暗褐色土　10YR4/4褐色土10%、10YR6/8明黄褐色ローム粒1%
2層 10YR4/6褐 色 土　10YR3/4暗褐色土10%、10YR5/6黄褐色土3%、10YR3/2黒褐色土1%
3層 10YR5/4にぶい黄褐色土 10YR5/8黄褐色土5%



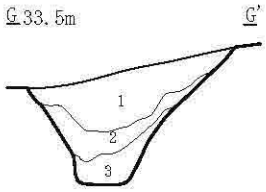
SD01(D-D')
1層 10YR2/2黒褐色土 10YR4/4褐色土3%、10YR6/6明黄褐色ローム粒1%、5YR4/8赤褐色焼土粒1%
2層 10YR5/6黄褐色土 10YR3/4暗褐色土5%、10YR4/6褐色土3%



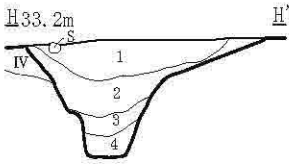
SD01(E-E')
1層 10YR3/1黒褐色土 10YR7/6明黄褐色ローム粒1%、5YR4/6赤褐色焼土粒1%。
2層 10YR5/8黄褐色土 10YR4/6褐色土5%。
3層 10YR4/4褐 色 土 10YR2/3黒褐色土7%、10YR5/8黄褐色土7%、5YR5/6明赤褐色焼土粒1%、炭化物1%



SD01(F-F')
1層 10YR3/1黒褐色土 10YR3/3暗褐色土5%、10YR6/6明黄褐色ローム粒1%、炭化物1%
2層 10YR2/2黒褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒1%、10YR6/8明黄褐色土2%
3層 10YR3/2黒褐色土 10YR4/4褐色土10%、10YR5/8黄褐色土3%、10YR6/8明黄褐色ローム粒1%
4層 10YR3/3暗褐色土 10YR5/6黄褐色土5%、10YR3/1黒褐色土5%、10YR6/6明黄褐色土5%
全て自然堆積　4層上面でしばし開口か



SD01(G-G')
1層 10YR2/2黒褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒1%、炭化物1%
2層 10YR3/2黒褐色土 10YR6/6明黄褐色ローム粒1%、10YR6/4にぶい黄褐色土1%
3層 10YR3/3暗褐色土 10YR5/8黄褐色土10%、10YR3/1黒褐色土5%



SD01(H-H')
1層 10YR2/2黒褐色土 10YR3/4暗褐色土10%、10YR6/6明黄褐色ローム粒1%
2層 10YR3/3暗褐色土 10YR7/6明黄褐色ローム粒1%、5YR5/8明赤褐色焼土粒1%
3層 10YR4/4褐 色 土 10YR5/6黄褐色ローム粒1%、炭化物1%
4層 10YR4/6褐 色 土 10YR5/6黄褐色土10%、炭化物1%

0　1/60　2m

図57　第1号溝跡 (2)

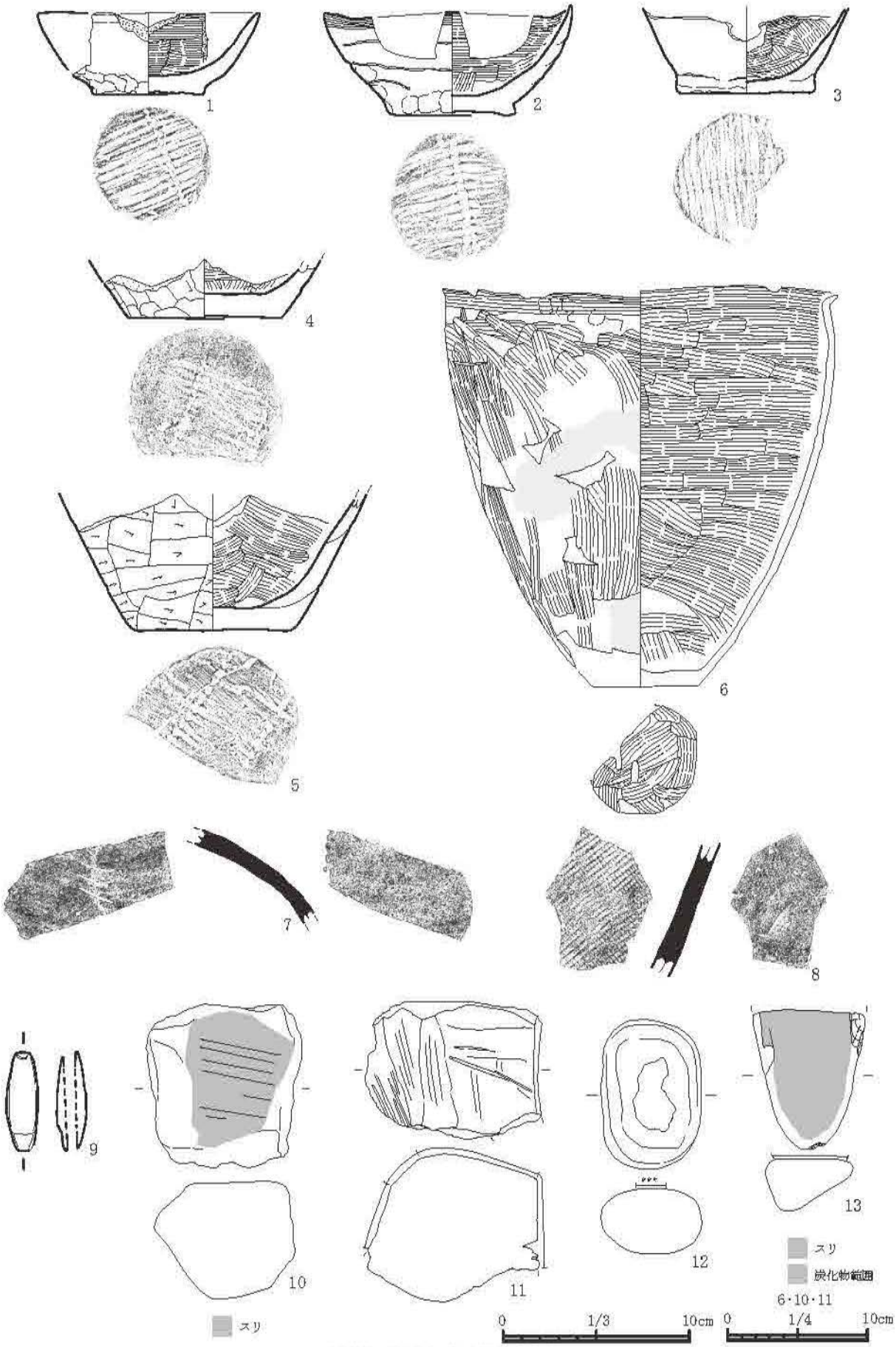


図 58　第１号溝跡出土遺物

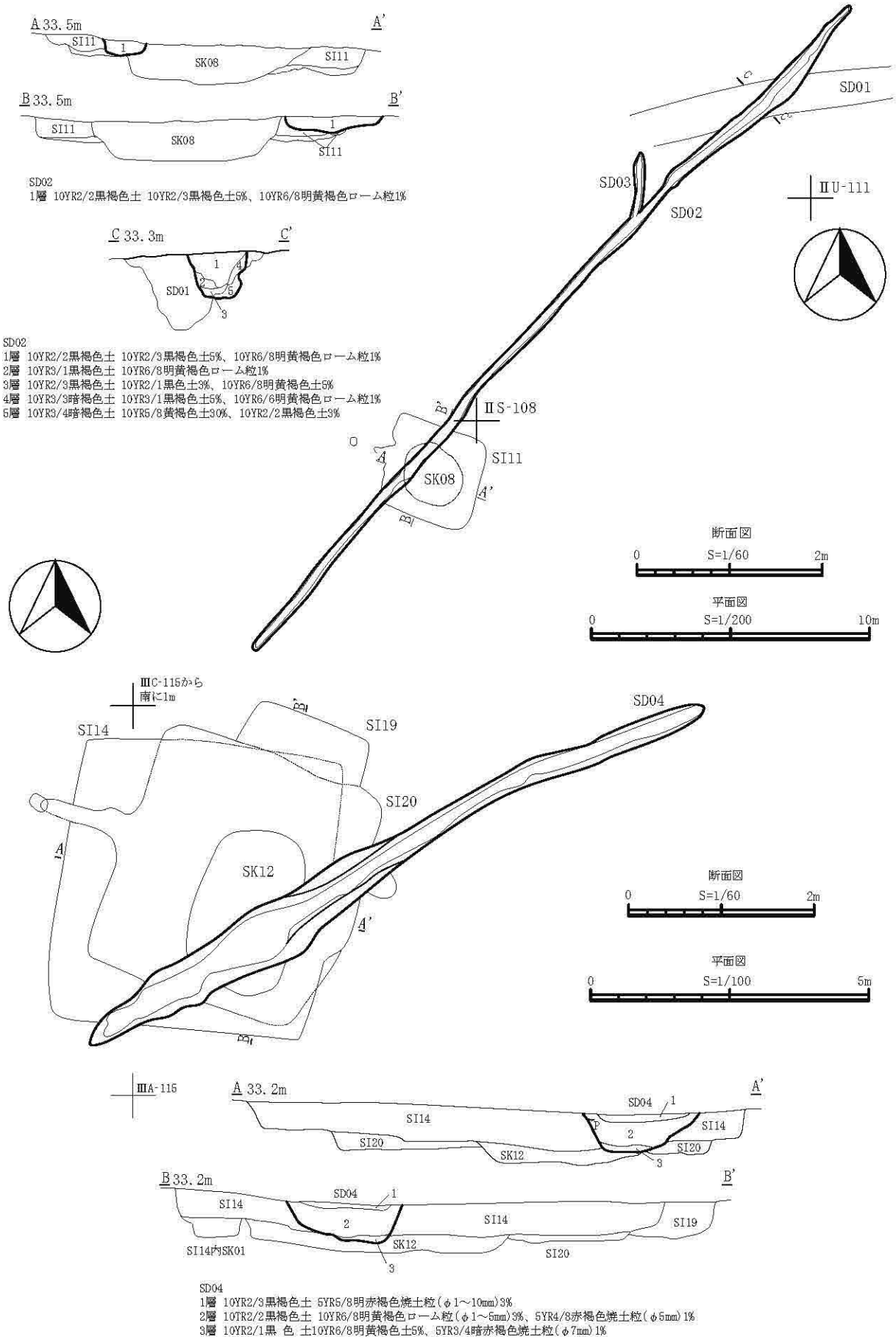

A 33.5m
A'
SI11
1
SK08
SI11
B 33.5m
B'
SI11
SK08
1
SI11
SD02
1層 10YR2/2黒褐色土 10YR2/3黒褐色土5%、10YR6/8明黄褐色ローム粒1%
C 33.3m
C'
1
4
2
5
SD01
3
SD02
1層 10YR2/2黒褐色土 10YR2/3黒褐色土5%、10YR6/8明黄褐色ローム粒1%
2層 10YR3/1黒褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒1%
3層 10YR2/3黒褐色土 10YR2/1黒色土3%、10YR6/8明黄褐色土5%
4層 10YR3/3暗褐色土 10YR3/1黒褐色土5%、10YR6/6明黄褐色ローム粒1%
5層 10YR3/4暗褐色土 10YR5/8黄褐色土30%、10YR2/2黒褐色土3%
SD01
SD03
SD02
ⅡU-111
ⅡS-108
SI11
SK08
断面図
0
S=1/60
2m
平面図
0
S=1/200
10m
ⅢC-115から
南に1m
SI14
SI19
SD04
SI20
SK12
断面図
0
S=1/60
2m
平面図
0
S=1/100
5m
ⅢA-115
A 33.2m
A'
SD04
1
SI14
SI14
2
SI20
SK12
SI20
3
B 33.2m
B'
SD04
1
SI14
2
SI14
SI19
SI14内SK01
SK12
SI20
3
SD04
1層 10YR2/3黒褐色土 5YR5/8明赤褐色焼土粒(φ1～10mm)3%
2層 10TR2/2黒褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒(φ1～5mm)3%、5YR4/8赤褐色焼土粒(φ5mm)1%
3層 10YR2/1黒 色 土10YR6/8明黄褐色土5%、5YR3/4暗赤褐色焼土粒(φ7mm)1%

図59　第2・3・4号溝跡

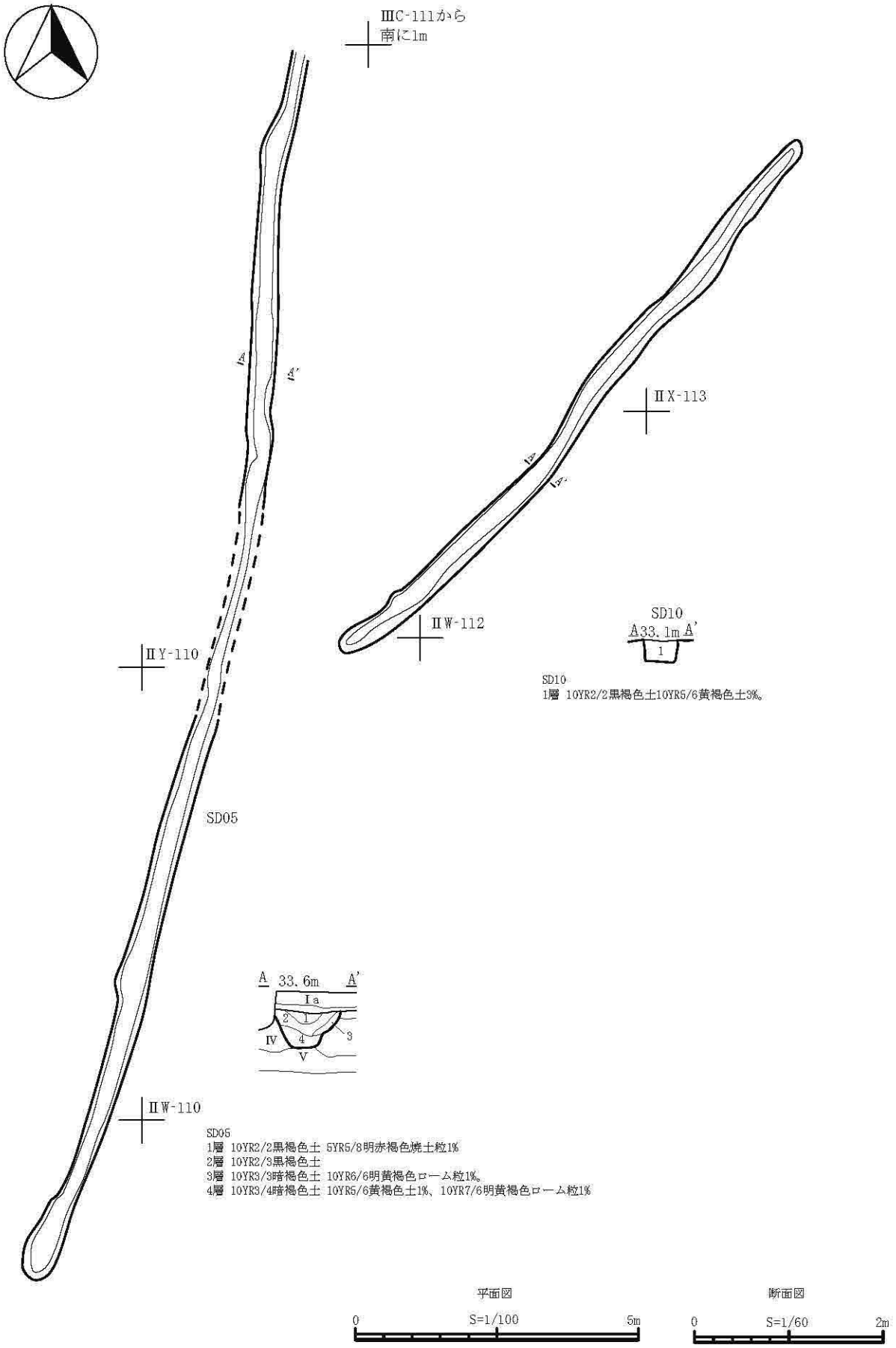

ⅢC-111から
南に1m
ⅡX-113
ⅡW-112
ⅡY-110
ⅡW-110
SD05
SD10
A 33.1m A'
1
SD10
1層 10YR2/2黒褐色土10YR5/6黄褐色土3%。
A 33.6m A'
Ⅰa
1
2
3
4
Ⅳ
Ⅴ
SD05
1層 10YR2/2黒褐色土 5YR5/8明赤褐色焼土粒1%
2層 10YR2/3黒褐色土
3層 10YR3/3暗褐色土 10YR6/6明黄褐色ローム粒1%。
4層 10YR3/4暗褐色土 10YR5/6黄褐色土1%、10YR7/6明黄褐色ローム粒1%
平面図
0 S=1/100 5m
断面図
0 S=1/60 2m

図 60　第 5・10 号溝跡

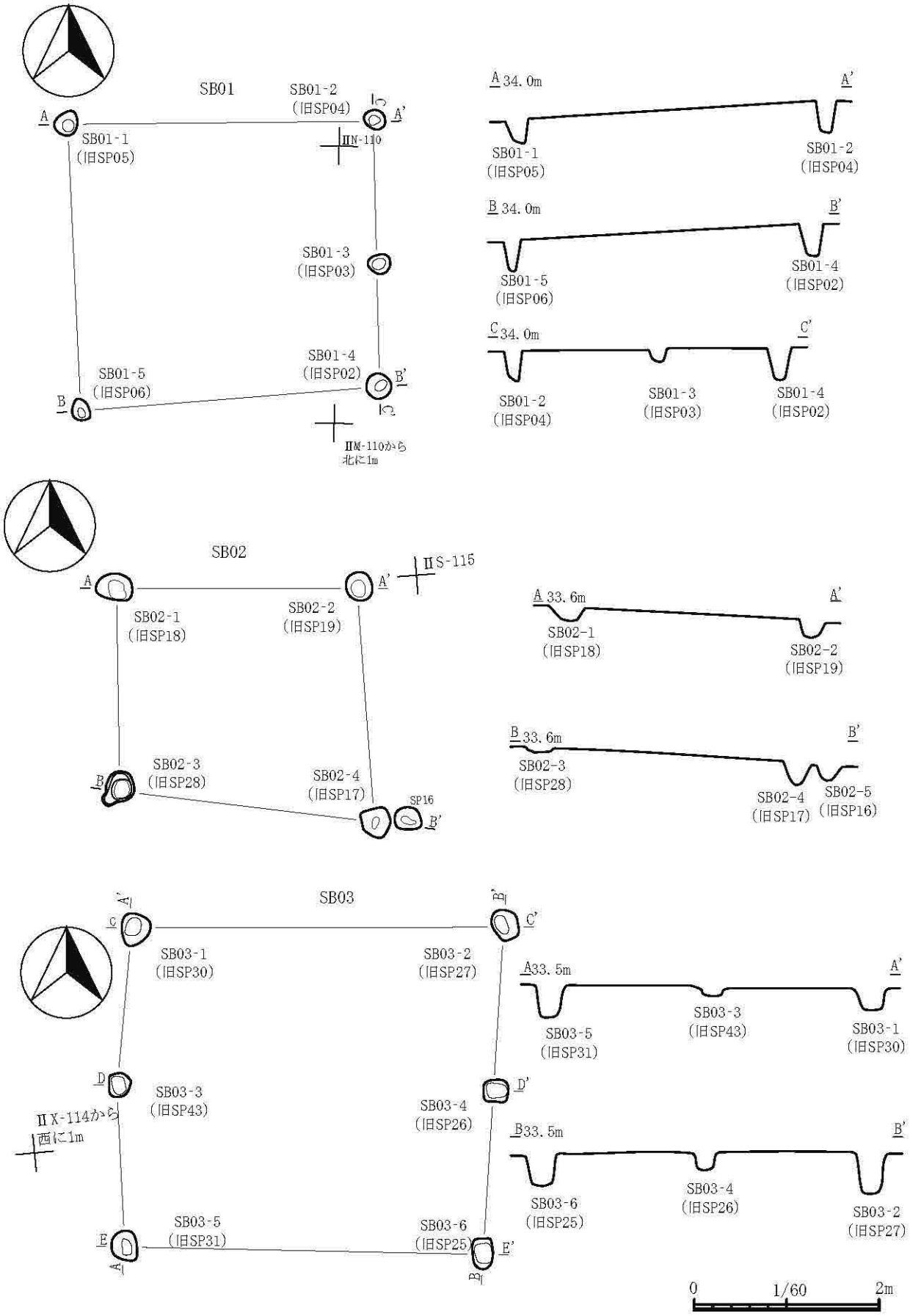


図61　第1・2・3号掘立柱建物跡

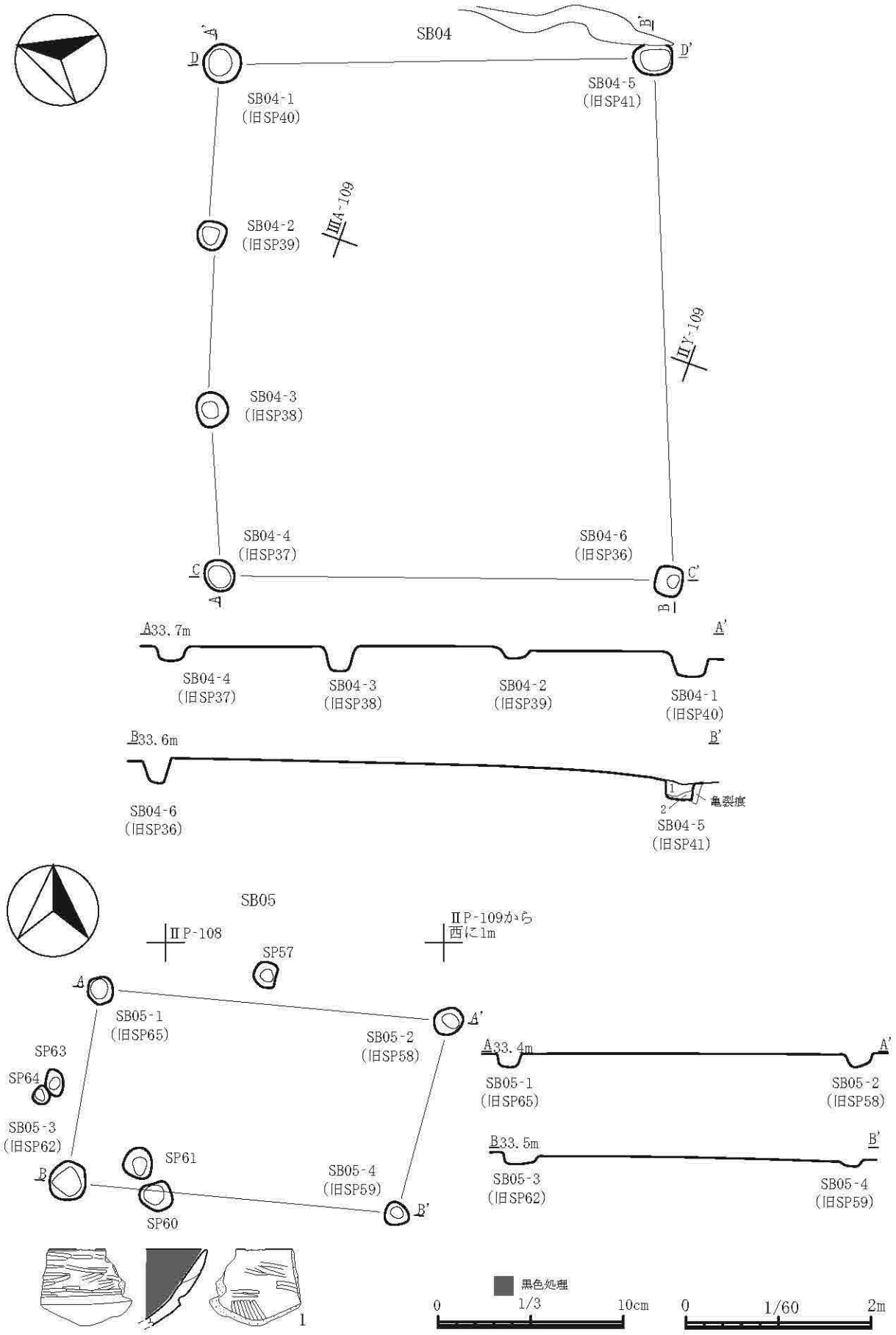


図 62　第４・５号掘立柱建物跡及びピット出土遺物

である。**出土遺物**　なし。**小結**　時期不明である。

第10号溝跡（SD10）（図60）

位置・確認　ⅡⅤ～ⅢB-109・110グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。**重複関係**　なし。**平面形・規模**　長さ12ｍ、幅0.3～0.5ｍ、深さ52㎝である。**堆積土**　黒褐色土の単層である。**壁・底面**　壁は外傾しながら立ち上がる。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦である。**出土遺物**　なし。**小結**　時期不明である。

４、掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（SB01）（図61）

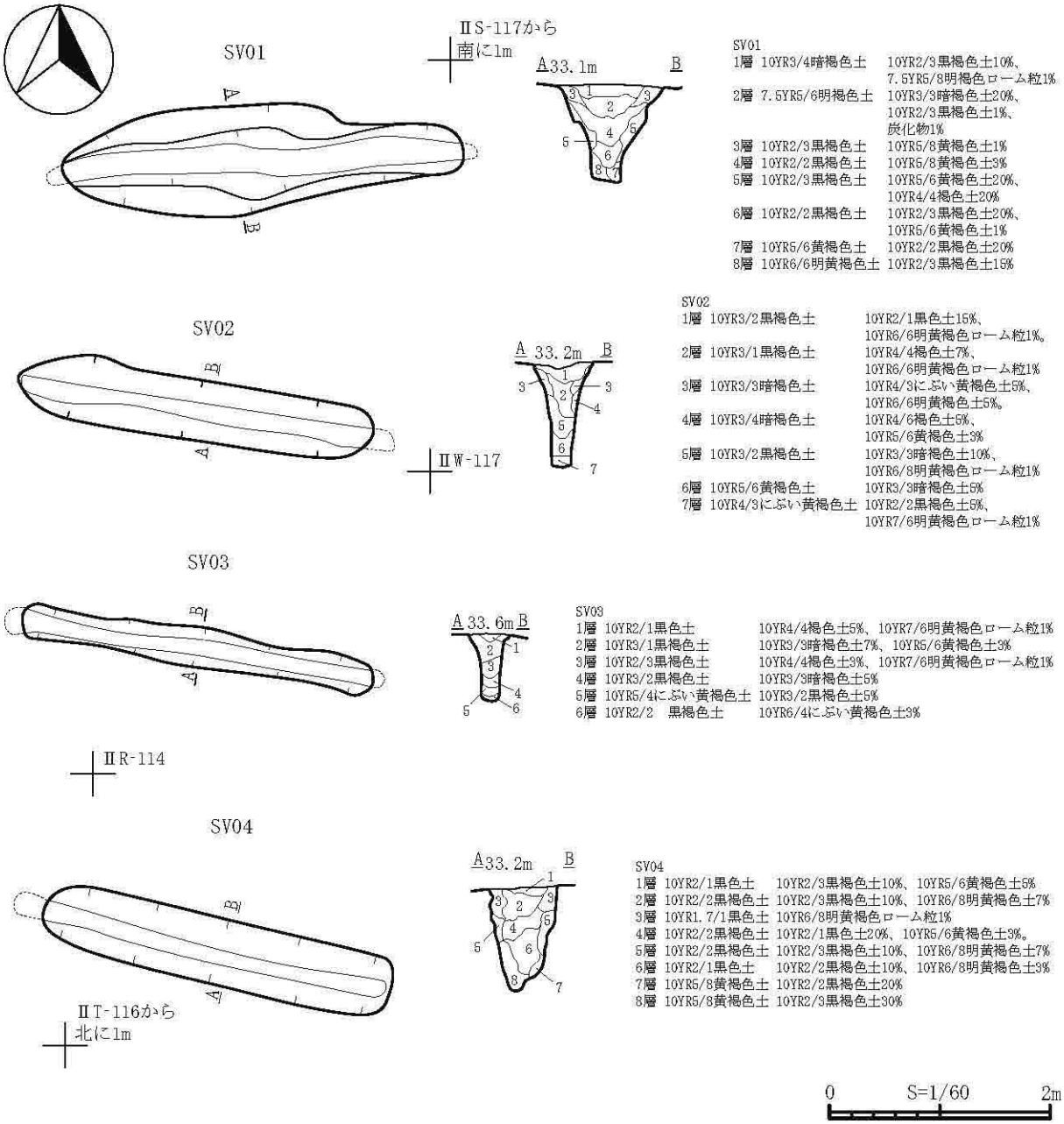


図63　第１・２・３・４号溝状土坑

位置・確認　ⅡM・ⅡN-109・110グリッドに位置する。Ⅳ層で検出した。付近で検出したピットの配列を検討した結果建物跡を構成すると判断した。**重複関係**　なし。**形状・規模**　平面形状で１間×２間である。**出土遺物**　なし。**小結**　古代以降に構築されたと考えられるが、時期不明である。

第２号掘立柱建物跡（SB02）（図61）

位置・確認　ⅡR-114グリッドに位置する。Ⅳ層で検出した。付近で検出したピットの配列を検討した結果、建物跡を構成すると判断した。**重複関係**　なし。**形状・規模**　平面形状で１間×１間である。**出土遺物**　なし。**小結**　古代以降に構築されたと考えられるが、時期不明である。

第３号掘立柱建物跡（SB03）（図61）

位置・確認　ⅡW・ⅡX-115・116グリッドに位置する。Ⅳ層で検出した。付近で検出したピットの配列を検討した結果、建物跡を構成すると判断した。**重複関係**　なし。**形状・規模**　平面形状で２間×２間である。**出土遺物**　なし。**小結**　古代以降に構築されたと考えられるが、時期不明である。

第４号掘立柱建物跡（SB04）（図62）

位置・確認　ⅡX・ⅡY-108～110グリッドに位置する。Ⅳ層で検出した。付近で検出したピットの配列を検討した結果、建物跡を構成すると判断した。**重複関係**　なし。**形状・規模**　平面形状で２間×３間である。**出土遺物**　なし。**小結**　第15号竪穴住居跡に付随するもの考えられる。

第５号掘立柱建物跡（SB05）（図62）

位置・確認　Ⅱ0・ⅡP-107･108グリッドに位置する。Ⅳ層で検出した。付近で検出したピットの配列を検討した結果、建物跡を構成すると判断した。**重複関係**　なし。**形状・規模**　平面形状で２間×２間である。**出土遺物**　なし。**小結**　時期不明である。

５　溝状土坑（図63）

４基検出した。いずれも調査区東側に位置しており、他遺構との重複関係はない。軸方向はいずれも東西方向を示している。平面形は第１・４号が２・３号と比較して幅広い。断面形はＶ字状を呈する。堆積土は中層から下層にかけて壁崩落土等が堆積し、上層に黒色土及び黒褐色土が堆積している。遺物が出土していないため時期決定に欠くが縄文時代と思われる。規模は表３を参照いただきたい。

表3　溝状土坑一覧表

遺構名		グリッド	確認	平面規模（m）	深さ（m）
SV	1	ⅡR-116	Ⅳ	3.6×1.0	1.26
SV	2	ⅡW-116	Ⅳ	3.3×0.6	1.06
SV	3	ⅡR-114	Ⅳ	3.2×0.37	0.72
SV	4	ⅡT-116	Ⅳ	3.2×0.6	1.23

６、その他の遺構及び出土遺物（図62）

掘立柱建物を構成できなかったピットを40基検出した。第５号掘立柱建物跡周辺のピット60の堆積土から奈良時代の内面黒色の土師器坏が出土している。

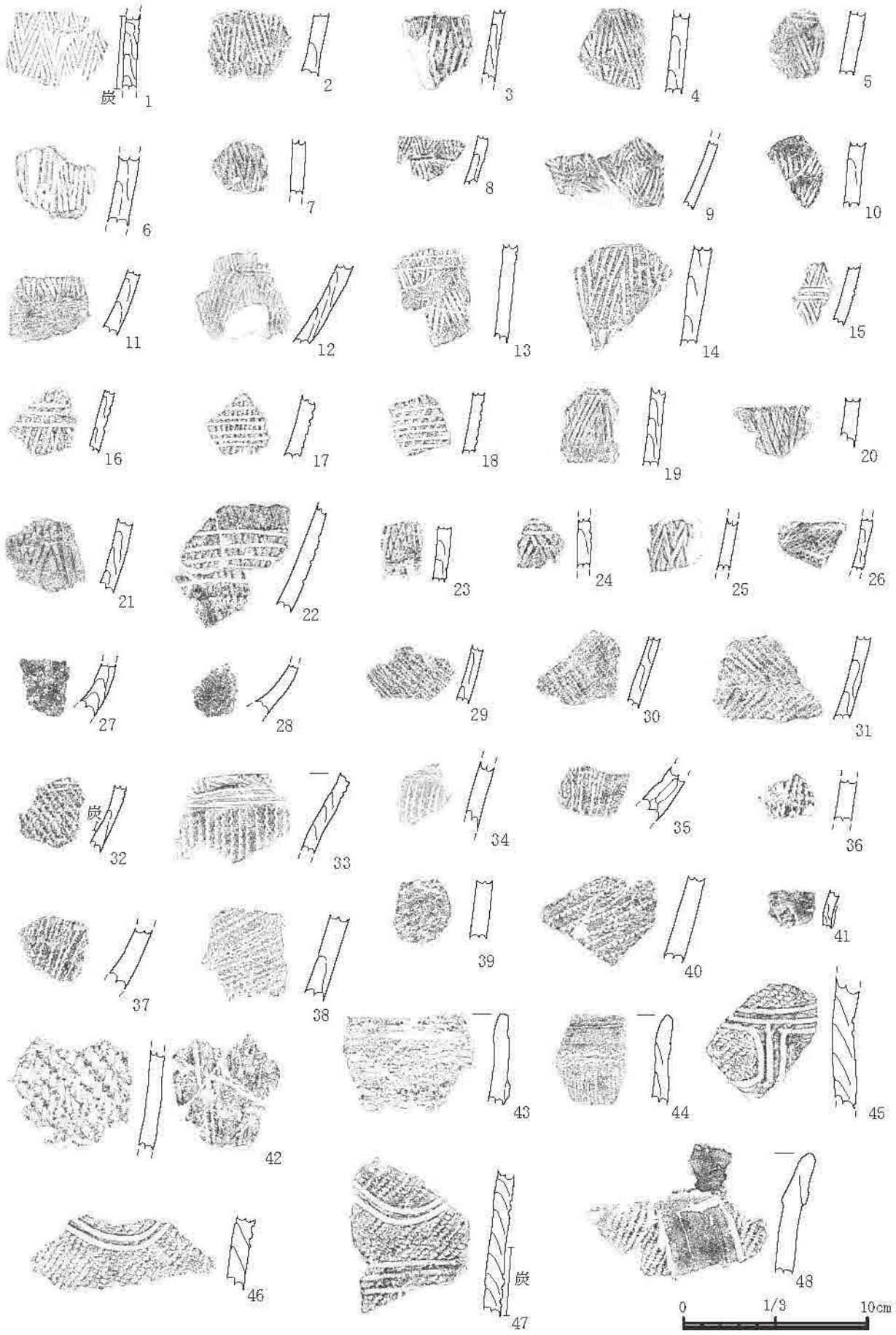


図 64　遺構外出土遺物（1）

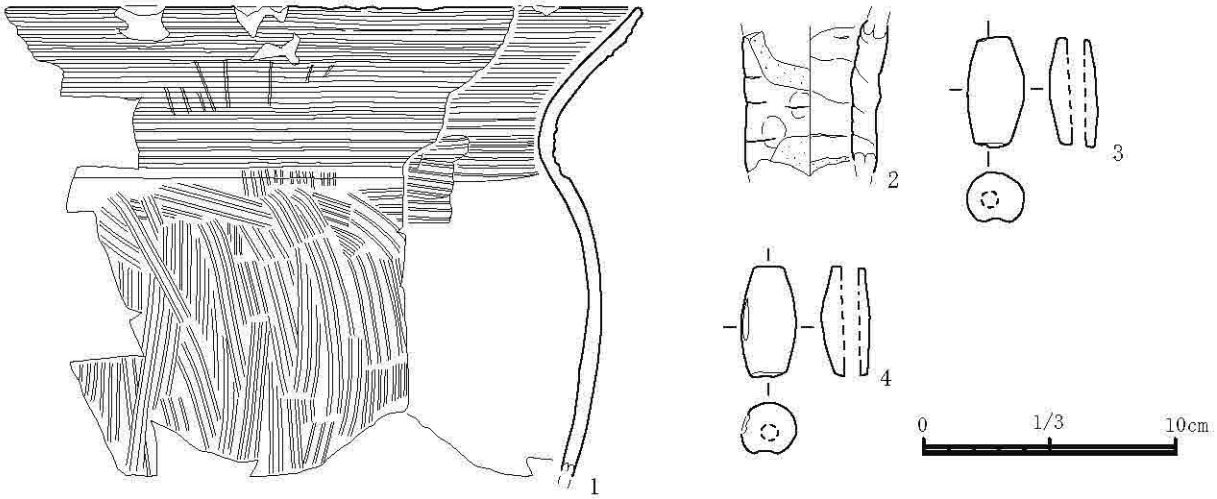


図 65　遺構外出土遺物（2）

７、遺構外出土遺物（図 64 ～ 67）

遺構外からは縄文時代早期～平安時代の遺物が出土した。以下に各種別毎に記述する。また、古代の遺構から出土した縄文時代の遺物については遺構外出土遺物に含めた。

１．縄文時代の土器（図 64）

図64- １～26は第Ⅰ群b類土器の体部破片である。押型原体の横位回転によりＶ字状文様･菱形文様･格子目文様が連続している。13 ～ 16 は横走する沈線が見られる。18 は LR 横位回転の後、平行沈線が見られる。27・28 は底部付近で内外面ミガキ調整がみられる。29 は LR 横位回転、30・31 は LR・RL 横位回転である。図 64-33 ～ 39 は第Ⅰ群 c 類土器の体部破片である。33 は口縁部から体部の破片である。口唇部に沈線、口縁部に横位沈線、体部は貝殻腹縁圧痕が見られる。内面はミガキ調整が見られる。胎土は繊維と砂粒を含む。図 64-41・42 は第Ⅱ群 a 類土器で 41 は円筒下層 a 式土器に比定される。外面には RLR 横位回転、内面は貝殻条痕が見られる。42 は円筒下層 a ～b 式土器に比定される。図 64-43 は第Ⅱ群 b 類土器で円筒上層 d1 式土器に比定される。図 64-44 ～ 46 は第Ⅲ群 b 類土器で榎林式土器である。図 64-47 は第Ⅲ群 c 類土器で大木 10 式並行期の土器に比定される。

古代の土器・土製品（図 65）

図 65- １は奈良時代の土師器甕の口縁部～胴部上半片である。刷毛目調整の後、口唇部寄りと頸部寄りに沈線を施している。胴部は刷毛目調整である。内面は口縁部がヨコナデ、胴部は刷毛目調整である。図 65- ２は土製支脚。図 65- ３・４は土錘である。３・４とも裏面が凹んでいるのが観察できる。

石器（図 66・67）

図 66- １は石鏃で先端部を欠失する。図 66- ２は石槍。図 66- ３は石匙で縦長剥片を素材にしている。図 66- ４～９は石篦である。４・５は撥形、６～９は短冊形で両面調整している。６～９は縄文時代早期前葉の土器に伴う可能性がある。図 66-10 ～ 67- ５は不定形石器と称されるもので削器、掻器として使用されたと思われるものをまとめた。図 66-13 は石錐の可能性もある。図 67- ６・７は黒曜石製の剥片である。６は微細剥離のある剥片である。黒曜石の産地推定分析を行っており、６は深浦産、７は木造産との結果が得られた（第４章６節参照）。図 67- ８は磨製石斧である。全体研磨されて整形されている。図 67- ９・10 は石錘である。長軸両端を打ち欠いて作られている。（齋藤）

図 66　遺構外出土遺物 (3)

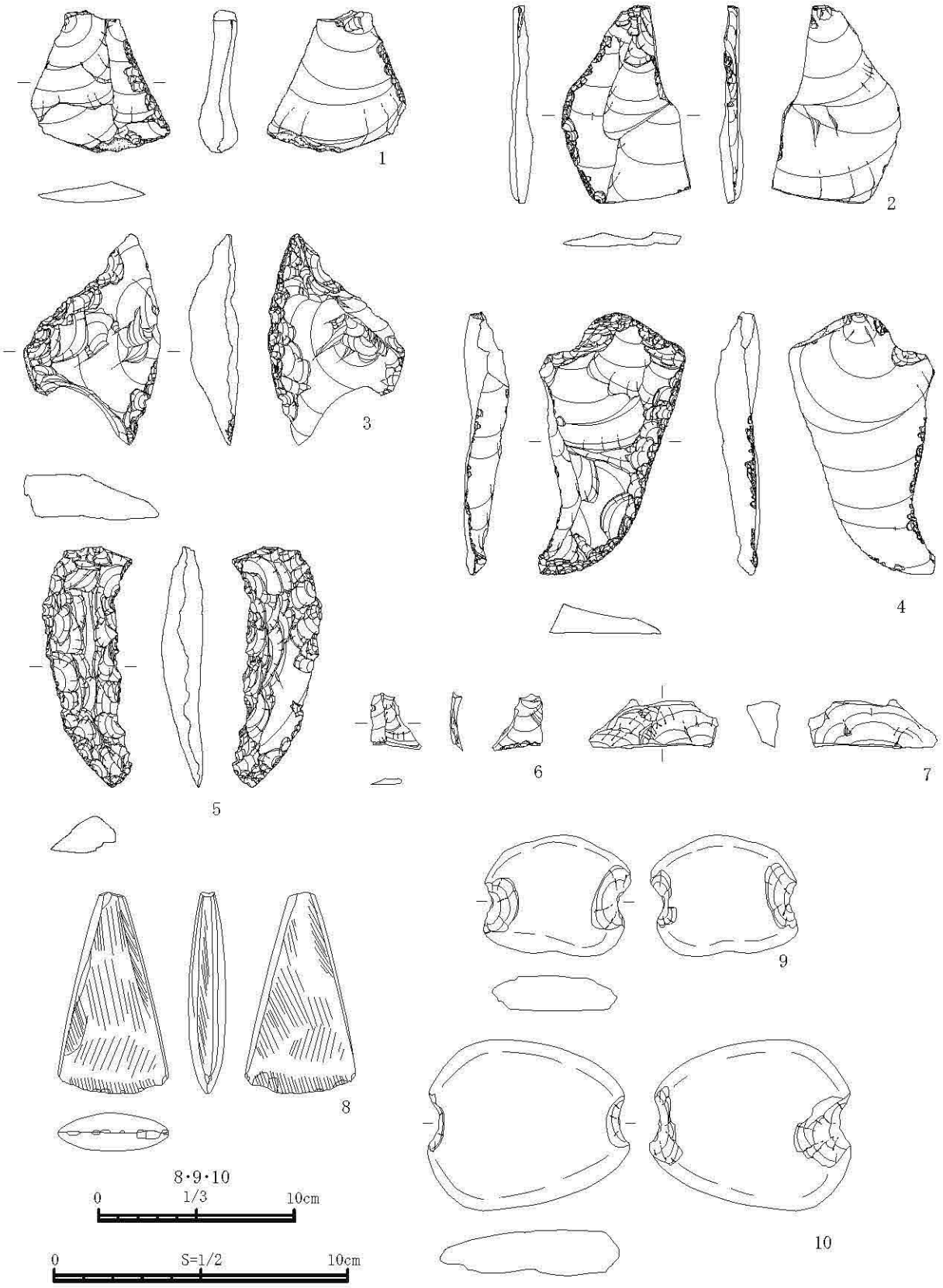


図 67　遺構外出土遺物（4）

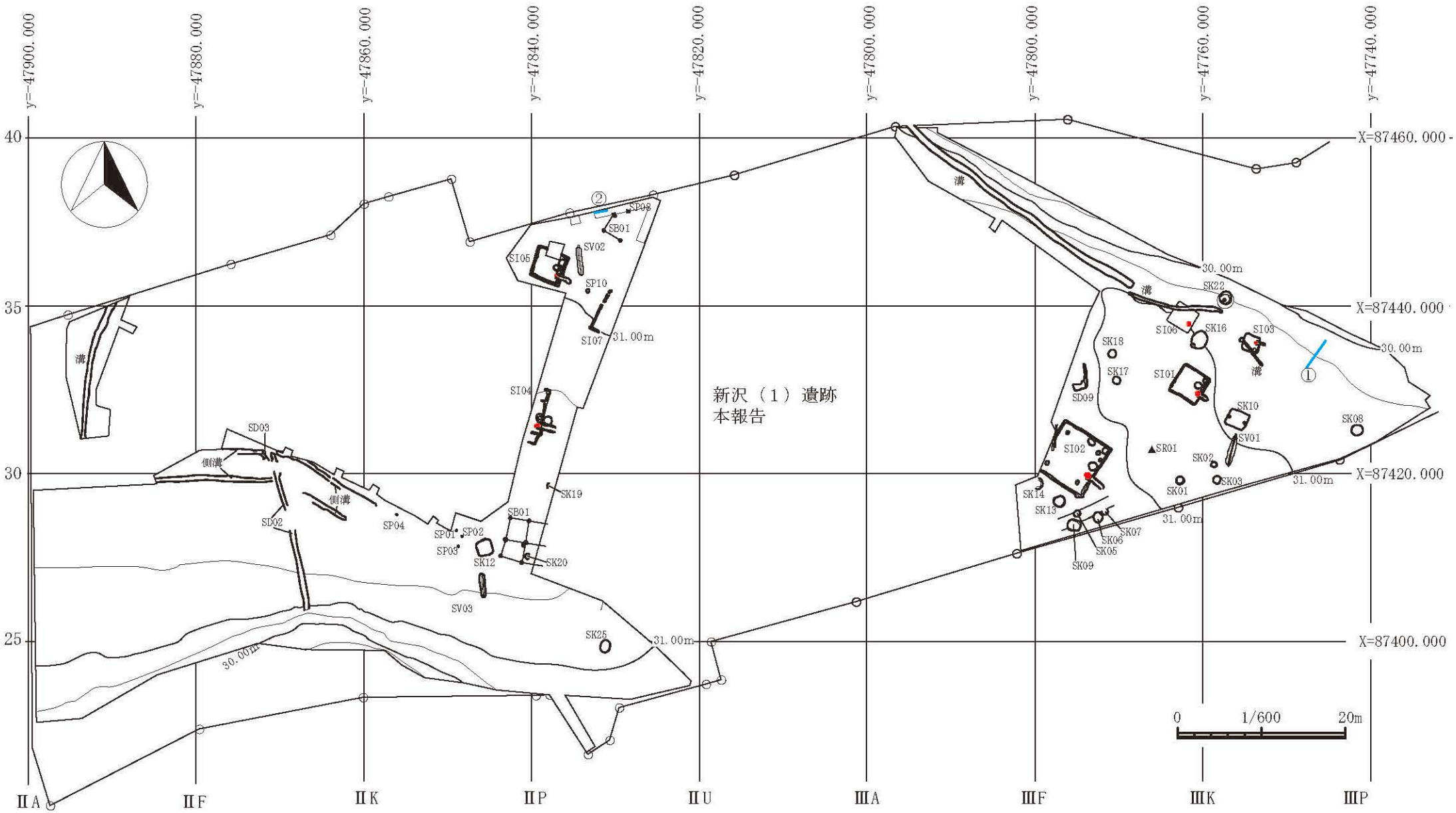
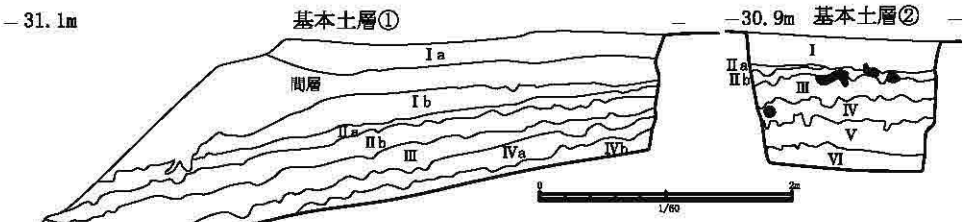


図 68 新沢（1）遺跡遺構配置図

第２節　新沢（１）遺跡

新沢（１）遺跡の調査では平安時代の竪穴住居跡７軒、土坑２基、溝跡２条、掘立柱建物跡２棟、縄弥生時代前期の土器埋設遺構１基、縄文時代晩期？の土坑 12 基、溝状土坑３基、時期不明の土坑４基を検出し、遺物は 27 箱出土した。調査区は南東－北西方向に伸びる標高約 31 ｍの尾根を東西に横断する形で設定され、大きく２箇所に分かれている。調査区の北側と南側には深い谷が存在する。東と西側の調査区の間は長芋作付けにともない遺構が破壊されていることが試掘調査により判明している。調査範囲内においても、特に東側の中央部付近については基本土層第Ⅲ層まで耕作などにより改変を受けている部分が多い。東側調査区の北斜面付近と西側調査区では第Ⅱ層が残存する。調査では、ⅡＨライン以東、26ライン以北で遺構を多く検出した。平安時代の遺構はこの範囲に広く分布する。弥生時代の遺構は東側調査区で第１号土器埋設遺構が検出されたのみだが、調査区北東側斜面及び南側斜面付近では弥生時代前期（砂沢式期）の遺物包含層が検出された。基本土層は２箇所で観察した。大きな違いは認められないが、基本土層①では表土の下にＩｂ層が残存していた。各層の特徴については図 69 の注記を参照していただきたい。また、各層と考古遺物の出土状況からは、Ⅱａ層は平安時代以降、Ⅱｂ層は縄文時代晩期から平安時代頃、Ⅲ層は縄文時代前期から中期、Ⅳ層は縄文時代早期頃ととらえることができる。



注記
Ⅰa層 暗褐色10YR3/3 耕作土硬さあるがもろい
間層 耕作の整地による廃土。斜面下方に厚くなる。平地には見られない
Ⅰb層 黒褐色10YR2/1 腐食質、粘性・湿性多少あり。粒子状の堆積。全体に柔らかい。乾くと灰黒色の変色。
Ⅱa層 黒色腐植土　粘性・湿性有り。多少硬く、締まりも見られるが、全体的に柔らかい。
Ⅱb層 暗灰褐色～暗赤褐色　粘性・締まり多少有り。硬さはあるがもろい。
下位のⅢ層のブロックや汚れた腐食質土・地山のブロックをかなり含む。斜面に下方に厚い。
また、平場では赤褐色のやや砂質（酸化）土になっている箇所もある。地表水の影響の可能性あり。
Ⅲ層 黒色腐食質土　粘性・湿性有り。
Ⅳa層 黒褐色10YR2/2 Ⅴ層・Ⅵ層の粒子が多量に混入。
Ⅳb層 暗褐色10YR3/3 Ⅴ層・Ⅵ層のブロックを多く含む。ローム質である。
Ⅴ層 黄褐色軽石層　千曳浮石に対比。軽石粒を含む。非常に硬く締まっている。
Ⅵ層 明褐色ローム　粘土質ローム（φ～30～50cm）
Ⅵ層の下位には赤褐色ローム（50cm）、灰褐色ローム（飛砂を含む厚さ50～60cm）、
暗灰黄色細～中粒砂（飛砂・塊状、100cmの厚さ）、葉理のある中粒砂（100cm）が堆積する。
中粒砂の下位は洞爺火山灰?が30cm堆積する。
洞爺火山灰の下位は成層砂（200cm以下）あり。

図69　新沢（１）遺跡の基本土層

１、竪穴住居跡（SI）及び出土遺物

第１号竪穴住居跡（SI01）（図 70）

位置と確認　Ⅲ J-32 グリッドに位置する。第Ⅴ～Ⅵ層上面で確認した。周囲は耕作により削平を受けている。**重複関係**　なし。**規模・平面形**　規模は長軸 3.6 ｍ、短軸 3.6 ｍの正方形を呈する。カマドは南東壁右寄りに１基検出し、Ｎ -123°－Ｅに主軸を持つ。**堆積土**　13 層に分層できた。１～４層はⅥ層粘土由来の土が主体で竪穴内の広い範囲に分布している。第５・６層が初期堆積土と考えられる。**壁面・床面**　壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面までの壁高は 30 ㎝を測る。床面は掘方埋土によってほぼ平坦に整えられている。**壁周溝**　カマド部分で途切れるが、ほぼ全周するように検出した。**カマド**　南東壁右寄りに構築している。煙道部の構造は半地下式Ａ類である。火床面は掘方埋

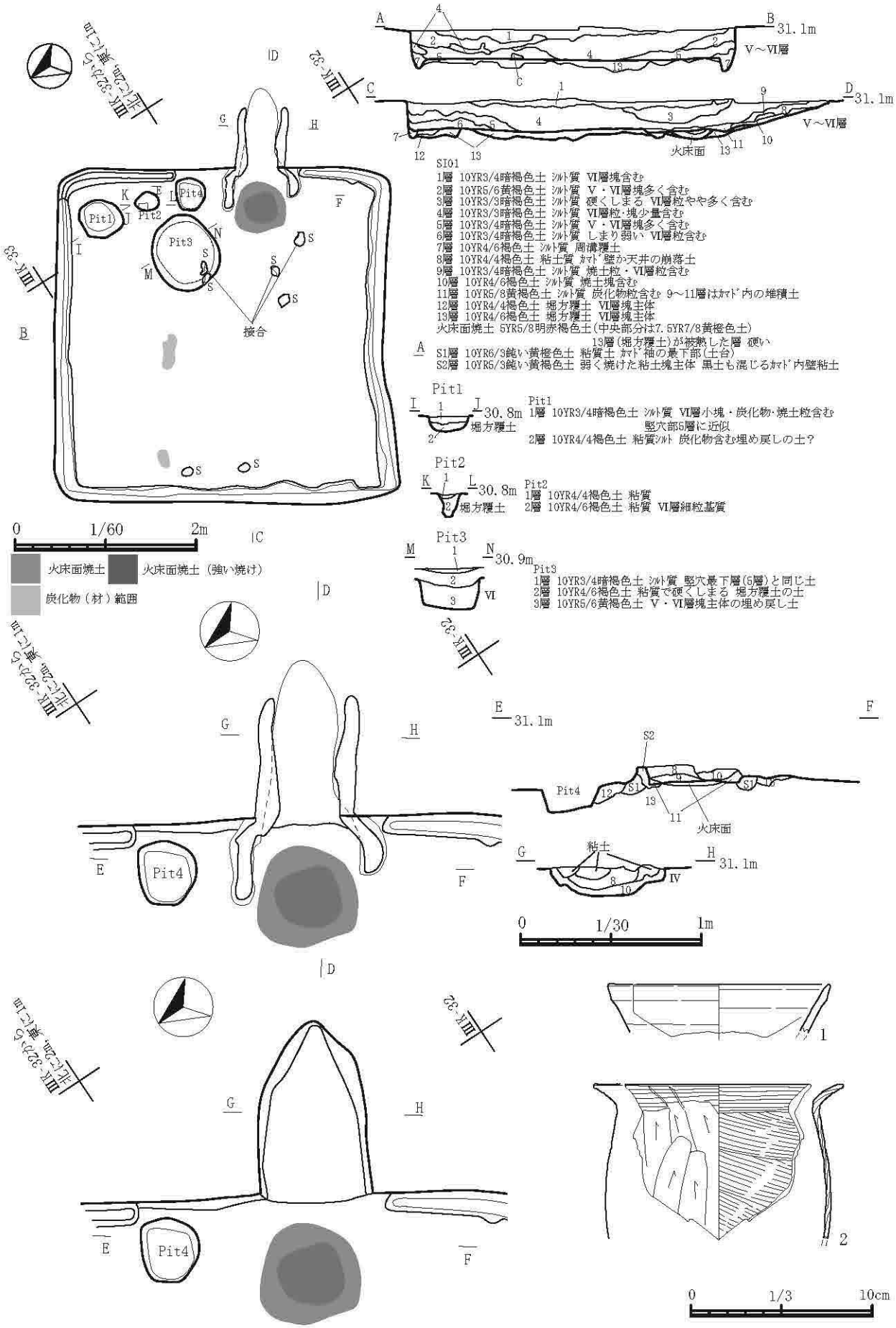


図 70　第１号竪穴住居跡及び出土遺物

土が被熱している。中央部分がより被熱が強く硬化している。カマド本体部分は袖下部がかろうじて残存していた。粘土のみを使用して構築されている。**柱穴・土坑**　カマド左側にピットを４基検出した。Pit １は住居廃絶時まで開口していたと考えられる。Pit ３は廃絶以前に埋め戻されていた。Pit ２は柱穴の可能性もある。各 Pit の深さ:Pit １＝15 ㎝、Pit ２＝25 ㎝、Pit ３＝44 ㎝、Pit ４＝12 ㎝。**出土遺物**　土師器や弥生土器が出土した。１は土師器杯で堆積土出土。２は土師器甕で Pit ３から出土した。**小結**　本遺構は出土遺物等から平安時代の竪穴住居跡と判断される。

第２号竪穴住居跡（SI02）（図 71 ～ 74）

位置と確認　Ⅲ F-30 グリッドに位置する。Ⅲ～Ⅳ層上面で確認した。**重複関係**　なし。**規模・平面形**　規模は長軸 6.8 ｍ、短軸 6.5 ｍで、北西－南東に長軸を持つほぼ正方形を呈する。カマドは南東壁中央右寄りに１基検出し、Ｎ -123°－Ｅに主軸を持つ。**堆積土**　８層に分層できた。４層及び４ａ層には白頭山－苫小牧火山灰が多く含まれる。その上位はⅡａ～Ⅰｂ層由来の自然流入土である。５層以下は褐色を帯びた色調で人為的に埋め戻された可能性もある。**壁面・床面**　壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面までの壁高は 35 ㎝を測る。床面は掘方埋土によってほぼ平坦に整えられている。**壁周溝**　全周している。カマド付近については、使用時には埋め戻されていたと考えられる。**カマド**　煙道部の構造は半地下式Ａ類である。火床面は掘方埋土が被熱している。中央部分がより被熱が強く硬化している。煙道部及びカマド本体部分は粘土を用いて構築されているが、カマド本体部分には凝灰岩製を板状に加工した礫が用いられている。カマド本体は床面堀方埋土を若干掘り下げて構築されている。**柱穴・土坑**　床面中央寄りに４基の柱穴（Pit １～４）が、その他に床面東隅付近に土坑（Pit ５～８）が４基、床面中央部に焼土を検出した。Pit １～４は主柱穴と考えられ、方形、等間隔に配置されている。深さはPit １＝60 ㎝、Pit ２＝60 ㎝、Pit ３＝70 ㎝、Pit ４＝75 ㎝。確認段階で柱痕跡が見られた。その部分は住居５層と同じ土が見られた。土坑は直径１ｍ程度のものが３基（Pit ５・６・７）と柱穴状のもの（Pit ８）がある。廃絶段階まで開口していたのはPit ５で、Pit ７は堀方埋土と似た土で埋め戻されていたため、Pit ７→Pit ６→Pit ５の順に利用されたと考えられる。焼土は堀方埋土を整えた床面が被熱している。鍛造剥片など鍛冶行為に起因する遺物は出土しなかった。**出土遺物**　弥生土器や土師器、擦文土器等が出土している。主に５層下部から床面にかけて出土しており、廃絶時に遺棄されていった可能性がある。図 73―１～４・６・７は土師器坏である。２～４はカマド周辺などから出土しており、底径、口径、器高のほか胎土などにも共通点が多いためセットでもたらされた可能性がある。５はと６は非ロクロ整形で内面黒色処理がなされており、口縁部の打ち欠き状況や炭化物等の付着具合等から灯明具として用いられた可能性がある。５は擦文土器の制作技術で作られた坏である。輪積成形後、外面がヘラナデ（刷毛目状）調整が施される。底部はやや筒状につきだしており、体部から口縁へは斜めに直線上に立ち上がっている。６は底部から体部にかけて丸みを帯びながら立ち上がっている。底部付近は被熱及び敲打により変形している可能性もある。口唇端部は外削ぎ状に尖る。７は堆積土から出土した内外面ミガキ調整の坏で、赤褐色を呈する。同様の坏は第５号竪穴住居跡（図 80 －４）などからも出土している。図 73 －８～図 74 －５は土師器甕である。すべて非ロクロ成形で外面はケズリ、内面はヘラナデが施される。図 73 － 10･11 等の体部外面には被熱した粘土が面的に付着している。化粧土として認識したが用途は不明である。長胴

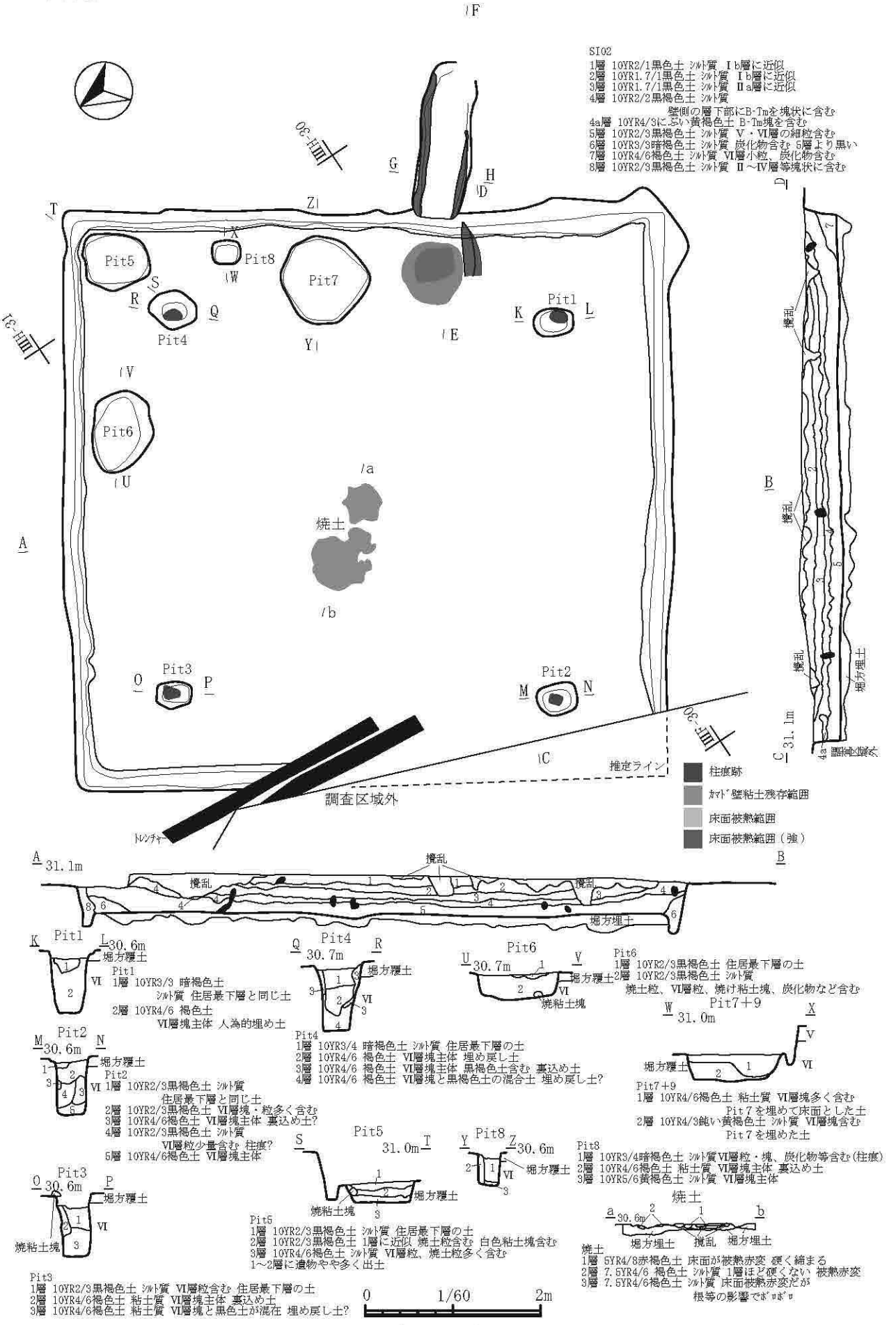


図 71　第２号竪穴住居跡（1）

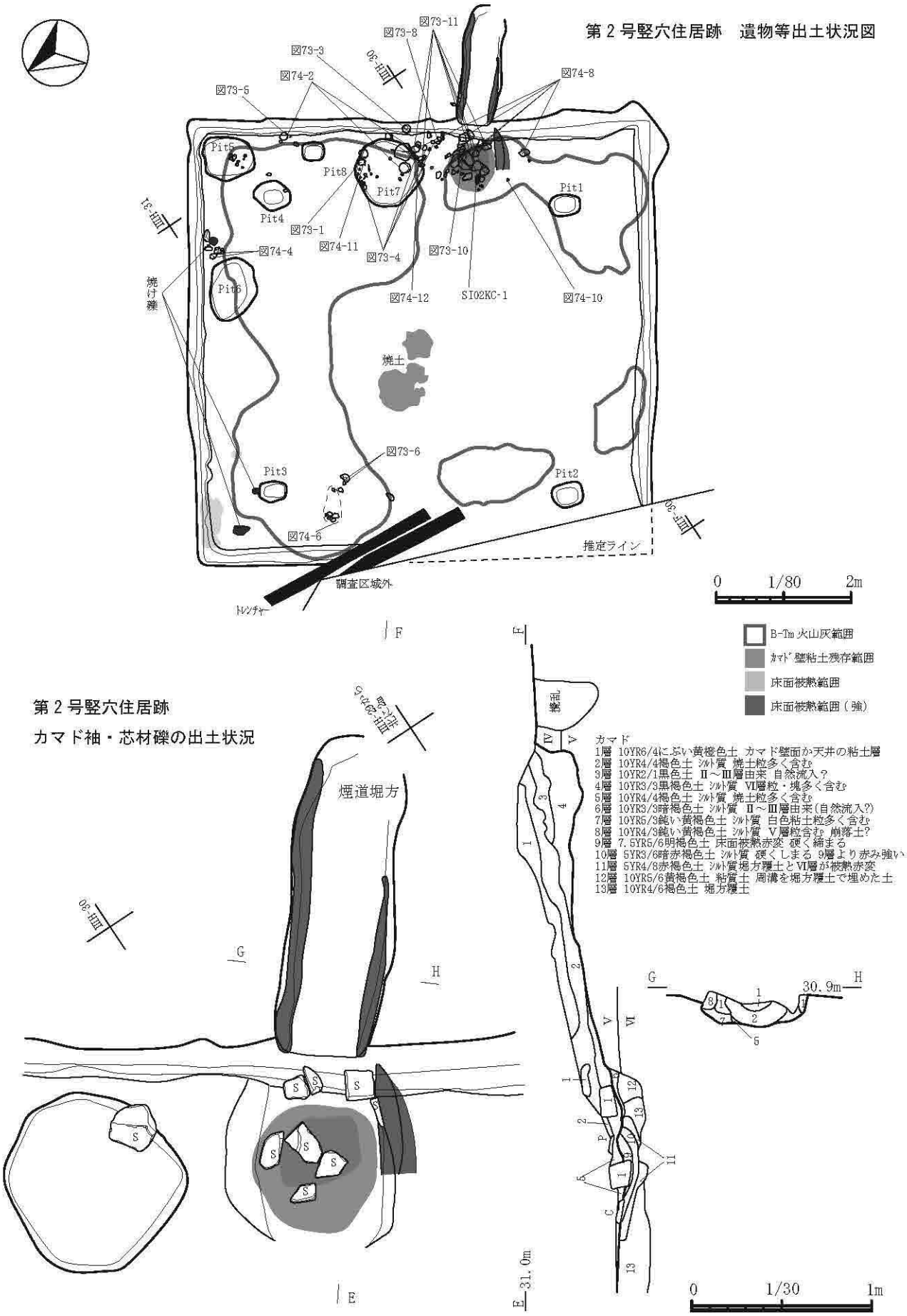


図 72　第２号竪穴住居跡（2）

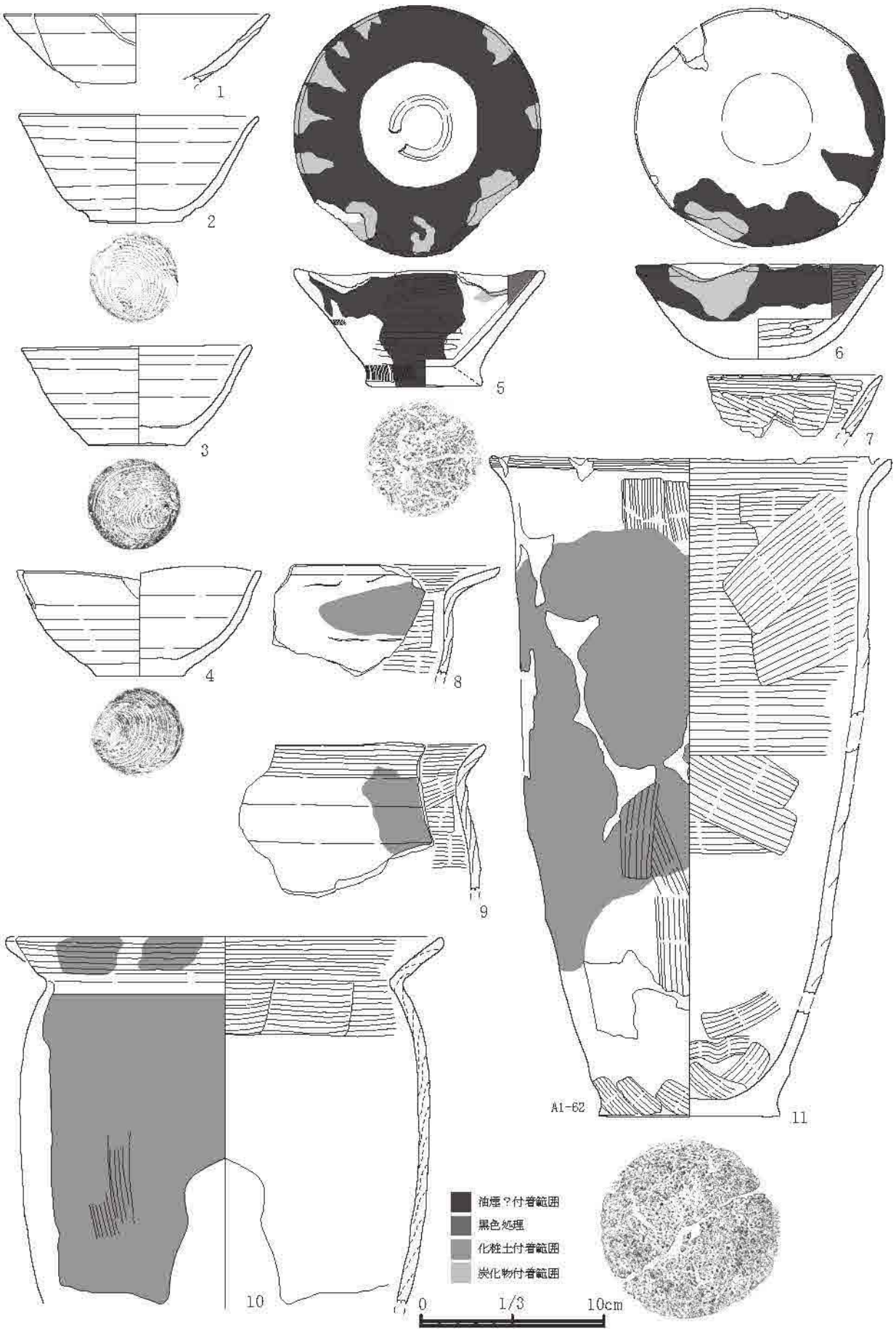


図 73　第２号竪穴住居跡出土遺物（1）

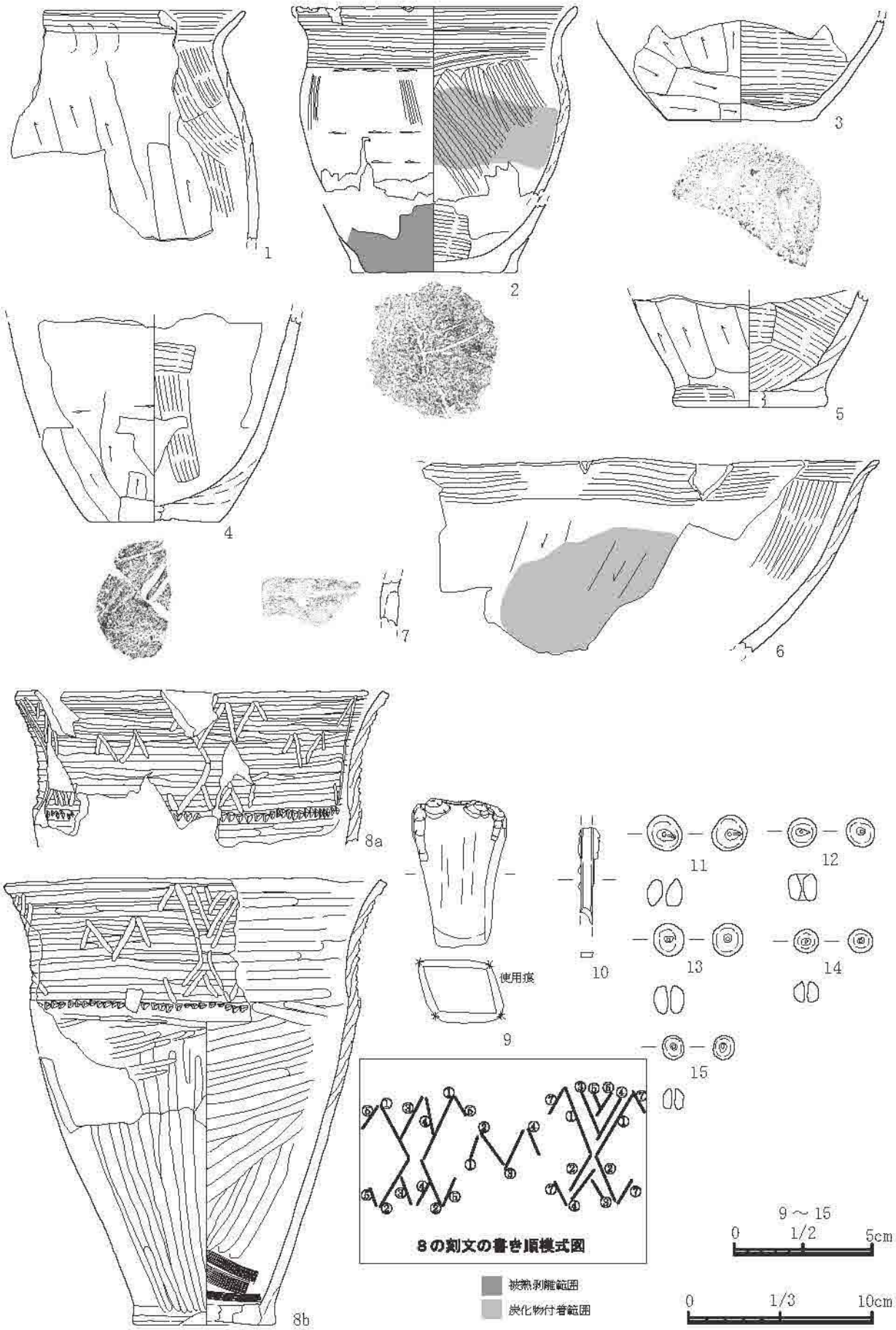


図 74　第２号竪穴住居跡出土遺物（2）

甕に見られることから、耐火性を高める用途があった可能性がある。図74－6は鍋である。体部は緩やかにカーブし、口縁付近で外反している。7は製塩土器か土製支脚である。8は擦文土器である。カマド内及び両脇に散乱して出土したものが接合した。外面下部に被熱痕跡が見られ、体部中位には炭化物がうっすら付着している。底部が弱く突き出す形状で、器高の焼き1／3の部分に体部最大径がみられ、この部分で口縁部と体部が区画されている。区画は刷毛目工具の角による三角形の刺突列による。口唇端部は平坦に整形した後沈線状の凹みが見られる。体部外面は刷毛目調整の後縦方向のミガキ調整が施され、区画付近では一部ミガキが横方向になる。口縁部外面には横走沈線施文後、鋸歯文を組み合わせた大小のモチーフが4単位で描かれている。書き順は図74に掲載している。内面は刷毛目調整後ミガキが施される。体部内面下部は縦方向だが、上半は横方向である。胎土は砂粒をやや多く含む。9は仕上げ砥石、10は棒状の鉄製品である。断面が扁平であることから鉄鏃の可能性がある。11から15はカマド左脇付近から出土した土玉である。11と12は調査時に出土を確認したが、外はカマド左脇の床面直上から採取した土壌サンプルを水洗選別した結果得られた。水洗選別の結果炭化種子なども得られたが、結果は第4章第3節に詳述している。**小結**　本遺構は平安時代の竪穴住居跡であるが、床面中央部の焼土や擦文土器の出土などに擦文文化の影響が色濃く見られる。

第3号竪穴住居跡（SI03）（図75）

位置と確認　ⅢL-33グリッドに位置する。Ⅲ～Ⅳ層上面で確認した。**重複関係**　時期不明(現代？)の溝跡と重複し、本遺構が古い。**規模・平面形**　規模は長軸1.8ｍ、短軸1.7ｍで、東北東－西南西方向に長軸を持つほぼ正方形を呈する。カマドは1基検出し、N-108°－Eに主軸を持つ。**堆積土**　8層に分層できた。褐色土が主体で3層より下位からは炭化材が多数出土したため焼失家屋と考えられる。住居構造材と推定されるが、具体的な構造を推定できるような状態ではなかった。炭化材の一部は樹種同定及び年代測定に供された（第4章第1節参照）住居焼失後に埋め戻された可能性がある。**壁面・床面**　壁はやや開き気味に立ち上がる。確認面までの壁高は40㎝を測る。床面は掘方埋土によってほぼ平坦に整えられている。**壁周溝**　なし。**カマド**　東壁左寄りに構築している。煙道部の構造は半地下式B類である。煙道先端部付近底面がピット状にへこんでいる。カマド本体は依存状態がよく、確認段階で煙道先端の煙出し部分の穴とカマド本体の上面に穴が開いていることが確認できた。火床面は掘方埋土が被熱している。**柱穴・土坑**　南東隅に小土坑（Pit 1）を検出した。内部に焼土や被熱した粘土が堆積しているため、廃絶時まで開口していたと考えられる。**出土遺物**　カマド確認面から図75－1の土師器甕が出土した。炭化材の樹種はクリで、年代測定の結果9世紀末～10世紀後半の年代が推定された。**小結**　本遺構は平安時代の小型の竪穴住居跡で焼失家屋である。

第4号竪穴住居跡（SI04）（図76～78）

位置と確認　ⅡP-31グリッドに位置する。Ⅴ層上面で確認した。約3／4以上が破壊され残存しない。**重複関係**　他の遺構とは無いが、本遺構は古期と新規が存在する。**規模・平面形**　新規の規模は一辺6.7ｍ程度の方形、古期は一辺4.2ｍの方形と推定される。双方ともに東北東－西南西方向に長軸を持つ。古期と新規では竪穴の軸方向に若干の違いがある。カマドは古期新規ともに同一箇所で作り替えをしている。東壁中央右寄りに構築され、N-106°－Eに主軸を持つ。**堆積土**　6層に分

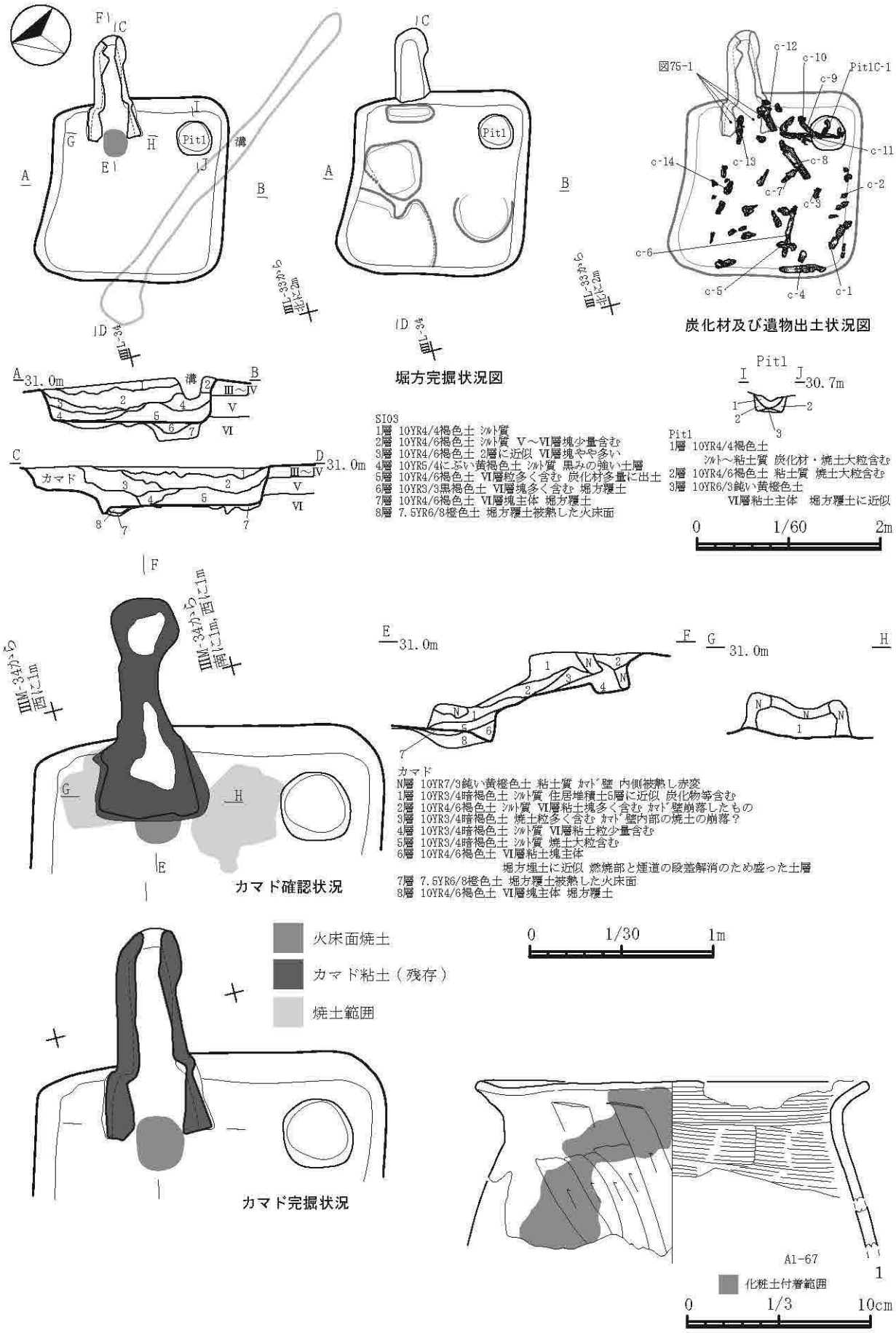


図 75　第３号竪穴住居跡及び出土遺物

遺物等出土状況図

図78-1
図78-3
図78-4
図78-9
A1-18
火山灰サンプル
図77-7
Ⅱ P-33から東に2m
Ⅱ P-33から東に1m

第４号竪穴住居跡平面図

掘方埋土
古期壁周溝
新期カマド掘方埋土
新期カマド煙道壁
古期カマド煙道
新期カマド煙道

SI04カマド脇SK
1層 10YR3/3暗褐色土 シルト質 一部にカマド煙道壁が崩落した粘土塊含む
2層 10YR2/3黒褐色土 シルト質 カマド煙道壁の崩落塊含む
3層 10YR3/4暗褐色土 2層にⅡ～Ⅲ層小塊多く含む
4層 10YR4/6褐色土 砂質と粘土質の中間 Ⅳ～Ⅴ層小塊含む
5層 10YR3/3暗褐色土 Ⅴ～Ⅵ層粒含む

SI01(1～3層はカマド縦セクと対応する
1層 10YR3/3暗褐色土 シルト質 B-Tm火山灰層状に含む
2層 10YR3/3暗褐色土 シルト質 焼土塊、粘土塊含む
3層 10YR3/4暗褐色土 シルト質 焼土粒・塊含む
4層 10YR2/3黒褐色土 シルト質
5層 10YR3/4暗褐色土 シルト質 3層に近似
6層 10YR3/4暗褐色土 シルト質 壁周溝堆積土

0 1/60 2m

SI04カマド
1層 10YR3/3暗褐色土 シルト質 B-Tm火山灰層状に含む
2層 10YR3/3暗褐色土 シルト質 焼土塊、粘土塊含む
3層 10YR3/4暗褐色土 シルト質 焼土粒・塊含む
4層 10YR3/4暗褐色土 カマド由来の焼土塊を多く含む
5層 5YR4/6赤褐色土 粘土質 被熱したカマド天井部
6層 10YR6/4鈍い黄橙色土 粘土質 カマド天井粘土
7層 10YR3/3暗褐色土 焼土塊多く含む 4層に近似
8層 10YR3/4暗褐色土 焼土粒と粘土粒を含む 7層に近似
9層 10YR2/3黒褐色土 シルト質 根による攪乱の可能性あり
10層 10YR3/3暗褐色土 粘土粒を多く含む
11層 10YR3/3暗褐色土 焼土粒や粘土粒を多く含む
12層 5YR5/8明赤褐色土 床面被熱火床面 焼土塊多く硬い
13層 5YR6/8橙色土 火床面焼土の下部 掘方埋土被熱
14層 10YR4/6褐色土 粘土質 Ⅴ～Ⅵ層が貼床状に敷かれる
本層上面より上は新規カマド
15層 10YR3/4暗褐色土 Ⅴ～Ⅵ層小塊や焼土塊を多く含む
16層 10YR3/2黒褐色土 Ⅴ～Ⅵ層小塊や焼土塊を含む
17層 10YR4/6褐色土 Ⅴ～Ⅵ層塊を多く含む
18層 10YR2/3黒褐色土 焼土や粘土粒を多く含む
19層 10YR2/2黒褐色土 粘土粒少量含む
20層 10YR2/2黒褐色土 シルト質 Ⅱ層由来？

トレンチャー
掘方埋土

第４号竪穴住居跡カマド平面図

古期のカマド
カマド脇SK
古期の住居壁溝
Ⅱ P-33から東に2m
Ⅱ P-32から東に1m

B-Tm 火山灰範囲
カマド壁粘土残存範囲
床面被熱範囲
床面被熱範囲（強）

0 1/30 1m

図 76　第４号竪穴住居跡

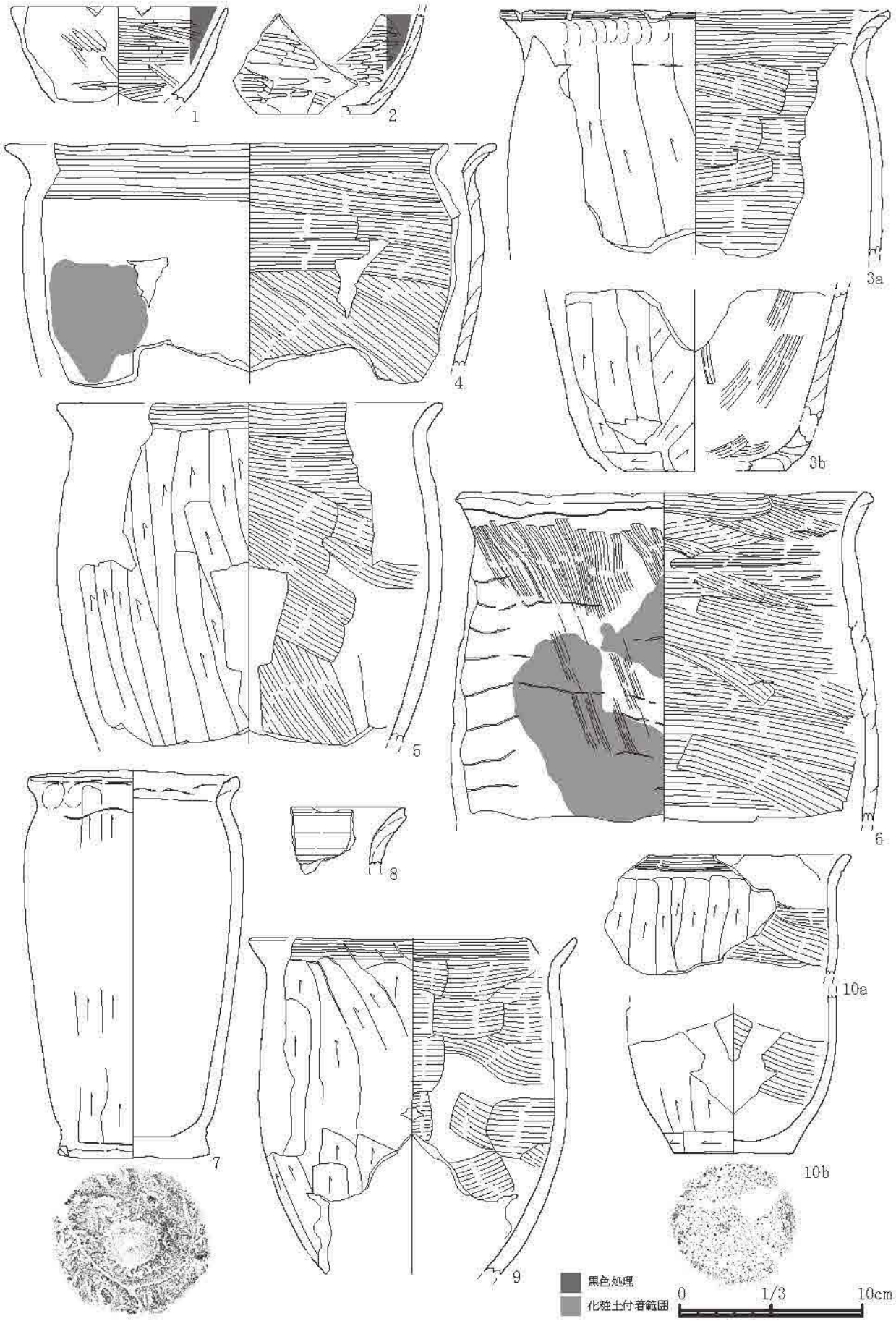


図 77　第４号竪穴住居跡出土遺物（1）

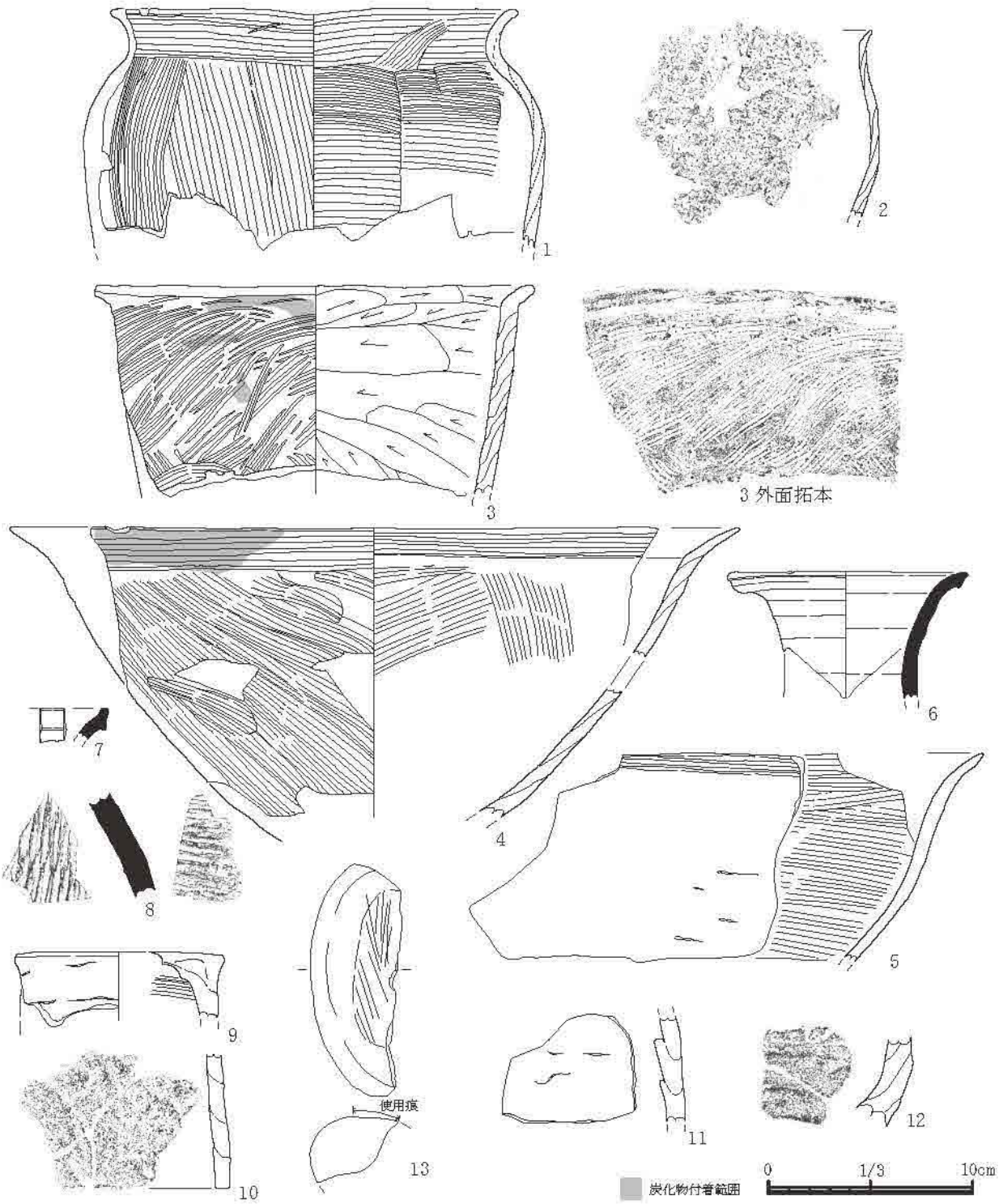


図 78　第 4 号竪穴住居跡出土遺物（2）

層できた。褐色土が主体で最上層に白頭山－苫小牧火山灰が堆積している。**壁面・床面**　壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面までの壁高は 27 cmを測る。床面は掘方埋土によってほぼ平坦に整えられている。**壁周溝**　新規・古期ともにカマド部分を除き全周する可能性がある。**カマド**　煙道部の構造は新規が半地下式A類であり、古期が地下式D類である。古期煙道は使用終了時に埋め戻された後、新規煙道が直上に構築されている。カマド煙道の北側脇に接するように土坑が検出されたが、調査の結果煙道新規煙道よりも古いことが判明した。堆積土中に煙道壁の崩落塊が含まれるため、住居に伴う

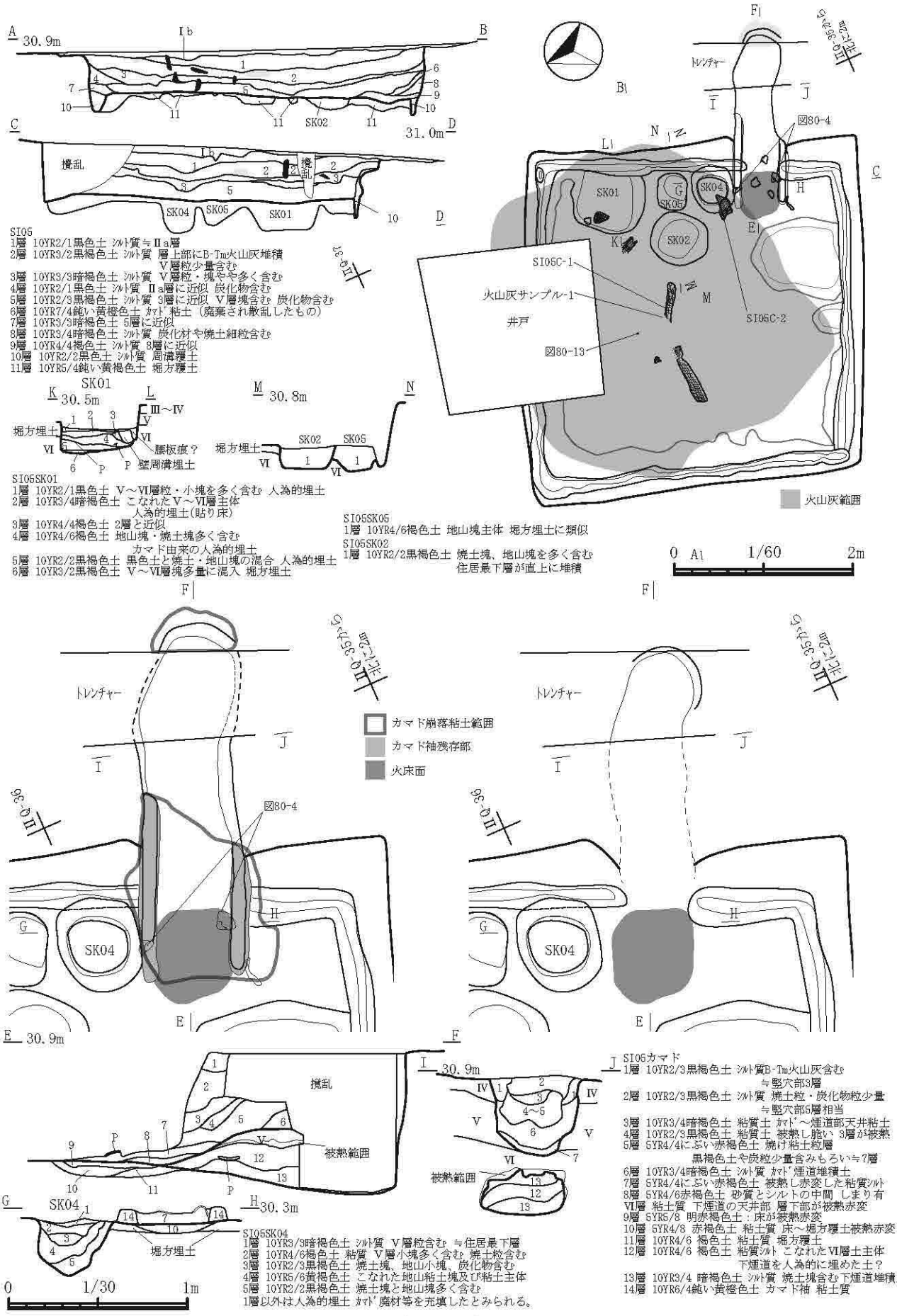


図 79　第５号竪穴住居跡

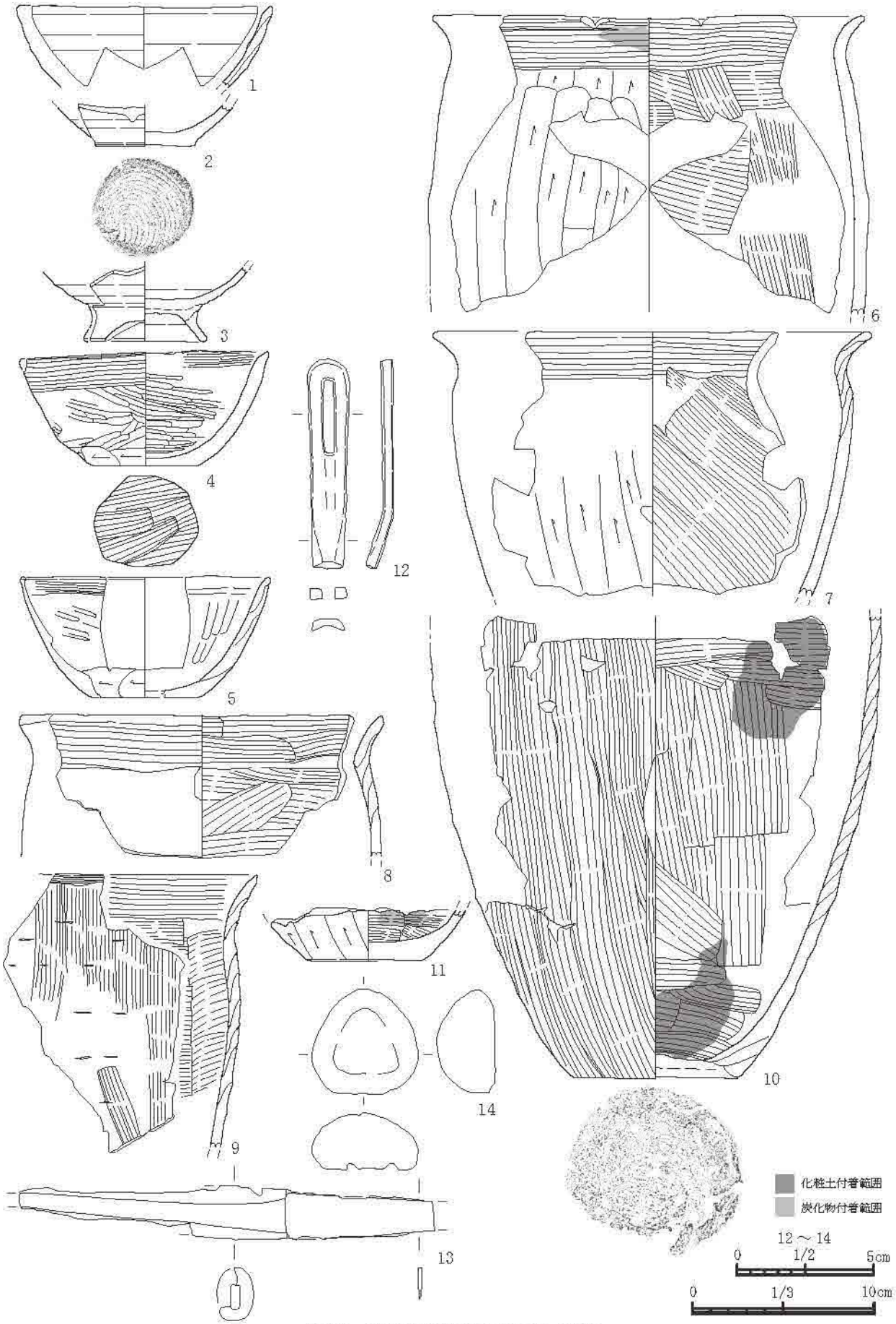


図 80　第５号竪穴住居跡出土遺物

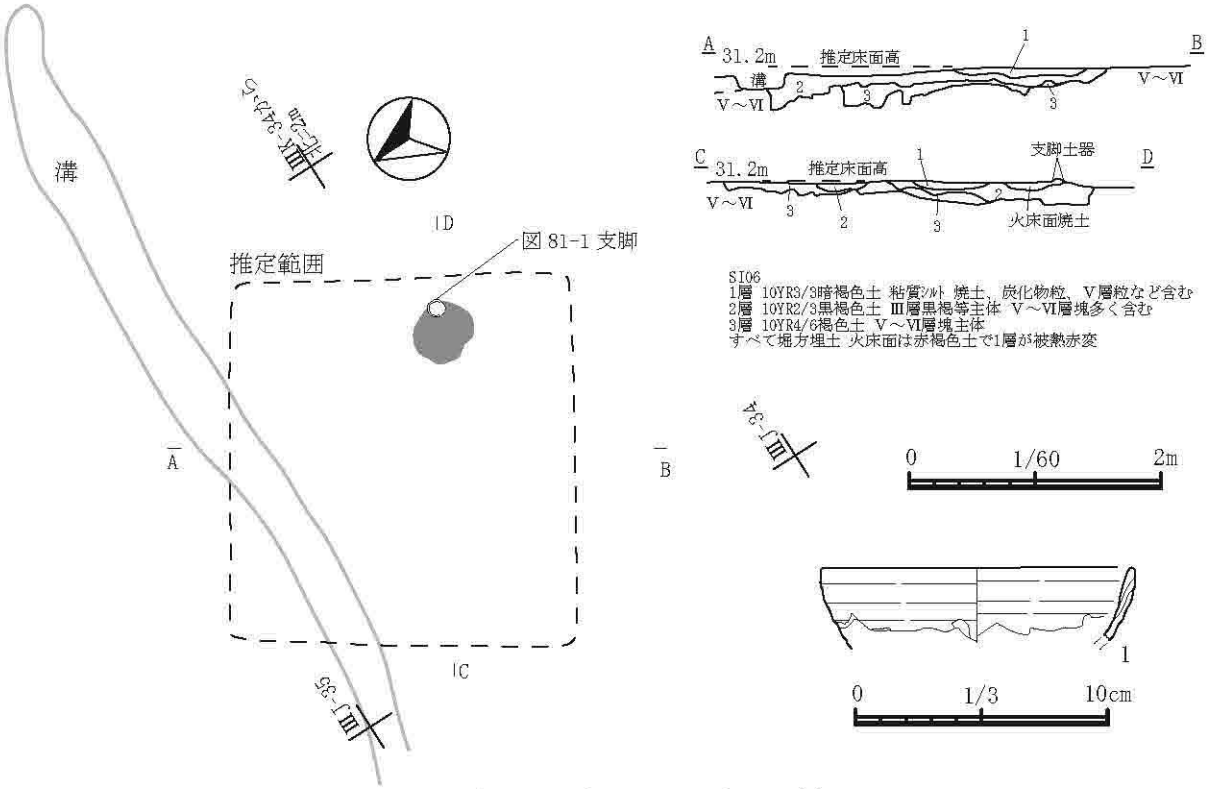


図 81　第６号竪穴住居跡及び出土遺物

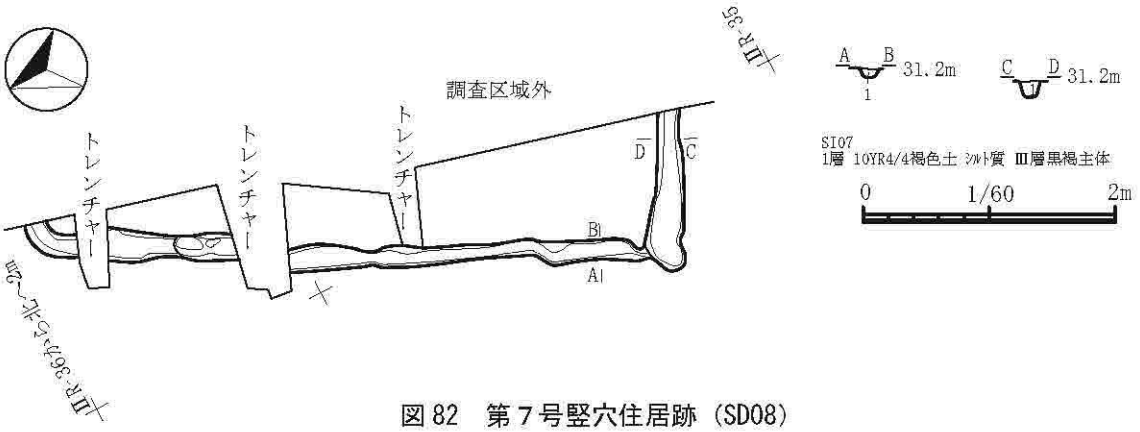


図 82　第７号竪穴住居跡（SD08）

可能性がある。カマド本体は依存状態がよくなく、袖の最下部がかろうじて残存していた。廃絶時に破壊されたと考えられる。カマド本体壁は粘土と板状の凝灰岩に加え、図 77 － 7 が芯材として使用されていた。火床面は掘方埋土が被熱している。**柱穴・土坑**　明確なものは検出されなかった。**出土遺物**　カマド周囲から土師器・須恵器の他図示しなかったが鉄滓が少量出土している。図 77 － 1 ・２は内面黒色坏である。図 77 － 3 ～図 78 － 2 は土師器甕である。図 78 － 3 は土師器甕の可能性もあるが、鉢の可能性も否定できない。外面は洗い刷毛目状のヘラナデ調整が見られ、上半は右上から左下へ向かい、下半は左上から右下へと向かっているようである。図 78 － 4 ・５は土師器鍋、６～８は須恵器である。６と７は長頸壺であり、外面特徴から五所川原産の可能性が高い。口唇端部の形状は MZ06 号あるいは MZ07 号窯跡の出土資料に類似している。８は須恵器甕の体部破片である。内外面ともに平行タタキ目及び当て具痕が見られる。産地は不明である。９・10 は土製支脚である。下端部にスリットが見られ内外面に輪積み痕跡が残る。**小結**　本遺構は平安時代の竪穴住居跡である。

第５号竪穴住居跡（SI05）（図 79 ～ 80）

位置と確認　Ⅱ P-36 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で確認した。**重複関係**　現代の井戸枠により北側の一部を破壊されている。**規模・平面形**　規模は長軸 3.7 m、短軸 3.6 mで、北西－南東方向に長軸を持つほぼ正方形を呈する。カマドは同一箇所で作り替えされており、N -112°－Eに主軸を持つ。**堆積土**　11 層に分層できた。２層下部に白頭山－苫小牧火山灰が堆積している。それより上位はⅡａ層主体の自然流入土と考えられる。３層より下位は暗褐色土主体の土層で、炭化材や遺物を含む。炭化材の一部は樹種同定に供された（第４章第２節参照）。**壁面・床面**　壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面までの壁高は 58 cmを測る。床面は掘方埋土によってほぼ平坦に整えられている。**壁周溝**　カマド部分を除き全周する。**カマド**　南東壁右寄りに構築している。煙道部の構造は新規が半地下式Ａ類であり、古期が地下式Ｄ類である。古期煙道は使用終了時に埋め戻された後、新規煙道が直上に構築されている。カマド本体は依存状態がよくなく、袖の最下部がかろうじて残存していた。廃絶時に破壊されたと考えられる。カマド本体壁は粘土が利用され、図 80 －４が芯材として使用されていた。火床面は掘方埋土が被熱している。**柱穴・土坑**　カマド左脇～北東隅に小土坑（SK01・02・04・05）を検出した。堆積状況等から SK02 は廃絶時に開口していたと考えられる。また、SK01 は古期カマド使用時に開港していた可能性が高い。**出土遺物**　土師器坏・甕・鉄製品が出土した。廃絶時に伴うものは図 80 －４・８・９・13 であり、古期に伴う可能性があるものは図 80 －３・５・６・７・10 である。４と５は赤褐色を呈する坏で、内外面にミガキ調整が見られる。底部付近及び底面にはケズリ及びナデ調整がみられる。13 は鉄製刀子で柄部木質が錆に取り込まれ残存していた。12 は堆積土から出土した馬具？状鉄製品である。床面出土炭化材の樹種はクリであった（第４章第２節参照）。**小結**　本遺構は平安時代の竪穴住居跡である。

第６号竪穴住居跡（SI06）（図 81）

位置と確認　Ⅲ J-34 グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。周辺は削平が激しく、火床面焼土と支脚を確認した後トレンチを用いて堀方の範囲を確認した。**重複関係**　現代の溝により一部が破壊されている。**規模・平面形**　規模は長軸 2.9 m、短軸 2.7 mで、北西－南東方向に長軸を持つほぼ正方形を呈する。カマドは南東壁中央右寄りにあったと推定される。N -121°－Eに主軸を持つと推定される。**堆積土**　堀方埋土のみで３層に分層できた。**壁面･床面**　壁は削平のため検出できなかった。床面は掘方埋土によってほぼ平坦に整えられて板と推定される。**壁周溝**　不明。**カマド**　火床面と土師器坏を伏せた支脚が検出されただけである。**出土遺物**　図 81 －１は土師器坏である。**小結**　本遺構は平安時代の竪穴住居跡である。

第７号竪穴住居跡（SD08）（図 82）

位置と確認　Ⅱ Q-35 グリッドに位置する。Ⅳ～Ⅴ層で確認した。周辺は削平が激しく、壁周溝とみられる溝が確認できただけであった。**重複関係**　なし。規模・平面形　大部分が調査区域外で破壊されているため、規模は一辺 5.2 mの方形を呈すると推定される。北西－南東方向に長軸を持つほぼ正方形を呈する。N -118°－Eに主軸を持つと推定される。**堆積土**　壁周溝埋土のみを確認した。**壁面･床面**　壁床面ともに削平のため検出できなかった。**壁周溝**　調査した範囲では全周している。**カマド**

調査区域外にあったと考えられるが破壊されている。**小結**　本遺構は平安時代の竪穴住居跡である。

表４　新沢（1）遺跡土坑一覧表

		グリッド	確認	平面規模(m)	深さ(m)	軸方向			付属施設	時代・時期
SK	1	ⅡJ-29	Ⅳ	0.69×0.68	0.28				-	縄文晩期?
SK	2	ⅢK-30	Ⅴ	0.57×0.54	0.1				-	縄文晩期?
SK	3	ⅢK-29	Ⅴ	0.87×0.78	0.26				-	縄文晩期?
SK	5	ⅢG-28	Ⅴ	0.66×0.6	0.28				-	縄文晩期?
SK	6	ⅢG-28	Ⅳ	0.97×0.9	0.36				-	縄文晩期?
SK	7	ⅢH-28	Ⅳ	0.73×-	0.22				-	縄文晩期?
SK	8	ⅢO-31	Ⅳ	1.4×1.3	0.49				-	縄文晩期
SK	9	ⅢG-28	Ⅳ	1.4×1.0	0.32				-	縄文晩期?
SK	10	ⅢL-31	Ⅴ	2.4×2.0	-	N	114°	E	長軸両端にPit	平安竪穴
SK	12	ⅡN-27	Ⅳ	1.65×1.6	0.32	N	162°	E	-	平安時代
SK	13	ⅢF-29	Ⅳ	1.1×1.1	0.31					縄文晩期?
SK	14	ⅢF-29	Ⅳ	0.7×-	0.46					縄文晩期?
SK	16	ⅢK-33	Ⅴ	2.27×1.87	-				長軸片端にPit	不明
SK	17	ⅢH-32	Ⅴ	0.88×0.85	0.17					縄文晩期?
SK	18	ⅢH-33	Ⅴ	0.82×0.79	0.18					縄文晩期?
SK	19	ⅡP-29	Ⅵ	0.43×-	0.19					不明
SK	20	ⅡO-27	Ⅴ	0.46×-	0.13					不明
SK	22	ⅢK-35	Ⅳ	2.1×1.97	1.5				底面中央にPit	縄文後期?
SK	25	ⅡR-24	Ⅴ	1.3×0.9	0.29					不明

２、土坑跡（図 83 ～ 85）

土坑跡は 19 基調査した。そのうち形状や出土遺物等により確実に時期が決定できるのは第８号・10 号・12 号であり、その他は詳細な時期が不明な物が多い。従って遺構の規模や堆積土矢分布状況を検討した結果、下表のような結果となった。なお、各遺構の土層注記は以下のような基準で層を記述した。

A 層：Ⅲ層ｼﾙﾄ質黒褐色土主体で暗褐色土（Ⅴ層小粒含む）塊をまだらに含む層≒自然堆積？

B 層：暗褐色土（Ⅴ層小粒含む）主体　Ⅴ層大粒または塊を含み攪拌された感じ≒人為堆積？

C 層：Ⅲ層黒塊とⅣ～Ⅴ層塊が混在する。B 層より攪拌が弱いか？堆積状況は不明。

D 層：暗褐色ｼﾙﾄ質土　Ⅱ層ｼﾙﾄ質土が基質できめ細かい。Ⅴ層粒や淘汰されたⅣ層塊・Ⅱｂ層塊などを含む。平安時代の遺構堆積土によく見られる。以下に代表的な遺構について記述する。

第８号土坑（図 83）

Ⅲ０－31 グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。底面は直径約 1.4m の円形で、断面形はフラスコ状である。堆積土は中央部にⅥ層由来の粘質土を多く含む土層が見られ、その下位と両脇はＢ層が見られるため人為的に埋め戻された可能性が高い。堆積土最下部からは縄文時代晩期前葉（大洞Ｂ式）の深鉢形土器が出土した（図 83 －１）。口縁部に平行沈線間の列点と、三叉文が連続してみられる。胴部には LR が横位に回転施文されている。外面と内面の上半に炭化物が付着している。小結　遺物の出土状況や遺構の形状などから、縄文時代晩期の貯蔵穴または土坑墓の可能性がある。

第 10 号土坑（図 84）

ⅢＬ－31 グリッドに位置する。Ⅴ層で確認した。周囲は削平が激しく、遺構の底面は残存していない可能性が高い。平面形状は長軸 2.4 ｍ、短軸 2.0 ｍの長方形である。長軸端部に柱穴状のピットを２基検出した。深さは Pit １＝ 52 ㎝、Pit ２＝ 48 ㎝である。堆積土として確認できたのは堀方埋土と考えられる。ピット同士を結んだ長軸はＮ -114°　－Ｅとなり、第１号、第２号竪穴住居跡と近似している。遺物は出土していない。小結　本遺構は形状から平安時代の土坑と考えられる。長軸方向が付近の竪穴住居跡と近似することから同時期に機能していた可能性もある。

第 12 号土坑（図 84）

ⅡN-27 グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。平面形状は一辺約 1.6 ｍの方形で、深さは 32 ㎝である。堆積土１層には白頭山－苫小牧火山灰火山灰が堆積している（第４章第５節参照）堆積土３層中からは多量の炭化材片が出土した。樹種はクリ・タラノキ・クスノキ科などの広葉樹が見られた（第

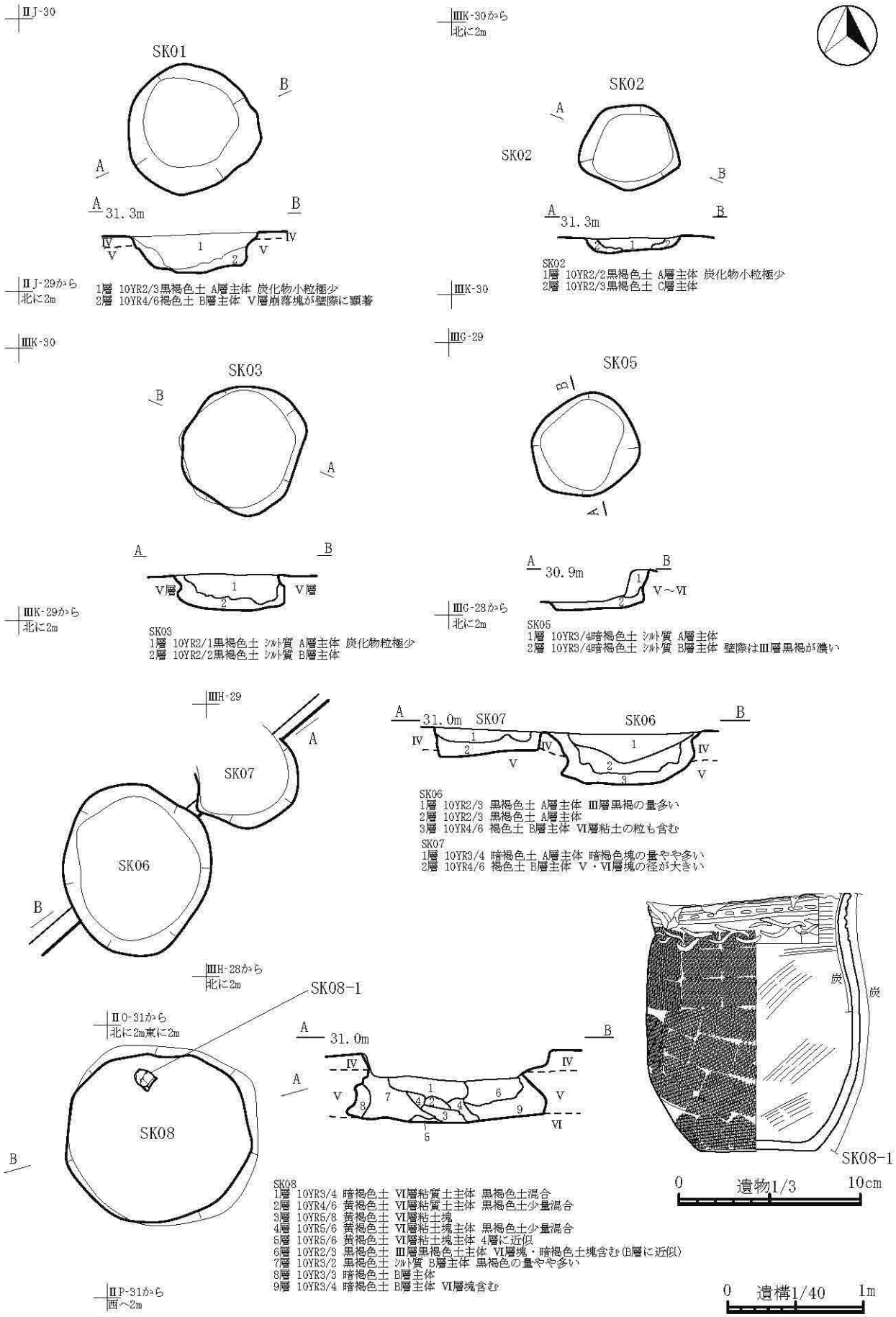


図 83　第１・２・３・５・６・７・８号土坑及び出土遺物

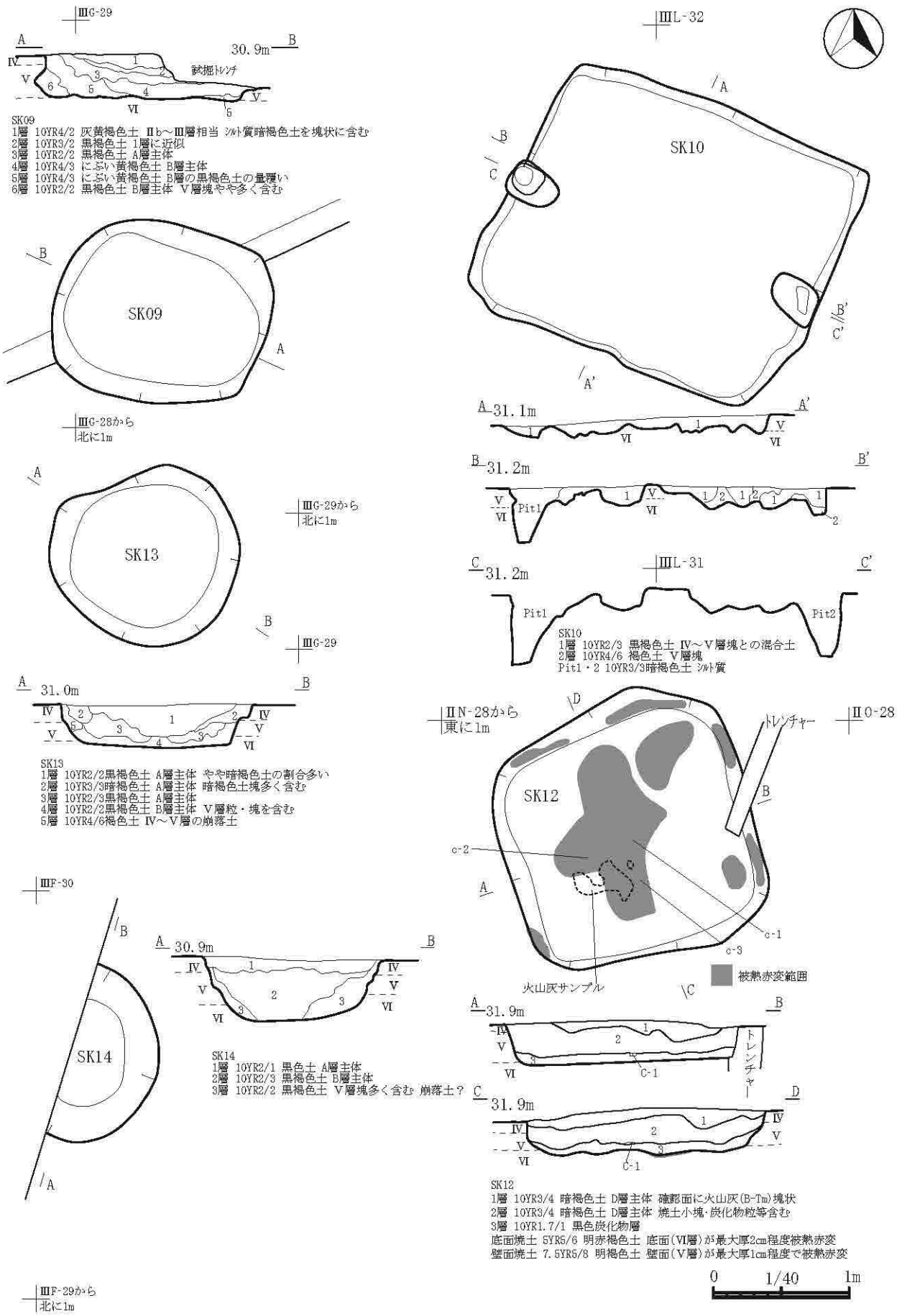


図84　第９・10・12・13・14号土坑

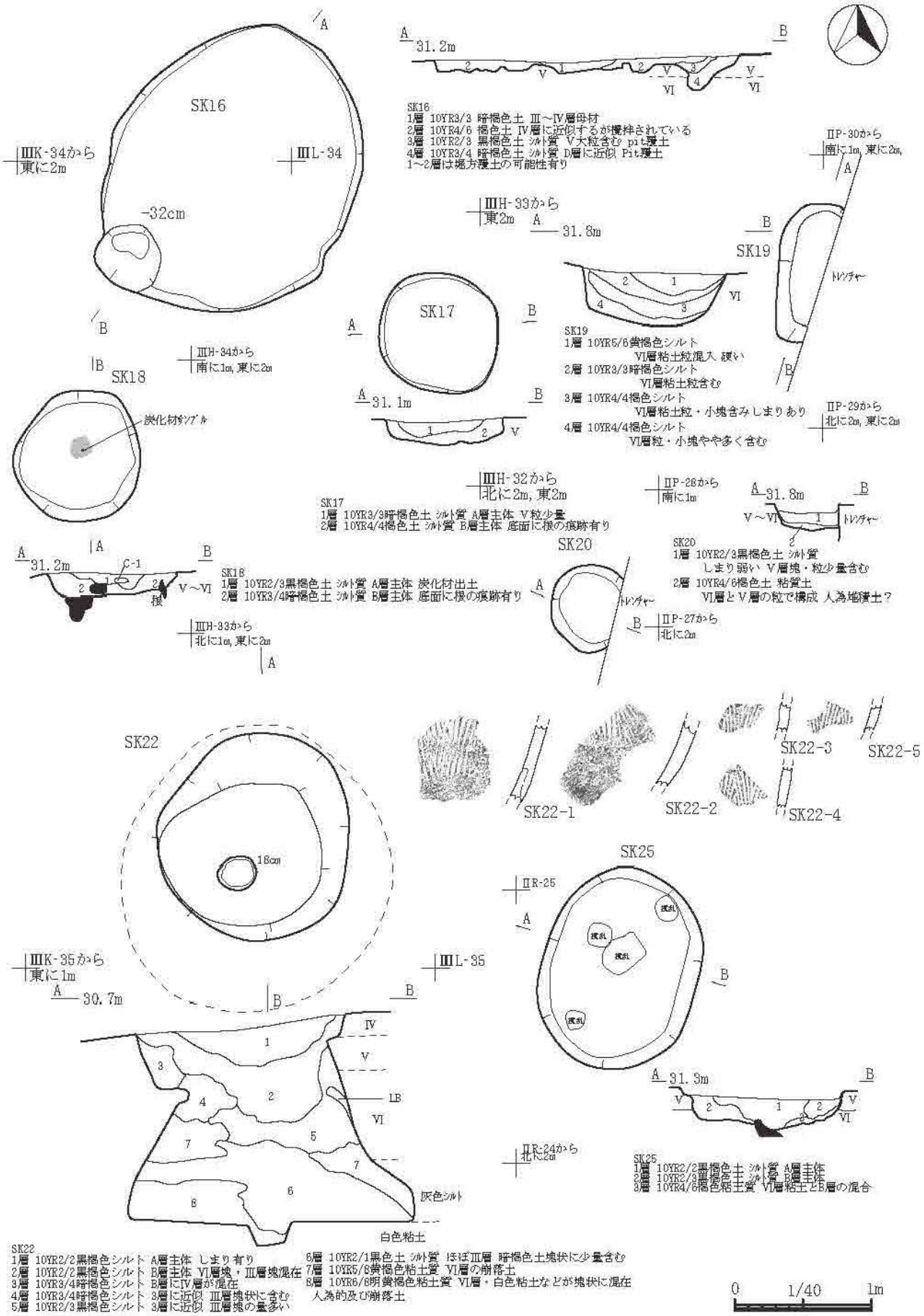


図85 第16・17・18・19・20・22・25号土坑及び出土遺物

４章第２節参照)。遺構壁面と底面の一部は被熱し赤変しており、遺構内で焼成作業を行ったことがわかる。また炭化材片の多量に出土した状況からいわゆる製炭土坑の可能性が高い。小結　本遺構は形状及び火山灰の堆積状況等から平安時代の製炭土坑と考えられる。

第18号土坑（図85）

Ⅲ H－33グリッドに位置する。Ⅴ層で確認した。底面は直径約0.8mの円形で、断面形は箱形である。堆積土はＡ層とＢ層が見られるが、１層で出土した炭化材を年代測定したところ、７世紀末～９世紀後半の値が測定された。遺構自体は根による攪乱も受けており、時期決定は難しい。形状からは縄文時代晩期の可能性も考えられるが、古代に下る可能性が年代測定値から示された。

第22号土坑（図85）

Ⅲ K-35グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。平面規模は底面が直径約２ｍの円形で、断面形はフラスコ状である。深さは1.5ｍである。堆積土はＢ層主体で全体的に人為的に埋め戻された可能性が高い。堆積土中から縄文時代早期押型文土器片が５片出土した。この移行の時期を示すものではなく、埋め戻しの際の土層に混じっていたと考えられる。本遺跡と谷を挟んで北側に位置する新沢（２）遺跡では同様な形状で縄文時代後期前葉に帰属するフラスコ状土坑が多数発見されており、本遺構も同様の時期の可能性がある。

３、土器埋設遺構

第１号土器埋設遺構（図86）　Ⅲ I-30グリッドに位置する。Ⅴ層で埋設された土器を確認した。直径約30cmの円形の堀方に弥生時代前期（砂沢式期）の深鉢形土器を埋設している。埋設された土

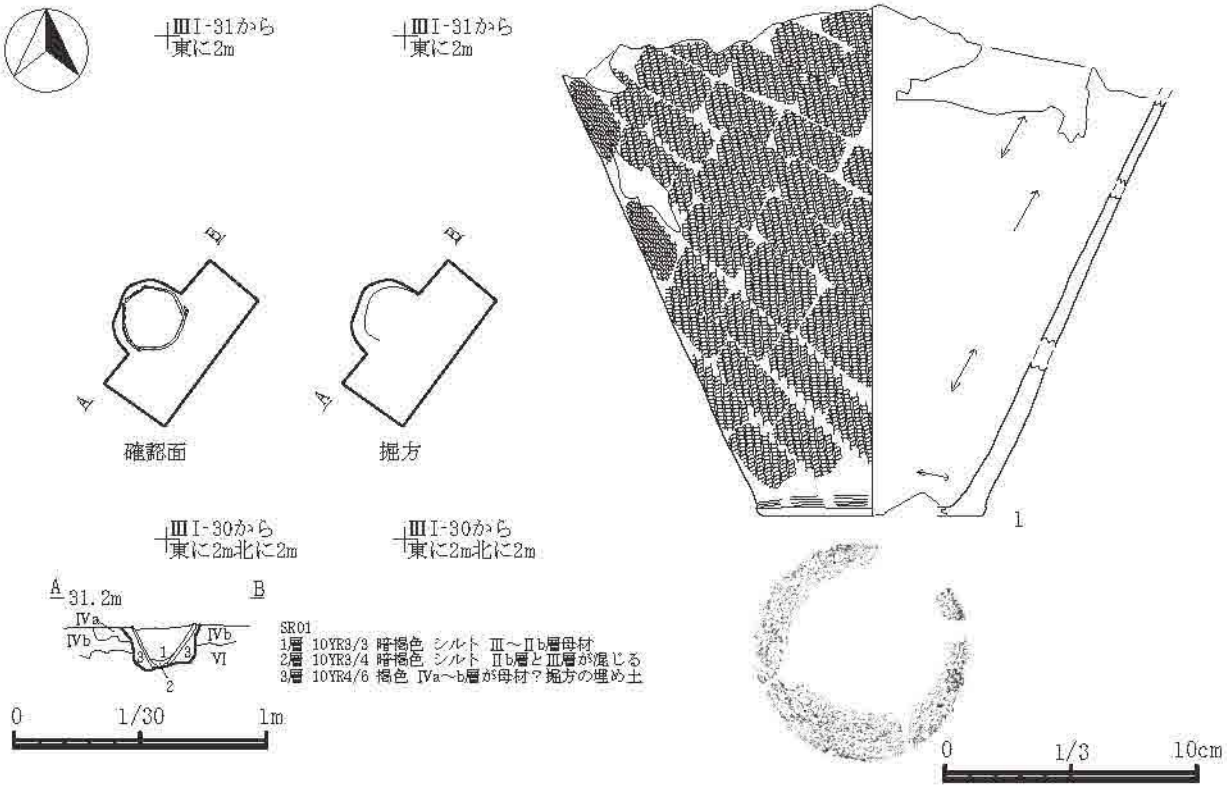


図86　第１号土器埋設遺構

器は上半部が削平のため無くなっているため全体形状は不明である。体部外面にはRLが横位に回転施文されており、底面は穿孔されている。底面の穿孔が見られるため、本遺構は墓としての機能を持つ可能性が高い。土器内部の土壌を水洗したところ、炭化種子が得られた（第４章第３節参照）

４、溝状土坑（図87）

溝状土坑は３基検出された。同様な規模・形状であり、等高線にほぼ直行するように配置されている。堆積土は上位にＡ層が見られ、この部分は自然流入と考えられる。その下位は地山塊と黒褐色土が互層になっており、壁面の崩落などが考えられる。Ａ層の存在からこれらの遺構は縄文時代に帰属すると考えられる。規模等については表５を参照。

表５　溝状土坑一覧表

遺構名		グリッド	確認	平面規模(m)	深さ(m)
SV	1	ⅢK-30	Ⅳ	4.0×0.15	1.27
SV	2	ⅡQ-36	Ⅳ	3.6×0.15	1.5
SV	3	ⅡN-26	Ⅴ	(2.8)×0.15	1.6

５、掘立柱建物跡（図88）

第１号掘立柱建物跡

Ⅱ0-28グリッドに位置する。Ⅴ層で確認した。付近で検出した７基のピットの配列を検討した結

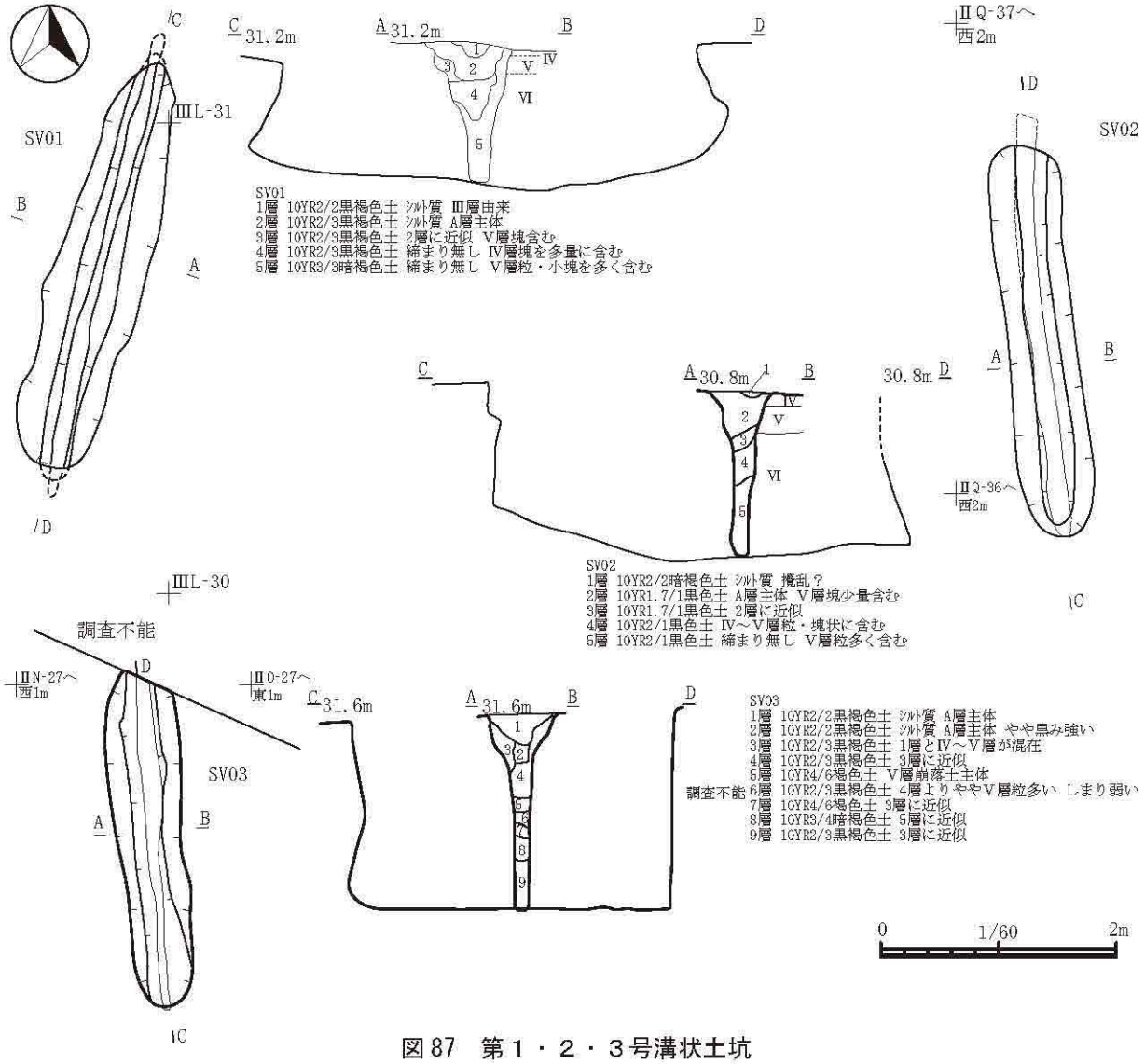


図87　第１・２・３号溝状土坑

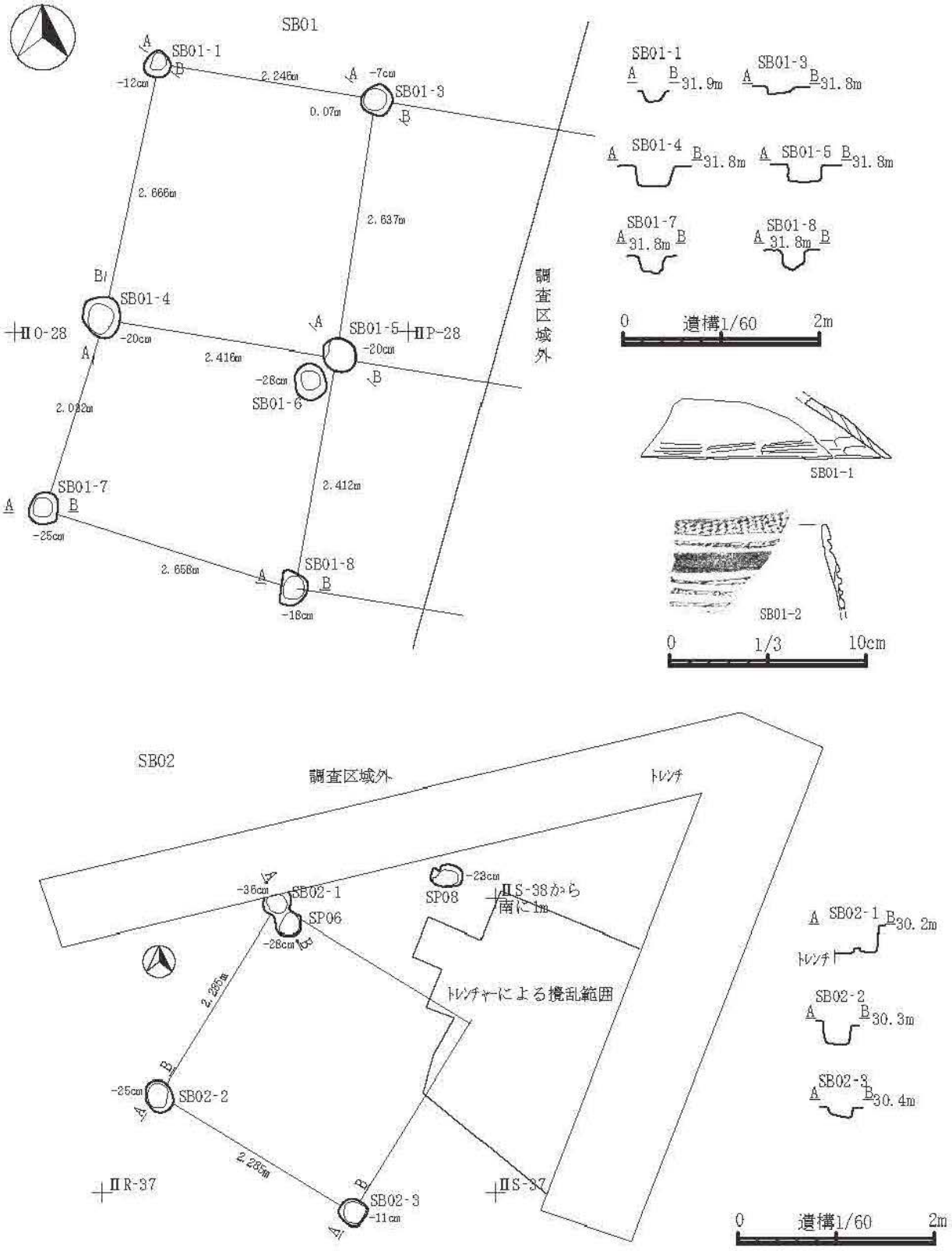


図 88　第１・２号掘立柱建物跡及び出土遺物

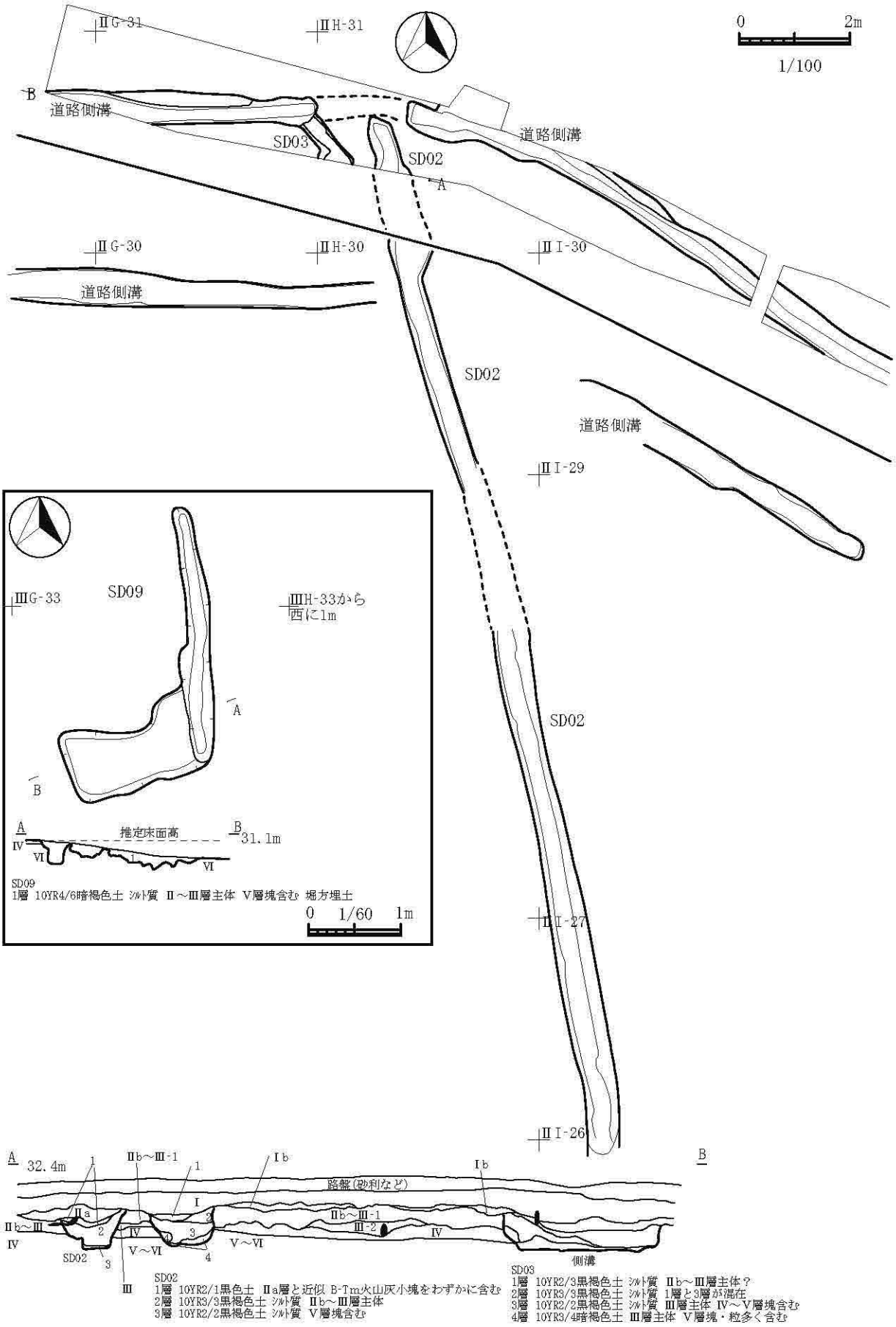

ⅡG-31
ⅡH-31
0
2m
1/100
B
道路側溝
SD03
SD02
A
道路側溝
ⅡG-30
ⅡH-30
ⅡI-30
道路側溝
SD02
道路側溝
ⅡI-29
ⅢG-33
SD09
ⅢH-33から
西に1m
A
B
A
推定床面高
B
31.1m
IV
VI
VI
SD09
1層 10YR4/6暗褐色土 ｼﾙﾄ質 Ⅱ～Ⅲ層主体 Ⅴ層塊含む 堀方埋土
0
1/60
1m
SD02
ⅡI-27
ⅡI-26
A
32.4m
Ⅱb～Ⅲ-1
Ⅰb
Ⅰb
B
路盤(砂利など)
Ⅱa
Ⅱb～Ⅲ
IV
Ⅱb～Ⅲ-1
Ⅲ-2
IV
V～VI
V～VI
SD02
Ⅲ
側溝
SD02
1層 10YR2/1黒色土 Ⅱa層と近似 B-Tm火山灰小塊をわずかに含む
2層 10YR3/3黒褐色土 ｼﾙﾄ質 Ⅱb～Ⅲ層主体
3層 10YR2/2黒褐色土 ｼﾙﾄ質 Ⅴ層塊含む
SD03
1層 10YR2/3黒褐色土 ｼﾙﾄ質 Ⅱb～Ⅲ層主体？
2層 10YR3/3黒褐色土 ｼﾙﾄ質 1層と3層が混在
3層 10YR2/2黒褐色土 ｼﾙﾄ質 Ⅲ層主体 Ⅳ～Ⅴ層塊含む
4層 10YR3/4暗褐色土 Ⅲ層主体 Ⅴ層塊・粒多く含む

図 89　第２・３・９号溝跡

果１つの建物跡を構成すると判断した。平面形状は現状で１間×２間であるが、東側に延びる可能性がある。柱間と各ピットの深さは図に示した。Pit １から弥生土器が出土しているが、本遺構の帰属時期を示すものではない。詳細な時期は不明であるが、付近に所在する第４号竪穴住居とは軸方向が近似しているため、同時期に存在していた可能性がある。

第２号掘立柱建物跡

Ⅱ R-37 グリッドに位置する。Ⅳ～Ⅴ層で確認した。付近で検出した５基のピットの配列を検討した結果１つの建物跡を構成すると判断した。平面形状は現状で１間×１間である。柱間と各ピットの深さは図に示した。詳細な時期は不明であるが、付近に所在する第５号竪穴住居とは軸方向が近似しているため、同時期に存在していた可能性がある。

６、溝跡（図 89）

第２・３号溝跡　Ⅱ H ～Ⅱ I-26 ～ 30 グリッド付近に存在する。Ⅱ b ～Ⅲ層で確認した。第２号溝跡は幅約 70 ㎝の溝跡が約 19 m延伸している。第３号溝跡はⅢ H-30 グリッド付近で一部が検出された。堆積土の観察から、第２号溝跡は平安時代の溝である可能性が高い。第３号溝跡についても平安時代に帰属する可能性が高い。

第９号溝跡　Ⅲ G-32 グリッドに位置する。Ⅳ～Ⅵ層で確認したが、西側の大部分が削平されているため規模・形状は不明である。現状では細長い溝跡と不整形な浅い掘り込みからなる。状況を勘案すると竪穴住居跡の一部であった可能性も考えられるが詳細は不明である。堆積土はⅡ～Ⅲ層主体の土層となるため、現代ではなく平安時代頃の遺構である可能性がある。

７、遺構外出土遺物（図 90 ～ 95）

遺構外からは縄文時代早期～平安時代の遺物が散発的に出土したが、先述した２箇所では弥生時代前期の遺物がまとまって出土した。以下に各種別毎に記述する。

縄文時代の土器（図 90）：図 90 の１～３は第Ⅰ群ｂ類土器の体部破片である。すべてⅢ I-37 付近から出土しているため同一個体と考えられる。押型原体の横位回転によりＶ字状文様が連続している。１は横走する３条の沈線も見られる。胎土には繊維を含み、内面は平滑にみがかれている。４と５は第Ⅰ群ｃ類土器である。Ⅱ K-37 付近で出土している。４は口縁部から体部までの破片である。口唇部は丸みを帯びつつ尖り気味で、端部外面には板状工具による刻みが連続する。外面には貝殻腹縁の圧痕と条痕が見られる。地文は横位の条痕文である。腹縁圧痕は横位に３～４条が帯状に施文されており、口縁部下部や胴部など少なくとも３段程度帯状に施文されている。胎土には繊維や砂粒を含み、内面はナデ調整が見られる。５は縦位の爪形の刺突が横方向に連続している。爪形は左側から施文され右半分は粘土がめくれ上がっている。地文は横位の貝殻条痕である。５ａは口縁部破片で、口唇端部に刻みが連続している。胎土に繊維は含まれず、４よりやや硬質な胎土である。６と７は第Ⅱ群ｂ類土器で、円筒下層ｄ２式に比定される。８は第Ⅲ群ａ類どきで円筒上層ｃ式土器に比定される。９は第Ⅲ群ｃ類土器で大木 10 式平行期の土器に比定される。10 は詳細な時期が不明であるが、沈線の感じなどから第Ⅳ群土器の可能性がある。

弥生時代の土器　図 90 － 11 ～ 33 は調査区北側斜面付近から、図 90 － 34 ～図 92 － 14 は調査区

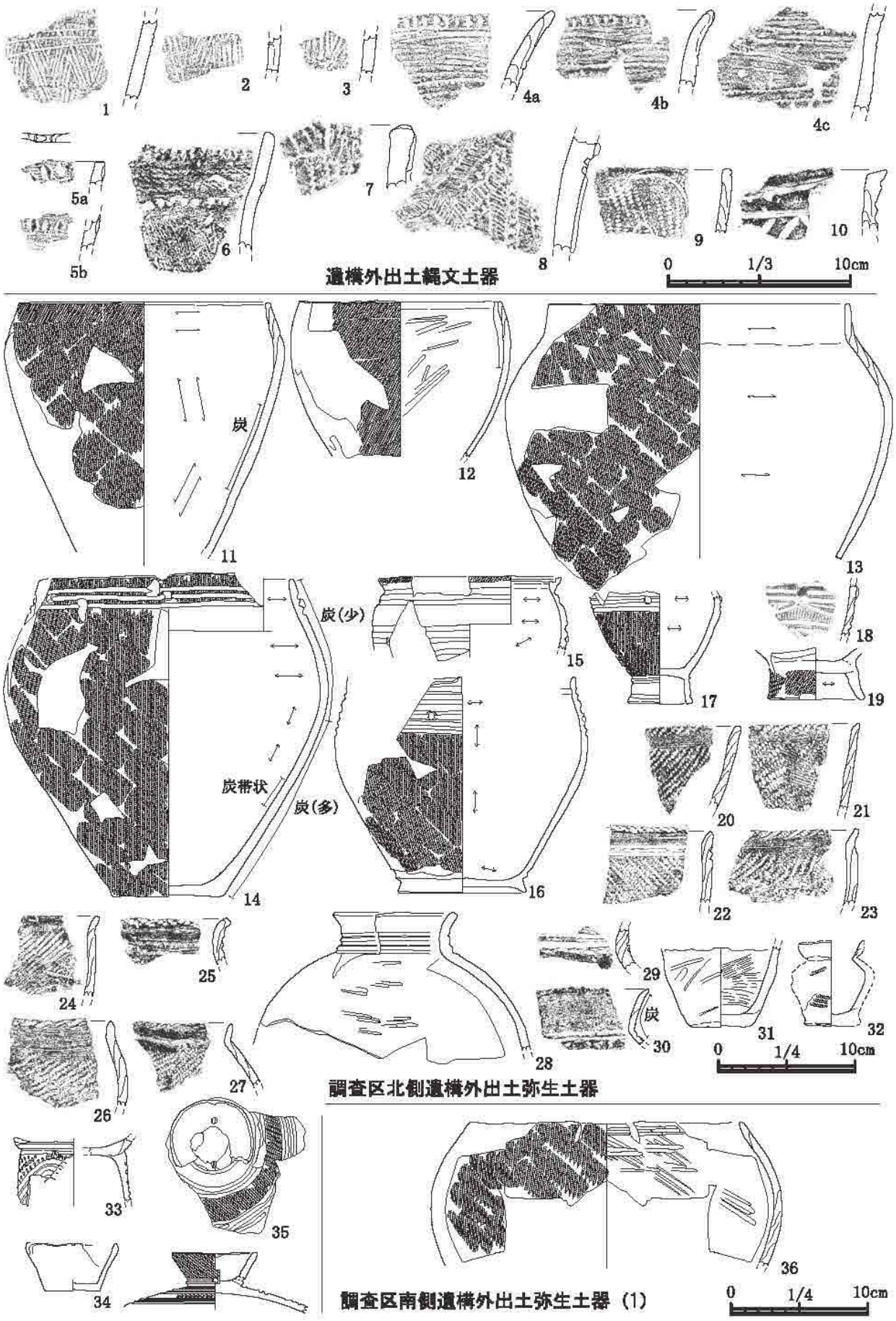
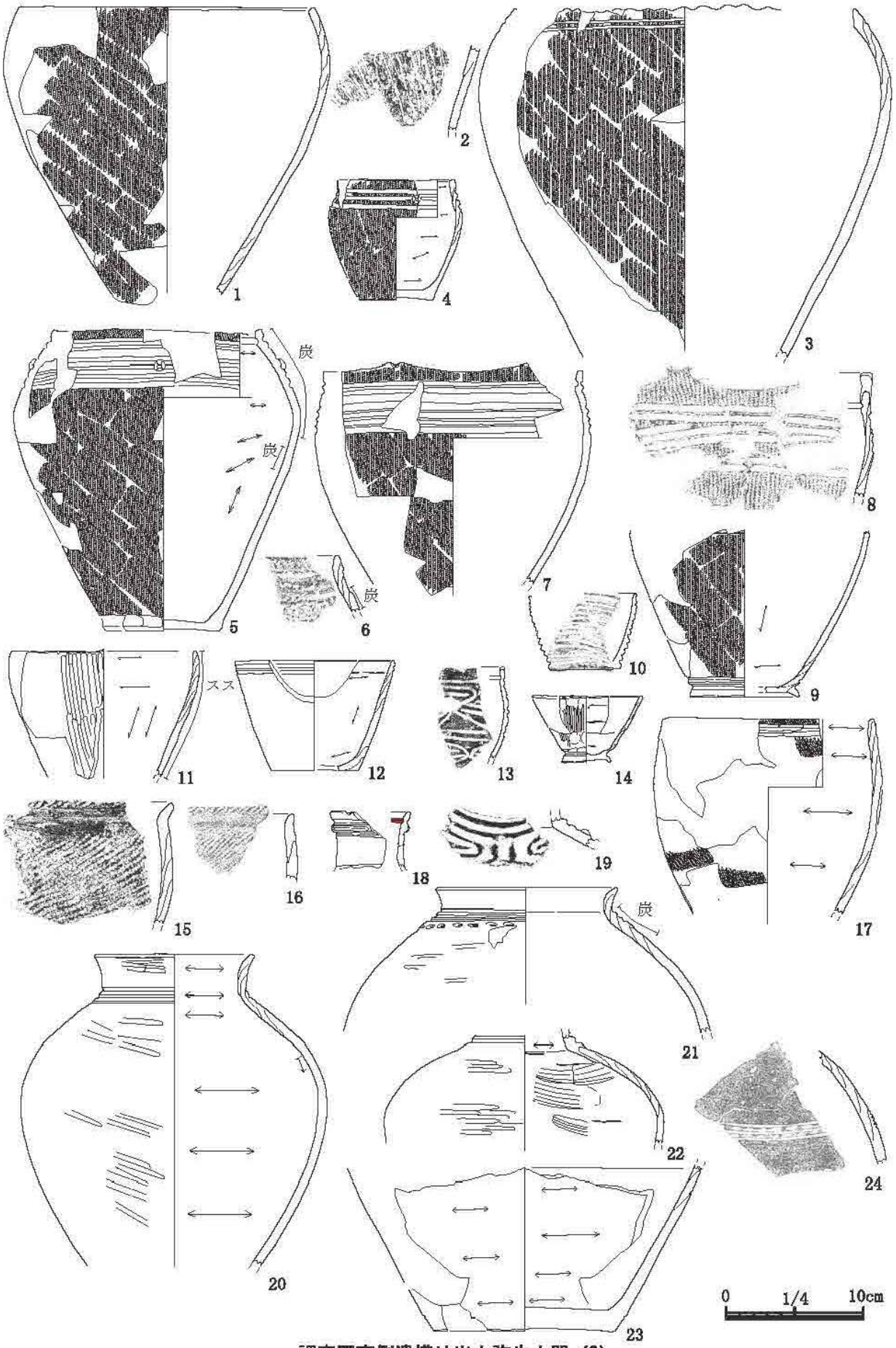
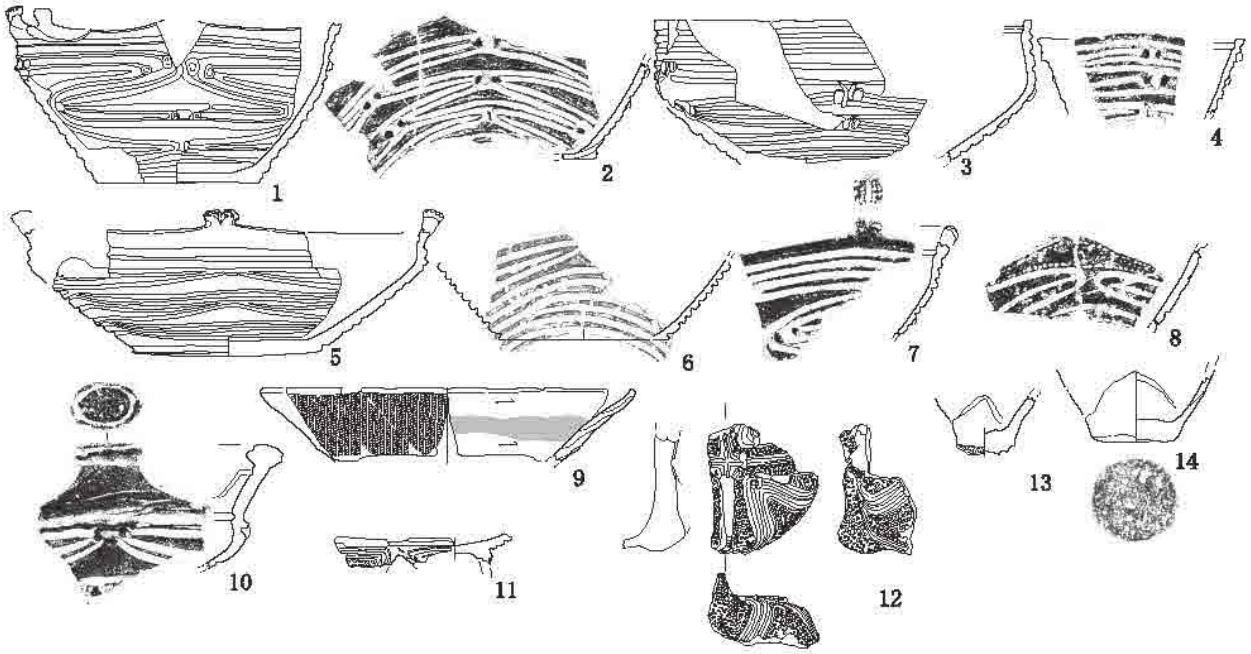


図 90　遺構外出土遺物(1)



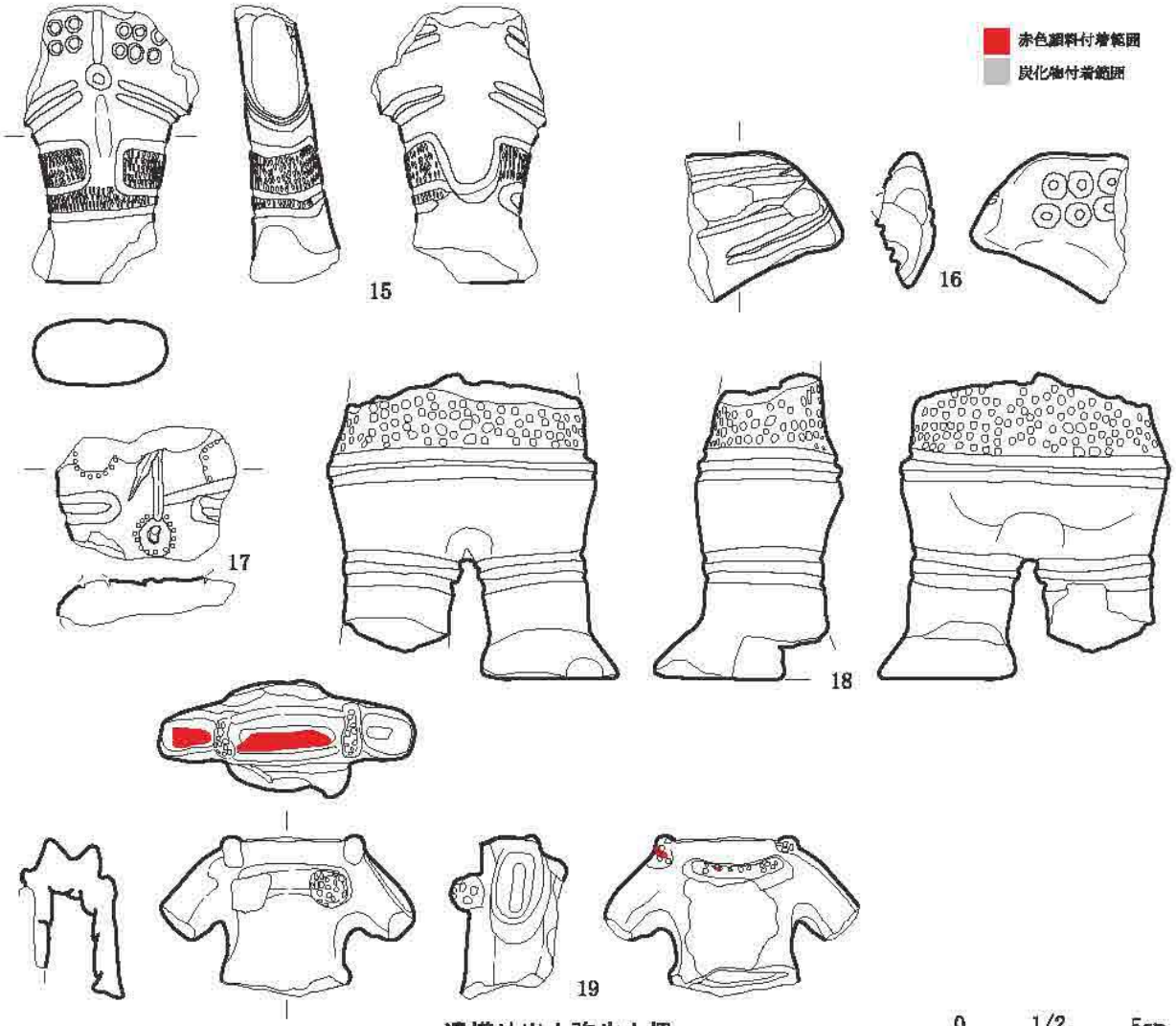
調査区南側遺構外出土弥生土器（2）

図 91　遺構外出土遺物（2）



調査区南側遺構外出土弥生土器（3）

0　1/4　10cm



遺構外出土弥生土偶

0　1/2　5cm

図 92　遺構外出土遺物（3）

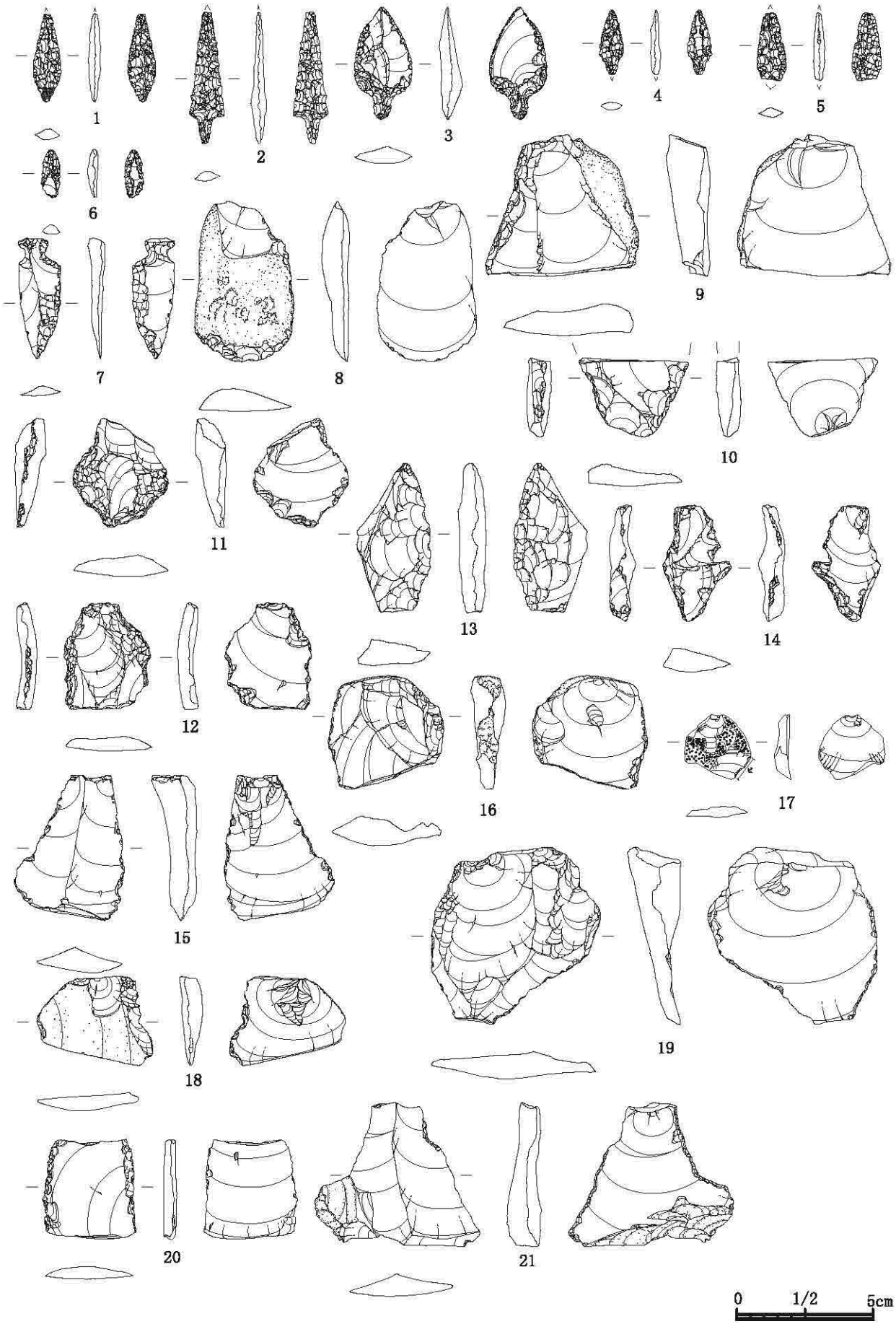


図 93　遺構外出土遺物（4）

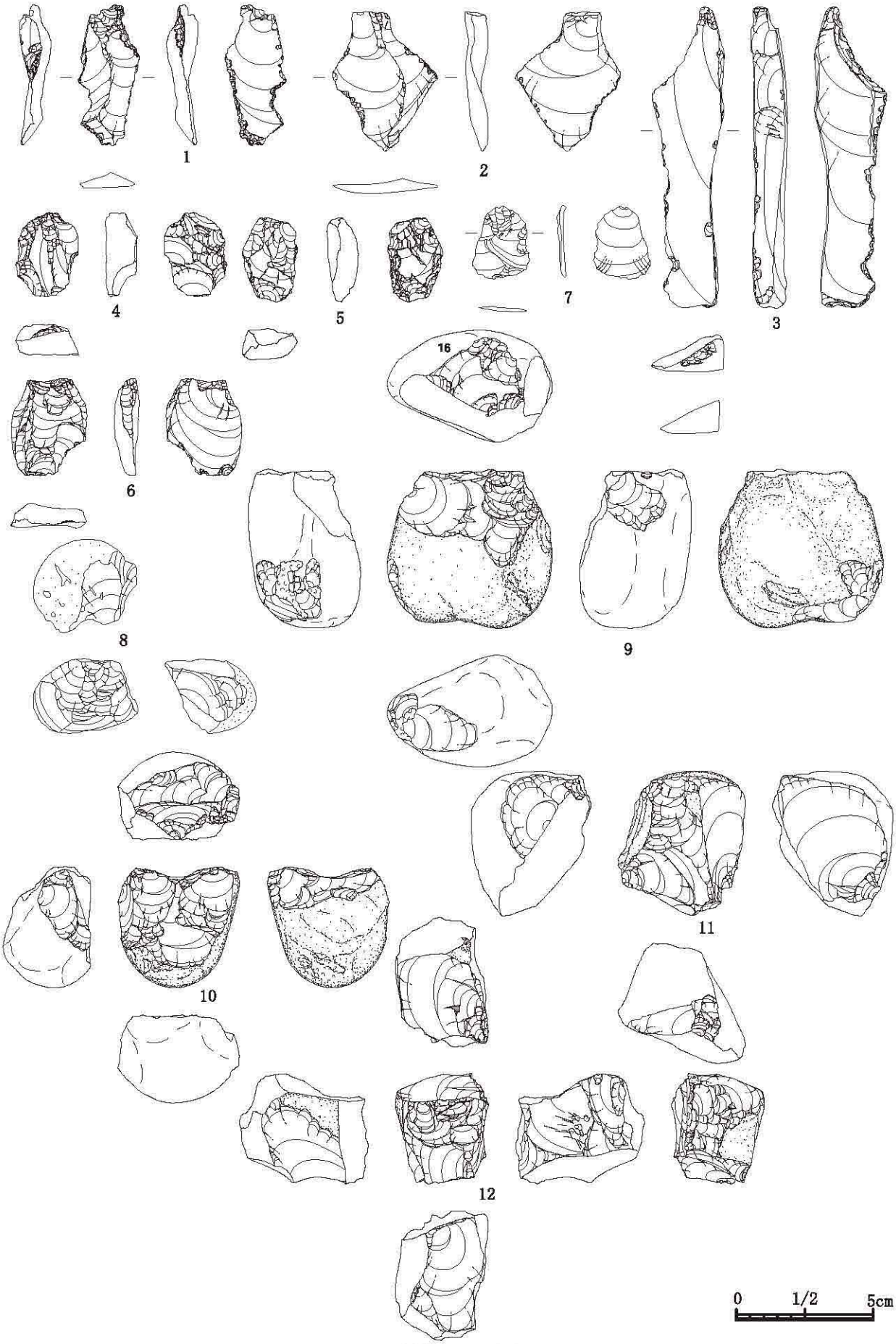


図 94　遺構外出土遺物（5）

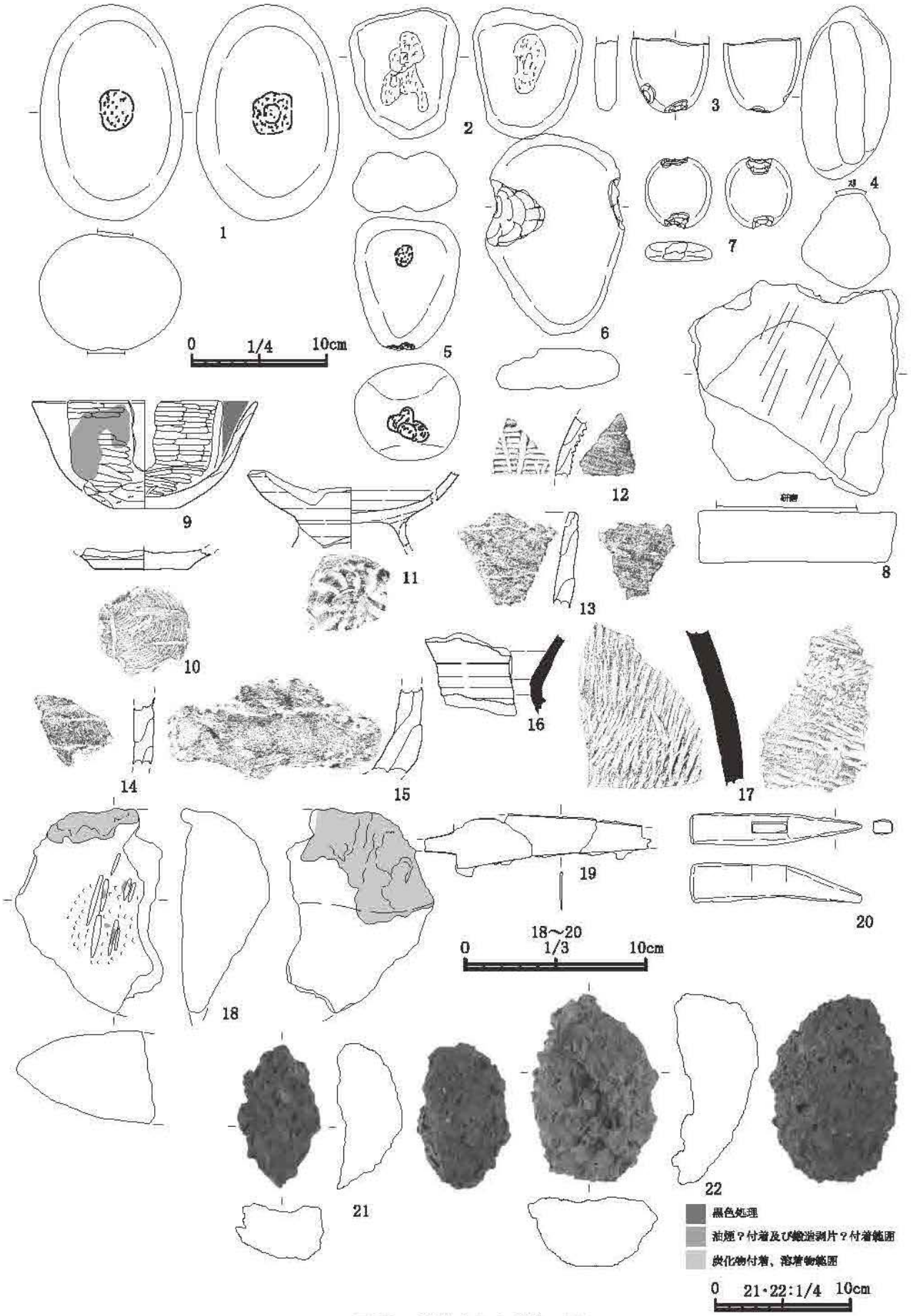


図 95　遺構外出土遺物（6）

南側斜面付近から出土した第Ⅵ群ａ類土器である。深鉢形土器（図90－11～16、図90－34～図91－9）：口縁部付近で内湾し、器形が丸みを帯びるものが多い。地文のみのものと口縁部に沈線等の文様が施されるものがみられる。両者ともに地文はRLを斜め回転し縄文の条を縦走させているものが多い。炭化物の付着や内外面に見られる小さい円形の破裂痕跡なども観察される。鉢形土器（図90－17～19、図91－10～14）：深鉢と浅鉢の中間的なものをまとめた。南側地区では無文・有文など様々な種類が見られた。甕（図90－20～25、図91－15～17）：いわゆる遠賀川系土器の特徴を持つものである。内外面の下地調整に刷毛目が見られ、口唇部に縄文が施文され、口縁部はヨコナデが見られる特徴がある。口縁直下に沈線が施文される例もある。図90－23は刷毛目沈線が見られる。縄文にはLRとRLが見られる。内面は横方向のミガキが顕著で、胎土にはやや大きめな砂粒を含むものが多い。壺形土器（図90－26～28･30､図91－18～24）;遠賀川系土器の特徴を持つものと、在地の特徴を持つものがある。前者は短い口頸部の付け根に沈線が３条見られるのが特徴的である。また、図90－28の口縁部や図91－24には刷毛目調整が見られる。また刻み目列点文は図91－21では口頸部に、24では体部に見られる。24の列点及び沈線は刷毛目工具を利用している。浅鉢・高坏形土器（図90－31・32、図92－1～11）：主に南側地区で出土した。変形工字文が施文されるものが多い。変形工字文の上下に施文される沈線は２本ないし３本のものが多い。変形工字文に付く粘土粒は概して大きいが、図92－５・６のように粘土粒が全く付かないものもある。これら２点は沈線も鋭角な断面を呈し、一般的な変形工字文と雰囲気が異なる。その他（図90－29・33、図92－12～14）：図90－33は笠形の蓋である。つまみ部分には貫通孔が対置している。外面はRL縄文を地文に３本一対の沈線が施文されている。図92－12は蓋の可能性がある。刺突文と沈線文と粘土粒による文様が外面に見られ、内面は丁寧にみがかれている。図92－15～19は第Ⅵ群ａ類土器に伴う土偶である。18以外は中実であり、17はやや大型品の下半身と見られる。

縄文時代から弥生時代の石器(図93～図95－８)：石鏃(図93－１～６)、石匙(図93－７)、掻器(図93－８)、削器（図93－９～14)、微細剥離のある剥片（図93－15～図94－３）両極剥片（図94－４～６)、石核（図94－８～12)、凹み石（図95－１・２)、敲き石（図95－３・５)、擦り石（図95－４)、(石錘（図95－６・７)、石皿（図95－８）などが出土した。定型的な石器は少なく、剥片類や微細剥離を有する剥片が目立つ。また、図95－４の擦り石や図95－７の石錘は縄文時代早期の土器に伴う可能性が高い。

平安時代の遺物（図95－９～22）：９は内外面黒色処理の土師器杯である。底部はケズリが施され底径が小さい。内外面ともに丁寧にみがかれている。10と11は土師器である。11は高台付坏である。赤褐色だが焼成堅緻なため須恵器の可能性がある。10も同様に須恵器の可能性がある。11の高台内面には高台をつけた際のナデ痕跡が菊花状に残っている。12は擦文土器である。図74－８に比べ胎土は精良で丁寧な作りである。沈線もしっかりと描かれている。内面は横方向のミガキである。13～15は製塩土器である。16・17は須恵器である。16は広口壺の可能性がある。17は甕であり、図78－８と特徴が似ている。18～22はⅢＰ－34グリッド付近でまとまって出土した鉄製品及び関連遺物である。18は金床石を鍛冶炉に転用した可能性がある。表面には敲打痕と付着物が見られる。裏面には溶着物が見られる。19は鉄製刀子、20は鉄槌である。21と22は椀型鉄滓である。（茅野）

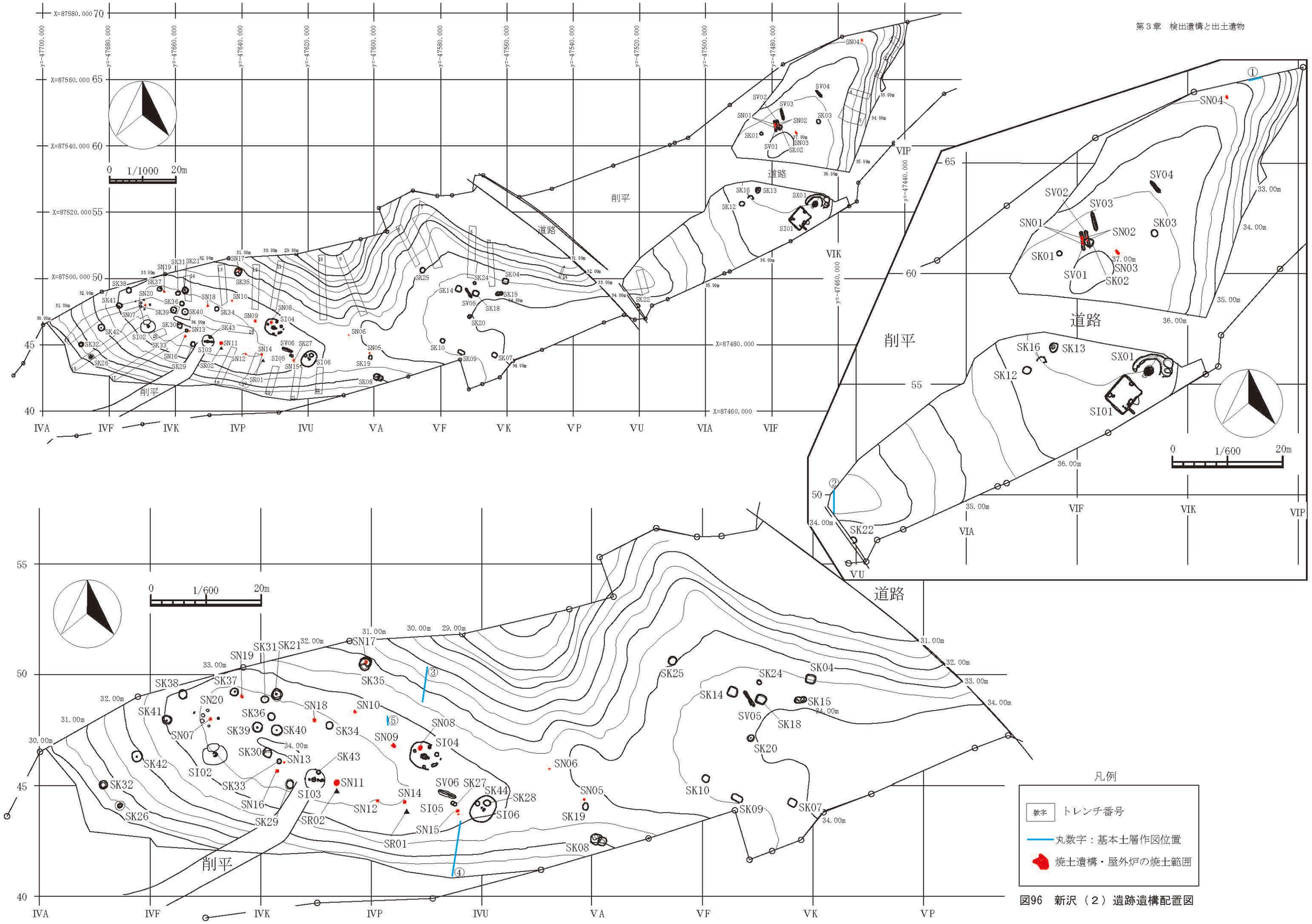


図96　新沢（２）遺跡遺構配置図

第３節　新沢（２）遺跡

新沢（２）遺跡の調査では平安時代の竪穴住居跡１軒、土坑７基、弥生時代の土坑３基、焼土遺構２基、縄文時代後期の竪穴住居跡６軒、屋外炉３基、焼土遺構３基、土坑 28 基、土器埋設遺構２基、縄文時代の溝状土坑６基、縄文時代から弥生時代にかけての焼土遺構６基、時期不明の焼土遺構６基、土坑４基を検出し、遺物は 84 箱出土した。調査区はほぼ東西方向に伸びる標高約 34 ｍの尾根の頂部を縦走する形で設定され、道路等により大きく３箇所に分かれている。調査区の南北には鳴沢川に至る深い沢があり、南西側の沢を挟んだ西側に新沢（１）遺跡の調査区が位置する。調査以前は雑木林（一部畑地）であり、土層に大きな改変が見られた箇所はごく一部分であった。

図 97 及び口絵 10 には調査区各所の基本土層図を掲載した。調査区内ではⅠ層～Ⅱｂ層はほぼ全域に堆積するが、Ⅲ層より下位の土層は地点により色調や質に違いが見られた。俯瞰的に見ると調査区東側～西側調査区のⅣＸライン付近まではⅢ層の色調が黒褐色基調で、それより西側では褐色または暗褐色基調で粘性の強い土層である。Ⅲ層は基本土層②と③ではⅢ－１層とⅢ－２層に細分した。Ⅲ－１層は褐色を帯びた土層で、攪拌された地山小塊等を含むため、人為的な攪乱を受けた土層と考えられる。また、調査区西側では SK27・SK40・SV06 などで褐色のⅢ層が遺構を覆い、その下位の堆積土上位に黒色のⅢ層が堆積する状況が観察されることから、調査区西側のⅢ層（Ⅲ層褐色）が見られる範囲内では、黒色のⅢ層が本来存在していたが、人為的にこれらが一旦除去あるいは攪乱されたため褐色土へと色調が変化したと考えられる。この変化のタイミングとしては検出遺構や遺物から縄文時代後期前葉頃と推定される。その後、Ⅱｂ層が堆積するが、この土層は新沢（１）遺跡と同様赤みを帯びる土層であったためその成因について第４章第４節で分析をした結果、酸化によるものと判断された。調査区周辺は基盤層に砂層が存在しているため、斜面崩壊などで露出したものがⅡｂ層の赤

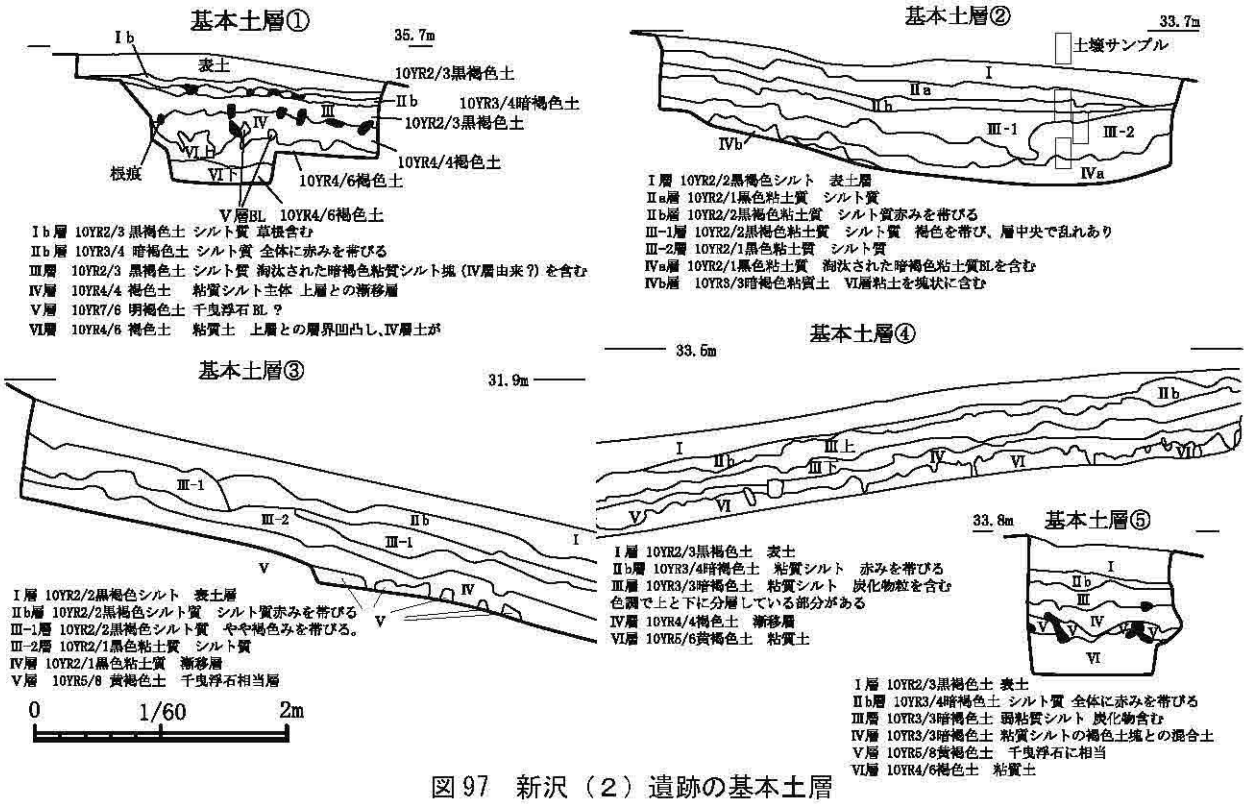


図 97　新沢（２）遺跡の基本土層

変の要因とも考えられる。本調査区内では、Ⅱｂ層から弥生時代中期～後期の土器が出土しており、且つSK14の周囲ではⅡｂ層の最上位に白頭山－苫小牧火山灰が堆積していることから、Ⅱｂ層の時期は縄文後期以降平安時代（白頭山－苫小牧火山灰降下前）までの期間ということができる。

調査で検出した遺構は、主に西側調査区の西側に縄文時代の遺構がまとまっている。平安時代の遺構は調査区中央部から東側にかけて分布しているが調査区域外に集落の主体があるとみられる。この部分では遺構外の遺物も多く出土している。

１、　竪穴住居跡（SI）及び出土遺物

第１号竪穴住居跡（SI01）（図98～101）

位置と確認　Ⅵ H-54グリッドに位置する。Ⅲ～Ⅳ層で確認した。周囲には現代の炭窯（SX01：写真のみ掲載）が存在し、北東側の確認面にその影響が及び攪乱されていた。**重複関係**　なし。規模・平面形　規模は長軸5.4ｍ、短軸4.5ｍで、北東－南西方向に長軸を持つ長方形を呈する。カマドは南東壁右寄りに１基検出し、Ｎ-133°－Ｅに主軸を持つ。**堆積土**　12層に分層できた。１～４層は黒色基調の自然流入土と考えられ、その下底部の５層は白頭山－苫小牧火山灰層である。５層より下位はやや褐色を帯びる土層で、住居廃絶に近い段階で流入した可能性がある。**壁面・床面**　壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面までの壁高は45㎝を測る。床面は掘方埋土によってほぼ平坦に整えられている。また、床面は広範囲で被熱し赤変していた。壁際に腰板とみられる炭化材の出土が見られることから焼失家屋であった可能性が高い。樹種はクリであることが判明している（第４章第２節）**壁周溝**　カマド部分で途切れるが、ほぼ全周するように検出した。**カマド**　南東壁右寄りに構築している。煙道部の構造は半地下式Ａ類である。火床面は掘方埋土が被熱している。カマド本体部分は袖下部が残存していた。粘土と板状の凝灰岩を使用して構築されており、煙道部壁も堀方掘削後に粘土を使用して構築されている。カマド内及び周囲からは土師器がまとまって出土した。**柱穴・土坑**　カマド左側にPit ４、北東壁際にPit １、西隅でPit ３と５を検出した。Pit ５以外は住居廃絶時に開口していたと考えられる。**出土遺物**　土師器や石器等が出土した。図100－１～10は土師器杯である。すべてロクロ整形で５～８は内面黒色坏である。５は推定口径が15㎝を超えるやや大型である。９と10は焼成堅緻で須恵器の胎土に似る。11は鍋である、底面に木葉痕が見られ、平底である。図100－12・13は小甕、14はロクロ整形の小型広口壺で内面黒色処理が見られる。図101－１～７は長胴甕である。８は土製支脚、９は製塩土器である。10は羽口である。11は砥石である。鍋や長胴甕などの大型品はカマド内部付近に破棄されたような状況で出土した。坏類は図100－２・３・10がPit ４から、４がPit ５から出土した。**小結**　本遺構は出土遺物等から平安時代（白頭山－苫小牧火山灰降下以前）の竪穴住居跡である。

第２号竪穴住居跡（SI02）（図102）

位置と確認　Ⅳ H-46グリッドに位置する。Ⅳ層で石囲炉と遺物の散布範囲を確認した。**重複関係**　北側を風倒木痕？により破壊されているが他の遺構との重複はない。**規模･平面形**　規模は長軸4.3ｍ、短軸3.4ｍ、東北東－西南西に長軸を持つ楕円形と推定される。炉跡は床面中央部に検出した。**堆積土**　２層に分層できた。Ⅱｂ～Ⅲ層に近似した土層に覆われている。壁面・床面　Ⅳ層と床面と

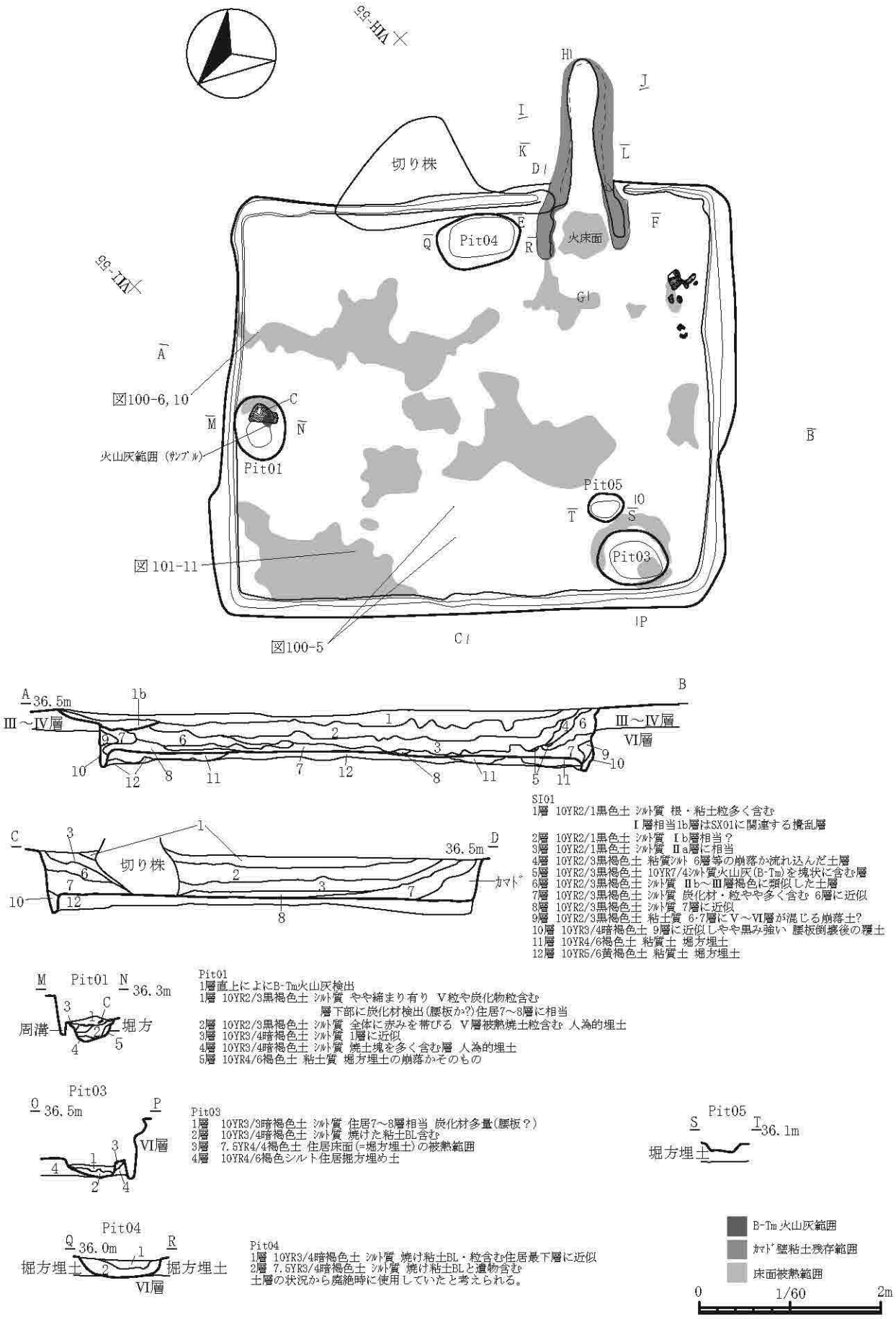
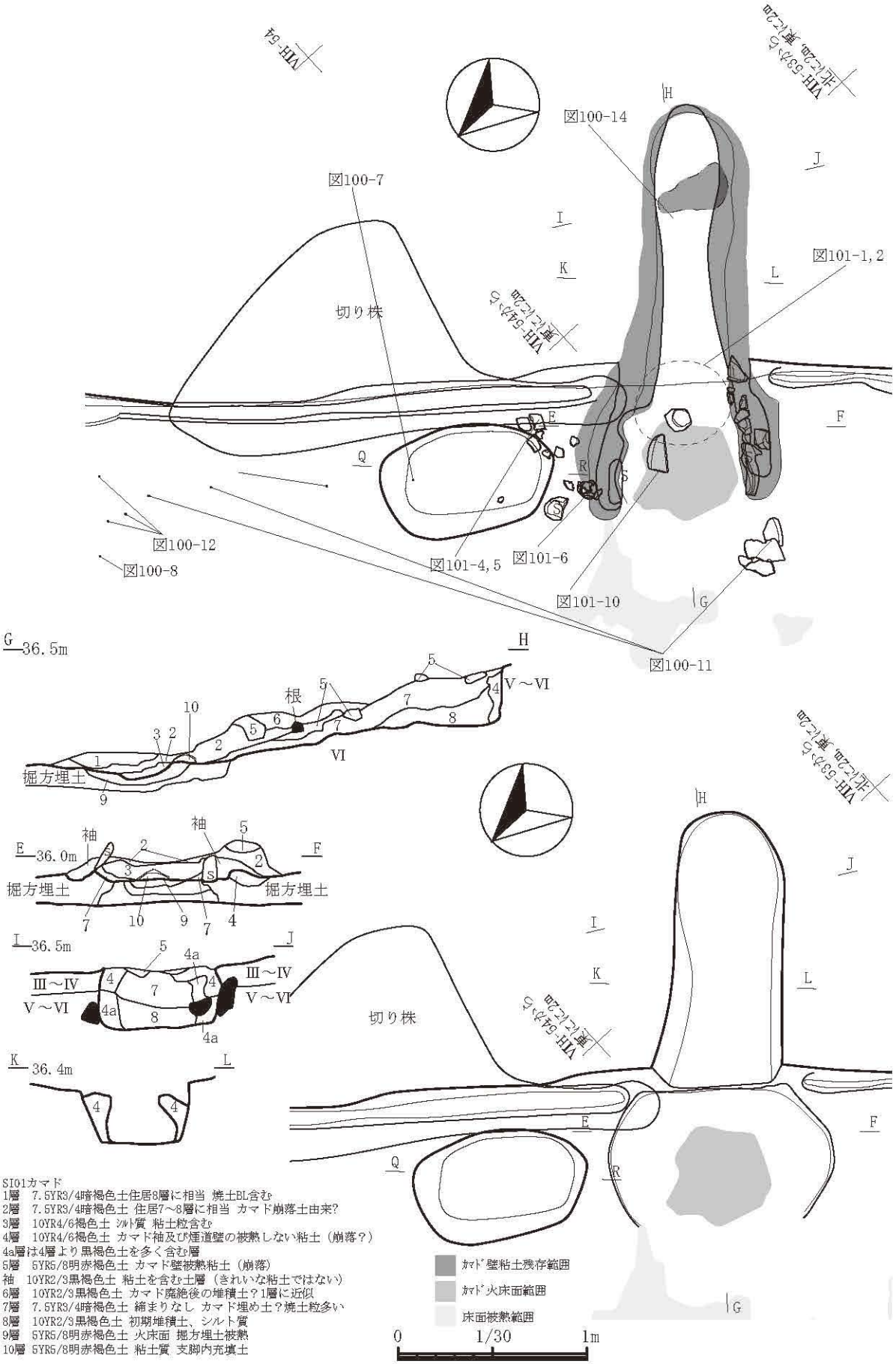


図 98　第１号竪穴住居跡（1）



SI01カマド
1層　7.5YR3/4暗褐色土住居8層に相当 焼土BL含む
2層　7.5YR3/4暗褐色土 住居7～8層に相当 カマド崩落土由来?
3層　10YR4/6褐色土 シルト質 粘土粒含む
4層　10YR4/6褐色土 カマド袖及び煙道壁の被熱しない粘土（崩落？）
4a層は4層より黒褐色土を多く含む層
5層　5YR5/8明赤褐色土 カマド壁被熱粘土（崩落）
袖　10YR2/3黒褐色土 粘土を含む土層（きれいな粘土ではない）
6層　10YR2/3黒褐色土 カマド廃絶後の堆積土？1層に近似
7層　7.5YR3/4暗褐色土 締まりなし カマド埋め土？焼土粒多い
8層　10YR2/3黒褐色土 初期堆積土、シルト質
9層　5YR5/8明赤褐色土 火床面 掘方埋土被熱
10層 5YR5/8明赤褐色土 粘土質 支脚内充填土

図 99　第１号竪穴住居跡（2）

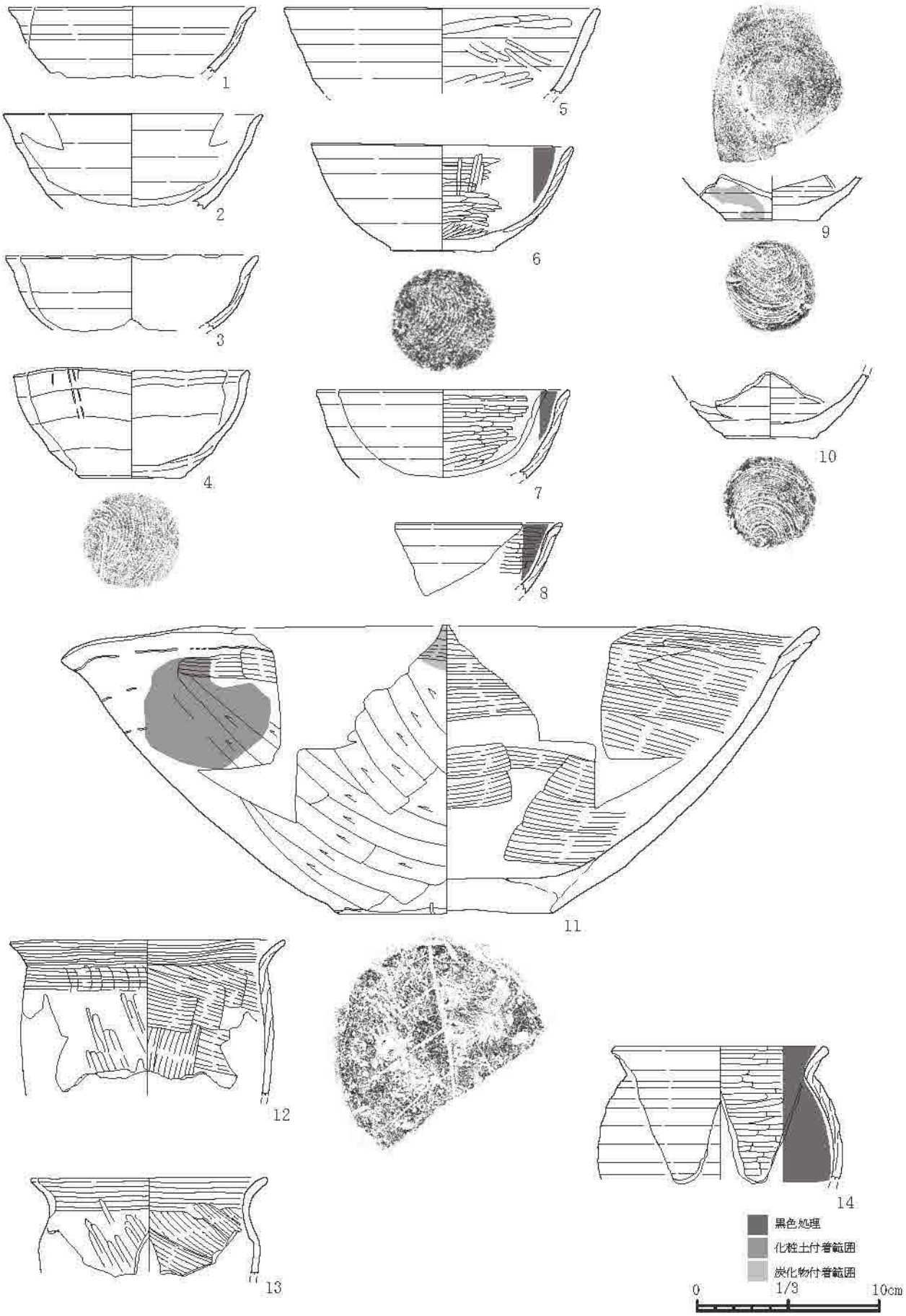


図 100　第１号竪穴住居跡出土遺物（1）

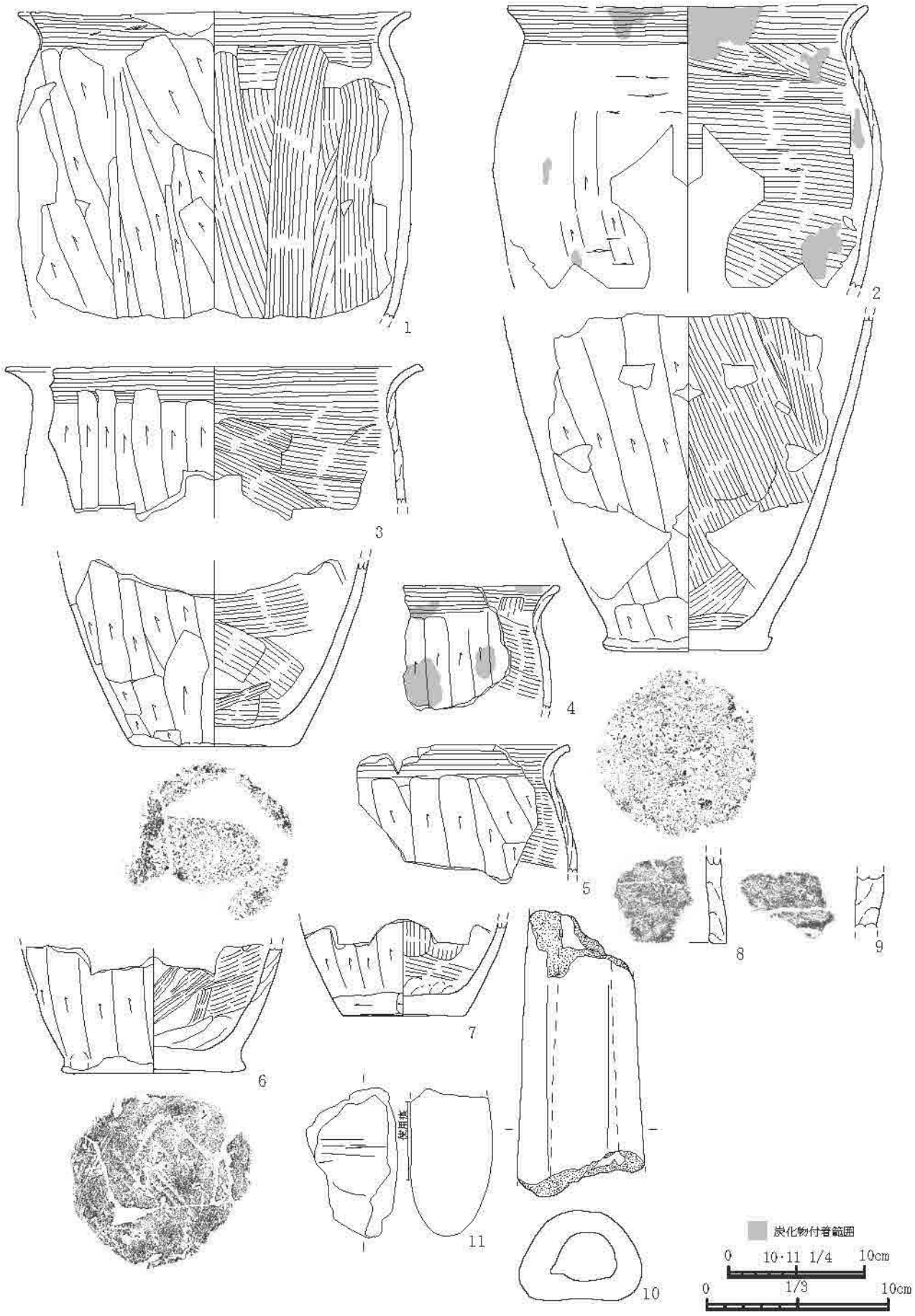


図 101　第１号竪穴住居跡出土遺物（2）

の境界は不明瞭であるが、炉の火床面とほぼ同レベルで構築されていたと推定される。壁の立ち上がりは不明瞭である。確認面までの壁高は11㎝を測る。床面はⅣ層を掘削しおおむね平坦に整えられていたようである。**炉跡**　現状では西側が開口するコの字形に大ぶりな各礫を配置した内部に火床面が見られる。火床面は赤変が弱く範囲は不明瞭であった。炉の中央から東寄りの礫際で図102の１の縄文土器が横倒しの状態で出土した。本来埋設されていた可能性があり、土器埋設石囲炉であったと推定される。炉を囲う礫は浅い土坑状の堀方の外縁部分に配置されている。**その他の床面施設**　確認されなかった。**出土遺物**　１は炉体土器である。第Ⅳ群土器に分類される小型の深鉢で被熱している。４単位の波状口縁で口縁直下に沈線が巡る。体部には格子目状の沈線がみられる。**小結**　本遺構は縄文時代後期の竪穴住居跡である。

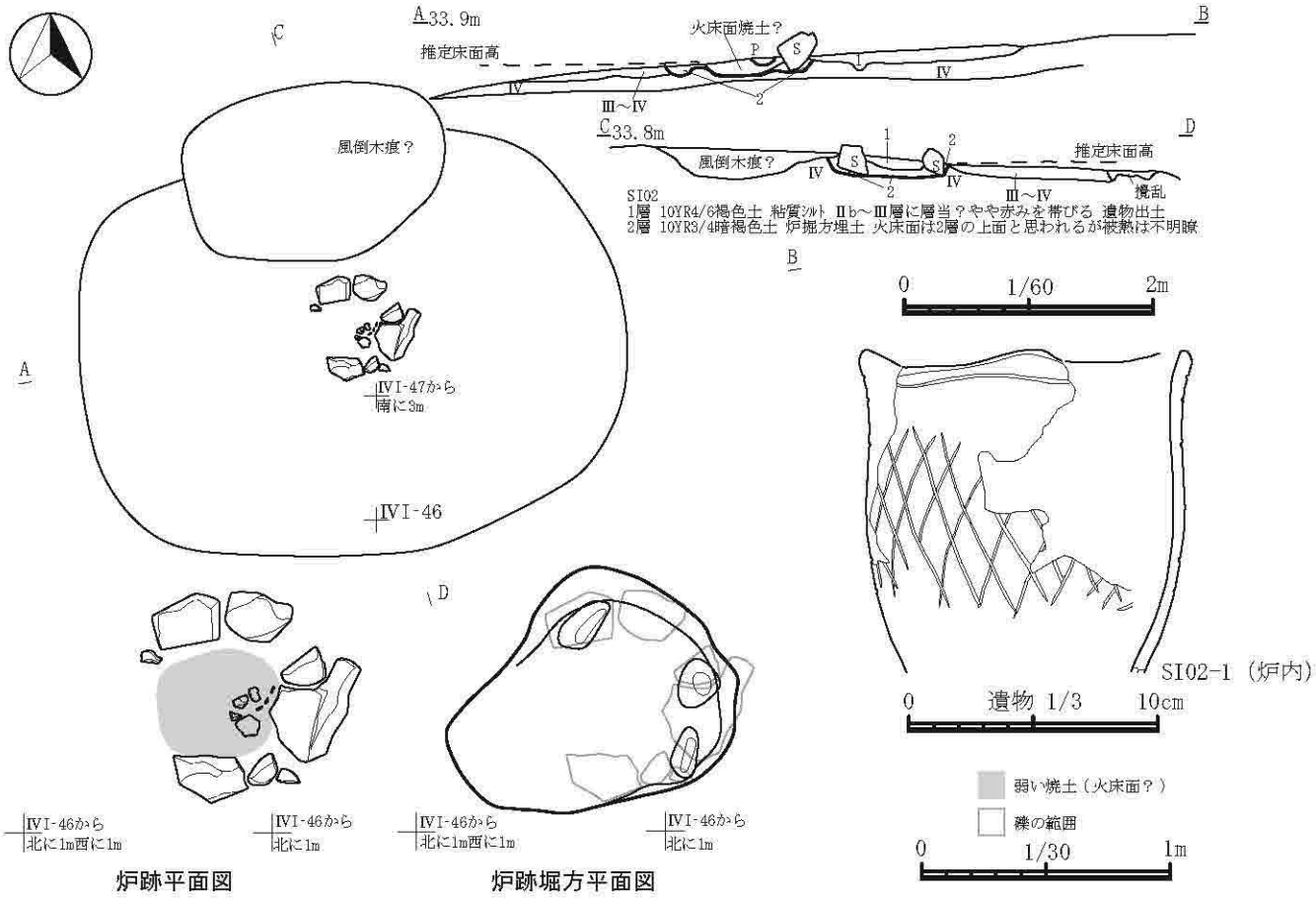


図102　第２号竪穴住居跡及び出土遺物

第３号竪穴住居跡（SI03）（図103）

位置と確認　ⅣM-45グリッドに位置する。Ⅲ層褐色からⅣ層で石囲炉とやや暗色のシミを確認した。**重複関係**　第43号土坑と重複するが、重複関係は不明である。**規模・平面形**　規模は長軸3.5ｍ、短軸3.1ｍの円形と推定される。炉跡は床面中央部に検出した。**堆積土**　４層に分層できた。Ⅱｂ～Ⅲ層に近似した土層に覆われている。**壁面・床面**　Ⅳ層と床面との境界は不明瞭であるが、炉の火床面とほぼ同レベルで構築されていたと推定される。壁の立ち上がりは不明瞭である。確認面までの壁高は９㎝を測る。床面はⅣ層を掘削し平坦に整えられていたようである。**炉跡**　大ぶりな角礫をおおむね方形もしくは北側にすぼまる舟形に配置しており、内部には火床面焼土と埋設土器がみられるた

め土器埋設石囲炉に分類される。火床面は赤変がやや弱い。炉の中央から北寄りの礫際で図103の1の縄文土器が中央寄りに傾いた状態で斜位に埋設されていた。炉を囲う礫は浅い土坑状の堀方の外縁部分に配置されている。**その他の床面施設**　ピットを4基確認した。Pit 1と2が炉を挟んで東西に位置するため住居跡に伴うと判断した。**出土遺物**　1は炉体土器である。第Ⅳ群土器に分類される小型の深鉢で被熱している。4単位の波状口縁で口縁直下に2条の沈線が巡る。体部には格子目状の沈線がみられる。その他、炉跡及び住居堆積土から炭化材や種子が出土している。**小結**　本遺構は縄文時代後期の竪穴住居跡である。

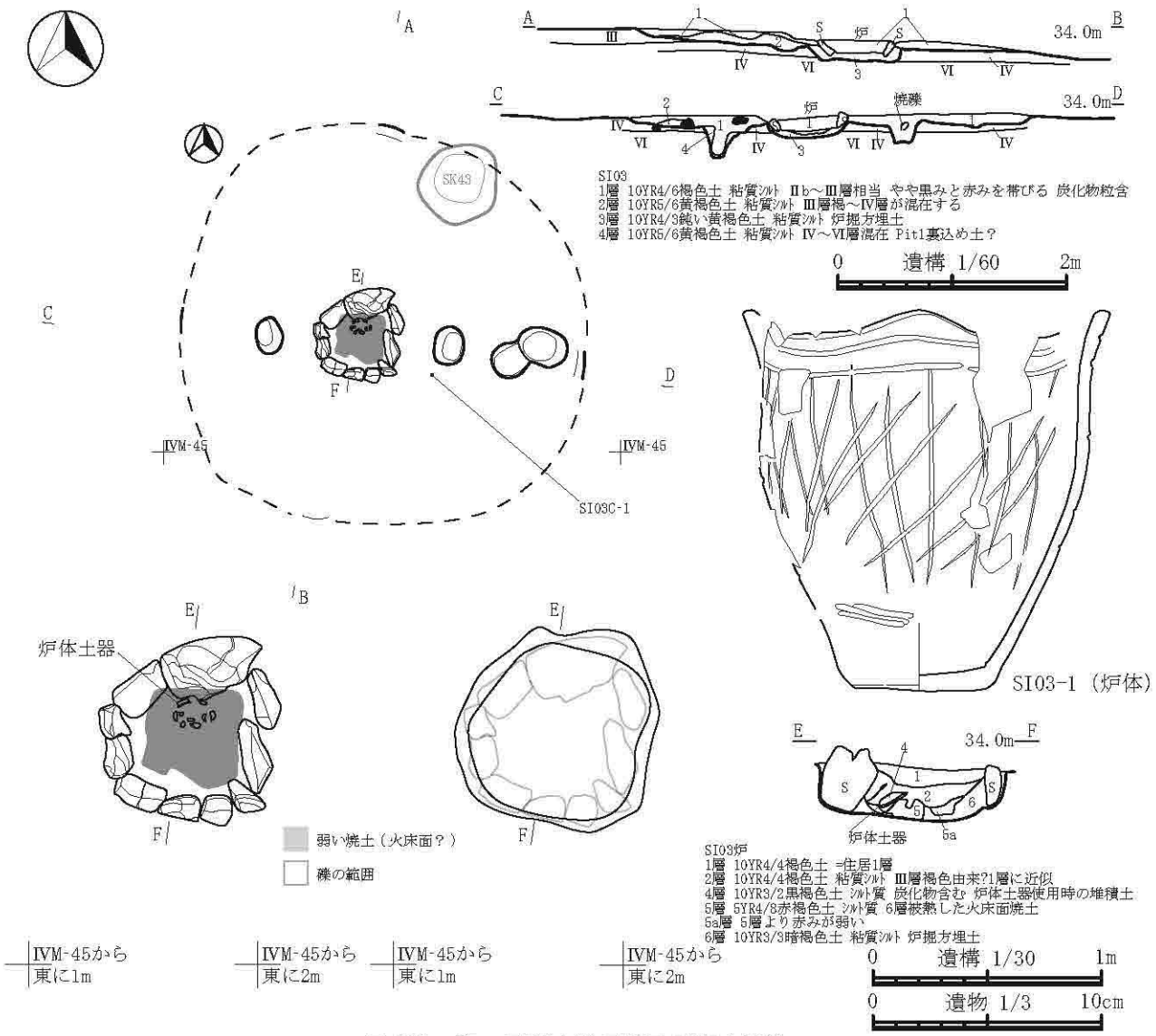


図103　第3号竪穴住居跡及び出土遺物

第4号竪穴住居跡（SI04）（図104～105）

位置と確認　ⅣR-46グリッドに位置する。Ⅲ層暗褐色からⅣ層で石囲炉とやや暗色のシミを確認した。**重複関係**　第8号焼土遺構が確認面に存在するため本遺構が古い。**規模・平面形**　規模は長軸5.5m、短軸4.7mの楕円形と推定される。炉跡は床面中央部に検出した。**堆積土**　3層に分層できた。Ⅲ層に近似した暗褐色土層に覆われている。**壁面・床面**　壁面の立ち上がりは明瞭ではない。確

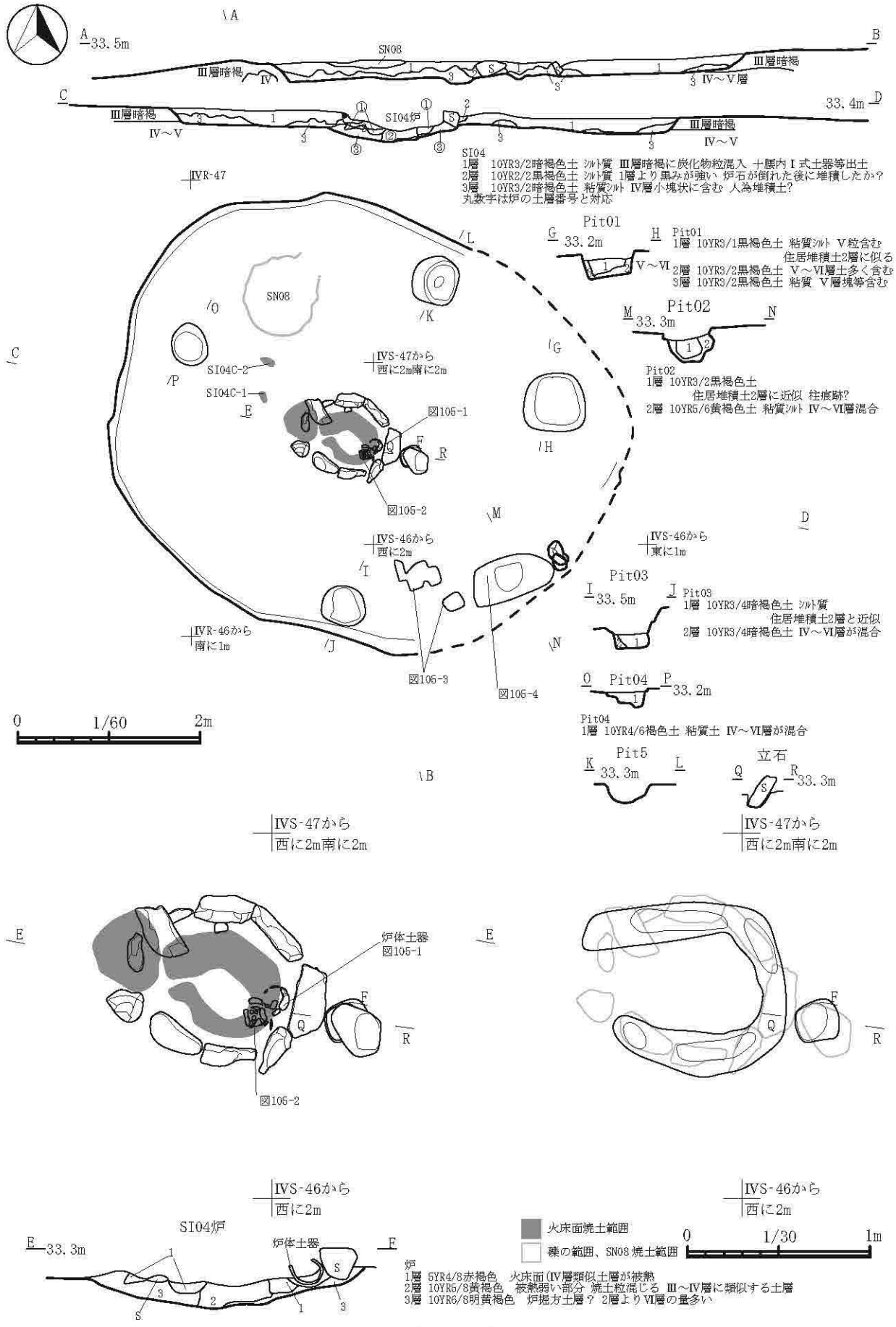


図 104　第４号竪穴住居跡

認面までの壁高は16㎝を測る。床面はⅣ～Ⅴ層を掘り込んでほぼ平坦に仕上げていると判断した。炉の火床面とほぼ同レベルである。**炉跡**　大ぶりな亜角礫を楕円形もしくは六角形に配置しているが、西側で一部礫が原位置をとどめていない部分がある。炉跡内部と西側の外部には火床面焼土が見られた。東側礫際には埋設土器がみられるため土器埋設石囲炉に分類される。図105の1の壺形土器が中央寄りにやや傾いた状態で斜位に埋設されていた。炉体土器に被さるように図105－2の注口土器が出土した。火床面の赤変は他に比べ明瞭である。炉を囲う礫は直下に掘削された溝状の堀方に配置されている。**その他の床面施設**　ピットを5基と立石を2箇所確認した。Pit 1～5は主柱穴と考えられ、不整な五角形に配置されている。立石は炉の東脇に1箇所と、Pit 2の東側に1箇所確認された。いずれも堀方に棒状の礫を立てていたようであるが、現状では斜めに倒れていた。**出土遺物**　第Ⅳ群土器が出土した。図1051は炉体土器である。小型の壺形土器下半部が埋設されていた。上半部は同一個体が発見できなかったため打ち欠いたか破損したものを使用している。2は釣手付注口土器である。内外面ともに無文だが、釣手内面に編み物の圧痕がみられる。釣り手をつける際、粘土で整形した釣パーツに編み物をしつけた後に体部と接合している。編み物はササ状の素材をつぶしたものを6～8本束ねて2本飛びの網代編みをしたものの可能性がある。同様の圧痕は図130－3などの他、

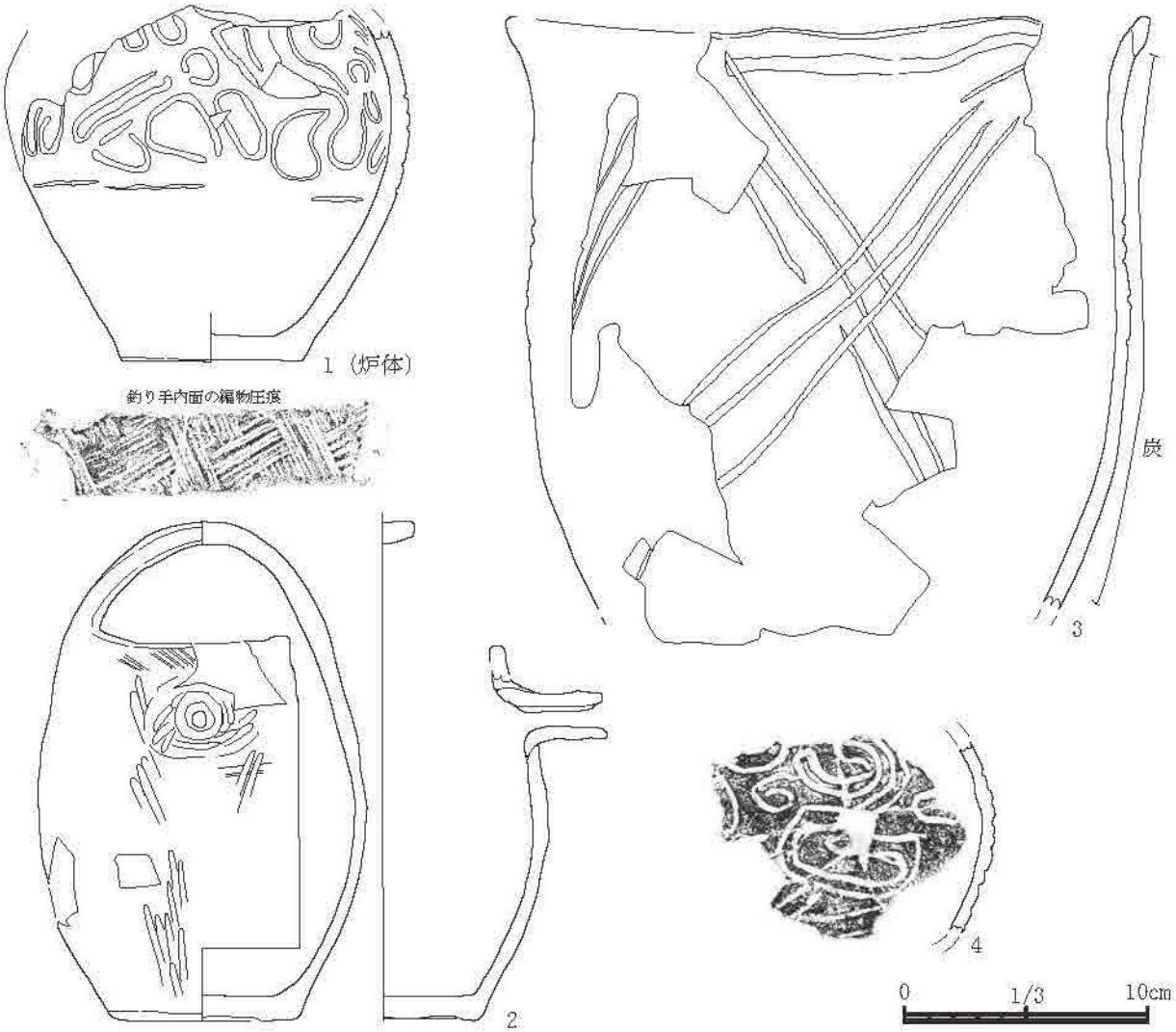


図105　第4号竪穴住居跡出土遺物

掲載しなかった個体にも数個体見られる。どの個体も積極的に文様モチーフとして意識していないような状況が見られる。注口部はほぼ水平に突き出ている。縄文時代後期前葉の注口土器は青森県内では類例が少ないが、付近では弘前市十腰内遺跡から壺形土器の体部に注口が付いた土器が出土している。３・４は堆積土から出土した。３は深鉢形土器で口唇が端部が肥厚し、体部には３本一組の沈線により格子目文が描かれている。４は壺形土器の体部破片である。その他、堆積土上位から炭化材が２点出土したため年代測定と樹種同定を行った。年代測定の結果は弥生時代後期頃の炭化材であることが判明し、樹種はクリであった。重複するSN08の確認面からは同時期の土器が出土しているため、SN08にともなう炭化材である可能性が高い。**小結**　本遺構は縄文時代後期の竪穴住居跡である。

第５号竪穴住居跡（SI05）（図106）

位置と確認　ⅣR-43グリッドに位置する。Ⅲ層褐色からⅣ層で礫と焼土を確認した。**重複関係**　なし。

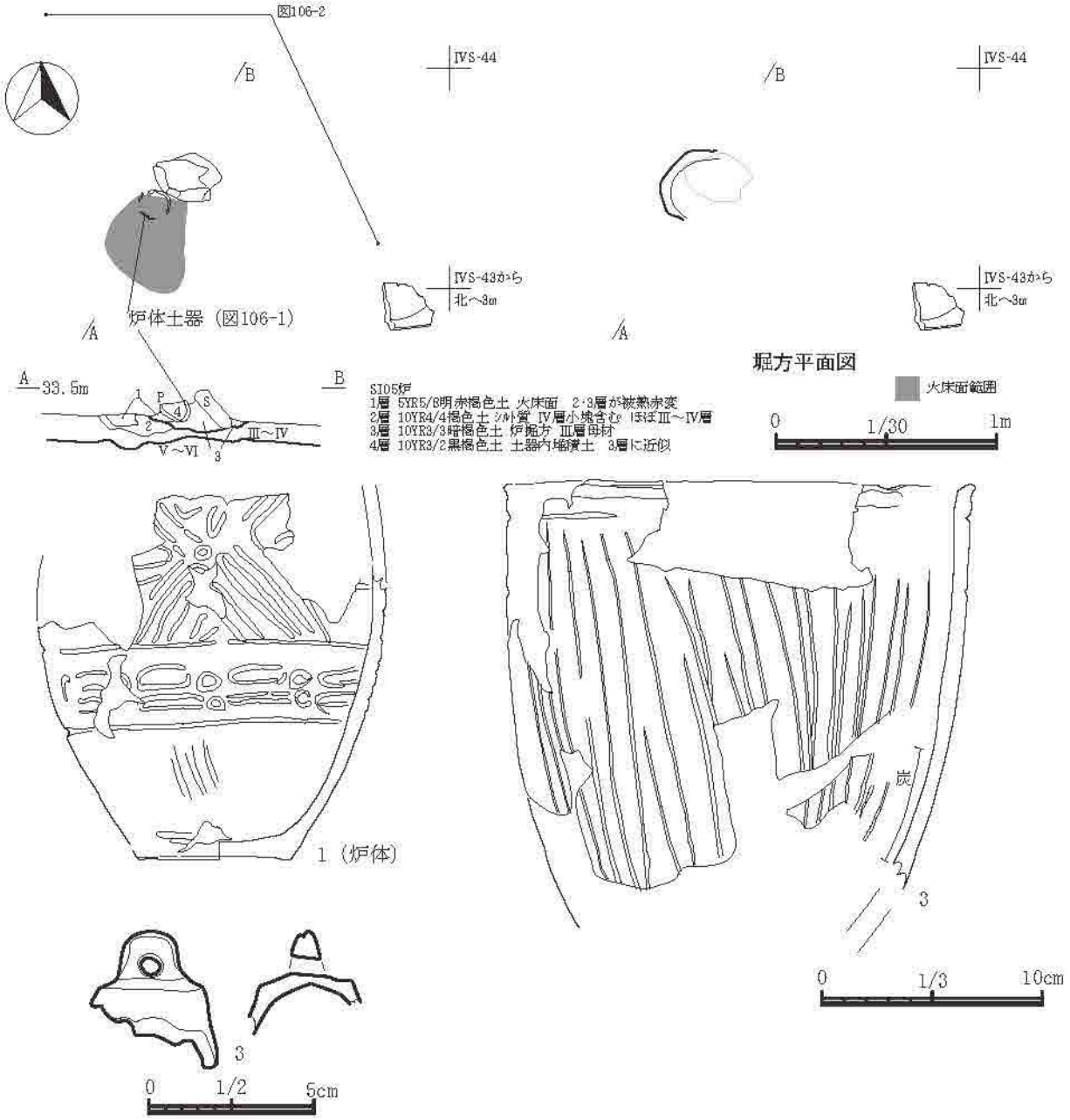


図106　第５号竪穴住居跡及び出土遺物

規模・平面形　全体形は不明である。**堆積土**　炉跡の堆積土は４層に分層できた。**壁面・床面**　壁面は不明である。床面はⅢ～Ⅳ層を掘削し平坦に整えられていた可能性があるが詳細は不明である。**炉跡**　大ぶりな板状礫が１個焼土の脇に見られる。やや離れた場所には同様の礫が１個出土しているため、本来焼土が礫で囲われていた可能性が高い。現状では礫と焼土が接するあたりに土器が埋設されているため土器埋設炉と分類される。火床面の赤変は明瞭である。炉体土器は図 106 －１の縄文土器が焼土中央寄りに傾いた状態で斜位に埋設されていた。**その他の床面施設**　確認されなかった。**出土遺物**　１は炉体土器である。第Ⅳ群土器に分類される小型の深鉢で被熱している。口縁部は欠失している。２は炉からやや離れた場所で出土した。第Ⅳ群に分類される深鉢形土器で、口縁部に横走する沈線が見られ、体部は縦方向の沈線がみられる。３は炉内から出土した鐸形土製品の紐部の破片である。**小結**　本遺構は縄文時代後期の竪穴住居跡の可能性がある。

第６号竪穴住居跡（SI06）（図 107）

位置と確認　ⅣU-44 グリッドに位置する。Ⅲ層褐色からⅣ層で礫と焼土を確認した。**重複関係**　第 28 号土坑及び第 44 号土坑と重複する可能性があるが、重複関係は不明である。ただし、両土坑ともに堆積土が黒みが強いⅢ層が主体となるため、本遺構より古い可能性が高い。**規模・平面形**　全体形は不明である。**堆積土**　炉跡の堆積土は３層に分層できた。**壁面・床面**　壁面は不明である。床面はⅢ～Ⅳ層を掘削し平坦に整えられていた可能性があるが詳細は不明である。**炉跡**　大ぶりな板状礫が３個焼土を挟むように配置されているが、配置状況を見る限り現存しているもの以外にも礫があったものと考えられる。従って石囲炉と分類される。火床面の赤変は明瞭である。**その他の床面施設**

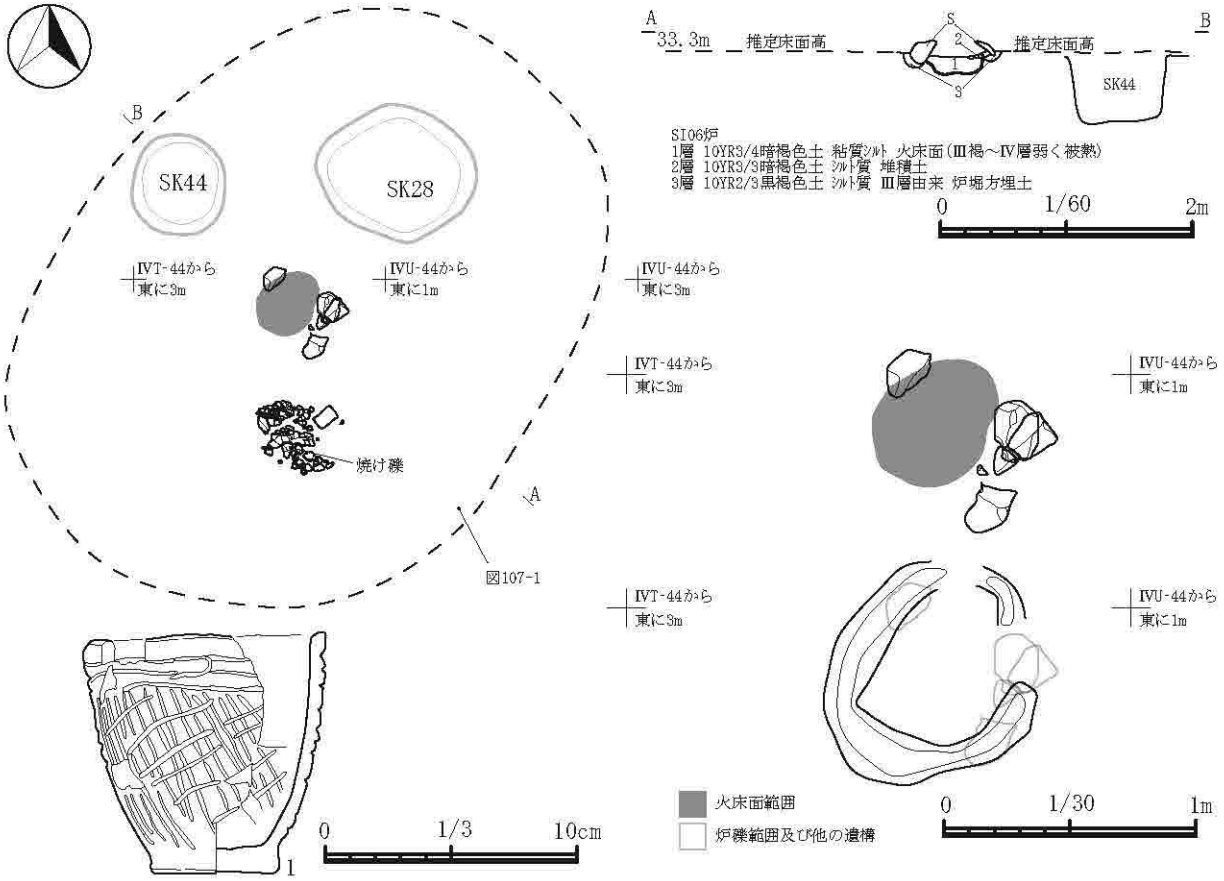


図 107　第６号竪穴住居跡及び出土遺物

確認されなかった。**出土遺物**　第Ⅳ群土器が出土している。１は小型の深鉢で外面には格子目文が描かれる。また、炉跡南側には被熱した礫がまとまって出土した。**小結**　本遺構は縄文時代後期の竪穴住居跡の可能性がある。

２、屋外炉（図 108 ～ 110）

調査では焼土遺構としていたが、竪穴住居跡の炉跡と同様の特徴を持つものを屋外炉とした。本来的には竪穴住居跡であった可能性が高い。表６に焼土遺構と一緒に一覧を掲載した。すべて焼土範囲の端に炉体土器が正立状態で埋設される特徴を持つ。使用土器も小型の浅鉢や深鉢であり、先述した竪穴住居跡と同様である。

ここまで記述してきた竪穴住居跡と屋外炉は、ほぼ同様の性格を持つことが考えられるが、配置状況を考える上で埋設土器の位置が手がかりになる。焼土に対する炉体の位置は炉体の検出されなかった SI06 を除くと、SI04 以外はすべて尾根の斜面上方に位置している。このことは、住居をある一定の方向に向けて構築するのではなく地形や斜面の状況に合わせて構築した結果と考えられる。

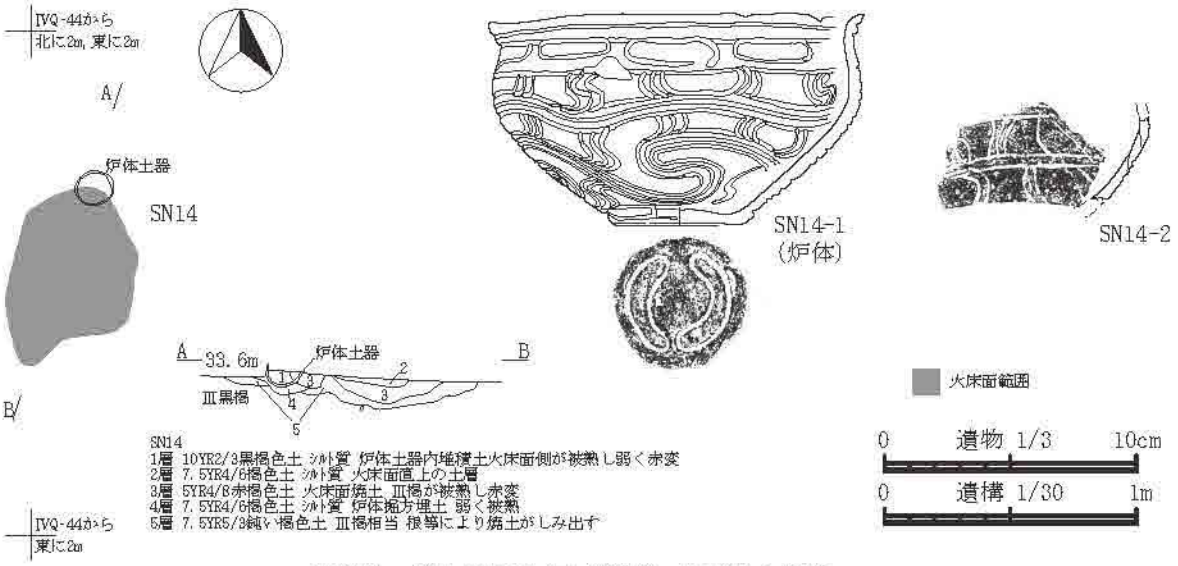


図 108　第１号屋外炉（SN14）及び出土遺物

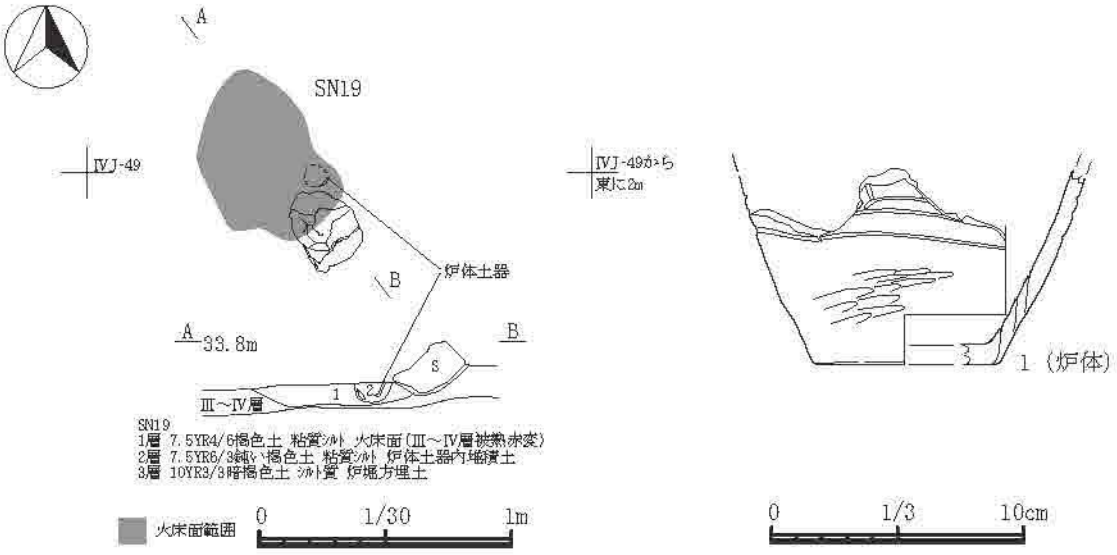


図 109　第２号屋外外炉（SN19）及び出土土器

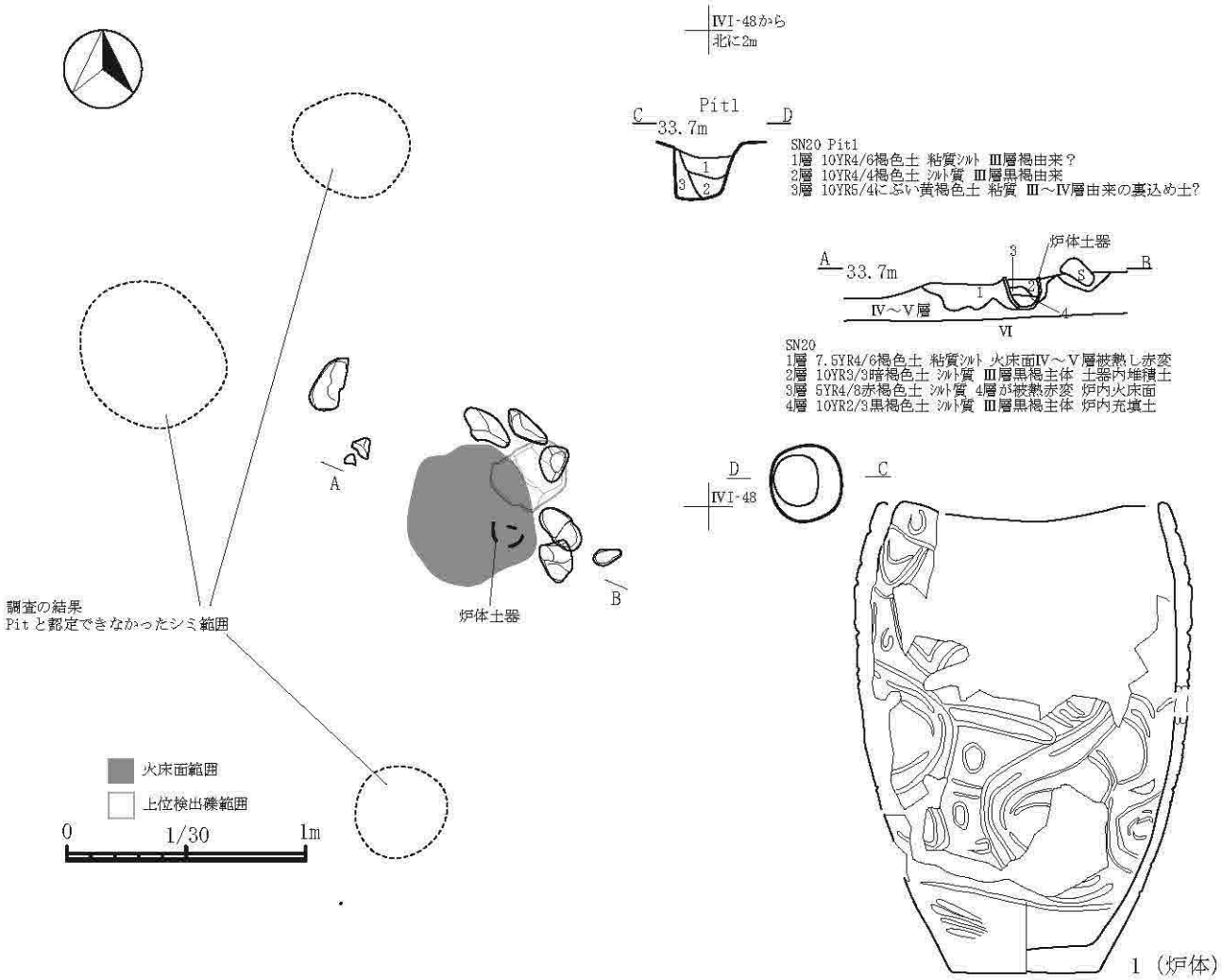


図 110　第３号屋外外炉（SN20）及び出土遺物

３、焼土遺構（図 111 ～ 113）

焼土遺構としたものは、土層が被熱し赤変した範囲及び、確実に被熱したか判然としないが一定の範囲が赤変しているものを認定している。表６には屋外炉と一緒に一覧を掲載した。多くは時期決定に必要な遺物や炭化材などが出土しないが、状況によって時期を推定できたものもあり、縄文時代後期と弥生時代の２つの時期がある。以下に代表的なものについて記述する。

第１・２・３号焼土遺構（図 111）

東側調査区で検出した。第１・２号焼土は SV01 の堆積土上面で確認した。溝状土坑のプランに沿ったような形状である。赤変は弱く、焼土厚も薄い。SV01 最上層は基本土層Ⅲ層（黒）が堆積し、その直上あたりに形成されており、かつⅡｂ層掘削中に確認したことから、縄文時代後期以降弥生時代ころまでの可能性がある。すぐ脇には SK02（弥生時代中期初頭）が存在することから関連する可能性もある。第３号はやや離れるが同じ区域にある。確認状況が類似するため同時期の可能性がある。

第８・９号焼土遺構　（図 111・112）

西側調査区に位置し、約５ｍの離れている。第８号は縄文時代後期の SI04 の確認面で検出し、焼土上面や周囲から共伴する遺物が出土している。図 112 －１と２は第Ⅵ群ｅ類に分類される土器である。口縁部が緩くくびれ、体部最大径が器高の約１／２のあたりにある甕形あるいは広口壺形土器である。２は底面がやや上げ底気味である。１は口縁部に横位の結節回転文、体部中位に LR と RL（双

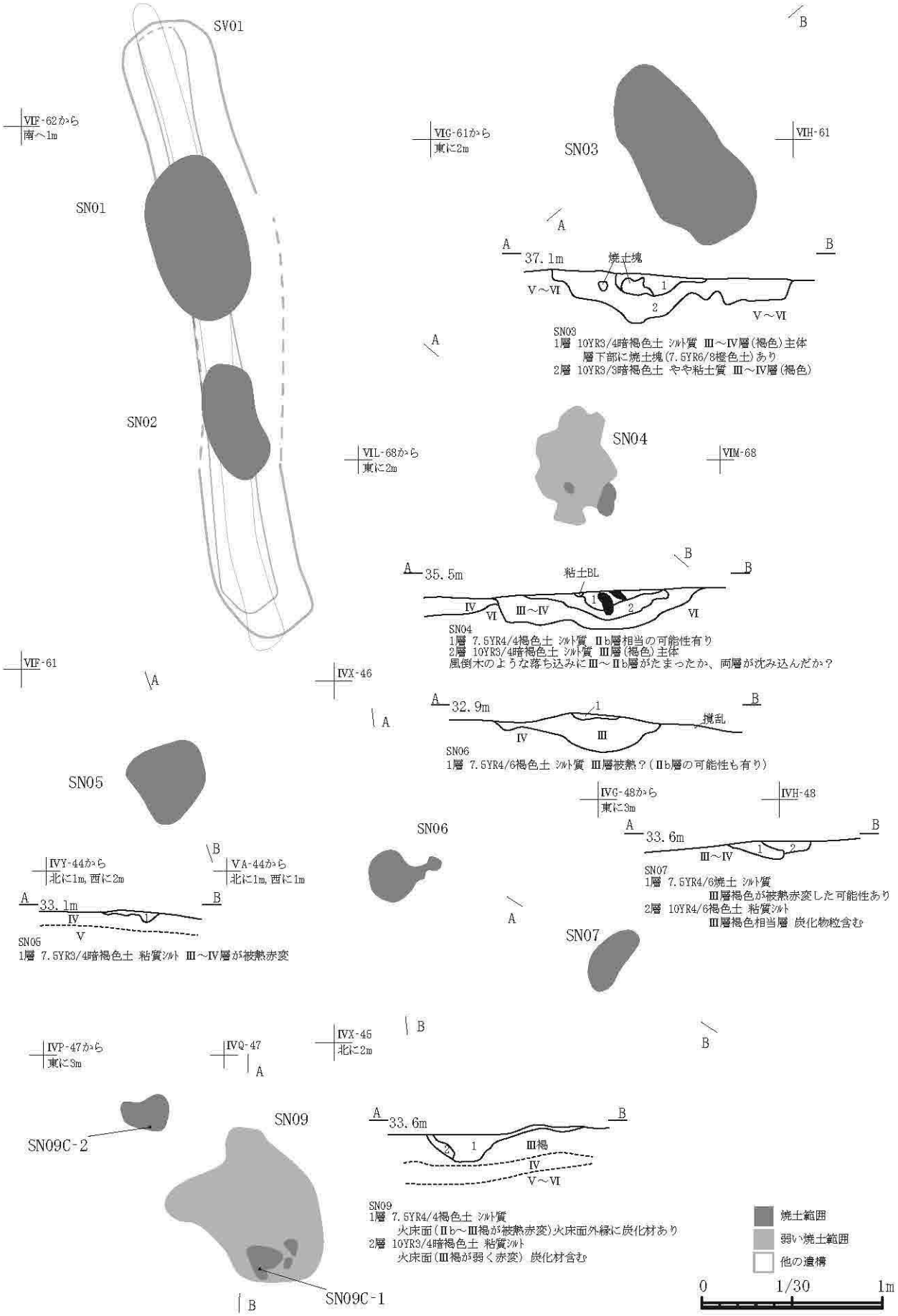


図111　第１～７・９号焼土遺構

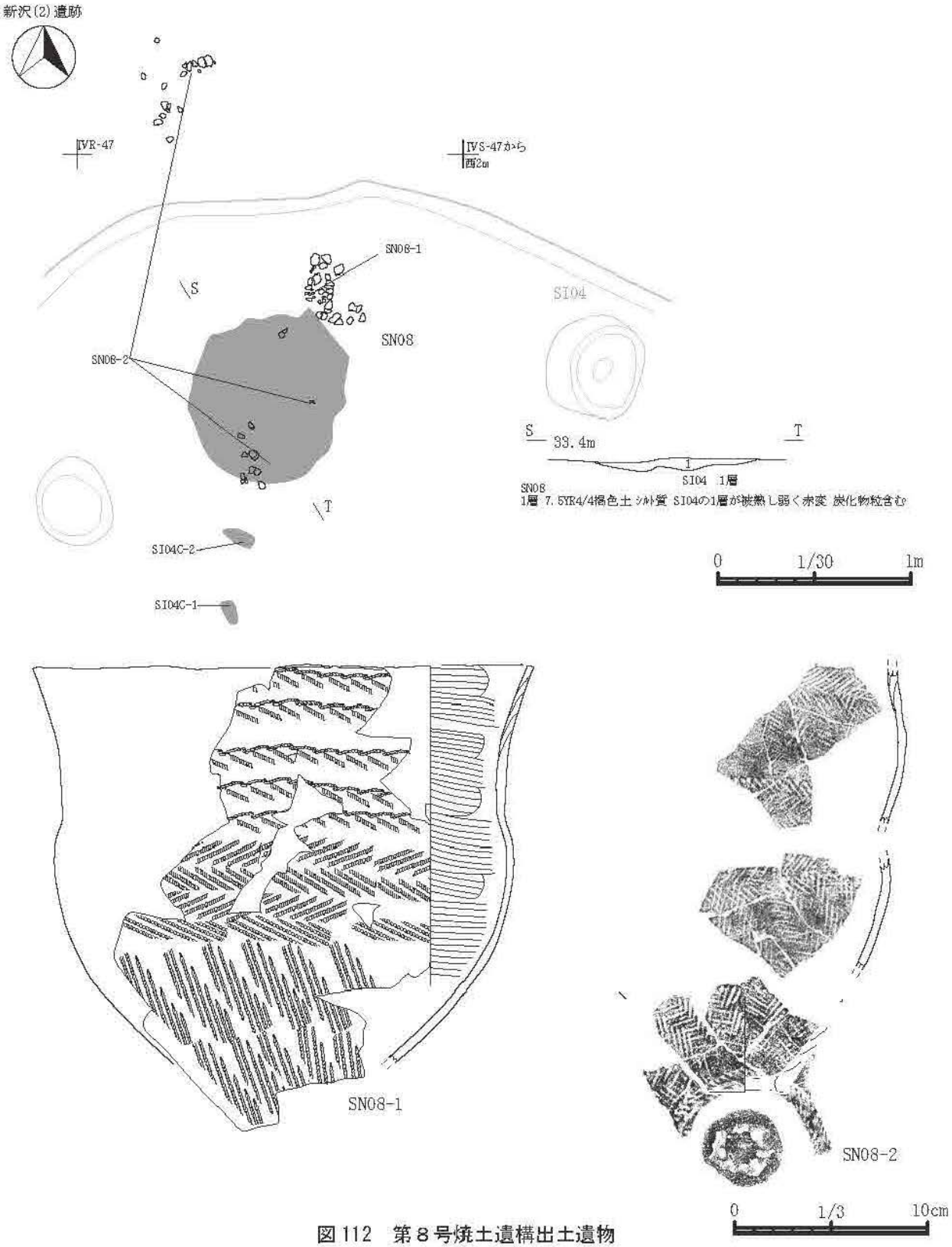


図112　第８号焼土遺構出土遺物

方地縄自巻）を横位に回転し羽状縄文を描出している。体部下半はRL（地縄自巻き）を斜位に回転し縦位の条を描出しており、器面の上位、中位、下位で異なる文様を描出している。２も同様であり、口縁部は不明であるが、体部中位はLRとRL（双方地縄自巻き）を横位に、体部下位では斜位に回転しそれぞれ羽状縄文を描出している。これらの個体は焼土面に張り付くように出土したため、時期決定の根拠となる。また、SI04の確認面で取り上げた炭化材の年代測定値が弥生時代後期頃であるため、本遺構は弥生時代後期の所産と考えられる。用途は不明であるが、居住施設の可能性もある。

第９号焼土遺構では、共伴する遺物は出土しなかったが、焼土範囲内に炭化材が出土したため、年代測定及び樹種同定をかけた結果、年代は弥生時代中期後半、樹種はコナラ属アカガシ亜属であった。アカガシ亜属は当地域に自生しないため、東北南部以南より持ち込まれた可能性が高いとしている（第４章第１・２節）。

表６　屋外炉、焼土遺構一覧表

遺構名		グリッド	確認	平面規模（m）	被熱深（m）	付属施設	重複	時代
SN	1	VIP-61		0.9×0.5			←SY01	縄文後期～弥生
SN	2	VIP-61		0.54×0.3			←SY01	縄文後期～弥生
SN	3	VIG-60	V～VI	1.03×0.5	0.14			不明
SN	4	VIL-68	IV～VI	0.64×0.42	0.1			不明
SN	5	IVY-44	IV	0.48×0.44	0.06			不明
SN	6	IVX-45	IV	0.42×0.38	0.04			不明
SN	7	IVH-48	III～IV	0.38×0.16	0.08			不明
SN	8	IVR-46		0.88×0.8	0.06		←SI04	弥生後期
SN	9	IVQ-46	III	0.92×0.85	0.14			弥生後期
SN	10	IVO-48	III	0.6×0.52	0.08			縄文後期～弥生
SN	11	IVN-45	III	0.96×1.06	0.06			縄文後期～弥生
SN	12	IVP-44	IV	0.54×0.48	0.07	礫		縄文後期
SN	13	IVL-46	VI	0.35×0.32	0.06			不明
SN	14	IVQ-44	III	0.72×0.5	0.09	埋設土器		縄文後期屋外炉
SN	15	IVS-43	III～IV	0.66×0.48	0.09			縄文後期
SN	16	IVK-45	IV～V	0.7×0.6	0.13			縄文後期～弥生
SN	17	IVO-50		1.0×0.44	0.08		←SK35	縄文後期
SN	18	IVM-47	III～IV	0.70×0.66	0.08			縄文後期～弥生
SN	19	IVJ-49	III～IV	0.66×0.48	0.09	埋設土器		縄文後期屋外炉
SN	20	IVH-48	III～IV	0.56×0.54	0.1	埋設土器		縄文後期屋外炉

第15号土坑上面焼土遺構（図117）及び第17号焼土遺構（第35号土坑上面）（図123）

縄文時代後期の土坑上位で確認した焼土遺構である。第１～３号焼土遺構と異なるのは下位にある遺構が人為的に埋められた可能性がある点である。双方ともに多量の遺物を伴う土坑墓と考えられる遺構が埋め戻された際に形成した可能性が高い。先述した第１～３号は自然堆積で第Ⅲ層が堆積した後に焼土が形成している可能性が高いが、縄文後期の２例は焼土形成のタイミングを積極的に理解するのであれば土坑を埋めた後ほどなく、あるいは直後に焼土が形成された可能性が高い。どのような行為に起因するかは不明であるが、興味深い事象といえる。

４、土坑跡（図114～126）

土坑跡は41基調査した。縄文時代後期から弥生時代・平安時代に帰属するものがある。規模や分類、推定帰属時期などは表７に掲載した。表の分類項目は以下のような観点で分類したものである。

Ｊ類：出土遺物や形状から縄文時代に帰属する可能性が高い。形状や規模から次のように細分した。

１類：平面形及び断面形が不整形な土坑　２類：平面規模１ｍ程度で浅く、断面形が箱形のもの。

３類:フラスコ状土坑で、底面直径が1.5ｍ弱で浅いもの。　４類:フラスコ状土坑で、大きいもの。

Ｙ類：出土遺物や確認状況等から弥生時代に帰属する可能性が高いもの。

Ｈ類：出土遺物や形状などから平安時代に帰属する可能性が高いもの。

１類：浅く断面が箱形の土坑　２類：１類より明確に深く断面が箱形の土坑

Ｘ類：時期決定が困難なもの。

以上の分類の中から、特記すべきものを以下に記述する。位置や規模などは表７を参照。

第２号土坑（Ｙ類）（図114）

東側調査区に位置する。第２号溝状遺構と一緒に確認した。付近では弥生時代中期初頭の第Ⅵ群ｃ類土器がまとまって出土したため慎重に確認した結果第２号溝状土坑と重複していることが判明した。同遺構を壊して構築している。平面形は隅丸方形と認識され、堆積土中からは、底面からやや浮いた位置から図114－１と２の土器が散乱して出土した。１は有文の深鉢形土器である。体部には刺突と波状工字文が見られる。口縁部内面には屈曲部と口縁に沿った沈線がみられる。遺物の特徴から第Ⅵ群ｂ類（五所式土器）に比定されるため、本遺構は弥生時代中期初頭に帰属する可能性が高い。付近ではSK01とSK03が検出されているが、特にSK03では出土炭化材の年代測定の結果本遺構に近

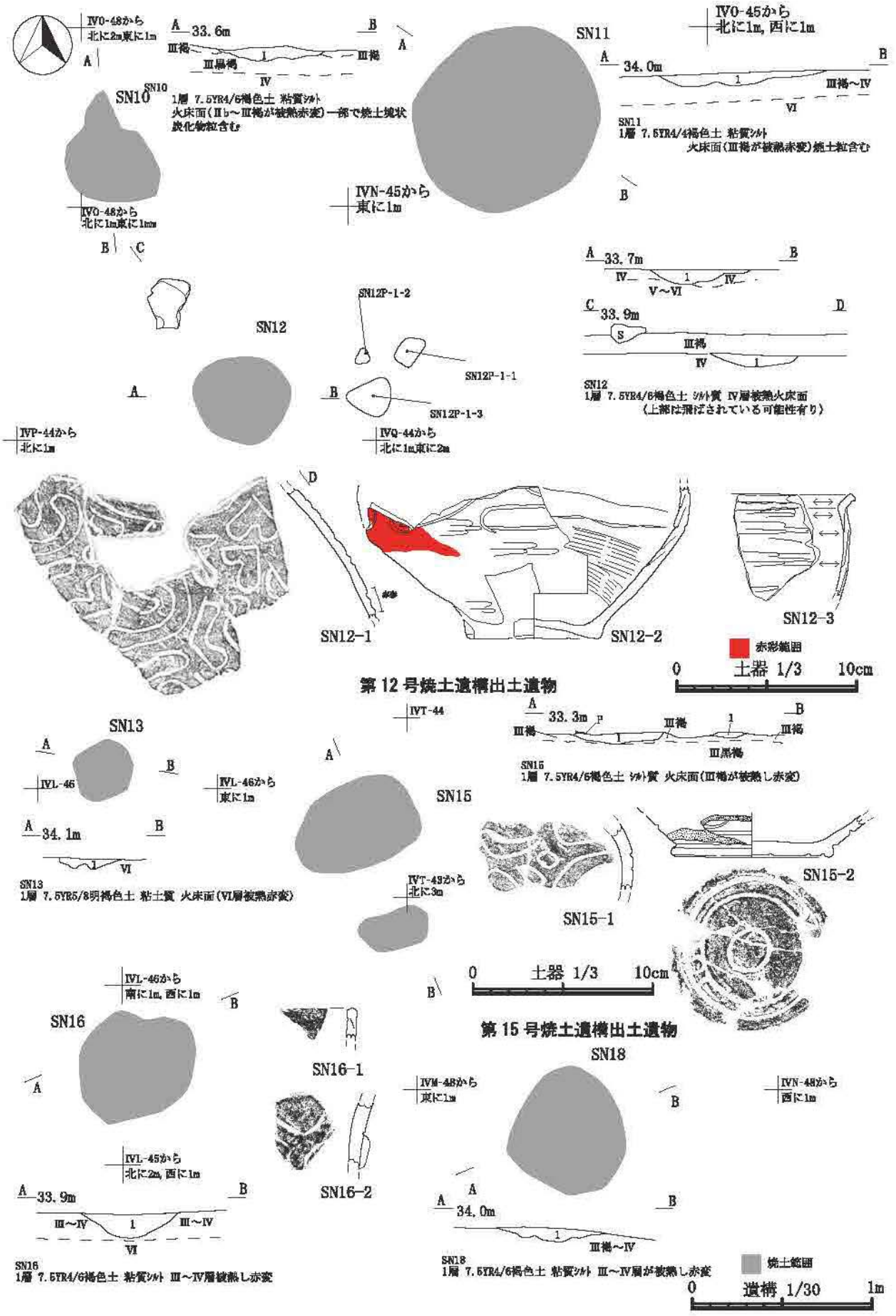


図113　10～13・15・16・18号焼土遺構及び出土遺物

い時期の値が出ている。

第９号土坑（Ｈ１類）（図 116）

第Ⅳ層で確認した。確認面で白頭山－苫小牧火山灰の堆積を確認し、平安時代の土坑と認識した。土坑底面には広範囲から炭化材片が出土し、壁面は被熱し赤変していた。底面出土炭化材の樹種はクリであった。周囲で検出された SK07・SK10 も同様の遺構と考えられ、炭化材の樹種は SK07 がクリ、SK10 はブナ属であった（第４章第２節参照）。このような炭化材と壁面焼土の存在から本遺構は製炭土坑と考えられる。SK07 も同様だが、SK10 は焼土が無いため違う用途と思われる。

第 14 号土坑（Ｈ２類）（図 116）

Ⅱｂ層で確認した。付近ではⅡｂ層の直上に白頭山－苫小牧火山灰が部分的に堆積し、本土坑はその層を掘削し構築しているため火山灰降下より後に機能していたと考えられる。平面形は長方形で、壁面には弱く被熱した焼土が見られる。炭化材はごく少量出土した。底面は堀方埋土を均して構築されている。付近にある SK04 には焼土があるが、SK18 ではほとんど見られない。この状況はＨ１類でも同様である。被熱があるものとないものがセットになる可能性も考えられる。本遺構がもし焼成あるいは製炭土坑であるならば、火山灰の前後で土坑の規模が大きく変わったことになる。

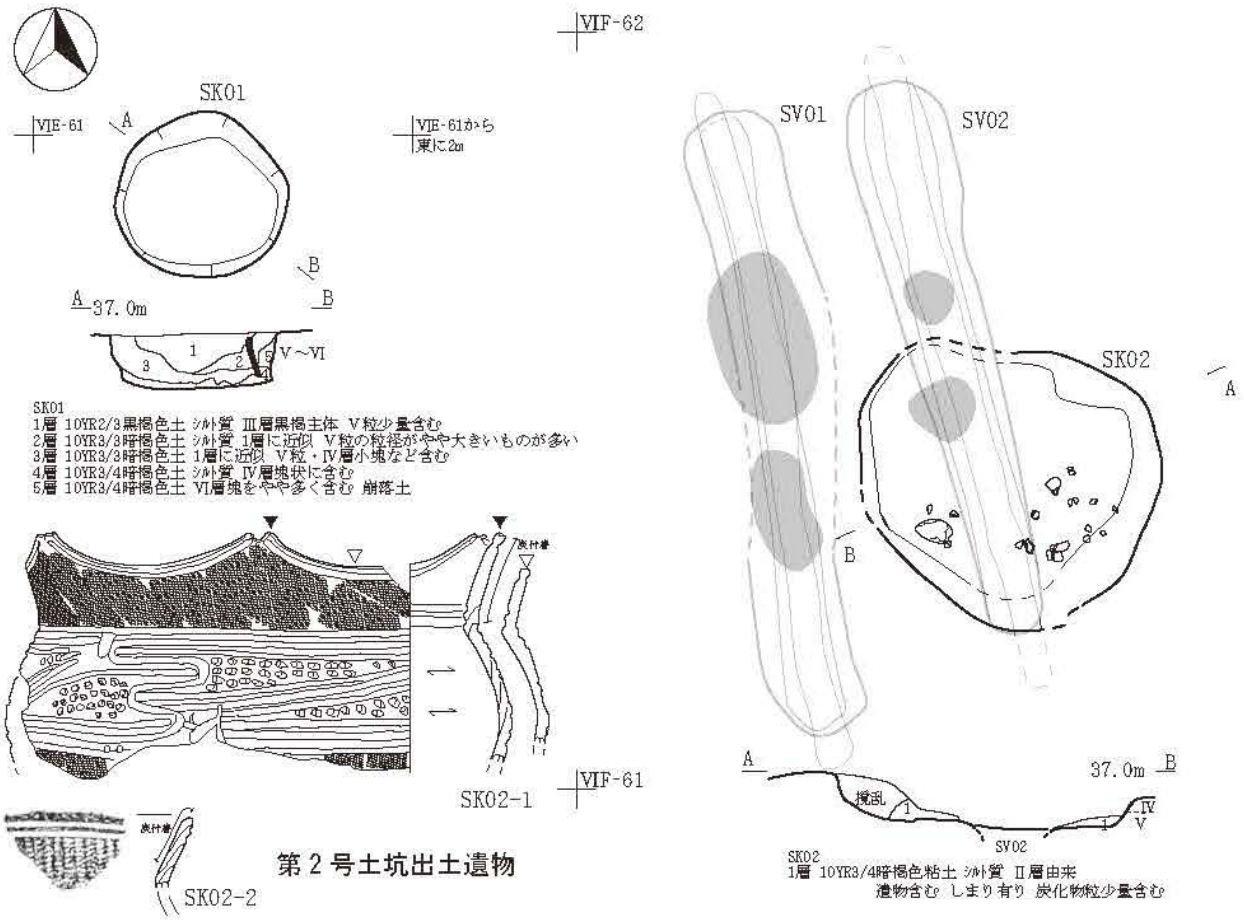
表７　土坑一覧表

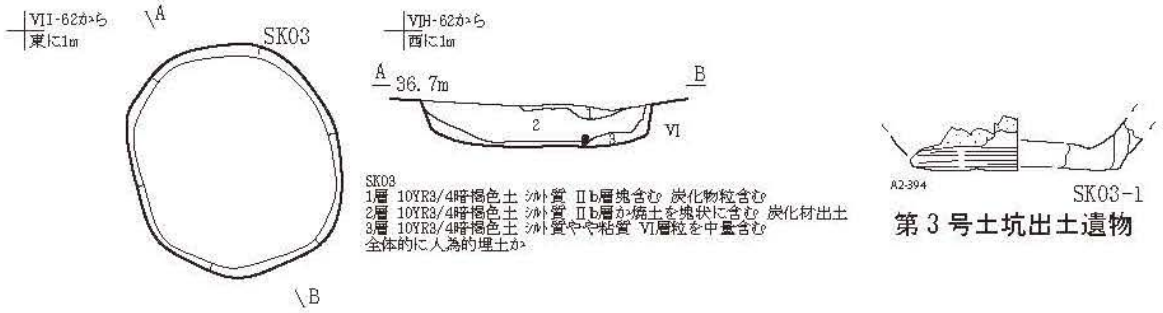
遺構名		グリッド	確認	平面規模	深さ	付属施設	重複	分類	備考
SK	1	ⅦE-60	Ⅴ～Ⅵ	0.89×0.88	0.29			Y	
SK	2	ⅦF-61	Ⅳ	1.62×1.46	0.22		←SV02	Y	土坑墓?
SK	3	ⅦI-61	Ⅵ	1.24×1.12	0.22			Y	
SK	4	ⅤJ-49	Ⅱb	1.76×1.56	0.5			H2	焼成土坑
SK	7	ⅤJ-44	Ⅴ	1.52×1.34	0.08			H1	焼成土坑
SK	8a	ⅤA-42	Ⅳ	2.12×1.92	0.9		→SK8b	J1	土坑墓?
SK	8b	ⅤA-42	Ⅳ	1.5×1.46	0.35		←SK8a	J1	土坑墓?
SK	9	ⅤG-44	Ⅳ～Ⅴ	2.05×1.15	0.25			H1	焼成土坑
SK	10	ⅤF-45	Ⅳ	1.34×1.24	0.06			H1	焼成土坑？
SK	12	ⅤC-56	Ⅲ	1.38×1.32	0.28			X	
SK	13	ⅦE-56	Ⅲ～Ⅳ	1.7×1.38	0.2			X	
SK	14	ⅤG-49	Ⅱ	1.76×1.72	0.56			H2	焼成土坑
SK	15a	ⅤJ-48	Ⅳ	1.12×0.92	0.9			J1	土坑墓？
SK	15b	ⅤJ-48	Ⅳ	1.3×1.08	0.6			J1	土坑墓？
SK	16	ⅤD-56	Ⅲ～Ⅳ	1.22×-	0.26			X	
SK	18	ⅤH-48	Ⅱb	1.8×1.6	0.56			H2	焼成土坑？
SK	19	ⅣY-44	Ⅳ～Ⅴ	1.32×1.0	0.36			J2	
SK	20	ⅤH-47	Ⅳ	1.46×1.22	1	底面中央Pit		J3	
SK	21	ⅣK-49	Ⅲ	2.22×2.0	1.5	底面中央Pit		J4	転用墓？
SK	22	ⅤT-47	Ⅴ	1.14×-	0.08			H2	焼成土坑？
SK	23	ⅤI-49	Ⅳ	0.96×0.92	0.26			J2	土坑墓？
SK	24	ⅤH-49	Ⅳ	0.82×0.84	0.3			J2	
SK	25	ⅤD-50	Ⅵ	1.8×1.62	1.74			J1	土坑墓？
SK	26	ⅣD-44	Ⅳ～Ⅵ	1.68×1.4	0.72			J4	
SK	27	ⅣS-44	Ⅳ	1.04×0.62	0.6			J1	土坑墓？
SK	28	ⅣU-44	Ⅴ	1.28×1.1	0.34			J2	
SK	29	ⅣL-45	Ⅲ～Ⅳ	1.72×1.46	1.46			J4	
SK	30	ⅣK-46	Ⅳ	1.74×1.58	0.72			J1	土坑墓？
SK	31	ⅣK-48	Ⅳ～Ⅵ	1.34×1.18	0.28			J2	
SK	32	ⅣC-45	Ⅳ～Ⅵ	1.54×1.46	2.02			J4	
SK	33	ⅣK-46	Ⅳ～Ⅴ	0.8×0.72	0.44			J2	
SK	34	ⅣN-47	Ⅳ～Ⅴ	1.32×1.3	0.84			J3	
SK	35	ⅣO-50	Ⅴ	2.5×1.92	0.6			J1	土坑墓？
SK	36	ⅣK-48	Ⅳ～Ⅵ	1.4×1.38	1.44			J4	
SK	37	ⅣI-49	Ⅳ～Ⅵ	1.66×1.64	1.12	底面中央Pit		J3	
SK	38	ⅣG-49	Ⅳ～Ⅵ	1.68×1.38	0.3			X	
SK	39	ⅣJ-47	Ⅵ	1.9×1.82	1.7	底面中央Pit		J4	
SK	40	ⅣK-47	Ⅳ～Ⅵ	2.0×1.94	1.64	底面中央Pit		J4	
SK	41	ⅣF-48	Ⅳ～Ⅴ	1.7×1.7	1.42	底面中央Pit		J4	
SK	42	ⅣE-46	Ⅲ～Ⅳ	1.8×1.78	1.84	底面中央Pit		J4	
SK	43	ⅣL-45	Ⅵ	0.7×0.64	0.16		←SI03	J2	
SK	44	ⅣT-44	Ⅳ～Ⅴ	0.8×0.74	0.58			J2	

111

第 35 号土坑（Ｊ１類）（図 123・124）

東側調査区に位置する。Ⅱｂ～Ⅲ層の調査中に焼土と黒色土の範囲を確認した。焼土厚は約６㎝で、その下位に人為的に埋め戻された３層が堆積する。土坑底面は南側で一段低い部分があり、その付近からは遺物はあまり出土していない。南北方向の土層断面図を作成していないため明確ではないが、一段下がった部分は褐色土が主体となる土層であった。したがって土坑が埋められた後、焼土が形成されるまでの間に掘り返されたか風倒木等による影響を受けた可能性などが考えられる。土坑内の北半からは図 124 に示した第Ⅳ群土器がまとまって出土した。深鉢形土器と壺形土器がみられる。８は内外面が粗いミガキ調整のみで無文の深鉢である。11 は入り組み文が施される口縁部がやや内湾する深鉢形土器である。これ以外の土器は、表現手法の違いはあるにしろ菱形モチーフを意識した文様が施されている。出土状況は図 123 に示したが、９の深鉢形土器は倒立し、内面には赤色顔料もしくは焼土が多量に詰まっていた。本遺構のように掘り返しの可能性が考えられる事例は SK08 や SK15、SK30 などにみられる。いずれも不整形またはフラスコ状土坑が切り合っているような状況が看取される。遺物の出土状況からも、本遺構は埋葬に関連する遺構である可能性が高い。なお、図示しなかっ





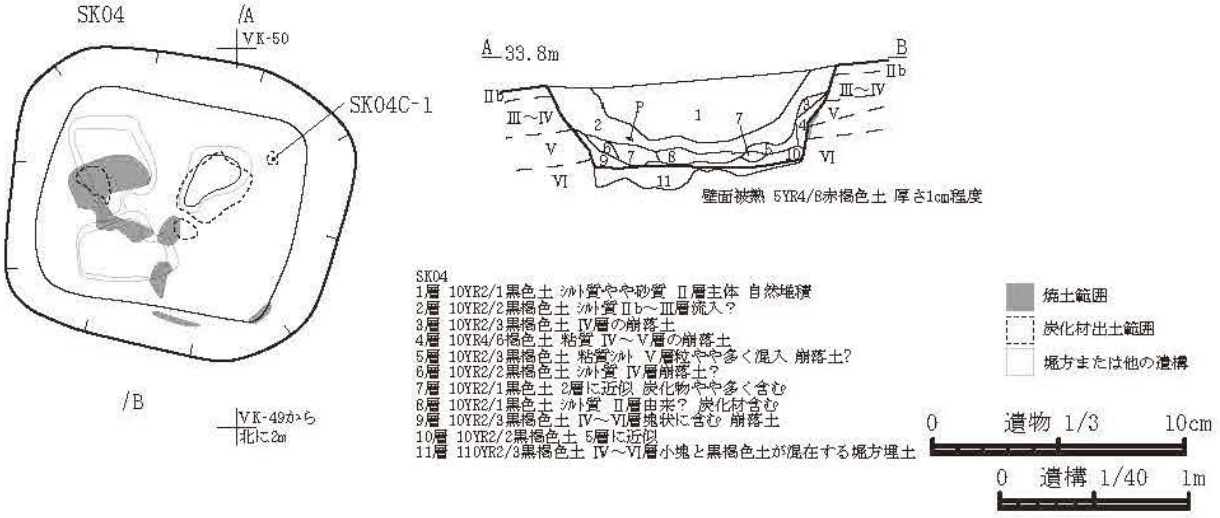


図114 第2～4号土坑及び出土遺物

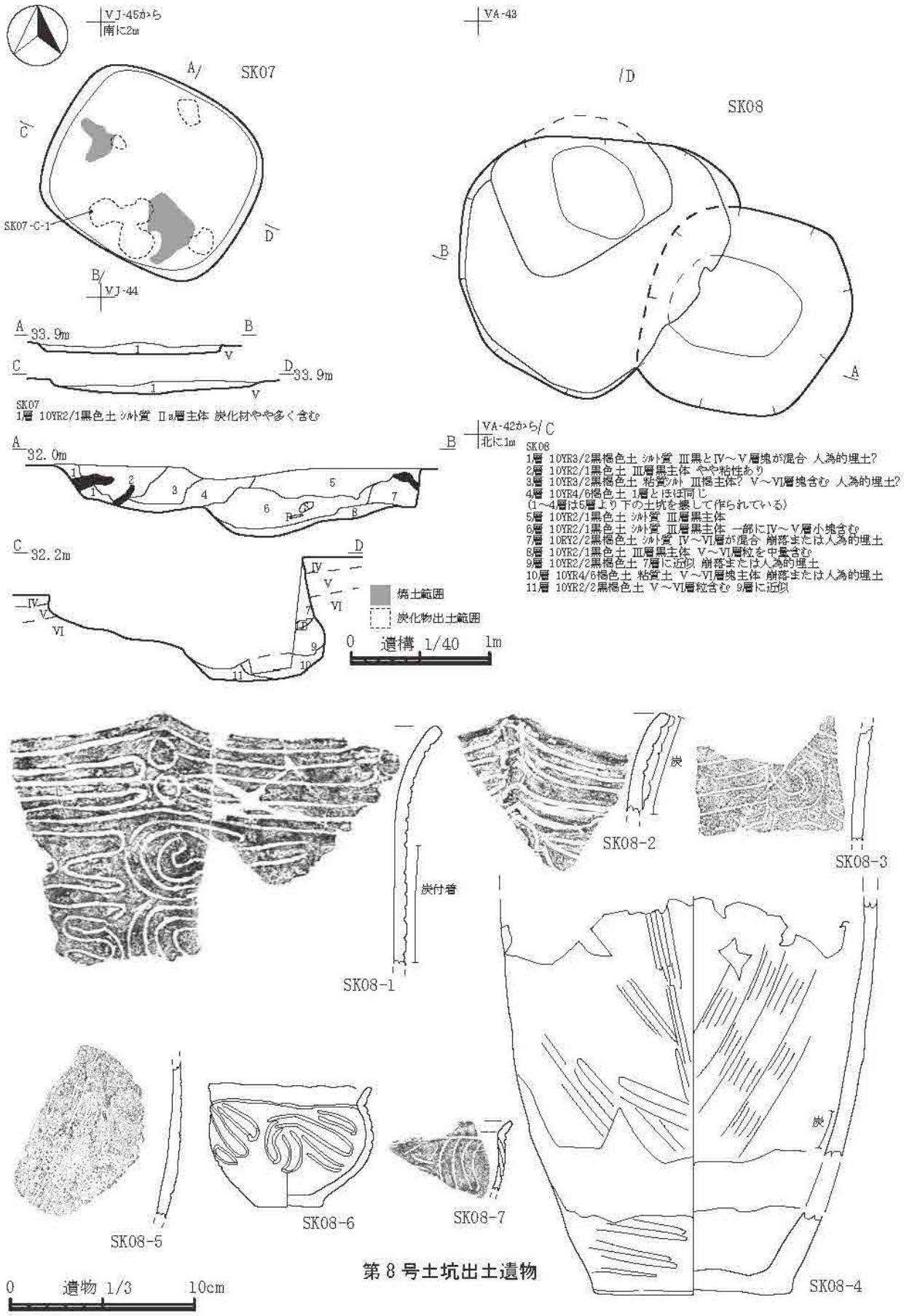
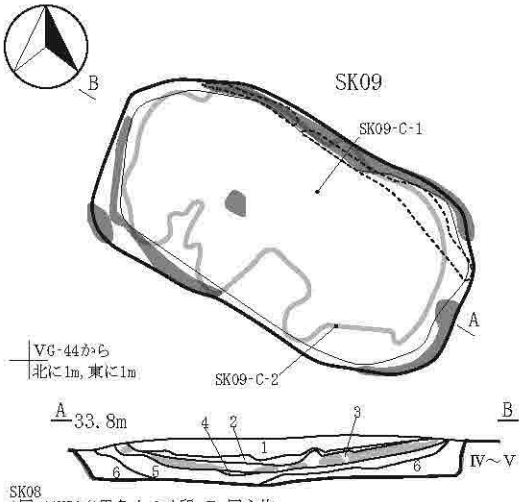
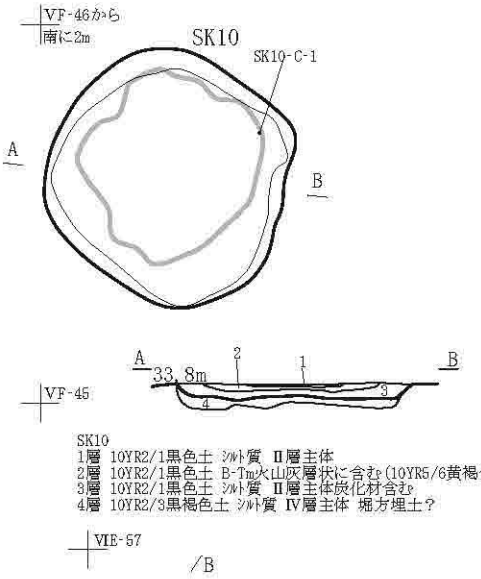


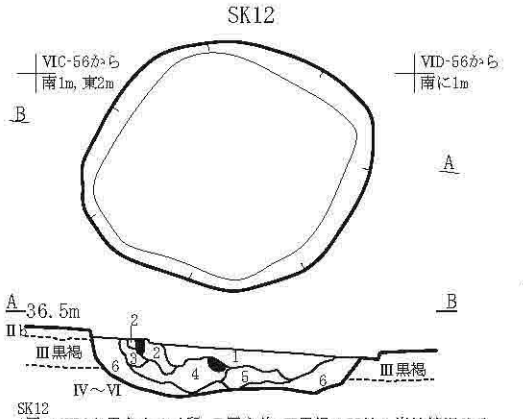
図115　第７・８号土坑及び出土遺物



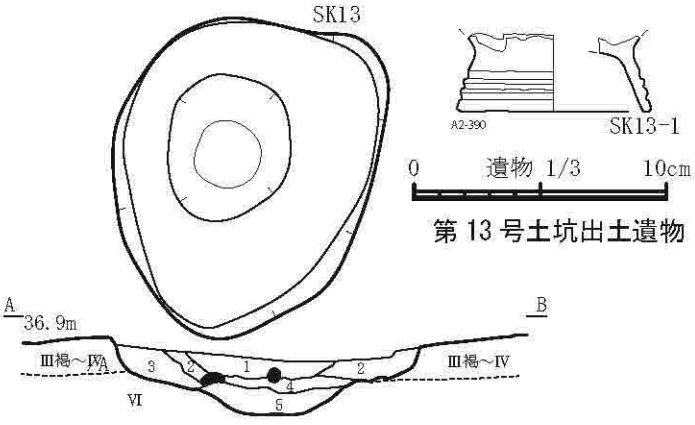
SK08
1層 10YR2/1黒色土 シルト質 Ⅱa層主体
2層 10YR2/1黒色土 シルト質 Ⅱa層に似るがやや黒み強い
3層 10YR2/1黒色土 B-Tm火山灰(10YR5/6黄褐色)を含む層ほぼ純層だが根などの攪乱が見られる
4層 10YR2/1黒色土 シルト質 Ⅱ層主体 炭化材含む
5層 10YR2/2黒褐色土 シルト質 4層より黒みが強い 炭化材含む



SK10
1層 10YR2/1黒色土 シルト質 Ⅱ層主体
2層 10YR2/1黒色土 B-Tm火山灰層状に含む(10YR5/6黄褐色)
3層 10YR2/1黒色土 シルト質 Ⅱ層主体炭化材含む
4層 10YR2/3黒褐色土 シルト質 Ⅳ層主体 堀方埋土?

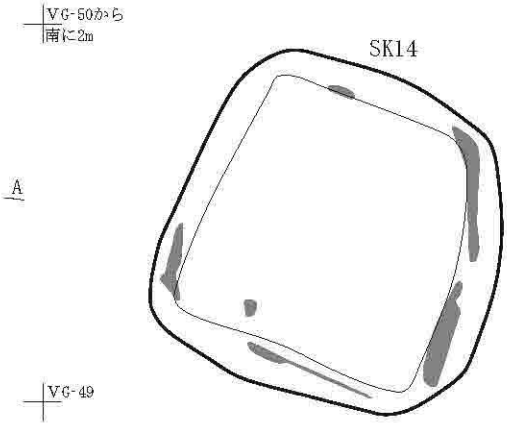


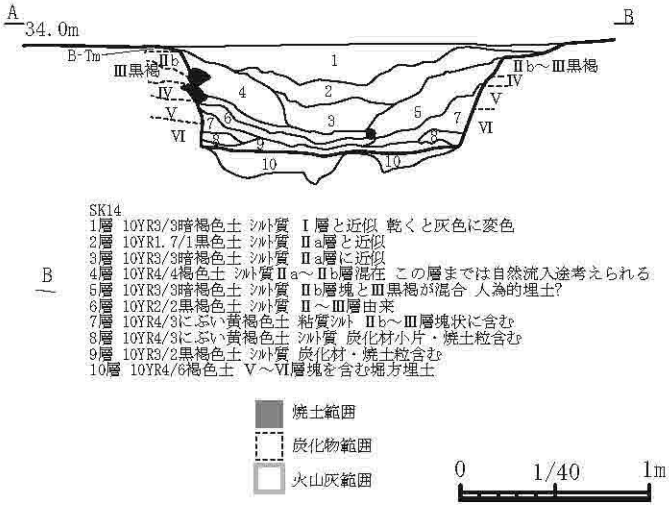
SK12
1層 10YR2/1黒色土 シルト質 Ⅱ層主体 Ⅲ黒褐・Ⅴ粒・炭粒等混じる
2層 10YR3/3暗褐色土 シルト質 Ⅱ-Ⅲ混合、極細炭粒混じる
3層 10YR4/4褐色土 シルト質 Ⅱb層混入
4層 10YR3/3暗褐色土 シルト質 Ⅲ層黒褐に近似
5層 10YR2/2黒褐色土 4層に近似
6層 10YR3/4暗褐色土 シルト質 Ⅲ層にⅤ・Ⅵ塊混じる
1層以外は人為的埋土の可能性高い



第13号土坑出土遺物

SK13
1層 10YR2/2黒褐色土 シルト質 Ⅱ層主体
2層 10YR3/3暗褐色土 シルト質 Ⅱ～Ⅲ褐混在 Ⅴ層小塊も含む 弥生土器と黒曜石片出土
3層 10YR3/3暗褐色土 シルト質 2層に近似 やや黒み強い
4層 10YR3/4暗褐色土 シルト質 炭化物少量含む
5層 10YR3/4暗褐色土 4層に近似 Ⅱb～Ⅲ褐が混合 Ⅵ層塊も含む
4・5層は人為的埋土の可能性有り





SK14
1層 10YR3/3暗褐色土 シルト質 Ⅰ層と近似 乾くと灰色に変色
2層 10YR1.7/1黒色土 シルト質 Ⅱa層と近似
3層 10YR3/3暗褐色土 シルト質 Ⅱa層に近似
4層 10YR4/4褐色土 シルト質Ⅱa～Ⅱb層混在 この層までは自然流入途考えられる
5層 10YR3/3暗褐色土 シルト質 Ⅱb層塊とⅢ黒褐が混合 人為的埋土?
6層 10YR2/2黒褐色土 シルト質 Ⅱ～Ⅲ層由来
7層 10YR4/3にぶい黄褐色土 粘質シルト Ⅱb～Ⅲ層塊状に含む
8層 10YR4/3にぶい黄褐色土 シルト質 炭化材小片・焼土粒含む
9層 10YR3/2黒褐色土 シルト質 炭化材・焼土粒含む
10層 10YR4/6褐色土 Ⅴ～Ⅵ層塊を含む堀方埋土

図116 第9・10・12～14号土坑及び出土遺物

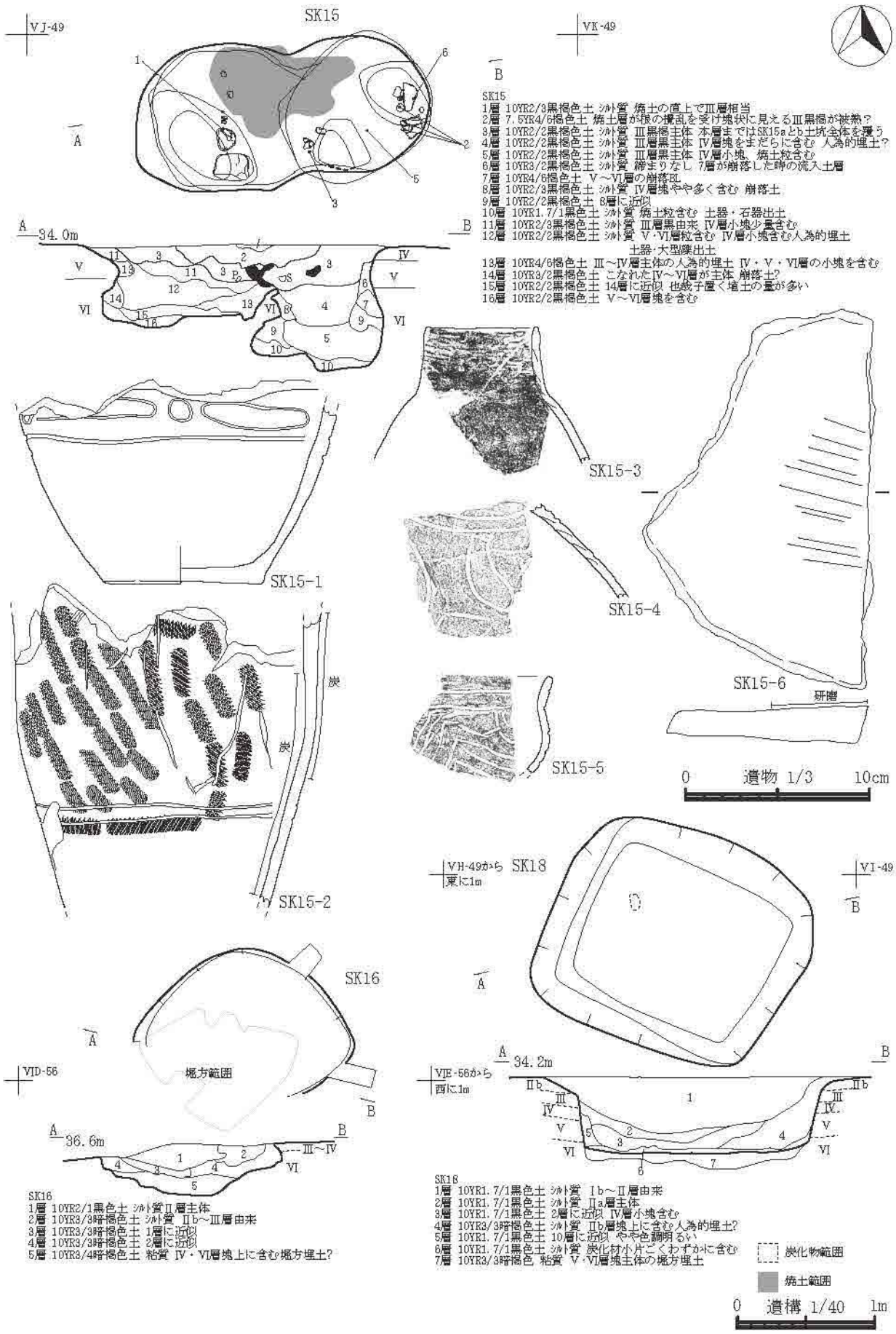
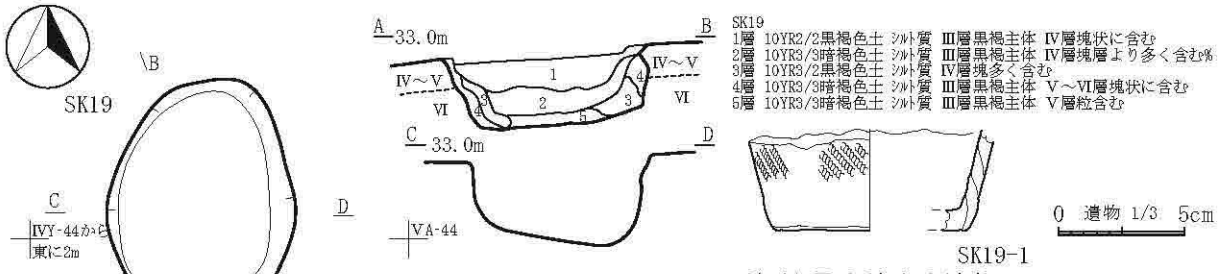
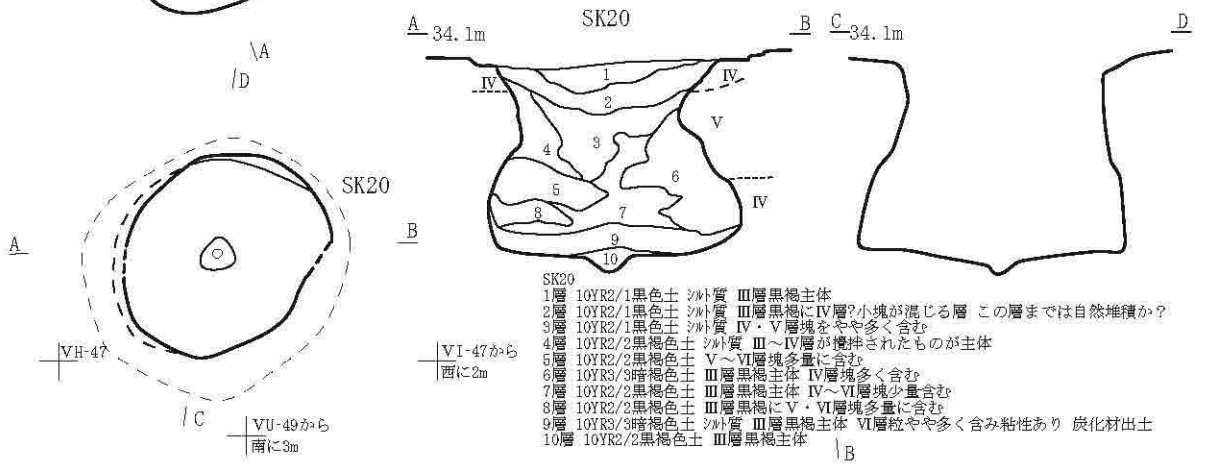


図 117　第 15・16・18 号土坑及び出土遺物



第19号土坑出土遺物



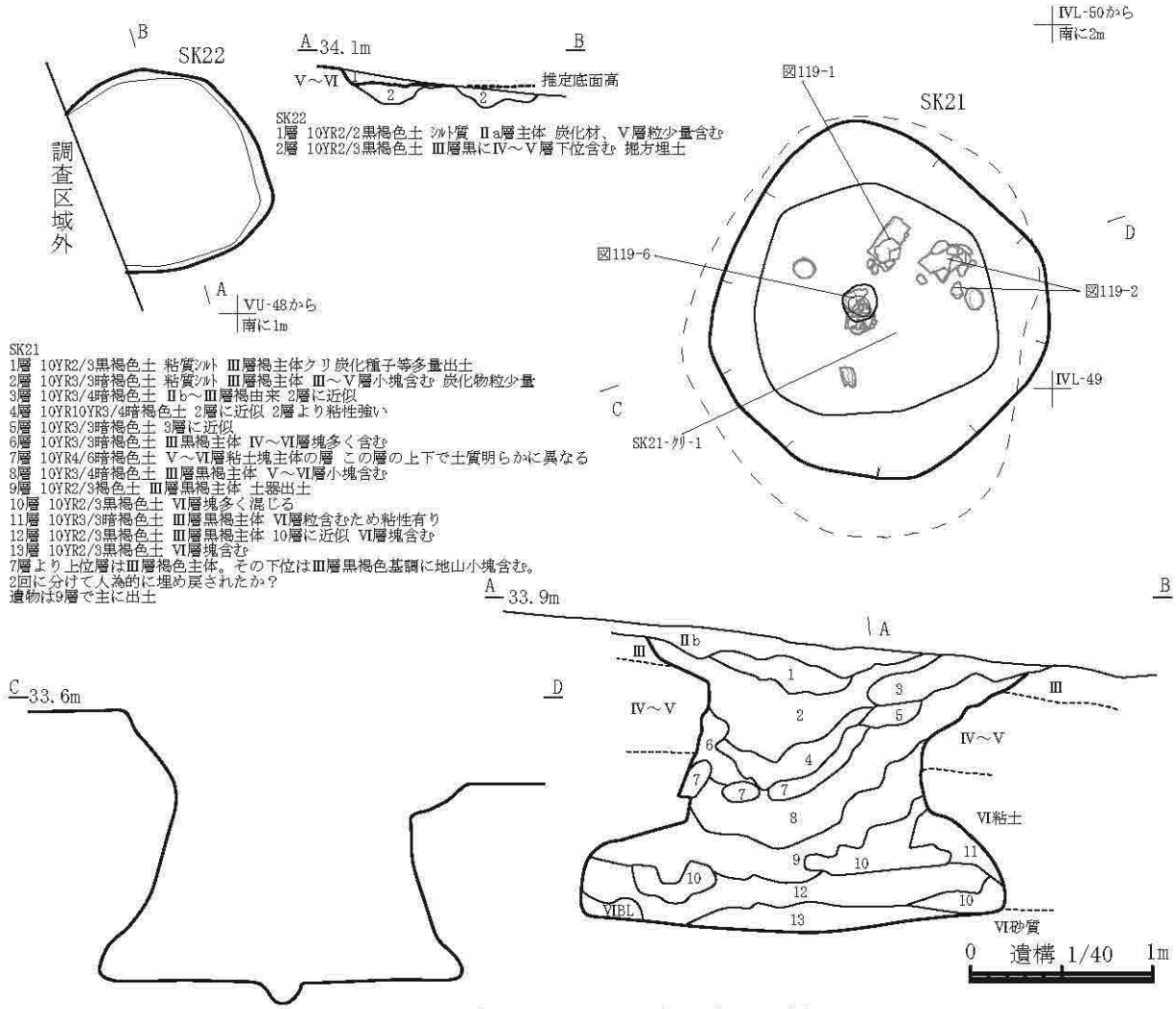


図118 第19～22号土坑及び出土遺物

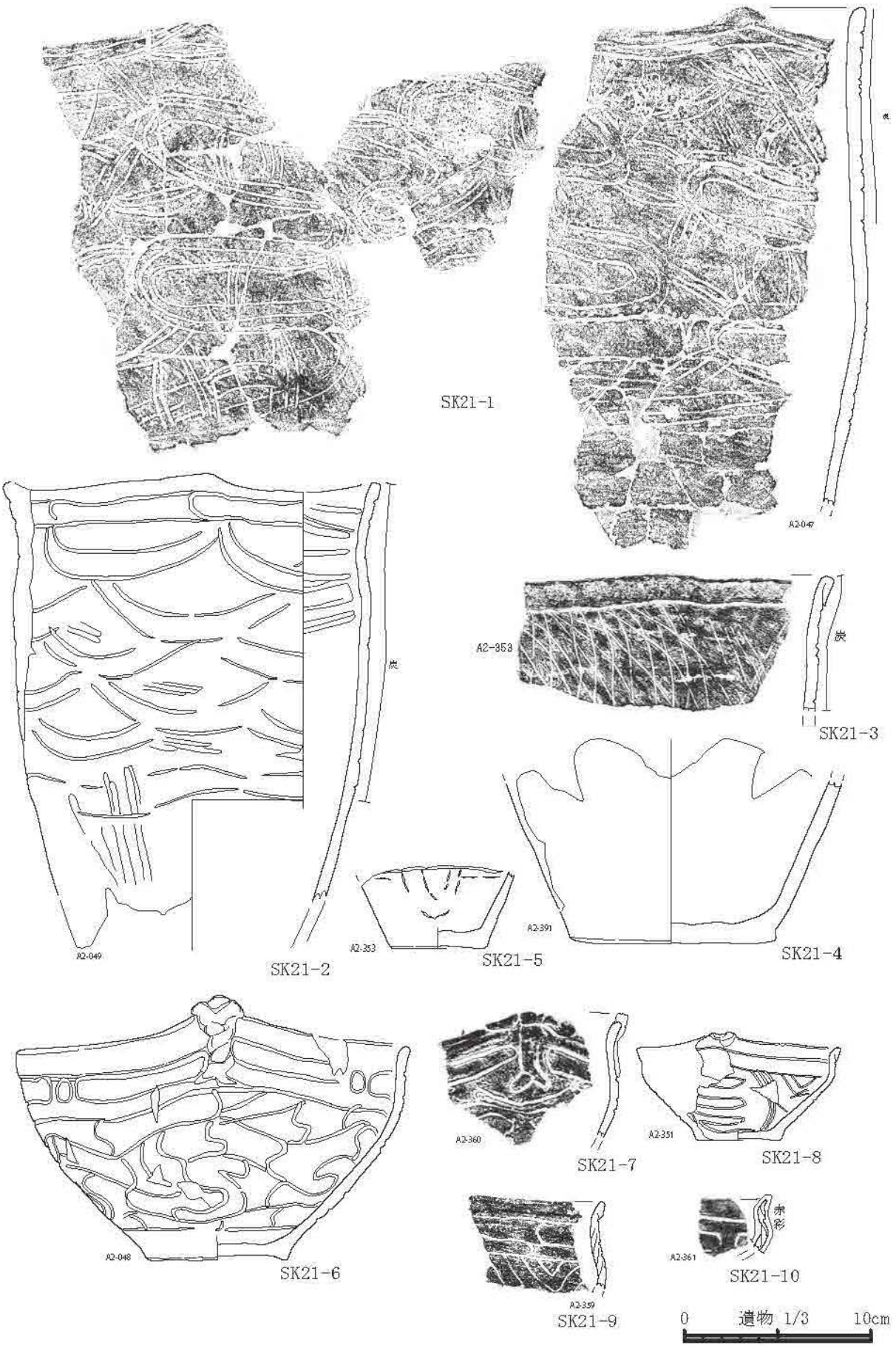
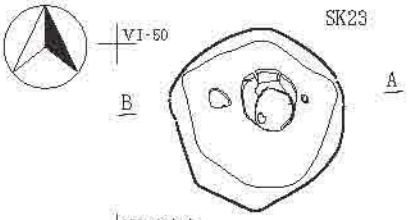
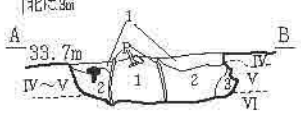
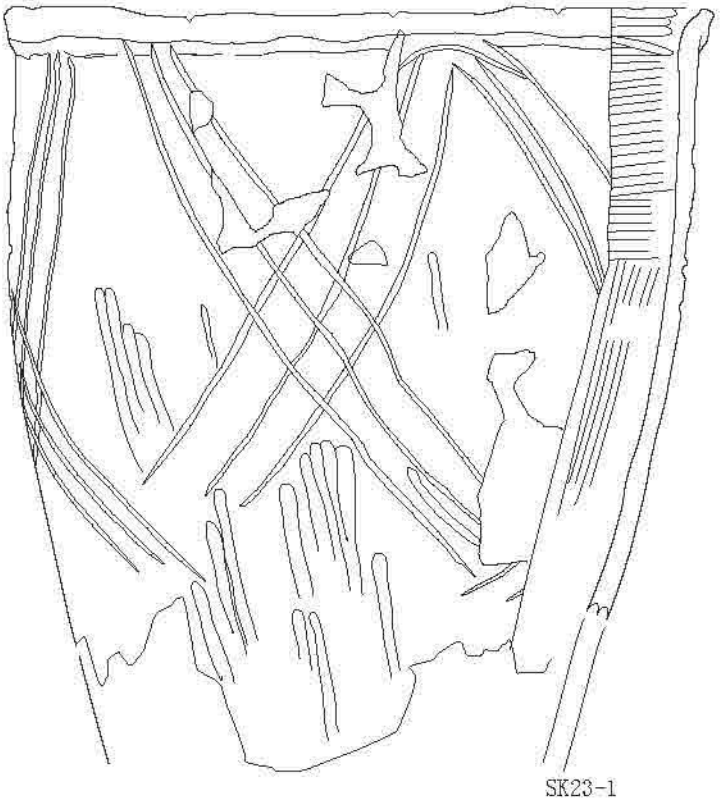


図 119　第 21 号土坑出土遺物

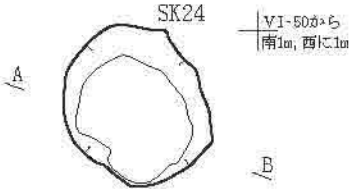


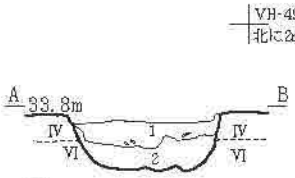


SK23
1層 10YR2/2黒褐色土 シルト質 Ⅲ層黒褐由来 炭化物粒含む
2層 10YR2/3黒褐色土 シルト質 Ⅲ層黒褐にⅣ層小塊含む
3層 10YR3/3暗褐色土 シルト質 Ⅲ層黒褐にⅣ層塊含む
4層 10YR3/4暗褐色土 Ⅲ層黒褐主体
Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層の小塊や粒を多く含む
土器は倒立状態で埋蔵 土器内と土器外の土に違いが明瞭
土器の上位は遺構確認時に削られた

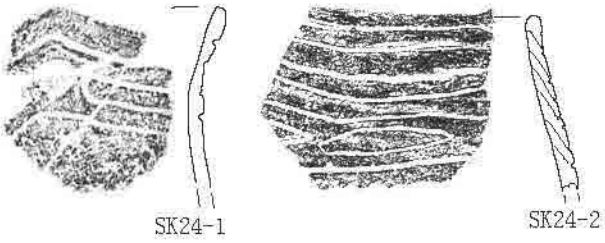


第23号土坑出土遺物

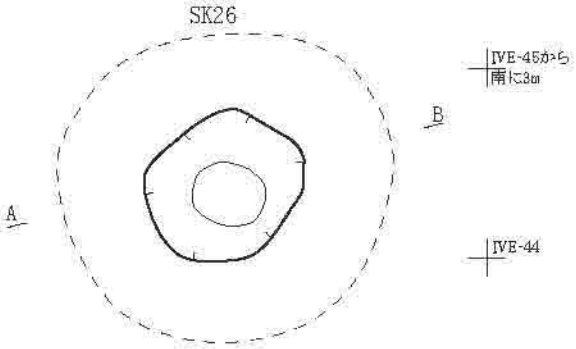


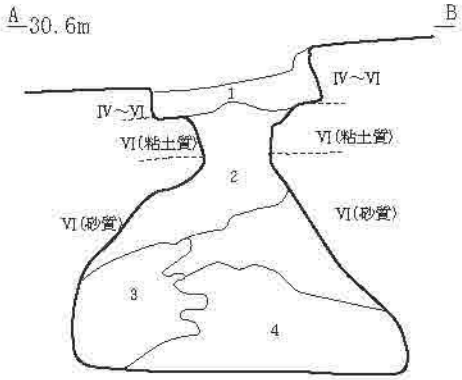


SK24
1層 10YR3/3暗褐色土 シルト質 Ⅲ層黒褐主体 炭化物 Ⅵ層粒含む
2層 10YR3/3暗褐色土 Ⅲ層褐にⅣ～Ⅵ層塊多く含む
遺物はおもに1層から出土



第24号土坑出土遺物

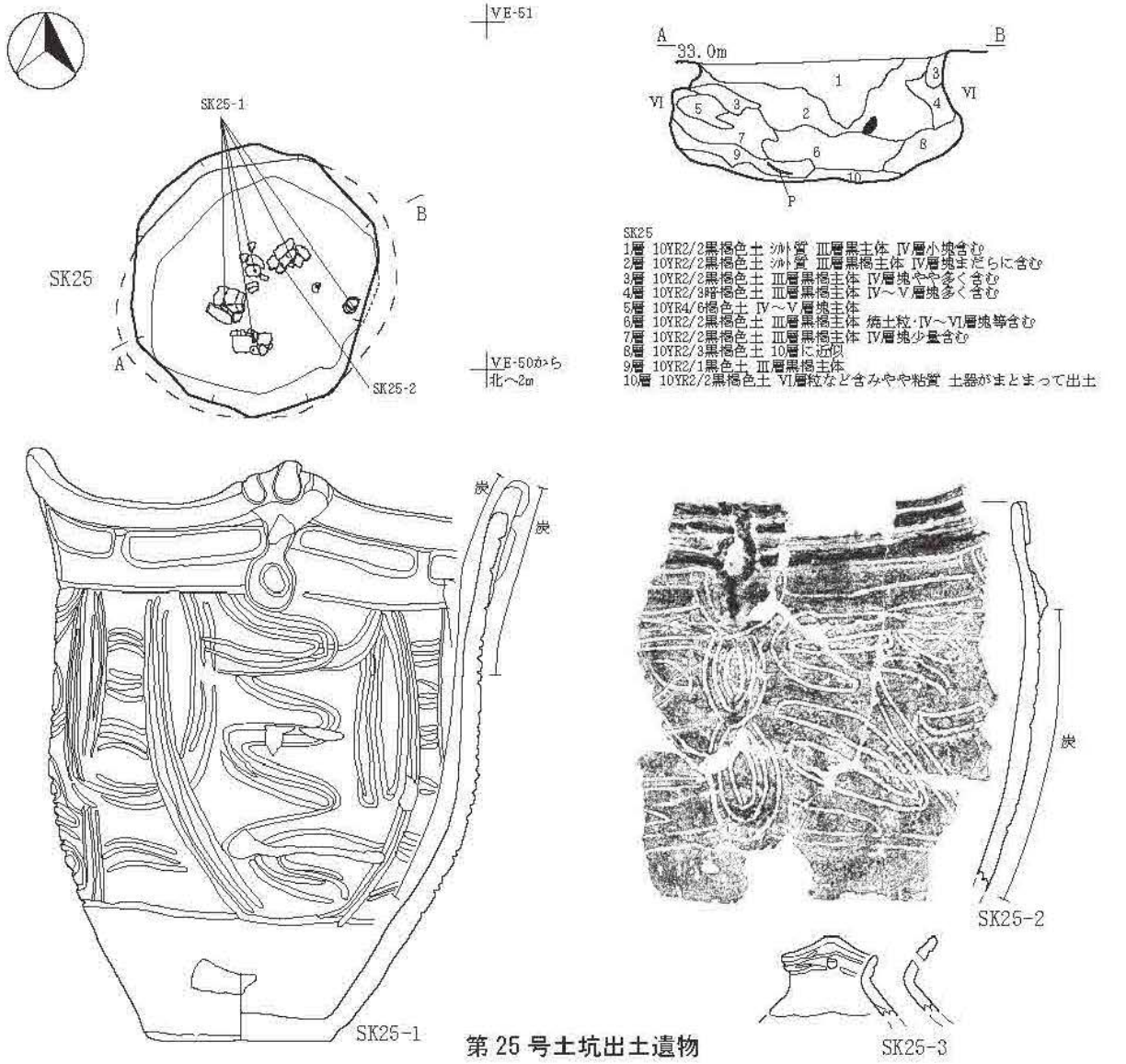




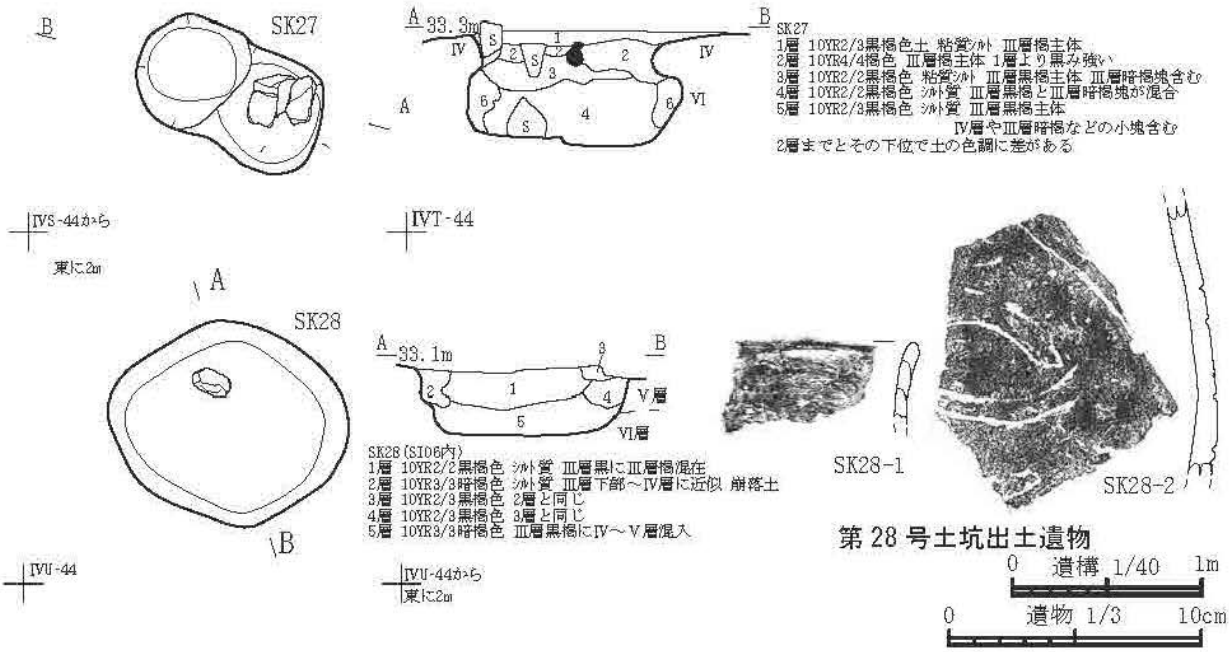
SK26
1層 10YR3/4暗褐色土 粘質シルト Ⅲ層褐Ⅴ～Ⅵ層塊混合
2層 10YR4/4褐色土 シルト質 Ⅲ層褐にⅥ層塊が混入 締まりなくボソボソ
3層 10YR5/6黄褐色土 Ⅵ層(砂質)の崩落土
4層 10YR5/3純い黄褐色土 Ⅲ層黒褐とⅥ層塊混入
5層 10YR4/4褐色土 シルト質 Ⅲ層黒褐主体 Ⅵ層小塊多く含む
5層とその上位層で色調・土質が異なる 全体に人為的埋土

0 遺構 1/40 1m
0 遺物 1/3 10cm

図120 第23・24・26号土坑及び出土遺物



第 25 号土坑出土遺物



第 28 号土坑出土遺物

図 121　第 25・27・28 号土坑及び出土遺物

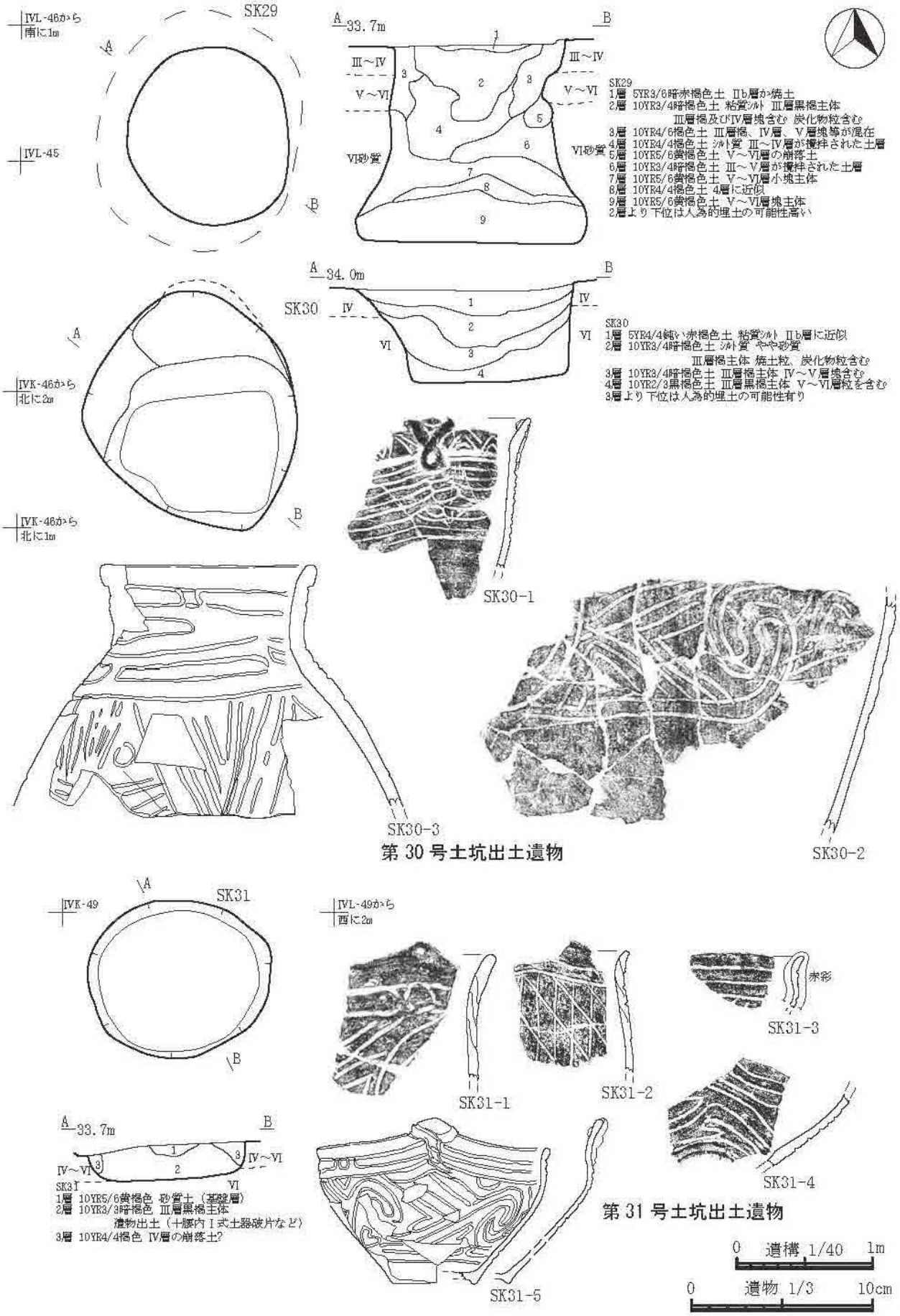
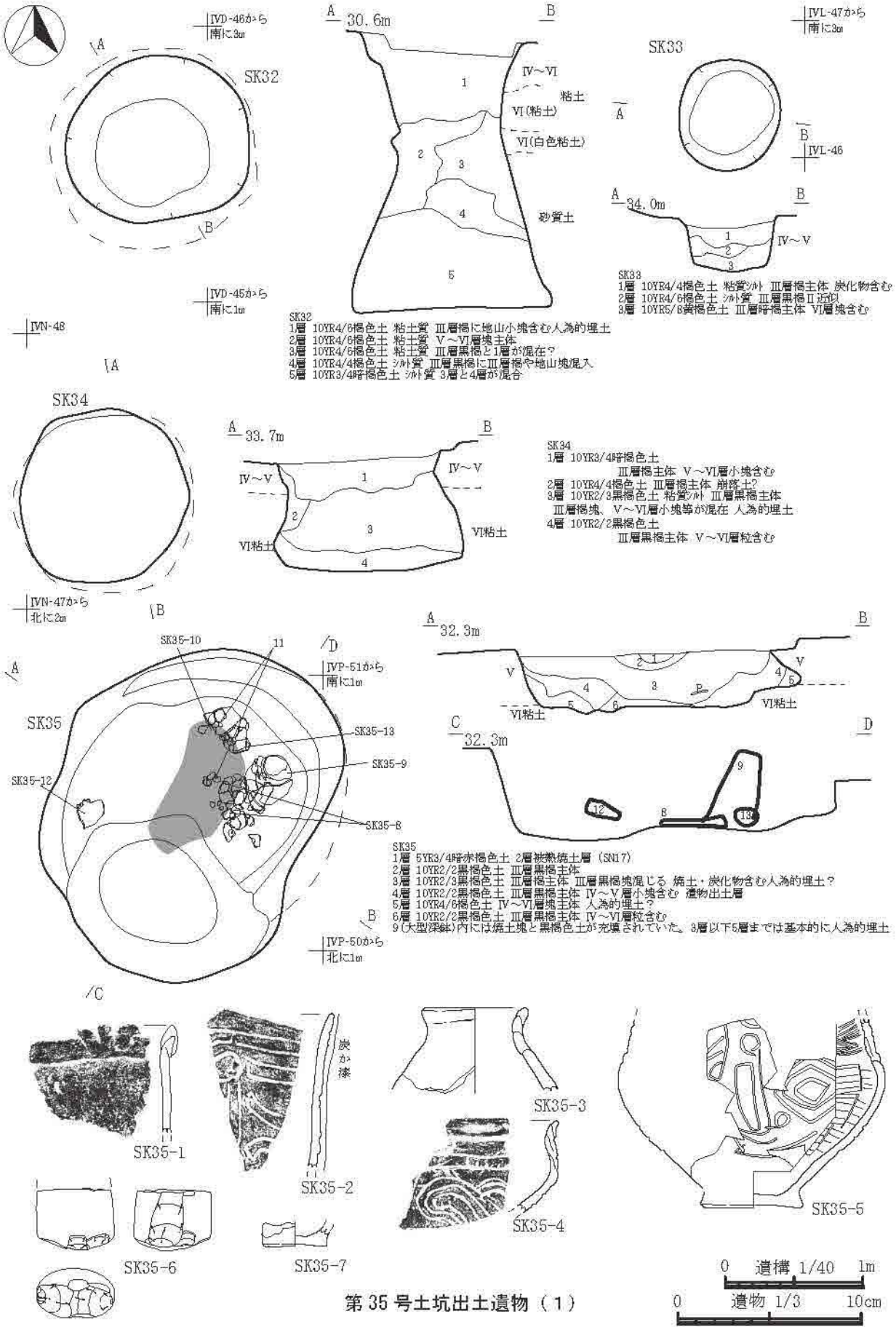


図122 第29～31号土坑及び出土遺物



第 35 号土坑出土遺物（１）

図 123　第 32 ～ 35 号土坑及び出土遺物

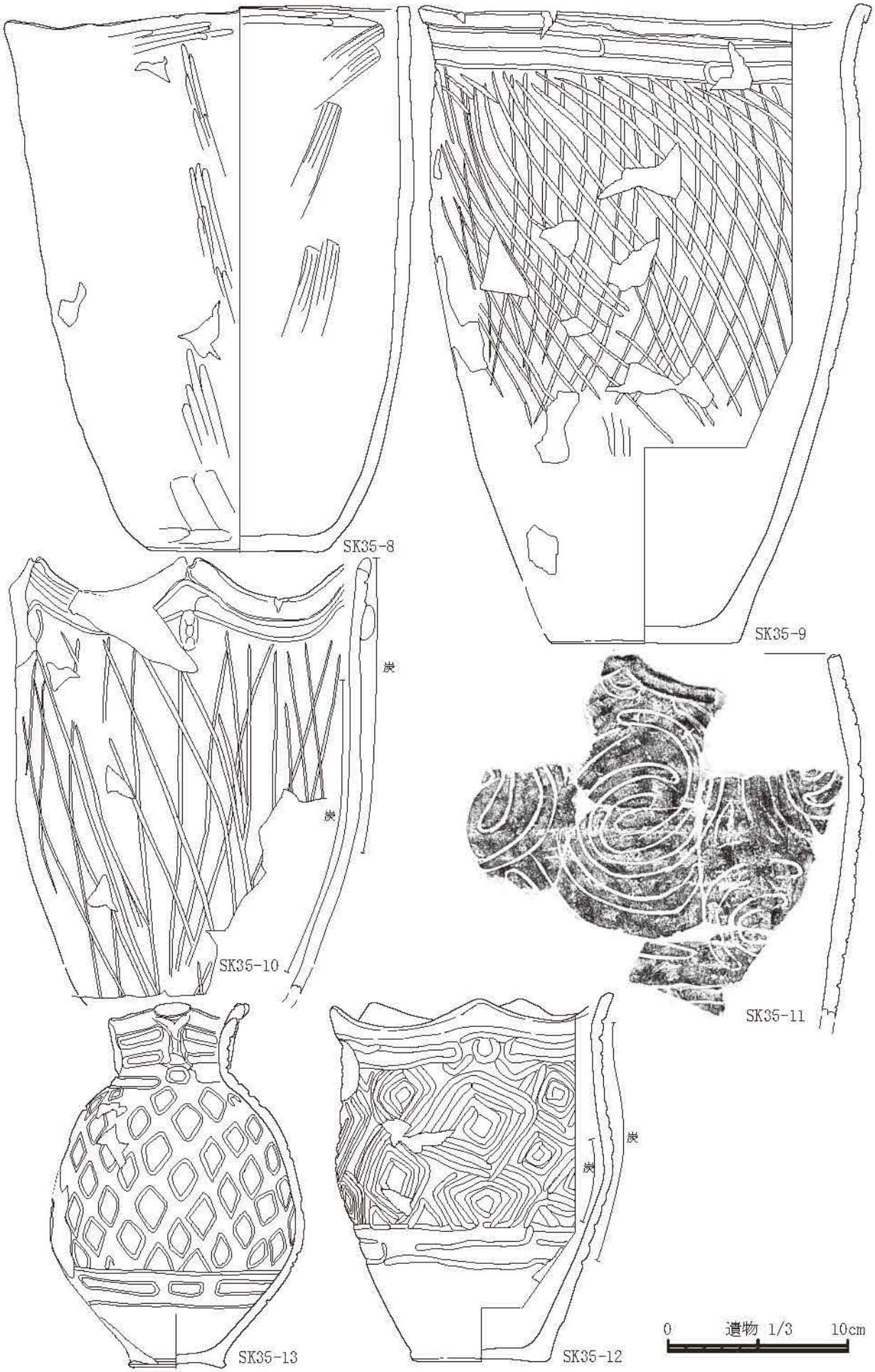


図 124　第 35 号土坑出土遺物 (2)

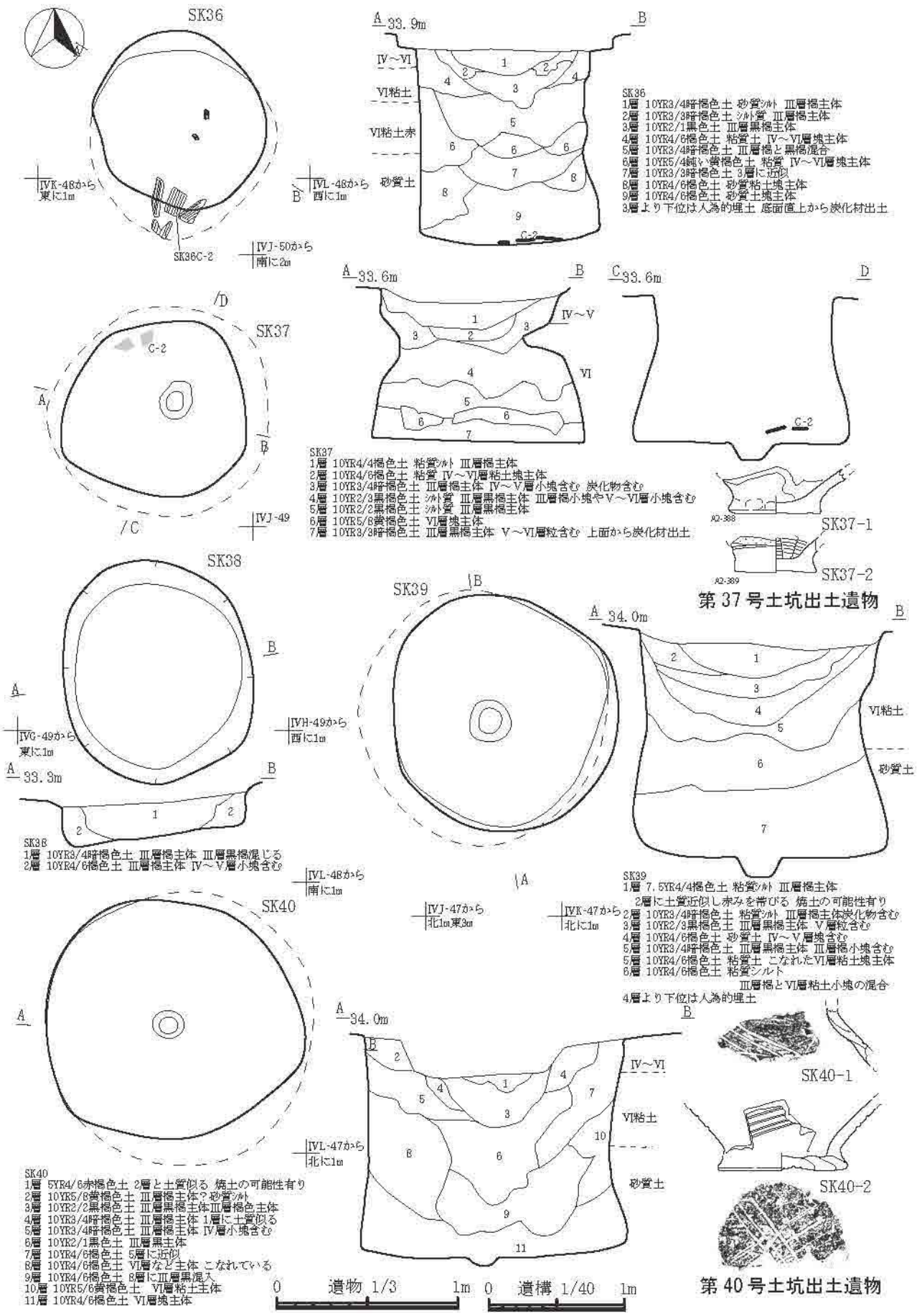


図 125　第 36 ～ 40 号土坑及び出土遺物

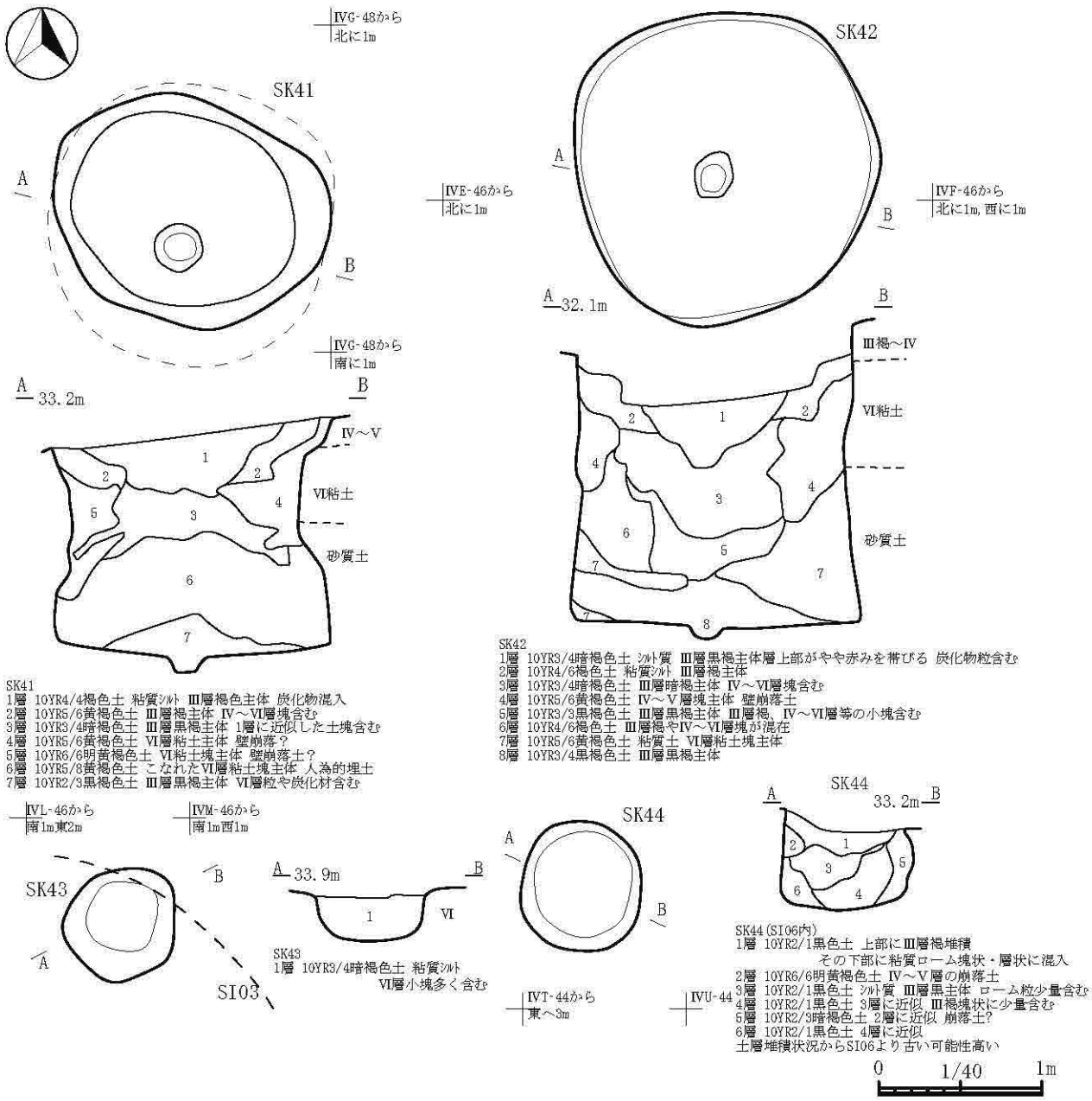


図 126　第 41 ～ 44 号土坑

たが、本遺構及び SK08 からは頁岩製の剥片と黒曜石製の剥片が多数出土していることも付記する。

第 23 号土坑（Ｊ２類）（図 120）

西側調査区に東寄りに位置する。第Ⅳ層で土器が倒立している状態を確認した。確認時には底部は既に無い状態であったが、本来もう少し深い遺構であったと推定される。直径約１ｍの浅い土坑のほぼ中央部に第Ⅳ群の深鉢形土器が倒立状態で出土した。通常の土器埋設遺構とは異なり、土器に対する堀方が大きい。土器の口縁部は土圧の影響か底面に一部食い込んだ状態であった。本遺構は、縄文時代後期に帰属し、性格としては埋葬施設の可能性がある。

第 36 号土坑（Ｊ４類）（図 125）

調査区西側斜面付近に位置する深めのフラスコ状土坑で、堆積土は褐色土主体の人為的埋土であるが、堆積土３層のみ黒色土主体となり、それより下層が埋め戻された後、黒色土が供給された期間が村医することをうかがわせる。付近の同様の遺構からはあまり遺物が出土せず、同様の堆積状況を示

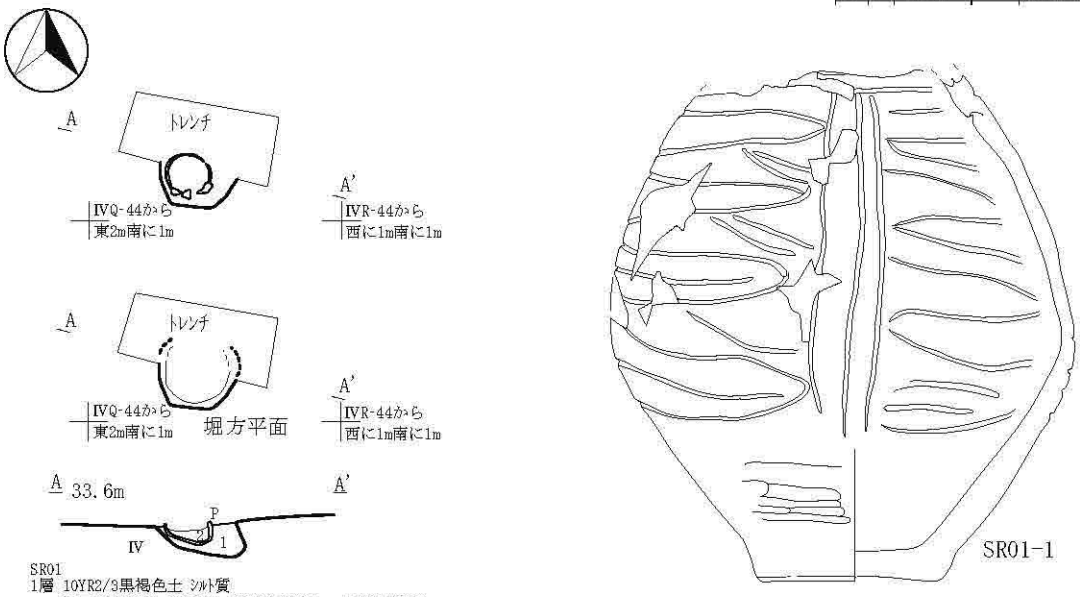
すものが多い。また、本遺構とSK37では底面付近から板状の炭化材が面的に出土した。材質は本遺構がクリでSK37はブナ属であった。用途などは不明であるが、貯蔵に関連する可能性を考えたい。本遺構のようにフラスコ状といいつつビーカーのような形状をしている土坑からは遺物が多く出土しない傾向がある。第21号土坑のように、大きいフラスコ状土坑でも多量の遺物が出土する場合もある。

５、土器埋設遺構（ＳＲ）（図127）

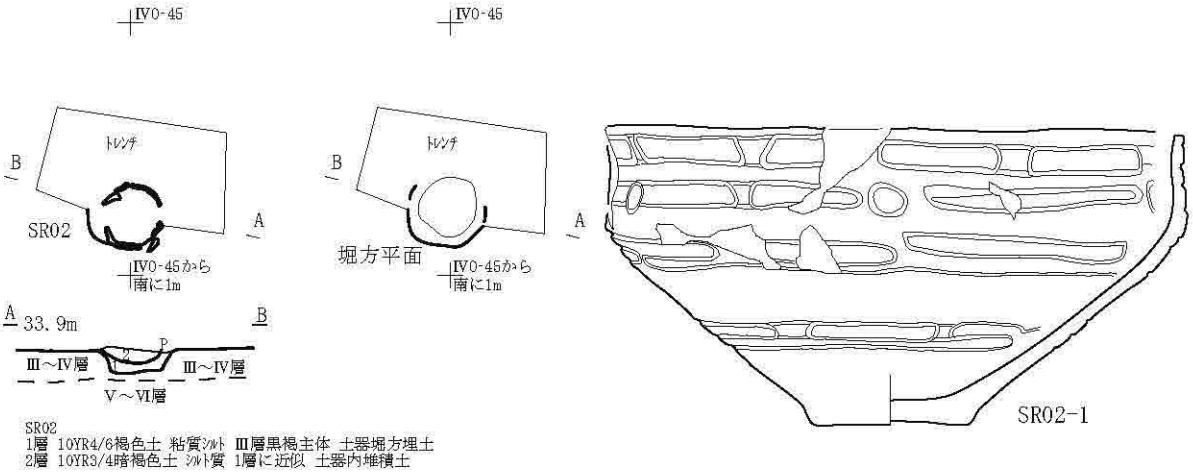
２基調査した。第１号はⅣQ-43グリッドに、第２号はⅣ0-44グリッドに位置する。２基ともに土器が正立状態で堀方に埋設されていたと判断した。

表８　構状土坑一覧

遺構名		グリッド	確認	平面規模（m）	深さ（m）
SV	1	VIF-61		3.65×0.5	1.15
SV	2	VIF-61		3.5×0745	1.15
SV	3	VIF-62		3.9×0.6	1.35
SV	4	VIK-64		3.0×0.55	1.35
SV	5	VH-48		2.9×0.1	0.95



第１号土器埋設遺構及び出土遺物



第２号土器埋設遺構及び出土遺物

0　遺物 1/3　10cm

0　遺構 1/30　1m

図127　土器埋設遺構及び出土遺物

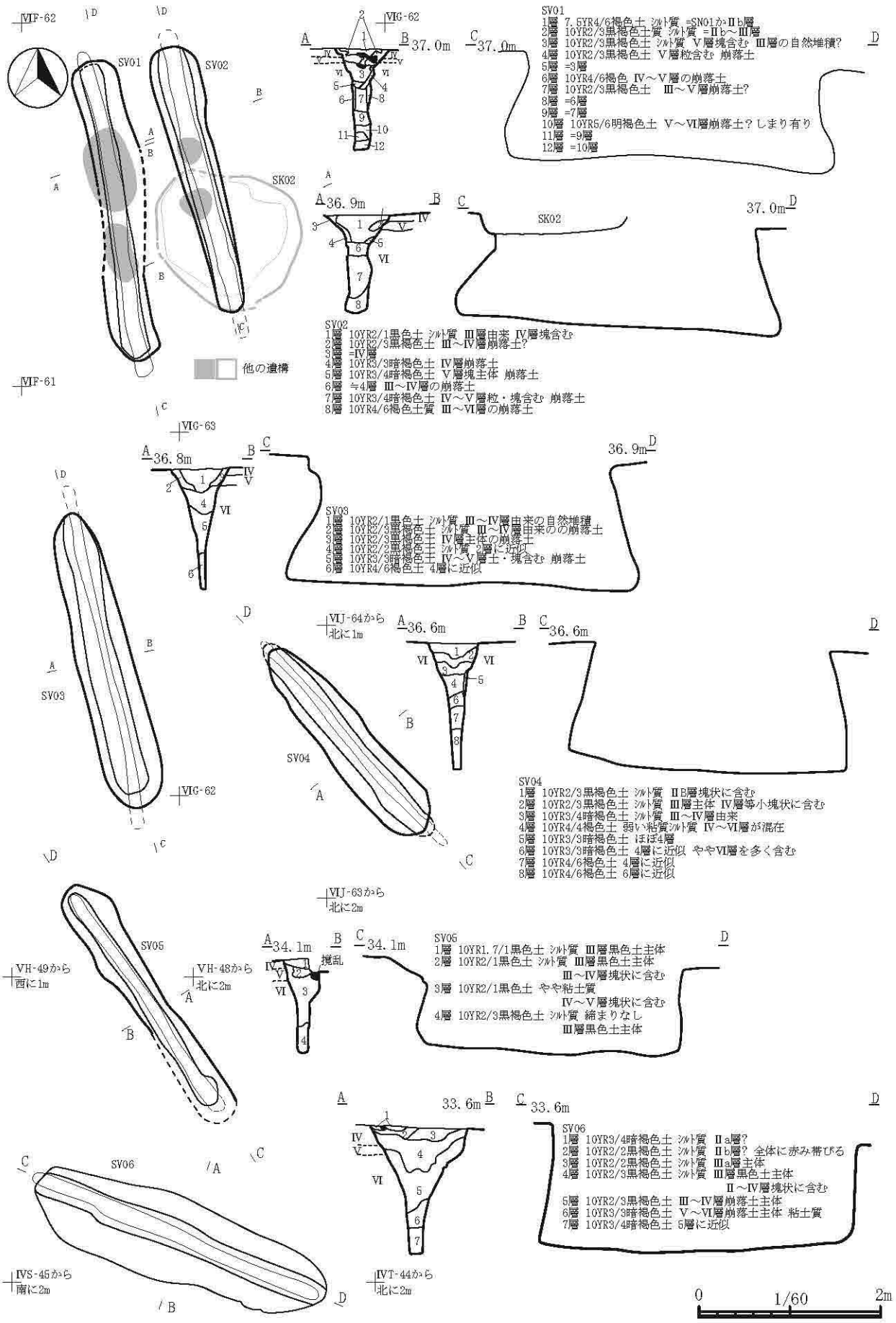


図128 第1・2・3・4・5・6号溝状土坑

６、溝状土坑（図 128）

溝状土坑は６基検出された。同様な規模・形状であり、等高線にほぼ直行するように配置されている。土層の堆積状況等から縄文時代後期頃に使用されたと考えられるが詳細は不明である。規模等については表８を参照。

７、遺構外出土遺物（図 129 ～ 138）

遺構外からは縄文時代早期～弥生時代後期にかけての遺物が出土した。以下に記述する。

土器（図 129 ～ 131）

第Ⅰ群土器（図 129 － 1 ～ 10）：Ⅰ群土器は調査段階では出土に気がつかず、整理段階で抽出した者であるため、出土層位は不明な点が多い。ただし、断片的に焼土遺構の焼土内から出土する例（SN16 や SN-11（図 129 － 8））などもあり、おおむねⅢ－２層～Ⅳ層にかけて出土していた可能性がある。図 129 － 1 ～ 6 は第Ⅰ群ａ類土器である。１は東側調査区で、２～６は西側調査区で出土した。内外面無文の尖底土器で、口縁は波状を呈し、口唇端部は狭く面取りされる特徴がある。器厚は６～８㎜である。７は第Ⅰ群ｂ類土器である。口縁部に沈線が施文され、地文は押型文である。胎土に繊維を含む。８は縄文施文土器である。０段多条の LR と RL を交互に横位回転施文してＶ字状の押型文に似た文様を描出している。周囲からは無文土器群が出土しているため、供伴する可能性がある。胎土に繊維を含む。９は繊維を含み口縁部に多裁竹管状工具による刺突が３段見られる。口唇端部はやや外削ぎ気味である。第Ⅰ群ｃ類に比定されるかもしれない。10 は第Ⅰ群ｃ類土器である。外面は横位の貝殻条痕文が見られる。

第Ⅳ群土器（図 129 － 11 ～ 20）：十腰内Ⅰ式に比定される土器群である。深鉢、壺、浅鉢などを図示した。遺構内も含め、縄文が施文されている土器はほんのわずかで、基本的に沈線文主体である。深鉢の器形は体部最大径が器高の約半分くらいにあるものが多く、文様帯下端はさらに下位まで及ぶものが多い。文様の流れは縦方向に流れるものと横方向に流れる者があるが半々くらいである。縦方向にはＳ字状入り組み文などが見られる。横方向には波濤文や入り組み文等がある。菱形モチーフも相当数存在する。沈線は２本一対または三本一対が見られ、二本一対の者は楕円文であることがほとんどである。また、無文の壺や深鉢が一定数組成するのも大きな特徴といえそうである。図 130 － 3 は口縁部に編み物圧痕が見られるが、押圧した後口縁部を調整した際に圧痕が半分ほど見えなくなっているため、最初から文様効果を意識しているか疑問である。図 130 － 16 は小型の壺内部に黒色の漆塗膜が付着している。漆容器として利用された可能性が高い。

図 131 には第Ⅴ～Ⅶ群土器を図示した。本遺跡では第Ⅵ群ｂ類とｅ類の出土が目立ち、遺構も検出されている。４はボウル状の浅鉢で口唇端部が屈曲し外面と内面端部に刻目が施されている。口唇端部だけみると弥生前期の突帯文土器を連想させるが詳細は不明である。内外面ともにミガキ調整が見られる。８～ 18 は第Ⅵ群ｂ類土器である。９の頸部には結節沈線文が見られる。19 ～ 22 はｄ類である。24 の底面には種子の圧痕が見られる。25 ～ 27 は第Ⅵ群ｅ類で、赤穴式に比定される。25 は SN09 付近で出土している。口縁部から底部まで回転方向を横・縦・横と変化させながら結節下位点文が施文されている。27 は甕の口縁部付近の破片で、交互刺突文が波状に施文されている。地文には地縄自巻縄文が見られる。SN08 付近で出土ししている。28 は第Ⅶ群土器で後北 C2D 式に比定される。帯縄

文（RL）を縁取るように細い沈線が施文されているのが特徴的である。帯縄文の空隙には三角形の刺突が見られる。

土製品（図132）

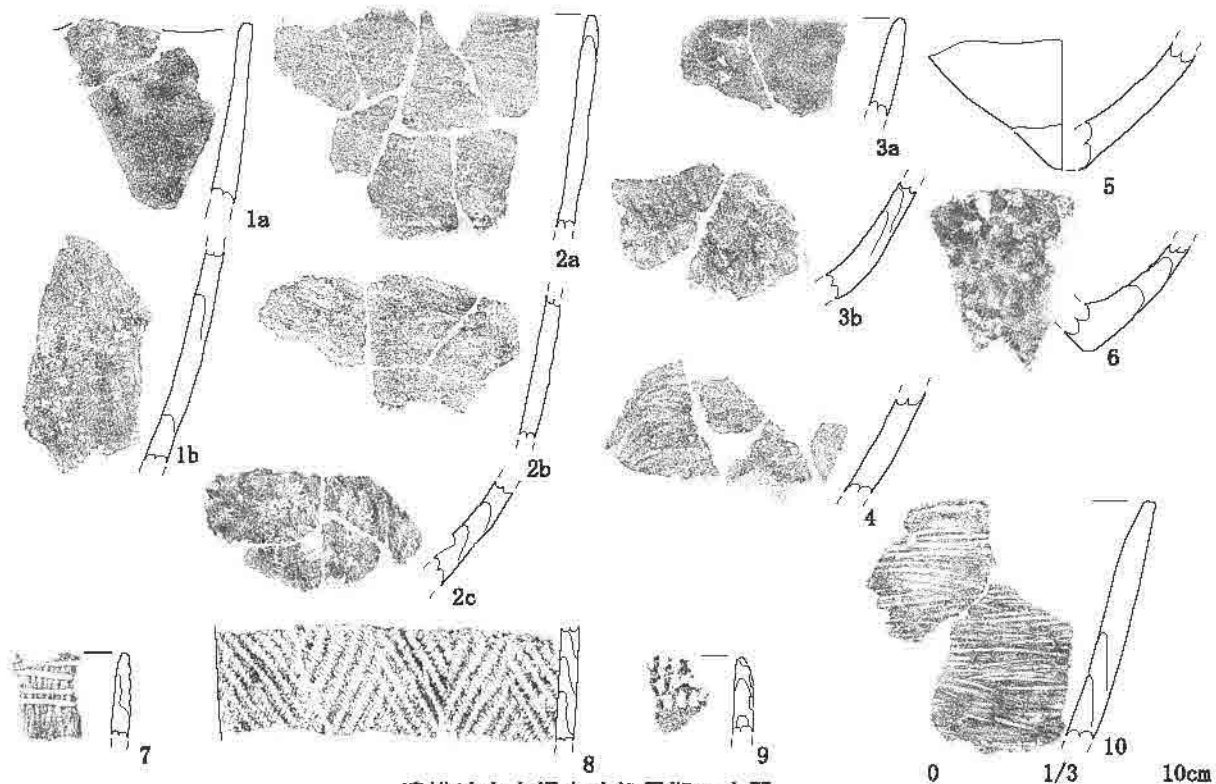
縄文時代後期の土偶・鐸形土製品、ミニチュア土器、円盤状土製品を掲載した。５～13は鐸形土製品である。沈線文様が見られるものと、無文のものがある。５はやや扁平な形状で表裏面には本遺跡の特徴的なモチーフであるハートあるいはU字のモチーフが描かれている。このモチーフは土器の文様では充填文として用いられるが、ここでは主文様である。本遺跡の鐸形の特徴として、自立しないほど側面から見たとき下端の縁が傾斜している点があげられる。

石器（図133～138）

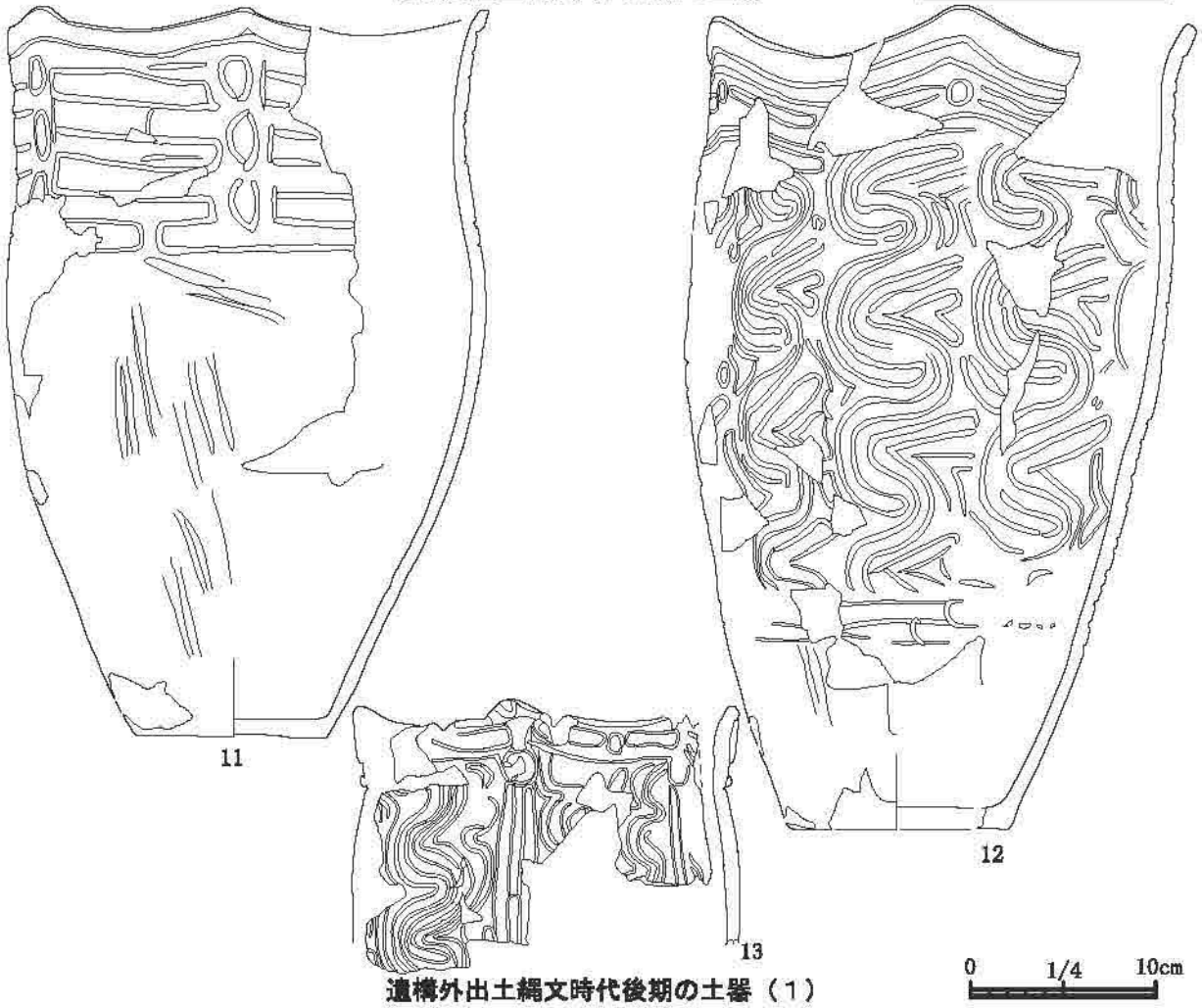
石鏃（図133－１～６）、石槍（７）、石匙（８～12）、石錐（13～16）、石篦（図133－17～図134－７）掻器（８～10）、削器（図134－12～図135－４）、半製品？（図135－５～11）、微細剥離を有する剥片（12・13）、両極剥片（14～18）、石核（図136－１～７）、磨製石斧（図137－１～14）、凹み石（図136－15～18）、敲き石（図137－19～図138－４）、擦り石（図138－５～11）、石錘（図138－12～17）、石皿（図138－18）などが出土した。石篦は点数がややまとまって出土したが、第Ⅰ群土器に伴うものと第Ⅳ群土器に伴うものがある。図133－17・18・19は第Ⅳ群土器に伴うと考えられる。刃部は半円状で表裏両面からの剥離で片刃に仕上げられている。図134－１・２・４は第Ⅰ群土器に伴うと考えられる。刃部は裏側からの急角度剥離で片刃に仕上げられている。類似した石器は本遺跡に近接する平野（２）遺跡（鰺ヶ沢町2002）でも無文土器群に伴っている。図134－10・図135－10・11は黒曜石製で、産地同定分析試料である（第４章第６節参照）図134－10は深浦産の可能性が高いとされた。また、石錘もややまとまって出土した。第Ⅰ群及び第Ⅳ群土器に伴う可能性がある。長軸両端を打ち欠くものと、短軸両端を打ち欠いているものがある。磨製石斧は花崗閃緑岩製と緑色岩製がある。前者はやや大きめの者が多い。調査区内からは素材とみられる加工閃緑岩が多量に出土しているが、加工具や半製品などは見当たらない。石錘にも加工閃緑岩が使用されているため、そちらの素材である可能性もある。図137－１と２は敲き石であるが、敲打痕跡が端部側面ではなく表面端部に付いているものであり珍しい。

石製品（図138）

図138－19は三脚石器である。20～24は有孔の自然礫が遺跡に持ち込まれたものと考えられる。25はくびれを有する自然礫である。26は全体形状が不明であるが、打ち欠きによる抉れが見られる。27は擦痕が見られる。（茅野）

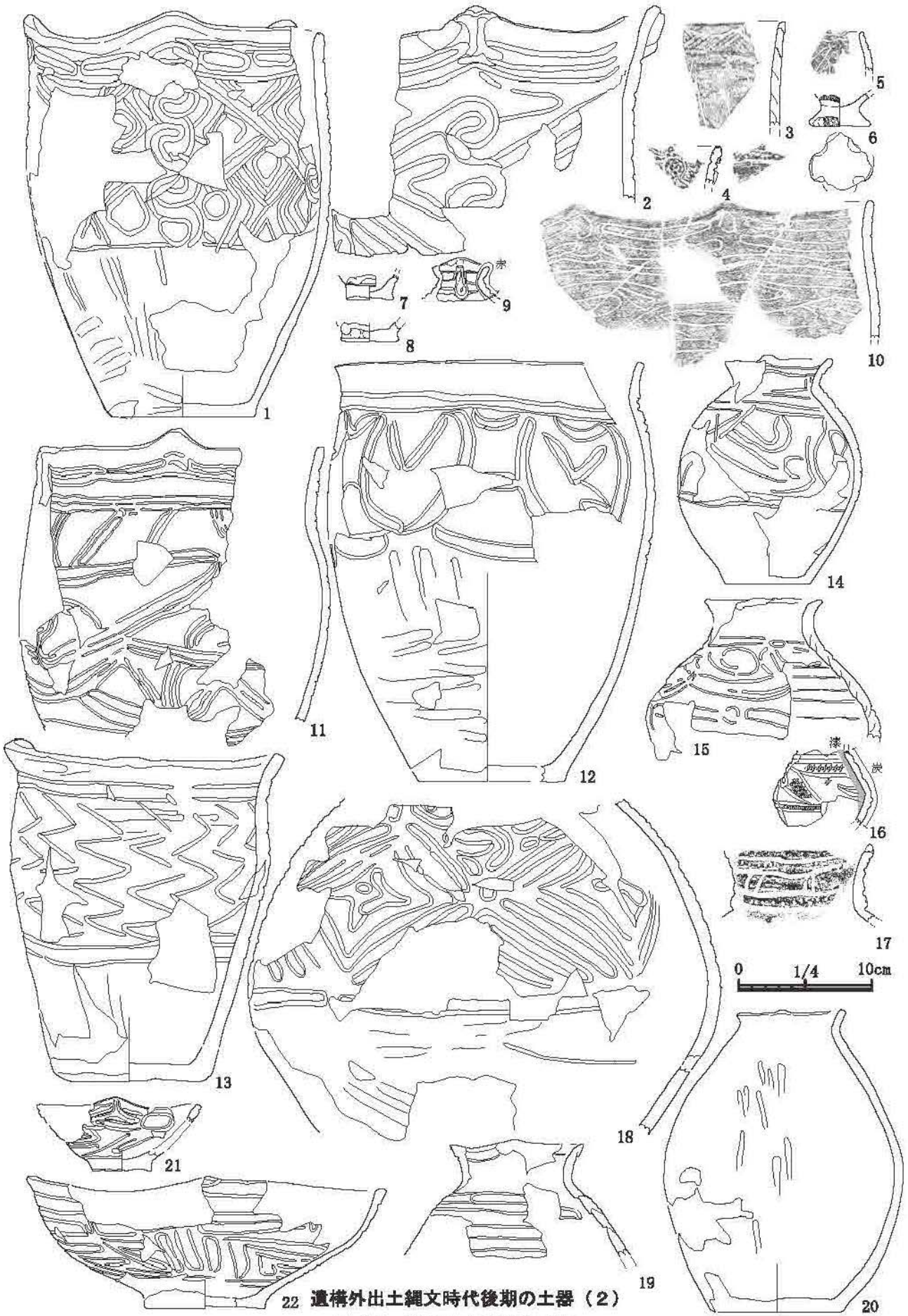


遺構外出土縄文時代早期の土器



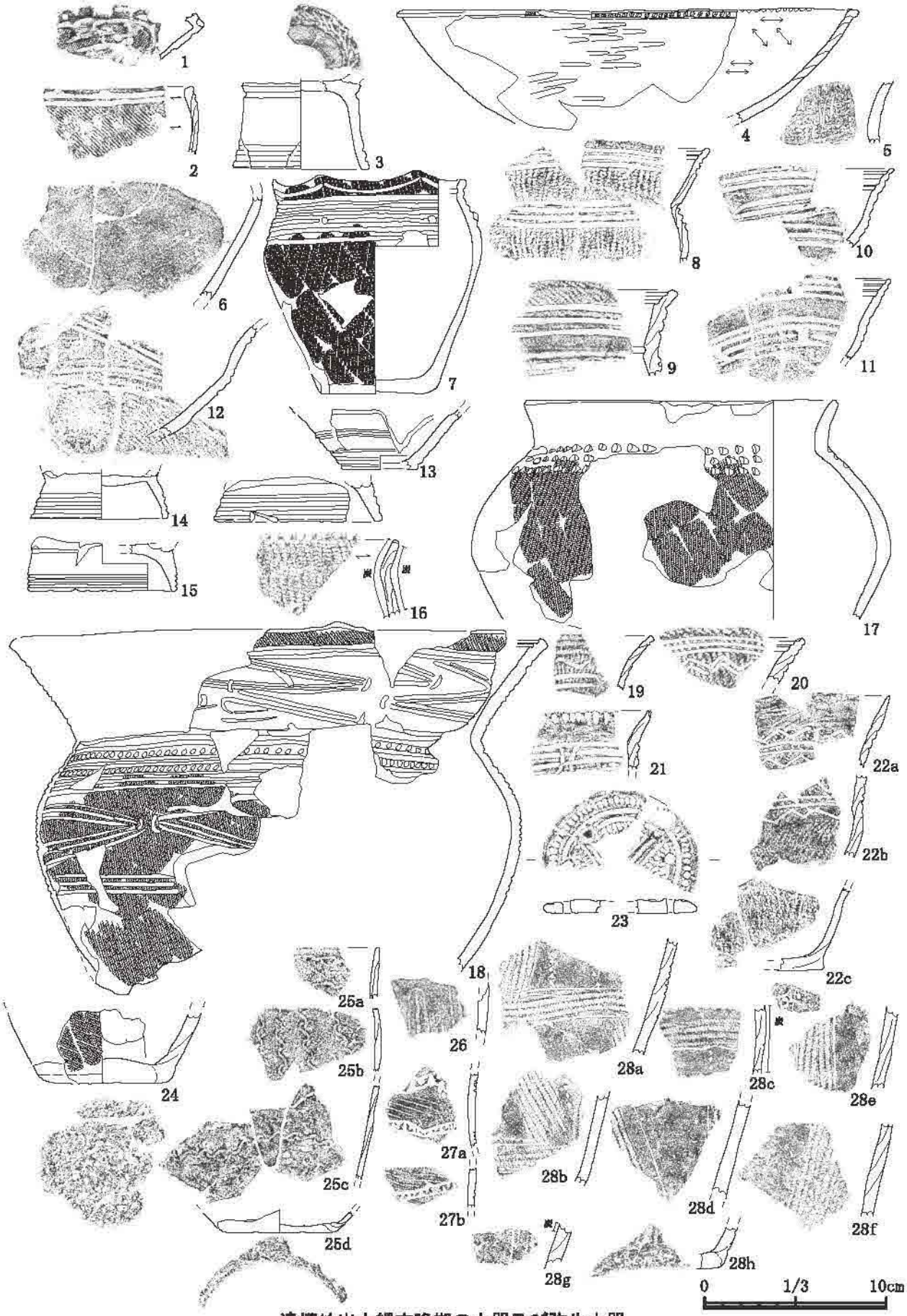
遺構外出土縄文時代後期の土器（１）

図129　遺構外出土遺物（1）



遺構外出土縄文時代後期の土器（2）

図 130　遺構外出土遺物（2）



遺構外出土縄文晩期の土器及び弥生土器

図131　遺構外出土遺物（3）

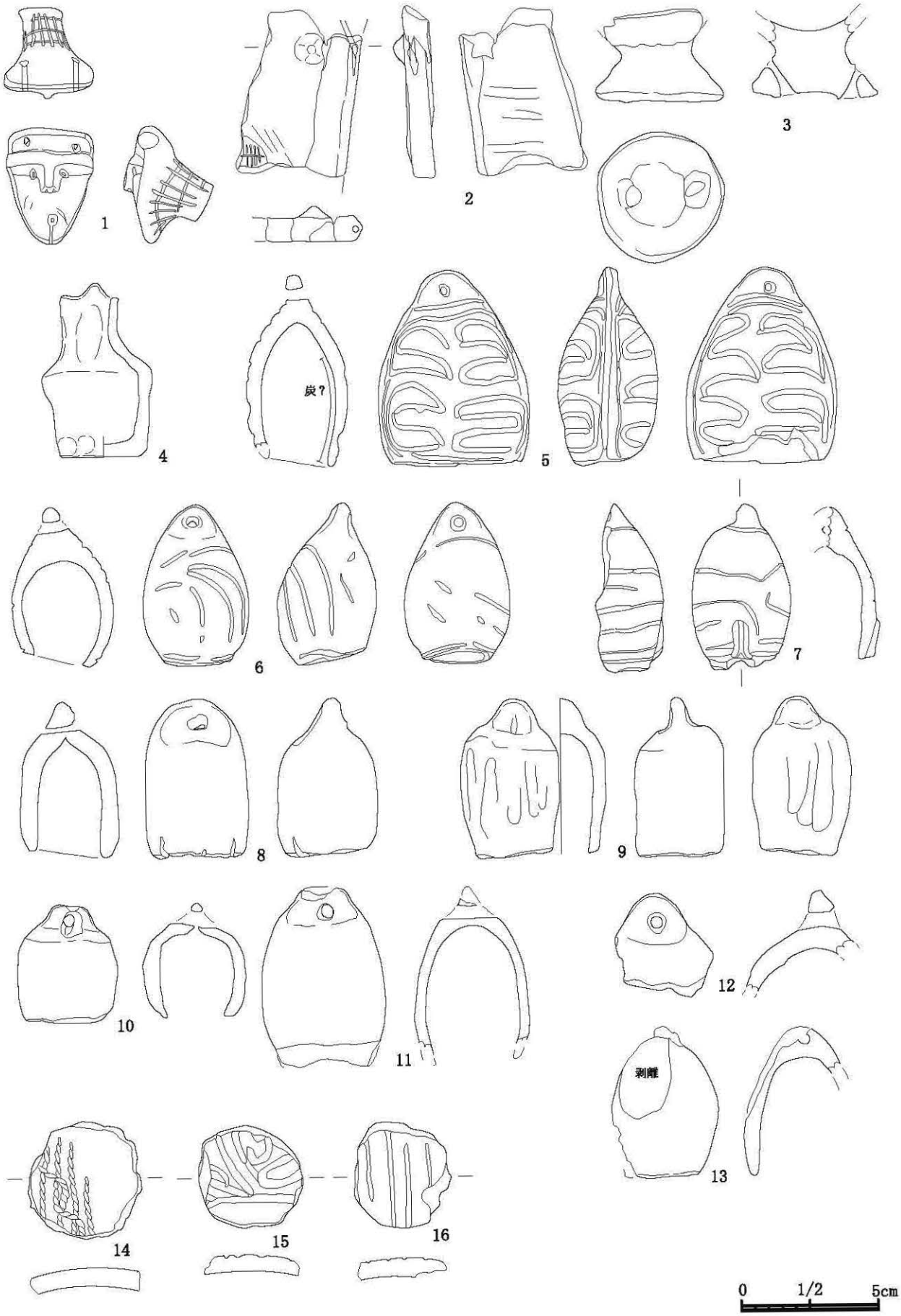


図 132　遺構外出土遺物（4）

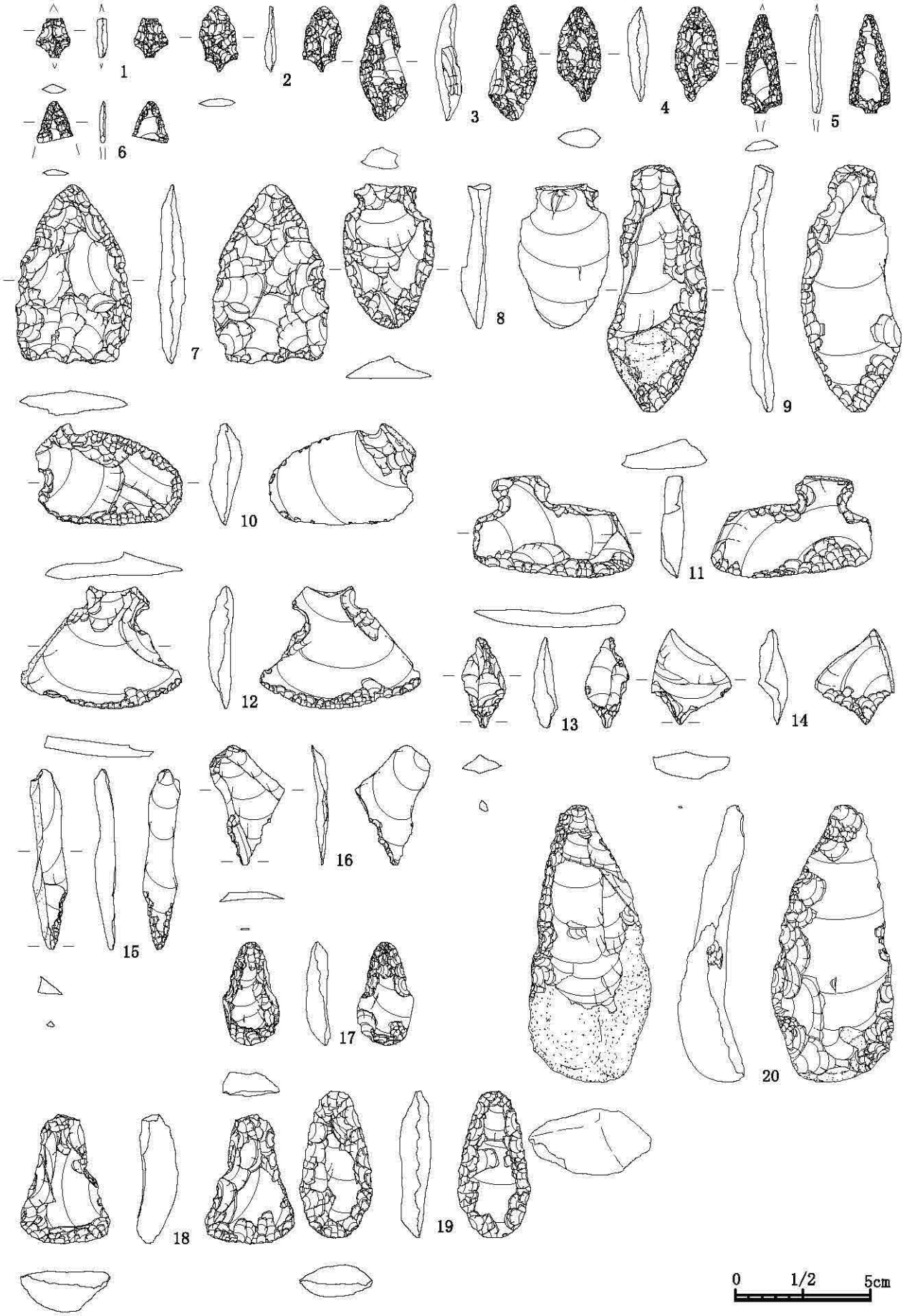


図 133　遺構外出土遺物（5）

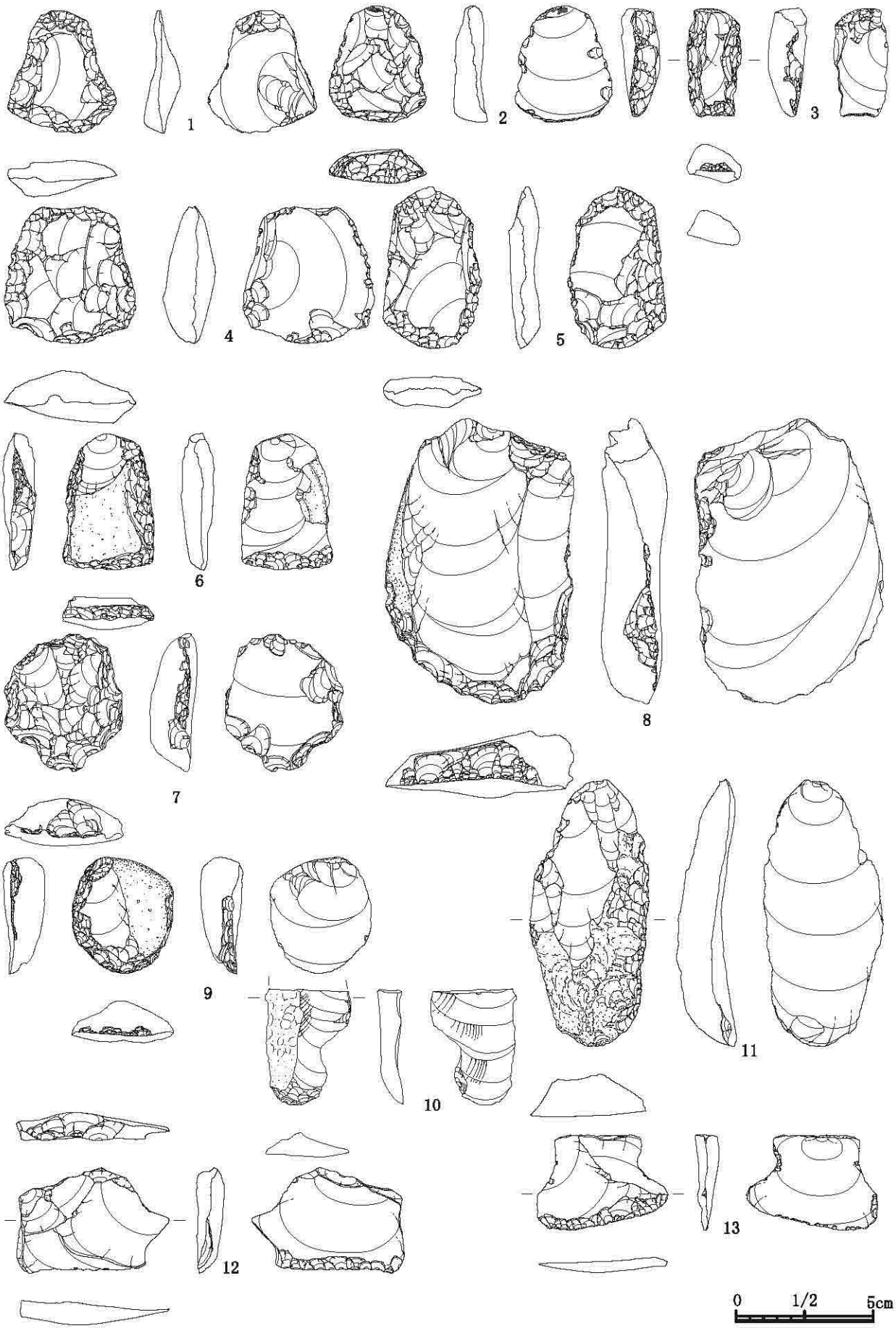


図 134　遺構外出土遺物（6）

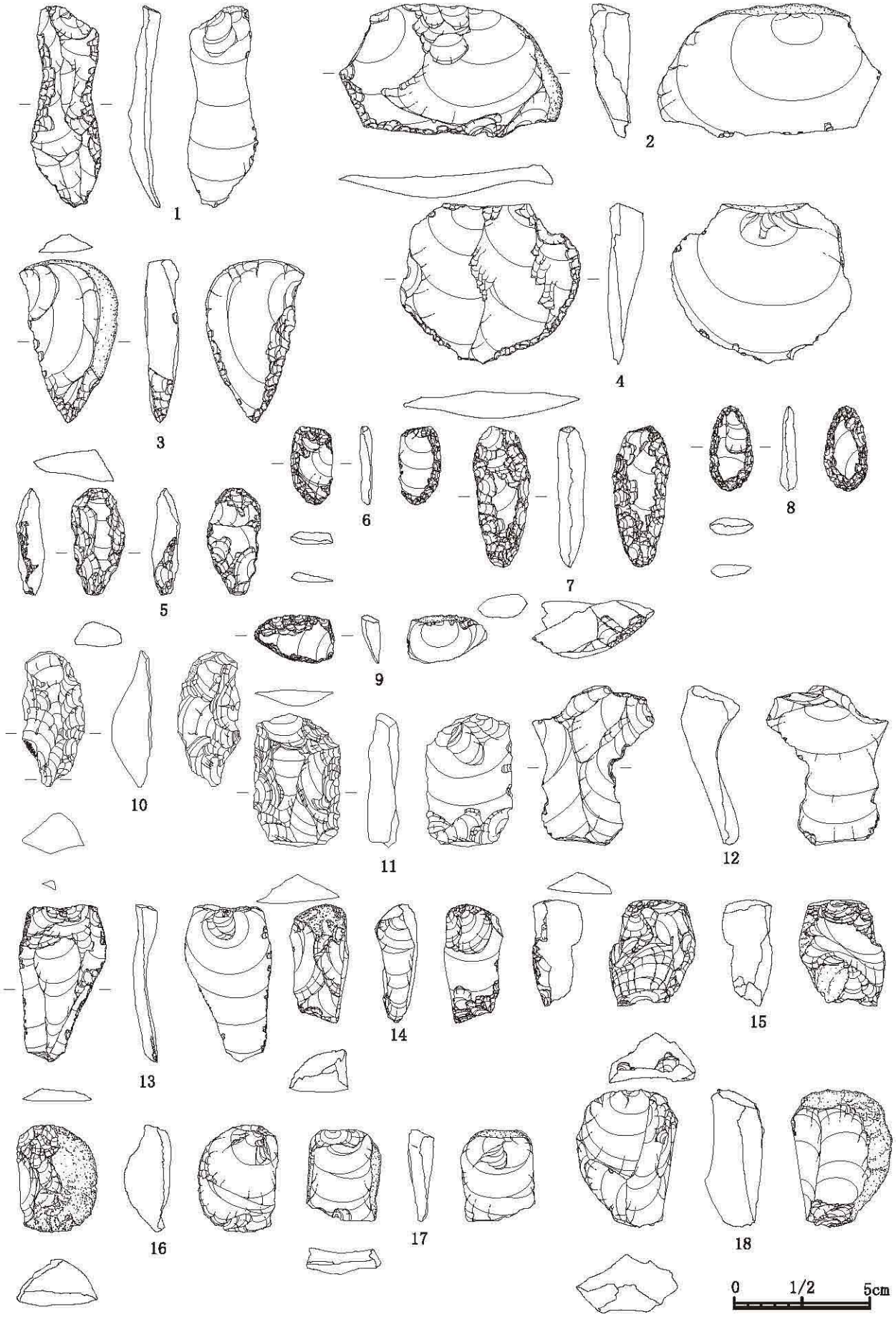


図 135　遺構外出土遺物（7）

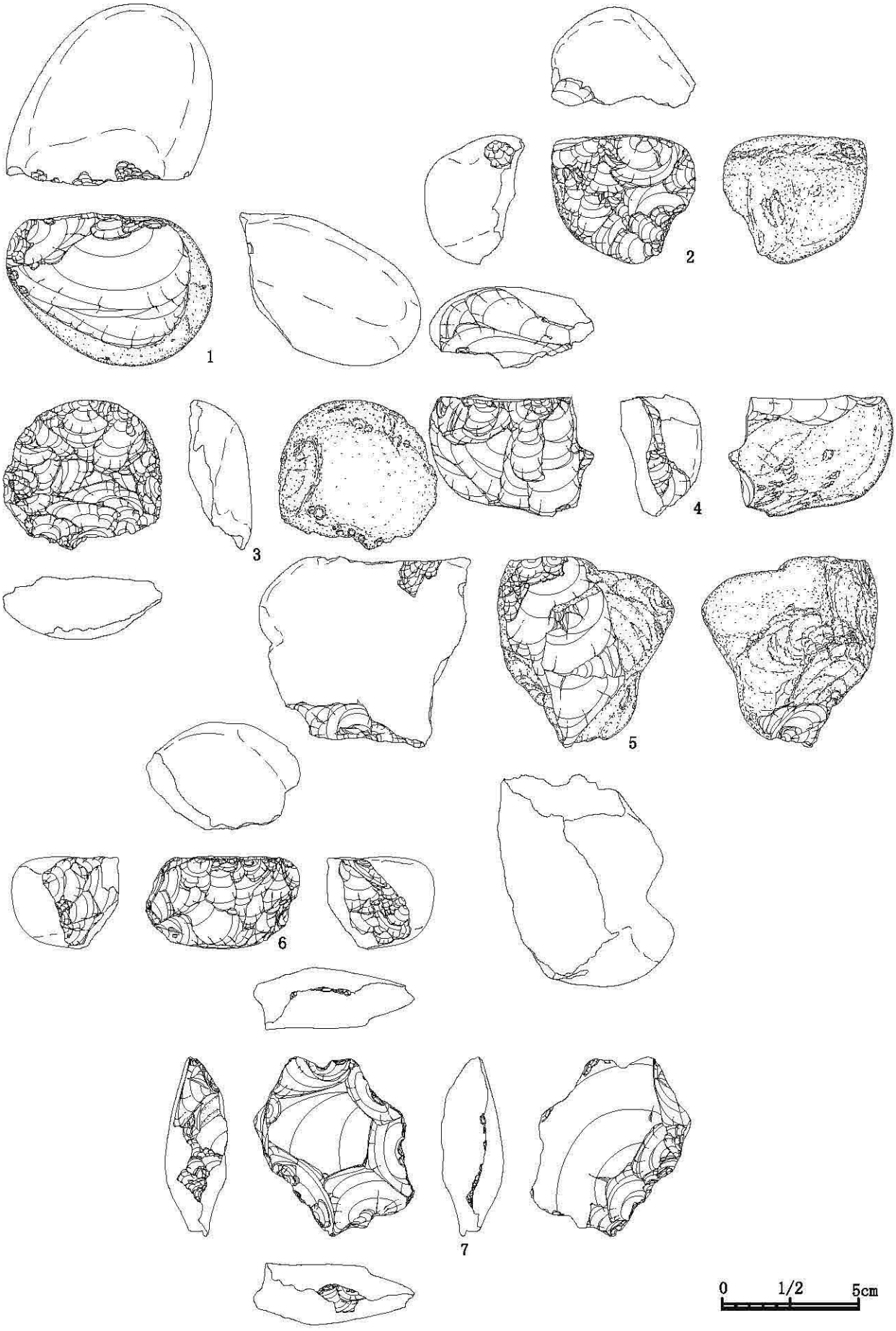


図 136　遺構外出土遺物（8）

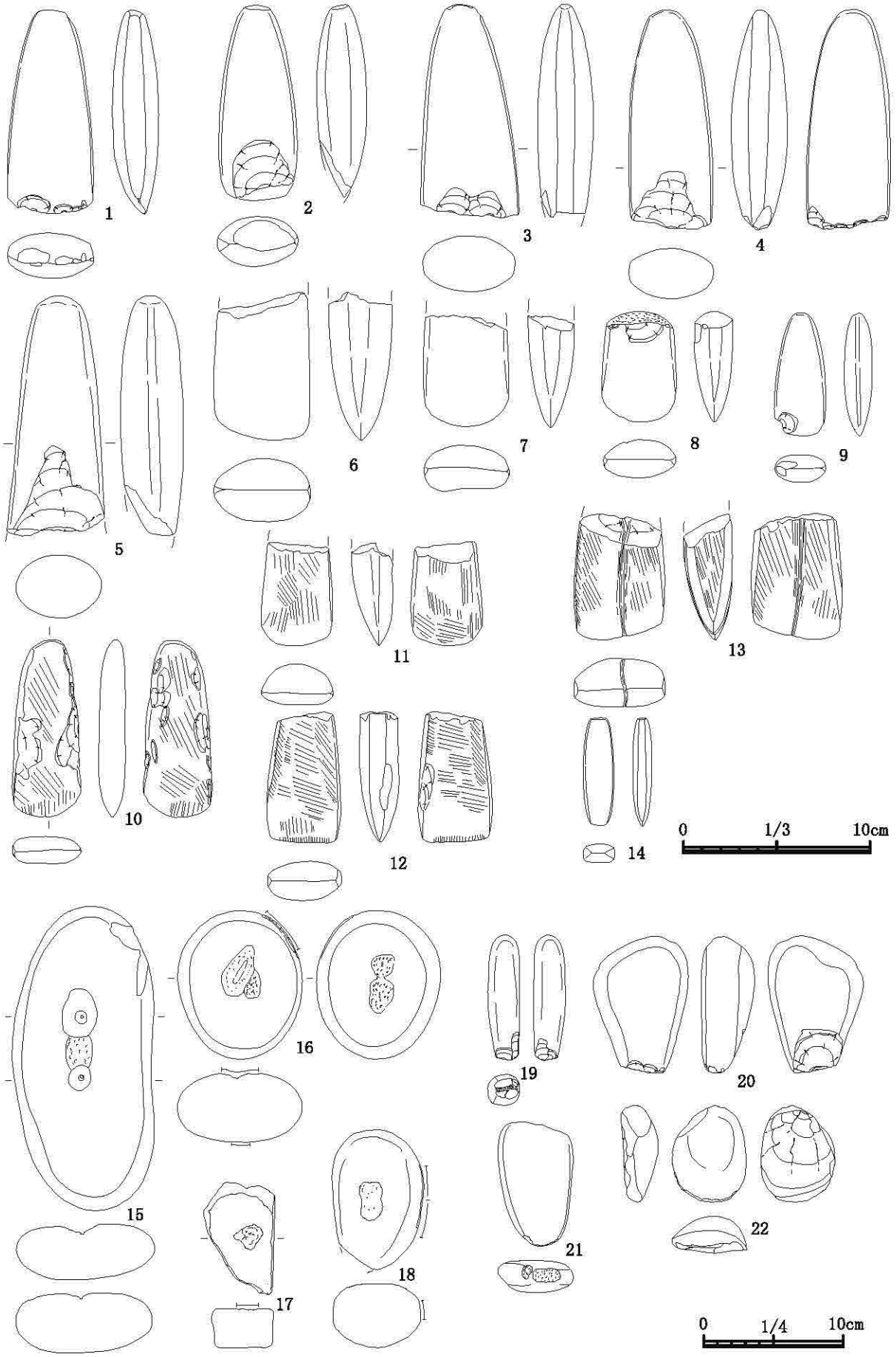


図 137　遺構外出土遺物（9）

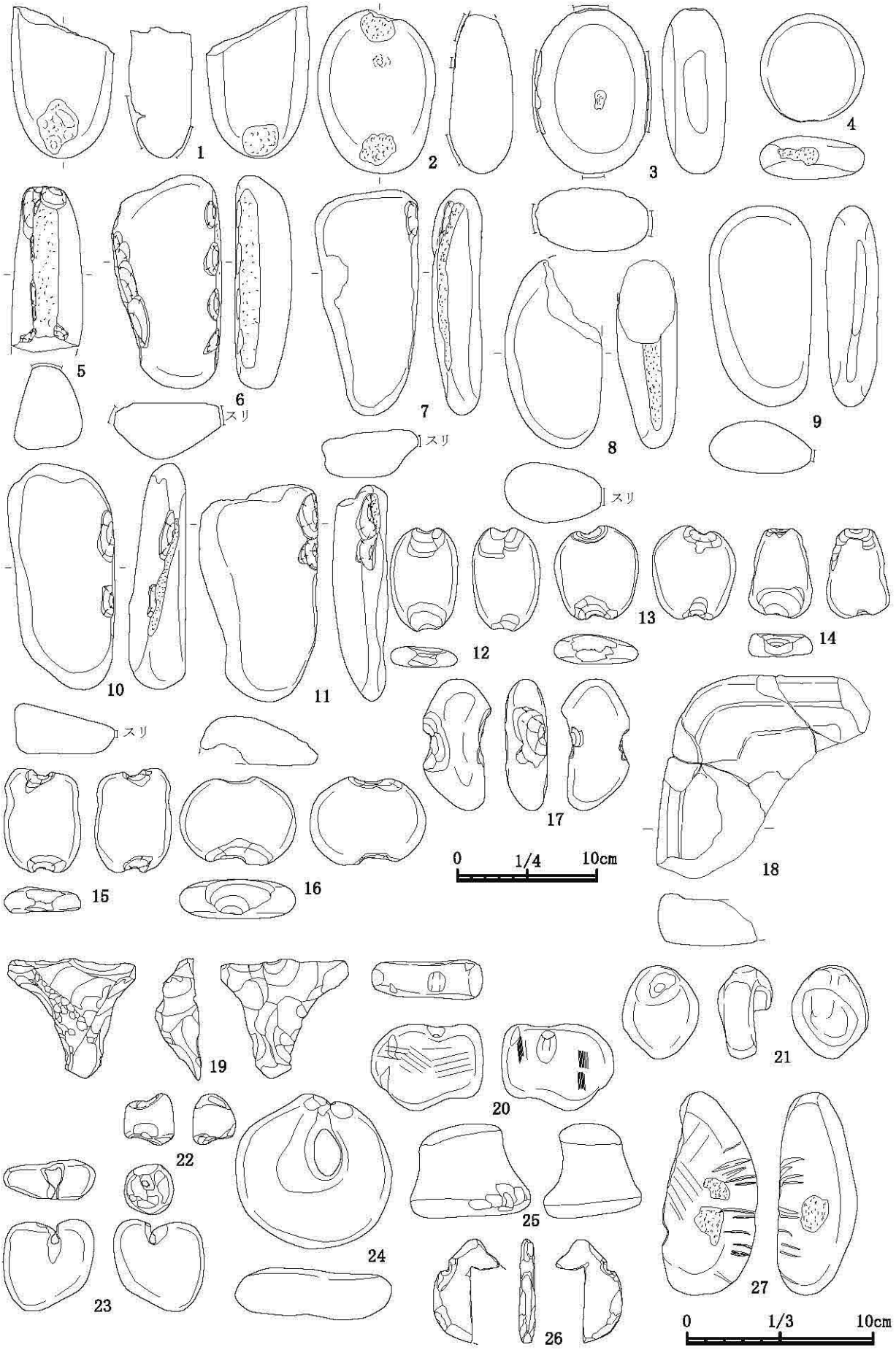


図 138　遺構外出土遺物（10）

金沢街道沢(1)遺跡出土土師器観察表(1)

図番号	整理番号	出土位置	層位	取上番号	分類	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整(文様)	内面調整(文様)	底面調整	備考
図12-1	H1	SI01	床面		X	a	口縁部～胴部	(10.0)	(3.5)		ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ、黒色処理		
図14-1	H11	SI02ｶﾏﾄﾞ	確認面		X	a	口縁部～底部	(14.9)	4.3	(7.7)	輪積痕、ﾅﾃﾞ、指押さえ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｼｺ圧痕	
図14-2	H2	SI02	堆積土		X	a	口縁部～底部	13.0	3.8	4.7	輪積痕、ﾖｺﾅﾃﾞ、指押さえ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｼｺ圧痕	
図14-3	H20	SI02	確認面		X	b	底部		(3.6)	(6.7)	輪積痕、指押さえ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｼｺ圧痕	
図15-1	H15	SI02ｶﾏﾄﾞ SI02	堆積土		X	b	口縁部～胴部	(15.0)	(17.1)		ﾖｺﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ		
図15-2	H14	SI02	堆積土		X	b	口縁部～胴部	(22.0)	(10.5)		ﾖｺﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図15-3	H12	SI02	堆積土		X	b	口縁部～胴部	(15.7)	(6.9)		ﾖｺﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図16-3	H21	SI03a	確認面		X	a	口縁部～底部	(10.8)	3.8	(5.2)	ﾖｺﾅﾃﾞ、指頭圧痕	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｼｺ圧痕？	
図16-4	H7	SI03a	堆積土		X	b	胴部～底部		(4.1)	7.1	輪積痕、ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｼｺ圧痕	
図16-5	H17	SI03a	確認面		X	b	胴部～底部		(5.3)	(6.7)	ｹｽﾞﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｼｺ圧痕	
図16-6	H18	SI03a	確認面		X	b	底部		(5.2)	(8.2)	ｹｽﾞﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図16-7	H8	SI03a SI02	堆積土		X	b	胴部～底部		(10.3)	(8.0)	ｹｽﾞﾘ	輪積痕、ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｼｺ圧痕	
図17-1	H5	SI03b	堆積土		IX	a	口縁部～底部	10.9	4.7		ﾐｶﾞｷ　沈線、ｹｽﾞﾘ	ﾐｶﾞｷ、黒色処理		
図17-2	H4	SI03b	堆積土		IX	a	口縁部～底部	(11.7)	(5.6)		ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	ﾐｶﾞｷ、黒色処理		段有する
図17-3	H6	SI03b SI02 SI14　古期	堆積土 掘方		IX	a	口縁部～底部	(14.4)	(3.8)		ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	ﾐｶﾞｷ、黒色処理		段有する
図17-4	H10	SI03b	確認面		IX	a	口縁部～胴部	(15.0)	(4.5)		ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ、黒色処理		段有する
図17-5	H3	SI03b	堆積土		IX	a	口縁部～底部	(14.8)	(4.1)		ﾖｺﾅﾃﾞ、沈線、ﾊｹﾒ	ﾐｶﾞｷ、黒色処理		
図17-6	H16	SI03b	堆積土		IX	b	口縁部～胴部	(16.8)	(7.8)		ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ？		
図17-7	H19	SI03b SI04	堆積土		IX	球胴甕	口縁部～底部	(15.4)	31.3	6.6	ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ		
図20-1	H22	SI04	掘方		X	b	胴部～底部		(15.9)	7.1	ｹｽﾞﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図21-1	H26	SI05	堆積土		IX	a	底部		(2.79)	7.0	沈線、ﾊｹﾒ	ﾐｶﾞｷ、黒色処理		
図21-2	H140	SI05	堆積土		IX	b	口縁部	(20.6)	(5.9)		ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ、沈線	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ		炭化物付着
図21-3	H24	SI05煙道部	堆積土		IX	b	胴部		(15.6)		ﾊｹﾒ	ﾊｹﾒ		
図21-4	H23	SI05煙道部	堆積土		IX	b	胴部～底部		(8.8)	(7.6)	ﾊｹﾒ	ﾊｹﾒ		
図21-5	H25	SI05	確認面		IX	b	底部		(4.6)	6.2	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ		
図22-1	H27	SI06SK01	堆積土		X	b	口縁部～底部	13.5	13.4	6.6	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ	木葉痕	外面に被熱剥落
図22-2	H28	SI06	確認面		X	b	底部		(4.8)	(9.0)	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図23-1	H133	SI07 IIL-102	堆積土 II層		IX	a	底部		(2.6)	4.6	ﾐｶﾞｷ、沈線	ﾐｶﾞｷ、黒色処理		
図23-2	H31	SI07	確認面 堆積土		IX	b	口縁部～胴部	(11.0)	(7.0)		ﾖｺﾅﾃﾞ、沈線、ﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図23-3	H30	SI07	床面	P-1	IX	球胴甕	胴部～底部		(18.0)	6.8	輪積痕、ﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図23-4	H33	SI07	床面	P-1	IX	高坏	底部		(2.7)		ﾐｶﾞｷ、沈線	ﾐｶﾞｷ		
図26-1	H34	SI08	堆積土		IX	a	口縁部～底部	(10.2)	3.8	3.0	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ、黒色処理		段有する
図26-2	H35	SI08ｶﾏﾄﾞ2	床面		IX	a	口縁部～底部	11.7	4.6	6.5	ﾐｶﾞｷ、沈線	ﾐｶﾞｷ、黒色処理		
図26-3	H36	SI08	堆積土	P-6	IX	a	口縁部～底部	(13.0)	4.5	5.0	ﾐｶﾞｷ、ﾊｹﾒ	ﾐｶﾞｷ、黒色処理		
図26-4	H37	SI08	床面 堆積土	P-5	IX	a	口縁部～底部	14.9	5.1	6.0	ﾐｶﾞｷ、ﾊｹﾒ	ﾐｶﾞｷ、黒色処理		
図26-5	H38	SI08	床面	P-4	IX	a	口縁部～底部	(14.6)	5.3	4.8	ﾖｺﾅﾃﾞ、沈線、ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ、黒色処理		
図27-1	H50	SI08ｶﾏﾄﾞ2 SI08	床面 床面 堆積土	P-2、3	IX	b	口縁部～胴部	21.0	(28.4)		ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ		
図27-2	H46	SI08ｶﾏﾄﾞ2 SI08	床面 堆積土	P-1	IX	b	口縁部～胴部	20.2	29.6	7.1	ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ、沈線	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾐｶﾞｷ、ﾊｹﾒ		
図27-3	H49	SI08	床面	P-1、2	IX	b	口縁部～胴部	17.8	(21.6)		ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ、沈線	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ？		
図27-4	H45	SI08	床面	P-1	IX	b	口縁部～胴部	20.0	(30.1)		ﾖｺﾅﾃﾞ、沈線、ﾊｹﾒ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾐｶﾞｷ、ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図27-5	H48	SI08ｶﾏﾄﾞ2 SI08	床面	P-3	IX	b	口縁部～胴部	20.4	(15.9)		沈線、ﾊｹﾒ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ、ﾐｶﾞｷ		
図28-1	H114	SI08	堆積土	P-8	IX	b	底部		(5.2)	(6.0)	ﾊｹﾒ	ﾍﾗﾅﾃﾞ		被熱による剥落
図28-2	H53	SI08ｶﾏﾄﾞ SI08	堆積土 堆積土	P-4	IX	b	胴部～底部		(9.6)	7.2	ﾊｹﾒ	輪積痕	ﾊｹﾒ	
図28-3	H47	SI08	床面 堆積土	P-3	IX	球胴甕	口縁部～底部	15.4	25.2	7.1	ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ、沈線、ﾐｶﾞｷ	ﾊｹﾒ		
図28-5	H51	SI08	確認面		IX	a	口縁部～底部	(10.6)	4.3	(5.4)	輪積痕、ﾖｺﾅﾃﾞ、指押さえ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｼｺ圧痕？	
図28-6	H39	SI08	堆積土		IX	b	底部		(3.4)	(7.9)	ｹｽﾞﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｼｺ圧痕	41と同一か
図28-7	H55	SI08 IIV-112	堆積土 II層		IX	b	胴部～底部		(10.6)	8.2	ｹｽﾞﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｼｺ圧痕	
図28-8	H52	SI08	確認面		IX	把手付土器	把手部				ﾅﾃﾞ			
図30-1	H62	SI09	床面	P-1	IX	a	口縁部～底部	14.6	5.5	6.0	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ、黒色処理		段有する
図30-2	H61	SI09	堆積土		IX	a	口縁部～底部	16.6	5.7	6.1	ﾖｺﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ	ﾐｶﾞｷ、黒色処理		段有する
図30-3	H63	SI09	床面	P-3	IX	a	口縁部～底部	7.0	2.7	2.8	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ、黒色処理		段有する
図30-4	H60	SI09	床面	P-4	IX	b	口縁部～胴部	23.4	27.9		ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ、沈線、ﾐｶﾞｷ	ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾐｶﾞｷ		
図30-5	H58	SI09	確認面		IX	b	口縁部～胴部	(12.0)	(9.4)		ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ、ﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾐｶﾞｷ		
図30-6	H59	SI09	床面	P-2	IX	b	胴部～底部		(8.5)	(7.4)	ﾊｹﾒ	ﾊｹﾒ、ﾐｶﾞｷ		
図30-7	H56	SI09	堆積土		IX	球胴甕	胴部～底部		(8.0)	7.0	ﾐｶﾞｷ	輪積痕、ﾍﾗﾅﾃﾞ？		
図30-8	H57	SI09	堆積土		IX	球胴甕	胴部～底部		(9.0)	7.6	ﾐｶﾞｷ	輪積痕、ﾅﾃﾞ		
図32-1	H66	SI10	床面	P-1	X	a	口縁部～底部	(12.4)	5.1	3.2	輪積痕、指押さえ	ﾖｺﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｼｺ圧痕	
図32-2	H65	SI10	堆積土		X	a	口縁部～底部	(11.6)	4.0	(6.2)	輪積痕、指押さえ	ﾖｺﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｼｺ圧痕	
図32-3	H64	SI10	堆積土		X	b	口縁部～胴部	(16.6)	(8.0)		ﾖｺﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ	ﾖｺﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図33-1	H68	SI11	5層 堆積土	P-1	IX	a	口縁部～底部	16.5	5.5	4.0	ﾐｶﾞｷ、ｹｽﾞﾘ	ﾐｶﾞｷ、黒色処理		段有する
図33-2	H69	SI11	床面 堆積土	P-2	IX	a	口縁部～底部	(14.7)	5.1	7.0	ﾐｶﾞｷ、ｹｽﾞﾘ	ﾐｶﾞｷ、黒色処理		段有する
図36-1	H70	SI12	床面	P-3	X	a	口縁部～底部	4.7	14.2	7.8	輪積痕、ﾖｺﾅﾃﾞ、指押さえ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｼｺ圧痕	
図36-2	H76	SI12ｶﾏﾄﾞ	8層	P-4	X	a	口縁部～胴部	(16.0)	(4.6)		輪積痕、指押さえ、ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図36-3	H74	SI12ｶﾏﾄﾞ	2層		X	b	口縁部～胴部	(14.0)	(8.2)		指頭圧痕、ｹｽﾞﾘ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図36-4	H73	SI12ｶﾏﾄﾞ	4層		X	b	口縁部～胴部	(21.2)	(5.9)		ﾖｺﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ		粘土付着
図36-5	H72	SI12ｶﾏﾄﾞ SI12	2層 堆積土		X	b	口縁部～胴部	(21.0)	(6.0)		ﾖｺﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図36-6	H75	SI12	床面 貼床	P-2	X	b	胴部～底部		(7.2)	7.0	ｹｽﾞﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	砂底	煤付着
図38-1	H77	SI13ｶﾏﾄﾞ SI12	8層 堆積土		X	b	口縁部～胴部		(17.2)		ﾖｺﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図40-1	H78	SI14	堆積土		X	b	口縁部～胴部	(24.6)	(9.9)		ﾖｺﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図40-2	H83	SI14ｶﾏﾄﾞ SI14	確認面 堆積土		X	b	口縁部～胴部	(21.6)	(12.1)		ﾖｺﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ		粘土付着
図41-1	H79	SI14	堆積土		X	b	胴部～底部		(6.7)	(8.0)	ｹｽﾞﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｼｺ圧痕	
図41-2	H82	SI14	堆積土		X	b	口縁部～胴部		(6.8)	(6.9)	ｹｽﾞﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図41-3	H86	SI14	床面 堆積土		X	b	胴部～底部		(5.4)	(8.0)	ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	砂底	
図41-4	H88	SI14	堆積土		X	b	底部		(2.1)	10.5	ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	砂底	
図42-1	H111	SI19	堆積土		X	b	胴部～底部		(5.8)	(5.6)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切	
図42-2	H112	SI19	堆積土		X	b	口縁部～胴部		(8.2)		ﾖｺﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図42-3	H113	SI19	堆積土		X	b			(3.2)	(7.04)	ｹｽﾞﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｼｺ圧痕？	
図43-1	H80	SI20	堆積土		IX	高坏	口縁部～底部		(5.2)	4.5	沈線、ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ、黒色処理		

金沢街道沢(1)遺跡出土土師器観察表(2)

図番号	整理番号	出土位置	層位	取上番号	分類	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整(文様)	内面調整(文様)	底面調整	備考
図43-2	H81	SI20	堆積土		Ⅸ	b	口縁部～胴部		(6.8)		ﾊｹﾒ、沈線	ﾊｹﾒ、ﾐｶﾞｷ		
図43-3	H85	SI20 SI20ｶﾏﾄﾞ SI14	堆積土 確認面 堆積土		Ⅸ	b	口縁部～胴部		(18.7)		ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ 沈線、ﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ		
図46-1	H135	SI15ｶﾏﾄﾞ	2層	P-10	Ⅹ	a	底部		(2.0)	(5.2)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切	
図46-2	H98	SI15ｶﾏﾄﾞ	2層 堆積土	P-14	Ⅹ	a	口縁部～底部	(14.3)	5.7	(6.70)	輪積痕、ﾖｺﾅﾃﾞ、指押さえ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾑｼﾛ圧痕	
図46-3	H96	SI15ｶﾏﾄﾞ	2層 堆積土	P-9	Ⅹ	b	口縁部～胴部	(25.2)	(16.7)		ﾖｺﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図47-1	H93	SI15ｶﾏﾄﾞ	8層 堆積土	P-6	Ⅹ	b	口縁部～胴部	(21.0)	(18.2)		ﾖｺﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図47-2	H97	SI15ｶﾏﾄﾞ SI15ｶﾏﾄﾞ芯	2層 10層	P-8、10	Ⅹ	b	口縁部～胴部	(26.0)	(20.2)		ﾖｺﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図47-3	H92	SI15ｶﾏﾄﾞ SI15SK01 SI15	堆積土 堆積土 堆積土		Ⅹ	b	口縁部～胴部	14.1	(6.6)		ﾖｺﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図47-4	H90	SI15ｶﾏﾄﾞ SI15ｶﾏﾄﾞ芯 SI15SK01 SI15	2・6層 10層 堆積土 堆積土 堆積土	P-11	Ⅹ	b	胴部		(21.1)		ｹｽﾞﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図47-5	H91	SI15ｶﾏﾄﾞ SI15SK01 SI15	2層 堆積土 堆積土	P-13	Ⅹ	b	胴部～底部		(11.9)	8.0	ｹｽﾞﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図47-6	H89	SI15	堆積土		Ⅹ	b	底部		(3.9)	(6.1)	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図47-7	H95	SI15	床面	P-1	Ⅹ	b	口縁部～底部	9.0	6.6	4.7	ﾖｺﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ	
図49-1	H100	SI16	床面	P-1	Ⅸ	b	口縁部～底部	17.4	17.0	6.9	沈線、ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	ﾊｹﾒ	内外面煤付着
図49-2	H102	SI16	床面 堆積土	P-3	Ⅸ	b	口縁部～底部	15.6	12.0	7.2	沈線、ﾊｹﾒ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図49-3	H101	SI16	堆積土		Ⅸ	b	口縁部～底部	12.9	(8.5)		輪積痕、ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ		内外面：煤付着
図49-4	H103	SI16 ⅡY-117	確認面 堆積土 Ⅱ層		Ⅸ	b	口縁部～底部	19.0	14.8	7.4	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ		内面：煤付着
図49-5	H106	SI16	床面 堆積土	P-4	Ⅸ	b	口縁部～底部	20.6	31.0	8.0	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	ﾊｹﾒ、ﾐｶﾞｷ		
図49-6	H105	SI16	床面 堆積土	P-2、4	Ⅸ	b	胴部～底部		(19.3)	7.6	ｹｽﾞﾘ	ﾊｹﾒ、ﾐｶﾞｷ		
図49-7	H99	SI16	床面 堆積土	P-2	Ⅸ	b	胴部～底部		(9.3)	(6.6)	ｹｽﾞﾘ	輪積痕		
図49-8	H104	SI16	床面	P-2	Ⅸ	高坏	口縁部～底部	(9.8)	5.0	3.8	ﾖｺﾅﾃﾞ、沈線	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図50-1	H107	SI17	堆積土		Ⅹ	b	底部		(2.5)	(7.1)	ｹｽﾞﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図52-1	H110	SI18埋甕 SI18	床面 堆積土	P-1	Ⅹ	b	口縁部～底部	25.6	28.2	8.8	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図52-2	H108	SI18埋甕 SI18	床面 堆積土	P-1	Ⅹ	b	口縁部～胴部	(21.8)	(22.8)		ﾖｺﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図52-3	H109	SI18 SI18SK01	堆積土 堆積土		Ⅹ	b	口縁部～胴部		(16.0)		ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ		
図53-3	H116	SK02	堆積土		Ⅹ	b	底部		(4.5)	(6.0)	ｹｽﾞﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾑｼﾛ圧痕	
図54-1	H117	SK12	堆積土		Ⅹ	a	口縁部～底部	(13.2)	5.0	5.8	輪積痕、指押さえ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾑｼﾛ圧痕	
図64-2	H118	SK12	堆積土		Ⅸ	a	口縁				ﾐｶﾞｷ、沈線、ﾊｹﾒ	ﾐｶﾞｷ、黒色処理		
図58-1	H121	SD01	堆積土		Ⅹ	a	口縁部～底部	(12.0)	4.4	6.0	輪積痕、指押さえ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾑｼﾛ圧痕	ⅡT-103
図58-2	H123	SD01	堆積土		Ⅹ	a	口縁部～底部	13.3	6.1	6.8	輪積痕、ﾖｺﾅﾃﾞ、指押さえ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾑｼﾛ圧痕	ⅡU-108、110
図58-3	H120	SD01	堆積土		Ⅹ	b	胴部～底部		(4.6)	(7.1)	輪積痕	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾑｼﾛ圧痕	ⅡL-100
図58-4	H126	SD01	堆積土		Ⅹ	b	底部		(2.7)	8.3	ｹｽﾞﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾑｼﾛ圧痕	ⅡV-112
図58-5	H125	SD01	堆積土		Ⅹ	b	胴部～底部		(8.3)	(9.0)	ｹｽﾞﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾑｼﾛ圧痕	ⅡV-105
図58-6	H124	SD01	堆積土		Ⅹ	b	口縁部～底部	27.7	28.8	(7.9)	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾅﾃﾞ		ⅡU-117
図62-1	H131	SP60	堆積土		Ⅸ	a	口縁				ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ、黒色処理		
図65-1	H134	ⅡT-113	Ⅱ層		Ⅸ	b	口縁部～胴部				ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ、沈線	ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ		

金沢街道沢(1)遺跡出土須恵器観察表

図番号	整理番号	出土位置	層位	取上番号	分類	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整(文様)	内面調整(文様)	備考
図20-2	S3	SI04Pit14	堆積土		Ⅺ	c	胴部				平行叩き目	ﾅﾃﾞ	内面に黒色範囲　転用硯？
図21-6	S1	SI05	堆積土		Ⅺ	a	口縁部				ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
図21-7	S2	SI05	堆積土		Ⅺ	a	口縁部	(15.4)	(2.7)		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
図50-2	S4	SI17	堆積土		Ⅺ	b	底部				平行叩き目	ﾅﾃﾞ	
図58-7	S5	SD01	堆積土		Ⅺ	b	肩部				ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ヘラ書き「夷」の逆字？ ⅡU-109
図58-8	S6	SD01	堆積土		Ⅺ	c	胴部				平行叩き目	ﾅﾃﾞ	ⅡV-113

金沢街道沢(1)遺跡出土土製品観察表

図番号	整理番号	出土位置	層位	取上番号	分類	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	外面調整	内面調整	備考
図15-4	D3	SI02ｶﾏﾄﾞ	堆積土	支脚-1	Ⅹ	土製支脚	(21.6)	5.6		344.2	輪積痕、指頭圧痕	輪積痕、ﾅﾃﾞ	
図15-5	D2	SI02ｶﾏﾄﾞ SI02	確認面 堆積土	ｶﾏﾄﾞ支脚-2	Ⅹ	土製支脚	(14.3)	7.8		283.6	輪積痕、指頭圧痕	輪積痕、指頭圧痕	
図16-6	D4	SI02 SI02pit6	堆積土		Ⅹ	土製支脚	(15.2)	5.3	5.0	330	輪積痕、ﾅﾃﾞ		
図15-7	D1	SI02	床面		Ⅹ	土製支脚	19.7	6.2	5.5	366.1	ﾅﾃﾞ		被熱痕、９面に面取り
図16-8	D21	SI02	堆積土		Ⅹ	紡錘車	5.0	5.0	2.3	61.6	ﾐｶﾞｷ		
図17-8	D24	SI03b	確認面		Ⅸ	土錘	5.1	2.4	2.4	28.6	ﾕﾋﾞﾅﾃﾞ		
図30-9	D22	SI09	確認面		Ⅸ	紡錘車	3.8	3.8	2.5	33.7			
図32-4	D7	SI10	堆積土		Ⅹ	土製支脚	(10.2)	5.8		118.9	輪積痕、指頭圧痕	輪積痕、ﾅﾃﾞ	
図32-6	D8	SI10	床面		Ⅹ	羽口	(21.7)	8.0	6.4	670.8	ﾅﾃﾞ		体部、被熱痕、溶着物付着
図36-7	D9	SI12ｶﾏﾄﾞ	床面	ｶﾏﾄﾞ土製品-1	Ⅹ	土製支脚	(9.4)			140.5	輪積痕、指頭圧痕	輪積痕、指頭圧痕	
図36-8	D10	SI12	床面	土製品-1	Ⅹ	土製支脚	(7.5)	4.2	4.5	115.7	輪積痕、指頭圧痕	輪積痕、指頭圧痕	
図36-9	D11	SI12SK02	底面		Ⅹ	土製支脚	(5.0)	4.2		57.8	輪積痕、指頭圧痕	輪積痕、指頭圧痕	
図36-10	D23	SI12	床面		Ⅹ	紡錘車	5.8	5.8	2.6	109.8	ﾐｶﾞｷ		
図36-11	D25	SI12	堆積土		Ⅹ	土錘	3.7	2.5	2.4	20.0	ﾕﾋﾞﾅﾃﾞ		孔径0.9cm
図36-12	D26	SI12	堆積土		Ⅹ	土錘	5.8	1.7	1.6	13.9	ﾕﾋﾞﾅﾃﾞ		孔径0.6cm
図38-2	D12	SI13	堆積土		Ⅹ	土製支脚				18.5			
図38-3	D27	SI13	堆積土		Ⅹ	土錘	4.8	1.7	1.6	11.6	ﾕﾋﾞﾅﾃﾞ		孔径0.6cm
図41-5	D13	SI14	堆積土		Ⅹ	土製支脚	(5.0)	(5.3)		67.2	輪積痕、指頭圧痕	輪積痕、指頭圧痕	
図47-8	D16	SI15ｶﾏﾄﾞ	7層		Ⅹ	土製支脚	(13.1)	6.7		312.0	輪積痕、ﾅﾃﾞ	輪積痕	土製品-2
図47-9	D17	SI15ｶﾏﾄﾞ	火床面		Ⅹ	土製支脚	(14.0)	7.0	7.0	311.3	輪積痕、指頭圧痕	輪積痕、指頭圧痕	土製品-3
図47-10	D15	SI15ｶﾏﾄﾞ	7層	土製品-1	Ⅹ	羽口	(19.4)	(9.8)	8.5	673.7			内径4.2cm
図58-9	D28	SD01	堆積土		Ⅹ	土錘	5.3	1.7	1.6	12.8	ﾕﾋﾞﾅﾃﾞ		孔径0.5cm　ⅡU-106
図66-2	D33	ⅢE-112	Ⅱ層		Ⅹ	土製支脚	(5.8)	5.8		60.8	輪積痕、指頭圧痕	輪積痕、指頭圧痕	
図65-3	D29	ⅡL-104	Ⅱ層		Ⅹ	土錘	4.4	2.3	1.9	17.2	ﾕﾋﾞﾅﾃﾞ		孔径0.6cm
図65-4	D30	ⅡM-102	Ⅱ層		Ⅹ	土錘	4.4	2.2	1.9	16.7	ﾕﾋﾞﾅﾃﾞ		孔径0.6cm

金沢街道沢(1)遺跡出土縄文土器観察表

図番号	整理番号	出土位置	層位	取上番号	分類	器種	部位	外面調整(文様)	内面調整(文様)	備考
65-1	J31	SK13	堆積土		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（V字）横回転	ミガキ	胎土：繊維、砂
図6 -1	J4	ⅡO-114	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（V字）横回転	ミガキ	内面炭付着　原体幅2.7mm、φ9.2mmの棒　胎土：繊維
図64-2	J26	SI14	堆積土		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（V字）横回転	ミガキ	胎土：繊維
図64-3	J44	ⅡV-111	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（V字）横回転	ミガキ	胎土：繊維、砂
図64-4	J28	SI15	確認面		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（V字）横回転	ミガキ	胎土：繊維
図64-5	J37	ⅡO-115	Ⅲ層		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（V字）横回転	ミガキ	胎土：繊維、砂
図64-6	J15	ⅡY-117	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（V字）横回転	ミガキ	胎土：繊維
図64-7	J24	SI14	堆積土		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（V字）横回転	ミガキ？	胎土：繊維
図64-8	J65	ⅡX-111	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（V字）横回転	ミガキ	胎土：繊維、砂
図64-9	J49	ⅡX-111	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（V字）横回転～斜回転	ミガキ	胎土：繊維
図64-10	J27	SI15	確認面		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（V字）横回転？	ミガキ	胎土：繊維
図64-11	J41	ⅡT-109	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（V字）横回転	ミガキ	胎土：繊維、砂
図64-12	J54	ⅢA-110	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	底部付近	押型（V字）横回転	ミガキ	胎土：繊維、砂
図64-13	J29	SI16	確認面		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（V字）横回転→沈線	ミガキ	胎土：繊維、砂
図64-14	J16	ⅢE-117	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（V字）横回転→沈線	ミガキ	胎土：繊維、砂多い
図64-15	J59	ⅡQ-114	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（V字）横回転→沈線	ミガキ	胎土：繊維、砂
図64-16	J19	SI01	堆積土		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（V字）横回転→沈線	ミガキ	胎土：繊維、砂
図64-17	J58	ⅢE-117	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（V字）横回転→沈線		
図64-18	J12	ⅡY-110	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（V字）横回転→LR横回転→沈線	ミガキ	胎土：繊維、砂
図64-19	J7	ⅡS-110	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（平行四辺形）横回転	ミガキ	胎土：繊維
図64-20	J8	ⅡT-110	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（平行四辺形）横回転	ミガキ	胎土：繊維
図64-21	J34	SD01	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（平行四辺形）横回転	ミガキ	胎土：繊維、砂
図64-22	J42	ⅡU-108	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（平行四辺形）横回転→平行沈線	ミガキ	胎土：繊維、砂
図64-23	J64	ⅡU-108	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（平行四辺形）横回転→平行沈線	ミガキ	胎土：繊維、砂
図64-24	J21	SI08ｶｸﾏﾄﾞ	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（平行四辺形）横回転→平行沈線	ミガキ	胎土：繊維
図64-25	J38	ⅡP-109	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（菱形）横回転	ミガキ	胎土：繊維
図64-26	J51	ⅡY-112	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	胴部	押型（格子目）→沈線	ミガキ	胎土：繊維
図64-27	J60	ⅡR-115	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	底部付近	ミガキ	ナデ？	胎土：繊維、砂
図64-28	J67	ⅢC-118	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	底部付近	ミガキ	ミガキ	胎土：繊維、砂
図64-29	J63	ⅡT-109	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	胴部	RL横	ミガキ	胎土：繊維、砂
図64-30	J62	ⅡT-110	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	胴部	LR・RL横回転	ミガキ	胎土：繊維、砂
図64-31	J46	ⅡW-111	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	胴部	LR・RL横回転	ミガキ	胎土：繊維、砂
図64-32	J61	ⅡT-109	Ⅱ層		Ⅰb	深鉢	胴部	RL横回転→平行沈線	ミガキ	胎土：繊維、砂
図64-33	J10	ⅡW-112	Ⅱ層		Ⅰc	深鉢	口縁部～胴部	口唇部：沈線、口縁部：横沈線、胴部：貝殻腹縁圧痕	ミガキ	胎土：繊維、砂粒
図64-34	J36	ⅡN-113	Ⅲ層		Ⅰc	深鉢	口縁部付近	貝殻腹縁圧痕	ミガキ	胎土：繊維、砂粒
図64-35	J30	SK02	堆積土		Ⅰc	深鉢	口縁部付近	貝殻腹縁圧痕	ミガキ	胎土：繊維、砂粒
図64-36	J35	ⅡN-112	Ⅲ層		Ⅰc	深鉢	胴部	貝殻腹縁圧痕	ミガキ	胎土：繊維、砂粒
図64-37	J1	SI03	貼床		Ⅰc	深鉢	胴部	貝殻腹縁圧痕	ミガキ	胎土：繊維少、砂粒多
図64-38	J5	ⅡP-115	Ⅱ層		Ⅰc	深鉢	胴部	貝殻腹縁圧痕	ミガキ	胎土：繊維少、砂粒多
図64-39	J20	SI04ｶｸﾏﾄﾞ2	堆積土		Ⅰc	深鉢	胴部	貝殻腹縁圧痕		胎土：繊維、砂
図64-40	J40	ⅡS-109	Ⅱ層		Ⅰc	深鉢	胴部	貝殻腹縁圧痕	ミガキ	胎土：繊維、砂
図64-41	J66	ⅡX-113	Ⅱ層		Ⅰc	深鉢	胴部	ミガキ→隆線（上面に貝殻腹縁圧痕）	ミガキ	胎土：繊維、砂
図64-42	J52	ⅡY-112	Ⅱ層		Ⅱa	深鉢	胴部	RLR横回転	貝殻条痕	胎土：繊維多い
図64-43	J9	ⅡU-108	Ⅱ層		Ⅱa	深鉢	口縁部	口縁部：結節回転文横→横位沈線区画：隆帯		胎土：繊維多い
図64-44	J17	ⅢF-116	Ⅱ層		Ⅱb	深鉢	口縁部	口唇部：端部前面RL、口縁部：RLE痕、微隆帯：結節横、自条自巻RL斜回転	ミガキ	胎土：繊維多い
図64-45	J13	ⅡY-115	Ⅱ層		Ⅱb	深鉢	胴部	RL縦→平行沈線	ミガキ	胎土：砂粒多
図64-46	J11	ⅡX-111	Ⅱ層		Ⅱb	深鉢	胴部	RL縦→平行沈線（2本一対）	ミガキ	胎土：砂粒多
図64-47	J14	ⅡY-115	Ⅱ層		Ⅱb	深鉢	胴部	RL縦→平行沈線（2、3本一組）	ミガキ	外面：炭付着
図64-48	J18	トレンチa	堆積土		Ⅱc	深鉢	口縁部	口縁部：折り返し無文、RL縦回転→沈線、刺突、ミガキ消し	ミガキ。ヒレ状隆線	

金沢街道沢(1)遺跡出土石器観察表

図番号	整理番号	出土位置	層位	取上番号	器種	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
図15-9	R1	SI02	堆積土		O	凝灰岩	26.8	16.0	8.8	4400.0	磨り・敲き　サビ？付着
図15-10	R2	SI02	堆積土		O	細粒凝灰岩	19.1	10.3	9.5	2563.0	
図16-1	R4	SI02A	堆積土		Q？	安山岩	15.5	19.3	8.3	3200.0	
図16-2	R3	SI02A	堆積土		O	河口閃粒岩	13.4	12.8	7.8	1960.6	
図20-3	R6	SI04	掘方		S	珪質凝灰岩	7.8	(3.6)	2.6	68.3	
図28-4	R7	SI08ｶｸﾏﾄﾞ1	堆積土		S	流紋岩	14.0	8.6	6.3	794.2	
図32-7	R8	SI10	堆積土		S？	安山岩	(9.0)	6.7	4.2	360.1	
図32-8	R9、10	SI10	床面		O	河口閃粒岩	20.1	15.9	7.1	3385.0	
図36-13	R12	SI12ｶｸﾏﾄﾞ	床面		O	河口閃粒岩	8.7	6.4	3.1	290.6	1面使用
図36-14	R13	SI12	堆積土		S	凝灰岩	11.0	7.9	7.4	836.2	4面使用
図41-6	R19	SI14	堆積土		S	珪質凝灰岩	5.9	6.2	4.3	221.4	仕上げ砥石
図41-7	R14	SI14	堆積土		O	安山岩	12.8	(7.6)	3.4	371.0	1面使用
図41-8	R15	SI14	堆積土		O	流紋岩	13.3	9.0	9.5	1621.8	4面使用
図41-9	R18	SI14	堆積土		N	安山岩	10.8	8.3	4.3	503.9	側縁に敲き
図49-9	R21	SI16	堆積土		N	安山岩	13.0	6.0	4.2	404.1	
図52-4	R23	SI18	堆積土		S	安山岩	(10.0)	9.3	8.8	1022.9	長軸方向に敲き、それ以外は擦り
図55-2	R24	SK13	堆積土		O	安山岩	16.0	8.6	6.5	1036.8	長軸方向の両端に敲き、側面に擦り
図58-10	R28	SD01	堆積土		S	凝灰岩	11.7	11.2	9.0	1400.0	ⅡU-109
図58-11	R29	SD01	堆積土		S	凝灰岩	10.0	12.1	12.6	1000.0	荒砥石　ⅡU-109
図58-12	R26	SD01	堆積土		N、O	安山岩	8.1	5.4	3.7	233.4	1面使用　ⅡV-113
図58-13	R27	SD01	堆積土		O	安山岩	(7.6)	6.0	3.1	157.8	ⅡU-109
図67-8	R25	SD01	堆積土		L	緑色岩	10.3	5.7	1.9	148.9	ⅡU-105
図67-9	R22	SI18	堆積土		P	河口閃粒岩	6.2	7.5	1.8	131.6	長軸方向の両端に打欠
図67-10	R17	SI14	堆積土		P	凝灰岩	8.8	10.3	2.3	289.0	長軸方向の両端に打欠
図66-1	H42	SK02	堆積土		A	珪質頁岩	4.4	1.2	0.6	2.6	
図66-2	H29	SI14	確認面		B	珪質頁岩	5.2	2.29	0.84	10.2	
図66-3	H64	トレンチa	堆積土		C	珪質頁岩	6.6	3.35	0.9	20.5	
図66-4	H21	SI09	堆積土		E	珪質頁岩	4	2.66	0.89	9.8	
図66-5	H65	ⅡM-115	Ⅱ層		E	珪質頁岩	4.76	3.71	1.14	17.0	
図66-6	H69	ⅢB-111	Ⅱ層		E	珪質頁岩	7.0	4.04	1.12	40.8	
図66-7	H67	ⅡW-115	表採		E	珪質頁岩	6.68	4.38	1.46	44.7	
図66-8	H68	ⅡX-11	Ⅱ層		E	珪質頁岩	4.95	4.24	1.09	23.7	
図66-9	H66	ⅡW-112	Ⅱ層		E	珪質頁岩	3.35	3.1	0.7	8.6	
図66-10	H40	SK01	2層		不定形石器	珪質頁岩	4.05	2.12	0.84	6.0	
図66-11	H97	ⅡX-117	Ⅱ層		不定形石器	珪質頁岩	4.08	2.51	0.75	7.0	
図66-12	H95	ⅡX-113	Ⅱ層		不定形石器	珪質頁岩	4.2	3.06	0.52	5.7	
図66-13	H104	ⅢB-113	Ⅱ層		不定形石器	珪質頁岩	3.78	1.92	1.3	8.5	
図66-14	H90	ⅡW-111	Ⅱ層		不定形石器	珪質頁岩	5.89	3.07	0.99	13.9	
図66-15	H87	ⅡV-112	Ⅱ層		不定形石器	珪質頁岩	4.91	2.99	0.81	10.2	
図66-16	H80	ⅡR-110	Ⅱ層		不定形石器	珪質頁岩	2.12	4.3	1.16	7.8	
図67-1	H77	ⅡQ-114	Ⅱ層		不定形石器	珪質頁岩	4.69	4.37	1.26	19.5	
図67-2	H99	ⅡY-112	Ⅱ層		不定形石器	珪質頁岩	6.61	4.03	0.77	15.1	
図67-3	H70	ⅡN-108	Ⅱ層		不定形石器	珪質頁岩	7.17	4.61	0.16	37.8	
図67-4	H1	SI01	堆積土		不定形石器	珪質頁岩	8.27	4.88	1.42	45.6	
図67-5	H7	SI03	貼床		不定形石器	珪質頁岩	8.01	2.51	1.38	23.2	
図67-6	K7	ⅡS-109	Ⅱ層		I	黒曜石	1.95	1.7	0.4	0.7	
図67-7	K31	ⅢE-104			K	黒曜石	2.2	4.5	2.2	0.8	

金沢街道沢(1)遺跡出土鉄製品観察表

図番号	整理番号	出土位置	層位	取上番号	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
図20-4	Fe-2	SI04	掘方		鉄刀	(14.7)	3.1	0.5	
図32-6	Fe-5	SI10	堆積土		鉄鏃	(6.9)	0.8	0.8	
図33-3	Fe-2	SI11	堆積土		刀子	(3.6)	0.9	0.3	
図53-1	Fe-3①	SK01	1層		刀装具	6.1	2.8	0.4	
図53-2	Fe-3②	SK01	1層		筒状鉄製品	4.6	1.6	1.6	

新沢(1)遺跡出土土器観察表(1)

図番号		整理番号	遺構名	出土位置・層位	取上番号	分類	器種	部位	外面調整(文様)	内面調整(文様)	その他
69	1	82	SI01	Pit4_覆土		X	b	口縁部	口:ﾅﾃﾞ, 体, ｹｽﾞﾘ	口:ﾅﾃﾞ, 体, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	2	86	SI01	覆土		X	a	口縁部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
73	1	83	SI02	床直	P-20	X	a	口縁部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
	2	59	SI02	Pit5_1・3層		X	a	口~底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切
	3	60	SI02	壁溝上	KP-1	X	a	口~底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切
	4	66	SI02	床直_3~4層	KP-6, 8, 12, P-16	X	a	口~底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切
	5	58	SI02	床直	P-12	XⅡ	a(内黒)	口~底部	ﾊｹﾒ→ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ?
	6	63	SI02	床直	P-1, 2　坏	X	a(内黒)	口~底部	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	底部敲打
	7	84	SI02	1~4層・5層		X	a (赤)	口縁部	口:ﾅﾃﾞ, 体, ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	
	8	70	SI02	床直	KP-13	X	b	口縁部	口:ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	9	54	SI02	床直	P-20	X	b	口縁部	口:ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	10	68	SI02	ｶﾏﾄﾞ	KP-21	X	b	口~体部	口:ﾅﾃﾞ, 体, ｹｽﾞﾘ?	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	11	62	SI02	床直, Pit4上面, Pit7, ｶﾏﾄﾞ	KP-3, 7, 15, 17, 19, 25, 30,	X	b	口~底部	口:ﾅﾃﾞ, 体, ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	底面ﾅﾃﾞ
74	1	78	SI02	Pit5_3層		X	b	口~体部	口:ﾅﾃﾞ, 体, ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	2	64+79	SI02	床直	P-13, KP-4	X	b	口~底部	口:ﾅﾃﾞ, 体, ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	底面ﾅﾃﾞ
	3	61	SI02	ｶﾏﾄﾞ	KP-15	X	b	底部	ｹｽﾞﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	底面砂底
	4	65	SI02	床直	P-9, 10	X	b	底部	ｹｽﾞﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	底面沈線
	5	81＋85	SI02	Pit6_1層		X	b	底部	ｹｽﾞﾘ, ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	6	71	SI02	床直, 1~4層	P-3~7	X	c	口~体部	口:ﾅﾃﾞ, 体:ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	7	87	SI02	5層		X	d	体部		ﾅﾃﾞ	
	8	89	SI02	ｶﾏﾄﾞ, 床直	KP-14, 18, 19, 24, 29	XⅡ	b	口~底部	口:横走沈線→刻文 区画:刺突列, 体ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ、ﾊｹﾒ	
75	1	67	SI03	ｶﾏﾄﾞ上面	P-2	X	b	口縁部	ﾅﾃﾞ, ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
77	1	27	SI04	掘方埋土		X	a(内黒)	口~体部	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	
	2	32	SI04	SK02覆土		X	a(内黒)	体~底部	ﾐｶﾞｷ, 底:ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾐｶﾞｷ	
	3	19	SI04	2層, ｶﾏﾄﾞ煙道	P-4, 6, 16, 17, 36, 40	X	b	口~底部	口:ﾅﾃﾞ・指圧, 体:ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	4	47	SI04	上ｶﾏﾄﾞ煙道	P-1	X	b	口~体部	口:ﾅﾃﾞ, 体:?	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	5	48	SI04	ｶﾏﾄﾞ	P-2, 3, 26, 32	X	b	口~体部	口:ﾅﾃﾞ, 体:ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	6	18	SI04	ｶﾏﾄﾞ	P-7, 8, 9, 13, 15, 17, 24, 26	X	b	口~体部	口:ﾍﾗﾅﾃﾞ, 体:ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	7	92	SI04	上ｶﾏﾄﾞ袖	P-46	X	b	口~底部	口:指圧:体:ｹｽﾞﾘ	?	やや上底
	8	34	SI04	周溝覆土		X	b	口	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
	9	20	SI04	上ｶﾏﾄﾞ煙道覆土		X	b	口~体部	口:ﾅﾃﾞ, 体:ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	10	23	SI04	2層, 4層, ｶﾏﾄﾞ煙道	P-22, 23	X	b	口~底部	口:ﾅﾃﾞ, 体:ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	砂底
78	1	22	SI04	4層, 上ｶﾏﾄﾞ煙道最下層		X	b	口~体部	口:ﾅﾃﾞ, 体:ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	2	25	SI04	SK03		X	b	口~体部	被熱ﾊﾟﾃﾞ	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	3	46	SI04	ｶﾏﾄﾞ覆土	P-45	X	鉢?	口~体部	ﾊｹﾒ	ｹｽﾞﾘ	
	4	72	SI04	ｶﾏﾄﾞ煙道覆土	P-27	X	c	口~体部	口:ﾅﾃﾞ, 体:ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	5	24	SI04	ｶﾏﾄﾞ煙道覆土	P-30, 31	X	c	口~体部	口:ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	6	167	SI04	2層	XⅠ	b	口~頸部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	褐色
	7	156	SI04	壁周溝	XⅠ	b	口縁部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
	8	156	SI04	壁周溝	XⅠ	c	体部	ﾀﾀｷ	ﾀﾀｷ	ﾀﾀｷ	
	9	38	SI04	ｶﾏﾄﾞ煙道覆土	P-24	X	e	上部		ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	10	28	SI04	上ｶﾏﾄﾞ		X	e	下部			透かし孔
	11	37	SI04	SK01, 3層		X	e	体部			
	12	168	SI04	掘方埋土		X	d	体部			
80	1	13	SI05	2層		X	a	口縁部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
	2	14	SI05	2層		X	a	底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切, 1と同一
	3	16	SI05	床面, SK04_4層	P-10	X	高台付a	体~底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
	4	1	SI05	上ｶﾏﾄﾞ	P-13, 15	X	a (赤)	口縁~底部	口:ﾅﾃﾞ, 体:ﾐｶﾞｷ, ｹｽﾞﾘ	ﾐｶﾞｷ	底面ﾅﾃﾞ
	5	12	SI05	SK04_4層		X	a (赤)	口縁~底部	口:ﾅﾃﾞ, 体:ﾐｶﾞｷ, ｹｽﾞﾘ	ﾐｶﾞｷ	底面ﾅﾃﾞ
	6	4	SI05	SK01_2層, SK02, 上ｶﾏﾄﾞ煙道		X	b	口~体部	口:ﾅﾃﾞ, 体:ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	7	7	SI05	SK01_4層	P-4, 5	X	b	口~体部	口:ﾅﾃﾞ, 体:ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	8	3	SI05	SK02, 上ｶﾏﾄﾞ煙道		X	b	口~体部	口:ﾅﾃﾞ, 体:ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	9	9	SI05	ｶﾏﾄﾞ煙道		X	b	口~体部	口:ﾅﾃﾞ, 体:ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	10	2	SI05	SK01_4層, 下ｶﾏﾄﾞ煙道	P-1～3, 6, 8	X	b	体~底部	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	
81	1	91	SI06	支脚		X	a	口縁部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
83	1	93	SK08	9層	P-1	Va	深鉢	口~底部	口:沈線間列点, 三叉文, 体:LR横回	ﾅﾃﾞ	炭化物付着
85	1	D14	SK22	覆土		Ⅰb	尖底深鉢?	体部	押型 (V字) 横回転		2と同一, 繊維
	2	D13	SK22	覆土		Ⅰb	尖底深鉢?	体部	押型 (V字) 横回転		繊維
	3	D17	SK22	覆土		Ⅰb	尖底深鉢?	体部	押型 (V字) 横回転		4・5と同一, 繊維
	4	D19	SK22	覆土		Ⅰb	尖底深鉢?	体部	押型 (V字) 横回転		繊維
	5	D18	SK22	覆土		Ⅰb	尖底深鉢?	体部	押型 (V字) 横回転		繊維
86	1	94	SR01	埋設土器		VIa	深鉢?	体~底部	RL斜回転	ﾐｶﾞｷ	底部穿孔
88	1	175	SB01-3	1層		VIa	壺?	口縁部	ﾅﾃﾞ	ﾐｶﾞｷ	
	2	176	SB01-3	1層		VIa	深鉢	口縁部	口:RL斜回→沈線	ﾐｶﾞｷ	
90	1	D12		ⅢI-37, Ⅱb層		Ⅰb	尖底深鉢?	体部	押型 (V字) 横回転→沈線	ﾐｶﾞｷ	繊維
	2	D15		表採		Ⅰb	尖底深鉢?	体部	押型 (V字) 横回転	ﾐｶﾞｷ	繊維
	3	D16		ⅢI-37, Ⅱb層		Ⅰb	尖底深鉢?	体部	押型 (V字) 横回転	ﾐｶﾞｷ	繊維
	4a	D24		ⅡK-27, Ⅱ～Ⅳ		Ⅰc	尖底深鉢?	口縁部	口:刻み, 貝条痕	ﾐｶﾞｷ	繊維
	4b	D21		ⅡK-27, Ⅲ～Ⅳ		Ⅰc	尖底深鉢?	口縁部	口:刻み, 貝条痕		繊維
	4c	D20		ⅡK-27, Ⅲ～Ⅳ		Ⅰc	尖底深鉢?	体部	貝条痕, 貝腹圧痕		繊維
	5a	D22		ⅡP-23, Ⅱ～Ⅲ		Ⅰc	尖底深鉢?	口縁部	口:刻み, 指刺突←貝条痕		繊維
	5b	D23		ⅡP-23, Ⅱ～Ⅲ		Ⅰc	尖底深鉢?	口縁部	刺突, ←貝条痕		繊維
	6	196		ﾄﾚﾝﾁ		Ⅱb	深鉢	口縁部	LR圧, 刺突列, 単1縦回	ﾐｶﾞｷ	繊維
	7	303		ⅡC-25		Ⅱb	深鉢	口縁部	粘土紐, LR圧	ﾐｶﾞｷ	繊維
	8	304		ⅡD-29		Ⅲa	深鉢	口縁部	隆線, 刺突, RL圧	ﾐｶﾞｷ	
	9	300	SK12	覆土		Ⅲc	深鉢	口縁部	RL斜回, 沈線	ﾐｶﾞｷ	
	10	302	SI01	覆土		IVa?	深鉢?	口縁部	沈線	ﾐｶﾞｷ	
	11	144		ⅢN-33, 34_Ⅱ~Ⅲ層		VIa	深鉢	口~体部	RL横~斜回	ﾐｶﾞｷ	
	12	142		ⅢH-37_Ⅱb~Ⅲ層		VIa	深鉢	口~体部	LR横回	ﾐｶﾞｷ (条痕状)	晩期の可能性あり
	13	146		ﾄﾚﾝﾁ9, ⅢI-37_Ⅱb層		VIa	深鉢	口~体部	RL斜回	ﾐｶﾞｷ	
	14	169		ⅢN-34, Ⅰ~Ⅱ層		VIa	深鉢	口~底部	RL斜回→沈線・粘土粒	ﾐｶﾞｷ	
	15	134		ⅢB-40, Ⅰ~Ⅱ層		VIa	深鉢	口縁部	LR回, 沈線	口縁沈線, ﾐｶﾞｷ	
	16	138		ⅢH-37, 38_Ⅱ~Ⅲ		VIa	台坏深鉢	口~底部	RL斜回→沈線・粘土粒	ﾐｶﾞｷ	
	17	136		ⅢH-37_Ⅱb層		VIa	台付鉢	体~底部	RL斜回←沈線, 粘土粒	ﾐｶﾞｷ	
	18	222		ⅢP-34_Ⅱ層		VIa	鉢?	体部	RL斜回→変形工字文	ﾐｶﾞｷ	
	19	185		ⅢD-39_Ⅰ~Ⅱ層		VIa	台付鉢?	底部	LR横回	ﾐｶﾞｷ	

新沢(1)遺跡出土土器観察表(2)

図番号		整理番号	遺構名	出土位置・層位	取上番号	分類	器種	部位	外面調整(文様)	内面調整(文様)	その他
	20	186		ⅢD-39_Ⅰ~Ⅱ層		Ⅵb	甕	口縁部	LR横回→ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾐｶﾞｷ	砂粒
	21	193		ⅢP-34_Ⅱ層		Ⅵb	甕	口縁部	ﾊｹﾒ→LR横回	ﾖｺﾐｶﾞｷ	砂粒
	22	171	SI03	覆土		Ⅵb	甕	口縁部	ﾊｹﾒ→RL横回→ﾖｺﾅﾃﾞ→沈線	ﾖｺﾐｶﾞｷ	砂粒
	23	182		ⅢC-39_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵb	甕	口縁部	ﾊｹﾒ→LR横回→ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾐｶﾞｷ	砂粒
	24	198		SD04_覆土		Ⅵb	甕	口縁部	ﾊｹﾒ→LR回	ﾖｺﾐｶﾞｷ	砂粒
	25	181		ⅢB-41_Ⅰ~Ⅱ層		Ⅵb	甕	口縁部	RL回→ﾊｹﾒ沈線	ﾖｺﾐｶﾞｷ	砂粒
	26	173	SI04	覆土		Ⅵb	甕	口縁部	LR横回→ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾐｶﾞｷ	砂粒
	27	189		ⅢH-37_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵb	甕	口縁部	LR横回→ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾐｶﾞｷ	砂粒
	28	135		ﾄﾚﾝﾁ6, ⅢE-39_Ⅱ層		Ⅵb	壺	口~体部	沈線, ﾐｶﾞｷ		砂粒
	29	199		SD04_覆土		Ⅵb	壺	頸部	沈線, 列点		砂粒
	30	194		ⅢF-38, Ⅰ~Ⅱ層		Ⅵb	壺	口~頸部	ﾖｺﾅﾃﾞ, 沈線, ﾊｹﾒ列点文		砂粒
	31	137		ⅢH-37, 38_Ⅱ~Ⅲ		Ⅵa	鉢?	体~底部	ﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ	
	32	140		ⅢH-38, Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	小壺	口~底部	LR回		被熱剥離激しい
	33	155		ﾄﾚﾝﾁ		Ⅵa	高坏	台部	刺突, 沈線, 透かし孔	ﾐｶﾞｷ	
	34	195		ﾄﾚﾝﾁ10		Ⅵa	鉢	口~底部	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	小型
	35	143		ⅢI-36, Ⅰ層		Ⅵa	蓋	上部	RL回→沈線	ﾐｶﾞｷ	摘み部に貫通孔2箇所
	36	101		ⅡN-23, 24_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	深鉢	口~体部	RL斜回	ﾐｶﾞｷ	
91	1	96		ⅡL-27, ⅡO-24, ⅡP-23_Ⅱ~Ⅳ層		Ⅵa	深鉢	口~体部	RL斜回	ﾐｶﾞｷ	
	2	177		ⅡN-23_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	砂沢	深鉢?	条痕	ﾐｶﾞｷ	
	3	108		ⅡO-23, ⅡN-24_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	深鉢	口~体部	小波状, RL（異条）斜回→沈線	ﾐｶﾞｷ	
	4	109		ⅡO-23, 24_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	鉢	口~底部	RL斜回→沈線・粘土粒	ﾐｶﾞｷ	
	5	170		ⅡL-27, ⅡN-24, ⅡO-23, ⅡP-23_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	深鉢	口~底部	RL斜回→沈線・粘土粒	口:沈線, ﾐｶﾞｷ	
	6	116		ⅡM-24, Ⅰ層		Ⅵa	深鉢	口縁部	RL回, 沈線	ﾐｶﾞｷ	炭化物付着
	7	133		ⅡL-27, ⅡN-23・24, ⅡP-23_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	深鉢	口~体部	波頂部刻み, RL斜回→沈線	ﾐｶﾞｷ	
	8	306		ⅡL-27, ⅡP-23, ⅡQ-24_Ⅱ~Ⅳ層		Ⅵa	台付深鉢	口縁部	波頂部突起, RK斜回→斜行工字文	口:沈線, ﾐｶﾞｷ	
	9	105		ⅡN-24, ⅡO-23・24_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	台付深鉢	体~底部	RL斜回, 沈線	ﾐｶﾞｷ	
	10	217		ⅡO-23, Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	鉢	口~体部	沈線	ﾐｶﾞｷ	
	11	114		ⅡO-23, Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	鉢?	口~体部	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	
	12	131		ⅡN-23, Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	鉢	口~底部	ﾐｶﾞｷ, 沈線	ﾐｶﾞｷ	
	13	212		ⅡN-23, Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	鉢?	口~体部	変形工字文	口:沈線, ﾐｶﾞｷ	
	14	103		ⅡO-23, Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	台付鉢	口~底部	ﾐｶﾞｷ, 沈線	ﾐｶﾞｷ	
	15	179		ⅡN-23, Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵb	甕	口~体部	LR横回, ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾐｶﾞｷ	砂粒
	16	119		ⅡR-35, Ⅰ層		Ⅵb	甕	口縁部	ﾊｹﾒ→LR横回	ﾖｺﾐｶﾞｷ	砂粒
	17	95		ⅡL-27, ⅡP-23 _Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵb	甕	口~体部	RL横回, ﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾐｶﾞｷ	砂粒, 被熱ﾊｼﾞｹ
	18	180		ⅡO-23, Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	壺	口~頸部	沈線, ﾐｶﾞｷ	口:沈線	内面沈線に赤色顔料
	19	208		ⅡN-23, Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	壺	頸部	変形工字文	ﾐｶﾞｷ	
	20	106		ⅡO-24, Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵb	壺	口~体部	ﾐｶﾞｷ, 沈線	ﾐｶﾞｷ	砂粒
	21	107		ⅡO-24, Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵb	壺	口~体部	ﾐｶﾞｷ, 沈線, 列点文		砂粒
	22	104		ⅡO-23, Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵb	壺	口~体部	ﾐｶﾞｷ, 沈線	ﾐｶﾞｷ	砂粒
	23	99		ⅡN-23, 24_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵb	壺	底部	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	砂粒
	24	98		ⅡN-23, Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵb	壺	体部	ﾊｹﾒ→ﾐｶﾞｷ→ﾊｹﾒ沈線・列点文	ﾐｶﾞｷ	砂粒
92	1	124		ⅡO-23, 24_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	浅鉢	口~底部	波長部突起, 変形工字文	口:沈線, ﾐｶﾞｷ	
	2	204		ⅡM-24, Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	浅鉢	体~底部	変形工字文	ﾐｶﾞｷ	
	3	125		ⅡN・O-23, Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	浅鉢	口~体部	変形工字文	口:沈線, ﾐｶﾞｷ	
	4	210		ⅡO-23, Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	浅鉢	口~体部	変形工字文	口:沈線, ﾐｶﾞｷ	
	5	123		ⅡL-27, ⅡP-23 _Ⅱ~Ⅳ層		Ⅵa	浅鉢	口~底部	変形工字文（粘土粒無し）	口:沈線, ﾐｶﾞｷ	
	6	213		ⅡO-23, Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	浅鉢	体~底部	変形工字文（粘土粒無し）	ﾐｶﾞｷ	
	7	201		ⅡL-27, Ⅱ~Ⅳ層		Ⅵa	浅鉢	口縁部	突起, 変形工字文	口:沈線, ﾐｶﾞｷ	
	8	213		ⅡO-23, Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	浅鉢	体部	変形工字文, 刺突	ﾐｶﾞｷ	
	9	216		ⅡN-23, Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	浅鉢?	口縁部	RL斜回	ﾐｶﾞｷ	炭化物付着, 蓋かも
	10	205		ⅡN-24, Ⅰ層		Ⅵa	高坏?	口縁部	突起（鉢巻状）, 変形工字文	口:沈線, ﾐｶﾞｷ	
	11	151		ⅡO-23・24_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	高坏	底部	変形工字文, 刺突, 透かし孔	ﾐｶﾞｷ	
	12	148		ⅡM-24, ⅡM-23_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	蓋?	体部?	刺突・変形工字文	ﾐｶﾞｷ	
	13	D7		ⅡN-23_Ⅱ~Ⅲ層	1	Ⅵa	ﾐﾆﾁｭｱ	台付鉢?	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	
	14	219		ⅡN-23_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅵa	ﾐﾆﾁｭｱ	鉢?	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	
	9	162		ⅢB-41, ⅢD-40_Ⅰ~Ⅱ層		Ⅹ	a（内黒）	口~底部	ﾐｶﾞｷ→ｹｽﾞﾘ	ﾐｶﾞｷ（内黒）	底面ｹｽﾞﾘ
	10	159	SD04	覆土		Ⅹ	a	底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切
	11	160		ⅢP-34, Ⅱ層		Ⅹ	高台坏a	体~底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底面菊花状ﾅﾃﾞ, 須恵器?
	12	161		表土		ⅩⅡ	b	体部?	横走沈線→刻文	ﾐｶﾞｷ（ﾖｺ）	
	13	164		ⅢH-31, Ⅰ層		Ⅹ	d	口縁部	輪積痕	ﾅﾃﾞ	
	14	166		ⅢO-39, Ⅰ~Ⅱ層		Ⅹ	d	体部?	輪積痕	ﾅﾃﾞ	
	15	165		ⅢP-34, Ⅱ層		Ⅹ	d	底部付近	輪積痕	ﾅﾃﾞ	
	16	158		ﾄﾚﾝﾁ, 表土		ⅩⅠ	b?	頸部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
	17	157		ⅢK-36, Ⅰ層		ⅩⅠ	c	体部	平行ﾀﾀｷ目	当て具痕（平行）	

新沢(1)遺跡出土土製品観察表

図番号		整理番号	出土位置_層	種類	備考
74	11	D10	SI02_床直	土玉	
	12	D9	SI02_床直	土玉	KP-10
	13	D11B	SI02_残土	土玉	土壌ｻﾝﾌﾟﾙから
	14	D11C	SI02_残土	土玉	土壌ｻﾝﾌﾟﾙから
	15	D11A	SI02_残土	土玉	土壌ｻﾝﾌﾟﾙから
92	15	D2	ⅢP-33_Ⅱb層	土偶(弥生前期)	
	16	D4	-_表採	土偶(弥生前期)	
	17	D3	ⅢN-32_Ⅰ～Ⅱ層	土偶(弥生前期)	
	18	D5	ⅡO-24_Ⅱ～Ⅲ層	土偶(弥生前期)	
	19	D1	ⅡO-24_Ⅱ～Ⅲ層	土偶(弥生前期)	

新沢(1)遺跡出土石製品観察表

図番号		整理番号	出土位置_層	種類	石質
78	13	S1	SI04_堀方	砥石	細粒凝灰岩
80	14	S3	SI05_床面	軽石製品	軽石

新沢(1)遺跡出土鉄関連遺物観察表

図番号		整理番号	出土位置_層	種類
74	10	Fe10	SI02_床面直上	鏃?
80	12	Fe13	SI05_2層	鳥具?
80	13	Fe12	SI05_床面	刀子
95	18	Fe37	ⅢP-34_Ⅱ層	金床石→炉石
	19	Fe11	ⅢC-40_Ⅰ~Ⅱ層	刀子?
	20	Fe14	ⅢN-33_Ⅰ層	ハンマー
	21	Fe28	ⅢP-34_Ⅱ層	棹型鉄滓
	22	Fe34	ⅢP-34_Ⅱ層	棹型鉄滓

新沢(1)遺跡出土石器観察表

図番号		整理番号	出土地点・層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	備考
74	9	R9	SI02_床面直上	砥石	81	52	35	162.5	流紋岩	
93	1	H4	SI01_覆土	石鏃	32.1	10.1	4.2	0.6	珪質頁岩	
	2	H24	ⅢM-34_Ⅲ~Ⅳ	石鏃	48.1	12.4	5.5	1.8	珪質頁岩	
	3	H23	ⅢH-38_Ⅱ~Ⅲ	石鏃	41	20.9	7.5	4.5	珪質頁岩	
	4	H3	SI01_覆土	石鏃	23.6	8.6	3.5	0.5	珪質頁岩	
	5	H1	SI01_覆土	石鏃	24.5	10.6	4	0.5	珪質頁岩	
	6	H2	SI01_覆土	石鏃	17.4	6.5	3.5	0.4	珪質頁岩	
	7	H25	ⅢH-37_Ⅱ~Ⅲ	石匙	44	15.2	6	2.5	珪質頁岩	
	8	H28	ⅡP-23_Ⅱ~Ⅲ	掻器	57.9	36.2	9.8	19.1	珪質頁岩	
	9	H41	-	削器	51.2	54.8	15.2	39.3	珪質頁岩	
	10	H30	ⅡP-23_Ⅱ~Ⅲ	二次加工	27.9	39.9	8.8	9.7	珪質頁岩	
	11	H34	ⅢI-31_ Ⅰ	掻器?	39	34.8	11	10.9	珪質頁岩	
	12	H33	ⅢH-33_Ⅰ	削器	38.9	31.5	6	9.1	珪質頁岩	
	13	H27	ⅡF-29	削器	53.8	26.6	9.8	14.2	珪質頁岩	
	14	H35	ⅢM-32_Ⅰ	微細剥離	42.2	24.8	8.9	7	珪質頁岩	
	15	H45	ⅡO-24_Ⅱ~Ⅲ	微細剥離	52.8	39.7	14.8	18.4	珪質頁岩	
	16	H49	ⅢH-36_Ⅰ~Ⅱ	微細剥離	39.2	41.8	11.8	19.4	珪質頁岩	
	17	K3	SK10	微細剥離	24	26	6.5	2.6	黒曜石	分析
	18	H50	ⅢH-37_Ⅱb	微細剥離	31.6	40.3	7.5	6.5	珪質頁岩	
	19	H53	ⅢH-37_Ⅱ~Ⅲ	微細剥離	62.2	61	18.8	43.3	珪質頁岩	
	20	H56	ⅢO-34_Ⅱ	微細剥離	36	33.1	4.7	8.4	珪質頁岩	
	21	H57	ⅢP-34_Ⅱ	微細剥離	50.8	56	12.3	25.1	珪質頁岩	
94	1	H47	ⅢB-41_Ⅰ~Ⅱ	微細剥離	51	21.1	10.9	6	珪質頁岩	
	2	H46	ⅡP-23_Ⅱ~Ⅲ	微細剥離	50.1	38.1	7.6	8.4	珪質頁岩	
	3	H54	ⅢH-37_Ⅱ~Ⅲ	微細剥離	109.2	25.4	12.1	28.5	珪質頁岩	
	4	H44	ⅡO-23_Ⅱ~Ⅲ	両極剥片	30.4	21.9	11	5.7	珪質頁岩	
	5	H43	ⅡO-23_Ⅱ~Ⅲ	両極剥片	29.7	19.6	10.8	4.1	珪質頁岩	
	6	H42	ⅡO-23_Ⅱ~Ⅲ	両極剥片	34.5	27.2	8.6	8.4	珪質頁岩	
	7	K16	ⅢP-33_Ⅱ	剥片	26.5	21	3	1	黒曜石	分析
	8	K10	ⅡP-23_Ⅱ~Ⅲ	石核	27	38	34	33.9	黒曜石	分析
	9	H62	ⅡO-23_Ⅱ~Ⅲ	石核	57.8	59.8	38.9	142.4	珪質頁岩	
	10	H60	ⅡM-24_Ⅰ	石核	40.6	42.9	31.4	72.3	珪質頁岩	
	11	H63	ⅡO-23_Ⅱ~Ⅲ	石核	52.4	43.6	43	95.4	珪質頁岩	
	12	H69	ⅢH-37_Ⅱ~Ⅲ	石核	39.1	33.7	45.7	61.9	珪質頁岩	
95	1	R15	ⅢN-34_Ⅱ~Ⅲ	凹み石	160	107	86	2107.4	河川岩	
	2	R6	SI02_5	凹み石	98	81	48	420.1	安山岩	
	3	R23	ⅢF-38_Ⅲ	石錘	56	58	17	76.6	頁岩	
	4	R3	SI01_床面	擦り石(三角柱状)	123	67	71	752.2	河川岩	
	5	R18	ⅢG-38_Ⅰ~Ⅱ	敲き石	99	79	72	153.4	安山岩	
	6	R11	SI04_3	石錘	149	104	30	566.7	安山岩	
	7	R22	ⅡK-28_Ⅲ~Ⅳ	石錘	53	49	15	54.8	安山岩	
	8	R25	ⅢH-38_Ⅱ~Ⅲ	石皿?	160	157	40	1529.5	安山岩	
	18	fe37	ⅢP-34_Ⅱ	金床石	114	82	51		安山岩	

新沢(2)遺跡出土土製品観察表

図番号		整理番号	出土地点_層	種類	部位	文様	その他
106	3	D1	SI05_炉内	鐸形	紐	無文	
132	1	D9	ⅣP-48_Ⅱ~Ⅲ	土偶	頭部	沈線・貫通孔	
	2	D8	ⅣO-46_Ⅱ~Ⅲ	土偶	体部	乳房,沈線,貫通孔	
	3	D4	ⅣD-45_Ⅱ~Ⅲ	蓋?	摘み	貫通孔2箇所	
	4	D12	ⅤH-49_Ⅱ~Ⅲ	ﾐﾆﾁｭｱ土器	完形	無文	
	5	D7	ⅣK-44_Ⅱ~Ⅲ	鐸形	完形	ﾊｰﾄ文,測線鋸状	
	6	D6	ⅣH-45_Ⅱ~Ⅲ	鐸形	完形	沈線	
	7	D13	ⅤH・I-49_Ⅱ~Ⅲ	鐸形		沈線,粘土紐	炭化物
	8	D11	ⅤE-45_Ⅲ	鐸形	完形	無文	
	9	D19	ⅣN-43_Ⅱ~Ⅲ	鐸形	完形	無文	
	10	D3	SK35_1~3	鐸形	完形	無文	
	11	D14	ⅦX-48_Ⅲ	鐸形		無文	
	12	D18	ⅣN-42_Ⅱ~Ⅲ	鐸形	紐	無文	
	13	D5	ⅣE-46_Ⅱ~Ⅲ	鐸形		無文	
	14	D15	ⅤJ-51_Ⅱ~Ⅲ	円盤状		単絡2回転	
	15	D16	ﾄﾚﾝﾁ11_Ⅱ~Ⅲ	円盤状		沈線	
	16	D17	ⅣM-44_Ⅱ~Ⅲ	円盤状		沈線	

新沢(2)遺跡出土石製品観察表

図番号		番号	出土位置_層	種類	重さ(g)	備考	石質
138	19	S8	ⅣO-49_Ⅱ~Ⅲ	三脚石器	51.1		頁岩
	20	S4	SK08_8層	有孔	48.1		頁岩
	21	S6	ⅣQ-45_Ⅱ~Ⅲ	有孔	44.4		頁岩
	22	S9	Ⅳ-44_Ⅱ~Ⅲ	有孔	20.3		珪質頁岩
	23	S7	ⅣY-48_Ⅲ	有孔	63.1		頁岩
	24	S2	ⅣJ-49_Ⅱ~Ⅲ	有孔	166.6		頁岩
	25	S3	SK21_10層以下	くびれ石	159.5		細粒凝灰岩
	26	S11	ⅣO-44_Ⅱ~Ⅲ	不明	9.6		細粒凝灰岩
	27	S1	SK35_覆土	擦痕あり	256.1		細粒凝灰岩

新沢(2)遺跡出土土器観察表(1)

図番号		整理番号	遺構名	出土位置・層位	取上番号	分類	器種	部位	外面調整(文様)	内面調整(文様)	その他
100	1	14	SI01	床直	P-16,18	X	a	ﾛ~体部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
	2	3	SI01	Pit4_2層		X	a	ﾛ~体部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
	3	4	SI01	Pit4_2層		X	a	ﾛ~体部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
	4	201	SI01	Pit5_覆土		X	a	ﾛ~底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切
	5	11	SI01	覆土		X	a (内黒)	ﾛ~体部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾐｶﾞｷ (内黒)	
	6	10	SI01	床直	P-5	X	a (内黒)	ﾛ~底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾐｶﾞｷ (内黒)	回転糸切
	7	12	SI01	床直	P-20	X	a (内黒)	ﾛ~体部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾐｶﾞｷ (内黒)	
	8	42	SI01	ｶﾏﾄﾞ右脇		X	a (内黒)	口縁部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾐｶﾞｷ (内黒)	
	9	8	SI01	ｶﾏﾄﾞ上層		X	a	底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切
	10	33	SI01	Pit4_2層		X	a	底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切
	11	20	SI01	床直,ｶﾏﾄﾞ右脇,ｶﾏﾄﾞ内部,ｶﾏﾄﾞ煙道	P-12,15	X	c	ﾛ~底部	ﾛ:ﾅﾃﾞ,体:ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	底面木葉痕
	12	23	SI01	床直,ｶﾏﾄﾞ,ｶﾏﾄﾞ右脇	P-11,12	X	b	ﾛ~体部	ﾛ:ﾅﾃﾞ,体:ﾐｶﾞｷ?	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	13	38	SI01	ｶﾏﾄﾞ上面		X	b	ﾛ~体部	ﾛ:ﾅﾃﾞ,体:ﾐｶﾞｷ?	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	14	35	SI01	ｶﾏﾄﾞ煙道		X	b (内黒)	ﾛ~体部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾐｶﾞｷ (内黒)	
101	1	1	SI01	ｶﾏﾄﾞ煙道入口		X	b	ﾛ~体部	ﾛ:ﾅﾃﾞ,体:ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	2	24	SI01	ｶﾏﾄﾞ内,Pit4_2層		X	b	ﾛ~底部	ﾛ:ﾅﾃﾞ,体:ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	底面砂底
	3	2	SI01	ｶﾏﾄﾞ左脇,Pit4_2層		X	b	ﾛ~体部	ﾛ:ﾅﾃﾞ,体:ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	底面砂底
	4	37	SI01	ｶﾏﾄﾞ左脇		X	b	ﾛ~体部	ﾛ:ﾅﾃﾞ,体:ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	5	34	SI01	ｶﾏﾄﾞ左脇		X	b	ﾛ~体部	ﾛ:ﾅﾃﾞ,体:ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	6	25	SI01	ｶﾏﾄﾞ左脇		X	b	底部	ｹｽﾞﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	底面ﾍﾗﾅﾃﾞ
	7	15	SI01	覆土		X	b	底部	ｹｽﾞﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	8	6	SI01	床面	P-13	X	c	下端	輪積痕	輪積痕	透かし孔
	9	7	SI01	覆土		X	d	体部	輪積痕	ﾅﾃﾞ	
102	1	200	SI02	炉 (炉体?)		IVa	深鉢	ﾛ~体部	3波状,ﾛ:沈線,体:格子沈線	ﾐｶﾞｷ	被熱
103	1	26	SI03	炉体		IVa	深鉢	ﾛ~体部	4波状,ﾛ:沈線,体:格子沈線	ﾐｶﾞｷ	被熱
105	1	28	SI04	炉体		IVa	壺	体~底部	沈線 (楕円文) ,赤色顔料?	ﾐｶﾞｷ	被熱
	2	27	SI04			IVa	注口	ﾛ~底部	ﾐｶﾞｷ (釣手内面網代圧痕)	ﾐｶﾞｷ	被熱
	3	29	SI04		P-1,2	IVa	深鉢	ﾛ~体部	波状,口唇肥厚,格子文 (3本一対)	ﾐｶﾞｷ	
	4	70	SI04		P-3	IVa	壺	体部	沈線 (2本一対,S字状文)		
106	1	32	SI05	炉体		IVa	深鉢	体~底部	沈線 (楕円文)	ﾐｶﾞｷ	被熱
	2	30	SI05		P-1,2	IVa	深鉢	ﾛ~体部			
107	1	31	SI06		P-1	IVa	深鉢 (小)	ﾛ~底部	ﾛ:沈線,体:格子状	ﾐｶﾞｷ	
108	1	79	SN14	炉体		IVa	浅鉢	ﾛ~底部	楕円文,波濤文(3本一対)	ﾐｶﾞｷ	底面楕円文
	2	80	SN14	火床面		IVa	浅鉢?	体部	沈線(S字文?)	ﾐｶﾞｷ	
109	1	82	SN19	炉体		IVa	深鉢	底部	沈線(楕円文?)	ﾐｶﾞｷ	被熱
110	1	83	SN20	炉体		IVa	深鉢	ﾛ~底部	沈線(入り組み文?3本一対)	ﾐｶﾞｷ	被熱
112	1	76	SN08	火床面	P-2	VIe	甕	ﾛ~体部	結節横回,地縄自巻?LRとRL横回,地縄自巻き?RL斜回	ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	2	77	SN08	火床面付近	P-1,3,4	VIe	甕	体~底部	地縄自巻きRLとLR縦横回転	ﾍﾗﾅﾃﾞ	底部上底
113	1	135	SN12	IVP-44_Ⅲ層	P-1	IVa	浅鉢	体~底部	沈線(楕円文),赤彩	ﾍﾗﾅﾃﾞ	底部上底
	2	145	SN12	IVP-44_Ⅲ層	P-1	VIb?	甕	ﾛ~体部	ﾖｺﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾐｶﾞｷ	
	1	81	SN15	火床面		IVa	壺	体部	沈線(楕円文)	ﾐｶﾞｷ	
	2	85	SN15	火床面付近		IVa	浅鉢	底部	沈線	ﾐｶﾞｷ	底面沈線
	1	380	SN16	焼土内		IVa	深鉢	ﾛ縁部	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	

新沢(2)遺跡出土土器観察表(2)

図番号		整理番号	遺構名	出土位置・層位	取上番号	分類	器種	部位	外面調整(文様)	内面調整(文様)	その他
113	2	355	SN16	焼土内		Ⅳa	深鉢	体部	粘土紐, 沈線		
114	1	44	SK02	1層	P-2, 5~7, 10, 11, 14	Ⅵb	鉢?	口~体部	6単位波状(頂部刻み), RL斜回, 波状工字文, 刺突	口:沈線、ﾐｶﾞｷ	
	1	394	SK03	確認面		Ⅳa?	深鉢?	底部	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	
115	1	45	SK08	5層		Ⅳa	深鉢	口~体部	波状, 沈線(楕円文, S字状入り組み文)	ﾐｶﾞｷ	
	2	346	SK08	7層以下		Ⅳa	深鉢	口縁部	波状, 粘土紐	ﾐｶﾞｷ	
	3	396	SK08	7層以下		Ⅳa	深鉢	体部	沈線(楕円文)	ﾐｶﾞｷ	
	4	84	SK08	7層以下		Ⅳa	深鉢	体~底部	粗いﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	5	349	SK08	7層以下		Ⅳa	深鉢	体部	格子状(4本一対)		
	6	58	SK08	1層		Ⅳa	浅鉢	口~底部	沈線(入り組み文, 楕円文)	ﾐｶﾞｷ	
	7	348	SK08	2層		Ⅳa	浅鉢	口縁部	沈線(楕円文)	ﾐｶﾞｷ	
117	1	393	SK15	15層		Ⅳa	壺?	体~底部	楕円文	ﾐｶﾞｷ	
	2	46	SK15		P-14, 22, 23	Ⅳa	深鉢	体部	L斜回, 沈線	ﾐｶﾞｷ	
	3	356	SK15	5層	P-21	Ⅳa	壺	口~体部	粗いﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	
	4	357	SK15	覆土		Ⅳa	壺	体部	楕円文(化粧土縁取り)	ﾐｶﾞｷ	
	5	358	SK15	5層	P-4	Ⅳa	鉢	口~体部	楕円文	ﾐｶﾞｷ	
119	1	47	SK21	11層, 8層以下	P-1	Ⅳa	深鉢	口~体部	波状, 沈線(蛇行文, 三本一対)	ﾐｶﾞｷ	炭化物付着
	2	49	SK21	11層	P-2	Ⅳa	深鉢	口~体部	波状, 沈線(ｸﾛｺ文, 2本一対)	ﾐｶﾞｷ	
	3	362	SK21	11層		Ⅳa	深鉢	口縁部	口縁肥厚, 体:沈線(格子状)	ﾐｶﾞｷ	
	4	391	SK21	下層		Ⅳa	深鉢	底部	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	
	5	353	SK21	11層		Ⅳa	深鉢(小)	底部	沈線	ﾐｶﾞｷ	
	6	48	SK21	10層以下	P-6	Ⅳa	浅鉢	口~底部	2単位波状, 波長部粘土紐, 沈線(楕円文, 入組文)	ﾐｶﾞｷ	
	7	360	SK21	下層		Ⅳa	浅鉢	口縁部	波状, 波長部粘土紐, 楕円文	ﾐｶﾞｷ	
	8	361	SK21	下層	P-2	Ⅳa	浅鉢	口~底部	2単位波状, 波長部粘土紐, 沈線(蛇行文)	ﾐｶﾞｷ	
	9	359	SK21	覆土		Ⅳa	浅鉢	口縁部	沈線	ﾐｶﾞｷ	
	10	361	SK21	11層		Ⅳa	浅鉢	口縁部	沈線(赤彩)	ﾐｶﾞｷ	
120	1	395	SK23	埋設		Ⅳa	深鉢	口~体部	口縁肥厚, 体:沈線(格子状, 三本一対)	ﾐｶﾞｷ	
	1	378	SK24	1層		Ⅳa	深鉢	口縁部	波状, 楕円文		
	2	379	SK24	1層		Ⅳa	深鉢	口縁部	波状, 沈線	ﾐｶﾞｷ	
121	1	50	SK25	底面	P-1~3, 5, 7	Ⅳa	深鉢	口~底部	波状(波長部粘土紐), 楕円文, 蛇行文(3本一対)	ﾐｶﾞｷ	炭化物付着
	2	339	SK25	底面	P-4	Ⅳa	深鉢	口~体部	波状(波長部粘土紐), 楕円文, ﾊｰﾄ充填	ﾐｶﾞｷ	
	3	347	SK25	覆土		Ⅳa	壺	口~頸部	1単位波状, 波長部下に貫通孔, 沈線	ﾐｶﾞｷ	
	1	375	SK28	覆土		Ⅳa	深鉢	口縁部	ﾐｶﾞｷ		
	2	377	SK28	覆土		Ⅳa	深鉢	体部	楕円文		
122	1	340	SK30	2層		Ⅳa	深鉢(小)	口~体部	突起, 粘土紐, 沈線	ﾐｶﾞｷ	
	2	337	SK30	2層		Ⅳa	深鉢	体部	入組文	ﾐｶﾞｷ	
	3	51	SK30	覆土		Ⅳa	壺	口~体部	口縁肥厚, 楕円文		
	1	338	SK31	2層		Ⅳa	深鉢	口縁部	波状, 沈線		
	2	343	SK31	2層		Ⅳa	深鉢	口縁部	波状, 沈線, 格子状沈線		
	3	345	SK31	2層		Ⅳa	浅鉢	口縁部	沈線		
	4	344	SK31	2層		Ⅳa	浅鉢	体部	沈線(波濤文?)	ﾐｶﾞｷ	
	5	69	SK31	2層		Ⅳa	浅鉢	口~底部	2単位波状, 波長部粘土紐, 沈線(入組文, ﾊｰﾄ充填)	ﾐｶﾞｷ	
	1	387	SK35	覆土		Ⅳa	深鉢	口縁部	口縁肥厚, 粘土紐		
	2	383	SK35	覆土		Ⅳa	深鉢	口縁部	波状, 楕円文		
123	3	382	SK35	覆土		Ⅳa	壺	口縁部	ﾐｶﾞｷ		
	4	384	SK35	覆土		Ⅳa	浅鉢	口縁部	沈線(3本一対, 波濤文)		
	5	392	SK35	覆土		Ⅳa	鉢?	体部	沈線(楕円文, 菱形文)	ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	7	386	SK35	覆土		Ⅳa	ﾐﾆﾁｭｱ	底部	無文		
124	8	53	SK35	1~3層, 底面	P-2, 8	Ⅳa	深鉢	口~底部	ﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	9	62	SK35	3層下部	P-3	Ⅳa	深鉢	口~底部	口縁肥厚, 沈線, 格子状沈線	ﾐｶﾞｷ	
	10	64	SK35	覆土, 1~3層下部	P-2, 4	Ⅳa	深鉢	口~体部	波状, 波長部刻み, 下位に粘土粒貼, 沈線, 格子状沈線	ﾐｶﾞｷ	
	11	67	SK35	底面	P-7, 8	Ⅳa	深鉢	口~体部	波状, 口縁折り返し, C字状文, 楕円文	ﾐｶﾞｷ	
	12	55	SK35	4層	P-1	Ⅳa	深鉢	口~底部	5単位波状, 楕円文, 菱形文	ﾐｶﾞｷ	
	13	56	SK35	3層下部	P-6	Ⅳa	壺	口~底部	1単位波状, 粘土紐, 楕円文, 菱形文	ﾐｶﾞｷ	
125	1	388	SK37	覆土		Ⅳa	浅鉢	底部	無文		
	2	389	SK37	覆土		Ⅳa	ﾐﾆﾁｭｱ?	底部	沈線	ﾍﾗﾅﾃﾞ	
	1	354	SK40	覆土		Ⅳa	壺?	体部	沈線(3本一対)		
	2	360	SK40			Ⅳa	浅鉢	底部	沈線(4本一対)		底面格子状文
127	1	73	SR01		埋設	Ⅳa	壺	体~底部	沈線(縦区画文(3本一対), 蛇行文)		
	2	74	SR02		埋設	Ⅳa	浅鉢	口~底部	楕円文		
129	1a	210		ⅥA-55, ⅥX-52_Ⅲ層		Ⅰa	尖底深鉢?	口縁部	波状, ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	
	1b	211		ⅥC-54_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅰa	尖底深鉢?	体部	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	
	2a	186		ⅣI-47_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅰa	尖底深鉢	口縁部	波状, ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	
	2b	187		ⅣQ-47_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅰa	尖底深鉢	体部	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	
	2c	185		ⅣP-43_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅰa	尖底深鉢	底部付近	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	
	3a	182		ⅣP-46_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅰa	尖底深鉢	口縁部	波状, ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	
	3b	183		ⅣP-46_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅰa	尖底深鉢	底部付近	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	
	4	180	SK33	覆土		Ⅰa	尖底深鉢	底部付近	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	
	5	181		ⅣM-48_Ⅲ層		Ⅰa	尖底深鉢	底部	ﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ	
	6	184		ⅣQ-43_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅰa	尖底深鉢	底部	ﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ	
	7	172		ⅥG-45_Ⅲ層		Ⅰb	尖底深鉢?	口縁部	口唇刻み, 押型原体横回, 沈線	ﾐｶﾞｷ	繊維
	8	168	SN11	焼土層		Ⅰa?	尖底深鉢?	体部	0段多条LR・RL横回	ﾐｶﾞｷ	繊維
	9	173		ⅥK-65_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅰc?		口縁部	刺突列	ﾐｶﾞｷ	繊維
	10	178	SK30	覆土		Ⅰc?	尖底深鉢?	口縁部	貝殻条痕	ﾅﾃﾞ	
	11	95		ⅣJ-47_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅳa	深鉢	口~底部	口縁肥厚, 楕円文	ﾐｶﾞｷ	
	12	111		ⅣM-50_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅳa	深鉢	口~底部	口縁肥厚, S字状入組文, ﾊｰﾄ充填	ﾐｶﾞｷ	
	13	150		ⅣP-48_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅳa	深鉢	口~体部	波状, 粘土紐, 縦区画文, 蛇行文	ﾐｶﾞｷ	
130	1	168		ⅥI-48_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅳa	深鉢	口~底部	4単位波状, 楕円文, S字入組文, 菱形文	ﾐｶﾞｷ	
	2	149		ⅣR-48_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅳa	深鉢	口~体部	4単位波状, 粘土紐, 入組文, ﾊｰﾄ充填	ﾐｶﾞｷ	
	3	198		ⅥE-51_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅳa	深鉢	口縁部	網代圧痕, 格子状沈線	ﾐｶﾞｷ	
	4	193		ⅣT-40_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅳa	深鉢(小)	口縁部	粘土紐, 刺突, 沈線	刺突, 沈線	
	5	195		ⅣX-44_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅳa	ﾐﾆﾁｭｱ	口縁部	沈線, 刺突	ﾐｶﾞｷ	
	6	191		ⅣQ-49_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅳa	ﾐﾆﾁｭｱ	底部	底部刻み		
	7	196		ⅥB-48_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅳa	ﾐﾆﾁｭｱ	底部	沈線		
	8	197		ⅥH-50_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅳa	ﾐﾆﾁｭｱ	底部			
	9	192		ⅣR-50_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅳa	壺	口~頸部	1単位波状, 粘土紐, 楕円文		赤彩
	10	162		ⅥH-49_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅳa	深鉢	口~体部	6単位波状, 楕円文, 波濤文?	ﾐｶﾞｷ	
	11	133		ⅣO-40_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅳa	深鉢	口~体部	突起, 沈線(3本一対)	ﾐｶﾞｷ	
	12	199		ⅣO-44_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅳa	深鉢	口~底部	沈線, ﾊｰﾄ文	ﾐｶﾞｷ	
	13	120		ⅣO-48_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅳa	深鉢	口~底部	沈線, 蛇行文	ﾐｶﾞｷ	
	14	128		ⅣP-43_Ⅱ~Ⅲ層		Ⅳa	壺	口~底部	波状, 入組文	ﾐｶﾞｷ	

新沢(2)遺跡出土土器観察表(3)

図番号		整理番号	遺構名	出土位置・層位	取上番号	分類	器種	部位	外面調整(文様)	内面調整(文様)	その他
130	15	132		IVP-48_Ⅱ~Ⅲ層		IVa	壺	口~体部	楕円文	輪積痕	
	16	336		IVP-49_Ⅱ~Ⅲ層		IVa	壺(小)	体部	LR回, 入組文	内面漆付着	炭化物付着
	17	89		IVH-45_Ⅱ~Ⅲ層		IVa	壺	口縁部	沈線, 刺突	ミガキ	
	18	129		IVO-44_Ⅱ~Ⅲ層		IVa	壺	体部	楕円文, ハート充填	ミガキ	
	19	164		VB-48_Ⅱ~Ⅲ層		IVa	壺	口~体部	波状, 楕円文		
	20	101		IVK-49_Ⅱ~Ⅲ層		IVa	壺	口~底部	波状, 粗いミガキ		
	21	109		IVL-46_Ⅲ層		IVa	浅鉢	口~底部	波状, 粘土紐, 沈線	ミガキ	
	22	141		IVS-41_Ⅱ~Ⅲ層		IVa	浅鉢	口~底部	4単位波状, 粘土紐, 縦区画文, 楕円文, ハート充填	ミガキ	
131	1	332		IVP-45_Ⅱ~Ⅲ層		Vb	注口	体部	B突起, 雲形文(LR回)	ミガキ	
	2	328		IVN-48_Ⅱ~Ⅲ層		Vb	深鉢	口縁部	沈線、RL横回	ミガキ	
	3	350		IVP-48_Ⅱ~Ⅲ層		VIa	高坏	台部	沈線	ミガキ	接合部ハケ
	4	144		IVQ-47_Ⅱ層		VIb	高坏?	口~体部	口唇外折(前面と内面角に刻目), 体:ミガキ	ミガキ	遠賀川系?
	5	317		VIG-54_Ⅱ~Ⅲ層		VI	深鉢?	口縁部	RL斜回, 細沈線(鋸歯状?)	ナデ	砂粒
	6	333		IVF-64_Ⅱ~Ⅲ層		V~VI	壺?	体部	ミガキ	ナデ	
	7	160		VD-46_Ⅱ~Ⅲ層		VIc	鉢	口~底部	6単位波状, RL斜回, 沈線, 粘土粒	口:沈線, ミガキ	
	8	324		IVN-44_Ⅱ~Ⅲ層		VIc	広口壺?	口~体部	弱波状, RL斜回→沈線	口:沈線, ミガキ	
	9	315		IVQ-44_Ⅱ~Ⅲ層		VIc	広口壺?	口縁部	口唇縄回転, RL横回, 沈線, 結節沈線	口:沈線, 頸:沈線	
	10	327		VIH-63_Ⅱ~Ⅲ層		VIc	高坏?	口縁部	変形工字文		
	11	325		VIC-54_Ⅲ層		VIc	高坏?	口縁部	工字文	口:沈線	
	12	334		VIG-60_Ⅱ~Ⅲ層		VIc	高坏?	体部	変形工字文, RL回		
	13	335		VB-49_Ⅱ~Ⅲ層		VIc	浅鉢	体~底部	沈線	ミガキ	
	14	329		VIC-53_Ⅱ~Ⅲ層		VIc	台付鉢	台部	沈線		
	15	320	トレンチ18	IVN-44_Ⅱ~Ⅲ層		VIc	台付鉢	台部	沈線		
	16	312		IVS-47_Ⅱ~Ⅲ層		VIc	台付鉢	台部	沈線		
	17	309		VD-48_Ⅱ~Ⅲ層		VIc?	深鉢?	口縁部	口唇刻み, RL斜回	ミガキ	
	18	165		VIG-60_Ⅱ~Ⅲ層		VIc	壺	口~体部	口:ミガキ, 頸:刺突3列, 体:RL斜回	ミガキ	
	19	126		IVP-45_Ⅱ~Ⅲ層		VIc	広口壺?	口~体部	口唇RL回, 口変形工字文?, 頸:沈線, 刺突, 体:RL斜回, 変形工字文	口:沈線	
	20	313		IVR-44_Ⅱ~Ⅲ層		VId	広口壺?	口縁部	RL斜回, 沈線, 鋸歯文	ミガキ	
	21	311		IVR-44_Ⅱ~Ⅲ層		VId	広口壺?	口縁部	口唇端RL回, 口:RL斜回→沈線, 鋸歯文	口:沈線, RL回	
	22	316		IVQ-45_Ⅱ~Ⅲ層		VId	深鉢?	口縁部	口唇刻み, 沈線		
	23	321		IVO-46_Ⅱ~Ⅲ層		VId	深鉢	口~底部	口:LR回, 沈線、鋸歯文, 体:LR回	口:LR回	
	24	318		IVK-45_Ⅱ~Ⅲ層		VId	蓋		刻み、沈線, 粘土粒, 貫通孔	ミガキ	
	25	310		IVQ-45_Ⅱ~Ⅲ層		VId	深鉢	底部	LR斜回		底面種子圧痕
	26	373		IVO・P-48, IVR-46_Ⅱ~Ⅲ層		VIe	深鉢	口~底部	結節(口：横回, 体:縦回, 底横回?		
	27	300		IVS-47_Ⅱ~Ⅲ層		VIe	深鉢?	体部	地縄自巻きRL斜回	ナデ	
	28	364		IVS-47_Ⅱ~Ⅲ層		VIe	深鉢?	口縁部	地縄自巻きRL回, 交互刺突文	ナデ	
	29	307		VIC~VID-56_Ⅱ~Ⅲ層	P-1, 2, 12, 17	VIIa	深鉢	体~底部	帯縄文RL, 細沈線縁取り, 三角形刺突,	ミガキ	

新沢(2)遺跡出土石器観察表(1)

図番号		整理番号	出土地点_層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	備考
123	6	R14	SK35_覆土	磨製石斧				67.4	凝灰岩	
133	1	H166	IVH-47_Ⅱ~Ⅲ	石鏃	14.1	12.2	3.6	0.6	珪質頁岩	
	2	H171	VC-48_Ⅱ~Ⅲ層	石鏃	24	13.2	3.9	1	珪質頁岩	
	3	H169	IVQ-46_Ⅲ層	石鏃	42.4	16.4	8.9	5.3	珪質頁岩	
	4	H170	IVT-44_Ⅲ層	石鏃	34.1	15.9	7.2	3.8	珪質頁岩	
	5	H168	IVN-47_Ⅱ~Ⅲ層	石鏃	36.4	15	4.2	2.1	珪質頁岩	
	6	H167	IVK-43_Ⅱ~Ⅲ層	石鏃	14.2	12.7	2	0.4	珪質頁岩	
	7	H172	IVN-46_Ⅱ~Ⅲ層	石槍	65.3	42.6	9.9	24.4	珪質頁岩	
	8	H176	IVP-43_Ⅱ~Ⅲ層	石匙	52.3	33.5	9.1	13.4	珪質頁岩	
	9	H177	IVP-50_Ⅱ~Ⅲ層	石匙	90.9	34.8	11.4	30.6	珪質頁岩	
	10	H175	IVJ-43_Ⅱ~Ⅲ層	石匙	36	52.7	10.2	15.9	珪質頁岩	
	11	H174	IVI-44_Ⅱ~Ⅲ層	石匙	35.8	68.6	8.3	17.6	珪質頁岩	
	12	H178	IVW-49_Ⅱ~Ⅲ層	石匙	44.4	59	8.1	15.8	珪質頁岩	
	13	H180	IVJ-44_Ⅱ~Ⅲ層	石錐	32.7	15.4	8.6	2.6	珪質頁岩	
	14	H286	IVT-45_Ⅱ~Ⅲ層	石錐	31.9	29.2	10.6	6.5	珪質頁岩	
	15	H182	IVT-44_Ⅱ~Ⅲ層	石錐	65	12.6	7.5	4.2	珪質頁岩	
	16	H181	IVM-47_Ⅲ層	石錐	42.5	24.2	4.3	3	珪質頁岩	
	17	H196	IVJ-48_Ⅱ~Ⅲ層	石篦	37.9	19.9	7.5	6.2	珪質頁岩	
	18	H184	IVO-47_Ⅱ~Ⅲ層	石篦	47.4	32.8	12.9	19	珪質頁岩	
	19	H185	VE-52_Ⅱ層	石篦	54	26.6	11.5	17.4	珪質頁岩	
	20	H197	IVJ-49_Ⅱ~Ⅲ層	石篦	101.2	44.4	19.1	74.4	珪質頁岩	
134	1	H183	IVO-45_Ⅱ~Ⅲ層	石篦	44.1	39.2	10.8	13.9	珪質頁岩	
	2	H191	IVJ-48_Ⅱ~Ⅲ層	石篦	42.1	34.9	11.3	19.4	珪質頁岩	
	3	H189	IVJ-43_Ⅱ~Ⅲ層	石篦	39.3	19.4	12.9	11.3	珪質頁岩	
	4	H221	IVM-49_Ⅲ層	石篦	49.5	47.6	17.4	42.2	珪質頁岩	
	5	H297	IVY-46_Ⅱ~Ⅲ層	石篦	59	34.8	10.8	22.7	珪質頁岩	
	6	H290	IVU-43_Ⅱ~Ⅲ層	石篦	49.2	32.8	11.5	21.1	珪質頁岩	
	7	H272	IVQ-44_Ⅱ~Ⅲ層	石篦	49.8	42.8	15.7	36.5	珪質頁岩	
	8	H291	IVV-50_Ⅲ層	掻器	100.5	68.1	22.9	153.5	珪質頁岩	
	9	H217	IVM-47_Ⅲ層	掻器	41.4	36.5	14.8	21.4	珪質頁岩	
	10	K204	IVC-56_Ⅱ~Ⅲ層	掻器	42	31.5	9.5	8.8	黒曜石	分析
	11	H270	IVQ-44_Ⅱ~Ⅲ層	削器	96.6	42.6	17.4	72.9	珪質頁岩	
	12	H250	IVP-43_Ⅱ~Ⅲ層	削器	36.8	53.9	10.2	21.6	珪質頁岩	
	13	H233	IVO-45_Ⅱ~Ⅲ層	削器	34.5	47.4	8.1	9.6	珪質頁岩	
135	1	H260	IVP-46_Ⅱ~Ⅲ層	削器	71.2	25.6	8.1	13.2	珪質頁岩	
	2	H207	IVL-47_Ⅲ層	削器	48.1	79.7	14.7	39.8	珪質頁岩	
	3	H244	IVO-49_Ⅱ~Ⅲ層	削器	59.8	32.8	12.1	14.8	珪質頁岩	
	4	H274	IVQ-46_Ⅲ層	削器	67.9	65.3	12.2	36.5	珪質頁岩	
	5	H223	IVM-50_Ⅱ~Ⅲ層	半製品	39.2	19.1	9.2	7.8	珪質頁岩	
	6	H298	VA-46_Ⅱ~Ⅲ層	半製品	28.2	15.4	4.2	2	珪質頁岩	
	7	H287	IVU-40_Ⅱ~Ⅲ層	半製品	51	20.2	10.1	11.9	珪質頁岩	
	8	H288	IVU-42_Ⅱ~Ⅲ層	半製品	31.1	15.8	6	3.2	珪質頁岩	
	9	H222	IVM-50_Ⅱ~Ⅲ層	半製品	17.4	29.1	6.3	3	珪質頁岩	
	10	K194	IVI-48_Ⅱ~Ⅲ層	石錐?	50	23	15	12.9	黒曜石	分析
	11	K197	IVL-46_Ⅲ層	削器	49	32	11.5	19.6	黒曜石	分析
	12	H382	VIF-60_Ⅱ~Ⅲ層	微細剥離	58.8	44.6	20.2	25.4	珪質頁岩	
	13	H346	IVM-47_Ⅲ層	微細剥離	57	31.9	7.7	10.8	珪質頁岩	
	14	H324	IVH-48_Ⅱ~Ⅲ層	両極剥片	43.1	20.8	15.2	14.8	珪質頁岩	
	15	H338	IVR-44_Ⅱ~Ⅲ層	両極剥片	37.8	31.1	17.4	19.6	珪質頁岩	

新沢(2)遺跡出土石器観察表(2)

図番号		整理番号	出土地点_層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	備考
	16	H334	IVR-43_Ⅱ~Ⅲ層	両極剥片	39.4	28.6	16.6	19.3	珪質頁岩	
	17	H339	IVR-45_Ⅱ~Ⅲ層	両極剥片	33.5	26.6	9.2	9.2	珪質頁岩	
	18	H329	IVO-48_Ⅱ~Ⅲ層	両極剥片	50.6	36	20.1	35.3	珪質頁岩	
136	1	H448	IVR-43_Ⅱ~Ⅲ層	石核	55	74.1	59.9	288.6	珪質頁岩	
	2	H397	IVJ-48_Ⅱ~Ⅲ層	石核	47.1	52.4	33.1	88.4	珪質頁岩	
	3	H458	IVT-41_Ⅱ~Ⅲ層	石核	53.7	57.8	21.6	68.9	珪質頁岩	
	4	H408	IVM-49_Ⅱ~Ⅲ層	石核	43.2	58.6	29.2	71.7	珪質頁岩	
	5	H405	IVL-47_Ⅲ層	石核	69.6	64.5	75.8	331.6	珪質頁岩	
	6	H409	IVM-50_Ⅱ~Ⅲ層	石核	33.6	53.5	39.2	93.1	珪質頁岩	
	7	H461	IVT-44_Ⅱ~Ⅲ層	石核	64.1	55.4	22	72.2	珪質頁岩	
137	1	R38	VF-49_Ⅱ	磨製石斧	110	46	24.5	192.3	凝灰岩	
	2	R29	IVP-43_Ⅱ~Ⅲ	磨製石斧	104	42.5	27	176	閃緑岩	
	3	R28	IVN-48_Ⅱ~Ⅲ	磨製石斧	115	53	30	270.8	砂岩	
	4	R24	IVK-45_Ⅱ~Ⅲ	磨製石斧	119	45	30	251.8	閃緑岩	
	5	R32	IVS-46_Ⅲ	磨製石斧	130	52	34	321.5	砂岩	
	6	R37	VC-50_Ⅱ~Ⅲ	磨製石斧	80	51.5	34	212.7	凝灰岩	
	7	R35	IVT-44_Ⅱ~Ⅲ	磨製石斧	60	46	25	102.3	砂岩	
	8	R34	IVT-40_Ⅱ~Ⅲ	磨製石斧	60	40	20.5	74.5	河川岩	
	9	R36	IVY-45_Ⅱ~Ⅲ	磨製石斧	66.5	27.5	15	40.8	河川岩	
	10	R39	VF-49_Ⅱ	磨製石斧	96	37	14.5	90.1	緑細凝灰岩	
	11	R25	IVK-49_Ⅱ~Ⅲ	磨製石斧	56	38.5	22	72.9	細緑凝灰岩	
	12	R27	IVN-45_Ⅱ~Ⅲ	磨製石斧	71	40	21	103.5	頁岩	
	13	R26	IVL-47_Ⅲ	磨製石斧	68	49	26	139		
	14	R22	IVJ-48_Ⅱ~Ⅲ	磨製石斧	58	16.5	10	19.5	青片岩	
	15	R43	IVM-48_Ⅱ~Ⅲ	凹み石	220	101.5	45	1244.8	凝灰岩	
	16	R47	VIE-54_Ⅱ~Ⅲ	凹み石	106	90	46	713.4	河川岩	
	17	R46	VIX-49_Ⅱ~Ⅲ	凹み石	100	52	31	164.7	凝灰岩	
	18	R68	VD-50_Ⅱ~Ⅲ	凹み石	100	66	45	430.1	細粒凝灰岩	
	19	R53	VIK-46_Ⅱ~Ⅲ	敲き石				62.3	頁岩	
	20	R50	VIK-44_Ⅱ~Ⅲ	敲き石	99	68	38	338.1	閃緑岩	
	21	R15	SK37_覆土	敲き石				170.1	凝灰岩	
	22	R52	VIK-46_Ⅱ~Ⅲ	敲き石				117.8	河川岩	
138	1	R51	VIK-45_Ⅱ~Ⅲ	敲き石	110	84	47	423.8	細粒凝灰岩	
	2	R61	IVP-49_Ⅱ~Ⅲ	敲き石	118.5	84	45.5	624.7	細粒凝灰岩	
	3	R62	IVS-49_Ⅱ~Ⅲ	敲き石	118	82	46.5	703.4	河川岩	
	4	R67	VB-48_Ⅱ~Ⅲ	敲き石	118	52	66.5	218.7	細粒凝灰岩	
	5	R85	IVO-45_Ⅱ~Ⅲ	擦り石	153	89	41	647	安山岩	
	6	R87	IVP-48_Ⅱ~Ⅲ	擦り石	162	75	35.5	660.5	安山岩	
	7	R90	IVR-46_Ⅱ~Ⅲ	擦り石	135	70	45	621.4	凝灰岩	
	8	R84	IVO-45_Ⅱ~Ⅲ	擦り石	144	74.5	38	467.6		
	9	R86	IVP-46_Ⅱ~Ⅲ	擦り石	162	78	41	610.2	流紋岩	
	10	R81	IVN-47_Ⅱ~Ⅲ	擦り石	155	86	40	684.4		
	11	R83	IVO-44_Ⅱ~Ⅲ	擦り石				604.3	凝灰岩	
	12	R118	IVO-46_Ⅱ~Ⅲ	石錘				72.4	砂質	
	13	R113	IVN-47_Ⅱ~Ⅲ	石錘				116.5	頁岩	
	14	R119	IVP-42_Ⅱ~Ⅲ	石錘				60.4	凝灰岩	
	15	R12	SK34_覆土	石錘				98.2	安山岩	
	16	R123	IVP-47_Ⅱ~Ⅲ	石錘				225.4	河川岩	
	17	R140	VH-49_Ⅲ	石錘				180.5	頁岩	
	18	R226	IVP-45_Ⅱ~Ⅲ	石皿	146	155	39	850	凝灰岩	

新沢(2)遺跡出土珪質頁岩製剥片石器出土量一覧

出土地点	個数	重量(g)
SI01	4	25.7
SI02	14	171.1
SI03	38	332.1
SI04	38	358.3
SI05	4	9.8
SI06	2	10.1
SK02	1	2.4
SK08	58	622.9
SK11	1	12.6
SK14	4	33.6
SK15	26	319.5
SK18	1	6.8
SK21	182	1931.2
SK23	5	47.8
SK24	8	79.1
SK25	27	199.3
SK27	3	4.9
SK28	2	31.6
SK30	14	277.5
SK31	7	263
SK34	45	2613
SK35	47	536.1
SK37	9	272.1
SK43	7	156.3
SK44	1	2000
SN08	3	10
SN12	1	4.3
SN15	2	12.6
SN16	2	8.1
SN20	39	656.6
IVC-45	1	10.2
IVD-44	2	48.3
IVD-45	3	360.9
IVD-48	1	13.7
IVE-44	1	17.3
IVE-45	1	13.6
IVF-46	21	212
IVF-47	3	14.8
IVF-61	1	26.3
IVG-43	3	39.9
IVG-44	2	48.2
IVG-45	2	8.7
IVG-46	1	7.4
IVG-48	1	9.4
IVH-44	4	197.1
IVH-45	3	25.8
IVH-46	28	351.7
IVH-47	31	361.7
IVH-48	54	893.8
IVH-49	1	17.9
IVH-61	1	7.1
IVI-43	1	25
IVI-44	19	185.1
IVI-45	9	181.9
IVI-46	13	80.8
IVI-47	32	252
IVI-48	17	284.6
IVI-49	6	51.2
IVI-59	1	12.8
IVJ-43	32	243.3
IVJ-44	31	203.5
IVJ-46	11	73.6
IVJ-47	5	269.5
IVJ-48	45	672.6
IVJ-49	35	1333.1
IVK-43	2	2.5
IVK-44	36	553.1
IVK-45	20	467
IVK-46	2	47.5
IVK-47	4	11.6
IVK-48	7	65.5
IVK-49	2	48.7
IVL-45	17	221.4
IVL-46	1	4.5
IVL-47	7	454.8
IVL-48	4	104.9
IVL-49	2	25.4
IVM-43	10	92.1
IVM-45	20	184.5
IVM-46	4	64.5
IVM-47	21	195.7
IVM-48	4	214.4
IVM-49	13	669.1
IVM-50	31	404.4
IVN-43	7	199.4
IVN-44	16	180.1
IVN-45	34	326.3
IVN-46	20	257.4

出土地点	個数	重量(g)
IVN-47	6	55.5
IVN-48	32	359.9
IVN-49	3	66
IVN-50	16	203.6
IVO-43	20	376.9
IVO-44	38	304.4
IVO-45	16	176.1
IVO-46	2	51.2
IVO-47	8	51.4
IVO-48	52	1206.3
IVO-49	13	316.6
IVO-50	8	46.5
IVO-51	1	14.6
IVP-41	4	163.5
IVP-42	10	54.7
IVP-43	29	549.5
IVP-44	48	722.8
IVP-45	9	52.3
IVP-46	8	322.9
IVP-47	18	141.8
IVP-48	55	872.4
IVP-49	60	954.3
IVP-50	4	180.3
IVP-51	5	288.5
IVQ-42	6	111.9
IVQ-43	21	398.8
IVQ-44	54	816.7
IVQ-45	5	36.1
IVQ-46	29	904.5
IVQ-47	7	69.3
IVQ-48	2	36.6
IVQ-49	18	452.4
IVR-42	4	38.5
IVR-43	49	994
IVR-44	6	104.4
IVR-45	7	114.9
IVR-46	9	74.4
IVR-47	16	181.1
IVR-48	18	251.4
IVR-49	7	287.2
IVR-50	16	634.4
IVS-40	13	290.7
IVS-41	14	129
IVS-43	33	614.3
IVS-44	23	49.8
IVS-45	12	108.8
IVS-46	7	119.6
IVS-47	2	20.8
IVS-49	20	265.7
IVT-40	68	1203
IVT-41	13	180.5
IVT-43	4	47
IVT-44	21	295.5
IVT-45	7	104.2
IVT-46	5	62.1
IVT-47	1	5.4
IVT-48	6	195.3
IVT-49	2	55.8
IVU-40	6	85.2
IVU-42	2	9.2
IVU-43	2	63.2
IVU-44	14	122.1
IVU-45	7	68.5
IVU-48	1	1.6
IVU-49	1	20.8
IVV-42	1	10.7
IVV-44	2	35.1
IVV-47	2	141.7
IVV-48	1	4.5
IVV-49	3	407.4
IVV-50	8	321.3
IVW-44	1	6.5
IVW-47	13	220.3
IVW-48	7	95.4
IVW-49	2	29.9
IVX-44	2	14.2
IVX-45	2	24.8
IVX-46	1	26.3
IVX-47	7	627
IVX-48	1	51.7
IVX-49	5	78.8
IVX—50	1	122.2
IVY-43	4	61
IVY-44	18	652.9
IVY-45	5	472.8
IVY-46	20	623.5
IVY-48	8	150.3
IVY-49	2	19.1

出土地点	個数	重量(g)
VA-46	6	201.5
VA-48	5	582.7
VA-49	1	7.1
VB-43	1	6.1
VB-45	5	166.6
VB-46	9	65.8
VB-47	2	36.3
VB-48	21	262.7
VB-49	45	1258.3
VB-50	1	8.4
VC-45	5	106.1
VC-46	2	44.4
VC-47	11	903
VC-48	22	314.2
VC-49	9	329.2
VC-50	3	16.1
VC-51	1	7.5
VC-52	1	15.2
VD-45	1	56.1
VD-46	1	18
VD-47	1	16.5
VD-49	6	71.9
VD-50	1	5.6
VD-51	1	39.7
VE-44	1	70.8
VE-46	1	96.6
VE-47	2	31.7
VE-48	4	45.2
VE-49	2	102.9
VE-50	5	28.6
VE-51	2	6.8
VE-52	1	17.4
VE-53	1	58.9
VE-61	1	16.9
VF-45	1	5.6
VF-46	1	8.4
VF-48	3	111.5
VF-49	8	278.6
VF-50	1	39.5
VF-51	5	67
VF-52	2	11.3
VG-45	6	144.2
VG-47	2	9.4
VG-48	2	41.8
VG-49	10	384.8
VG-52	2	87.2
VH-47	8	161.5
VH-48	18	277.1
VH-49	7	52.9
VH-50	5	31.9
VH-51	2	28
VI-46	1	10.4
VI-48	3	17.7
VI-49	12	167.5
VI-50	8	92.4
VI-51	8	305.7
VI-52	6	258.8
VI-62	1	7.7
VJ-46	1	18.1
VJ-48	2	11.4
VJ-49	2	10.7
VJ-50	67	1193.6
VJ-51	17	266.8
VJ-52	17	118.2
VK-49	5	56.1
VK-50	14	357
VK-51	18	217
VM-50	4	252
VT-49	2	8.5
VIC-53	1	3
VID-56	3	54.3
VID-61	1	177.3
VIE-54	1	12.9
VIE-55	1	23.8
VIF-60	21	119.5
VIH-61	6	241.8
VIH-63	1	13.5
VIJ-59	1	3.7
合計	1301	22358

新沢(2)遺跡出土黒曜石製剥片石器出土量一覧

出土地点	個数	重量(g)
SI02	9	19.2
SI03	24	54.8
SI04	11	375.4
SI05	2	7.2
SI06周辺	1	2.8
SK08	79	937.9
SK09	1	1.5
SK12	1	0.9
SK13	1	2.6
SK15	3	15.7
SK21	10	60.6
SK24	3	2.9
SK25	1	3.2
SK27	1	3.7
SK31	1	3.7
SK34	1	89.6
SK35	30	146.5
SK43	2	6.9
SN07	2	3.8
SN20	10	82.5
IVC-56	1	8.8
IVE-45	1	1
IVF-46	2	29
IVG-45	5	42.1
IVG-47	1	275.5
IVG-49	2	5.7
IVG-60	1	5.4
IVH-46	4	80.1
IVH-47	33	430.8
IVH-48	1	3.7
IVI-44	1	6.7
IVI-46	1	7.8
IVI-47	4	12.4
IVI-48	10	216.9
IVI-49	1	3.8
IVI-50	1	1.4
IVI-51	1	4.5
IVJ-43	2	4.8
IVJ-44	3	28.3
IVJ-46	1	1.9
IVJ-47	3	6.9
IVJ-48	42	418.6
IVJ-49	3	16.9
IVK-44	2	2.5
IVK-45	1	63.5
IVK-46	9	28.4
IVk-48	5	10.5
IVk-49	2	5.8
IVL-44	1	15.1
IVL-45	4	16.7
IVL-46	2	22.6
IVL-47	1	9.9
IVL-48	2	9.7
IVL-49	4	123
IVM-43	3	17.6
IVM-45	13	115.8
IVM-47	3	57.6
IVM-48	1	6
IVM-49	5	168.8
IVM-50	1	5.7
IVN-43	1	1.8
IVN-44	3	16.8
IVN-45	2	184.4
IVN-48	4	28.7
IVN-49	1	15.8
IVN-50	1	16
IVO-43	1	0.3
IVO-44	25	121.1
IVO-45	3	10.2
IVO-46	1	1.3
IVO-47	3	11.5
IVO-48	10	83.6
IVO-49	1	4.8
IVO-50	3	9.9
IVO-51	1	11.6
IVP-42	2	14.6
IVP-43	4	68.1
IVP-44	5	84.3
IVP-45	3	6.7
IVP-46	4	8.2
IVP-47	4	53.3
IVP-48	8	23.8
IVP-49	2	30.9
IVQ-43	10	39.8
IVQ-44	12	245.6
IVQ-46	7	101.3
IVQ-47	1	31.4

出土地点	個数	重量(g)
IVQ-48	1	5
IVQ-49	14	259.5
IVQ-50	1	4.1
IVR-42	2	4.5
IVR-43	23	452.6
IVR-44	6	10.6
IVR-45	2	8.7
IVR-46	2	9.3
IVR-48	4	8.5
IVR-49	2	19.8
IVR-50	5	25.4
IVS-40	3	17.3
IVS-41	1	1.6
IVS-43	6	17.3
IVS-44	4	8.9
IVS-45	4	10.2
IVS-46	2	8
IVS-47	2	2
IVS-49	3	11.9
IVT-40	4	123.7
IVT-41	6	43.2
IVT-42	1	9.7
IVT-44	3	84.2
IVT-45	1	3.3
IVT-46	1	226.8
IVT-48	1	48.5
IVU-44	1	4.7
IVU-45	1	1.7
IVU-48	1	9.2
IVU-49	2	7.1
IVV-44	1	1.1
IVV-49	1	2.8
IVW-42	1	6.9
IVW-45	5	58.3
IVW-47	11	77.4
IVW-48	11	88.7
IVX-44	3	3.8
IVX-45	2	5
IVX-46	1	0.6
IVX-47	4	191.8
IVX-49	1	2.7
IVY-43	2	3.2
IVY-44	1	3
IVY-45	2	16.3
IVY-46	3	7.3
IVY-47	1	5.3
IVY-48	7	20.4
IVY-49	5	54.7
VA-45	1	6.7
VA-48	3	11.7
VB-45	1	2.2
VB-47	1	7.7
VB-48	8	99
VB-49	15	212.1
VC-44	2	4.7
VC-45	5	9.6
VC-46	1	5.7
VC-48	6	35.8
VC-49	5	305.8
VD-44	5	20.9
VD-45	1	1.4
VD-47	3	13.6
VD-51	1	7.3
VE-44	3	48.1
VE-46	1	7.8
VE-47	5	119.9
VE-48	1	5.2
VE-49	1	1.7
VE-51	1	1
VF-44	1	9.9
VF-47	1	3.2
VF-50	2	6.4
VF-51	1	4.4
VG-45	1	4.7
VG-47	1	7.7
VG-50	1	1.3
VH-49	2	4.4
VI-45	1	1.2
VI-48	1	1.4
VI-51	1	4.2
VI-52	1	1.8
VJ-50	2	8.3
VK-51	3	17.5
VO-47	2	6.4
VIF-59	1	6.3
VIJ-65	1	1.3
合計	762	8354.2

新沢(2)遺跡遺構外出土土器出土量一覧

グリッド	層位	個数	重さ(g)
IVC-47	Ⅱ～Ⅲ層	9	228.1
IVD-44	Ⅱ～Ⅲ層	2	18.5
IVD-46	Ⅱ～Ⅲ層	6	195.1
IVD-47	Ⅱ～Ⅲ層	1	4
IVE-45	Ⅱ～Ⅲ層	6	93.8
IVE-46	Ⅲ層	10	124.8
IVE-46	Ⅱ～Ⅲ層	12	109.9
IVE-48	Ⅱ～Ⅲ層	1	7.5
IVF-44	Ⅱ～Ⅲ層	5	130.4
IVF-46	Ⅱ～Ⅲ層	20	512.8
IVF-46	Ⅱ～Ⅲ層	91	1162.3
IVF-47	Ⅱ～Ⅲ層	5	48.2
IVG-43	Ⅱ～Ⅲ層	2	38.3
IVG-44	Ⅱ～Ⅲ層	3	38.5
IVG-45	Ⅱ～Ⅲ層	20	314.9
IVG-46	Ⅱ～Ⅲ層	35	410.4
IVG-47	Ⅱ～Ⅲ層	6	100.4
IVG-48	Ⅱ～Ⅲ層	17	121.1
IVG-49	Ⅱ～Ⅲ層	11	213
IVH-44	Ⅱ～Ⅲ層	10	167
IVH-44	Ⅲ層	22	247.6
IVH-46	Ⅱ～Ⅲ層	13	184.5
IVH-45	Ⅲ層	72	1465.4
IVH-46	Ⅱ～Ⅲ層	6	42.9
IVH-46	Ⅲ層	41	378.2
IVH-47	Ⅱ～Ⅲ層	104	1605.8
IVH-47	Ⅲ層	8	59.1
IVH-48	Ⅱ～Ⅲ層	16	164.5
IVH-48	Ⅲ層	4	59.8
IVH-49	Ⅱ～Ⅲ層	1	7.3
IVI-43	Ⅱ～Ⅲ層	11	119.4
IVI-44	Ⅱ～Ⅲ層	28	517.6
IVI-45	Ⅱ～Ⅲ層	4	73
IVI-46	Ⅱ～Ⅲ層	22	212
IVI-46	Ⅲ層	51	763.2
IVI-47	Ⅱ～Ⅲ層	77	567.7
IVI-47	Ⅲ層	16	90.9
IVI-48	Ⅱ～Ⅲ層	13	102.6
IVI-49	Ⅱ～Ⅲ層	19	236.7
IVI-49	Ⅲ層	1	13.6
IVJ-43	Ⅱ～Ⅲ層	112	1716.5
IVJ-44	Ⅱ～Ⅲ層	171	2668.5
IVJ-44	Ⅲ層	9	87.5
IVJ-44	－	2	26.4
IVJ-47	Ⅱ～Ⅲ層	106	1486.5
IVJ-47	Ⅲ層	5	84.7
IVJ-48	Ⅱ～Ⅲ層	257	4377.1
IVJ-48	Ⅲ層	24	711
IVJ-49	Ⅱ～Ⅲ層	19	412.1
IVJ-60	Ⅱ～Ⅲ層	1	7.1
IVK-44	Ⅱ～Ⅲ層	119	2479.2
IVK-44	Ⅲ層	29	219.5
IVK-45	Ⅱ～Ⅲ層	135	597.9
IVK-45	Ⅱ～Ⅲ層	17	148.5
IVK-45	Ⅲ層	3	28.7
IVK-46	Ⅱ～Ⅲ層	56	674.6
IVK-47	Ⅱ～Ⅲ層	1	4.3
IVK-47	Ⅲ層	6	17.6
IVK-48	Ⅱ～Ⅲ層	25	347.7
IVK-48	Ⅲ層	2	42.4
IVK-49	Ⅱ～Ⅲ層	88	1249.2
IVK-49	Ⅲ層	4	79.4
IVL-44	Ⅱ～Ⅲ層	13	126.8
IVL-45	Ⅱ～Ⅲ層	148	2036.5
IVL-45	Ⅲ層	9	71.7
IVL-46	Ⅱ～Ⅲ層	3	35.5
IVL-46	Ⅲ層	77	438.9
IVL-47	Ⅱ～Ⅲ層	10	70
IVL-47	Ⅲ層	5	44.7
IVL-48	Ⅱ～Ⅲ層	31	333.7
IVL-49	Ⅱ～Ⅲ層	42	518.5
IVL-49	Ⅲ層	2	6.4
IVL-50	Ⅱ～Ⅲ層	2	20.8
IVM-43	Ⅱ～Ⅲ層	36	724.8
IVM-44	Ⅱ～Ⅲ層	3	26.6
IVM-45	Ⅱ～Ⅲ層	69	723.5
IVM-46	Ⅱ～Ⅲ層	81	810.7
IVM-47	Ⅱ～Ⅲ層	17	168.7
IVM-47	Ⅲ層	129	1746.2
IVM-48	Ⅱ～Ⅲ層	7	62
IVM-48	Ⅲ層	4	71.4
IVM-49	Ⅱ～Ⅲ層	46	499.2
IVM-49	Ⅲ層	44	478.2
IVM-50	Ⅱ～Ⅲ層	218	4354.4
IVM-50	Ⅲ層	1	17.9
IVN-43	Ⅱ～Ⅲ層	4	66.7
IVN-44	Ⅱ～Ⅲ層	140	1478.2
IVN-45	Ⅱ～Ⅲ層	39	613.7
IVN-45	Ⅲ層	2	19
IVN-46	Ⅱ～Ⅲ層	29	452.5
IVN-46	Ⅲ層	4	46
IVN-47	Ⅱ～Ⅲ層	7	66.9
IVN-47	Ⅲ層	1	23.2

グリッド	層位	個数	重さ(g)
IVN-48	Ⅱ～Ⅲ層	37	294.3
IVN-49	Ⅱ～Ⅲ層	16	182.2
IVN-49	ｽｸﾗﾝ	8	94.6
IVN-50	Ⅱ～Ⅲ層	55	822.9
IVO-31	Ⅱ～Ⅲ層	10	119.9
IVO-43	Ⅱ～Ⅲ層	32	688.8
IVO-44	Ⅱ～Ⅲ層	349	5263.83
IVO-45	Ⅱ～Ⅲ層	22	165.7
IVO-46	Ⅱ～Ⅲ層	38	320.5
IVO-47	Ⅱ～Ⅲ層	15	178.3
IVO-47	Ⅲ層	1	16.6
IVO-48	Ⅱ～Ⅲ層	121	2772.4
IVO-49	Ⅱ～Ⅲ層	55	993.6
IVO-49	Ⅲ～Ⅳ層	1	8.2
IVO-50	Ⅱ～Ⅲ層	26	373.5
IVO-51	Ⅱ～Ⅲ層	19	365.7
IVP-41	Ⅱ～Ⅲ層	21	303.7
IVP-42	Ⅱ～Ⅲ層	67	1024.7
IVP-43	Ⅱ～Ⅲ層	90	1242.3
IVP-44	Ⅱ～Ⅲ層	155	2724.8
IVP-45	Ⅱ層	33	295.5
IVP-45	Ⅱ～Ⅲ層	181	1703.4
IVP-45	Ⅲ層	2	11.2
IVP-46	Ⅱ～Ⅲ層	84	1267.6
IVP-47	Ⅱ～Ⅲ層	142	3470.1
IVP-48	Ⅱ～Ⅲ層	297	3638.9
IVP-49	Ⅱ～Ⅲ層	291	5168.3
IVP-50	Ⅱ～Ⅲ層	44	526.7
IVP-51	Ⅱ～Ⅲ層	8	172.8
IVQ-42	Ⅱ～Ⅲ層	33	660.6
IVQ-43	Ⅱ～Ⅲ層	100	1788.7
IVQ-44	Ⅱ～Ⅲ層	207	3000.4
IVQ-44	Ⅲ層	1	14.6
IVQ-45	Ⅱ～Ⅲ層	138	1232.6
IVQ-46	Ⅱ～Ⅲ層	30	430.7
IVQ-46	Ⅲ層	113	1672.2
IVQ-46	Ⅱ層	2	12.1
IVQ-47	Ⅱ層	20	259.6
IVQ-47	Ⅱ～Ⅲ層	87	2632.5
IVQ-48	Ⅱ～Ⅲ層	18	244.3
IVQ-49	Ⅱ～Ⅲ層	90	1705.4
IVR-42	Ⅱ～Ⅲ層	31	431.6
IVR-43	Ⅱ～Ⅲ層	44	563.6
IVR-44	Ⅱ～Ⅲ層	33	206.2
IVR-45	Ⅱ～Ⅲ層	14	140.3
IVR-46	Ⅱ～Ⅲ層	61	322.3
IVR-47	Ⅱ～Ⅲ層	20	249.4
IVR-47	Ⅲ～Ⅳ層	8	135.3
IVR-48	Ⅱ～Ⅲ層	123	2062.9
IVR-48	Ⅲ～Ⅳ層	2	9.7
IVR-49	Ⅱ～Ⅲ層	13	239.5
IVR-49	Ⅲ～Ⅳ層	13	140.6
IVR-50	Ⅱ～Ⅲ層	119	1782.5
IVS-40	Ⅱ層	1	4.5
IVS-41	Ⅱ～Ⅲ層	193	2632.3
IVS-43	Ⅱ～Ⅲ層	67	450.9
IVS-44	Ⅱ～Ⅲ層	59	330.7
IVS-45	Ⅱ～Ⅲ層	19	170.3
IVS-46	Ⅱ～Ⅲ層	8	83.3
IVS-46	Ⅲ層	13	87
IVS-47	Ⅱ～Ⅲ層	30	196.3
IVS-48	Ⅱ～Ⅲ層	18	298.6
IVS-50	Ⅱ～Ⅲ層	57	750.7
IVS-49	Ⅲ～Ⅳ層	3	64.8
IVT-40	Ⅱ～Ⅲ層	353	5127.9
IVT-41	Ⅱ～Ⅲ層	83	977.5
IVT-42	Ⅱ～Ⅲ層	6	51.5
IVT-43	Ⅱ～Ⅲ層	23	310.2
IVT-44	Ⅱ～Ⅲ層	84	652.6
IVT-44	Ⅲ層	9	134
IVT-45	Ⅱ～Ⅲ層	8	65.9
IVT-46	Ⅱ～Ⅲ層	12	128.1
IVT-47	Ⅱ～Ⅲ層	1	3.9
IVT-48	Ⅱ～Ⅲ層	9	104
IVT-49	Ⅱ～Ⅲ層	12	180.4
IVU-40	Ⅱ～Ⅲ層	16	114.4
IVU-41	Ⅱ～Ⅲ層	9	92.2
IVU-42	Ⅱ～Ⅲ層	14	203.3
IVU-43	Ⅱ～Ⅲ層	15	132.2
IVU-44	Ⅱ～Ⅲ層	81	969.7
IVU-45	Ⅱ～Ⅲ層	7	44.1
IVU-47	Ⅱ～Ⅲ層	2	23.1
IVU-49	Ⅱ～Ⅲ層	5	83.4
IVV-43	Ⅱ～Ⅲ層	35	369.9
IVV-44	Ⅱ～Ⅲ層	6	48.1
IVV-45	Ⅱ～Ⅲ層	1	13.4
IVV-47	Ⅱ～Ⅲ層	5	59.1
IVV-48	Ⅱ～Ⅲ層	8	150
IVV-48	Ⅲ層	3	46.8
IVV-49	Ⅱ～Ⅲ層	2	6.4
IVV-50	Ⅱ～Ⅲ層	1	14.8
IVV-50	Ⅲ層	4	55.9
IVW-41	Ⅱ～Ⅲ層	1	3.5
IVW-42	Ⅱ～Ⅲ層	3	44.5
IVW-43	Ⅱ～Ⅲ層	7	70.9
IVW-44	Ⅱ～Ⅲ層	5	68.5
IVW-45	Ⅱ～Ⅲ層	10	74.2
IVW-46	Ⅱ～Ⅲ層	7	59.1
IVW-47	Ⅱ～Ⅲ層	55	805.1

グリッド	層位	個数	重さ(g)
IVW-47	Ⅲ層	13	164.5
IVW-48	Ⅱ～Ⅲ層	39	623.5
IVW-49	Ⅱ～Ⅲ層	2	22.8
IVW-49	Ⅲ層	1	12.9
IVW-50	Ⅲ層	1	31.6
IVX-43	Ⅱ～Ⅲ層	1	6.3
IVX-44	Ⅱ～Ⅲ層	4	38.7
IVX-46	Ⅱ～Ⅲ層	6	53.6
IVX-47	Ⅱ～Ⅲ層	17	137.7
IVX-47	Ⅲ層	1	11.4
IVX-49	Ⅲ層	11	141.5
IVX-50	Ⅱ～Ⅲ層	3	196.8
IVY-42	Ⅲ層	2	13
IVY-43	Ⅱ層	1	4.8
IVY-43	Ⅱ～Ⅲ層	2	19.4
IVY-43	Ⅲ層	1	38.7
IVY-44	Ⅱ～Ⅲ層	34	359.7
IVY-45	Ⅱ～Ⅲ層	5	64.2
IVY-46	Ⅱ～Ⅲ層	55	880.6
IVY-47	Ⅲ層	2	9.1
IVY-48	Ⅱ～Ⅲ層	48	781.7
IVY-48	Ⅲ層	14	302
IVY-49	Ⅱ～Ⅲ層	37	745.2
VA-44	Ⅱ～Ⅲ層	2	15.2
VA-45	Ⅱ～Ⅲ層	4	22.1
VA-46	Ⅱ～Ⅲ層	13	107.3
VA-48	Ⅱ～Ⅲ層	46	800.8
VA-48	Ⅲ層	9	106.6
VA-49	Ⅱ～Ⅲ層	2	20.4
VA-49	Ⅲ層	1	7.7
VB-43	Ⅲ層	2	11.3
VB-44	Ⅱ～Ⅲ層	1	16.3
VB-45	Ⅱ～Ⅲ層	1	3.5
VB-46	Ⅱ～Ⅲ層	199	3249.4
VB-47	Ⅱ～Ⅲ層	3	26.5
VB-48	Ⅱ～Ⅲ層	397	6165.3
VB-48	－	4	26.3
VB-49	Ⅱ～Ⅲ層	314	3873.9
VB-50	Ⅱ～Ⅲ層	20	161
VC-45	Ⅱ層	1	3.5
VC-45	Ⅱ～Ⅲ層	30	296.4
VC-46	Ⅱ～Ⅲ層	4	49.6
VC-47	Ⅱ～Ⅲ層	20	220.2
VC-48	Ⅱ～Ⅲ層	132	1433.8
VC-49	Ⅱ～Ⅲ層	19	305.6
VC-50	Ⅱ～Ⅲ層	68	666
VC-51	Ⅱ～Ⅲ層	38	443
VD-44	Ⅱ層	1	6.3
VD-44	Ⅲ層	16	151.6
VD-44	フク土	2	37.4
VD-45	Ⅱ～Ⅲ層	10	93.4
VD-45	Ⅲ層	7	89.2
VD-46	Ⅱ～Ⅲ層	12	56.6
VD-47	Ⅱ～Ⅲ層	1	6.8
VD-48	Ⅱ～Ⅲ層	18	165.8
VD-49	Ⅱ～Ⅲ層	10	69.4
VD-50	Ⅱ～Ⅲ層	1	2
VD-51	Ⅱ層	1	4.5
VD-51	Ⅱ～Ⅲ層	3	91.8
VD-61	Ⅲ層	3	7.6
VD-61	－	1	15.8
VD-52	Ⅱ層	2	21
VD-53	Ⅱ～Ⅲ層	2	19.2
VE-44	Ⅲ層	14	132.8
VE-45	Ⅲ層	7	113.6
VE-46	Ⅱ～Ⅲ層	22	224.7
VE-46	Ⅲ層	2	18.4
VE-47	Ⅲ層	4	23.9
VE-48	Ⅱ層	2	21.2
VE-48	Ⅱ～Ⅲ層	7	78.6
VE-50	Ⅱ層	12	101
VE-49	Ⅱ～Ⅲ層	33	343.5
VE-50	Ⅲ層	3	13.6
VE-51	Ⅱ～Ⅲ層	1	43
VE-52	Ⅱ層	2	44.6
VF-44	Ⅲ層	3	32.4
VF-45	Ⅱ～Ⅲ層	1	5.6
VF-45	Ⅲ層	11	90.5
VF-46	Ⅱ～Ⅲ層	10	366.1
VF-48	Ⅱ～Ⅲ層	1	7.9
VF-49	Ⅱ層	13	202.2
VF-49	Ⅱ～Ⅲ層	2	13.5
VF-50	Ⅱ層	6	119.5
VF-51	Ⅱ層	33	333.2
VF-51	Ⅲ層	2	21.4
VF-52	Ⅱ層	8	106.6
VF-52	Ⅱ～Ⅲ層	7	96.2
VG-45	Ⅲ層	22	215.8
VG-47	Ⅱ層	6	42.7
VG-47	Ⅱ～Ⅲ層	2	9
VG-48	Ⅱ～Ⅲ層	4	18.1
VG-49	Ⅱ層	2	16.7
VG-49	Ⅱ～Ⅲ層	5	38.7
VG-52	Ⅱ～Ⅲ層	3	67.4
VH-47	Ⅱ層	1	3.7
VH-47	Ⅱ～Ⅲ層	1	9.8
VH-47	Ⅲ層	1	16.8
VH-48	Ⅱ～Ⅲ層	16	102
VH-48	Ⅲ層	31	615.8
VH-48	Ⅴ層	2	8.7
VH-49	Ⅱ層	32	91.6
VH-49	Ⅱ～Ⅲ層	278	2895.4
VH-50	Ⅱ層	16	199.5
VH-50	Ⅱ～Ⅲ層	5	78

グリッド	層位	個数	重さ(g)
VH-51	Ⅱ～Ⅲ層	3	67.3
VH-51	Ⅲ層	1	6
VI-48	Ⅱ～Ⅲ層	5	41.6
VI-48	Ⅲ層	10	50
VI-49	Ⅱ～Ⅲ層	23	198.2
VI-49	Ⅲ層	3	14.5
VI-50	Ⅱ～Ⅲ層	23	477.5
VI-50	Ⅲ層	1	32.8
VI-51	Ⅱ～Ⅲ層	12	183.8
VI-51	Ⅲ層	2	7.3
VI-52	Ⅱ～Ⅲ層	28	363.9
VJ-47	Ⅱ～Ⅲ層	1	17
VJ-48	Ⅱ～Ⅲ層	5	76.7
VJ-49	Ⅱ～Ⅲ層	16	228.3
VJ-49	Ⅲ層	1	14.8
VJ-50	Ⅱ～Ⅲ層	131	1677.1
VJ-51	Ⅱ～Ⅲ層	81	1255.5
VJ-52	Ⅱ～Ⅲ層	62	670.6
VJ-52	Ⅲ層	4	36.9
VK-49	Ⅱ～Ⅲ層	27	300.9
VK-50	Ⅱ～Ⅲ層	97	2086.3
VK-51	Ⅱ～Ⅲ層	63	913.7
VK-65	Ⅱ～Ⅲ層	2	6.4
VL-51	Ⅱ～Ⅲ層	5	34.7
VIA-53	Ⅱ層	8	66.5
VIA-54	Ⅱ～Ⅲ層	2	11
VIA-55	Ⅱ～Ⅲ層	4	48.3
VIB-54	Ⅱ層	2	19.4
VIC-53	Ⅱ～Ⅲ層	5	95.8
VIC-54	Ⅲ層	7	26.4
VIC-55	Ⅱ層	1	14.7
VIC-56	Ⅱ層	2	41.4
VIC-56	Ⅱ層	3	63.1
VIC-56	Ⅱ層	1	20.3
VID-51	Ⅱ～Ⅲ層	3	21.8
VID-51	Ⅲ層	2	4.6
VID-53	Ⅱ～Ⅲ層	5	55.5
VID-55	Ⅲ層	2	17.9
VID-56	Ⅱ～Ⅲ層	1	18.7
VID-56	Ⅲ層	6	24.2
VIE-53	Ⅱ層	6	70.4
VIE-53	Ⅱ層	1	19.3
VIE-53	Ⅱ層	7	21.7
VIE-53	Ⅱ層	3	11.3
VIE-53	Ⅱ層	1	11.3
VIE-53	Ⅱ層	1	29.1
VIE-53	Ⅱ層	4	19.5
VIE-55	Ⅱ～Ⅲ層	4	51
VIE-56	Ⅱ層	1	26.5
VIF-53	Ⅱ～Ⅲ層	4	26.4
VIF-54	Ⅱ～Ⅲ層	1	7.9
VIF-55	Ⅲ層	2	14.4
VIF-61	Ⅱ～Ⅲ層	5	31.6
VIF-64	Ⅱ～Ⅲ層	8	65.8
VIG-53	Ⅱ～Ⅲ層	1	7.7
VIG-54	Ⅱ層	1	9.8
VIG-54	Ⅱ層	1	7.4
VIG-54	Ⅱ～Ⅲ層	1	21
VIG-60	Ⅱ～Ⅲ層	111	1061.4
VIG-61	Ⅱ～Ⅲ層	1	7.6
VIG-63	Ⅱ～Ⅲ層	1	5.9
VIH-63	Ⅱ～Ⅲ層	2	16.2
VII-54	Ⅱ～Ⅲ層	2	18.4
VIJ-59	Ⅱ～Ⅲ層	3	30.3
VIJ-62	Ⅱ～Ⅲ層	3	36.5
VIK-55	Ⅱ～Ⅲ層	3	16.6
VIK-61	Ⅱ～Ⅲ層	2	14.7
VIK-62	Ⅱ～Ⅲ層	2	9.9
VIK-64	Ⅱ～Ⅲ層	1	8.9
VIK-67	Ⅱ～Ⅲ層	1	4.8
トレンチ9	表採	20	285.1
トレンチ10	表採	19	307.5
トレンチ11	Ⅱ～Ⅲ層	126	1799.3
トレンチ12	表採	4	84.3
トレンチ18	Ⅱ～Ⅲ層	14	320
トレンチ19	表採	1	2
トレンチ20	表採	5	84.7
トレンチ21	表採	1	38.3
トレンチ23	表採	7	159.5
トレンチ25	表採	3	28.5

第４章　自然科学分析

第１節－１　新沢 (2) 遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

新沢（２）遺跡は、青森県西津軽郡鰺ヶ沢町大字北浮田町字新沢（北緯 40°　47′　10.92″、東経 140°　16′　10.87″）に所在し、鳴沢川右岸の河岸段丘上（標高約 30 ～ 35m）に立地する。測定対象試料は、遺構から出土した炭化材と炭化クリ子葉の合計７点である（表１）。

試料のうち、14ARA2-3、4 は遺構の底面付近、14ARA2-1、2、5 は遺構の確認面もしくはほぼ確認面に当たる位置で出土した。14ARA2-7 は、ほぼ確認面から出土した炭化材と合わせて取り上げた土壌中より、水洗選別で検出した。試料の時期は、14ARA2-1 ～ 4、7 が縄文時代後期前葉頃、14ARA2-5 が弥生時代後期頃、14ARA2-6 が弥生時代中期頃と推定されている。（樹種同定結果は第４章第２節参照）

表１　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C(‰) (AMS)	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC(%)
IAAA-150622	14ARA2-1	SI-03 C-1　口区1 層	炭化物	AAA	**-28.40 ± 0.15**	**2,220 ± 20**	**75.89 ± 0.21**
IAAA-150623	14ARA2-2	SI-04 C-1　覆土	炭化物	AAA	**-26.28 ± 0.18**	**1,830 ± 20**	**79.65 ± 0.22**
IAAA-150624	14ARA2-3	SK-36 C-2　底面	炭化物	AAA	**-24.40 ± 0.19**	**3,650 ± 20**	**63.50 ± 0.17**
IAAA-150625	14ARA2-4	SK-37 C-2　最下層上面	炭化物	AAA	**-24.98 ± 0.17**	**3,710 ± 20**	**63.01 ± 0.19**
IAAA-150626	14ARA2-5	SN-9 C-1　確認面	炭化物	AAA	**-19.44 ± 0.17**	**2,110 ± 20**	**76.87 ± 0.21**
IAAA-150627	14ARA2-6	SK-3　2 層下位	炭化物	AAA	**-24.02 ± 0.18**	**1,840 ± 20**	**79.54 ± 0.18**
IAAA-150628	14ARA2-7	SI-03 C-1　口区1 層	炭化クリ子葉	AAA	**-26.03 ± 0.17**	**3,480 ± 20**	**64.88 ± 0.18**

[#7458]

２　測定の意義

遺構が機能した時期を推定する。

３　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除き、必要量の試料を採取、乾燥させ、秤量する（付表「処理前試料量」）。

（２）酸－アルカリ－酸（AAA:Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させ、秤量する（付表「処理後試料量」）。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。

（３）必要量を採取、秤量（付表「燃焼量」）した試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製、定量する。この二酸化炭素中の炭素相当量を算出する（付表「精製炭素量」）。

（５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（6）グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13C}濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。測定回数と^{14}Cカウント数を付表に示す。

5　算出方法

（1）δ^{13}C は、試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。^{13}C/^{12}C比は付表に記載する。

（2）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中14C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。^{14}C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

（3）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（14Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（1σ=68.2%）あるいは2標準偏差（2σ=95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

６　測定結果

試料の測定結果を表１、２及び付表に示す。

試料の ^{14}C 年代は、14ARA2-1 が 2220 ± 20yrBP、14ARA2-2 が 1830 ± 20yrBP、14ARA2-3 が 3650 ± 20yrBP、14ARA2-4 が 3710 ± 20yrBP、14ARA2-5 が 2110 ± 20yrBP、14ARA2-6 が 1840 ± 20yrBP、14ARA2-7 が 3480 ± 20yrBP である。暦年較正年代（1 σ）は、古い方から順に 14ARA2-3、4 が縄文時代後期前葉頃、14ARA2-7 が後期中葉頃、14ARA2-1、5 が弥生時代中期頃、14ARA2-2、6 が後期頃に相当する（小林 2009、小林編 2008）。推定される時期に対して 14ARA2-3、4 は整合するが、14ARA2-1、2 が大幅に新しいなど、推定と一致しない試料がある。推定と一致しない試料には、遺構の確認面もしくはほぼ確認面とされる位置から採取された試料が多い傾向が認められる。

なお、試料 14ARA2-2、6 が含まれる１～３世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線 IntCal に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある（尾嵜 2009、坂本 2010 など）。その日本版較正曲線を用いてこれらの試料の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率はすべて 60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表 2　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-150622	2,270 ± 20	75.37 ± 0.20	2,216 ± 21	358calBC - 350calBC (6.0%) 307calBC - 275calBC (24.3%) 259calBC - 210calBC (37.8%)	366calBC - 203calBC (95.4%)
IAAA-150623	1,850 ± 20	79.44 ± 0.22	1,828 ± 22	139calAD - 197calAD (53.7%) 206calAD - 221calAD (14.5%)	129calAD - 240calAD (95.4%)
IAAA-150624	3,640 ± 20	63.58 ± 0.17	3,647 ± 22	2108calBC - 2106calBC (1.6%) 2036calBC - 1966calBC (66.6%)	2130calBC - 2087calBC (16.9%) 2048calBC - 1943calBC (78.5%)
IAAA-150625	3,710 ± 20	63.01 ± 0.19	3,710 ± 23	2139calBC - 2119calBC (16.9%) 2097calBC - 2040calBC (51.3%)	2196calBC - 2170calBC (9.7%) 2147calBC - 2031calBC (85.7%)
IAAA-150626	2,020 ± 20	77.76 ± 0.21	2,112 ± 22	178calBC - 101calBC (68.2%)	198calBC - 86calBC (86.0%) 80calBC - 55calBC (9.4%)
IAAA-150627	1,820 ± 20	79.70 ± 0.18	1,838 ± 18	134calAD - 178calAD (43.7%) 189calAD - 213calAD (24.5%)	128calAD - 233calAD (95.4%)
IAAA-150628	3,490 ± 20	64.74 ± 0.18	3,475 ± 22	1876calBC - 1842calBC (26.6%) 1820calBC - 1797calBC (16.2%) 1781calBC - 1748calBC (25.4%)	1882calBC - 1742calBC (92.9%) 1710calBC - 1701calBC (2.5%)

[参考値]

文献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散，西本豊弘編，新弥生時代のはじまり　第４巻　弥生農耕のはじまりとその年代，雄山閣，55-82

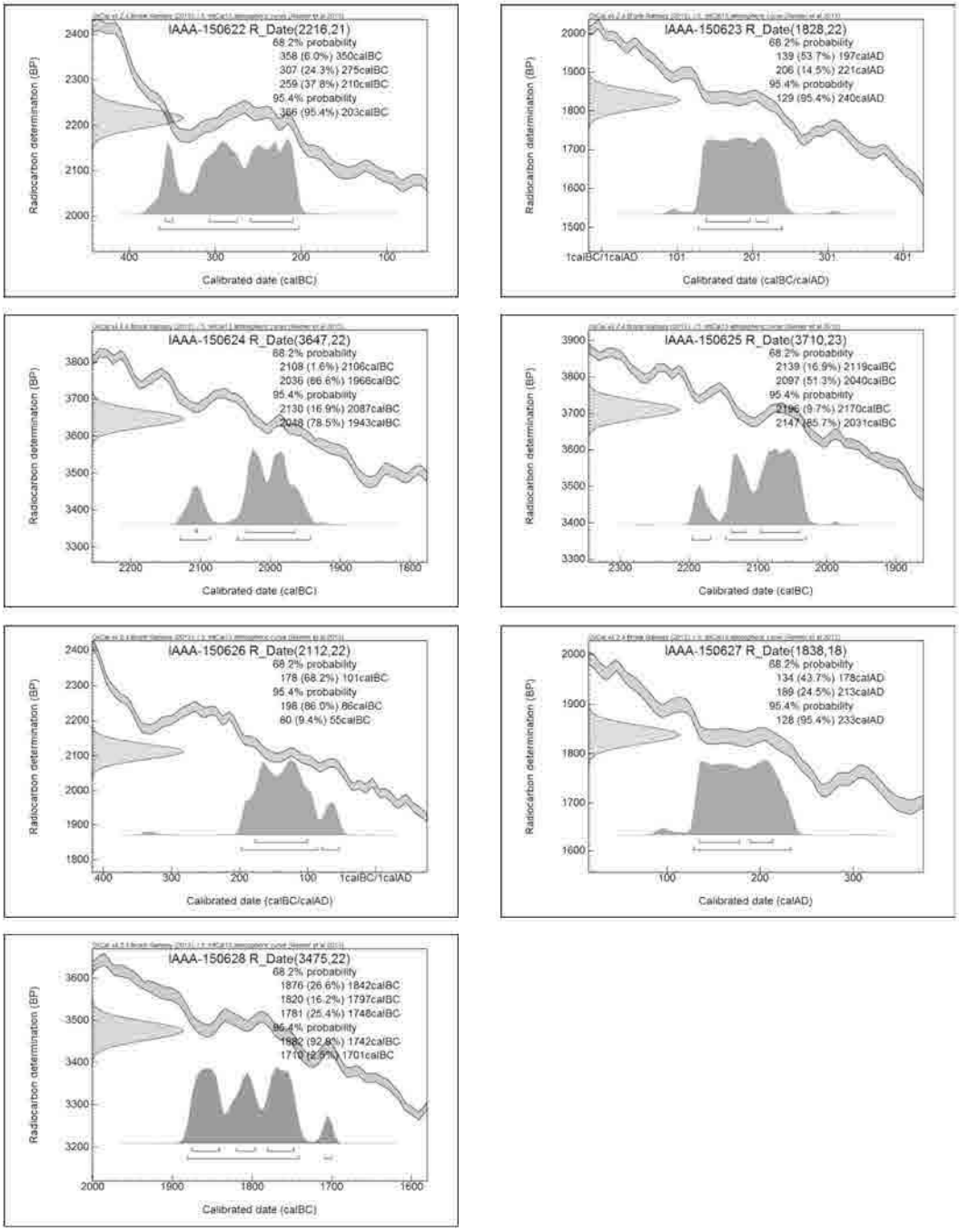
小林達雄編 2008 総覧縄文土器，総覧縄文土器刊行委員会，アム・プロモーション

尾嵜大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代，設楽博己，藤尾慎一郎，松木武彦編弥生時代の考古学1　弥生文化の輪郭，同成社，225-235

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木－弥生から古墳へ－，第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集，(株) 加速器分析研究所，85-90

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363



[参考]暦年較正年代グラフ

第１節－２　放射性炭素年代測定結果

株式会社パレオ・ラボ

１．はじめに

鰺ヶ沢町に位置する新沢（1）遺跡と新沢（2）遺跡から出土した炭化材について、加速器質量分析法(AMS 法)による放射性炭素年代測定を行った。なお､同一試料を用いて樹種同定も行われている(第４章第２節参照)。

２．試料と方法

試料は、新沢（1）遺跡の土坑 SK18 の１層から出土した炭化材１点（PLD-30400）と、新沢（2）遺跡の溝跡 SN09 の１層から出土した炭化材１点（PLD-30401）の、計２点である。どちらも最終形成年輪は残存していない部位不明の炭化材である。調査所見による遺構の時期はどちらも不明であるが、SK18 の周囲からは平安時代の竪穴住居跡や、縄文時代晩期初頭の土坑と遺物などが確認されており、土坑 SK18 も平安時代もしくは縄文時代晩期の遺構である可能性が推測されている。一方、SN09 の周辺では縄文時代後期（十腰内１式）と、弥生時代中期（五所式？）、弥生時代中期末（念仏間式）の遺構や遺物が確認されている。

測定試料の情報、調製データは表１のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表1　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	考古学的手法による推定時期	前処理データ
PLD-30400	遺跡名:新沢(1)遺跡 遺構:SK18 層位:1 試料No.炭-26 遺物No.14ARA1_J-21	種類:炭化材（コナラ属コナラ節） 試料の性状:最終形成年輪以外、部位不明 形状（サイズ）：破片（10×1×8cm） 状態:dry	縄文晩期か 平安時代	前処理前重量:15.16mg 燃焼量:5.27mg 精製炭素量:3.22mg 炭素回収量:1.05mg
PLD-30401	遺跡名:新沢(2)遺跡 遺構:SN09 層位:1 試料No.炭-43 遺物No.14ARA2_J-12	種類:炭化物（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状:最終形成年輪以外、部位不明 形状（サイズ）：破片（2.5×2×5cm） 状態:dry	不明 (弥生後期？)	前処理前重量:71.93mg 燃焼量:5.75mg 精製炭素量:3.50mg 炭素回収量:1.03mg

2点ともに前処理は超音波洗浄酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)

３．結果

表２に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ ^{13}C)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、表３に $^{13}C/^{12}C$ 比を、図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

表2　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	測定回数	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-30400 新沢(1)遺跡 SK18	9	-25.55±0.16	1226±18	1225±20	722-740 cal AD (17.8%) 767-778 cal AD (12.4%) 791-807 cal AD (12.3%) 812-827 cal AD (9.3%) 840-863 cal AD (16.4%)	695-700 cal AD (0.8%) 710-745 cal AD (23.3%) 764-881 cal AD (71.2%)
PLD-30401 新沢(2)遺跡 SN09	9	-26.16±0.19	2071±20	2070±20	147-145 cal BC (1.7%) 111- 47 cal BC (66.5%)	167-41 cal BC (95.4%)

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

表3　各測定での$^{13}C/^{12}C$比(%)

測定番号	PLD-30400	PLD-30401
1	1.0876	1.0866
2	1.0878	1.0870
3	1.0879	1.0872
4	1.0883	1.0872
5	1.0881	1.0875
6	1.0881	1.0875
7	1.0882	1.0876
8	1.0882	1.0878
9	1.0884	1.0881

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4．考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち 2σ暦年代範囲（確率 95.4%）に着目して結果を整理する。なお、弥生時代の暦年代については小林（2009）を参照した。

新沢（1）遺跡の土坑 SK18 から出土した炭化材（PLD-30400）は、695-700 cal AD (0.8%)、710-745 cal AD (23.3%)、764-881 cal AD (71.2%) であった。これは 7 世紀末～9 世紀後半で、飛鳥～平安時代前期に相当する。調査所見による SK18 の時期は不明であるが、周辺にある遺構の時期から、縄文時代晩期もしくは平安時代の可能性が推測されている。したがって、土坑 SK18 は平安時代前期の可能性が高い。

新沢（2）遺跡の焼土跡 SN09 から出土した炭化材（PLD-30401）は、167-41 cal BC (95.4%) であった。これは弥生時代中期後半に相当する。調査所見による SN09 の時期は不明であるが、周辺では縄文時代後期（十腰内１式）、弥生時代中期（五所式？）、弥生時代中期末（念仏間式）の遺構や遺物が確認されている。なお、試料の樹種はコナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属）であった（樹種同定

の報告参照)。アカガシ亜属は現在の青森県には分布しておらず、分布の北限が近いアカガシ亜属はアカガシ、ツクバネガシ、アラカシ、ウラジロガシで宮城県までの分布である（佐竹ほか，1989)。また、青森県内の江戸時代以前の遺跡ではアカガシ亜属の出土例は確認されておらず、弥生時代中期におけるアカガシ亜属の木製品の出土例の北限は群馬県である（伊東・山田編，2012)。試料は破片のため用途不明であるが、他の地域から持ち込まれた木材の可能性が考えられる。

また、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果)。今回の試料はどちらも最終形成年輪を欠く部位不明の炭化材であり、年代測定の結果が古木効果の影響を受け、木材が伐採された年代よりもやや古い年代を示している可能性がある。

（伊藤茂・安昭炫・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtatidze・黒沼保子）

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学－出土木製品用材データベース－. 449p, 海青社.

小林謙一（2009）近畿地方以東の地域への拡散. 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第４巻　弥生農耕のはじまりとその年代」: 55-82, 雄山閣.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

佐竹義輔・原　寛・亘理俊次・冨成忠夫（1989）日本の野生植物. 木本Ⅰ. 270p, 平凡社.

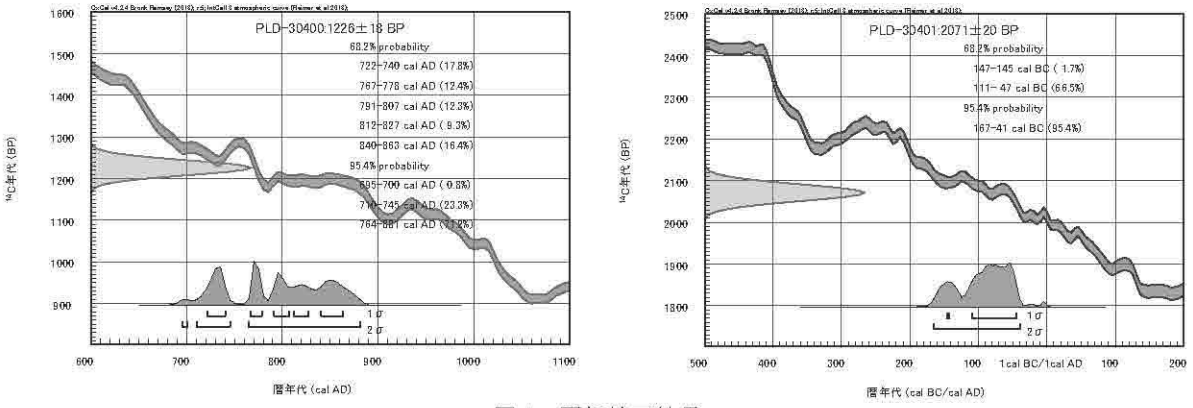


図１　暦年較正結果

第１節－３　新沢（１）遺跡・金沢街道沢（１）遺跡の放射性炭素年代測定（ウィグルマッチング法）

株式会社パレオ・ラボ

１．はじめに

新沢（１）遺跡と金沢街道沢（１）遺跡から出土した炭化材について、ウィグルマッチング法を用いた加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて樹種同定も行われている（第４章第２節樹種同定の報告参照）。

２．試料と方法

試料は、炭化材が２個体である。１個体は新沢（１）遺跡の平安時代（９世紀末～10 世紀初頭）の竪穴住居跡 SI03 の５層から出土した炭化材で、建築材と考えられる。部位不明で、最終形成年輪は残存していなかった。樹皮に近い方から 1-5 年目（PLD-29976）と、16-20 年目（PLD-29977）、31-35 年目（PLD-29978）の年輪部分から測定試料を採取した。もう１個体は、金沢街道沢（１）遺跡の奈良時代（８世紀）の竪穴住居跡 SI08 の覆土から出土した炭化材で、建築材と考えられる。最終形成年輪は残存していなかったが、辺材が残っていた。樹皮に近い方から 1-5 年目（PLD-29979）と、16-20 年目（PLD-29980）、31-35 年目（PLD-29981）の年輪部分から測定試料を採取した。

測定試料の情報、調製データは表１のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表1　ウィグルマッチング測定試料および処理

測定番号	遺跡・試料データ	推定時期	採取データ	前処理
PLD-29976	遺跡名：新沢（1）遺跡 遺構：SI03 層位：5層 試料No.炭-13 遺物No.14ARA1_J-10 種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 試料の形状：残存径7×4cm、残存年輪数38年 状態：dry	平安時代（9世紀末～10世紀初頭）	採取位置：樹皮側から1-5年目	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-29977			採取位置：16-20年目	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-29978			採取位置：31-35年目	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-29979	遺跡名：金沢街道沢（1）遺跡 遺構：SI08 層位：覆土 試料No.炭-49 遺物No.14KANA_J-4 種類：炭化材（トネリコ属シオジ節） 試料の性状：最終形成年輪以外（辺材） 試料の形状：残存直径3.8cm、残存年輪数36年 状態：dry	奈良時代（8世紀）	採取位置：樹皮側から1-5年目	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-29980			採取位置：16-20年目	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-29981			採取位置：31-35年目	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）

３．結果

表２、３に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、ウィグルマッチング結果を、表３に ^{13}C/^{12}C 比を、図１、２にウィグルマッチング結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正、ウィグルマッチング法の詳細は以下のとおりである。

［暦年較正］

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

［ウィグルマッチング法］

ウィグルマッチング法とは、複数の試料を測定し、それぞれの試料間の年代差の情報を用いて試料の年代パターンと較正曲線のパターンが最も一致する年代値を算出することによって、高精度で年代値を求める方法である。測定では、得られた年輪数が確認できる木材について、１年毎或いは数年分をまとめた年輪を数点用意し、それぞれ年代測定を行う。個々の測定値から暦年較正を行い、得られた確率分布を最外試料と当該試料の中心値の差だけずらしてすべてを掛け合わせることにより最外試料の確率分布を算出し、年代範囲を求める。なお、得られた最外試料の年代範囲は、まとめた試料の中心の年代を表している。そのため試料となった木材の最外年輪年代を得るためには、最外試料の中心よりも外側にある年輪数（今回は２年輪：2.5 年輪の小数以下切り捨て）を考慮する必要がある。

４．考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち２σ暦年代範囲（確率 95.4%）に着目して、結果を整理する。

新沢（１）遺跡の竪穴住居跡 SI03 から出土した炭化材（炭 -13：PLD-29976 ～ 29978）の最外年輪年代は、897-937 cal AD（50.3%）および 944-977 cal AD（45.1%）であった。これは９世紀末～ 10 世紀後半で、平安時代前期～中期に相当する。したがって、SI03 の推定時期である平安時代（９世紀末～ 10 世紀初頭）に対して整合的である。

金沢街道沢（１）遺跡の竪穴住居跡 SI08 から出土した炭化材（炭 -49:PLD-29979 ～ PLD-29981）は、

表2　新沢（1）遺跡SI03出土の炭-13の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果

測定番号	測定回数	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-29976	9	-27.05±0.17	1132±18	1130±20	890-902 cal AD (14.9%) 920-962 cal AD (53.3%)	879-978 cal AD (95.4%)
PLD-29977	9	-26.22±0.16	1135±17	1135±15	888-902 cal AD (17.0%) 920-961 cal AD (51.2%)	783-787 cal AD (0.6%) 877-975 cal AD (94.8%)
PLD-29978	9	-27.78±0.19	1158±18	1160±20	778-790 cal AD (9.9%) 827-840 cal AD (6.8%) 864-899 cal AD (33.2%) 924-945 cal AD (18.2%)	776-902 cal AD (71.9%) 920-962 cal AD (23.5%)
			最外試料年代		905-924 cal AD (34.7%) 953-969 cal AD (33.5%)	895-935 cal AD (50.3%) 942-975 cal AD (45.1%)
			最外年輪年代		907-926 cal AD (34.7%) 955-971 cal AD (33.5%)	897-937 cal AD (50.3%) 944-977 cal AD (45.1%)

表3　金沢街道沢（1）遺跡SI08の炭-49の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果

測定番号	測定回数	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-29979	9	-25.31±0.14	1206±18	1205±20	774-778 cal AD (4.0%) 790-829 cal AD (37.8%) 839-866 cal AD (26.4%)	769-885 cal AD (95.4%)
PLD-29980	9	-26.18±0.14	1306±18	1305±20	666-694 cal AD (47.3%) 747-763 cal AD (20.9%)	662-717 cal AD (68.6%) 742-767 cal AD (26.8%)
PLD-29981	9	-27.08±0.18	1307±18	1305±20	666-693 cal AD (49.1%) 748-762 cal AD (19.1%)	661-717 cal AD (69.4%) 742-767 cal AD (26.0%)
			最外試料年代		770-784 cal AD (68.2%)	696-706 cal AD (3.3%) 713-738 cal AD (14.3%) 766-785 cal AD (77.8%)
			最外年輪年代		772-786 cal AD (68.2%)	698-708 cal AD (3.3%) 715-740 cal AD (14.3%) 768-787 cal AD (77.8%)

698-708 cal AD (3.3%)、715-740 cal AD (14.3%)、768-787 cal AD (77.8%) であった。これは７世紀末～８世紀後半で、飛鳥時代～奈良時代に相当する。したがって、SI08の推定時期である奈良時代（８世紀）に対して整合的である。

木材は、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料では、新沢（１）遺跡の竪穴住居跡SI03出土の炭-13（PLD-29976～29978）は、最終形成年輪を欠く部位不明の炭化材（建築材）であり、年代測定の結果が、木材が伐採された年代よりもやや古い年代を示している可能性がある。一方、金沢街道沢（１）遺跡の竪穴住居跡SI08出土の炭-49（PLD-29979～PLD-29981）は、最終形成年輪が残存していなかったが辺材は残っている炭化材（建築材）のため、測定結果は伐採された年代に近い年代を示していると考えられる。

（伊藤　茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtatidze・黒沼保子）

参考文献

Bronk Ramsey, C., van der Plicht, J., and Weninger, B. (2001) 'Wiggle matching' radiocarbon dates. Radiocarbon, 43(2A), 381-389.

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」：3-20，日本第四紀学会．

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

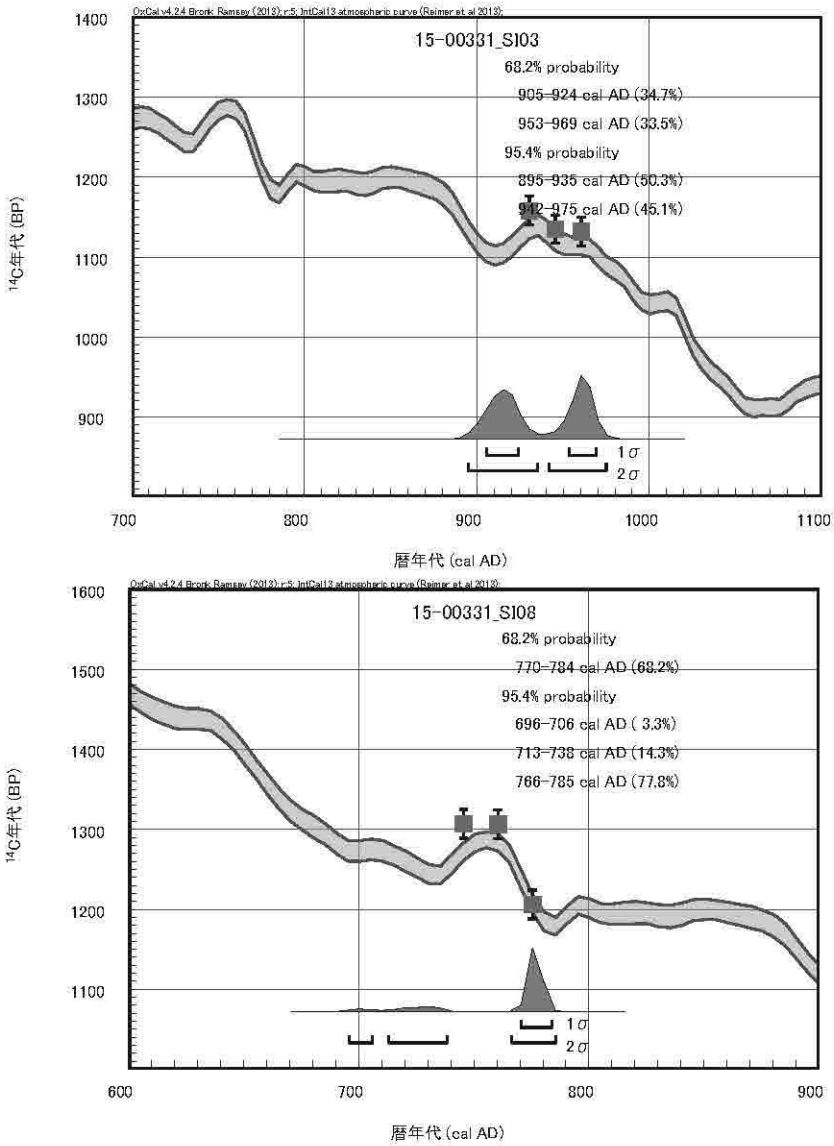
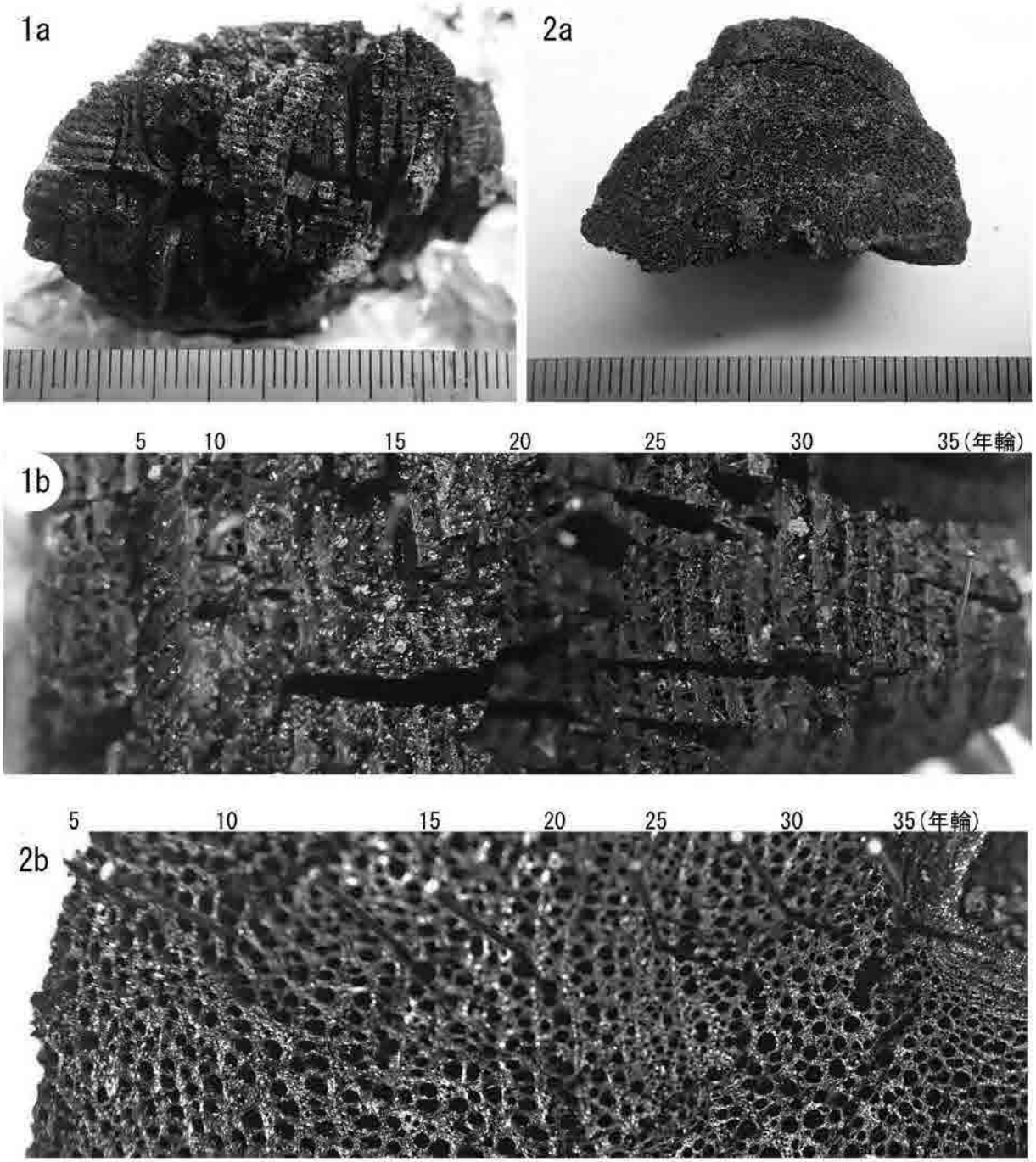


図１　ウィグルマッチング結果



図版1　年代測定を行った木材と年輪計測結果

11a. 新沢（1）遺跡SI03出土炭化材の横断面（PLD-29976～PLD-29978：形状不明、残存径7×4cm）

1b. 年輪計測結果（38年輪、最終形成年輪なし、樹種：クリ）

2a. 金沢街道沢（1）遺跡SI08出土炭化材の横断面（PLD-29979～PLD-29981：半割状、直径3.8cm）

2b. 年輪計測結果（36年輪、最終形成年輪なし：辺材、樹種：トネリコ属シオジ節）

第２節 新沢（１）遺跡、新沢（２）遺跡、金沢街道沢（１）遺跡出土炭化材の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ

１．はじめに

西津軽郡鰺ヶ沢町に所在する新沢（１）遺跡と新沢（２）遺跡、金沢街道沢（１）遺跡から出土した炭化材について樹種同定を行った。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている（第４章第１節 放射性炭素年代測定の報告参照）。

２．試料と方法

試料は、炭化材 55 点である。新沢（１）遺跡では、縄文時代？の土坑 SK18、平安時代の竪穴住居跡である SI02 のカマドと SI03、SI05 と、平安時代の製炭土坑 SK12 から出土した炭化材、計 21 点である。新沢（２）遺跡では、縄文時代後期の竪穴住居跡 SI03 と SI04 と、フラスコ状土坑 SK36 と SK34、弥生時代？の土坑 SK03、平安時代の竪穴住居跡 SI01、土坑 SK04 と SK07、SK09、SK10、時期不明の溝跡 SN09 から出土した炭化材、計 12 点である。金沢街道沢（１）遺跡では、奈良時代の竪穴住居跡 SI08 と SI16、奈良～平安時代の土坑 SK01 から出土した炭化材が計 22 点であるが、同一試料内に複数樹種を含む試料があったため、分析の総数は 24 点となった。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で３断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、直径１cm の真鍮製試料台に試料を両面テープで固定した。その後、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製　VE-9800）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。残りの試料は、埋蔵文化財調査センターに保管されている。

３．結果

樹種同定の結果、針葉樹はスギの１分類群、広葉樹はクリと、ブナ属、コナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属）、コナラ属コナラ節（以下、コナラ節）、モクレン属、クスノキ科、キハダ、カエデ属、ニシキギ属、タラノキ、トネリコ属シオジ節（以下、シオジ節）の 11 分類群の、計 12 分類群が確認された。遺跡別の樹種組成を表１、結果の一覧を付表１に示す。

新沢（１）遺跡では、クリが 17 点と、ブナ属とコナラ節、クスノキ科、タラノキが各１点みられた。

新沢（２）遺跡では、クリが８点と、ブナ属が２点、アカガシ亜属とカエデ属が各１点みられた。

金沢街道沢（１）遺跡では、モクレン属が９点と、シオジ節が７点、クリが４点、スギが２点、キハダとニシキギ属が各１

表1　遺跡別の樹種同定結果

樹種／遺跡	新沢(1)	新沢(2)	金沢街道沢(1)	計
スギ			2	2
クリ	17	8	4	29
ブナ属	1	2		3
コナラ属アカガシ亜属		1		1
コナラ属コナラ節	1			1
モクレン属			9	9
クスノキ科	1			1
キハダ			1	1
カエデ属		1		1
ニシキギ属			1	1
タラノキ	1			1
トネリコ属シオジ節			7	7
計	21	12	24	57

点みられた。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

（1）スギ　*Cryptomeria japonica*（L.f.）D.Don　スギ科　図版１　1a-1c（炭-57）

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、１分野に通常２個並ぶ。

スギは暖帯から温帯下部に生育する常緑高木である。材は比較的軽軟で、切削加工は容易であり、割裂性は大きい。

（2）クリ　*Castanea crenata* Siebold et Zucc.　ブナ科　図版１　2a-2c（炭-3）

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。

クリは温帯下部から暖帯に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性および耐湿性に優れ、保存性が高い。

（3）ブナ属　*Fagus*　ブナ科　図版１　3a-3c（炭-1）

小型で単独の道管が密に分布し、晩材部ではやや径を減ずる散孔材である。道管の穿孔は、単一のものと階段状の２種類がある。放射組織はほぼ同性で、単列のもの、２～数列のもの、広放射組織の３種類がある。

ブナ属は温帯に分布する落葉高木で、ブナとイヌブナがある。材は、堅硬および緻密で、靭性があるが保存性は低い。

（4）コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科　図版１　4a-4c（炭-43）

円形でやや大型の道管が、単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織がある。

アカガシ亜属は主に暖帯に分布する常緑高木で、アカガシやシラカシ、ツクバネガシ、アラカシなど８種がある。イチイガシとシリブカガシ－マテバシイ以外は木材組織による識別が困難なため、イチイガシとシリブカガシ－マテバシイを除いたアカガシ亜属とする。材は、きわめて堅硬および強靭で、水湿に強い。

（5）コナラ属コナラ節　*Quercus* sect. *Prinus*　ブナ科　図版１　5a-5c（炭-26）

大型の道管が年輪のはじめに１列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の２種類がある。

コナラ節は温帯下部および暖帯に分布する落葉高木で、カシワとミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は全体的に重硬で、加工困難である。

（6）モクレン属　*Magnolia*　モクレン科　図版１・２　6a-6c（炭-75）

小型の道管が、単独もしくは３～４個複合して均等に分布する散孔材である。木繊維の壁は薄い。道管相互壁孔は対列～階段状、道管の穿孔は単一である。放射組織は１～２列幅で、上下端の１～２細胞が直立もしくは方形細胞である異性である。

モクレン属は温帯から暖帯上部に分布する常緑または落葉の低木および高木で、タイサンボクやホ

オノキ、モクレン、コブシなどがある。材は一般にやや軽軟または中庸程度だが、緻密で狂いが少ない。

（７）クスノキ科　*Lauraceae*　図版２　7a-7c（炭-22）

やや小型の道管が、単独ないし２～４個複合してまばらに分布する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状～翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で、１～３列幅である。

クスノキ科は熱帯から温帯に分布する常緑または落葉の高木もしくは低木である。ニッケイ属やタブノキ属、クロモジ属など８属がある。

（８）キハダ　*Phellodendron amurense* Pupr.　ミカン科　図版２　8a-8c（炭-80）

大型で丸い道管が早材部に配列し、晩材部ではごく小型で薄壁の小道管が集団をなして帯状～斜線状に配列する環孔材である。道管に赤褐色の樹脂が見られ、穿孔は単一である。放射組織はほぼ同性、１～６列幅である。

キハダは温帯に分布する落葉高木である。材はやや軽軟で加工容易だが、水湿に強い。

（９）カエデ属　*Acer*　カエデ科　図版２　9a-9c（炭-33）

径が中型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して分布する散孔材である。横断面において木部繊維の壁厚の違いによる雲紋状の模様がみられる。道管の穿孔は単一で、道管壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織はほぼ同性で、１～５列幅である。

カエデ属は主に温帯に分布する落葉高木で、オオモミジやハウチワカエデ、イタヤカエデなど26種がある。材は全体的に緻密で靭性がある。

(10) ニシキギ属　*Euonymus*　ニシキギ科　図版２　10a-10c（炭-68）

小型の道管が、単独で年輪内に均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は、すべて平伏細胞からなる同性である。

ニシキギ属は暖帯から温帯に分布する落葉または常緑の高木ないし低木であるが、ときに藤本もある。ニシキギやマサキ、マユミなど18種がある。マユミの材はやや硬堅だが、割裂は容易である。

(11) タラノキ　*Aralia elata* (Miq.) Seem.　ウコギ科　図版２・３　11a-11c（炭-21）

年輪のはじめにやや大型の道管が数列並び、晩材部では小道管が単独もしくは数個複合して接線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は３～５列幅の異性で、不完全な鞘細胞がみられる。

タラノキは温帯から暖帯に分布する落葉低木である。材の強度は中庸である。

(12) トネリコ属シオジ節　*Fraxinus* sect. *Fraxinaster*　モクセイ科　図版３　12a-12c（炭-47）

年輪のはじめに大型の道管が数列並ぶ環孔材で、晩材部では厚壁の小道管が単独もしくは放射方向に２～３個複合して散在する。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、１～３列幅である。

シオジ節は温帯に分布する落葉高木で、シオジとヤチダモがある。材はやや重硬で粘りがあり、加工性および保存性は中庸である。

４．考察

新沢（１）遺跡の樹種同定結果を表２に示す。平安時代の竪穴住居跡SI02のカマド出土の炭化材はブナ属であった。形状は破片であり、カマドから出土しているため燃料材と思われる。同じく平安時代の竪穴住居跡であるSI03、SI03のPit1、SI05出土の炭化材は、いずれもクリであった。試料の

形状は長径２～６㎝程の破片が多いが、SI03 では角材状やみかん割り状もみられた。また、年輪が密に詰まっている試料が多い。用途は建築材と推測されるが、出土状況と併せて検討する必要がある。縄文時代と思われる土坑 SK18 ではコナラ節１点がみられた。形状は薄い板状だが、非常に状態が悪いため、元の形状および用途は不明である。平安時代の製炭土坑 SK12 では、クリが２点と、クスノキ科とタラノキが各１点みられた。遺構は製炭土坑と考えられているため、試料は燃料材か炭製品の一部と推測される。試料の形状は、クリは破片と半径 3.5 ㎝の節、クスノキ科とタラノキは直径１㎝の丸木であり、小径の材を利用していたと思われる。なお、クスノキ科の炭化材は半割にした断面に加工痕がみられた。

表2　新沢(1)遺跡の樹種同定結果

遺構の種別	竪穴住居跡				土坑	製炭土坑	
遺構名	SI02カマド	SI03	SI03Pit1	SI05	SK18	SK12	
樹種　時期	平安				縄文？	平安	計
クリ		12	1	2		2	17
ブナ属	1						1
コナラ属コナラ節					1		1
クスノキ科						1	1
タラノキ						1	1
計	1	12	1	2	1	4	21

新沢（２）遺跡の樹種同定結果を表３に示す。縄文時代後期の竪穴住居跡 SI03 と SI04 の炭化材はクリが各１点、フラスコ状土坑 SK36 の炭化材がクリ、SK37 の炭化材がブナ属であった。SI04 の試料は角材状で建築材の可能性があるが、それ以外の試料はほとんどが破片で、元の形状や用途は不明である。弥生時代？の土坑 SK03 の炭化材はカエデ属であった。部位は節であり、元の試料の形状や用途は不明である。平安時代の竪穴住居跡 SI01 と SI01 の Pit1 の炭化材はクリが各１点であった。また、平安時代の製炭土坑 SK04 と SK07、SK09 でクリ、SK10 でブナ属がみられた。製炭土坑の炭化材は燃料材か炭製品の一部と考えられる。SK10 のブナ属は節、それ以外の試料は破片で、いずれも元の形状は不明である。時期不明の焼土跡 SN09 では、アカガシ亜属がみられた。アカガシ亜属の分布の北限はアラカシが宮城県・石川県で、その他のアカガシ亜属の樹種は福島県以南である（平井，1996）。したがって、青森県には分布しておらず、アカガシ亜属は現在の青森県内では五所川原市の隈無（8）遺跡の江戸時代後半以降の農耕具で１点確認されているだけである（伊東・山田編，2012）。本試料もアカガシ亜属が分布している東北地方南部以南からの搬入品、もしくは新しい時期の木製品の一部である可能性が考えられる。

表3　新沢(2)遺跡の樹種同定結果

遺構の種別	竪穴住居跡				フラスコ状土坑		土坑	製炭土坑				溝跡	
遺構名	SI03	SI04	SI01	SI01Pit1	SK36	SK37	SK03	SK04	SK07	SK09	SK10	SN09	
時期	縄文後期		平安		縄文後期		弥生？	平安				不明	計
クリ	1	1	1	1	1			1	1	1			8
ブナ属						1					1		2
コナラ属アカガシ亜属												1	1
カエデ属							1						1
計	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	12

金沢街道沢（１）遺跡の樹種同定結果を表４に示す。奈良時代の竪穴住居跡 SI08 ではシオジ節が７点と、クリとスギが各２点みられた。同じく奈良時代の竪穴住居跡 SI16 では、モクレン属が９点と、

クリが２点、ニシキギ属が１点であった。試料の形状は、SI08 のシオジ節で角材？と半割状が各１点みられたが、それ以外は破片で元の形状は不明であった。試料は建築材の可能性が考えられ、SI08 ではシオジ節、SI16 ではモクレン属が多用されており、竪穴住居跡によって異なる樹種組成がみられた。また、奈良～平安時代の土坑 SK01 の炭化材１点は、キハダであった。形状は破片であり、元の形状および用途は不明である。

表4　金沢街道沢(1)遺跡の樹種同定結果

遺構の種別	竪穴住居跡		土坑	
遺構名	SI08	SI16	SK01	
樹種　時期	奈良		奈良～平安	計
スギ	2			2
クリ	2	2		4
モクレン属		9		9
キハダ			1	1
ニシキギ属		1		1
トネリコ属シオジ節	7			7
計	11	12	1	24

青森県を含む東北地方における建築材は、縄文時代は圧倒的にクリが多く、弥生～平安時代にはクリとコナラ節を中心とした広葉樹を多用する傾向が確認されている（荒井，2012）。今回分析を行った３遺跡では、新沢（２）遺跡の縄文時代の竪穴住居跡 SI03 と SI04 でクリ、金沢街道沢（１）遺跡の奈良時代の竪穴住居跡 SI08 と SI16、新沢（1）遺跡の平安時代の竪穴住居跡 SI03 と SI05、新沢（２）遺跡の平安時代の竪穴住居跡 SI01 でクリの使用が認められた。ただし、金沢街道沢（１）遺跡ではクリの使用もみられるがシオジ節とモクレン属が多い。したがって、今回の竪穴住居跡出土の炭化材が建築材であれば、木材利用傾向は周辺地域のクリを多用する傾向と一致する。また、土坑でも平安時代の製鉄関連遺構を中心にクリが比較的多く見られたが、クリ以外にもブナ属やコナラ節、クスノキ科、モクレン属、キハダ、カエデ属、などがみられ、竪穴住居跡よりも多様な広葉樹の利用が確認された。青森県内での燃料材の用材傾向は、縄文時代ではクリの他にも多様な広葉樹の利用が知られているが、平安時代ではクリとモクレン属、ブナ属の利用が多く（伊東・山田編，2012）、今回の分析結果も類似した傾向を示した。

新沢（１）遺跡と新沢（２）遺跡は鳴沢川右岸の段丘上に位置し、金沢街道沢（１）遺跡は鳴沢川の河口に面した低地に接する段丘上に位置する。今回の分析で確認された樹種のうち、シオジ節のシオジやヤチダモは、河川や水湿地など湿潤な土地に生育する樹木である。シオジ節以外の樹種は、主に台地上に生育する樹種である。したがって、金沢街道沢（１）遺跡の竪穴住居跡 SI08 では、低地に生育していた木材が利用された可能性がある。また、金沢街道沢（１）遺跡の住居跡 SI10 で行われた種実同定で、雑穀や水田雑草にもなる草本類が多く産出している（第４章第３節炭化種実同定の項参照）。今後、分析例を増やすことにより、周辺の低地利用について明らかになる可能性がある。

（黒沼保子）

引用文献

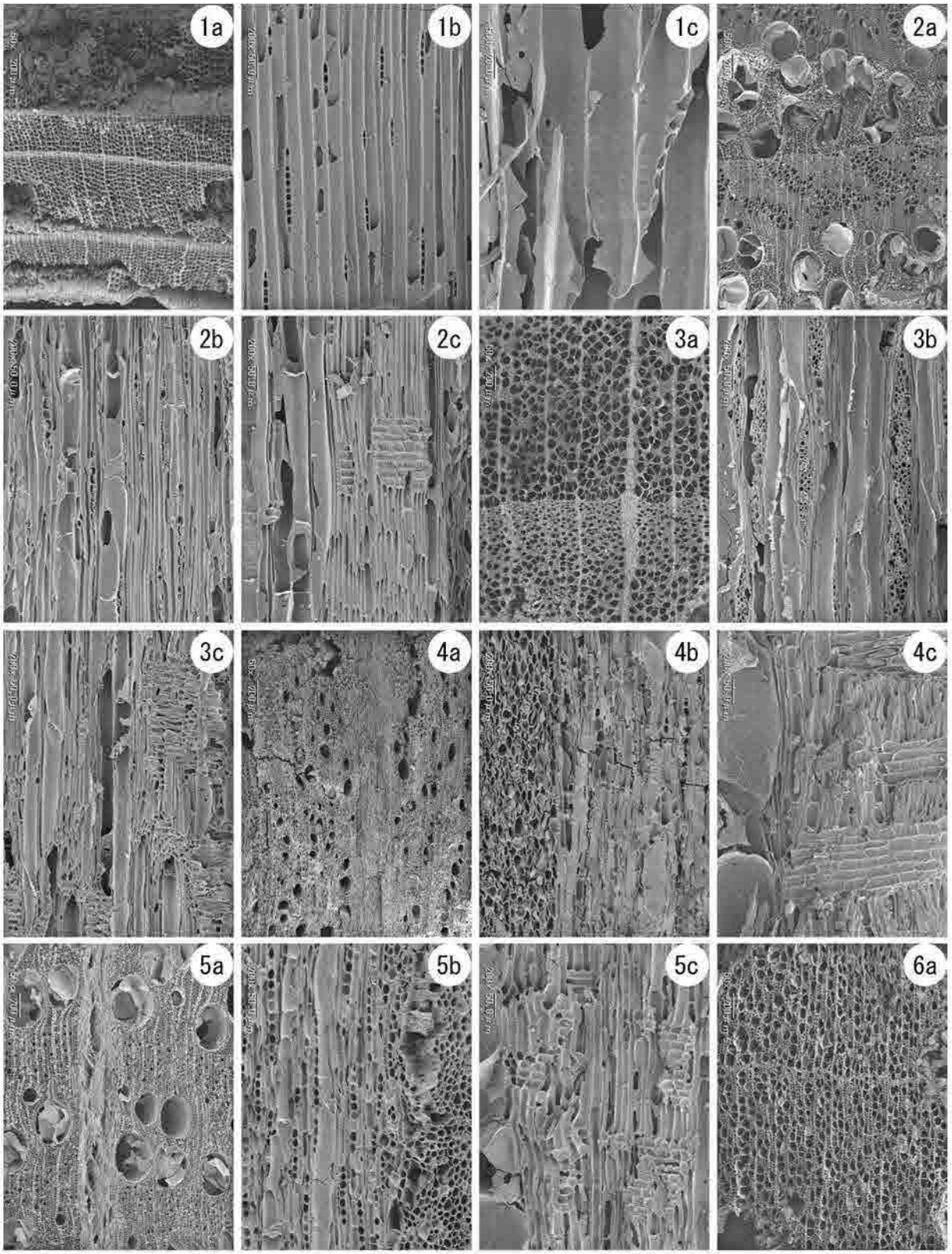
荒井　格（2012）東北－青森県・秋田県・岩手県・山形県・宮城県・福島県－．伊東隆夫・山田昌久編「木の考古学－出土木製品用材データベース－」：147-156，海青社．

平井信二（1996）木の大百科．394p，朝倉書店．

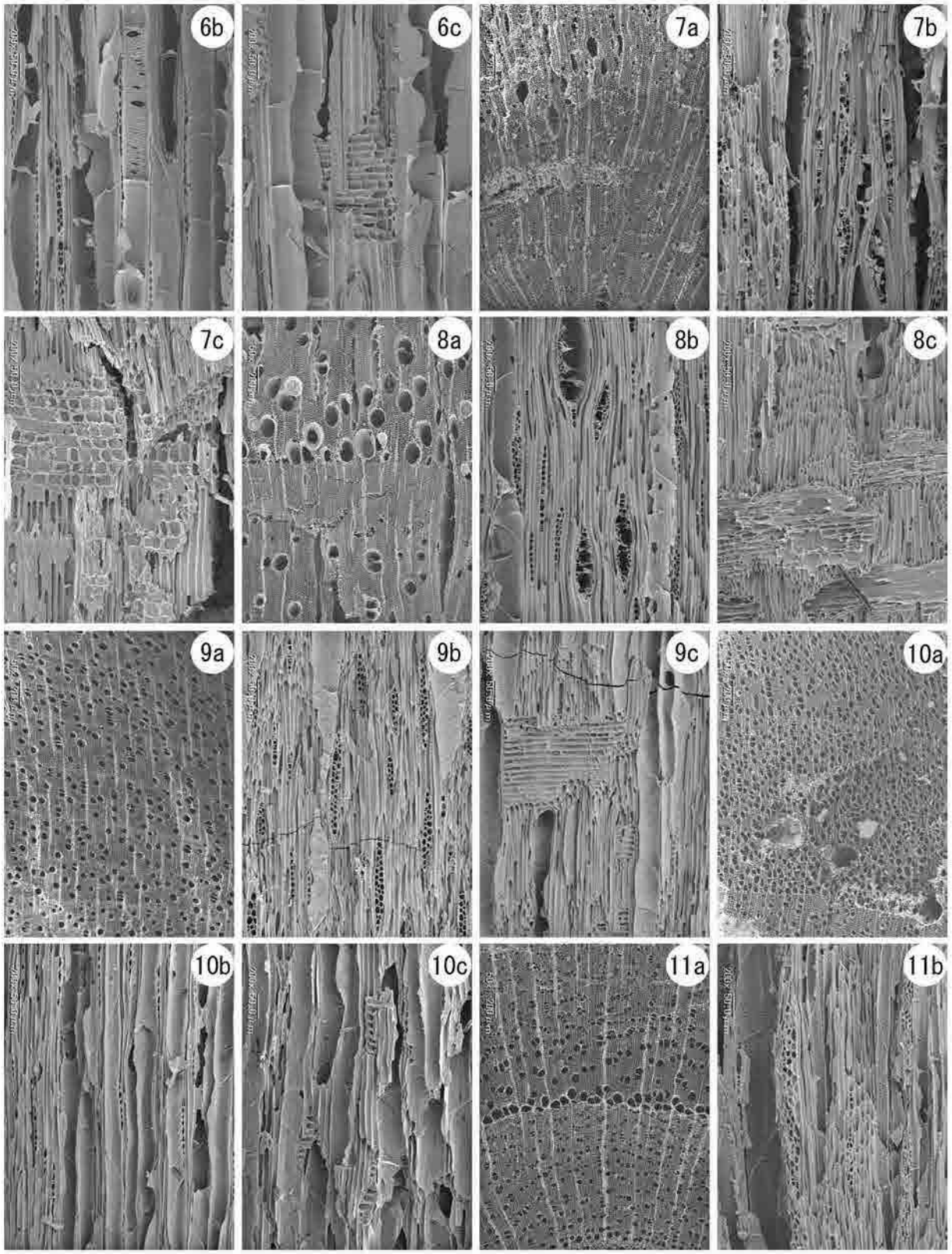
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学－出土木製品用材データベース－．449p，海青社．

付表1　新沢(1)遺跡、新沢(2)遺跡、金沢街道沢(1)出土炭化材の樹種同定結果一覧

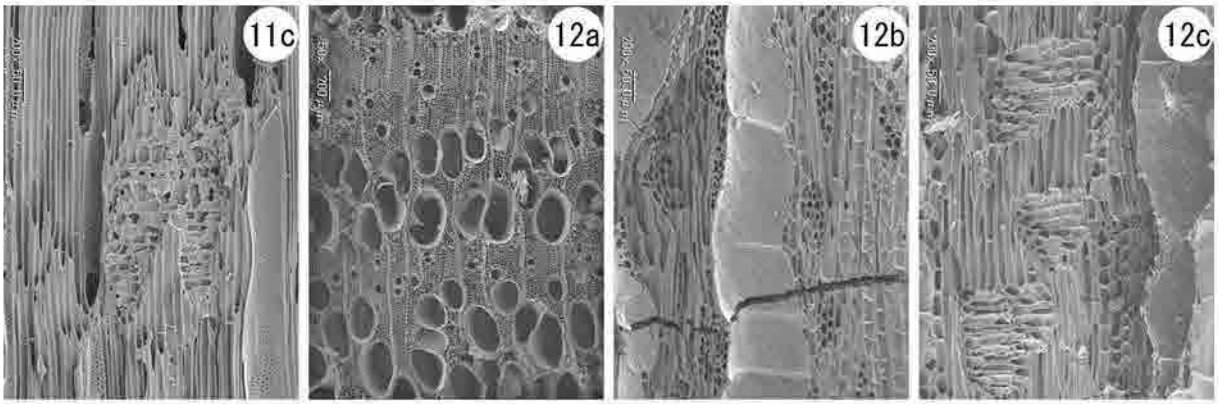
整理番号	遺跡名	出土位置	層位	日付	取上番号	樹種サンプル名	樹種	形状	サイズ(cm)	年輪数	年代測定	時期	時期詳細
炭-1	新沢(1)	SI02カマド	床直	6・25	KC-1	14ARA1_J-1	ブナ属	破片	3.7×1×5	3		平安	9c末～10c初頭
炭-2		SI03	5	6・18	C-1	14ARA1_J-2	クリ	破片	1.5×3×4	10？		平安	9c末～10c初頭
炭-3		SI03	5	6・18	C-2	14ARA1_J-3	クリ	破片	2×4×5	32		平安	9c末～10c初頭
炭-4		SI03	5	6・18	C-3	14ARA1_J-4	クリ	破片	1×4.5×8	＞20		平安	9c末～10c初頭
炭-5		SI03	5	6・18	C-4	14ARA1_J-5	クリ	破片	1×6×7	＞30		平安	9c末～10c初頭
炭-6		SI03	5	6・18	C-5	14ARA1_J-6	クリ	破片	1×6×6	＞30		平安	9c末～10c初頭
炭-7		SI03	5	6・18	C-6	14ARA1_J-7	クリ	破片	2×6×8	＞35		平安	9c末～10c初頭
炭-8		SI03	5	6・18	C-7	14ARA1_J-14	クリ	破片	1.5×5×8	＞30		平安	9c末～10c初頭
炭-9		SI03	5	6・18	C-8	14ARA1_J-8	クリ	破片	2×3×4	15		平安	9c末～10c初頭
炭-11		SI03	5	6・18	C-10	14ARA1_J-9	クリ	破片	2.5×5×7	25		平安	9c末～10c初頭
炭-13		SI03	5	6・18	C-12	14ARA1_J-10	クリ	破片	6.5×3×6.5	38	PLD-29976～29978	平安	9c末～10c初頭
炭-14		SI03	5	6・18	C-13	14ARA1_J-11	クリ	角材？	5×3.5×13	30		平安	9c末～10c初頭
炭-15		SI03	5	6・18	C-14	14ARA1_J-12	クリ	みかん割り状	1.5×4×3	12		平安	9c末～10c初頭
炭-16		SI03Pit1	-	6・20	C-1	14ARA1_J-13	クリ	破片	＜3角	＜13		平安	9c末～10c初頭
炭-17		SI05	床直	6・4	C-1	14ARA1_J-15	クリ	破片	2×2×3	9		平安	9c末～10c初頭
炭-18		SI05	床面	6・11	C-2	14ARA1_J-16	クリ	破片	1.5×3×2	17		平安	9c末～10c初頭
炭-20		SK12	1層中位	5・28	C-×	14ARA1_J-17	クリ	破片	1.5×2×3	17		平安	
炭-21		SK12	2	5・29	C-1	14ARA1_J-18	タラノキ	丸木	直径1×長さ6	2		平安	
炭-22		SK12	3層上面	5・30	C-2	14ARA1_J-19	クスノキ科	半割（加工痕）	直径1×長さ6	2		平安	
炭-23		SK12	2層下	5・30	C-3	14ARA1_J-20	クリ	節	半径3.5×長さ8	14		平安	
炭-26		SK18	1	6・4	C-1	14ARA1_J-21	コナラ属コナラ節	破片	10×1×8	不明	PLD-30400	縄文？	
炭-27	新沢(2)	SI01	底面	9・19	C-1	14ARA2_J-1	クリ	破片	0.5×3.5×3.5	6		平安	10c前半(B-Tm直前)
炭-29		SI01Pit1	1	9・30	C-×	14ARA2_J-2	クリ	破片	0.5×6×5.5	＞20		平安	10c前半(B-Tm直前)
炭-30		SI03	1	10・24	C-1	14ARA2_J-8	クリ	破片	0.5×2.5×1.5	3	14ARA2-1	縄文後期	十腰内Ⅰ式
炭-31		SI04	覆土	10・31	C-1	14ARA2_J-9	クリ	角材？	3.5×0.5×11	2	14ARA2-2	縄文後期	十腰内Ⅰ式
炭-33		SK03	2層下位	7・30	C-×	1ARA2_J-3	カエデ属	節	3×3×3	不明	14ARA2-6	弥生?	
炭-34		SK04	底面直上	8・8	C-1	14ARA2_J-4	クリ	破片	1×3×3	15		平安	
炭-36		SK07	底面	8・26	C-1	14ARA2_J-5	クリ	破片	0.2×0.8×2.5	5		平安	
炭-37		SK09	5	8・26	C-2	14ARA2_J-6	クリ	破片	0.5×2×4	7		平安	
炭-38		SK10	3	8・22	C-1	14ARA2_J-7	ブナ属	節	3.5×3.5×3.5	不明		平安	
炭-41		SK36	底面	11・12	C-2	14ARA2_J-10	クリ	破片	＜2角	＜5	14ARA2-3	縄文後期	十腰内Ⅰ式
炭-42		SK37	最下層	11・12	C-2	14ARA2_J-11	ブナ属	破片	3角？	不明	14ARA2-4	縄文後期	十腰内Ⅰ式
炭-43		SN09	-	10・22	C-1	14ARA2_J-12	コナラ属アカガシ亜属	破片	2.5×2×5	不明	PLD-30401 14ARA2-5	弥生後期	
炭-46	金沢街道沢(1)	SI08	覆土	10・3	C-2	14KANA_J-1	クリ	破片	＜2角	＜15		奈良	8c代
炭-47		SI08	覆土	10・3	C-4	14KANA_J-2	トネリコ属シオジ節	破片	＜3.5角	＜15		奈良	8c代
炭-48_1		SI08	覆土	10・3	C-5	14KANA_J-3	トネリコ属シオジ節	破片	＜3角	＜14		奈良	8c代
炭-48_2		SI08	覆土	10・3	C-5	14KANA_J-3	スギ	破片	1×4×3.5	13		奈良	
炭-49		SI08	覆土	10・3	C-6	14KANA_J-4	トネリコ属シオジ節	半割状	直径3.8	36	PLD-29979～29981	奈良	8c代
炭-50		SI08	覆土	10・3	C-7	14KANA_J-5	トネリコ属シオジ節	破片	＜2角	＜5		奈良	8c代
炭-52		SI08	覆土	10・3	C-9	14KANA_J-6	トネリコ属シオジ節	破片	＜2.5角	＜8		奈良	8c代
炭-57_1		SI08	覆土	10・3	C-14	14KANA_J-7	クリ	破片	＜3角	7		奈良	8c代
炭-57_2		SI08	覆土	10・3	C-14	14KANA_J-7	スギ	破片	＜4角	＜11		奈良	
炭-58		SI08	覆土	10・3	C-15	14KANA_J-8	トネリコ属シオジ節	破片	4×4×4.5	20		奈良	8c代
炭-61		SI08	床面	10・17	C-18-1	14KANA_J-9	トネリコ属シオジ節	角材？	2.5×2.5×5＋破片	16		奈良	8c代
炭-68		SI16	覆土	9・26	C-1	14KANA_J-10	ニシキギ属	破片	＜1角	＜4		奈良	8c代
炭-69		SI16	覆土	9・26	C-2	14KANA_J-11	クリ	破片	＜4.5角	＜5		奈良	8c代
炭-70		SI16	覆土	9・26	C-3	14KANA_J-12	モクレン属	破片	＜3角	不明		奈良	8c代
炭-71		SI16	覆土	9・26	C-4	14KANA_J-13	クリ	破片	＜2角	＜10		奈良	8c代
炭-72		SI16	覆土	9・26	C-5	14KANA_J-14	モクレン属	破片	＜1角	＜3		奈良	8c代
炭-73		SI16	覆土	9・26	C-6	14KANA_J-15	モクレン属	破片	＜1.5角	＜3		奈良	8c代
炭-74		SI16	覆土	9・26	C-7	14KANA_J-16	モクレン属	破片	＜1角	＜3		奈良	8c代
炭-75		SI16	覆土	9・26	C-8	14KANA_J-17	モクレン属	破片	＜2.5角	＜10		奈良	8c代
炭-76		SI16	覆土	9・26	C-9	14KANA_J-18	モクレン属	破片	＜1.5角	＜7		奈良	8c代
炭-77		SI16	覆土	9・26	C-10	14KANA_J-19	モクレン属	破片	＜1.5角	＜11		奈良	8c代
炭-78		SI16	覆土	9・26	C-11	14KANA_J-20	モクレン属	破片	0.5×4.5×4	不明		奈良	8c代
炭-79		SI16	覆土	9・26	C-12	14KANA_J-21	モクレン属	破片	＜2角	不明		奈良	8c代
炭-80		SK01	1	7・18	C-1	14KANA_J-22	キハダ	破片	＜2.5角	＜5		奈良～平安	



図版1　新沢（1）遺跡、新沢（2）遺跡、金沢街道沢（1）遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真（1）
1a-1c．スギ（炭-57_2）、2a-2c．クリ（炭-3）、3a-3c．ブナ属（炭-1）、4a-4c．コナラ属アカガシ亜属（炭-43）、5a-5c．コナラ属コナラ節（炭-26）、6a．モクレン属（炭-75）
a：横断面、b：接線断面、c：放射断面



図版2　新沢（1）遺跡、新沢（2）遺跡、金沢街道沢（1）遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真（2）
6b-6c．モクレン属（炭-75）、7a-7c．クスノキ科（炭-22）、8a-8c．キハダ（炭-80）、9a-9c．カエデ属（炭-33）、10a-10c．ニシキギ属（炭-68）、11a-11b．タラノキ（炭-21）
a：横断面、b：接線断面、c：放射断面



図版3　新沢（1）遺跡、新沢（2）遺跡、金沢街道沢（1）遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真（3）
11c．タラノキ（炭-21）、12a-12c．トネリコ属シオジ節（炭-47）
a：横断面、b：接線断面、c：放射断面

第３節　新沢（1）遺跡・新沢（2）遺跡・金沢街道沢（1）遺跡から出土した炭化種実

株式会社パレオ・ラボ

１．はじめに

青森県西津軽郡鰺ヶ沢町大字北浮田町字新沢地内に位置する新沢（１）遺跡と新沢（２）遺跡、同町大字南浮田町字金沢街道沢地内に位置する金沢街道沢（１）遺跡の縄文時代後期、弥生時代前期、奈良～平安時代の遺構・遺物から出土した炭化種実の同定結果を報告し、当時の利用植物や植生について検討した。

２．試料と方法

試料は、現地採取試料と水洗選別済試料がある。１試料中には、１点から数百点の炭化種実などが含まれていた。

［新沢（１）遺跡］

試料は、竪穴住居跡であるSI02から床直など5試料とSI05の床面から１試料、埋設土器であるSR01の土器内堆積土から１試料の、計７試料である。試料の時期は、SI02とSI05が平安時代（９世紀末～10世紀初頭）、SR01が弥生時代前期（砂沢式期）である。

［新沢（２）遺跡］

試料は、竪穴住居跡であるSI02の炉から１試料と、SI03の１層から１試料、SI04の炉体内から１試料、製鉄土坑であるSK14の床面直上から１試料と、土坑墓の可能性があるSK15の最下層から１試料、フラスコ形土坑であるSK20の底面から１試料、SK21のクリ層から２試料、土坑墓の可能性があるSK35の土器内などから３試料、埋設土器であるSN14の炉体内から１試料の、計12試料である。試料の時期は、SI02とSI03、SI04、SK15、SK21、SK35、SN14が縄文時代後期前葉（十腰内Ⅰ式期）、SK20が縄文時代後期、SK14が平安時代である。

［金沢街道沢（１）遺跡］

試料は、竪穴住居跡であるSI03の覆土から１試料、SI08の覆土から２試料、SI10のカマドなどから３試料、土坑墓の可能性があるSK01の１層から１試料の、計７試料である。試料の時期は、SI03が８世紀代と10世紀後半以降の遺構が重複しているため奈良・平安時代、SI08が奈良時代、SI10が平安時代、SK01が奈良～平安時代である。

水洗選別済み試料は、青森県埋蔵文化財調査センターによって最小1.0mm目の篩を用いて水洗および抽出が行われ、水洗量は重量で計量されていた。現地採取試料については、青森県埋蔵文化財調査センターによって発掘調査中に取り上げられた。

同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても１個体とみなせるものは完形として数え、１個体に満たないものは破片とした。計数が難しい分類群については、おおよその数を記号（+）で表記した。試料は、青森県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

３．結果

［新沢（１）遺跡］

同定の結果、木本植物では広葉樹のアサダ炭化果実とクリ炭化果実、ウルシ属－ヌルデ炭化内果皮の３分類群、草本植物ではサナエタデ－オオイヌタデ炭化果実とタデ属炭化果実、イネ炭化種子の３分類群の、計６分類群が見いだされた（表1）。この他、科以上の詳細な同定ができなかった炭化種実を不明Ａとした。科以上に細分する識別点が残存していない一群を、同定不能炭化種実とした。種実以外には炭化した子嚢菌がみられたが、同定の対象外とした。また、未炭化の種実も得られたが、遺構の立地から当時の生の種実は遺存しないため、対象外とした。

以下、産出した炭化種実について遺構別に記載する（不明と同定不能種実、虫えい、子嚢菌は除く）。

SI02：アサダとクリ、ウルシ属－ヌルデ、タデ属、イネがわずかに得られた。

SI05：サナエタデ－オオイヌタデとタデ属がわずかに得られた。

SR01：ウルシ属－ヌルデがわずかに得られた。

表1　新沢（1）遺跡から出土した炭化種実（括弧内は破片数）

	遺構	SI02					SI05	SR01
	層位	5層	6層	5層	床直	床直　土器内の土	床面	土器内堆積土
	時期	平安						弥生前期
分類群	重量(g)	5300	5300	7100	50	1080	300	900
アサダ	炭化果実	1						
クリ	炭化果実			(9)				
ウルシ属－ヌルデ	炭化内果皮					1		1
サナエタデ－オオイヌタデ	炭化果実						2 (2)	
タデ属	炭化果実					1	1	
イネ	炭化種子			(1)				
不明A	炭化種実			(1)				
同定不能	炭化種実						(2)	
子嚢菌	炭化子嚢	169 (14)			1	7	16	10
現生								
スギ	種子	1						
イヌタデ	果実	2	2					

［新沢（２）遺跡］

同定の結果、木本植物では広葉樹のオニグルミ炭化核と、サワシバ炭化果実、クリ炭化果実・炭化子葉、コナラ属コナラ節炭化幼果、サクラ属サクラ節炭化核、キイチゴ属炭化核、ウルシ属－ヌルデ炭化内果皮、トチノキ炭化種子、ブドウ属炭化種子、タラノキ炭化核、ニワトコ炭化核の11分類群、草本植物ではミズヒキ炭化果実と、タデ属炭化果実、ササゲ属アズキ亜属炭化種子、ヒシ属炭化果実、ササ属炭化種子の５分類群の、計16分類群が見いだされた（表２）。この他、科以上の詳細な同定ができなかった炭化芽を不明として一括した。科以上に細分する識別点が残存していない一群を同定不能炭化種実とした。種実以外には炭化した虫えいや子嚢菌、子嚢菌塊がみられたが、同定の対象外とした。また、未炭化の種実が得られたが、遺構の立地から堆積当時の生の種実は遺存しないと考えられるため、同定の対象外とした。

以下、産出した炭化種実について遺構別に記載する（不明芽と同定不能種実、虫えい、子嚢菌は除く）。

SI02：オニグルミが多く、ヒシ属がわずかに得られた。

SI03：クリが多く、サワシバとコナラ属コナラ節がわずかに得られた。

SI04：同定可能な種実は得られなかった。

SK14：キイチゴ属がわずかに得られた。

SK15：オニグルミとクリが多く、ウルシ属－ヌルデが少量、トチノキ、ブドウ属、ニワトコ、タデ属、ササゲ属アズキ亜属、ヒシ属がわずかに得られた。

SK20：同定可能な種実は得られなかった。

SK21:クリが多く、サワシバが少量、サクラ属サクラ節とウルシ属－ヌルデ、タラノキ、ミズヒキ、タデ属がわずかに得られた。

SK35：オニグルミとクリが少量、ブドウ属とニワトコ、タデ属、ササ属がわずかに得られた。

SN14：クリが少量、オニグルミがわずかに得られた。

表2　新沢（2）遺跡から出土した炭化種実（括弧内は破片数）

	遺構	SI02炉	SI03	SI04	SK14	SK15	SK20	SK21		SK35		SN14
	層位	火床面	1層	炉体内	床面直上	最下層	底面	クリ層		－	土器内土	土器内	炉体内
	時期	縄文後期前葉			平安	縄文後期前葉	縄文後期		縄文後期前葉			
分類群	重量（g）	280	60	240	3369	40680	4680	現場採取	6520	4100	460	480	380
オニグルミ	炭化核	(69)				(304)				(14)			(5)
サワシバ	炭化果実		2						9 (7)				
クリ	炭化果実		(63)			(142)			(224)	(20)			(24)
	炭化子葉		≧25※ 56.85g			≧1※ 3.19g		1	≧4※ 9.79g	<1※ 0.05g			
コナラ属コナラ節	炭化幼果		1										
サクラ属サクラ節	炭化核								1				
キイチゴ属	炭化核				3								
ウルシ属－ヌルデ	炭化内果皮					11 (1)			7				
トチノキ	炭化種子					(3)							
ブドウ属	炭化種子					(2)					1	4 (2)	
タラノキ	炭化核								1				
ニワトコ	炭化核					2				1			
ミズヒキ	炭化果実								(1)				
タデ属	炭化果実					3			1	1			
ササゲ属アズキ亜属	炭化種子					1							
ヒシ属	炭化果実	(2)				(10)							
ササ属	炭化種子										3 (1)		
不明	炭化芽		(1)						1				
同定不能	炭化種実				(4)	(3)			(5)	(1)			
虫えい	炭化								1 (1)				
子嚢菌	炭化子嚢塊				(1)								
	炭化子嚢		30 (5)	7	183 (5)	331	4 (3)		302	63	1		
現生													
キビ連	有ふ果					1							

※完形個体換算数　　骨片

クリ炭化子葉：1点の重量2.21gとして完形個体に換算した場合の数

［金沢街道沢（１）遺跡］

同定の結果、木本植物では広葉樹のサワシバ炭化果実と、クワ属炭化核、マタタビ属炭化種子、ブドウ属炭化種子、ニワトコ炭化核の５分類群、草本植物ではヤナギタデ炭化果実と、サナエタデ－オオイヌタデ炭化果実、ウナギツカミ炭化果実、イシミカワ炭化果実、タデ属炭化果実、ギシギシ属炭化果実、アカザ属炭化種子、ダイズ属炭化種子、スミレ属炭化種子、セリ炭化果実、シソ属炭化果実、ナス属炭化種子、ヒエ炭化種子、ヒエ属炭化種子、イネ炭化籾・炭化種子、アワ炭化有ふ果・炭化種子、エノコログサ属炭化有ふ果、オオムギ炭化有ふ果･炭化種子、コムギ炭化種子、イネ科炭化有ふ果、ウキヤガラ炭化果実、サンカクイ－フトイ炭化果実、ホタルイ属炭化果実の 23 分類群の、計 28 分類群が見いだされた（表３）。この他、科以上に細分する識別点が残存していない一群を同定不能炭化種実とした。種実以外には炭化した子嚢菌がみられたが、同定の対象外とした。また、未炭化の種実が得られたが、遺構の立地から当時の生の種実は遺存しないため、対象外とした。

以下、産出した炭化種実について遺構別に記載する（同定不能種実と子嚢菌は除く）。

SI03：クワ属とマタタビ属、ニワトコがわずかに得られた。

SI08:サワシバとブドウ属、ヤナギタデ、サナエタデ－オオイヌタデ、ウナギツカミ、イシミカワ、タデ属、アワがわずかに得られた。

SI10:アワとイネが非常に多く、ヒエが少量、ブドウ属とヤナギタデ、サナエタデ－オオイヌタデ、ウナギツカミ、タデ属、ギシギシ属、アカザ属、ダイズ属、スミレ属、セリ、シソ属、ナス属、ヒエ属、エノコログサ属、オオムギ、コムギ、イネ科、ウキヤガラ、サンカクイ－フトイ、ホタルイ属が

わずかに得られた。

SK01：アワがわずかに得られた。

表3　金沢街道沢（1）遺跡から出土した炭化種実（括弧内は破片数）

	遺構	SI03	SI08		SI10			SK01
	層位	覆土	覆土		カマド3層	11層	カマド2層	1層
	時期	奈良～平安	奈良			平安		奈良～平安
分類群	重量（g）	1880	1100	1000	3100	1300	4200	30
サワシバ	炭化果実			2				
クワ属	炭化核	2						
マタタビ属	炭化種子	1 (2)						
ブドウ属	炭化種子			1		1		
ニワトコ	炭化核	3						
ヤナギタデ	炭化果実		1 (1)		1	2		
サナエタデーオオイヌタデ	炭化果実			1		1		
ウナギツカミ	炭化果実			1 (1)		2	1	
イシミカワ	炭化果実		1	(1)				
タデ属	炭化果実		2 (1)			1	1	
ギシギシ属	炭化果実					1		
アカザ属	炭化種子				1		1	
ダイズ属	炭化種子				(1)			
スミレ属	炭化種子				1			
セリ	炭化果実				1			
シソ属	炭化果実					2		
ナス属	炭化種子					9		
ヒエ	炭化種子				10		5	
ヒエ属	炭化種子				3		2 (1)	
イネ	炭化籾				1	1 (2)	5	
	炭化種子				103 (113)	17 (9)	53 (72)	
アワ	炭化有ふ果				9	9	7	
	炭化種子			1	357 (4)	80	150	1
エノコログサ属	炭化有ふ果				3			
オオムギ	炭化有ふ果						1	
	炭化種子				1	3 (1)	1	
コムギ	炭化種子				2	1	1	
イネ科	炭化有ふ果				8			
ウキヤガラ	炭化果実					8	1	
サンカクイーフトイ	炭化果実				1			
ホタルイ属	炭化果実						1	
同定不能	炭化種実	1	(1)		(1)		(1)	
子嚢菌	炭化子嚢	72 (2)	103 (3)		7	28 (11)	24	
現生								
イヌタデ	果実				1			

次に、炭化種実の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1) オニグルミ　*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Komatsu) Kitam　炭化核　クルミ科

すべて 1/2 以下の破片である。完形ならば側面観は広卵形。表面に縦方向の縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。壁は緻密で硬く、ときどき空隙がある。断面は角が尖るものが多い。最大の破片で、残存高 13.8mm、残存幅 13.6mm、残存厚 5.3mm。

(2) クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　炭化果実・炭化子葉　ブナ科

果実は、完形ならば側面は広卵形。表面は平滑で、細い縦筋がみられるが、図版の破片は縦筋が不明瞭である。殻斗着痕は残存していないが、残存していれば果実幅と同じ程度の幅広になり、不規則で微細な丘状の突起が密にある。最大の破片で、残存長 10.4mm、残存幅 7.8mm。子葉は、側面観が広卵形。表面一面に縦方向のしわ状の溝がある。しわ以外の面は平坦でやや光沢があり、硬質。高さ 16.7mm、幅 16.0mm。

(3) コナラ属コナラ節　*Quercus* sect. *Prinus*　炭化幼果　ブナ科

上面観は円形、側面観は湾状で、鱗片は合着する。高さ 4.4mm、幅 4.2mm。

(4) クワ属　*Morus* spp.　炭化核　クワ科

側面観はいびつな広倒卵形または三角状倒卵形で、断面形は卵形または三角形。背面は稜をなす。表面にはゆるやかな凹凸があり、厚くやや硬い。基部に嘴状の突起を持つ。長さ 1.4mm、幅 1.1mm。

(5) マタタビ属　*Actinidia* spp.　炭化種子　マタタビ科

上面観は楕円形、側面観は倒卵形または楕円形。表面には五角形や六角形、円形、楕円形などの窪みが連なる規則的な網目模様がある。壁は薄く硬い。サルナシやマタタビなど、種までの同定には至らなかった。長さ 1.4mm、幅 1.2mm。

(6) ウルシ属－ヌルデ　*Toxicodendron* sp.－*Rhus javanica* L.　炭化内果皮　ウルシ科

上面観は中央がやや膨らむ扁平、側面観は中央がややくびれた広楕円形で、片側がやや膨れる。ざらついた質感がある。壁は軟質。表面および断面構造の特徴によって種までの同定が可能であるが、実体顕微鏡観察のみのため、ウルシ属－ヌルデの同定に留めた。長さ 3.2mm、幅 2.1mm。

(7) トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume　炭化種子　トチノキ科

すべて微小な破片である。完形ならば楕円形で、下半部は光沢がなく、上半部には光沢がややある。上下の境目の下に少し突出した着点がある。種皮は薄くやや硬い。種皮は３層からなり、各層で細胞の配列方向が異なる。種皮表面には指紋状の微細模様が密にある。最大の破片で、残存長 14.8mm、残存幅 7.0mm。

(8) ブドウ属　*Vitis* spp.　炭化種子　ブドウ科

上面観は広三角形、側面観は下端が尖る広倒卵形。背面の中央もしくは基部寄りに匙状の着点があり、腹面の下端寄りに縦方向の２本の深い溝がある。種皮は薄く硬い。ヤマブドウ以外のブドウ属である。長さ 4.2mm、幅 3.8mm、厚さ 2.8mm。

(9) ニワトコ（広義）　*Sambucus racemosa* L. subsp. *sieboldiana* (Miq.) H.Hara　炭化核　スイカズラ科

上面観は扁平、側面観は楕円形で、基部が尖る。基部に小さな着点があり、背面側は縦方向にやや反る。波状の凹凸が横方向に走る。長さ 1.9mm、幅 1.2mm。（変種のエゾニワトコの可能性もある。）

(10) タデ属　*Polygonum* sp.　炭化果実　タデ科

側面観は卵形、断面は三稜形。にぶい稜がある。網目状隆線は細かい。長さ 1.3mm、幅 1.0mm。

(11) ダイズ属　*Glycine* sp.　炭化種子　マメ科

変形しているが、上面観は扁平、側面観は楕円形。臍は全体の 1/3 未満で、長楕円形。小畑ほか(2007)に示された、中央の縦溝（hilar groove）と周囲の隆線（rim-aril）というダイズ属の特徴が認められる。残存長 2.7mm、幅 2.3mm、厚さ 1.8mm。幅と厚さを、小畑（2008）に示された現生種の大きさと比較すると、野生種に近い。

(12) ササゲ属アズキ亜属　*Vigna* subgenus *Caratotropis*　炭化種子　マメ科

上面観は方形に近い円形、側面観は方形に近い楕円形。臍は、本来は全長の半分から 2/3 ほどの長さで、片側に寄る。長さ 4.5mm、幅 3.0mm、厚さ 2.8mm。小畑（2008）に示された現生種と大きさを比較すると、野生種と栽培種両方の可能性がある大きさである。

(13) ヒシ属　*Trapa* sp.　炭化果実　ヒシ科

完形ならば不整三角形。先端が尖った角が 4 方向にのびる。萼片が肥厚してできた腕の破片のみが産出した。先端は尖る。残存長 5.2mm、残存幅 7.9mm。

(14) シソ属　*Perilla* spp.　炭化果実　シソ科

いびつな球形。端部に着点がある。表面には、低い隆起で多角形の網目状隆線がある。エゴマ以外のシソ属である。長さ1.8mm、幅1.6mm。

(15) ナス属　*Solanum* sp.　炭化種子　ナス科

上面観は扁平、側面観は楕円形。表面には畝状突起の細かい網目状隆線がある。着点の一端がやや突起する。ここでいうナス属とは、ナス以外のナス属である。長さ1.4mm、幅1.8mm。

(16) ヒエ　*Echinochloa esculenta* (A.Braun) H.Scholz　炭化有ふ果　イネ科

楕円形。先端と基部はやや尖り、内頴側は膨らまない。縦方向に微細な筋がある。壁は薄く、光沢がある。長さ1.8mm、幅1.4mm。

(17) ヒエ属　*Echinochloa* spp.　炭化種子（頴果）　イネ科

側面観は卵形ないし楕円形、断面は片凸レンズ形であるが、厚みは薄くやや扁平である。胚は幅が広くうちわ型で、長さは全長の2/3程度と長い。栽培型のヒエよりも細長い。長さ1.9mm、幅1.1mm。

(18) イネ　*Oryza sativa* L.　炭化籾・炭化種子（頴果）　イネ科

籾は、完形ならば側面観が長楕円形。縦方向に明瞭な稜線があり、基部は突出する。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。残存長5.8mm、幅3.4mm。種子（頴果）は上面観が両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が残り、両面に縦方向の２本の浅い溝がある。長さ4.5mm、幅2.7mm。

(19) アワ　*Setaria italica* P.Beauv.　炭化有ふ果・炭化種子（頴果）　イネ科

有ふ果は紡錘形。内頴と外頴に独立した微細な乳頭突起がある。長さ1.7mm、幅1.5mm。種子(頴果)の上面観は楕円形、側面観は円形に近い。腹面下端中央の窪んだ位置に細長い楕円形の胚があり、長さは全長の2/3程度。長さ1.4mm、幅1.4mm。

(20) エノコログサ属　*Setaria* spp.　炭化有ふ果　イネ科

上面観は楕円形、側面観は紡錘形で先端がやや突出する。アワよりも細長く、乳頭突起が畝状を呈する。長さ1.7mm、幅0.9mm。

(21) オオムギ　*Hordeum vulgare* L.　炭化種子（頴果）　イネ科

側面観は長楕円形、腹面中央部には上下に走る１本の溝がある。背面の下端中央部には三角形の胚がある。断面形状は楕円形～円形となる（Jacomet, 2006)。長さ4.8mm、幅2.4mm、厚さ1.9mm。

(22) コムギ（パンコムギ）　*Triticum aestivum* L.　炭化種子（頴果）　イネ科

変形により状態が悪いが、上面観･側面観共に楕円形。腹面中央部には上下に走る１本の溝がある。背面の下端中央部には扇形の胚がある。オオムギに比べて長さが短く、幅に対して厚みがあるため、全体的に丸っこい形状である。断面形状は腹面側が窪み、背面側が円形となる（Jacomet, 2006)。またコムギの場合、側面観で最も背の高い部分（幅の広い部分）が基部付近に来る。コムギ属にはパンコムギやマカロニコムギなど複数種あるが、一般的に日本産コムギと呼称しているのはパンコムギである。ここでは一般的な呼称で記載した。長さ2.9mm、幅2.3mm、厚さ2.1mm。

(23) ササ属　*Sasa* sp.　炭化種子（頴果）　イネ科

狭卵形体で、やや扁平。両端がやや細い。背面はわずかに曲線をなすが、腹面はよく湾曲する。下端に円形の胚がある。長さ4.8mm、幅2.7mm、厚さ2.7mm。

(24) イネ科　Gramineae sp.　有ふ果

上面観は楕円形、側面観は狭倒卵形。先端が尖る。下端に全長の約半分の胚がある。長さ2.0mm、幅1.2mm。

(25) 不明A　Unknown A　炭化種実

堅果の破片か。表面は平滑。断面は厚く硬質。残存長4.0mm、残存幅2.0mm。

4．考察

以下、遺跡ごとに時期別に考察を行う。

[新沢（1）遺跡]

弥生時代前期（砂沢式期）の埋設土器であるSR01からは、ウルシ属－ヌルデが1点得られた。土器内からの出土であるが、土器との関係は不明である。得られたのは1点のみであったため、断面構造等の検討は行っていないが、片側がやや膨れる形状からみると、ヌルデではなくウルシ属の可能性がある。青森県内でウルシ属は、野生種のヤマウルシかツタウルシ、栽培種のウルシの可能性がある。炭化した状態から推定して、何らかの用途に利用された可能性がある。民俗例では、ウルシの中果皮に含まれる脂肪分を取り出して蝋燭の原料としており、ハゼノキよりも質的に優れるといわれるが(平井，1996)、遺跡出土の果実の利用については今のところ不明である。また、弥生時代前期の遺跡からウルシ属－ヌルデが出土する例もなく、種や時期も含めて今後、検討が必要であろう。

平安時代（9世紀末～10世紀初頭）の竪穴住居跡であるSI02からは、栽培植物のイネ、食用可能なクリ、種によっては利用できるウルシ属－ヌルデとタデ属が得られた。覆土（5層）中から出土したアサダは落葉高木であり、何らかの要因で炭化して偶発的に得られた可能性が高い。同じく平安時代のSI05の床面からは、サナエタデ－オオイヌタデとタデ属がわずかに得られた。他の植物に伴って遺構内に持ち込まれた可能性や、周辺に生育していたものが偶発的に炭化した可能性などが考えられる。

[新沢（2）遺跡]

縄文時代後期前葉（十腰内Ⅰ式期）の竪穴住居跡であるSI02の炉の火床面からは、オニグルミ核の破片が多く、ヒシ属果実がわずかに得られた。両方とも食用になるが、出土した部位は食用にならない部位であり、殻を割った後に偶発的に炭化したか、不要な部位を炉に入れて燃やすなどなんらかの理由で炭化して遺構内に堆積したと考えられる。

SI03の1層からはクリが多量に得られた。SK21から出土した完形のクリ子葉の重量を用いて完形個体数に換算すると、約25個体強分であった。クリが少量の堆積物中（60g）に高密度に堆積している点やクリの果皮も多く産出している点から、果実のまま保管されていたものが何らかの要因で炭化した可能性などが考えられる。落葉高木のサワシバ果実やコナラ属コナラ節幼果は、周辺に生育していたものが偶発的に炭化した可能性がある。なお、SI04の炉体内からは同定可能な種実は得られなかった。

土坑墓の可能性があるSK15の最下層からは、オニグルミとクリが多く、ウルシ属－ヌルデが少量、トチノキ、ブドウ属、ニワトコ、タデ属、ササゲ属アズキ亜属、ヒシ属がわずかに得られた。オニグルミとクリの破片数は多いが、産出したクリ子葉の重量は、完形個体約1個体強分であった。得られた種実のうち、タデ属は種によるが、そのほかはいずれも食用可能な種実である。同じく土坑墓の可

能性がある SK35 の土器内などからは、オニグルミとクリ、ブドウ属、ニワトコ、タデ属、ササ属が得られた。得られた種実のうち、タデ属は種によるが、そのほかはいずれも食用可能な種実である。土坑墓の上層との比較が必要であるが、最下層のみにこうした種実類がセットで含まれているとすれば、供献などのために意図的に入れられた可能性もある。

フラスコ形土坑である SK21 のクリ層からは食用または利用可能な種として、タデ属は種によるが、クリとサクラ属サクラ節、ウルシ属－ヌルデが得られた。サワシバやタラノキ、ミズヒキは偶発的に炭化した可能性がある。クリの子葉は完形個体に換算すると約４個体強分で、水洗量（6520g）に対する量としては、さほど含まれていなかった。

屋外炉である SN14 の炉体内からは、クリが少量、オニグルミがわずかに得られた。クリは果皮のみであり、堅果を割って不要な部位を燃やすなど、なんらかの理由で炭化した破片が埋設内に堆積したと考えられる。

縄文時代後期のフラスコ形土坑である SK20 の底面からは、同定可能な種実は得られなかった。

平安時代の製炭土坑である SK14 の床面直上からは、キイチゴ属がわずかに得られた。少量であり、どのような経緯で遺構内に入ったかは不明であるが、キイチゴの果実ごと燃えた結果、残りやすい核が数点残った可能性がある。

［金沢街道沢（１）遺跡］

８世紀代と 10 世紀後半以降の遺構が重複しており、奈良・平安時代とされている竪穴住居跡 SI03 の覆土からは、クワ属とマタタビ属、ニワトコがわずかに得られた。いずれも食用可能な種である。

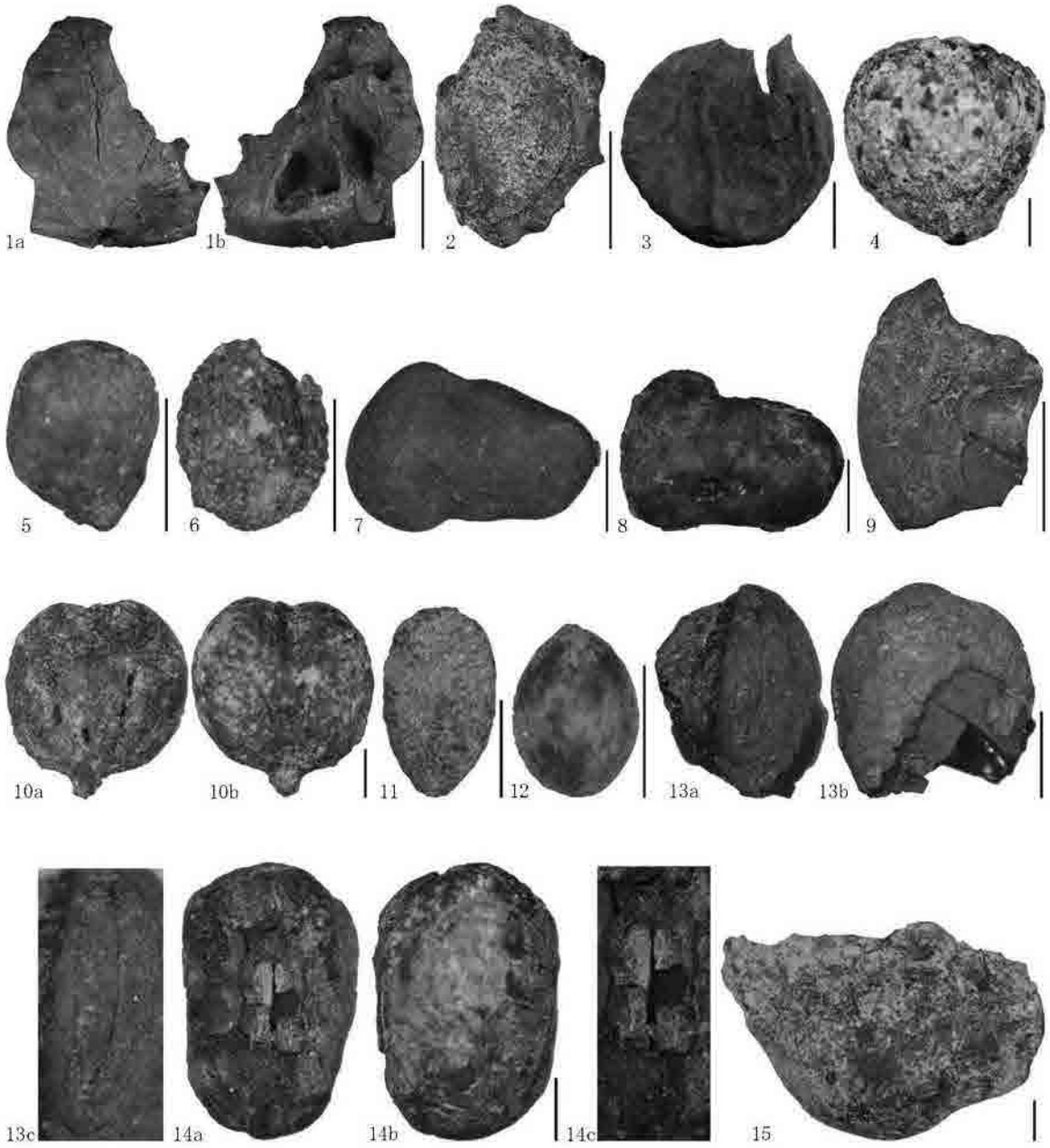
奈良時代の SI08 の覆土からは、栽培植物のアワ、食用可能なブドウ属とヤナギタデ、種によっては食用可能なタデ属が得られた。ヤナギタデの果実は香辛料に用いられた可能性もある。サワシバ、サナエタデ－オオイヌタデ、ウナギツカミ、イシミカワは、偶発的に炭化し、入り込んだ可能性がある。

平安時代の SI10 のカマドや住居覆土からは栽培植物が多く、アワとイネ、ヒエ、オオムギ、コムギが得られた。このうち、アワが最も多かった。ほかに食用可能な種として、ブドウ属とヤナギタデ、シソ属があり、種によっては食用可能な種としてタデ属とアカザ属、ダイズ属が得られた。ダイズ属は野生種に近い大きさであった。草本のうち、サナエタデ－オオイヌタデやウナギツカミ、ギシギシ属、スミレ属、セリ、ナス属、ヒエ属、エノコログサ属などは、遺構周辺に生育していたものが偶発的に炭化し、入り込んだ可能性や、畑作雑草でもあるため、アワの葉茎などとともに住居内に持ち込まれた可能性がある。

湿地や水中に生育する抽水植物のウキヤガラやサンカクイ－フトイ、ホタルイ属もわずかに得られている。これらの種は水田雑草でもある。遺跡内で水漬けの場所や湿地、水田などは確認されていないため、水田や池状の場所に生育していた植物が藁などと一緒に刈り取られ、住居内に持ち込まれた可能性などが考えられる。今後、低地部の資源がどのように利用されていたか、低地部の環境や土地利用との比較が必要である。

奈良～平安時代の土坑の可能性がある SK01 の１層からは、栽培植物のアワがわずかに得られた。

以上のように、金沢街道沢（１）遺跡では栽培植物が多く、特にアワは３遺構から得られており、頻繁に利用されていたと推定される。　（佐々木由香・バンダリ　スダルシャン）



スケール1-3, 9: 5mm, 4-8, 10-13a-b, 14a-b, 14: 1mm, 13c, 14cは任意

図版1　新沢（1）遺跡・新沢（2）遺跡・金沢街道沢（1）遺跡から出土した炭化種実（1）

1. オニグルミ炭化核（新沢（2）遺跡、SK15、最下層）、2. クリ炭化果実（新沢（2）遺跡、SK21、クリ層）、3. クリ炭化子葉（新沢（2）遺跡、S103、1層）、
4. コナラ属コナラ節炭化幼果（新沢（2）遺跡、S103、1層）、5. クワ属炭化核（金沢街道沢（1）遺跡、S103、覆土）、
6. マタタビ属炭化種子（金沢街道沢（1）遺跡、S103、覆土）、7. ウルシ属ーヌルデ炭化内果皮（新沢（2）遺跡、SK15、最下層）、
8. ウルシ属ーヌルデ炭化内果皮（新沢（1）遺跡、SR01、土器内堆積土）、9. トチノキ炭化種子（新沢（2）遺跡、SK15、最下層）、
10. ブドウ属炭化種子（新沢（2）遺跡、SK35、土器内）、11. ニワトコ炭化核（金沢街道沢（1）遺跡、S103、覆土）、
12. タデ属炭化果実（新沢（2）遺跡、SK15、最下層）、13. ダイズ属炭化種子（金沢街道沢（1）遺跡、S110、カマド3層）、
14. ササゲ属アズキ亜属炭化種子（新沢（2）遺跡、SK15、最下層）、15. ヒシ属炭化果実（新沢（2）遺跡、SK15、最下層）

引用文献

平井信二（1996）木の大百科ー解説編ー．588p，朝倉書店．

Jacomet, S. and collaborators Archaeobotany Lab.（2006）Identification of cereal remains from archaeological sites. 2nd edition, IPAS, Basel Univ.

小畑弘己（2008）マメ科種子同定法．小畑弘己編「極東先史古代の穀物3」:225-252，熊本大学

小畑弘己・佐々木由香・仙波靖子（2007）土器圧痕からみた縄文時代後・晩期における九州のダイズ栽培．植生史研究，15-2，97-114.

スケール16-29：1mm

図版2　新沢（1）遺跡・新沢（2）遺跡・金沢街道沢（1）遺跡から出土した炭化種実（2）

16. シソ属炭化果実（金沢街道沢（1）遺跡、S110、11層）、17. ナス属炭化種子（金沢街道沢（1）遺跡、S110、11層）、
18. ヒエ炭化種子（金沢街道沢（1）遺跡、S110、カマド3層）、19. ヒエ属炭化種子（金沢街道沢（1）遺跡、S110、カマド3層）、
20. イネ炭化籾（金沢街道沢（1）遺跡、S103、カマド3層）、21. イネ炭化種子（金沢街道沢（1）遺跡、S110、カマド3層）、
22. アワ炭化有ふ果（金沢街道沢（1）遺跡、S110、11層）、23. アワ炭化種子（金沢街道沢（1）遺跡、S110、カマド3層）、
24. エノコログサ属炭化有ふ果（金沢街道沢（1）遺跡、S110、カマド3層）、25. オオムギ炭化種子（金沢街道沢（1）遺跡、S110、11層）、
26. コムギ炭化種子（金沢街道沢（1）遺跡、S110、カマド3層）、27. ササ属炭化種子（新沢（2）遺跡、SK35、土器内土）、
28. イネ科炭化有ふ果（金沢街道沢（1）遺跡、S110、カマド3層）、29. 不明A炭化種実（新沢（1）遺跡、S102、5層）

第４節　採取土壌分析結果

１．新沢（2）遺跡の花粉分析、微粒炭分析、プラント・オパール分析

株式会社パレオ・ラボ

1）はじめに

青森県鰺ヶ沢町に所在する新沢（２）遺跡において、縄文時代～平安時代の堆積層が確認された。遺跡周辺の古植生変遷や土相の相違を調べるために、この堆積層から試料を採取し、花粉分析と微粒炭分析、プラント・オパール分析を行った。以下では、試料について行った各種分析の結果を示し、古植生変遷や土相の相違について考察を行った。なお、一部の試料については、赤色の成因の手掛かりを得るため、蛍光Ｘ線分析も行われている。

2）試料と方法

分析試料の採取地点はＢ区基本土層とトレンチ 12 である。集落の端の沢状地形に堆積しているＢ区基本土層は、上位からⅡａ層（平安時代以降）、Ⅱｂ層（縄文時代後期～弥生時代）、Ⅲ-1 層（縄文時代後期以前）、Ⅲ-2 層（縄文時代後期以前）、Ⅳ層に区分されている。調査区南西部に位置するトレンチ 12 は上位からⅡｂ層（縄文時代後期以降）、Ⅲ層（縄文時代後期以前）、Ⅳ層（漸移層）、Ⅴ層（千曳浮石層）、Ⅵ層（粘土層）に区分されている。Ⅲ層はＢ区基本土層では黒色を呈するが、トレンチ 12 では褐色を呈する。これらのうち、分析試料を採取した層準はＢ区基本土層のⅡａ層、Ⅱｂ層、Ⅲ-1 層、Ⅲ-2 層と、トレンチ 12 のⅢ層の計５層準である。分析試料は現地で柱状に切り出され、それを室内で分取した（表 1）。分取した試料について、次の手順で分析を実施した。

表1　分析試料一覧

地点	層位	時期	土相
B区基本土層	Ⅱa	平安時代以降	黒色（2.5Y2/1）シルト
	Ⅱb	縄文時代後期～弥生時代	黒褐色（10YR2/2）シルト
	Ⅲ-1	縄文時代後期以前	黒色（5Y2/1）シルト
	Ⅲ-2		オリーブ黒色（5Y2/2）シルト
トレンチ12	Ⅲ		暗褐色（10YR3/4）シルト

2-1．花粉分析

試料（湿重量約 3g）を遠沈管にとり、10% 水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、46% フッ化水素酸溶液を加え１時間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の割合の混酸を加え 20 分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。この残渣よりプレパラートを作製した。プレパラートは樹木花粉が 200 を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。さらに、保存状態の良好な花粉を選んで単体標本（PLC.1683 ～ 1689）を作製し、写真を図版１に載せた。

2-2．微粒炭分析

試料を計量し、花粉分析と同様の方法で処理を行った。処理後の残渣に適容量のグリセリンを加え、計量を行った。この残渣からプレパラートを作製し、プレパラート全面に渡り検鏡した。なお、試料 1g 中の微粒炭含有数は、次式で求める。

$X = BD/AC$

X：試料１ｇ中の微粒炭含有数、A：分析に用いた試料の重量、B：濃縮試料＋グリセリンの重量、C：

濃縮試料＋グリセリンのうち、封入に用いた重量、D：プレパラート中の微粒炭数

2-3．プラント・オパール分析

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約 1g（秤量）をトールビーカーにとり、約 0.02g のガラスビーズ（直径約 0.04mm）を加える。これに 30% の過酸化水素水を約 20 ～ 30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについてガラスビーズが 300 個に達するまで行った。なお、保存状態の良好な植物珪酸体を選んで写真を撮り、図版２に載せた。

3)．結果

3-1．花粉分析

５試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉 22、草本花粉９、形態分類のシダ植物胞子２の総計 33 である。これらの花粉・胞子の一覧表を表２に示し、分布図を図１に示した。分布図における樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とした百分率、草本花粉と胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図表においてハイフン (-) で結んだ分類群はそれらの分類群間の区別が困難なものを示す。さらに、マメ科の花粉には樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。なお、Ｂ区基本土層のⅡａ層については数枚のプレパラートを検鏡しても樹木花粉が 200 にとどかなかったため、花粉分布図には産出した種類を＊で表示するにとどめておく。

表2　産出花粉胞子一覧表

学名	和名	B区基本土層				トレンチ12
		Ⅱa	Ⅱb	Ⅲ-1	Ⅲ-2	Ⅲ
樹木						
Tsuga	ツガ属	-	1	-	-	-
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	-	3	-	-	1
Sciadopitys	コウヤマキ属	-	2	-	-	-
Cryptomeria	スギ属	4	2	-	-	-
Pterocarya－*Juglans*	サワグルミ属－クルミ属	-	5	1	-	6
Carpinus－*Ostrya*	クマシデ属－アサダ属	-	3	-	-	9
Alnus	ハンノキ属	2	45	8	1	22
Fagus	ブナ属	-	22	3	-	24
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	1	25	54	3	49
Castanea	クリ属	-	27	99	205	52
Ulmus－*Zelkova*	ニレ属－ケヤキ属	1	7	2	-	-
Cercidiphyllum	カツラ属	-	-	1	-	-
Phellodendron	キハダ属	-	1	1	-	-
Rhus－*Toxicodendron*	ヌルデ属－ウルシ属	-	-	-	1	-
Ilex	モチノキ属	-	-	1	-	2
Acer	カエデ属	-	2	-	-	3
Aesculus	トチノキ属	-	55	24	2	11
Tilia	シナノキ属	1	1	-	-	2
Araliaceae	ウコギ科	1	3	5	1	21
Fraxinus	トネリコ属	-	-	1	-	1
Viburnum	ガマズミ属	-	1	-	-	-
Lonicera	スイカズラ属	-	1	-	-	-
草本						
Gramineae	イネ科	7	2	2	-	3
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	-	-	-	-
Thalictrum	カラマツソウ属	2	1	-	1	1
Brassicaceae	アブラナ科	-	1	-	-	-
Leguminosae	マメ科	-	1	1	-	-
Calystegia	ヒルガオ属	-	-	1	-	-
Artemisia	ヨモギ属	20	5	13	3	-
Tubuliflorae	キク亜科	2	1	7	-	1
Liguliflorae	タンポポ亜科	-	-	17	2	-
シダ植物						
monolete type spore	単条溝胞子	5	9	2	-	1
trilete type spore	三条溝胞子	5	3	-	-	2
Arboreal pollen	樹木花粉	10	206	200	213	203
Nonarboreal pollen	草本花粉	32	11	41	6	5
Spores	シダ植物胞子	10	12	2	-	3
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	52	229	243	219	211
unknown	不明	2	3	4	-	-

B区基本土層のⅢ-2層ではクリ属花粉が優占しており、96%の産出率を示すが、上位層に向かって減少している。トチノキ属はⅢ-2層では産出が少ないが、上位層に向かって増加しており、Ⅱbでは27%の産出率を示す。その他では、コナラ属コナラ亜属やハンノキ属、ブナ属などの産出が目立ち、コナラ属コナラ亜属はⅡb層とⅢ-1層において12%と27%の産出率を、ハンノキ属はⅡb層において22%の産出率を、ブナ属はⅡb層において11%の産出率を示す。トレンチ12のⅢ層ではコナラ属コナラ亜属やクリ属、トチノキ属などの産出が目立ち、B区基本土層のⅢ-1層の花粉組成に類似する。なお、いずれの試料においても草本花粉の産出は少ない。

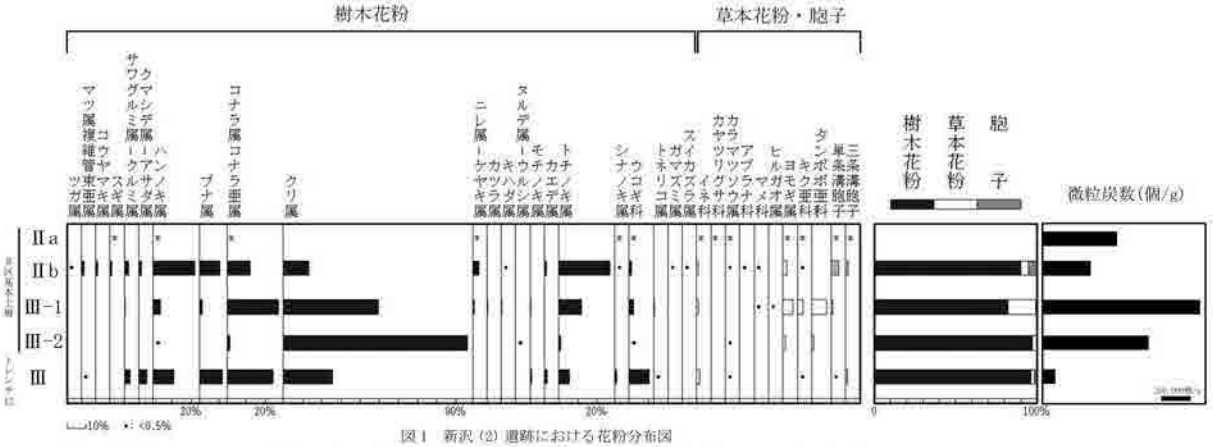


図1　新沢(2)遺跡における花粉分布図

樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基数として百分率で算出した。

＊は樹木花粉200個未満の試料について、検出した分類群を示す。

3-2. 微粒炭分析

計量し、検鏡した結果を表3に、分布図を図1に示す。検鏡の結果、B区基本土層のⅡa層には試料1g当り634,945個、Ⅱb層には試料1g当り410,672個、Ⅲ-1層には試料1g当り1,336,253個、Ⅲ-2層には試料1g当り900,014個、トレンチ12のⅢ層には試料1g当り113,096個の微粒炭が含まれていた。

表3　微粒炭分析に用いた試料の計量値

	B区基本土層				トレンチ12
	Ⅱa	Ⅱb	Ⅲ-1	Ⅲ-2	Ⅲ
分析に用いた試料(g)	3.07	3.11	3.74	3.38	3.8
残渣+グリセリン(g)	1.1737	1.234	1.4228	1.526	1.2124
封入に用いた量(g)	0.0025	0.0034	0.0016	0.0023	0.0038
プレパラート中の微粒炭数(個)	4,152	3,519	5,620	4,585	1,347
試料1g当りの微粒炭数（個）	634,945	410,672	1,336,253	900,014	113,096

3-3. プラント・オパール分析

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求めた。一覧表を表4に示す。なお、以下に記す各分類群のプラント・オパール個数は、試料1g当りの検出個数である。

表4　試料1g当りのプラント・オパール個数

	ネザサ節型（個/g）	ササ属型（個/g）	他のタケ亜科（個/g）	キビ族（個/g）	ウシクサ族（個/g）
Ⅱa	0	681,500	8,300	196,600	78,300
Ⅱb	1,700	1,786,900	26,100	425,400	134,200
Ⅲ-1	0	1,651,600	11,000	355,000	104,800
Ⅲ-2	0	1,547,800	3,400	65,000	59,900
Ⅲ（トレンチ12）	1,700	1,634,200	8,600	112,400	107,200

検鏡の結果、ネザサ節型とササ属型、他のタケ亜科、キビ族、ウシクサ族の５種類の機動細胞珪酸体が確認できた。このうち、いずれの試料においても産出が目立つのがササ属型機動細胞珪酸体で、681,500 ～ 1,786,900 個の産出量を示す。ササ属型機動細胞珪酸体はＢ区基本土層ではⅢ -2 層からⅡｂ層で増加傾向を示すが、最上部のⅡａ層では産出が少なくなる。他のタケ亜科やキビ族、ウシクサ族の機動細胞珪酸体も、産出量に違いはあるものの、産出傾向はササ属型機動細胞珪酸体と同様である。また、タケ亜科（ササ属）と非タケ亜科（キビ族、ウシクサ族）の産出割合を見ると、Ｂ区基本土層のⅢ -1 層から非タケ亜科の割合が増している。

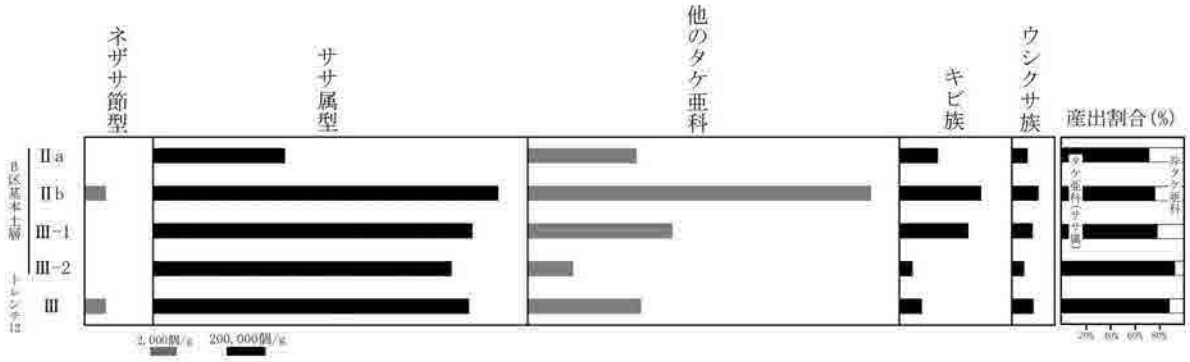


図２　新沢（2）遺跡における植物珪酸体分布図

4）考察

以下では、各種分析の結果から推測される古環境について、下位層準から述べる。

まず、Ｂ区基本土層のⅢ -2 層では、クリ属花粉が 90% 以上の産出率を示し、クリ属の花粉塊も検出された。クリの花粉は広域に散布されず、大部分の花粉がクリ林内に落下し、樹冠縁から約 20m 離れると 5% の産出率を示す例が知られている（吉川，2011）。Ⅲ -2 層では 90% 以上の産出率を示すため、まさにＢ区基本土層の試料採取場所はクリ林内で、縄文時代後期以前のある時期には集落の端にクリ林が広がっていた可能性がある。

その上位のⅢ -1 層においてもクリ属花粉の産出率が高く、クリ林が依然として分布を広げていたと思われるが、この時期にはコナラ属コナラ亜属やトチノキ属の増加も見られる。青森県内では三内丸山遺跡（吉川ほか，2006）や大矢沢（後藤・辻，2000）において、縄文時代中期後半にクリ林からトチノキ林への植生変化が捉えられており、Ⅲ -1 層で見られるクリ属花粉の減少とトチノキ属花粉の増加はこの植生変化を反映した変化であると考えられる。また、佐瀬ほか（2008）は三内丸山遺跡の土壌生成履歴を植生環境と人の活動、土壌層相の関係から検討するなかで、クリ林からトチノキ林への変化とともに、植物珪酸体群集において非タケ亜科珪酸体が増加する現象を捉えている。本遺跡においても、トチノキ属花粉の増加する層準で非タケ亜科珪酸体の増加が見られ、植物珪酸体群集や花粉化石群集の産出傾向が三内丸山遺跡に似ている。

Ｂ区基本土層から少し離れた調査区南西側に位置するトレンチ 12 のⅢ層では、クリ属花粉がやや少なく、トチノキ属やコナラ属コナラ亜属の花粉がやや多い点など、Ｂ区基本土層のⅢ -1 層の花粉組成に類似する。よって、トレンチ 12 のⅢ層はＢ区基本土層のⅢ -1 層に対比可能と思われる。ただし、Ｂ区基本土層のⅢ -1 層に比べると、微粒炭量が著しく少ない。例えば、植物燃焼に関わる生業

を営む場所が固定されていたなど、遺跡内における空間の用途が固定されていたとすると、同時期に堆積したにもかかわらず、場所によって微粒炭量に偏りが生じる可能性がある。

B区基本土層のⅡb層になるとトチノキ属の産出が多くなる。よって、縄文時代後期～弥生時代にはトチノキ林が遺跡周辺で分布をさらに広げていたと考えられる。また、ハンノキ属花粉の増加も見られ、低湿地にはハンノキ林が拡大していたと思われる。微粒炭分析の結果では、Ⅱb層は微粒炭の含有量がやや少ない。他の層準を見ても、本層やトレンチ12のⅢ層のように、褐色系を呈する層準は微粒炭量が少なく、黒色系を呈する層準（B区基本土層のⅡa層、Ⅲ-1層、Ⅲ-2層）は微粒炭量が多く含まれる傾向があり、微粒炭量と色調は総じて同調していると思われる。一方で、蛍光X線分析の結果では、試料ごとの鉄分の含有量に違いがなく、酸化や還元状態など鉄分の状態で色調に違いが生じる可能性が示唆されている（蛍光X線分析の項参照）。微粒炭分析と蛍光X線分析の結果をあわせて考えると、層位ごとに異なる色調の相違は、鉄分の状態や微粒炭の多少に影響を及ぼす現象の有無、強弱に関係している可能性がある。

平安時代以降のⅡa層では十分な量の花粉化石が得られなかったため、Ⅱa層堆積時の古植生について言及するのは難しい。ただし、プラント・オパール分析でも植物珪酸体の産出量が少ないため、この時期の遺跡周辺は、植生の乏しい景観であった可能性がある。

以上は、主に樹木に注目して述べた植生変遷である。今回の分析試料に含まれる草本花粉は種類も量も少ないため、遺跡周辺の草本類は勢力が弱かったと考えられる。プラント・オパール分析の結果では、トチノキ属花粉が増加し始める層準（Ⅲ-1層）から非タケ亜科機動細胞珪酸体の増加が見られ、キビ族やウシクサ族のイネ科植物が分布を広げていたと思われる。さらには、いずれの試料においてもササ属型機動細胞珪酸体が多く産出しており、遺跡周辺のクリ林やトチノキ林のいずれの林床においてもササ属のササ類が分布を広げていたと考えられる。ただし、B区基本土層のⅡa層ではササ属型機動細胞珪酸体の量が減少しており、平安時代以降には林床のササ属のササ類は分布を縮小させたと思われる。

（森　将志）

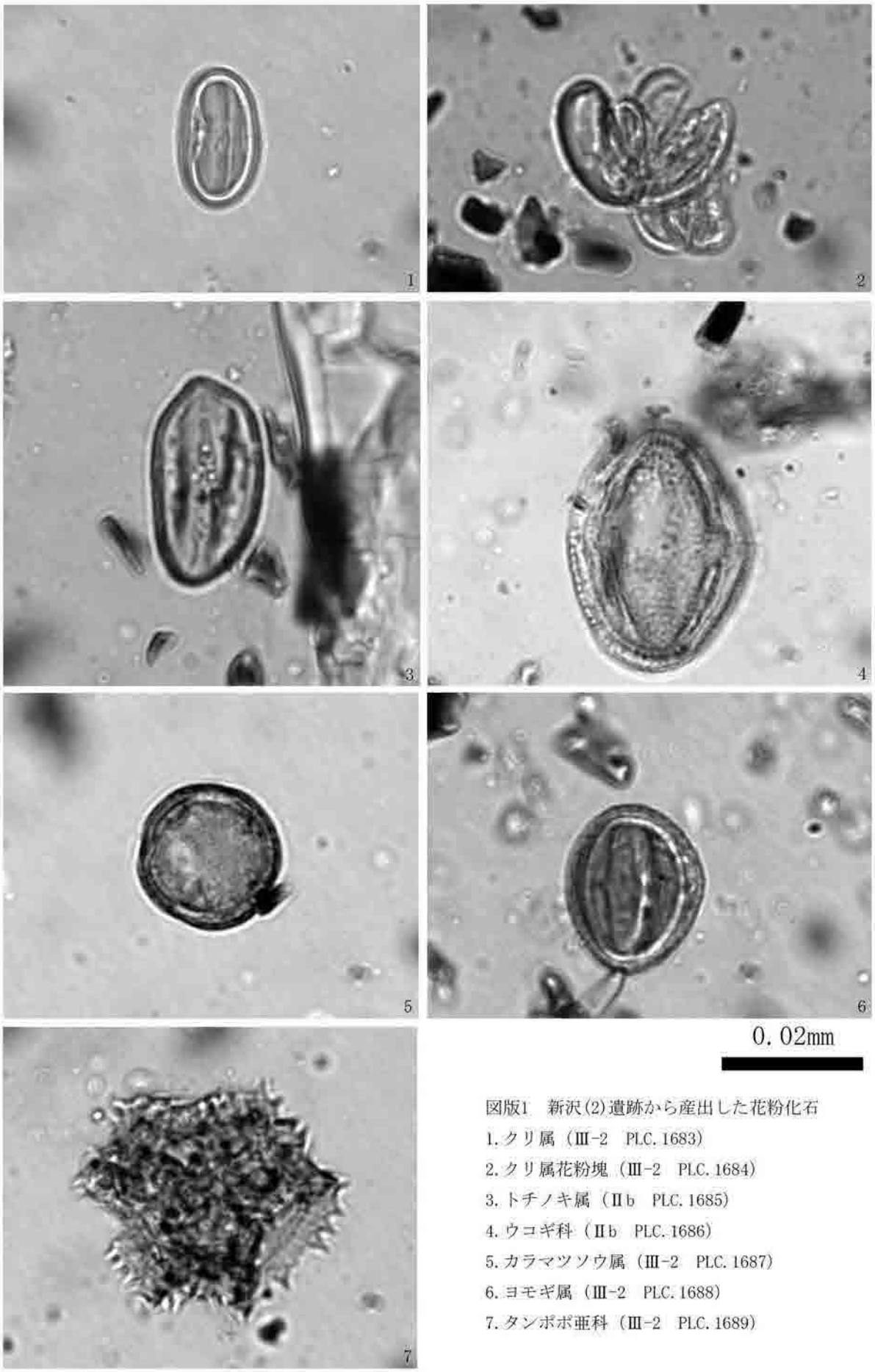
引用文献

後藤香奈子・辻　誠一郎（2000）青森平野南部，青森市大矢沢における縄文時代前期以降の植生史．植生史研究，9，43-53.

佐瀬　隆・細野　衛・高地セリア好美（2008）三内丸山遺跡の土壌生成履歴－植生環境，人の活動および黒ボク土層の関係－．植生史研究，16，37-47.

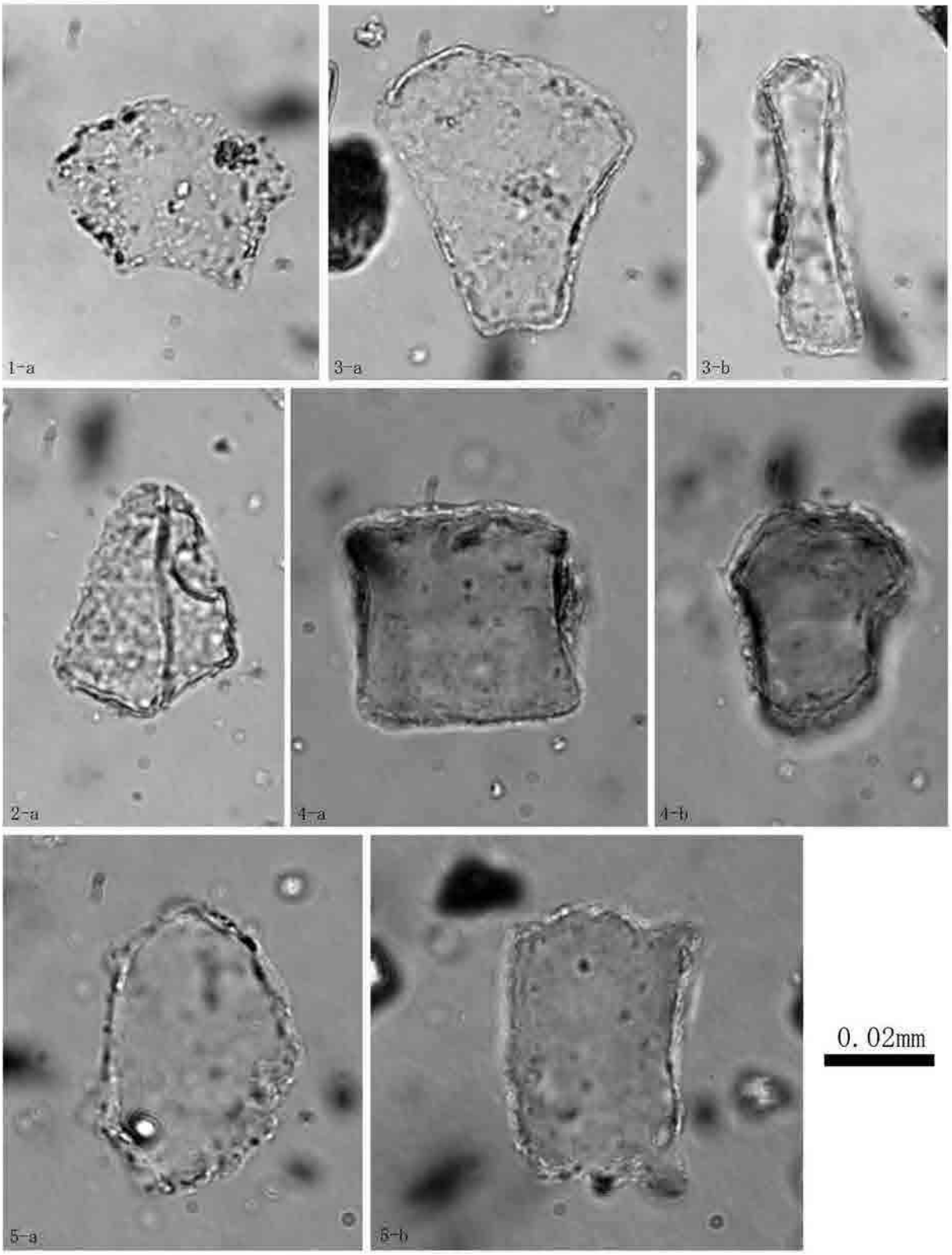
吉川昌伸（2011）クリ花粉の散布と三内丸山遺跡周辺における縄文時代のクリ林の分布状況．植生史研究，18，65-76.

吉川昌伸・鈴木　茂・辻　誠一郎・後藤香奈子・村田泰輔（2006）三内丸山遺跡の植生史と人の活動．植生史研究特別第2号，49-82.



図版1　新沢(2)遺跡から産出した花粉化石

1. クリ属（Ⅲ-2　PLC. 1683）
2. クリ属花粉塊（Ⅲ-2　PLC. 1684）
3. トチノキ属（Ⅱb　PLC. 1685）
4. ウコギ科（Ⅱb　PLC. 1686）
5. カラマツソウ属（Ⅲ-2　PLC. 1687）
6. ヨモギ属（Ⅲ-2　PLC. 1688）
7. タンポポ亜科（Ⅲ-2　PLC. 1689）



図版2　新沢(2)遺跡から産出した植物珪酸体

1. ササ属型機動細動珪酸体(Ⅱb)　　2. ササ属型機動細胞珪酸体(Ⅲ-1)

3. ウシクサ族機動細胞珪酸体(Ⅱb)　　4. キビ族機動細胞珪酸体(Ⅲ-1)

5. 他のタケ亜科機動細胞珪酸体(Ⅱb)

a. 断面　b. 側面

２．新沢（２）遺跡および金沢街道沢（１）遺跡採取土壌の蛍光Ｘ線分析

株式会社パレオ・ラボ

1）はじめに

鰺ヶ沢町に所在する新沢（２）遺跡および金沢街道沢（１）遺跡の調査では、それぞれ赤みのある層が検出されている。ここでは赤みのある層の成因の検討材料として、採取土壌の蛍光Ｘ線分析を行った。なお、新沢（２）遺跡の試料については、花粉分析、プラント・オパール分析、微粒炭分析を実施している（別項参照）。

2）試料と方法

分析対象は、新沢（２）遺跡Ｂ区のⅡｂ層（No.1、縄文時代後期～弥生時代）とⅢ-1層（No.2、縄文時代後期くらいまで）、金沢街道沢（１）遺跡の赤色範囲の１層（No.3、弥生～平安時代）とⅡ or Ⅲ層（No.4、１層以前）より採取した土壌計４点である（表１）。新沢（２）遺跡の土壌は、縄文期の集落の端にある沢地形で採取した。Ⅱｂ層（No.1）は、Ⅲ-1層（No.2）と比較してやや赤みを帯びている。また、金沢街道沢（１）遺跡の土壌は、沢地形に堆積した赤い焼土状の土壌（No.3）とその下部の黒色土（No.4）である。

表1　分析対象

No.	遺跡	位置	層位	時期	色調	備考
1	新沢(2)遺跡	B区基本土層	Ⅱb層	縄文時代後期～弥生時代	5YR3/2暗赤褐色	
2			Ⅲ-1層	縄文時代後期くらいまで	5YR3/1黒褐色	比較試料
3	金沢街道沢(1)遺跡	赤色範囲	1層	弥生～平安時代	5YR6/6橙色	
4			ⅡorⅢ層	1層以前	5YR4/2灰褐色	比較試料

測定試料は、乾燥後、塩化ビニル製リングに充填し、油圧プレス機で20t・１分以上プレスしたものを作製、使用した。蛍光Ｘ線分析は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1000μAのロジウム(Rh)ターゲット、Ｘ線照射径が8mmまたは1mm、X線検出器はSDD検出器である。この装置は、複数の一次フィルタが内蔵されており、適宜選択、挿入することでS/N比の改善が図れる。検出可能元素はナトリウム（Na）～ウラン（U）であるが、軽元素の感度は蛍光Ｘ線分析装置の性質上若干低く、特に定量分析におけるナトリウムの精度は低い。測定条件は、管電圧・一次フィルタの組み合わせが15kV（一次フィルタ無し）・50kV（一次フィルタPb測定用・Cd測定用）の計３条件で、測定時間は各条件500～1000s、管電流自動設定、照射径8mm、試料室内雰囲気真空に設定した。定量分析は、酸化物の形で算出し、ノンスタンダードFP法による半定量分析を行った。

3）分析結果

表２に半定量分析結果を示す。分析の結果、鉄（Fe203）の含有量は、新沢（２）遺跡Ⅱｂ層（No.1）が10.65%、Ⅲ-1層（No.2）が10.47%、金沢街道沢（１）遺跡１層（No.3）が9.35%、Ⅱ or Ⅲ層（No.4）が11.34%であった。

表2　半定量分析結果（mass%）

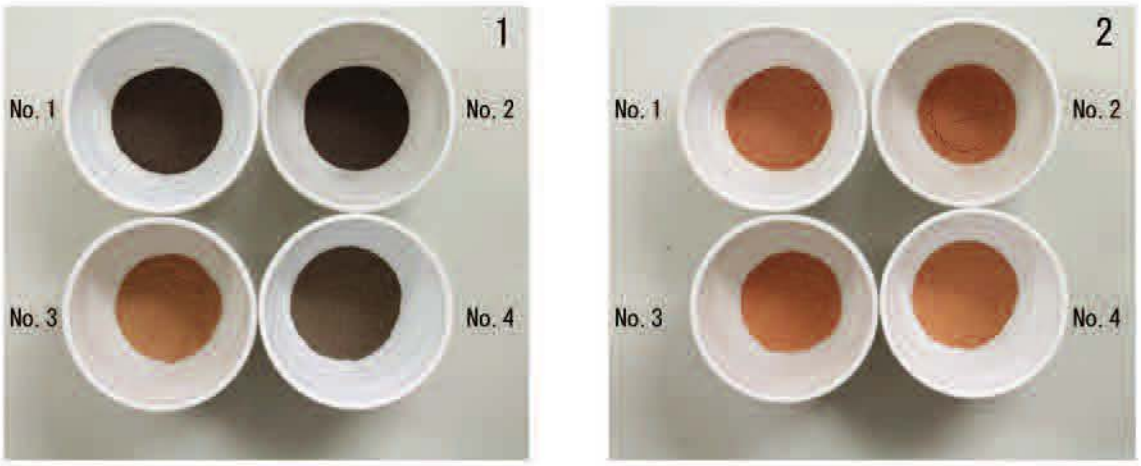
No.	遺跡	層位	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	SO_3	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	Rb_2O	SrO	Y_2O_3	ZrO_2
1	新沢(2)遺跡	Ⅱb層	0.77	17.17	66.05	0.84	0.51	1.57	0.78	1.02	0.54	10.65	0.01	0.02	0.01	0.05
2		Ⅲ-1層	1.11	18.28	64.91	0.91	0.55	1.51	0.70	1.03	0.45	10.47	0.01	0.02	0.01	0.04
3	金沢街道沢(1)遺跡	1層	0.66	19.27	66.74	0.62	0.40	1.55	0.60	0.44	0.31	9.35	0.02	0.02	0.01	0.03
4		ⅡorⅢ層	0.76	19.85	62.59	0.89	0.29	1.99	0.71	1.17	0.31	11.34	0.02	0.03	0.01	0.05

4）考察

土壌が赤みを帯びるのは主に鉄分の影響と考えられるが、今回分析した試料はいずれも10%前後で含有量に明確な差はなかった。そこで４点の試料について、短期的に土壌の酸化を促進させるため、軽く粉砕した後電気炉を用いて750℃で６時間焼成したところ、いずれもよく似た、赤みの強い色調となった（表３、図版１）。以上より、土壌の色調の違いは、鉄分の多寡によるものではなく、鉄分の酸化といった環境に起因するものとみられる。赤みを帯びた土壌（No.1、No.3）は、黒色土（No.2、No.4）より酸化しやすい条件下にあったと考えられる。（竹原弘展）

表3　焼成後の色調変化

No.	遺跡	層位	焼成前	焼成後
1	新沢(2)遺跡	Ⅱb層	5YR3/2暗赤褐色	5YR5/8明赤褐色
2		Ⅲ-1層	5YR3/1黒褐色	5YR6/8橙色
3	金沢街道沢(1)遺跡	1層	5YR6/6橙色	5YR6/8橙色
4		ⅡorⅢ層	5YR4/2灰褐色	5YR6/8橙色



図版１　土壌の焼成前後写真
1. 焼成前　2. 焼成後

第５節 新沢 (1)・(2) 遺跡出土の火山灰について

弘前大学大学院・理工学研究科
柴　正敏

標記遺跡より採集された火山灰サンプル６試料について、以下の観察を行った。

これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など粒径数マイクロメーター以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。その結果を表１に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、共存鉱物、化学組成などにより給源火山を推定することができる（町田・新井、2003)。火山ガラスの化学組成を決定する方法として、近年、電子プローブマイクロアナライザー（以下 EPMA）がもちいられるようになってきた。本報告では、２試料（試料番号１及び４）の火山ガラスについて EPMA 分析を行った。使用した EPMA は弘前大学・機器分析センター所属の日本電子製 JXA － 8230、使用条件は加速電圧 15 kV，試料電流 6×10^{-9} アンペアである。

表１　新沢(1)(2)遺跡の火山灰

試料番号	遺跡名	番号	出土位置	層位	ｶﾞﾗｽと構成鉱物	火山灰の帰属	備考
1*	新沢(1)	灰-1	SI02	4a	火山ｶﾞﾗｽ(pm、bw)、褐色ｶﾞﾗｽ、石英、ｱﾙｶﾘ長石、ｴｼﾞﾘﾝｵｰｼﾞｬｲﾄ、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、不透明鉱物	B-Tm、To-a	
2	新沢(1)	灰-2	SI04	-	火山ｶﾞﾗｽ(pm、bw)、ｱﾙｶﾘ長石、ｴｼﾞﾘﾝｵｰｼﾞｬｲﾄ、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、不透明鉱物	B-Tm	ﾌﾟﾗﾝﾄ･ｵﾊﾟｰﾙあり
3	新沢(1)	灰-3	SI05	2	火山ｶﾞﾗｽ(pm、bw)、ｱﾙｶﾘ長石、ｴｼﾞﾘﾝｵｰｼﾞｬｲﾄ、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、不透明鉱物	B-Tm	ﾌﾟﾗﾝﾄ･ｵﾊﾟｰﾙあり
4*	新沢(2)	灰-4	SI01	-	火山ｶﾞﾗｽ(pm、bw)、褐色ｶﾞﾗｽ、石英、ｱﾙｶﾘ長石、ｴｼﾞﾘﾝｵｰｼﾞｬｲﾄ、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、不透明鉱物	B-Tm、To-a	
5	新沢(2)	灰-5	SK09	-	火山ｶﾞﾗｽ(pm、bw)、ｱﾙｶﾘ長石、ｴｼﾞﾘﾝｵｰｼﾞｬｲﾄ、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、不透明鉱物	B-Tm	ﾌﾟﾗﾝﾄ･ｵﾊﾟｰﾙあり
6	新沢(2)	灰-6	SK10	-	火山ｶﾞﾗｽ(pm、bw)、ｱﾙｶﾘ長石、ｴｼﾞﾘﾝｵｰｼﾞｬｲﾄ、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、不透明鉱物	B-Tm	

本遺跡出土の火山ガラスは、その形態、色（特に褐色ガラスの有無）、共存鉱物（表１）及びその化学組成（表２、３及び４）により、以下のように帰属される。

（１）白頭山苫小牧テフラ（B-Tm）のガラスのみからなると推定される試料

（アルカリ長石及びエジリンオージャイトを含み、褐色ガラス、石英（斑晶）及びホルンブレンドを含まないもの）

・試料番号２，３，５、及び６

（２）白頭山苫小牧テフラ（B-Tm）と十和田ａテフラ（To-a）のガラスが混合していると推定される試料

（アルカリ長石、エジリンオージャイト、褐色ガラス及び石英（斑晶）を含み、ホルンブレンドを含まないもの）

・試料番号１及び４（計２試料）

表２、３及び４には、試料番号１及び４のB-Tm及びTo-aガラスのEPMA分析値を示した。B-Tmのガラス組成は、アルカリ粗面岩質（B-Tm(1)，表２－１及び２－２）及びアルカリ流紋岩質（B-Tm(2)，表３－１及び３－２）であり、半年～１年間の休止期を挟んで起こった２度の10世紀噴火の後半部を代表する火山灰に帰属できる。

表４－１及び４－２には、To-aのEPMAガラス組成を示した。

表2-1　新沢（1）遺跡の火山灰（B-Tm(1)),試料番号1

重量%

No.	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	Total
1	66.89	0.34	14.92	3.71	0.17	0.10	1.16	6.08	5.42	98.79
2	66.90	0.34	14.31	3.89	0.09	0.14	1.11	6.13	5.48	98.40
3	65.74	0.32	13.72	3.52	0.11	0.10	0.97	5.34	5.24	95.06
4	66.94	0.40	14.86	3.86	0.18	0.11	1.17	5.70	5.72	98.94
5	64.34	0.43	15.24	3.69	0.04	0.16	1.13	5.73	5.64	96.39

	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	Total
最少	64.34	0.32	13.72	3.52	0.04	0.10	0.97	5.34	5.24	95.06
最大	66.94	0.43	15.24	3.89	0.18	0.16	1.17	6.13	5.72	98.94
平均	66.16	0.37	14.61	3.73	0.12	0.12	1.11	5.80	5.50	97.52
標準偏差	1.139	0.047	0.601	0.148	0.059	0.029	0.081	0.322	0.188	1.711

100%に規格化した値

No.	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	Total
1	67.71	0.34	15.11	3.76	0.17	0.10	1.17	6.16	5.49	100
2	67.99	0.35	14.55	3.95	0.10	0.15	1.12	6.23	5.57	100
3	69.16	0.34	14.43	3.70	0.12	0.11	1.02	5.62	5.51	100
4	67.66	0.40	15.02	3.90	0.18	0.11	1.18	5.76	5.78	100
5	66.74	0.45	15.81	3.82	0.04	0.17	1.18	5.94	5.85	100

	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	Total
最少	66.74	0.34	14.43	3.70	0.04	0.10	1.02	5.62	5.49	100
最大	69.16	0.45	15.81	3.95	0.18	0.17	1.18	6.23	5.85	100
平均	67.85	0.38	14.98	3.83	0.12	0.13	1.14	5.94	5.64	100
標準偏差	0.866	0.048	0.548	0.101	0.059	0.03	0.068	0.258	0.163	
B-Tm(2)	68.4	0.4	14.8	4.4	0.1	0.1	1.0	5.4	5.3	

町田・新井
(2003)

表2-2　新沢（2）遺跡の火山灰のガラス(B-Tm(1))、試料番号4

重量%

No.	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	Total
1	54.64	0.38	12.11	3.14	0.08	0.07	1.00	4.38	4.65	80.46
2	60.63	0.48	13.79	3.63	0.04	0.18	1.19	5.61	5.16	90.71
3	64.59	0.39	14.17	4.04	0.08	0.03	1.01	5.44	5.60	95.35

	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	Total
最少	54.64	0.38	12.11	3.14	0.04	0.03	1.00	4.38	4.65	80.46
最大	64.59	0.48	14.17	4.04	0.08	0.18	1.19	5.61	5.60	95.35
平均	59.96	0.42	13.36	3.60	0.07	0.09	1.07	5.14	5.14	88.84
標準偏差	5.01	0.055	1.093	0.45	0.025	0.073	0.109	0.664	0.478	7.621

100%に規格化した値

No.	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	Total
1	67.92	0.48	15.06	3.91	0.10	0.09	1.24	5.45	5.77	100
2	66.85	0.53	15.21	4.00	0.04	0.19	1.31	6.18	5.69	100
3	67.74	0.41	14.86	4.24	0.09	0.04	1.06	5.70	5.87	100

	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	Total
最少	66.85	0.41	14.86	3.91	0.04	0.04	1.06	5.45	5.69	100
最大	67.92	0.53	15.21	4.24	0.10	0.19	1.31	6.18	5.87	100
平均	67.50	0.47	15.04	4.05	0.08	0.11	1.20	5.78	5.78	100
標準偏差	0.57	0.06	0.18	0.17	0.03	0.08	0.13	0.37	0.09	
B-Tm(2)	68.4	0.4	14.8	4.4	0.1	0.1	1.0	5.4	5.3	

町田・新井
(2003)

表3-1　新沢（1）遺跡の火山灰（B-Tm(2)),試料番号4

重量%

No.	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	Total
1	74.46	0.24	10.83	3.40	0.13	0.01	0.24	5.69	4.58	99.58
2	62.89	0.27	8.50	2.96	0.02	0.01	0.26	4.21	4.11	83.22
3	71.45	0.26	12.60	3.29	0.07	0.05	0.44	6.05	4.89	99.10

	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	Total
最少	62.89	0.24	8.50	2.96	0.02	0.01	0.24	4.21	4.11	83.22
最大	74.46	0.27	12.60	3.40	0.13	0.05	0.44	6.05	4.89	99.58
平均	69.60	0.26	10.64	3.21	0.07	0.02	0.31	5.32	4.53	93.97
標準偏差	6.003	0.017	2.055	0.23	0.051	0.026	0.112	0.978	0.395	9.314

100%に規格化した値

No.	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	Total
1	74.77	0.24	10.88	3.41	0.13	0.01	0.24	5.72	4.60	100
2	75.57	0.33	10.22	3.55	0.03	0.01	0.31	5.06	4.94	100
3	72.09	0.26	12.71	3.32	0.07	0.05	0.45	6.11	4.94	100

	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	Total
最少	72.09	0.24	10.22	3.32	0.03	0.01	0.24	5.06	4.60	100
最大	75.57	0.33	12.71	3.55	0.13	0.05	0.45	6.11	4.94	100
平均	74.15	0.28	11.27	3.43	0.08	0.02	0.33	5.63	4.83	100
標準偏差	1.823	0.045	1.293	0.117	0.049	0.026	0.104	0.531	0.194	0
B-Tm(2)	75.9	0.2	10.3	4.1	0.0	0.1	0.2	4.7	4.3	

町田・新井
(2003)

表3-2　新沢（2）遺跡の火山灰（B-Tm(2)),試料番号4

重量%

No.	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	Total
1	71.39	0.35	11.02	3.38	0.07	0.05	0.45	5.12	4.96	96.80
2	70.02	0.20	9.42	3.11	0.05	0.00	0.16	4.81	4.48	92.26
3	70.58	0.26	11.34	3.20	0.05	0.01	0.40	5.54	4.85	96.03

	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	Total
最少	70.02	0.20	9.42	3.11	0.05	0.00	0.16	4.81	4.48	92.26
最大	71.39	0.35	11.34	3.38	0.07	0.05	0.45	5.54	4.96	96.80
平均	70.67	0.27	10.59	3.23	0.06	0.02	0.34	5.16	4.70	95.03
標準偏差	0.689	0.077	1.025	0.136	0.013	0.024	0.158	0.365	0.241	2.431

100%に規格化した値

No.	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	Total
1	73.76	0.37	11.39	3.49	0.08	0.05	0.47	5.29	5.12	100
2	75.90	0.22	10.22	3.37	0.06	0.00	0.17	5.21	4.86	100
3	73.50	0.27	11.81	3.34	0.05	0.01	0.41	5.77	4.84	100

	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	Total
最少	73.50	0.22	10.22	3.34	0.05	0.00	0.17	5.21	4.84	100
最大	75.90	0.37	11.81	3.49	0.08	0.05	0.47	5.77	5.12	100
平均	74.38	0.29	11.14	3.40	0.06	0.02	0.35	5.42	4.94	100
標準偏差	1.318	0.074	0.824	0.081	0.013	0.025	0.159	0.300	0.157	
B-Tm(2)	75.9	0.2	10.3	4.1	0.0	0.1	0.2	4.7	4.3	

町田・新井
(2003)

表4－1　鰺ヶ沢町・新沢（1）及び新沢（2）遺跡の火山灰（To-a）、試料番号1

重量%

No.	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	Total
1	72.52	0.32	11.77	1.22	0.05	0.33	1.84	3.87	1.18	93.09
2	66.85	0.31	11.15	1.30	0.07	0.38	1.80	3.85	1.17	86.89
3	71.50	0.38	12.69	1.63	0.15	0.57	2.36	4.26	1.14	94.65
4	73.19	0.35	12.85	1.75	0.08	0.56	2.37	4.50	1.12	96.76

	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	Total
最少	66.85	0.31	11.15	1.22	0.05	0.33	1.80	3.85	1.12	86.89
最大	73.19	0.36	12.85	1.75	0.15	0.57	2.37	4.50	1.18	96.76
平均	71.02	0.33	12.12	1.47	0.09	0.46	2.09	4.12	1.15	92.85
標準偏差	2.860	0.024	0.805	0.252	0.043	0.121	0.315	0.314	0.029	4.249

100%に規格化した値

No.	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	Total
1	77.90	0.34	12.64	1.31	0.05	0.35	1.98	4.16	1.27	100.00
2	76.95	0.36	12.83	1.50	0.09	0.44	2.07	4.43	1.35	100.00
3	75.55	0.38	13.41	1.72	0.16	0.60	2.49	4.50	1.20	100.00
4	75.64	0.36	13.28	1.80	0.08	0.58	2.45	4.65	1.16	100.00

	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	Total
最少	75.55	0.34	12.64	1.31	0.05	0.35	1.98	4.16	1.16	100.00
最大	77.90	0.38	13.41	1.80	0.16	0.60	2.49	4.65	1.35	100.00
平均	76.51	0.36	13.04	1.56	0.09	0.49	2.25	4.43	1.24	100.00
標準偏差	1.126	0.017	0.366	0.222	0.045	0.116	0.261	0.205	0.083	

To-a	76.17	0.42	13.41	1.89	0.09	0.38	1.99	4.08	1.56
To-H (pfl)	76.38	0.40	13.43	1.90	0.11	0.44	2.22	3.88	1.24

青木・町田
(2006)

表4－2　新沢(2)遺跡の火山灰（To-a）、試料番号4

重量%

No.	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	Total
1	74.43	0.25	11.45	1.06	0.05	0.33	1.55	4.20	1.18	94.49

100%に規格化した値

No.	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	Total
1	78.78	0.26	12.12	1.12	0.05	0.35	1.64	4.44	1.24	100

To-a	76.17	0.42	13.41	1.89	0.09	0.38	1.99	4.08	1.56
To-H (pfl)	76.38	0.40	13.43	1.90	0.11	0.44	2.22	3.88	1.24

青木・町田
(2006)

参考文献

青木かおり・町田　洋 (2006)、日本に分布する第四紀後期広域テフラの主元素組成　― K_2O-TiO_2 図によるテフラの識別. 地質調査研究報告、第 57 巻、第 7 /8 号、239 － 258.

Hayakawa, Y.(1985),Pyroclastic geology of Towada Volcano. Bulletin of Earthquake Research Institute, vol.60, 507-592.

Machida, H.(1999),Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan : Recent progress. 第四紀研究、第 38 巻、194-201.

町田　洋・新井房夫 (2003)、新編火山灰アトラス　－日本列島とその周辺－. 東京大学出版会、pp.336.

柴　正敏・重松直樹・佐々木　実 (2000)、青森県内に分布する広域テフラに含まれる火山ガラスの化学組成（1）. 弘前大学理工学部研究報告、第 1 巻、第 1 号、11-19.

柴　正敏・中道哲郎・佐々木　実 (2001)、十和田火山、降下軽石の化学組成変化　－宇樽部の一露頭を例として－. 弘前大学理工学部研究報告、第 4 巻、第 1 号、11-17.

柴　正敏・佐々木　実 (2006)、十和田火山噴出物のガラス組成変化、月刊地球、第 28 巻、第 5 号、322-325.

第６節　新沢（1）遺跡、新沢（2）遺跡、金沢街道沢（1）遺跡出土黒曜石製石器の産地推定

株式会社パレオ・ラボ

１．はじめに

鰺ヶ沢町に所在する新沢（1）遺跡、新沢（2）遺跡、金沢街道沢（1）遺跡から出土した縄文時代～弥生時代の黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

２．試料と方法

分析対象は、８点の黒曜石製石器である。出土遺跡、推定時期、石器の種類などを表１に示す。

表1　分析対象

No.	遺跡	番号	遺構	グリッド	層位	時期	種類	特徴	その他	重さ(g)
1	新沢(1)遺跡	K3	SK10	—	1	弥生前期?	微細剥離を有する剥片	緑色に濁る		2.6
2		K10		ⅡP-23	Ⅱ～Ⅲ		石核	透明感あり・球顆多い		33.9
3		K16		ⅢP-33	Ⅱ		剥片	透明感あり・やや茶色い		1.0
4	新沢(2)遺跡	K194		ⅣI-48	Ⅱ～Ⅲ	縄文後期	石錐	透明感あり・黒い縞・球顆		12.9
5		K197		ⅣL-46	Ⅲ		削器?	漆黒だがやや濁る	稜線に摩耗	19.6
6		K204		ⅣC-56	Ⅱ～Ⅲ	弥生中期以降?	掻器	漆黒だがやや濁る	稜線に摩耗（一部）	8.8
7	金沢街道沢(1)遺跡	K7		ⅡS-109	Ⅱ	縄文時代	微細剥離を有する剥片	透明感あり・やや茶色い		0.7
8		K31		ⅢE-104			剥片	球顆多く白濁		8.0

試料は、測定前にメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、Ｘ線管ターゲットはロジウム（Rh）、Ｘ線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径８㎜、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光Ｘ線分析によるＸ線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた（望月，1999など）。本方法では、まず各試料を蛍光Ｘ線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム（K）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の合計７元素のＸ線強度（cps；count per second）について、以下に示す指標値を計算する。

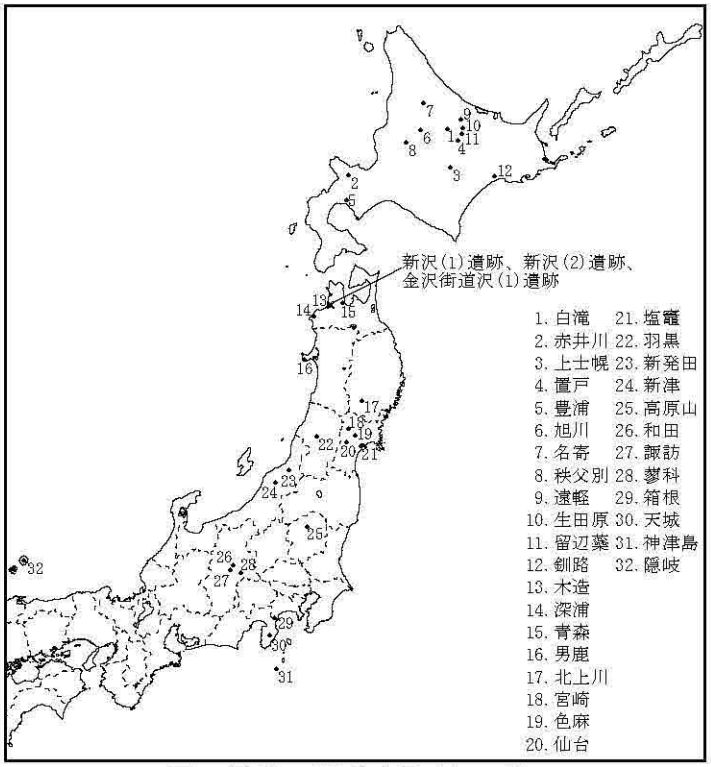


図1　黒曜石産地分布図（東日本）

1) Rb 分率 =Rb 強度× 100/(Rb 強度 +Sr 強度 +Y 強度 +Zr 強度)

2) Sr 分率 =Sr 強度× 100/(Rb 強度 +Sr 強度 +Y 強度 +Zr 強度)

3) Mn 強度× 100/Fe 強度

4) log(Fe 強度 /K 強度)

そして、これらの指標値を用いた２つの判別図（横軸 Rb 分率－縦軸 Mn 強度× 100/Fe 強度の判別図と横軸 Sr 分率－縦軸 log(Fe 強度 /K 強度) の判別図）を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光 X 線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせて指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、log(Fe 強度 /K 強度) の値が減少する（望月，1999)。試料の測定面にはなるべく奇麗で平坦な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表２に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、図１に各原石の採取地の分布図を示す。

表2　東日本黒曜石産地の判別群

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地	
北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂(43),八号沢露頭(15)	赤石山山頂,八号沢露頭,八号沢,黒曜の沢,幌加林道(36)
		白滝2	7の沢川支流(2),IK露頭(10),十勝石沢露頭直下河床(11),アジサイの滝露頭(10)	
	赤井川	赤井川	曲川・土木川(24)	
	上士幌	上士幌	十勝三股(4),タウシュベツ川右岸(42),タウシュベツ川左岸(10),十三ノ沢(32)	
	置戸	置戸山	置戸山(5)	
		所山	所山(5)	
	豊浦	豊浦	豊泉(10)	
	旭川	旭川	近文台(8),雨紛台(2)	
	名寄	名寄	忠烈布川 (19)	
	秩父別	秩父別1	中山(66)	
		秩父別2		
		秩父別3		
	遠軽	遠軽	社名淵川河床(2)	
	生田原	生田原	仁田布川河床(10)	
	留辺蘂	留辺蘂1	ケショマップ川河床(9)	
		留辺蘂2		
	釧路	釧路	釧路市営スキー場(9),阿寒川右岸(2),阿寒川左岸(6)	
青森	木造	出来島	出来島海岸(15),鶴ヶ坂 (10)	
	深浦	八森山	岡崎浜(7),八森山公園(8)	
	青森	青森	天田内川(6)	
秋田	男鹿	金ヶ崎	金ヶ崎温泉(10)	
		脇本	脇本海岸(4)	
岩手	北上川	北上折居1	北上川(9),真城 (33)	
		北上折居2		
		北上折居3		
宮城	宮崎	湯ノ倉	湯ノ倉(40)	
	色麻	根岸	根岸(40)	
	仙台	秋保1	土蔵(18)	
		秋保2		
	塩竈	塩竈	塩竈(10)	
山形	羽黒	月山	月山荘前(24),大越沢 (10)	
		櫛引	たらのき代 (19)	
新潟	新発田	板山	板山牧場(10)	
	新津	金津	金津(7)	
栃木	高原山	甘湯沢	甘湯沢(22)	
		七尋沢	七尋沢(3),宮川(3),枝持沢(3)	
長野	和田	西餅屋	芙蓉パーライト土砂集積場(30)	
		鷹山	鷹山(14),東餅屋(54)	
		小深沢	小深沢(42)	
		土屋橋1	土屋橋西(10)	
		土屋橋2	新和田トンネル北(20),土屋橋北西(58),土屋橋西(1)	
		古峠	和田峠トンネル上(28),古峠(38),和田峠スキー場(28)	
		ブドウ沢	ブドウ沢(20)	
		牧ヶ沢	牧ヶ沢下(20)	
		高松沢	高松沢(19)	
	諏訪	星ヶ台	星ヶ台(35),星ヶ塔(20)	
	蓼科	冷山	冷山(20),麦草峠(20),麦草峠東(20)	
神奈川	箱根	芦ノ湯	芦ノ湯(20)	
		畑宿	畑宿(51)	
		鍛冶屋	鍛冶屋(20)	
静岡		上多賀	上多賀(20)	
	天城	柏峠	柏峠(20)	
東京	神津島	恩馳島	恩馳島(27)	
		砂糠崎	砂糠崎(20)	
島根	隠岐	久見	久見パーライト中(6),久見採掘現場(5)	
		箕浦	箕浦海岸(3),加茂(4),岸浜(3)	

３．分析結果

表３に石器の測定値および算出した指標値を、図２と図３に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりや

表3　測定値および産地推定結果

No.	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn*100/Fe	Sr分率	log Fe/K	判別群	エリア	No.
1	283.3	101.3	3588.9	568.8	66.2	504.8	3363.5	12.63	2.82	1.47	1.10	八森山	深浦	1
2	261.5	191.9	1516.4	494.6	541.8	330.6	597.3	25.18	12.65	27.58	0.76	出来島	木造	2
3	230.0	92.6	3282.1	496.2	62.3	447.9	2949.3	12.54	2.82	1.57	1.15	八森山	深浦	3
4	245.7	190.7	1465.1	516.2	631.1	349.6	672.1	23.80	13.02	29.10	0.78	出来島	木造	4
5	320.0	126.7	4272.9	637.8	79.0	578.7	3847.4	12.40	2.96	1.54	1.13	八森山	深浦	5
6	287.9	112.3	3810.6	550.5	67.2	488.2	3281.7	12.55	2.95	1.53	1.12	八森山	深浦	6
7	213.2	82.8	2930.3	452.0	56.4	412.4	2768.3	12.25	2.82	1.53	1.14	八森山	深浦	7
8	211.3	157.4	1217.4	432.6	479.4	304.0	556.0	24.41	12.93	27.05	0.76	出来島	木造	8

すくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んである。

分析の結果、No.２、４、８の３点が出来島群（木造エリア）に、No.１、３、５～７の５点が八森山群（深浦エリア）の範囲にそれぞれプロットされた。表３に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。また、表４に遺跡別の、表５に時期別の産地推定結果を示す。

表4　遺跡別の産地推定結果

	木造	深浦	合計
新沢（1）遺跡	1	2	3
新沢（2）遺跡	1	2	3
金沢街道沢（1）遺跡	1	1	2
合計	3	5	8

表5　時期別の産地推定結果

	木造	深浦	合計
縄文時代	1	1	2
縄文時代後期	1	1	2
弥生時代前期?	1	2	3
弥生時代中期以降?	0	1	1
合計	3	5	8

４．おわりに

新沢（1）遺跡、新沢（2）遺跡、金沢街道沢（1）遺跡より出土した黒曜石製石器８点について、蛍光Ｘ線分析による産地推定を行った結果、３点が木造エリア、５点が深浦エリア産と推定された。

（竹原弘展）

引用文献

望月明彦（1999）上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定．大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書２―上和田城山遺跡篇―」：172-179，大和市教育委員会．

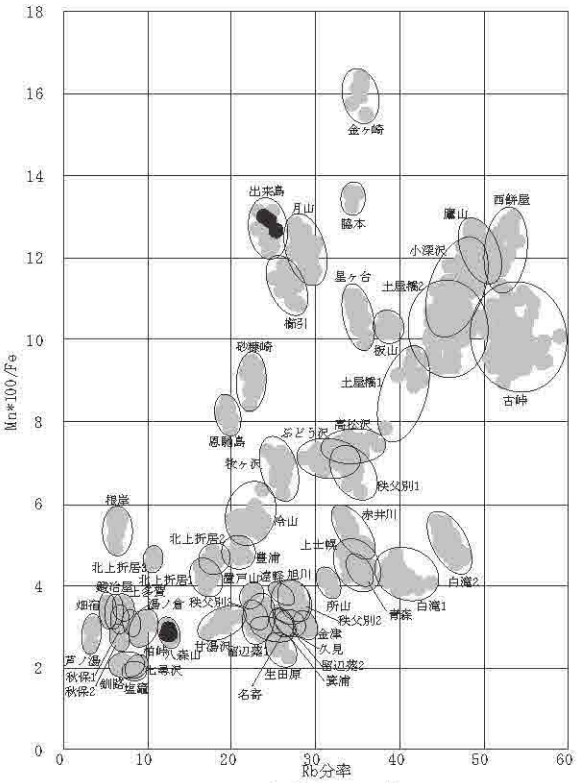


図２　黒曜石産地推定判別図（1）

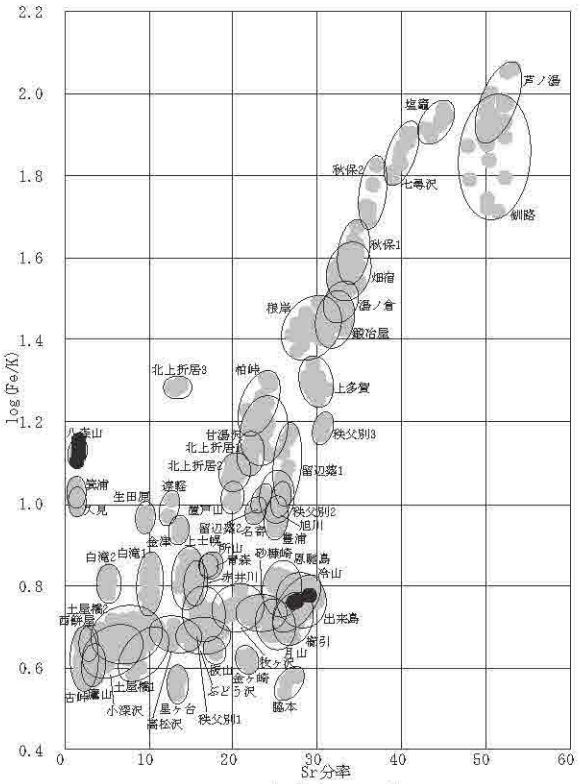


図３　黒曜石産地推定判別図（2）

第５章　総括

第１節　金沢街道沢（１）遺跡について（図 138）

金沢街道沢（１）遺跡では縄文時代、奈良・平安時代の遺構・遺物が発見された。以下、遺構・遺物について概略を記述する。

１、縄文時代の遺構と出土遺物

遺構は土坑、溝状土坑が検出された。遺物は縄文土器、石器が出土している。土器の時期は縄文時代早期前葉･中葉、前期前葉、中期中葉～末葉である。中でも縄文時代早期前葉の押型文土器が多い。器形が復元できるものは無いが、Ｖ字・菱形などの押型文と多段の平行沈線で器面が装飾されている。また、これらに伴い羽状縄文が施文された土器も出土している。出土位置は 108 グリッドライン以東からの出土である。

２、古代の遺構と出土遺物

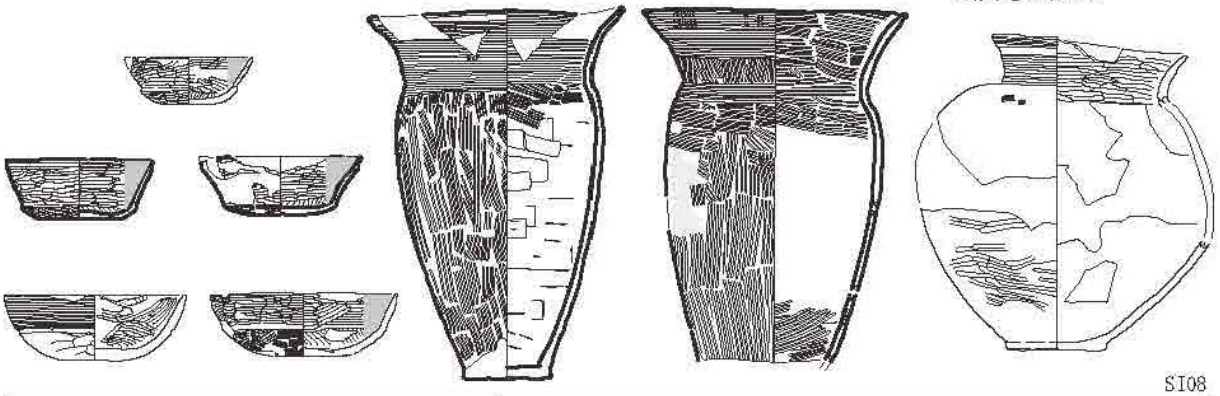
奈良時代と平安時代の竪穴住居跡が検出された。主軸方向や柱穴配置等から集落の変遷を検討した結果、大きく奈良時代２期、平安時代３期が考えられた。

奈良時代の竪穴住居跡

形状：方形（第８・９号住居跡）、隅丸方形（第 4b・５･11･16･20 号住居跡）がある。カマド位置：壁中央部から右に寄るもの（第８・９号住居跡）、壁中央部に位置するもの（第３b・４b・５･11･16 号住居跡）がある。カマド煙道は地下式であり、本体の火床面は壁に接するくらい近い場所に形成されていることが多い。主軸方向:南東方向（第９号住居跡）､北西､南東方向の２方向（第８号住居跡）、北西方向（第 4b・５・７･11･16･20 号住居跡）、西方向（第３b 号竪穴住居跡）がある。第７号竪穴住居跡は南東方向に煙道部らしきものが見られ、第８号住居跡と類似する可能性がある。柱穴配置：主柱穴がない住居跡が多く、第 4b 号住居跡だけには見られた。第 4b 号住居跡は他の住居跡と比較して大きいためとみられる。上記を勘案すると第８・９号住居跡と第３b・４b・５・７･11･16 号住居跡の２つのグループに分かれる。これらの先後関係を考える上で参考になるのが第８号住居跡のカマドである。北西方向のカマドと比較して、南東方向のカマドの遺存状況が悪いため南東から北西に作り替えた可能性が考えられる。従って本遺跡の奈良時代のカマド方位の傾向として南東方向から北西方向へ変化があった可能性が高いため、主軸方向を基準とすると、１期:南東方向を向く住居跡　２期:北西方向を向く住居跡の変遷が考えられる。出土遺物は土師器、須恵器が出土している。第８・９号住居跡から出土している甕は横走沈線が口縁部寄りと頸部寄りに分かれて施文されている（分条タイプ）ものがみられる。他の住居跡から出土している甕は口縁部から頚部全面に横走沈線がみられる。また、横走沈線の下端は頸部のくびれ部までとなっている。これらの甕に横走沈線が見られないものが伴う。坏は外面に段を持つ丸底基調の土器である。底部が平底のように見えるものや段差が沈線のように見えるものもある。なかでも段差が底部付近まで下がっている坏（図 26 － 2）は特徴的で、類例としては北海道南西部の８世紀代の遺跡に類例がみられる。なお、産地不明であるが須恵器坏が第５号住居跡の堆積土から出土している。これらの状況を総合すると、前述１期が８世紀前半代、後者が８世紀後半代ととらえることができる。第８号住居跡の年代測定値も８世紀代に収まる結果と

竪穴住居跡分布図

奈良時代の竪穴住居跡はゴシック
平安時代の住居跡は明朝
●は地下式カマド
▲は半地下式カマド



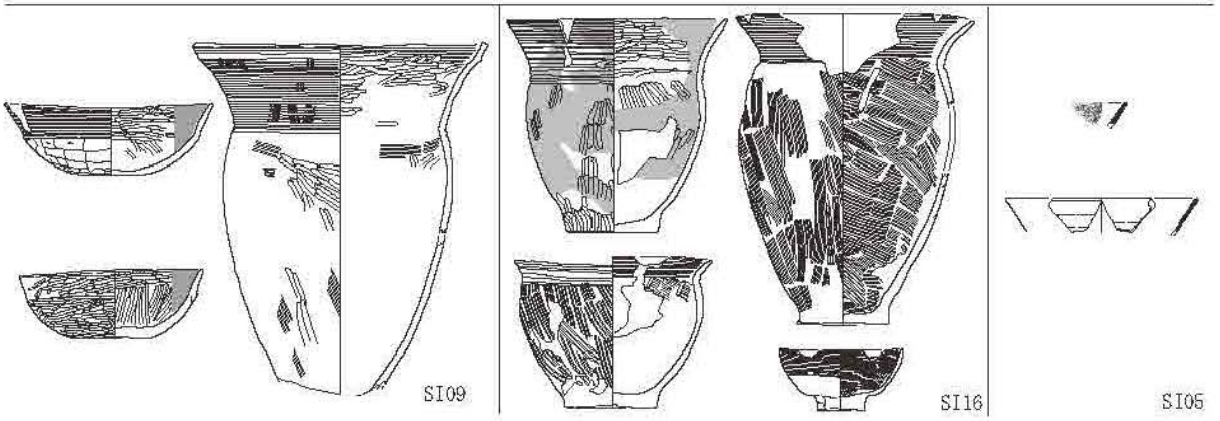


図 138　金沢街道沢（１）遺跡の集落と主な遺物

なっている。当該時期の集落としては津軽北西部では初見且つまとまった資料であるため、今後さらに検討されることを期待する。

平安時代の竪穴住居跡

カマド位置・主軸方位:壁中央部から右に寄るもの（第１号住居跡）、壁中央部から左に寄るもの（第１・６号住居跡を除くすべて）がある。主軸方位は東北東を指向する。煙道は半地下式で、火床面は住居壁よりやや離れた位置に形成されることが多い。柱穴配置：柱穴なし（第１・６号住居跡）、柱穴数がやや少なく柱間の間隔が広いもの（第３a・12・14・15・17・18 号）、柱穴数が多く柱間の間隔も狭いもの（第２・４a・10・13 号）がみられる。

分類を元にして考えると１期:柱穴なし住居跡。２期:柱穴数がやや少なく柱間の間隔が広い住居跡。３期：柱穴数が多く柱間の間隔も狭い住居跡と変遷するものと考えられる。３期の住居跡は 10 世紀後半～ 11 世紀にかけての可能性がある。大溝跡の内部に分布している状況から大溝跡と同時期に存在していた可能性がある。遺物は土師器、須恵器、土製品、石器、鉄製品が出土した。中でも非ロクロ整形で底面に筵圧痕がみられる特徴的な土師器坏が出土している。（齋藤）

第２節　新沢（１）・（２）遺跡について

新沢（１）遺跡と新沢（２）遺跡は谷を挟み隣接するため、一体としてとらえ総括する

１、遺物・遺構分布の変遷について

両遺跡の遺物・遺構分布の大まかな変遷図と表を示した。縄文時代早期～平安時代まで両遺跡間を集落が行き来しているように見える。もちろん他の遺跡との関連も考えなければならないが、近接する遺跡間で微妙に時期がずれるのは珍しいことではない。地形や資源の関係で集落が一定範囲内を移動した様子がうかがえる。

新沢(1)・(2)遺跡における遺構・遺物の変遷表

時代	時期	新沢(1)遺跡		新沢(2)遺跡	
		遺構	遺物	遺構	遺物
縄文	早期(Ⅰa)	－		－	無文・縄文
	早期(Ⅰb)		日計式		日計式
	早期(Ⅰc)		白浜式?		白浜式?
	前～中期		○		○
	後期	フラスコ状土坑	－	住居, 土坑(盛), フラスコ状土坑, 埋設土器,	十腰内Ⅰ式
	晩期前半	フラスコ状土坑	大洞B式	－	－
	晩期後半	－	－	－	大洞c1・A?式
続縄文・弥生	前期	土器埋設遺構	砂沢式, 遠賀川系	－	砂沢式, 突帯文系?
	中期前半	－	－	焼土, 土坑(盛)	Ⅵb(五所式?)
	中期後半	－	－	焼土?	Ⅵc(念仏間式?)
	後期～	－	－	焼土	Ⅵd(赤穴式), 後北C2D式
平安	9c後	住居, 土坑	土師器, 須恵器, 無文土器等	－	
	10c前	住居, 焼成(製炭)土坑, 溝跡?	土師器	住居, 焼成(製炭)土坑	土師器等
	10c中	住居?(SI03)	土師器	焼成(製炭)土坑	－

２、縄文時代早期前葉の無紋土器の出土状況から

新沢（２）遺跡では、２箇所から縄文時代早期の無紋土器が出土した。これらの土器は、現状では日計式押型文土器より古く、草創期の爪形文土器より新しい可能性が指摘されているようである。本遺跡東側に隣接する平野（２）遺跡でも類似する土器が出土している（鰺ヶ沢町 2002）。新

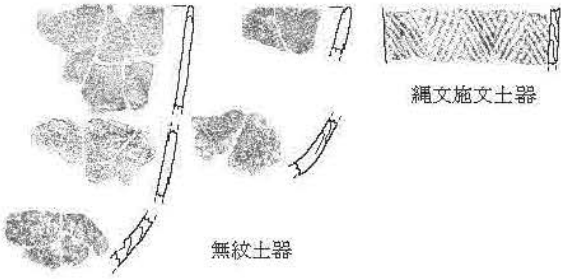


図 139　新沢（２）遺跡ⅣP-43 付近出土第Ⅰ群土器

沢（２）遺跡出土土器の出土層位は残念ながらⅢ層より下位であることしかわからない。焼土遺構（SN-11）の火床面焼土内などから出土していることを勘案すると基本層序Ⅲ－２層の下部からⅣ層が出土層位と推定される。出土土器の特徴としては、緩い波状口縁を持ち、口唇端部が狭く面取りされ、内外面無文で、外面はミガキ調整、内面もミガキあるいはナデ調整などの特徴がある。胎土中にはごく微量の繊維を含む可能性がある。器厚は口縁部付近で６～10㎜程度とやや厚みがある。ⅣＰ－43付近で出土したものについては、付近から縄文施文土器（図129－８）が出土しており、供伴関係にある可能性がある。また、押型文土器は付近から出土していない。今後これらの関係について整理する必要がある。

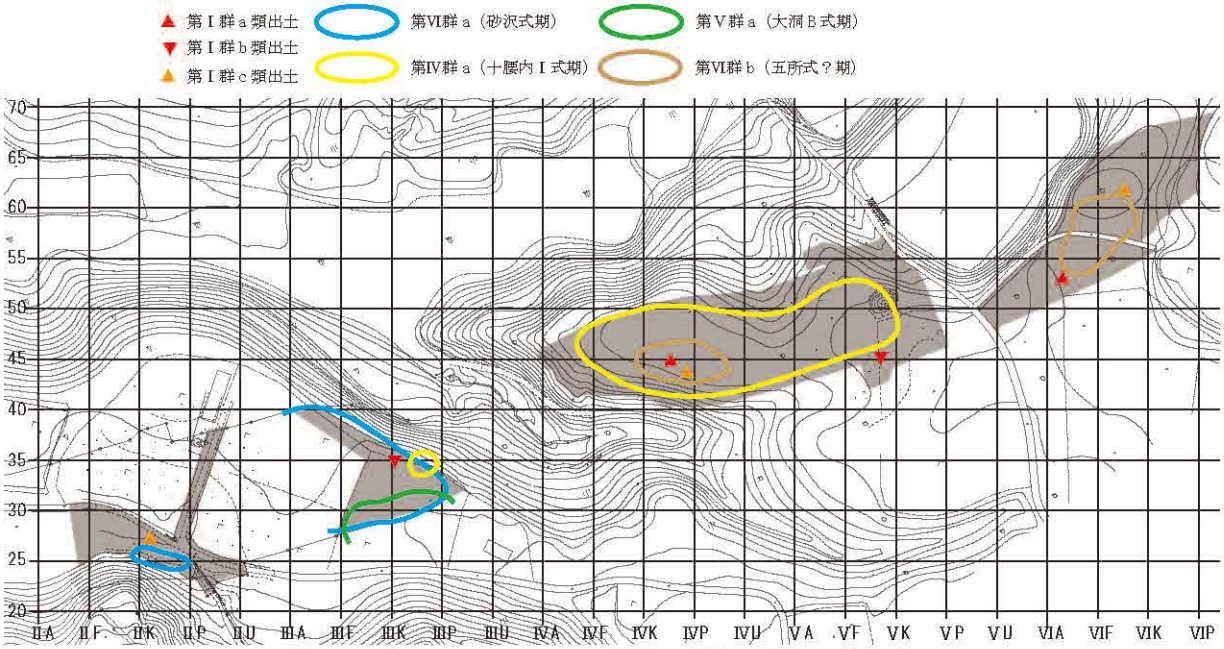


図140　新沢（１）・（２）遺跡の遺構・遺物分布概念図

３、縄文時代後期の集落について

新沢（２）遺跡では、縄文時代後期前葉（十腰内Ⅰ式）期の集落跡が発見された。竪穴住居跡、土坑（墓）、フラスコ状土坑、土器埋設遺構から構成される集落で、津軽地域では貴重な発見となった。出土土器は口縁部から体部下半にかけて沈線文を主体とする文様が施文されており、現状の編年では十腰内Ⅰａ式に比定できよう。竪穴住居跡は、掘り込みが浅く、柱穴配置も不明瞭であった。炉跡は、火床面焼土の端部に小型の土器を正位または斜位に埋設するスタイルが特徴的で、炉石が巡るものが多い。炉内に土器を埋設する行為は縄文時代後期初頭によく見られるが、本遺跡の出土土器は確実に十腰内Ⅰ式であるため、古い要素が残る地域であった可能性がある。炉体土器は図141のように３種類の文様が見られ、それぞれが近い時期で集落を構成し、時間差があったと考えられる。土坑出土土器は住居炉体土器と若干異なる文様構成をとるものが多いため、住居跡と土坑（特に墓と考えられる土坑Ｊ１類）は同時期に存在していたか今後の検討課題である。

４、弥生時代について

新沢（１）遺跡から砂沢式期の遺物と土器埋設遺構が発見された。調査区内は削平が激しいところ

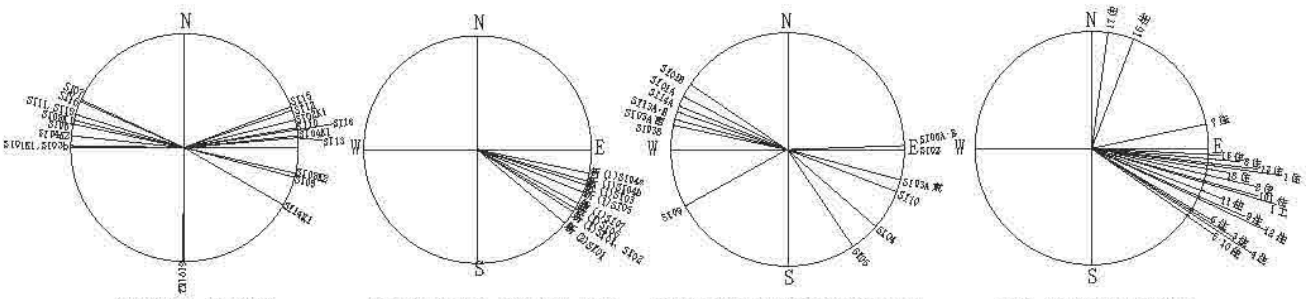
図 141　縄文時代後期の一括遺物

も有り、同時期の遺構が本来あった可能性がある。続く第VI群ｂ類期はほぼ五所式ととらえられる時期である。広範囲に土坑や焼土等に伴って遺物が出土した。。第VI群ｃ類期は念仏間式ととらえられる時期である。この時期も焼土が発見されている。第VI群ｄ類期は赤穴式期ととらえられる。SN08付近では赤穴式土器がまとまって出土している。このように、弥生時代中期以降の本遺跡では焼土を中心とした遺構が発見された。発見に際しては、基本層序Ⅱｂ層の存在が大きく、この層を調査中に発見した者が多い。ともすれば遺構確認段階で黒色土中の遺物や遺構は削平されることが多いが、本遺跡のように堆積状況が良好な場合、明確な遺構があまり見つからない当該時期においても遺構が発見できる。今後注意が必要である。

５、平安時代の集落及び土器の変遷について（図 142）

両遺跡からは主に白頭山－苫小牧火山灰降下以前の遺構・遺物が発見された。図 142 には各遺跡の竪穴住居跡の主軸方位と、出土状況などから一括性の高い遺物の時間的変遷案を示した。詳細は今後の検討に譲るが新沢（１）遺跡と（２）遺跡はカマド主軸が南東方向を向くものが大半で、この傾向は付近に所在する外馬屋前田（１）遺跡とも共通する。３遺跡ともに火山灰降下前（一部降下後もある）の集落と考えられるが、時期的に前後する金沢街道沢（１）遺跡と鳴戸（３）遺跡の状況とはかなりの違いを見せる。

出土土器からは、３期の変遷案を提示した。１期は新沢（１）遺跡 SI05 が代表である（参考資料



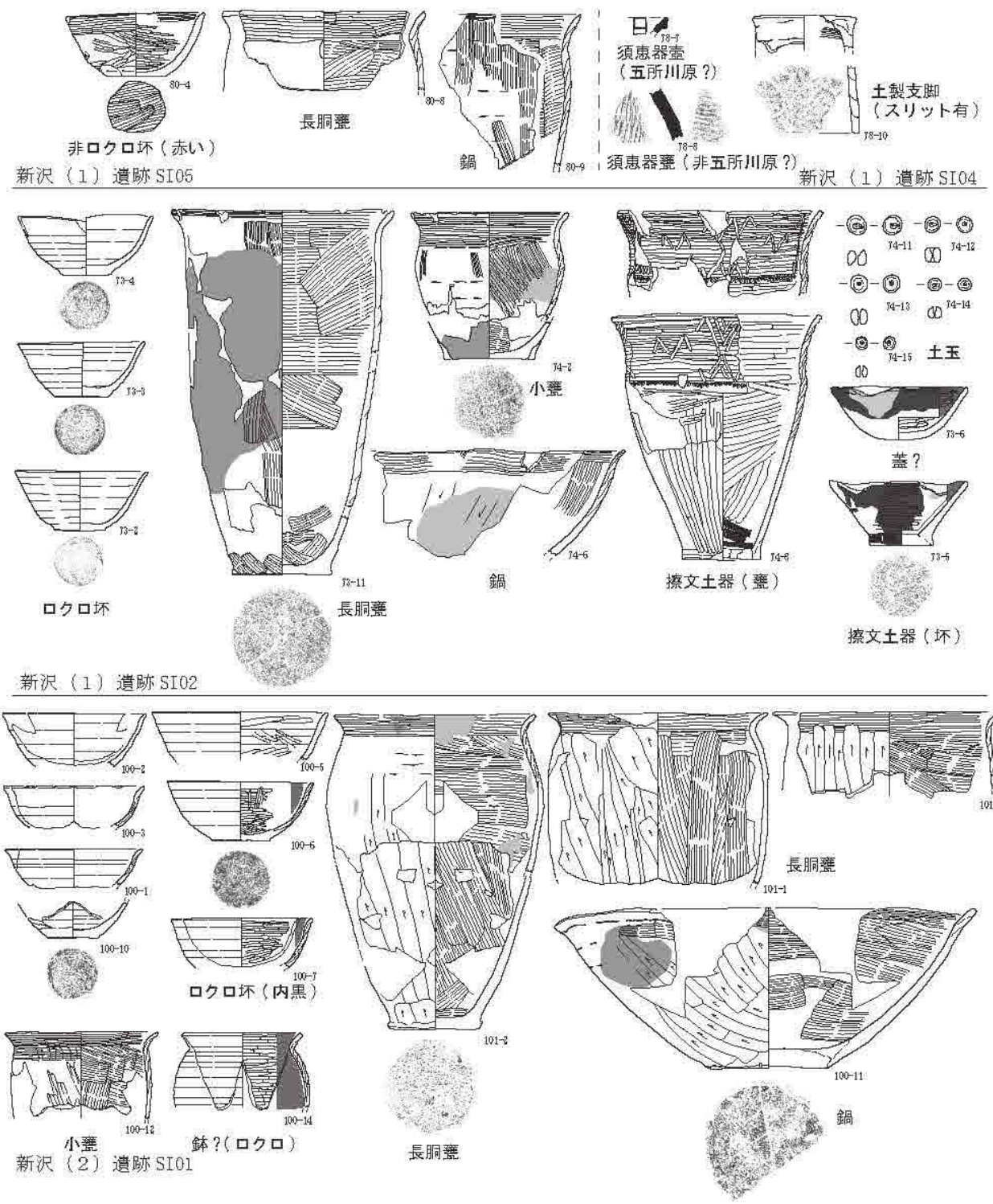


図 142　新沢（1）・（2）遺跡の平安時代一括遺物の変遷図

としてSI04も併記)。長胴甕、鍋、坏が見られる。坏はおそらくロクロ坏も存在していた可能性があるが、図80-4の手ずくね成形、内外面ミガキ調整、底部ヘラケズリで赤い坏が特徴的である。この坏はSI05とSI04に伴い、SI02の堆積土でも出土している。１期の住居はカマド煙道が地下式から半地下式に作り替えられている。２期は新沢（２）遺跡SI02が代表である。住居廃絶時に遺棄された遺物群を提示した。ロクロ坏、長胴甕、小甕、鍋に擦文土器が伴う。３期は新沢（２）遺跡SI01が代表である。ロクロ坏、ロクロ内黒坏、甕、鍋がみられる。３段階ともに口縁部がやや反り、体部が丸みを帯びる鍋を伴う特徴がある。また、内黒坏は３期で量が増えるようである（１・２期に全く無いわけではない)。なお、外馬屋前田（１）遺跡では相当数出土していた須恵器は、両遺跡ではわずかに４点だけであった。須恵器（特に五所川原須恵器窯跡群産出）は当地域においておおまかな時期決定の指標として用いられるが、須恵器自体が少量であることも看過できない。むしろ少ないことは五所川原産須恵器の流通が本格的に始まる前であることを暗示しているように思えるため、３期の下限を10世紀初頭（十和田ａ火山灰降下以前）あたりととらえてみた。つまり、１期と２期は９世紀後半の所産である可能性がある。紙幅の関係上詳細な検討は今後に譲るが、鰺ヶ沢地域における古代の土器編年を考える上で重要な資料が本事業において得ることができた。（茅野）

第３節　自然科学分析結果などについて

第４章では、放射性炭素年代測定（第１節）、炭化材樹種同定（第２節）、炭化種実同定（第３節）、採取土壌分析（第４節）、火山灰同定分析（第５節）、黒曜石産地推定分析（第６節）を行った結果を示した。第１節では、特に新沢（２）遺跡の焼土遺構等の帰属時期について、弥生時代中期から後期のものが相当数含まれることが判明した。層位的な検討とともに当該時期の遺構の存在が明らかになったことは大きい。また、ウィグルマッチング年代測定では金沢街道沢（１）遺跡で８世紀代の集落の存在を推定した。第２節と第３節では当時の森林資源に関するデータを得ることができ、各遺跡ともにクリが多く利用されていることが判明した。また、当地域に自生しないアカガシ亜属も検出された。第４節では、遺跡内の土壌の色の原因や植生などについてデータが得られた。新沢（２）遺跡では遺跡内の古植生のデータからⅢ－２層の時期には調査区内はクリ林だった可能性が指摘された。Ⅲ－１層ではトチノキの増加も見られ、青森市三内丸山遺跡における縄文時代の植生変遷に近い変遷が示された。新沢（１）・（２）遺跡ではⅢ層の上に赤みを帯びたⅡｂ層が見られるが、この成因については酸化の可能性が指摘された。また、新沢（２）遺跡では縄文後期の集落中心部のⅢ層が褐色化しているが、その成因としては微粒炭の量が少ないことなどが考えられた。今後その原因を含め、第４章で得られた知見と考古学的事象について総合的に検討されることを期待する。（茅野）

金沢街道沢（1）遺跡周辺の空中写真（昭和23年　米軍撮影）

写　真　図　版　1

金沢街道沢 (1) 遺跡

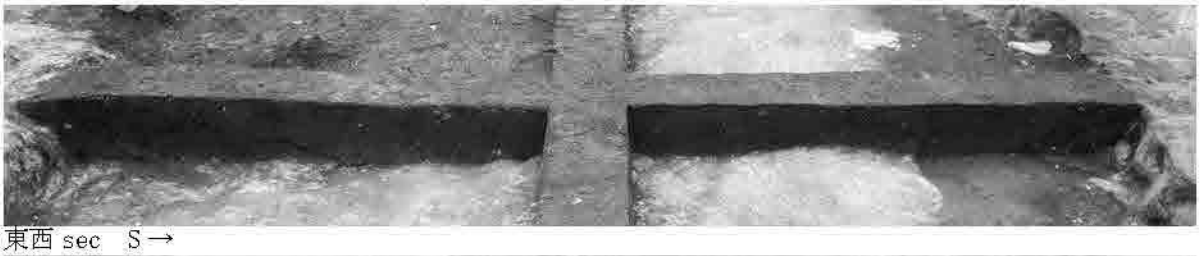
金沢街道沢（1）遺跡上空から鳴沢川河口と七里長浜を望む　S→

調査区遠景　E→

写　真　図　版　2

第１号竪穴住居跡

完掘状況 E →



東西 sec　S →

南北 sec　E →

カマド１完掘状況　E →

カマド１煙道 sec → SW

写　真　図　版　3

第1号竪穴住居跡

カマド2完掘状況　N→

カマド2煙道長軸 sec　E→

カマド2煙道短軸 sec　N→

亀裂痕　S→

第2号竪穴住居跡

完掘状況　W→

写　真　図　版　4

第 2 号竪穴住居跡

東西 sec　W →

南北 sec　N →

カマド完掘状況　W →

カマド sec　W →

第 3a・3b・3c 号竪穴住居跡

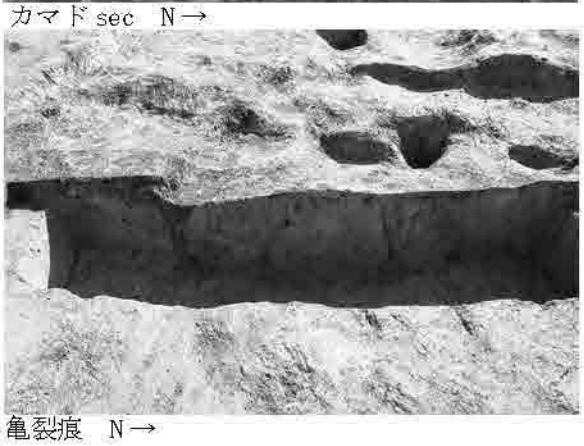
完掘状況　W →

第3b号竪穴住居跡

カマド完掘状況　E→

カマドsec　N→

亀裂痕　S→


亀裂痕　N→

第4号竪穴住居跡

完掘状況　W→

sec　N→

カマド1完掘状況　W→

カマド1煙道 sec　N→

写 真 図 版 6

第４号竪穴住居跡

カマド２完掘状況　E →

カマド２煙道 sec　SE →

第５号竪穴住居跡

完掘状況　E →

南北 sec E →

カマド完掘状況 E →

カマド煙道 sec　N →

SK01 完掘 E →

SK01sec　E →

第6号竪穴住居跡

完掘状況　N→

東西 sec N→

SK01 完掘　W→

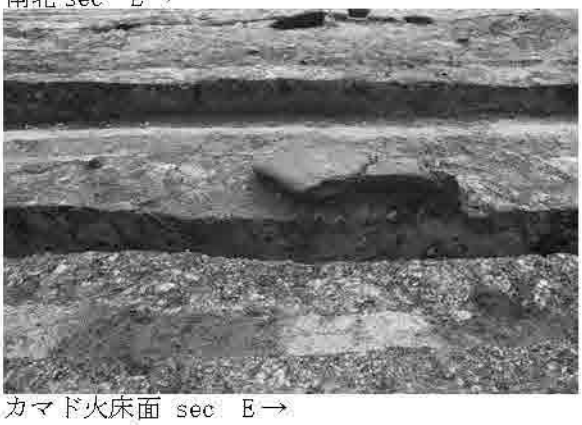
SK01 sec　W→

第7号竪穴住居跡

完掘状況　SE→

南北 sec　E→

カマド煙道 sec　NE→


カマド火床面 sec　E→

写 真 図 版 8

第８号竪穴住居跡

完掘状況　NW →

東西 sec　S →

南北 sec　W →

亀裂痕　S →

カマド１完掘状況　E →

第8号竪穴住居跡

カマド1煙道長軸 sec　N→

カマド1煙道短軸 sec　E→

カマド2完掘状況　W→

カマド2煙道長軸 sec　NW→

カマド2煙道短軸 sec　W→

遺物出土状況　NW→

遺物出土状況　NW→

掘方完掘状況　NW→

写　真　図　版　10

第9号竪穴住居跡

完掘状況　W→

東西 sec　W→

南北 sec　N→

カマド完掘状況　W→

カマド煙道長軸 sec　S→

第9号竪穴住居跡

カマド煙道短軸 sec　W→

遺物出土状況　W→

遺物出土状況　W→

遺物出土状況　W→

第10号竪穴住居跡

完掘状況　W→

写　真　図　版　12

第10号竪穴住居跡

東西 sec　S→

カマド完掘状況　W→

カマド煙道短軸 sec　W→

カマド煙道長軸 sec S→

第11号竪穴住居跡

竪穴住居跡・第8号土坑 完掘　E→

東西 sec　S→

カマド完掘状況　SE→

カマド煙道長軸 sec　N→

写　真　図　版　13

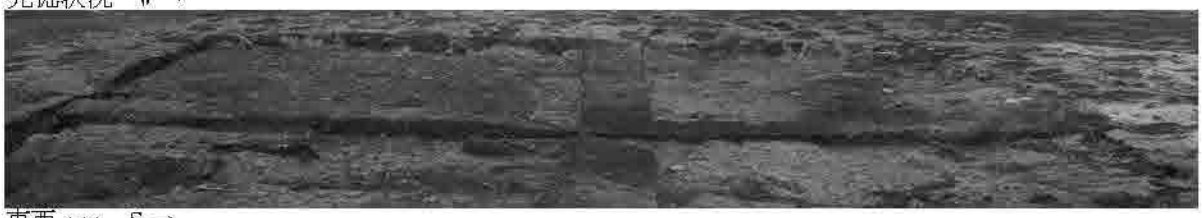
第11号竪穴住居跡

カマド煙道短軸 sec　SE →

亀裂痕　N →

第12号竪穴住居跡

完掘状況　W →



東西 sec　S →

南北 sec　W →

写 真 図 版 14

第12号竪穴住居跡

カマド完掘状況　W→

カマド煙道長軸 sec　N→

カマド煙道短軸 sec　W→

遺物出土状況　W→

SK01 完掘状況　W→

SK02 完掘状況　W→

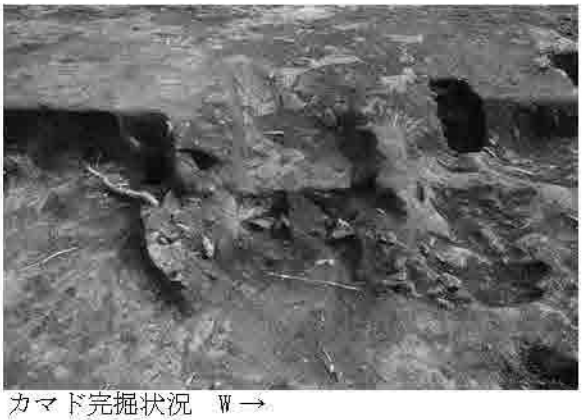
SK03 完掘状況　E→

掘方完掘状況　W→

第13号竪穴住居跡

完掘状況　W→

東西 sec　S→



カマド完掘状況　W→

カマド煙道長軸 sec　N→

カマド短軸 sec　W→

写　真　図　版　16

第14号竪穴住居跡

完掘状況　W→

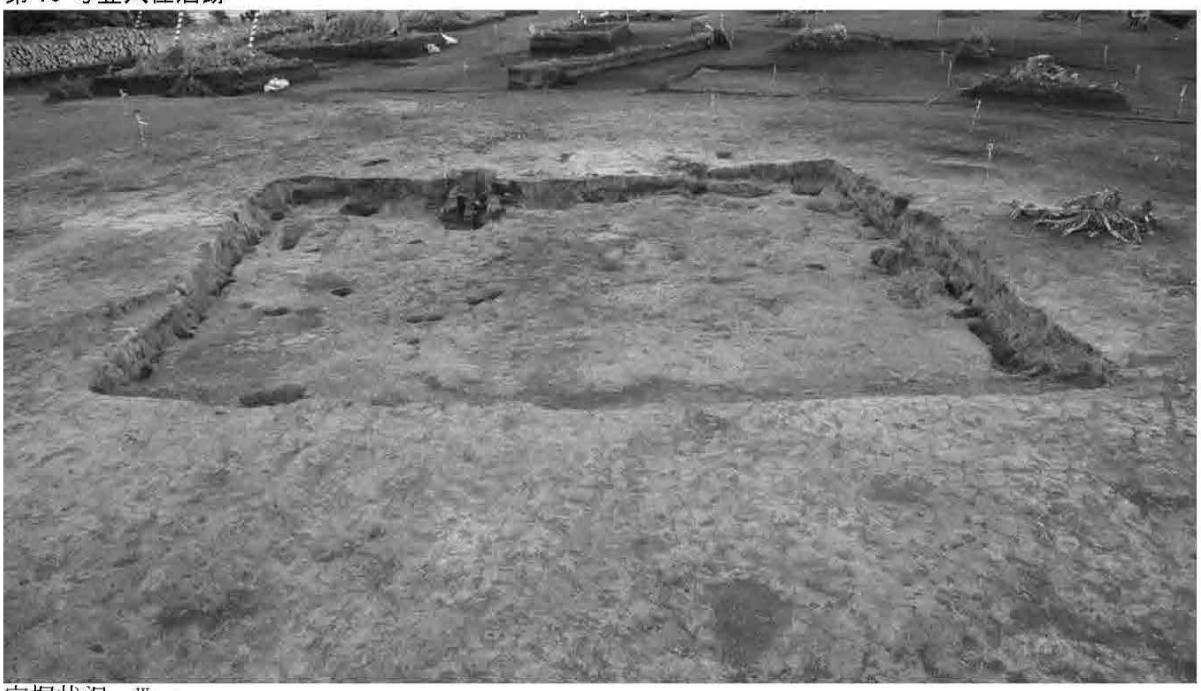
東西 sec　S→

南北 sec　E→

カマド完掘状況　W→

カマド煙道 sec　N→

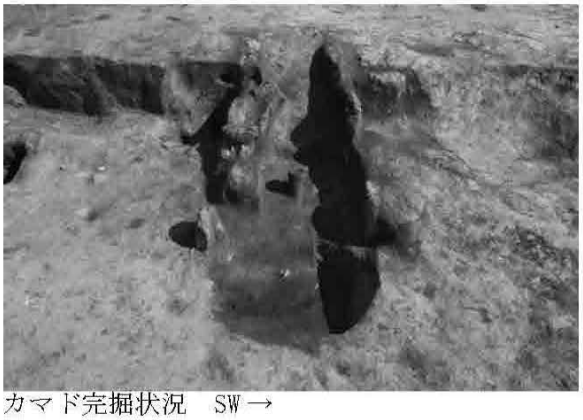
第15号竪穴住居跡



完掘状況　W→

東西 sec　SE→

南北 sec　SW→



カマド完掘状況　SW→

カマド煙道長軸 sec　SE→

写　真　図　版　18

第 15 号竪穴住居跡

カマド煙道短軸 sec　SW →

遺物出土状況　S →

第 16 号竪穴住居跡

完掘状況　SW →

南北 sec　E →

東西 sec　S →

第16号竪穴住居跡

カマド完掘状況　SE →

カマド煙道長軸 sec　NE →

カマド煙道短軸 sec　SE →

遺物出土状況　SE →

遺物出土状況　SE →

遺物出土状況　SE →

第17号竪穴住居跡

完掘状況　S →

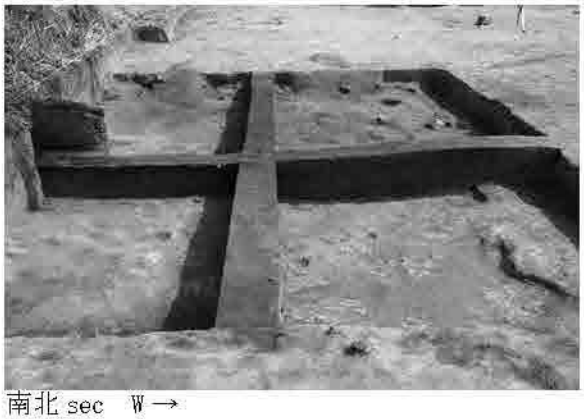
東西 sec　S →

写　真　図　版　20

第18号竪穴住居跡

完掘状況　W →

東西 sec　S →



南北 sec　W →

カマド完掘状況　W →

第18号竪穴住居跡

カマド煙道長軸 sec　S→

カマド煙道短軸 sec　W→

埋甕検出状況　N→

埋甕 sec　N→

第19･20号竪穴住居跡

完掘状況　E→

写　真　図　版　22

第20号竪穴住居跡

カマド完掘状況　E→

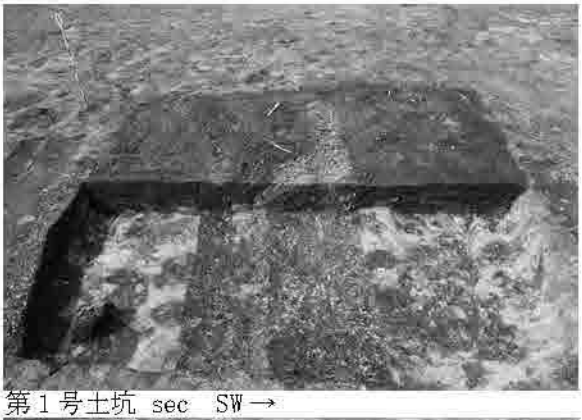
カマド煙道長軸西側 sec　N→

カマド煙道長軸東側 sec　N→

掘方完掘状況　W→

土坑

第1号土坑完掘状況　SW→


第1号土坑 sec　SW→

第2号土坑完掘状況　NW→

第2号土坑 sec　N→

土坑

第3号土坑完掘状況　E→

第3号土坑 sec　E→

第5号土坑完掘状況　S→

第5号土坑 sec　S→

第6号土坑完掘状況　NE→

第6号土坑 sec　NE→

第10号土坑完掘状況・sec　N→

第12号土坑完掘状況　W→

写 真 図 版 24

土坑

第13号土坑完掘状況　E→

第13号土坑 sec　E→

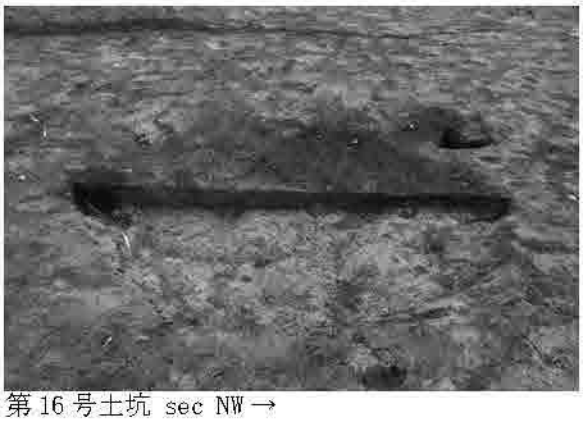
第14号土坑完掘状況　S→

第14号土坑 sec　S→

第15号土坑完掘状況　N→

第15号土坑 sec　N→

第16号土坑完掘状況　NW→


第16号土坑 sec NW→

土坑

第17号土坑完掘状況　N→

第17号土坑 sec N→

第18号土坑完掘状況　N→

第18号土坑 sec N→

溝状土坑

第1号溝状土坑完掘　E→

第2号溝状土坑完掘
E→

第3号溝状土坑完掘
E→

第4号溝状土坑完掘
E→

写　真　図　版　26

溝跡

第１号溝跡完掘状況　N →

第１号溝跡完掘状況　W →

第１号溝跡完掘状況　N →

第１号溝跡（A-A'）sec　N →

第１号溝跡（C-C'）sec　S →

第１号溝跡（F-F'）sec　NW →

第１号溝跡（G-G'）sec　W →

溝跡

第1号溝跡（H-H'）sec　S→

第1号溝跡 段差 NE→

第2号溝跡完掘状況　SW→

第1・2号溝跡 sec　NW→

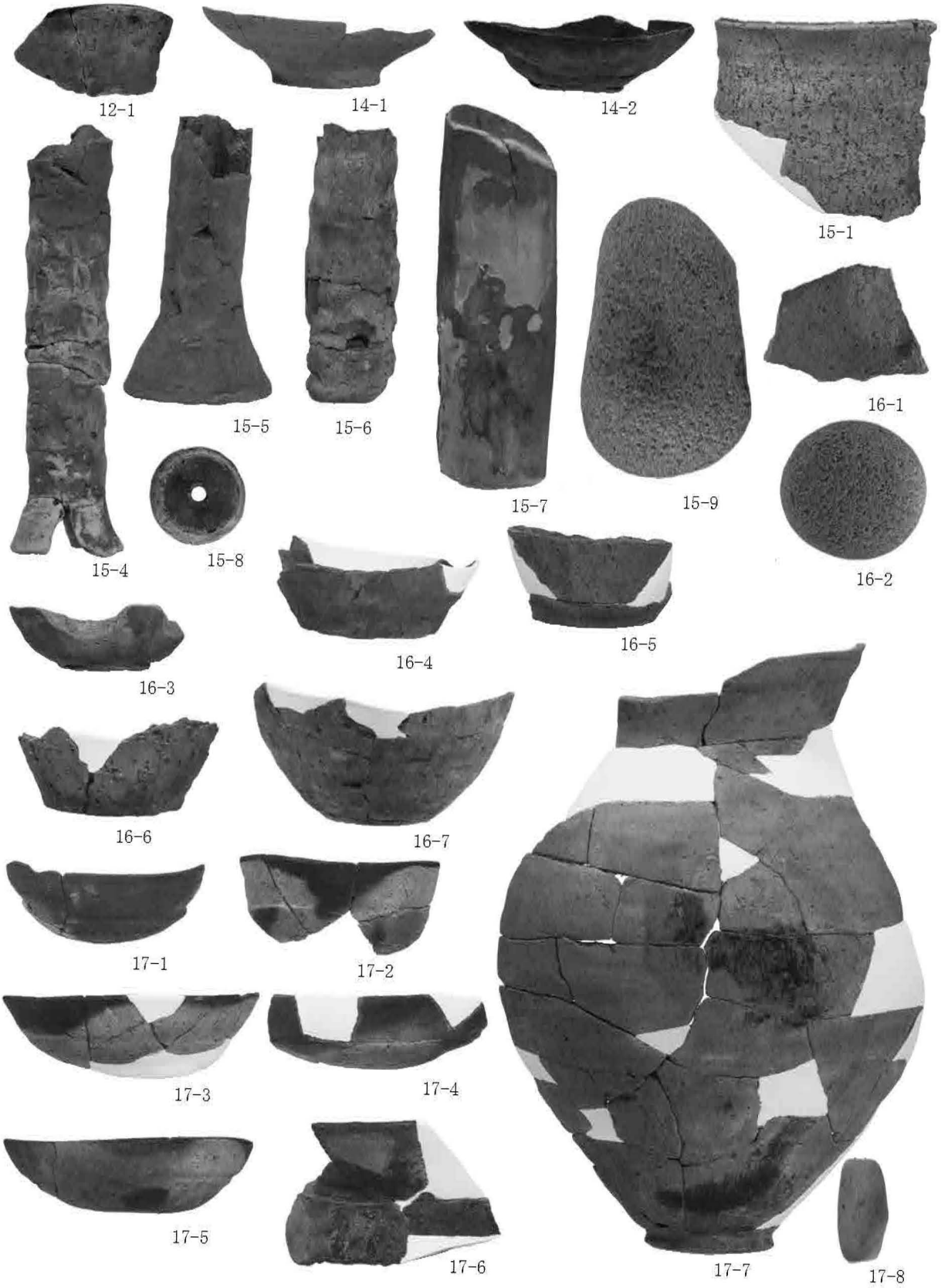
第3・5号溝跡完掘状況　S→

第4号溝跡完掘状況　NE→

掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡完掘状況　NW→

写 真 図 版 28


12-1
14-1
14-2
15-1
15-4
15-5
15-6
15-7
15-8
15-9
16-1
16-2
16-3
16-4
16-5
16-6
16-7
17-1
17-2
17-3
17-4
17-5
17-6
17-7
17-8

写 真 図 版 29

20-1
20-2
20-3
21-3
21-6
21-4
21-7
22-1
22-2
23-1
23-3
26-1
26-2
26-3
26-4
26-5
27-1

写 真 図 版 30

27-2

27-3

27-5

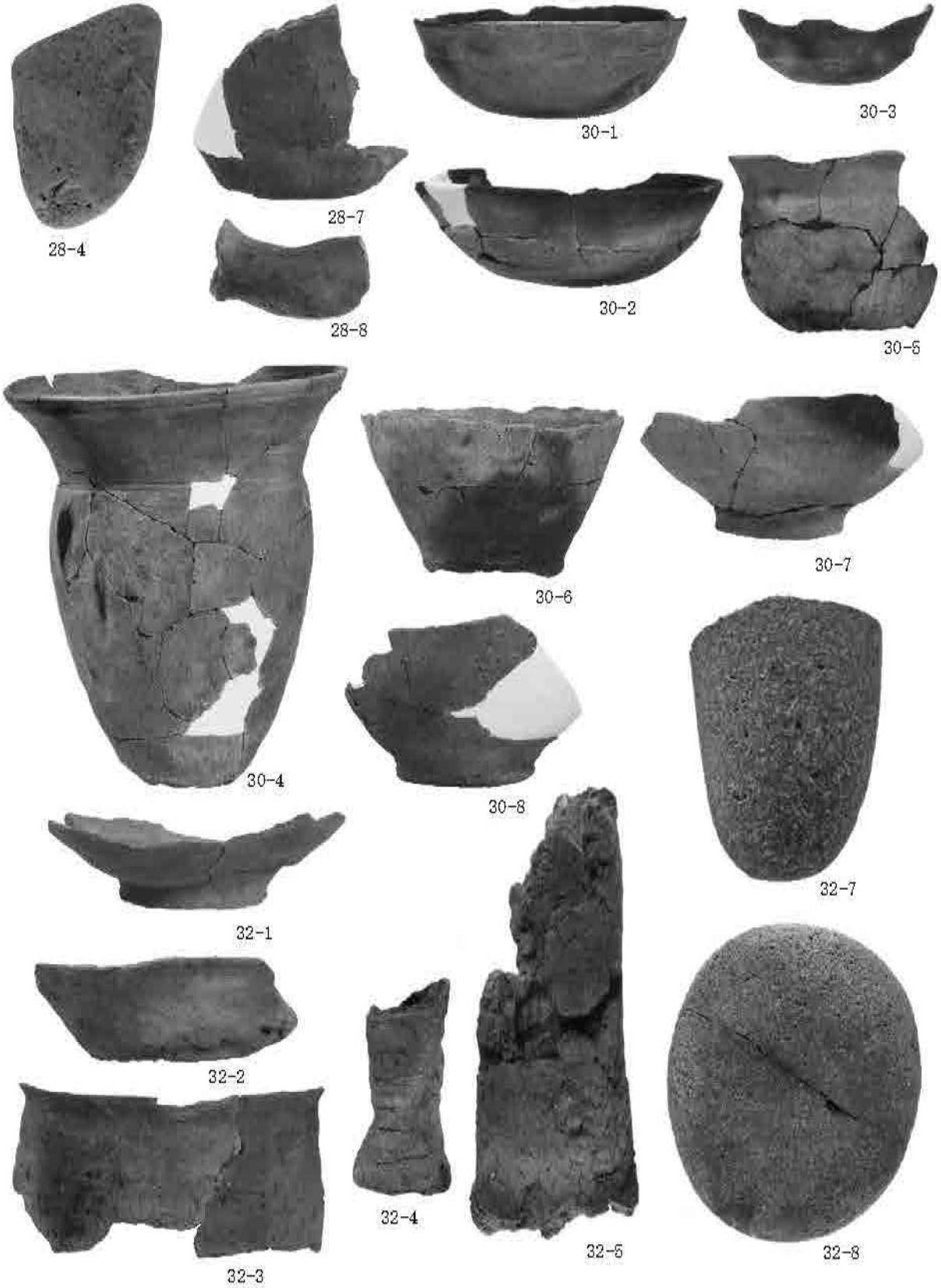
28-2

28-1

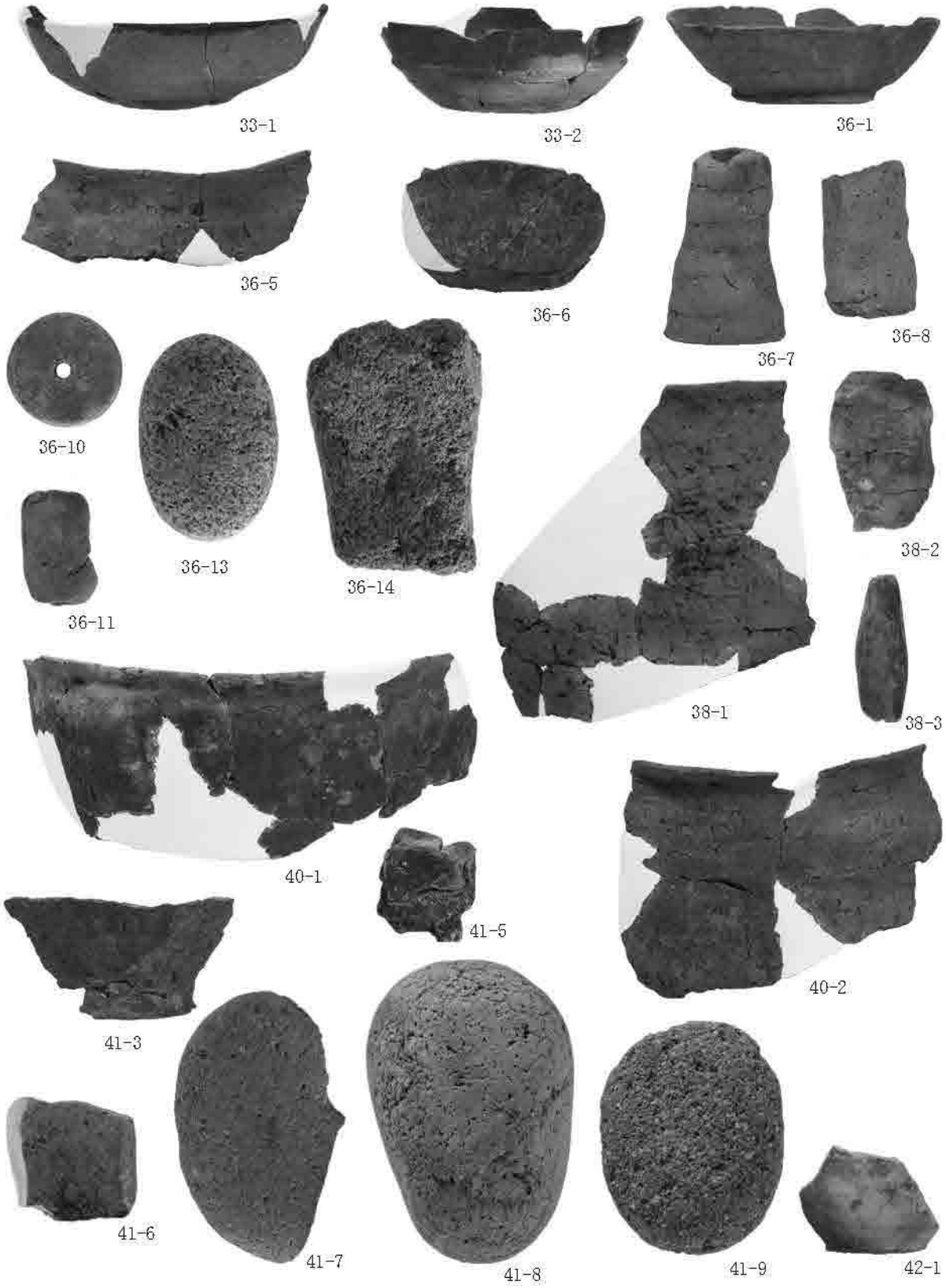
27-4

28-3

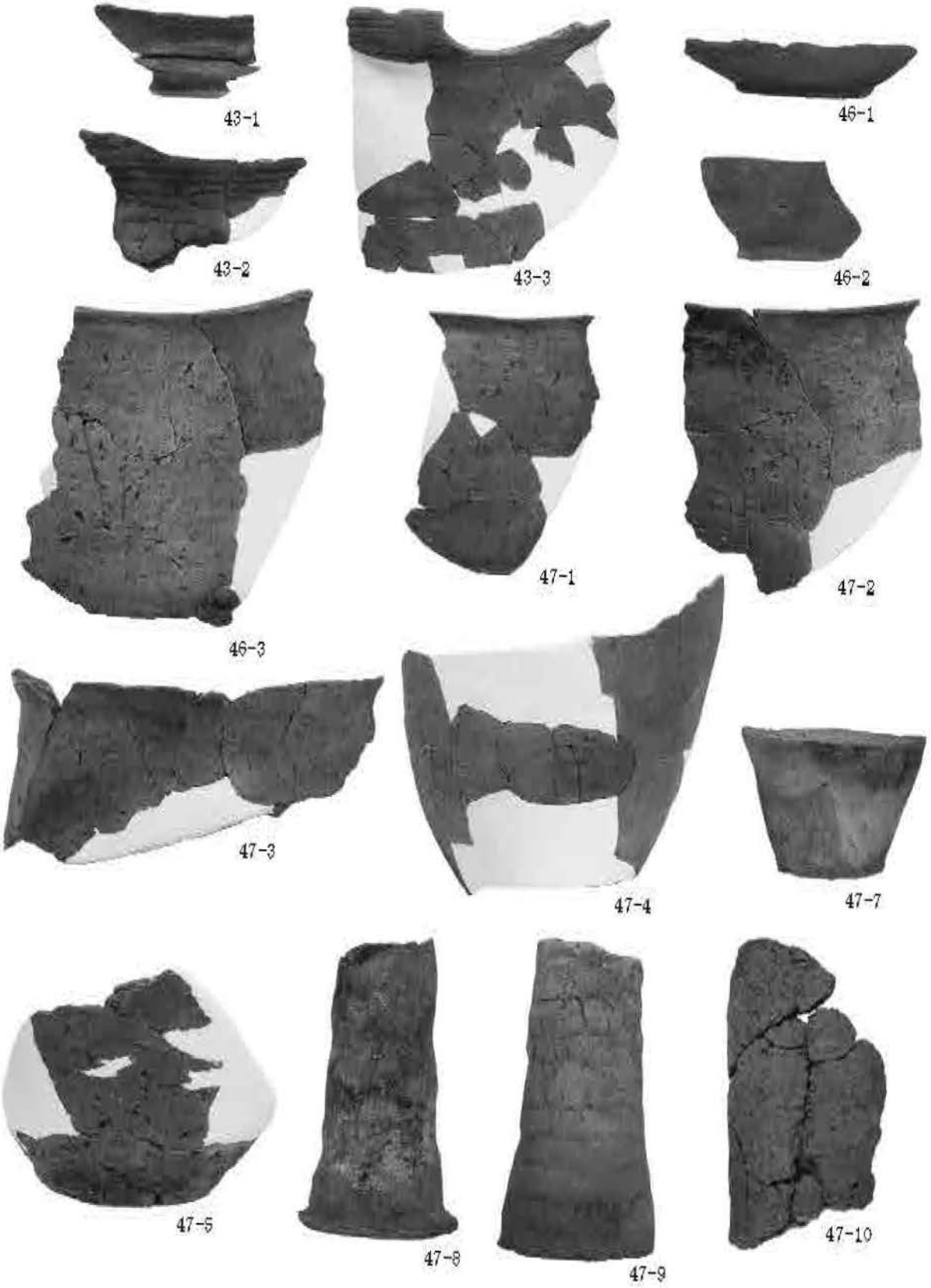
写 真 図 版 31


28-4
28-7
28-8
30-1
30-2
30-3
30-5
30-4
30-6
30-7
30-8
32-1
32-2
32-3
32-4
32-5
32-7
32-8

写 真 図 版 32


33-1
33-2
36-1
36-5
36-6
36-7
36-8
36-10
36-13
36-14
36-11
38-2
38-1
38-3
40-1
41-5
40-2
41-3
41-6
41-7
41-8
41-9
42-1

写 真 図 版 33



写 真 図 版 34

49-1

49-2

49-3

49-4

49-5

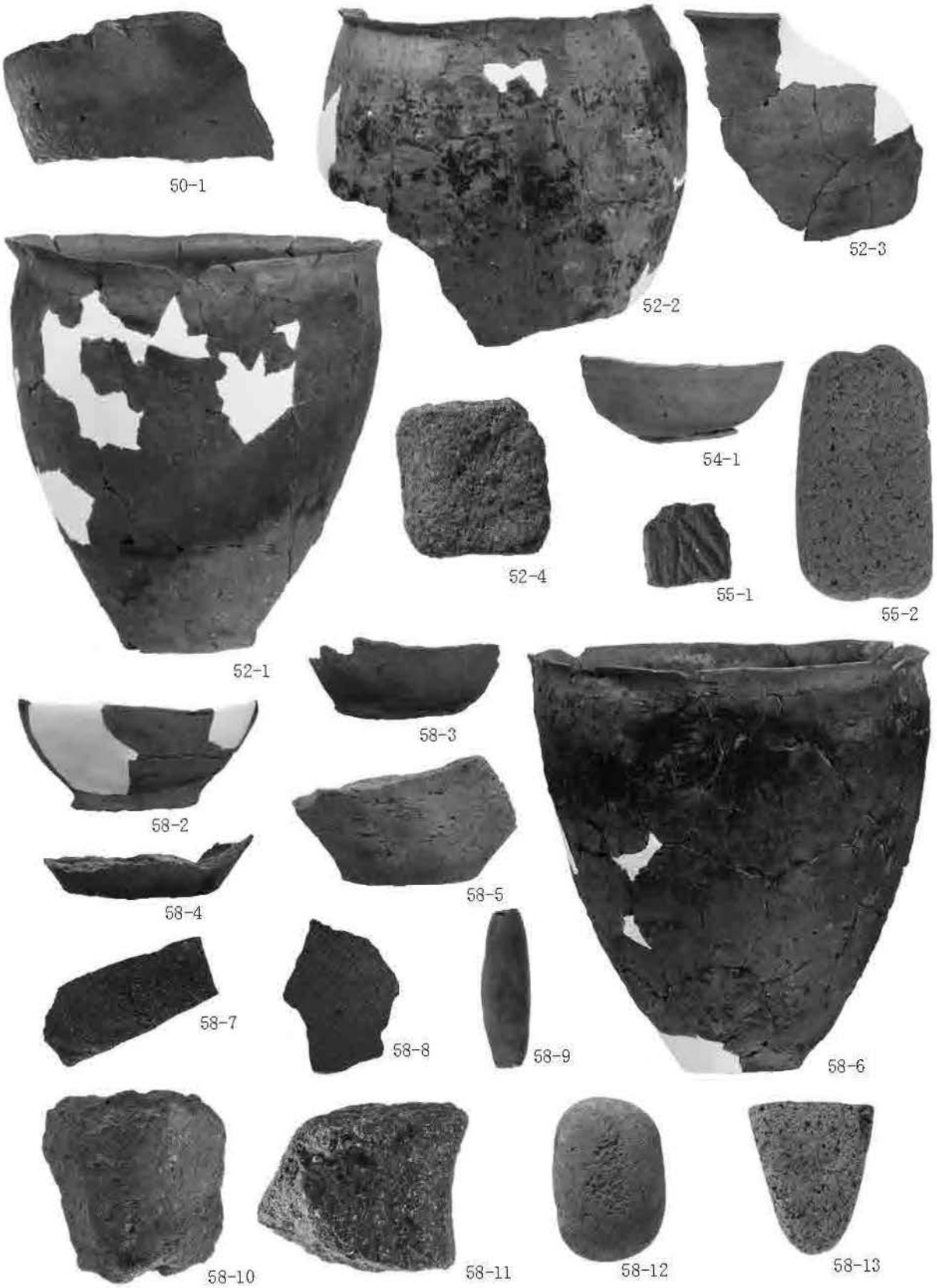
49-6

49-7

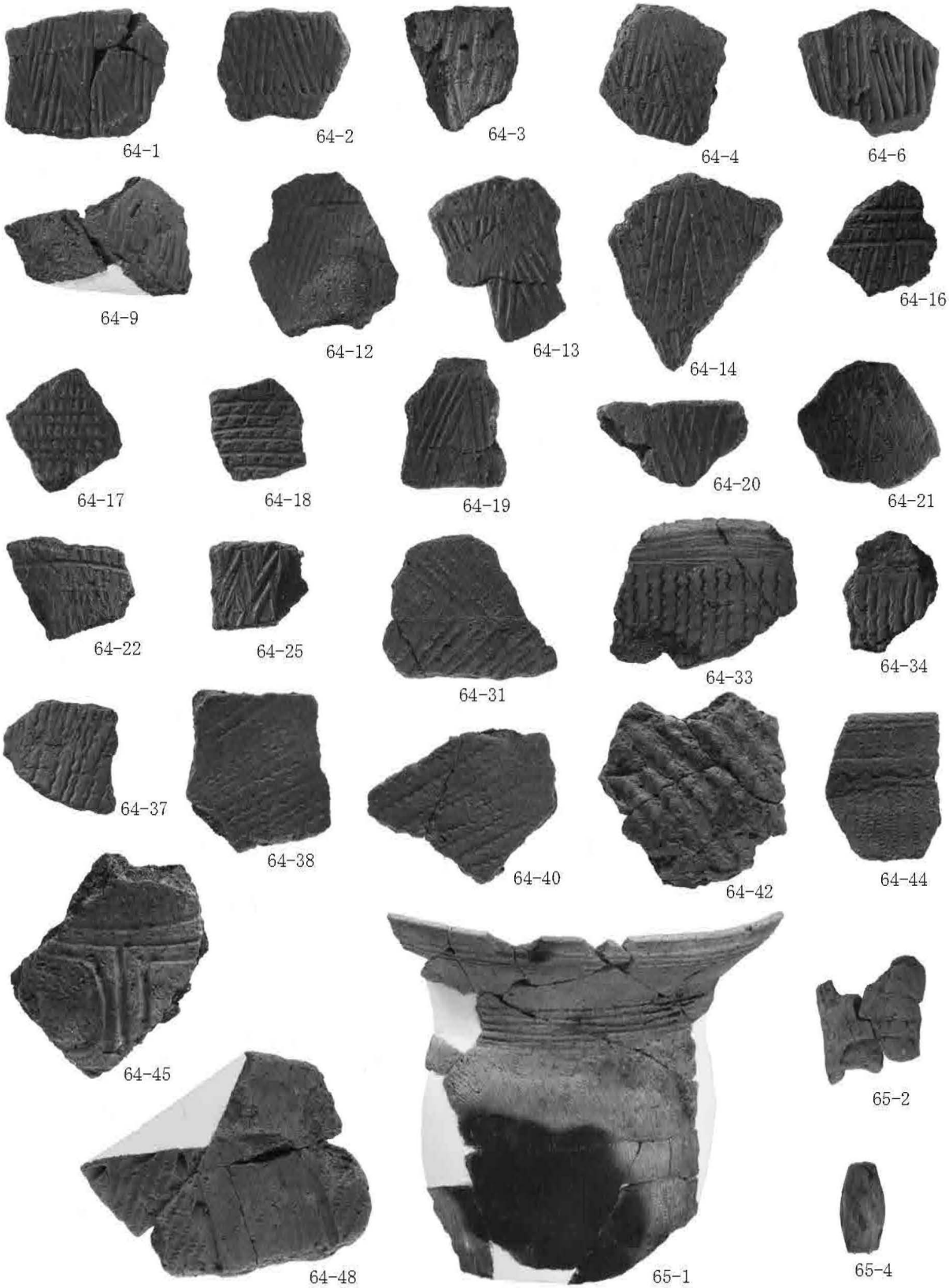
49-8

49-9

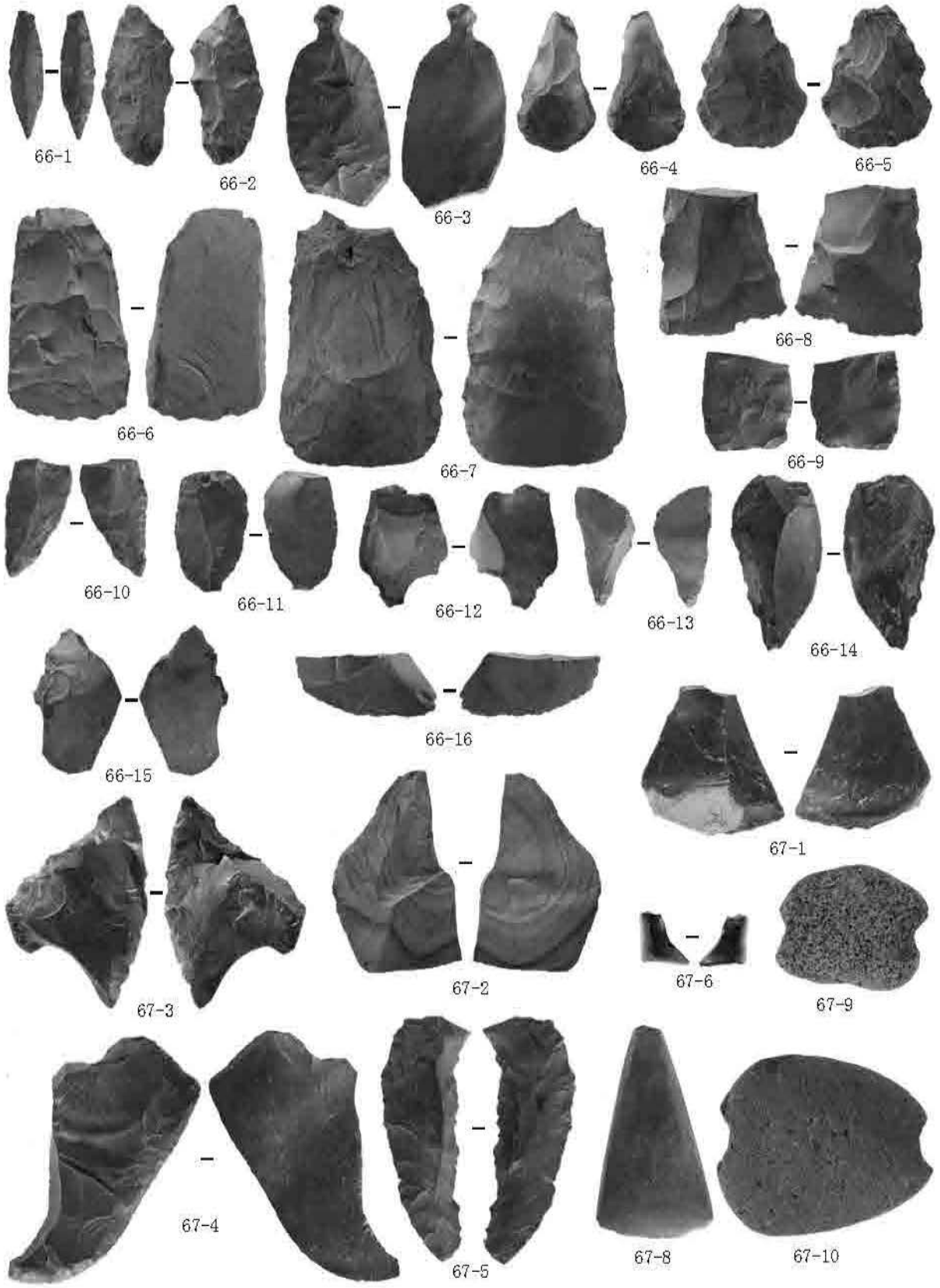
写 真 図 版 35


50-1
52-2
52-3
52-1
54-1
52-4
55-1
55-2
58-3
58-2
58-5
58-4
58-7
58-8
58-9
58-6
58-10
58-11
58-12
58-13

写 真 図 版 36


64-1
64-2
64-3
64-4
64-6
64-9
64-12
64-13
64-14
64-16
64-17
64-18
64-19
64-20
64-21
64-22
64-25
64-31
64-33
64-34
64-37
64-38
64-40
64-42
64-44
64-45
64-48
65-1
65-2
65-4

写 真 図 版 37


66-1
66-2
66-3
66-4
66-5
66-6
66-7
66-8
66-9
66-10
66-11
66-12
66-13
66-14
66-15
66-16
67-1
67-2
67-3
67-4
67-5
67-6
67-8
67-9
67-10

写 真 図 版 38

新沢（1）遺跡

調査区東端地区完掘状況　上空西から

調査区西側地区完掘状況　E →

第1号竪穴住居跡

完掘状況　NW →

竪穴部東西 sec　S →

カマド等の粘土散乱範囲　NW →

カマド完掘　NW →

カマド横 Sec　W →

カマド煙道 sec　W →

Pit1～4　完掘　SW →

掘方完掘状況　NW →

写　真　図　版　40

第2号竪穴住居跡

完掘状況　NW →

B-Tm 堆積確認状況　W →

東西 sec 西側　S →

東西 sec 東側　S →

カマド完掘　NW →

第2号竪穴住居跡

カマド遺物出土状況　NW →

カマド煙道 sec　W →

カマド袖 sec　NW →

カマド火床面 sec　SW →

カマド左脇擦文土器等出土状況　W →

写　真　図　版　42

第２号竪穴住居跡

中央部焼土範囲　S →

床面中央部焼土 1, 2sec　N →

Pit1 完掘状況　NW →

Pit2 完掘　NW →

Pit3 完掘　NW →

Pit4sec　SE →

Pit4 完掘　NW →

Pit5sec　N →

第2号竪穴住居跡

Pit5　3層遺物出土状況　W →

Pit6Sec　SW →

Pit8sec　SW →

北西隅床面　遺物等出土状況　S →

カマド付近掘方完掘状況　NW →

掘方完掘状況　NW →

北側壁　壁溝確認状況　W →

写　真　図　版　44

第3号竪穴住居跡

完掘状況　NW→

東西Sec　N→

カマド完掘状況　NW→

カマド煙道縦sec　W→

カマド確認状況　NW→

炭化材出土状況　SW→

Pit1完掘　NW→

掘方完掘　NW→

第4号竪穴住居跡

完掘及びカマド粘土範囲確認状況　SW →

東西 Sec　S →

南北 Sec 南側　E →

南北 Sec 北側　E →

下部カマド煙道等完掘状況　W →

カマド横土坑完掘及び下部カマド煙道天井残存状況　W →

カマド煙道短軸 Sec　W →

カマド長軸 Sec　S →

写 真 図 版 46

第4号竪穴住居跡

下部カマド煙道長軸 Sec　SW →

カマド遺物出土状況　W →

カマド脇土坑　Sec　SW →

掘方完掘　SW →

第5号竪穴住居跡

完掘状況　NW →

第5号竪穴住居跡

東西 sec　SW →

南北 sec　NE →

火山灰確認状況　W →

カマド完掘状況　NW →

カマド火床面 Sec　NW →

カマド煙道長軸 Sec　S →

カマド煙道短軸 Sec　E →

上部カマド遺物出土状況等　NW →

写 真 図 版 48

第5号竪穴住居跡

SK02Sec　SW →

掘方完掘状況　NW →

第6号竪穴住居跡

南北 sec　NW →

火床面 sec　NW →

第7号竪穴住居跡（SD08）

完掘状況　NE →

土坑

第1号土坑完掘 E→

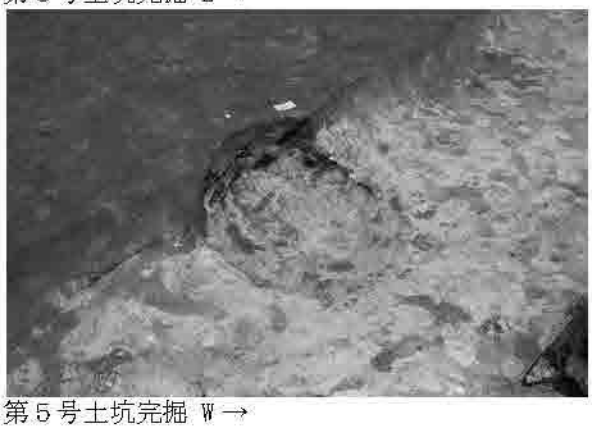
第1号土坑 sec S→

第2号土坑完掘 E→

第2号土坑 sec S→

第3号土坑完掘 E→

第3号土坑 sec N→


第5号土坑完掘 W→

第5号土坑 sec E→

写 真 図 版 50

土坑

第6号土坑完掘 N→

第6号土坑 sec N→

第7号土坑完掘 N→

第7号土坑 sec N→

第6·7号土坑完掘 N→

第8号土坑完掘 SW→

第8号土坑 sec N→

第8号土坑遺物出土状況 SW→

土坑

第9号土坑完掘 N→

第9号土坑 sec NE→

第10号土坑完掘（堀方）NE→

第10号土坑 sec SW→

第12号土坑底面焼土・炭化材及び完掘 S→

第12号土坑炭化材確認状況 W→

第12号土坑南北 sec E→

第12号土坑東西 sec S→

写 真 図 版 52

土坑

第 13 号土坑完掘 S →

第 13 号土坑 sec S →

第 14 号土坑 sec E →

第 16 号土坑 sec SW →

第 17 号土坑完掘 S →

第 17 号土坑 sec S →

第 18 号土坑完掘 S →

第 18 号土坑 sec E →

土坑

第 19 号土坑完掘 W→

第 20 号土坑 sec W→

第 22 号土坑完掘 NE→

第 22 号土坑 sec W→

第 25 号土坑完掘 S→

第 25 号土坑 sec S→

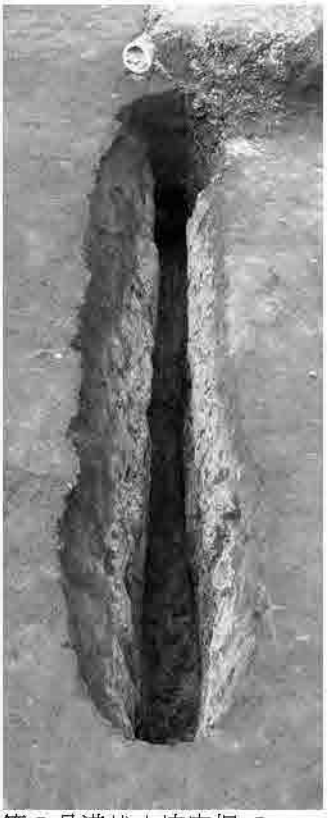
第 1 号土器埋設遺構底面穿孔状況 SE→

第 1 号土器埋設遺構堀方完掘 E→

写 真 図 版 54

第1号土器埋設遺構 sec SE→

第1号溝状土坑 sec S→



第2号溝状土坑完掘 S→

第3号溝状土坑 sec S→

第2・3号溝跡北側 sec N→

第2・3号溝跡南側 sec S→

第9号溝跡完掘 N→

Ⅲ H-37 付近弥生土器出土状況 E→

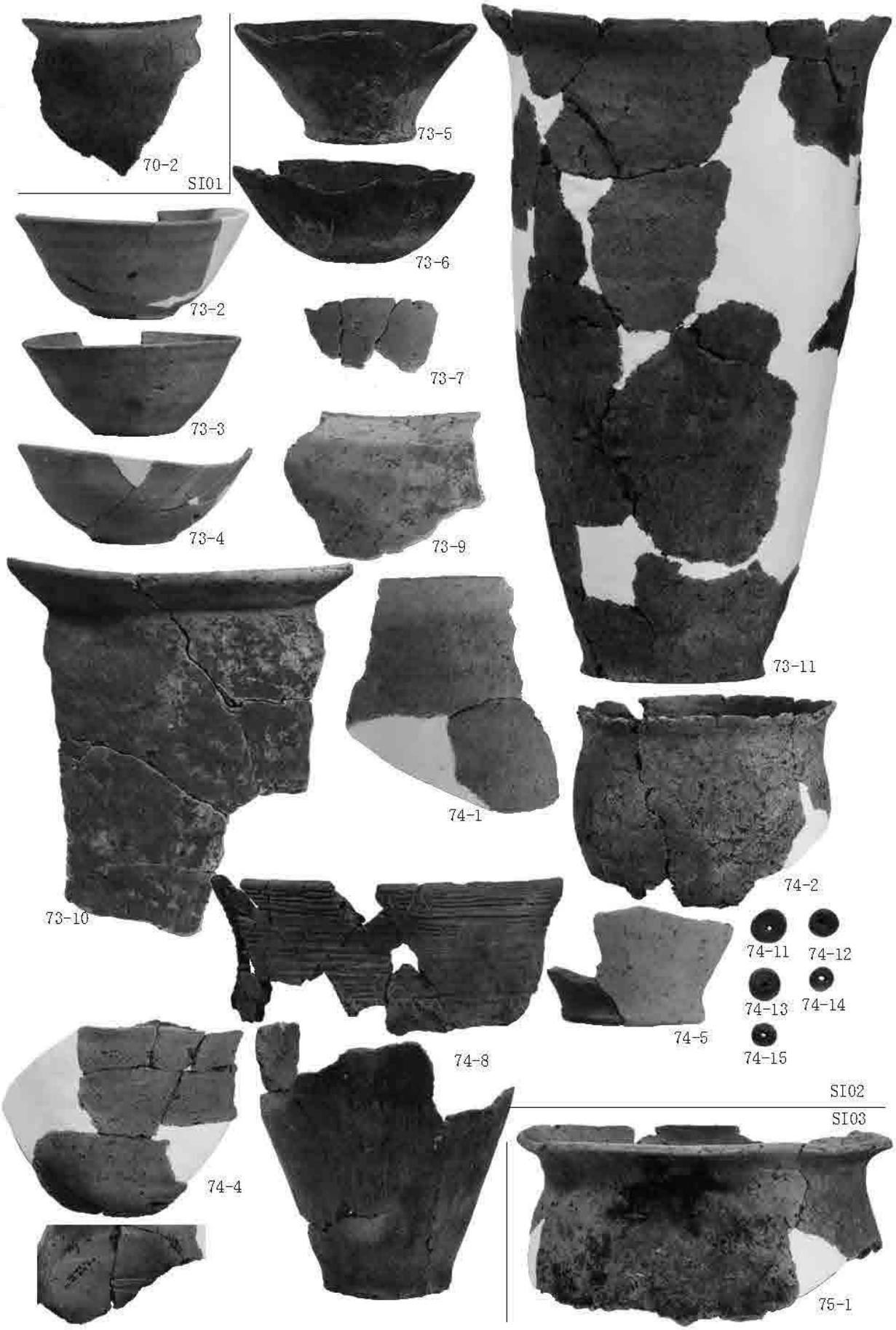
Ⅲ P-33 弥生土偶出土状況 W→

Ⅱ O-24 弥生土偶出土状況 NE→

Ⅱ K-27 付近縄文早期土器出土状況 N→

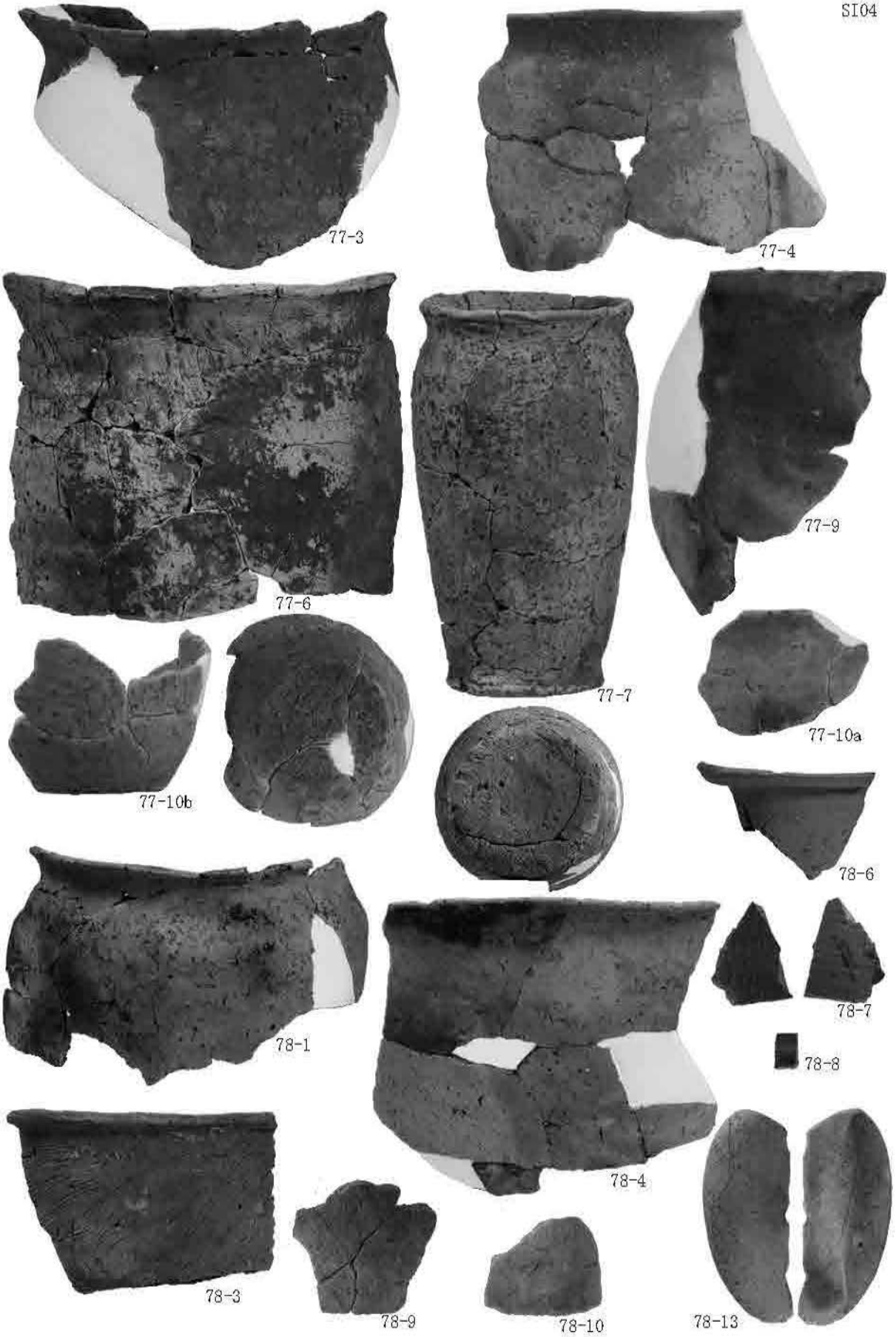
Ⅱ K-27 付近縄文早期土器出土状況アップ N→

写 真 図 版 56

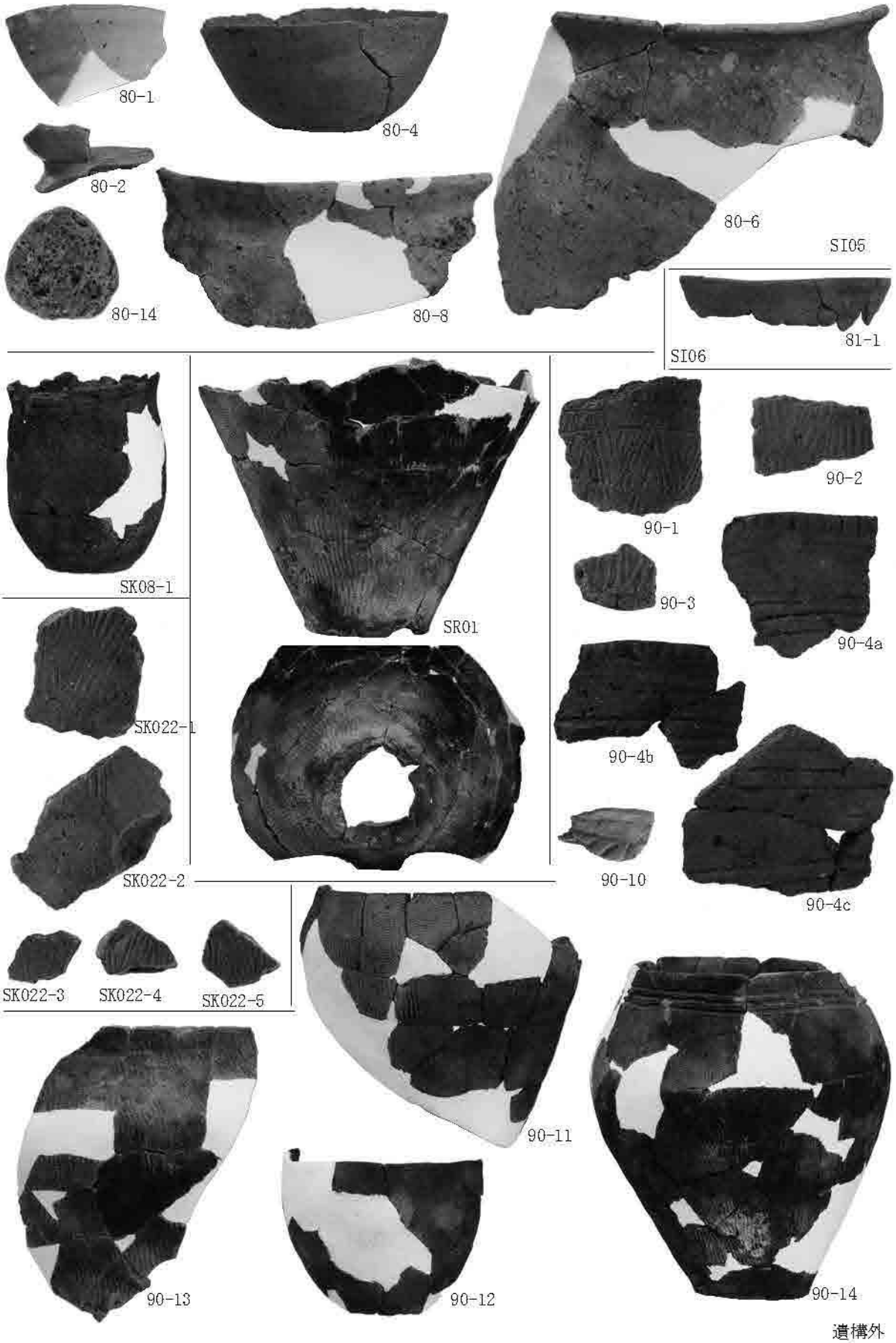

70-2
SI01
73-5
73-6
73-2
73-7
73-3
73-4
73-9
73-11
73-10
74-1
74-2
74-11
74-12
74-13
74-14
74-15
74-5
74-8
74-4
SI02
SI03
75-1

写 真 図 版 57

SI04

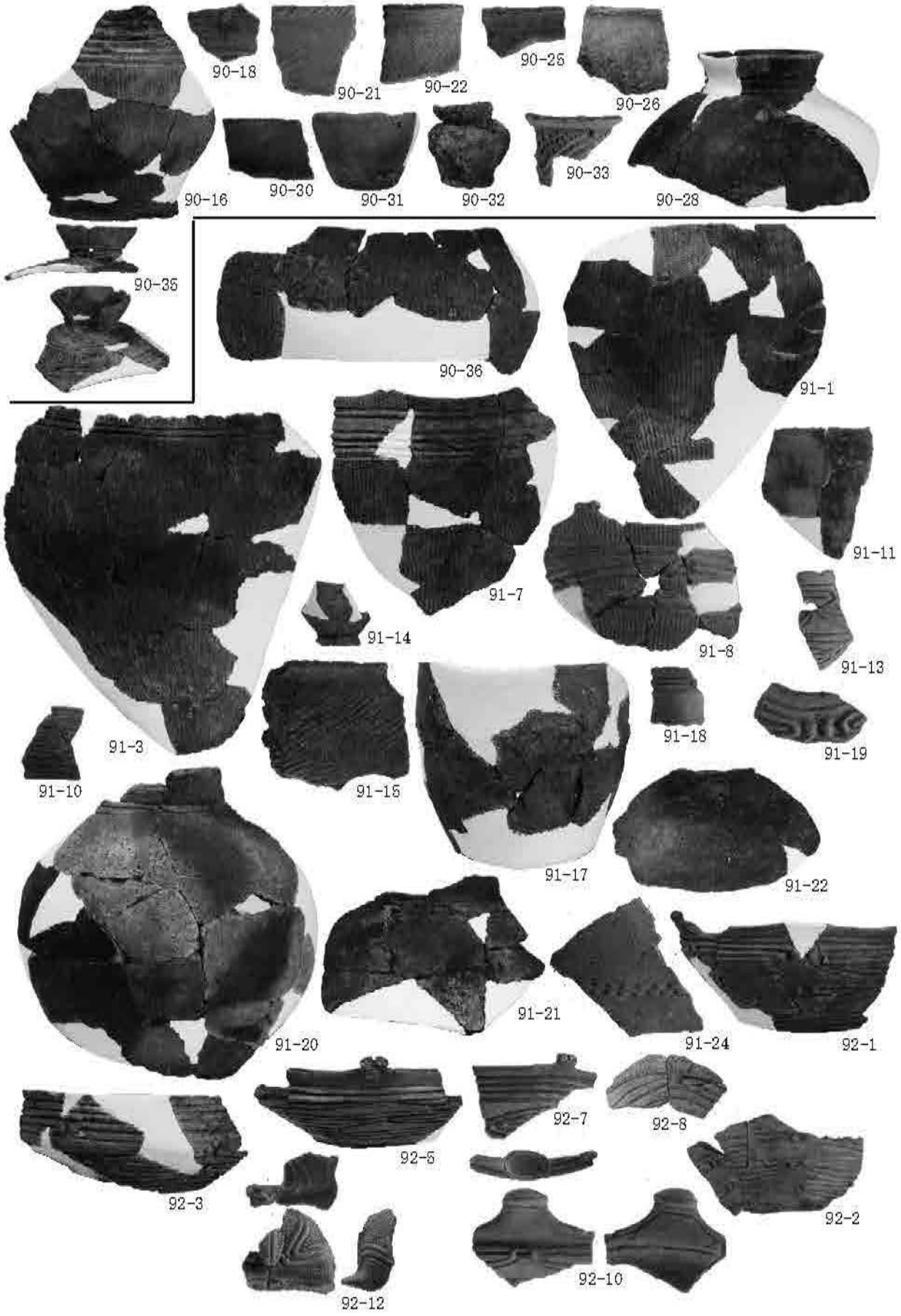

77-3
77-4
77-6
77-7
77-9
77-10a
77-10b
78-1
78-3
78-4
78-6
78-7
78-8
78-9
78-10
78-13

写 真 図 版 58


80-1
80-4
80-2
80-6
SI05
80-14
80-8
81-1
SI06
SK08-1
SR01
90-2
90-1
90-3
90-4a
SK022-1
90-4b
SK022-2
90-10
90-4c
SK022-3
SK022-4
SK022-5
90-11
90-13
90-12
90-14

遺構外

写 真 図 版 59


90-18
90-21
90-22
90-25
90-26
90-16
90-30
90-31
90-32
90-33
90-28
90-35
90-36
91-1
91-11
91-7
91-14
91-8
91-13
91-3
91-18
91-19
91-10
91-15
91-17
91-22
91-20
91-21
91-24
92-1
92-7
92-8
92-5
92-3
92-2
92-10
92-12

写 真 図 版 60

95-15
95-16
95-17
95-19
95-18
95-1
95-2
95-3
95-4
95-5
95-6
95-7
95-17
95-7
95-9
95-11
95-12
95-16
95-13
95-4
95-17
95-18
40 d III 165

写真図版 61

新沢（1）・（2）遺跡付近の空中写真（昭和23年・米軍撮影）

写 真 図 版 62

新沢（2）遺跡

調査区周辺の状況（北西上空から撮影）

C区全景（東上空から撮影）

第1号竪穴住居跡

完掘状況　N→

東西 Sec　N→

東西 Sec 東側アップ　N→

東西 Sec　N→

カマド完掘状況　N→

カマド下部横 sec N→

第１号竪穴住居跡

煙道部横 sec N→

カマド確認状況　N→

カマド縦 sec 全体　N→

カマド遺物出土状況　N→

Pit1 完掘状況 W→

Pit1 炭化材出土状況　W→

Pit3 完掘状況 E→

Pit4sec N→

第2号竪穴住居跡

完掘状況　W→

東西 Sec　S→

南北 Sec　W→

石囲炉確認状況 W→

炉 Sec　SE→

写 真 図 版 66

第3号竪穴住居跡

完掘状況 S→

南北 Sec　W→

東西 Sec　S→

第3号竪穴住居跡

炉火床面等 Sec　W→

炉堆積土 sec　W→

炉完掘状況　S→

Pit1　sec　S→

最終完掘状況　S→

第４号竪穴住居跡

完掘状況 W →

最終完掘状況　E →

第4号竪穴住居跡

南北 Sec　W →

東西 Sec　S →

南北 Sec 北側（第8号焼土付近）アップ　W →

第４号竪穴住居跡

炉遺物出土状況 W →

炉体土器と注口土器出土状況アップ　S →

炉火床面等 sec　SW →

炉完掘状況　W →

炉掘方完掘状況　N →

炉火床面 sec　S →

炉の脇の立石確認状況 S →

床面の立石確認状況 S →

第5号竪穴住居跡

炉跡等確認状況　W→

炉火床面等 sec　E→

第6号竪穴住居跡

遺物出土状況　S→

炉と遺物出土状況　N→

炉 sec E→

炉掘方完掘状況　E→

屋外炉

第1号屋外炉(SN14)確認状況　S→

第1号屋外炉(SN14)sec W→

写　真　図　版　72

屋外炉

第２号屋外炉（SN19）確認状況　N →

第２号屋外炉（SN19）sec　W →

第３号屋外炉（SN20）sec　SW →

第３号屋外炉（SN20）確認状況　W →

第３号屋外炉（SN20）Pit1　Sec　N →

焼土遺構

第1号（左）、第2号（右）確認状況　W→

第3号焼土遺構 sec S→

第4号焼土遺構確認状況　SE→

第4号焼土遺構 sec SW→

第5号焼土遺構確認状況　E→

第5号焼土遺構 sec E→

第6号焼土遺構確認状況 S→

第6号焼土遺構 sec E→

焼土遺構

第 8 号焼土遺構赤穴式土器出土状況　S →

第 8 号焼土遺構 sec　SE →

第 9 号焼土遺構確認状況　W →

第 9 号焼土遺構 Sec　W →

第 10 号焼土遺構確認状況　W →

第 10 号焼土遺構 Sec　W →

第 11 号焼土遺構確認状況　W →

第 11 号焼土遺構 Sec　SW →

焼土遺構

第 12 号焼土遺構確認状況　N →

第 12 号焼土遺構 sec　S →

第 13 号焼土遺構確認状況　S →

第 13 号焼土遺構 sec　S →

第 15 号焼土遺構確認状況　SE →

第 15 号焼土遺構 sec　W →

第 16 号焼土遺構確認状況　E →

第 16 号焼土遺構 sec　S →

焼土遺構

第 18 号焼土遺構確認状況　E →

第 18 号焼土遺構 Sec　S →

土坑

第 1 号土坑完掘状況　S →

第 1 号土坑 sec　SW →

第 2 号土坑完掘状況　N →

第 2 号土坑遺物出土状況 SE →

第 3 号土坑完掘状況　W →

第 3 号土坑 Sec　W →

土坑

第4号土坑完掘状況　W→

第4号土坑 sec　W→

第7号土坑　炭化材・焼土出土状況 NW→

第7号土坑 Sec　E→

第8号土坑完掘状況　SW→

第8号土坑 sec　NW→

第8号土坑部分 sec SE→

第8号土坑遺物出土状況　N→

写　真　図　版　78

土坑

第 9 号土坑完掘状況　SW →

第 9 号土坑 sec E →

第 10 号土坑完掘状況　S →

第 10 号土坑 sec S →

第 12 号土坑完掘状況　N →

第 12 号土坑 Sec　N →

第 13 号土坑完掘状況　SE →

第 13 号土坑 Sec　E →

土坑

第14号土坑完掘状況 S→

第14号土坑Sec S→

第15号土坑遺物出土状況 NW→

第15号土坑完掘状況 S→

第15号土坑sec S→

土坑

第 16 号土坑完掘状況　S →

第 16 号土坑 Sec　S →

第 18 号土坑完掘状況　S →

第 18 号土坑 Sec　S →

第 19 号土坑完掘状況　E →

第 19 号土坑 sec　W →

第 20 号土坑完掘状況　S →

第 20 号土坑 Sec　S →

土坑

第 21 号土坑完掘状況　E →

第 21 号土坑 Sec　E →

第 21 号土坑遺物出土状況（10 層より下）　E →

第 22 号土坑完掘状況 E →

第 23 号土坑完掘状況 N →

第 23 号土坑埋設土器出土状況　N →

第 24 号土坑完掘状況　S →

第 24 号土坑 sec　S →

写 真 図 版 82

土坑

第 25 号土坑底面遺物出土状況　NE →

第 25 号土坑完掘状況　NE →

第 25 号土坑 sec　S →

第 26 号土坑完掘状況　W →

第 26 号土坑 Sec　S →

土坑

第27号土坑完掘状況　SE→

第27号土坑Sec　N→

第28号土坑完掘状況　E→

第29号土坑Sec　S→

第30号土坑完掘状況　NE→

第30号土坑Sec　SW→

第31号土坑完掘状況　W→

第31号土坑Sec　W→

土坑

第 32 号土坑 Sec　W →

第 33 号土坑完掘状況　NE →

第 34 号土坑完掘状況　W →

第 34 号土坑 Sec　W →

第 35 号土坑底面遺物出土状況及びと完掘状況 SW →

土坑

第35号土坑Sec　S→

第35号土坑堆積土下層遺物出土状況 W→

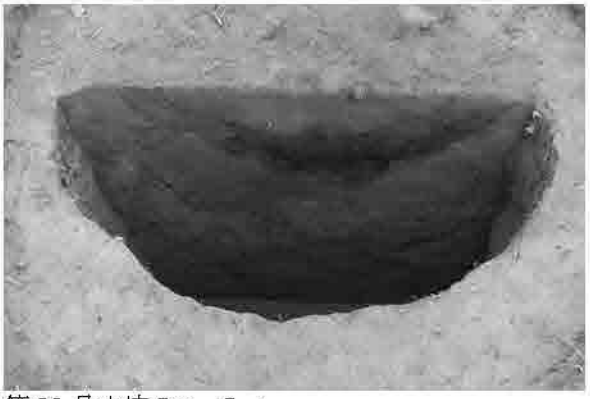
土坑

第 35 号土坑遺物出土状況　E →

第 35 号土坑遺物出土状況 W →

第 35 号土坑底面遺物出土状況 SW →

第 36 号土坑完掘及び炭化材出土状況 N →


第 36 号土坑 Sec　S →

第 36 号土坑底面炭化材出土状況アップ　N →

第 37 号土坑完掘状況 S →

第 37 号土坑 Sec　S →

土坑

第 38 号土坑完掘状況 W →

第 38 号土坑 Sec S →

第 39 号土坑完掘状況 E →

第 39 号土坑 sec E →

第 40 号土坑完掘状況 SW →

第 40 号土坑 sec S →

第 41 号土坑完掘状況 S →

第 41 号土坑 sec S →

土坑

第 42 号土坑完掘状況　SE →

第 42 号土坑 Sec　S →

第 43 号土坑 Sec　S →

第 43 号土坑（SI03 内）完掘状況　S →

第 44 号土坑 Sec　SW →

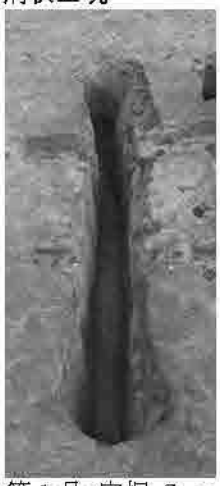
第 1 号土器埋設遺構掘方完掘 N →

土器埋設遺構

第 1 号土器埋設遺構 sec　N →

第 2 号土器埋設遺構 Sec　N →

溝状土坑


第1号 完掘 S→

第2号 完掘 S→

第3号 完掘 S→

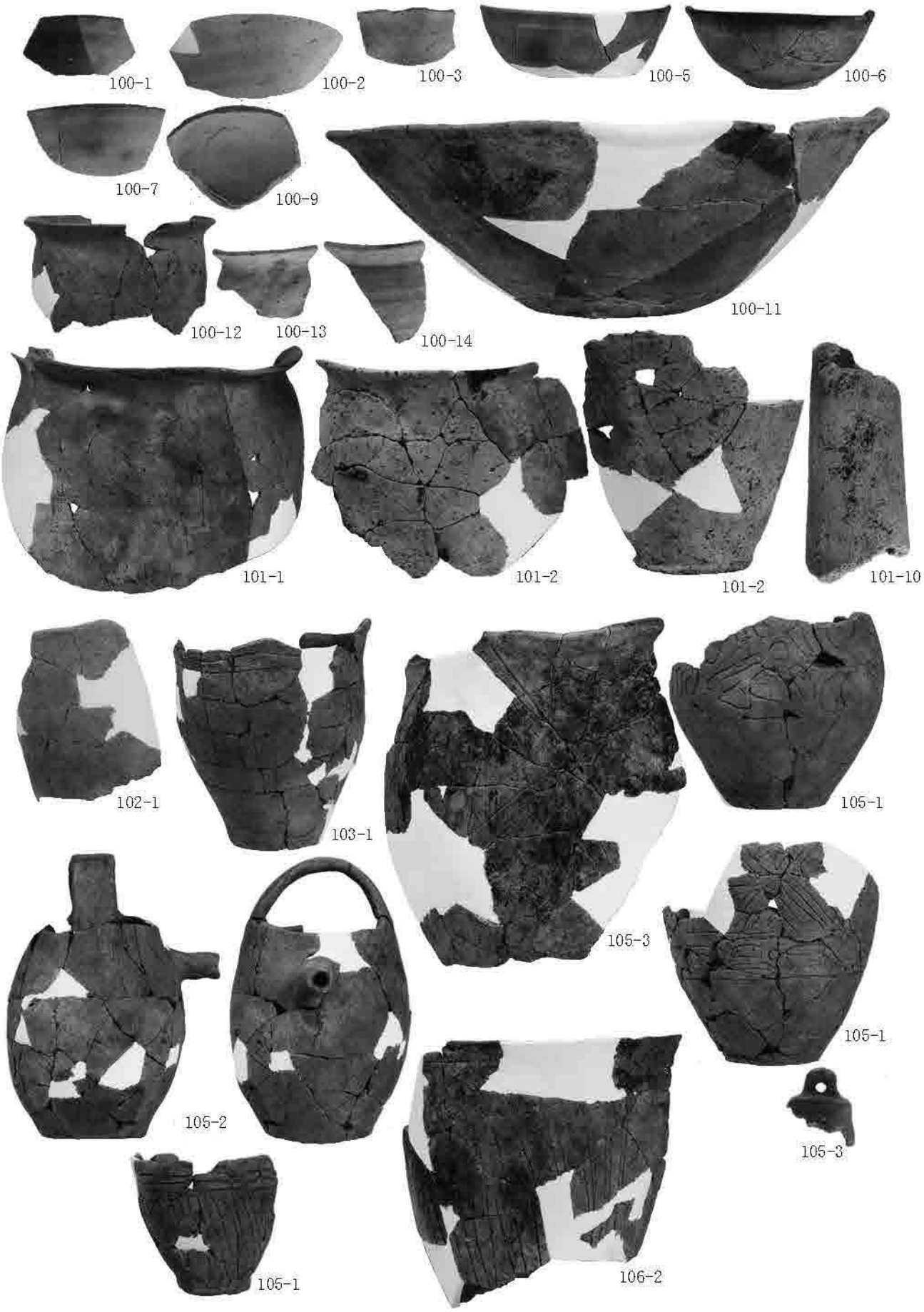
第4号 完掘 S→

第5号 完掘 SW→

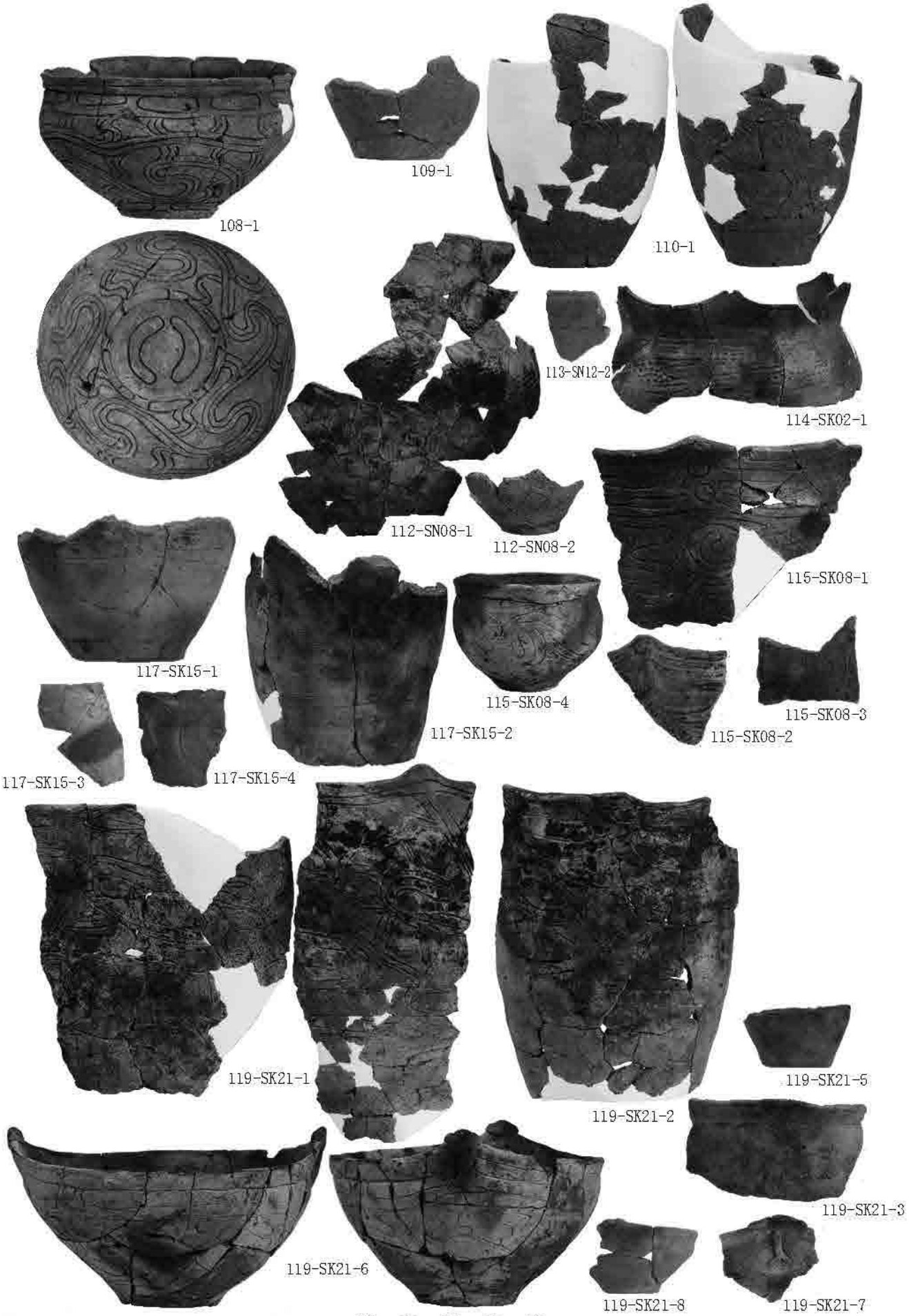
V H-49 グリッドⅡb層十腰内Ⅰ式土器出土状況 N→

ⅣV -42 グリッドⅡ～Ⅲ層遺物出土状況 W→

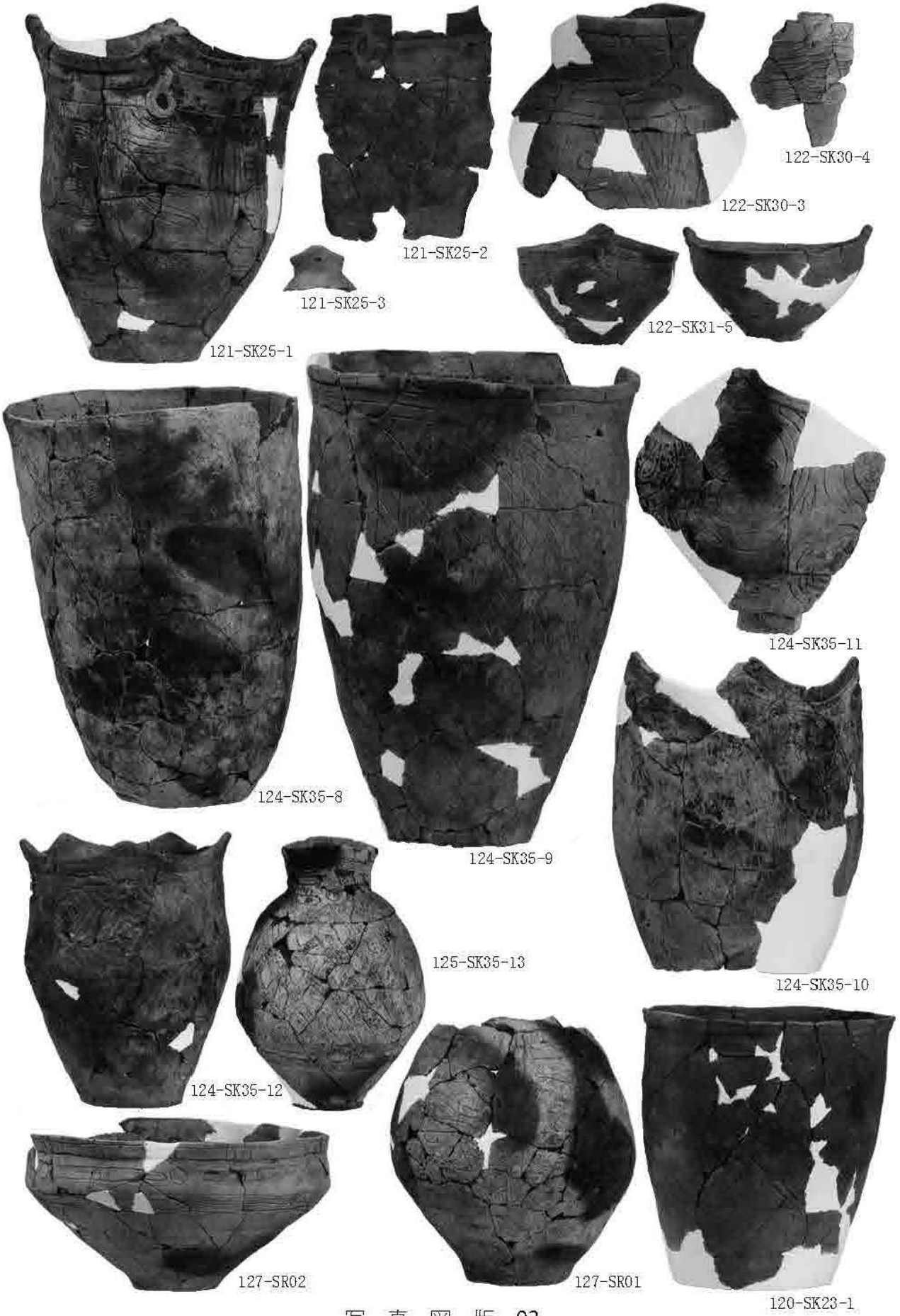
第1号炭窯跡完掘状況 S→


100-1
100-2
100-3
100-5
100-6
100-7
100-9
100-11
100-12
100-13
100-14
101-1
101-2
101-2
101-10
102-1
103-1
105-1
105-3
105-1
105-2
105-3
105-1
106-2

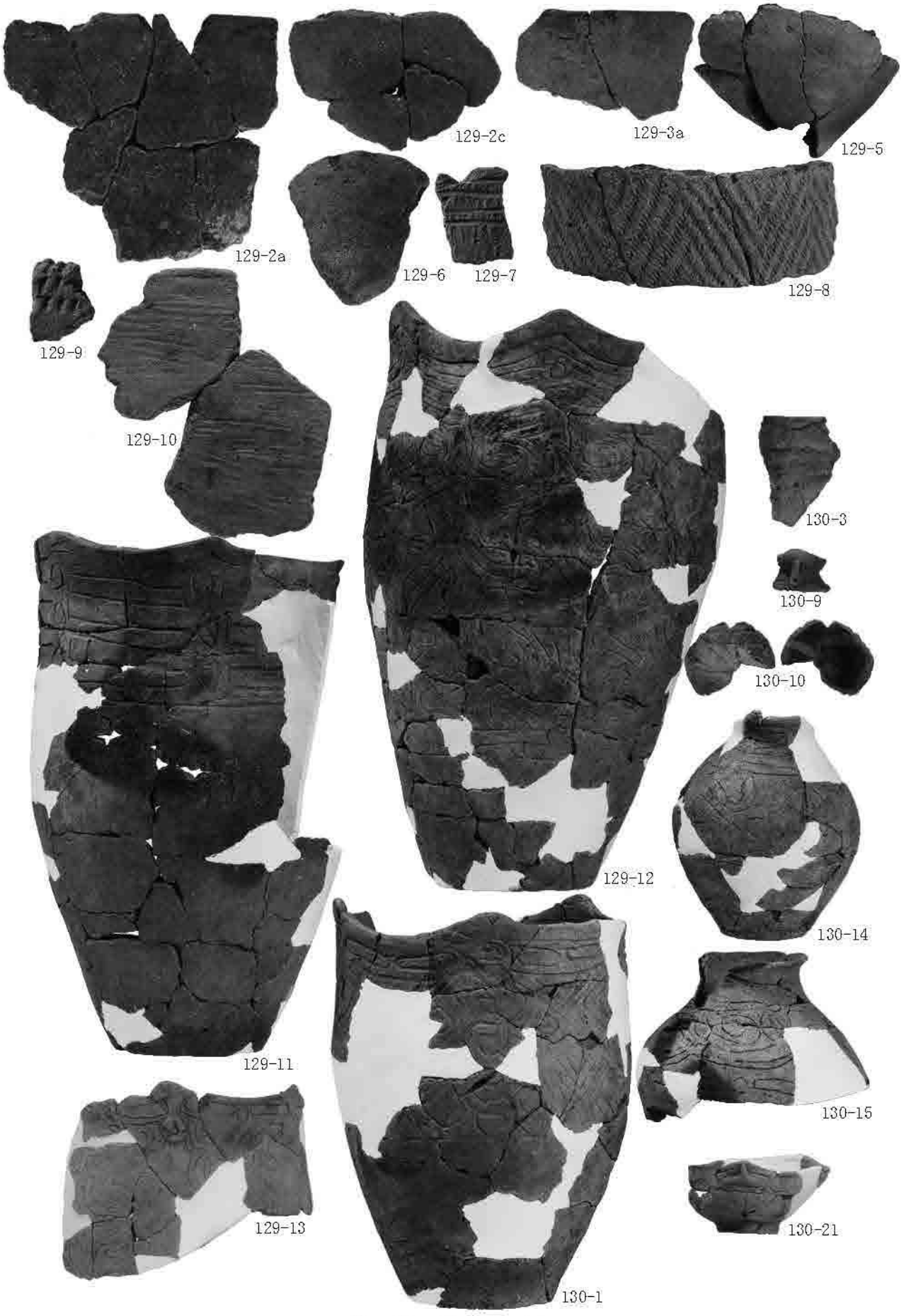
写 真 図 版 91


108-1
109-1
110-1
113-SN12-2
114-SK02-1
112-SN08-1
112-SN08-2
115-SK08-1
117-SK15-1
115-SK08-4
115-SK08-3
117-SK15-2
115-SK08-2
117-SK15-3
117-SK15-4
119-SK21-1
119-SK21-5
119-SK21-2
119-SK21-3
119-SK21-6
119-SK21-8
119-SK21-7

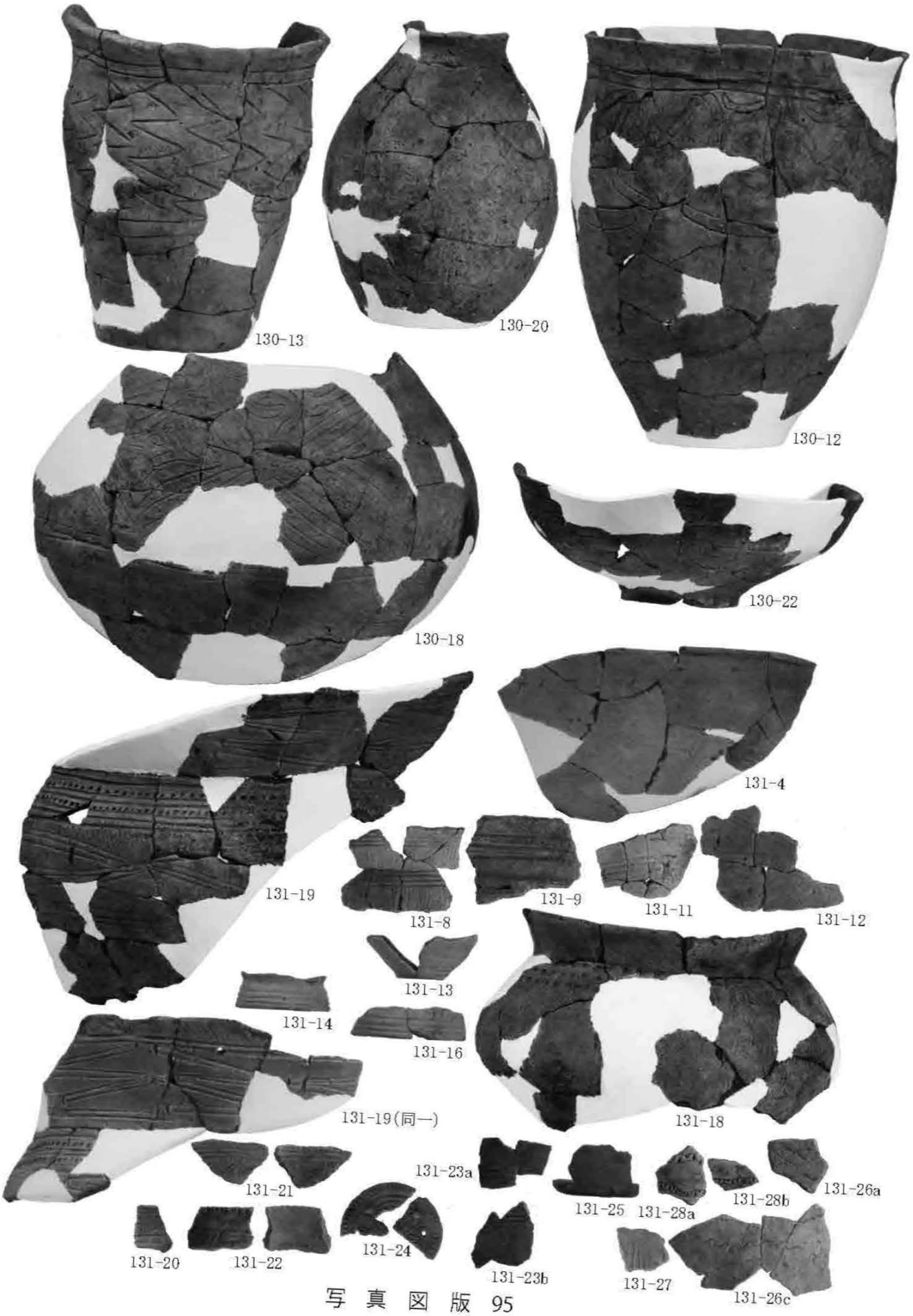
写 真 図 版 92


121-SK25-1
121-SK25-2
121-SK25-3
122-SK30-3
122-SK30-4
122-SK31-5
124-SK35-8
124-SK35-9
124-SK35-11
124-SK35-10
125-SK35-13
124-SK35-12
127-SR02
127-SR01
120-SK23-1

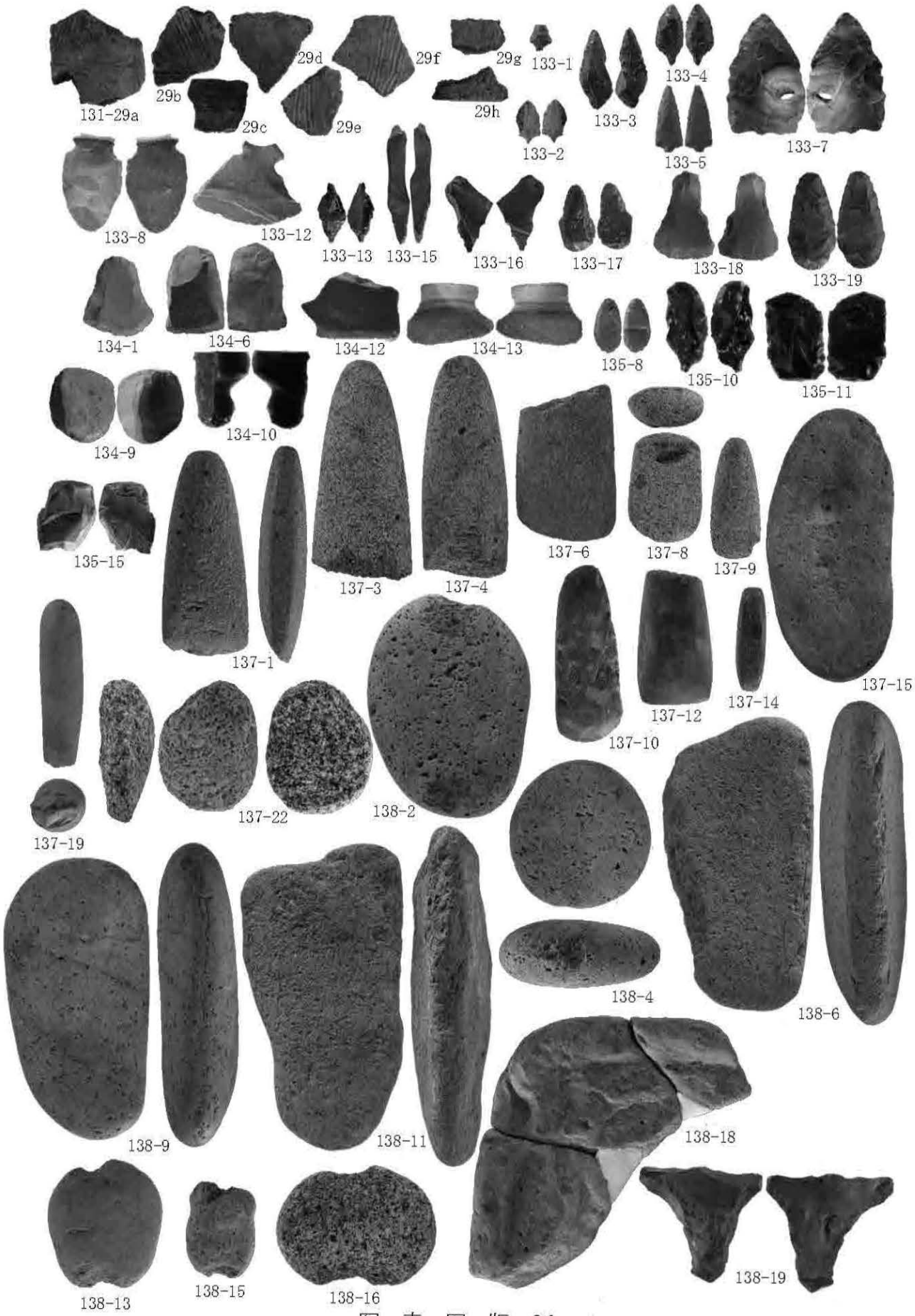
写 真 図 版 93


129-2c
129-3a
129-5
129-2a
129-6
129-7
129-8
129-9
129-10
130-3
130-9
130-10
129-12
130-14
129-11
130-15
129-13
130-21
130-1

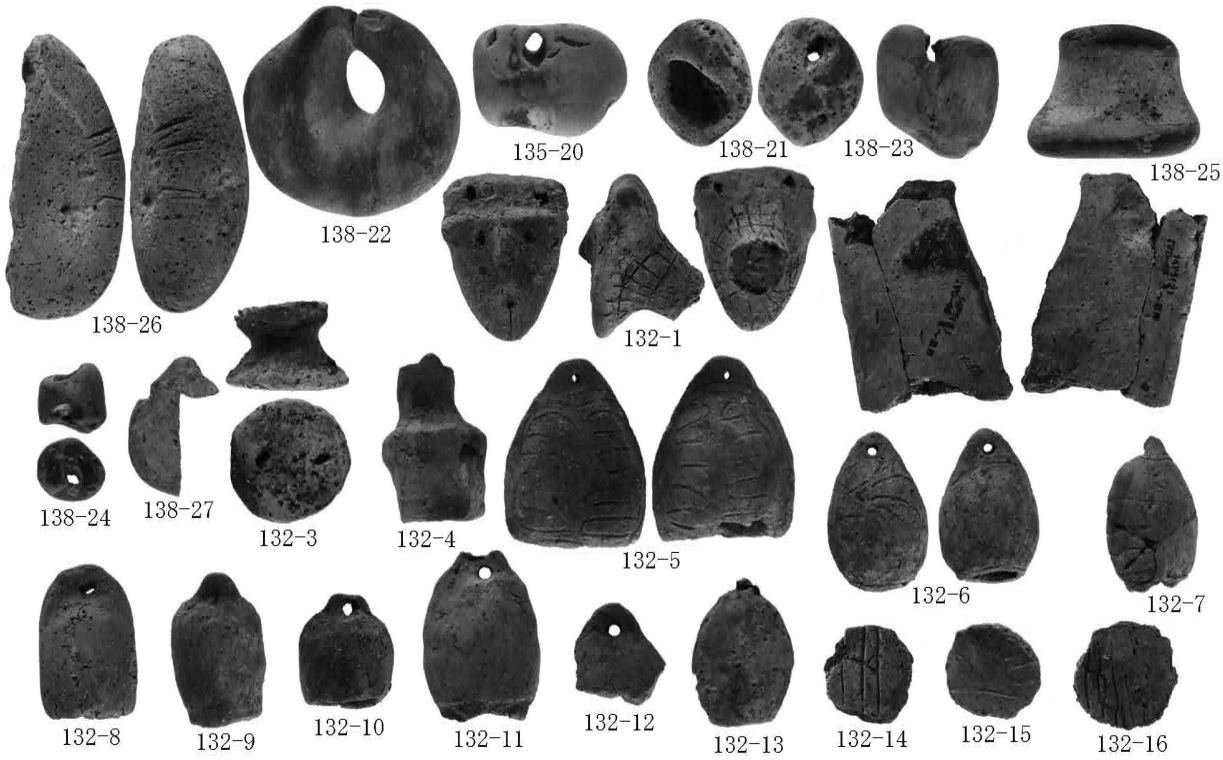
写 真 図 版 94


130-13
130-20
130-12
130-18
130-22
131-4
131-19
131-8
131-9
131-11
131-12
131-13
131-14
131-16
131-18
131-19(同一)
131-21
131-23a
131-25
131-28a
131-28b
131-26a
131-20
131-22
131-24
131-23b
131-27
131-26c

写 真 図 版 95


131-29a
29b
29c
29d
29e
29f
29g
29h
133-1
133-2
133-3
133-4
133-5
133-7
133-8
133-12
133-13
133-15
133-16
133-17
133-18
133-19
134-1
134-6
134-12
134-13
135-8
135-10
135-11
134-9
134-10
135-15
137-1
137-3
137-4
137-6
137-8
137-9
137-15
137-12
137-14
137-10
137-19
137-22
138-2
138-4
138-6
138-9
138-11
138-18
138-13
138-15
138-16
138-19

写 真 図 版 96


138-26
138-22
135-20
138-21
138-23
138-25
132-1
138-24
138-27
132-3
132-4
132-5
132-6
132-7
132-8
132-9
132-10
132-11
132-12
132-13
132-14
132-15
132-16

金沢街道沢（1）遺跡・新沢（1）遺跡出土鉄製品 X 線透過写真
図 20 ～ 53：金沢街道沢（1）遺跡出土
図 74 ～ 95：新沢（1）遺跡出土
図 20-4
図 74-10
図 32-6
図 80-19
図 33-3
図 80-12
図 53-2
図 95-19
図 53-1
図 95-20

写 真 図 版 97

報 告 書 抄 録

ふりがな	かなざわかいどうさわかっこいちいせき・あらさわかっこいちいせき・あらさわかっこにいせき
書名	金沢街道沢（1）遺跡・新沢（1）遺跡・新沢（2）遺跡
副書名	国道101号鰺ヶ沢道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第563集
編著者名	茅野嘉雄　齋藤　正
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒038-0042　青森県青森市新城字天田内152-15　TEL　017-788-5701
発行機関	青森県教育委員会
発行年月日	西暦2016年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	世界測地系2000（JGD2000） 北緯	世界測地系2000（JGD2000） 東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
かなざわかいどうさわかっこいちいせき 金沢街道沢（1）遺跡	あおもりけんにしつがるぐん 青森県西津軽郡 あじがさわまちおおあざ 鰺ヶ沢町大字 みなみうきたちょうあざ 南浮田町字 かなざわかいどうさわ 金沢街道沢地内外	02321	321102	40° 46′ 57″	140° 14′ 33″	20140507 ～ 20141030	6,600	記録保存調査
あらさわかっこいちいせき 新沢（1）遺跡	あおもりけんにしつがるぐん 青森県西津軽郡 あじがさわまちおおあざ 鰺ヶ沢町大字 きたうきたちょうあざ 北浮田町字 あらさわ 新沢地内外	02321	321040	40° 47′ 9″	140° 15′ 54″	20140507 ～ 20140704	3,500	記録保存調査
あらさわかっこにいせき 新沢（2）遺跡	あおもりけんにしつがるぐん 青森県西津軽郡 あじがさわまちおおあざ 鰺ヶ沢町大字 きたうきたちょうあざ 北浮田町字 あらさわ 新沢地内外	02321	321041	40° 47′ 11″	140° 16′ 18″	20140701 ～ 20141120	8,300	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金沢街道沢（1）遺跡	集落 狩猟場 散布地	縄文時代	土坑　1 溝状土坑　4	縄文土器：早期（日計式）、前期（円筒下層a、b、d1式）、中期（榎林式、大木10式並行）・ 土師器：非ロクロ整形甕、ロクロ整形甕・坏、内面黒色坏、高坏、 須恵器：坏、壺（五所川原産）、甕 石器：石鏃、石槍、石匙、石篦、掻器、削器、微細剥離のある剥片、石核、磨製石斧、凹み石、敲き石、擦り石、石錘、砥石 土製品：土製支脚・土錘・羽口 鉄製品：刀子、筒状、鉄刀、鉄滓 計　段ボール40箱	・縄文時代早期前葉日計式押型文土器が出土した。
	集落	奈良時代	竪穴住居跡　8		・奈良時代（8世紀）～平安時代初期（9世紀前半）の集落跡を検出した。
	集落	平安時代	竪穴住居跡　12 土坑　4 掘立柱建物跡　1 溝跡　1		
		時期不明	土坑　11 溝跡　5 掘立柱建物跡　4 柱穴　40		・平安時代（10世紀末～11世紀代）の大溝跡に囲まれた集落跡を検出した。

新沢（1）遺跡	集　落 狩猟場 散布地 集　落 散布地 集　落	縄文時代 弥生時代 平安時代 時期不明	土坑　7 溝状土坑　3 土器埋設遺構　1 竪穴住居跡　7 掘立柱建物跡　2 柱穴　6 土坑　2 溝跡　1 土坑　9 溝跡　2	縄文土器：早期（日計式・白浜式）、前期（円筒下層 d2 式）、中期（円筒上層 c 式、大木 10 式並行）、晩期（大洞 B 式） 弥生土器：前期（砂沢式）、中期（五所式） 土師器：非ロクロ整形甕、ロクロ坏、内面黒色坏、高台付坏、鍋、土製支脚、製塩土器 擦文土器：甕、坏 須恵器：長頸壺（五所川原産？）、甕、鉢 石器：石鏃、石匙、掻器、削器、微細剥離のある剥片、両極剥片、石核、凹み石、擦り石、敲き石、石錘、石皿、金床石 土製品：弥生土偶 鉄製品：刀子、棒状、馬具？、鉄槌、鉄滓 計　段ボール 27 箱	・縄文時代早期前葉日計式押型文土器と早期中葉白浜式土器が出土した。 ・縄文時代晩期の土坑群を検出した。 ・弥生時代前期砂沢式土器と遠賀川系土器が出土した。 ・平安時代（9 世紀末～10 世紀初頭）の擦文土器を伴う集落跡を検出した。
新沢（2）遺跡	集　落 狩猟場 散布地 集　落	縄文時代 弥生時代 縄文～弥生時代 平安時代	竪穴住居跡　5 屋外炉　3 土坑　26 土器埋設遺構　2 溝状土坑　6 焼土遺構　2 土坑　3 焼土遺構　14 竪穴住居跡　1 土坑　10	縄文土器：早期（無紋土器、日計式、白浜式）、後期（十腰内Ⅰ式）、晩期（大洞 C1 式） 弥生・続縄文土器：前期（砂沢式）、中期（五所式、念仏間式、後期（赤穴式）、後北 C2D 式 土師器：非ロクロ整形甕、ロクロ整形坏，内面黒色坏、鍋 石器：石鏃、石槍、石匙、石錐、石篦、掻器、削器、微細剥離のある剥片、両極剥片、二次加工石器、石核、磨製石斧、凹み石、敲き石、擦り石、石錘、石皿 石製品：三脚石器、有孔石製品、 土製品：土偶、ミニチュア土器、鐸形土製品、円盤状土製品（縄文後期）土製支脚、製塩土器、羽口（平安時代） 計　段ボール 84 箱	・縄文時代早期前葉無紋土器が出土した。 ・縄文時代後期十腰内Ⅰ式期の集落跡を検出した。 ・弥生時代前期～中期の土坑と中期～後期の焼土遺構を検出した。 ・平安時代（白頭山火山灰降下以前～降下後）の集落跡を検出した。

要　　約	**縄文時代早期**：新沢（２）遺跡で早期前葉無文土器が出土した。早期前葉の日計式土器は調査した３遺跡すべてから出土した。また、早期中葉の白浜式類似土器（Ⅰ群ｃ類土器）も３遺跡ともに出土しており、津軽地域の当該時期を考える上で貴重である。 **縄文時代後期**：新沢（２）遺跡で十腰内Ⅰ式期の竪穴住居跡、屋外炉、土坑（フラスコ状土坑、不整形土坑（土坑墓））、土器埋設遺構で構成される集落跡を検出した。竪穴住居跡は柱穴配置が不明瞭で、土器埋設石囲炉が特徴的である。また、埋設土器は小型品を用い炉の長軸端部に寄る特徴が見られる。土坑はフラスコ状土坑と不整形土坑（墓）がある。土器は十腰内Ⅰａ式の範疇で理解でき、表面を粗く磨いた無紋の壺や深鉢が一定量あることや、特徴的な充填文様などが個性的である。 **縄文時代晩期**：新沢（１）遺跡で浅いフラスコ状土坑がまとまって検出された。土器の出土状態等から土坑墓の可能性が高い。 弥生時代前期：新沢（１）遺跡から砂沢式期の土器埋設遺構が発見された。付近には包含層が２箇所確認され、遠賀川系土器（壺・甕）や土偶が出土した。 **弥生時代中期～後期**：主に新沢（２）遺跡で中期初頭（Ⅵ群ｃ類、五所式相当）の土坑墓、中期～後期の焼土遺構が検出された。 **奈良時代**：金沢街道沢（１）遺跡で８世紀代の土師器を伴う集落跡を検出した。当該期の集落としては津軽西部では初見である。出土土器に北海道に分布する前期擦文土器（横走・段状沈線がある甕等）に類するものを含む。第５号竪穴住居跡からは須恵器坏の小片２点が出土した。過年度に報告した鳴戸（３）遺跡出土資料とともに空白であった津軽西海岸地域の８～９世紀について考究できる良好な資料を得た。 **平安時代**：金沢街道沢（１）遺跡で９世紀代の集落跡を、新沢（１）遺跡と新沢（２）遺跡で９世紀後半から 10 世紀中葉期と考えられる集落跡を検出した。白頭山－苫小牧火山灰降下以前の集落が主体となるが、新沢（２）遺跡では火山灰降下後の土坑（製炭または焼成土坑）も検出された。 新沢（１）遺跡では第２号竪穴住居跡からは土師器とともに擦文中期の甕と坏が出土した。当該時期の擦文土器は県内において出土例が少ない。また、同住居跡では、床面中央部に焼土がみられ、擦文文化の影響が顕著である。金沢街道沢（１）遺跡では 10 世紀後半から 11 世紀にかけての集落跡を検出した。竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡がみられる。第１号溝跡は断面逆台形開口部幅 1.5ｍ前後、深さ１ｍ前後の規模で、調査区南半を方形に囲っている。この溝跡の内外で竪穴住居跡が検出されており、最終的に溝に区画された集落へと変遷したようである。出土した土師器のうち、坏は非ロクロ整形で外面に輪積痕跡を明瞭に残し底面に蓆圧痕が見られる非常に個性的なものである。第１号溝跡内部の遺構からは鉄刀、刀装具、鉄鏃などの鉄製品が出土した。また、第 10 号竪穴住居跡カマドからはイネやアワ等の炭化種子が検出された。

青森県埋蔵文化財調査報告書第563集

金沢街道沢（１）遺跡
新　沢　（１）　遺　跡
新　沢　（２）　遺　跡

－一般国道101号鰺ヶ沢道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

発行年月日　2016年３月25日
発　　行　青森県教育委員会
編　　集　青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042　青森県青森市大字新城字天田内152-15
TEL 017-788-5701　FAX 017-788-5702
印　　刷　株式会社ヒロタ
〒030-0142　青森県青森市大字野木字野尻 37番地691
TEL 017-729-8321　FAX 017-773-8325